

日本漢文史

籍叢刊

第三輯

雜史

十五



上海交通大學出版社

SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

圖書在版編目(CIP)數據

日本漢文史籍叢刊. 第3輯, 雜史 / 周斌, 孫錦泉,
粟品孝主編 — 上海: 上海交通大學出版社, 2014

ISBN 978-7-313-11956-8

I. ①日… II. ①周… ②孫… ③粟… III. 日本—
歷史—史籍—叢刊②日本—歷史—雜史 IV. ①K313-55

中國版本圖書館 CIP 數據核字(2014)第 199077 號

日本漢文史籍叢刊 第三輯 雜史

主 編 周 斌 孫錦泉 粟品孝

副主編 陳小法 尤 佳

上海交通大學出版社出版發行 北京人天書店有限公司經銷

(上海市番禺路 951 號 郵政編碼 200030)

電話:64071208 出版人:韓建民

北京中獻拓方科技發展有限公司印刷

開本:889mm×1194mm 1/16

印張:946 字數:18920 千字

2014 年 9 月第 1 版 2014 年 9 月第 1 次印刷

ISBN 978-7-313-11956-8/K

定價:23800.00 圓(全二十八冊)

版權所有 侵權必究

統 籌 陳建華 施 維 劉邦權

責任編輯 陳建華 劉邦權

裝幀設計 陳燕靜

第三輯目錄

第一冊目錄（總第62冊）

雜史

佛教

元亨釋書

（目錄、表、卷一—卷三十）

本朝高僧傳

（總目、序、凡例、援引書目、卷一—卷二）

四三五

第二冊目錄（總第63冊）

本朝高僧傳

續（卷三—卷四十七）

一

第三冊目錄（總第64冊）

本朝高僧傳

續（卷四十八—卷七十五）

一

東國高僧傳

（序、卷一—卷十）

二四三

續日本高僧傳

（序、總目、援引書目、凡例、卷一—卷九）

三七九

第四冊目錄（總第65冊）

續日本高僧傳

續（卷十一—卷十一）

一

吉水實錄

（序、卷第一—卷第十四）

三七

正法山六祖傳

.....

二五五

日本往生全傳

（序、極樂記、續本朝往生傳、拾遺往生傳、後拾遺往生傳、本國新修往生傳）

二七三

扶桑往生傳

（序、卷上—卷下）

四〇九

總目錄

淨土真宗付法傳 四五五

三國高僧略傳 (序、例言、卷之上—卷之中) 四七五

第五冊目錄 (總第66冊)

三國高僧略傳 續 (卷之下) 一

近世禪林僧寶傳 (序、凡例、目錄、卷之上—卷之下) 二七

高僧名士傳 一二七

和漢高僧傳 一五三

門跡傳 二四一

天台圓宗列祖略傳 三〇三

密宗血脉鈔 三二九

日本國大師一覽 四五一

唐鑑真過海大師東征傳 四五九

東福開山聖一國師年譜 四八七

蒼龍窟年譜 五〇九

東海一休和尚一代記 (上) 五二九

第六冊目錄 (總第67冊)

東海一休和尚一代記 續 (下) 一

智証大師年譜 一三

正受老人崇行錄 三五

東海鐵塔諸祖年譜略頌 六一

峨山禪師行實並法語 九一

方廣開山無文元選禪師行狀 九九

越溪道蹟 一一三

損翁老人見聞寶永記 一二一

近世高僧年表 一六三

淨土傳燈總系譜 (序、卷上、中、下) 一九九

東大寺要錄 (序、卷一—卷六) 二六九

興福寺年代記 (序、卷一—卷六) 三八五

長谷寺緣起 四三九

扶桑伽藍紀要 四六一

慧超往五天竺國傳箋釋 四七七

第七冊目錄 (總第68冊)

入唐求法巡禮行記 (卷第一—卷第四) 一

參天台五臺山記 (卷第一—卷第八) 一四九

神道

神道五部書 (卷第一—卷第五) 三〇五

皇國神社志 三七三

古義神代考 (卷第一—卷第三) 三九三

天滿宮世家 四三七

祖志 (序、緒論、目次、卷一—卷三) 四五五

第八冊目錄 (總第69冊)

祖志 續 (卷四—卷六) 一

雜紀

古事記 (卷一—卷三) 八三

春記 (卷一—卷三) 一六三

玉葉 (序、例言、目錄、卷一—卷十二) 二一七

第九冊目錄 (總第70冊) 一

玉葉 續 (卷十三—卷二十六) 一

第十冊目錄 (總第71冊) 一

玉葉 續 (卷二十七—卷四十) 一

第十一冊目錄 (總第72冊) 一

玉葉 續 (卷四十一—卷五十五) 一

第十二冊目錄 (總第73冊) 一

玉葉 續 (卷五十六—卷六十六) 一

明月記 (諸言、目次、第一) 三九一

第十三冊目錄 (總第74冊) 一

明月記 續 (第一、第二) 一

第十四冊目錄 (總第75冊) 一

明月記 續 (第二、第三) 一

第十五冊目錄 (總第76冊) 一

明月記 續 (第三、補遺) 一

古語拾遺 三四三

將門記 三六一

大塔物語 三八三

保建大記 (卷上—卷下) 四〇九

本朝稽古篇 (上中下、續上中下) 四三七

十三朝紀聞 (慶弘紀聞) (序、卷一—卷三) 四七五

第十六冊目錄 (總第77冊)

十三朝紀聞 續 (卷四—卷七、跋) 一

今日鈔 (卷一—卷七) 七五

柱史鈔 (卷上—卷下) 一七七

近古史談 (卷一—卷四) 二二一

近世史談 (卷一—卷四) 二九三

帝國史談 (卷上—卷下) 三六五

續近事紀略 (卷一—卷三、征臺略記) 四一五

尊攘紀事 (卷之一—卷之六) 四七三

第十七冊目錄 (總第78冊)

尊攘紀事 續 (卷七—卷八、跋) 一

尊攘紀事補遺 (卷一—卷四) 二五

行在或問 (卷上—卷下) 七九

皇朝靖獻遺言 (卷一—卷八) 九五

慶安小史 一七一

先朝私記 一八五

遠野史談 (卷上—卷下) 二一一

西京傳新記	(初編—四編)	二三七
-------	---------	-----

日本詩史	(卷一—卷五)	三三三
------	---------	-----

回天詩史	(卷上—卷下)	三九一
------	---------	-----

和漢茶誌	(卷一—卷三)	四三一
------	---------	-----

本朝畫史	(卷上—卷下)	五一
------	---------	----

第十八冊目錄 (總第79冊)

續本朝畫史	(卷上—卷下)	一
-------	---------	---

近世畫史	(卷一—卷五)	二七
------	---------	----

雲煙略傳	(卷上—卷下)	一一五
------	---------	-----

日本國事跡考		一五七
--------	--	-----

史館茗話		一九七
------	--	-----

寤眠錄		二二三
-----	--	-----

幽囚錄		二三九
-----	--	-----

在津紀事	(卷一—卷二)	二六五
------	---------	-----

正名緒言	(上下)	二八九
------	------	-----

本朝蒙求	(上—中—下)	三三三
------	---------	-----

扶桑蒙求	(上—中—下)	四〇九
------	---------	-----

神代千字文		四九五
-------	--	-----

本朝千字文		五〇九
-------	--	-----

內國千字文		五二一
-------	--	-----

日本千字文		五三三
-------	--	-----

第十九冊目錄（總第80冊）

大統歌（上下）

盡忠錄

涉史偶筆

（卷一—卷六）

涉史續筆

（卷一—卷七）

香亭雅談

（上下）

櫻史新編

酒史新編

（上下）

國朝佳節錄

外史劄記

歷代君臣名功錄

（上中下）

傳疑小史

仙臺支傾錄

先哲醫話

（上下）

奇談新編

第二十冊目錄（總第81冊）

中朝事實

（上下）

潛中紀事

（卷一—卷六）

正保野史

稽古要略

丙丁炯戒錄

（上下）

養真亭藏泉譜

一

一九

四一

一八九

二三五

二五五

二九七

三一

三三三

三九三

四〇九

四三七

五二三

一

一〇七

二六五

二七三

二八五

三二一

新撰寬永泉譜 (前編—後編) 三九九

明治新撰泉譜 (一集—三集) 四二一

明治新撰泉譜別集 (初編—貳編) 四八三

大東世語 (序、卷一—卷二) 五一七

第二十一冊目錄 (總第82冊) 一

大東世語 續 (卷三—卷五) 一

近世叢語 (卷一—卷六) 三五

新撰叢語 (卷一—卷三) 一〇七

修身叢語 (上下) 一五一

日本智囊 (卷一—卷十) 二二三

皇朝金鑑 (上書、序、凡例、總目、卷一—卷十七) 三三九

第二十二冊目錄 (總第83冊) 一

皇朝金鑑 續 (卷十八—卷五十五、跋) 一

戰略新編 (序、目錄、卷一—卷五) 四一七

第二十三冊目錄 (總第84冊) 一

戰略新編 續 (卷六—卷十一) 一

策府 (題、序、凡例、目次、卷一—卷二十四) 七九

第二十四冊目錄 (總第85冊) 一

策府 續 (卷二十五—卷三十、跋) 一

外史

日本外史前記 (卷一—卷五) 九七

日本外史 (序、例言、引用書目、目次、卷一—十八) 二二九

第二十五冊目錄 (總第86冊)

日本外史 續 (卷十九—卷二十二) 一

續日本外史 (卷一—卷十) 七三

近世日本外史 (卷一—卷八) 二五三

續近世日本外史 (卷一—卷二) 三九一

日本外史補 (自序、凡例、目次、引用書目、卷一—卷七) 四四一

第二十六冊目錄 (總第87冊)

日本外史補 續 (卷八—卷十四) 一

江戸將軍外史 (卷一—卷五) 六一

史表

皇朝金石年表 二五五

日本金石年表 二八七

史籍年表 三一九

日本史籍年表 (前編) 三五九

第二十七冊目錄 (總第88冊)

日本史籍年表 續 (前編續—後編) 一

第二十八冊目錄 (總第89冊)

日本史籍年表 續 (後編續) 一

銅鑄和漢年契 四五

增訂新撰年表 七七

近世儒林年表	一三五
日本外史年表	二三五
重撰和漢皇統編年合運圖 (上下)	二六三
年代紀略	三四一
新編分類本朝年代記 (卷一—卷七)	三六一
國史年表	五二九
逸號年表	五三九

第十五冊目錄(總第76冊)

明月記	續(第三、補遺)	一
古語拾遺	三四三	
將門記	三六一	
大塔物語	三八三	
保建大記	(卷上—卷下)	四〇九
本朝稽古篇	(上中下、續上中下)	四三七
十三朝紀聞(慶弘紀聞)	(序、卷一—卷三)	四七五

第五十三卷
其外二卷

廿五日、戊子、天晴、午後風又烈、辰時許宰相示送功過

定、別當讀帳、伊平卿見合、經高卿書定文清書、書奏任別

紙、權也、丹波隆親、周防家光、加賀範純兵部、召名、下名等退出、右大辨未書終云々、侍

從源通有、忠朝臣弟云々左中將實經、少將通行、右少將實直、右兵衛

佐平高賴、保盛卿子兼、右馬助源仲親、從四位上具教、從四位下

橘知宣、正五位下宣實、公相、藤下嫡、拾遺、元公輔今日又吉田弓

興云々、聊念誦之間、午後腰忽違痛之間又平臥、股之

繼目苦痛、只老屈之餘歎、申時許言家來、四位事自女

院被奏、又被申殿下、被仰二品、又參綾小路宮申之、宮

奏給、御氣色已宜由被仰、而不被叙之由愁歎、四角八

方厚緣不許、非分事歎、信定朝臣云、四位侍從多歎由

有沙汰云々、能忠、定雅、公綱三人歎、寬治以往之世、

寬弘以後聖代二人常多、末代四人何事在哉、適見聞

書、可然人事不過、今朝所聞、山城惟宗祐通、大和藤法

廣、若狹橘諸定、丹後藤經範、兼、肥後藤藤守、不見、筑後藤

仲房、壹岐藤業教、末代、孔子云々、從五位厚尙、止山、清

原宜業、止登、醫陰陽道等多加階不注之、腰苦痛入夜猶不止、

廿六日、己丑、天晴、朝後又陰、中務大輔爲繼來談、近日

安嘉門院御四辻殿之間、常祇候輩直、知宗、爲綱、而來

月朔之比修明門院令渡岡前給、任兵衛佐、此御所可令立給、之由有夢云々言家愛

惱、下名今夕之由聞之、四品何爲乎、子息叙爵重可申仙

院、法親王推舉已空、非愚老之所及、叙爵事叙位申之、

無其沙汰、除目重申、最小事已以無思之上、不及責申之

由返答了、父五位侍從、小兒三歲叙爵更不可念歎、宜

秋門院今夜渡御冷泉殿、御方、遣、明日令參詣廣隆寺給云

云、腰苦痛雖不尋常、不似昨日、入夜之後雨降、付寢之

後、夜半許宰相告送、自明日四々日殿下依御物忌、下名

來月朔日云々、今故今夜延引、定只今事訖、弓場御拜、

愿從之人左右大將、中納言二人、高實、定高、參議二人、爲家、

定着座、此外通方、賴資、家光卿加、明日和歌午時許歎

云々、此間甚雨、

廿七日、庚寅、朝雨止、天猶陰、未時許令伺相門、備後只

今參、無他人云々、少時宰相送使者、即參向、宰相來

告、予、三位、公、備後、但馬家長、等相共參着、西出居、主

人幕下、兼被座、予着端、長押知家卿相並、宰相依氣

色着奥座、信實朝臣居北橫座、家長朝臣、光行入道、長

政、兼友、永光等在長押下、先可有連歌之由被命、長政

取硯着信實朝臣東、與、欲執筆之間、家隆卿、相具被加

予座下、隆祐着信實下、各置歌、家長朝臣進講師、予依

命取歌、永光來座後次第重之、予取之置文臺、講師讀

上、信實朝臣等詠吟、兼友、長政、永光、隆祐、賴氏、少

將、家長、信實、知家卿、家隆卿、爲家卿、予、幕下、主人

御歌讀了、僧歌頗無便歟由予申之、依命光行、家因信

忠、覺竟歌讀之、次女房下野讀了、霞歌先讀、僧歌女

歌、次又自五位讀、梅又同前、事了復本座、次連歌、御

何々所甚固、予閉口、臨未僅兩三加之、百句了、亥時許

各退出之後、禁裏女房退出、宰相

廿八日、辛卯、天晴、傳聞、昨日深草前齋宮、入道長房出家

給云々、戒師明惠房、後開廿六云々、今姬自南京參會其所、

同出家云々、穩便事歟、四十姊奉喪春華門院剃頭、年廿

弟奉仕齋宮供奉、又是有機緣事歟、件姊妹存命五人皆

爲尼了、臨昏宰相來、昨日霞歌、退出以後主人有感言

云々、除目間事無聞及事、柱下競望、經範不便之由、自

他雖有出詞者、不知勅許之趣、亥時許歸了

廿九日、壬辰、天晴、一昨日覺法印申書令一見、北院御

室許御集、昨今染老筆即返上了、三卷如切紙、一行書

一句、早速之由有御氣色云々、日入之程女房歸參內、

先入宰相許、可相具由共侍禪尼小童等同行、戌終許

歸來、依方違宿東小屋、聞曉鐘歸來、

卅日、癸巳、天晴、忠弘法師書札到來、國檢注依忠綱朝

臣之妨、知行傳證不遂、想以水驛更無下向之要、後悔百

千、雪深及三月、路難達云々、六十九年衰暮翁、孟春一

月去如夢、何時何日老身極、西沒斜陽今日終、

○閏正月小

一日、甲午、天顏快霽、春氣和暖、入夜雨降、宰相舊狀之

次、下名來四月云々、內裏二品依所勞昨日退出云々、

依朔日明日欲訪、終日無提携事、春日徐永而催睡眠、
二日、乙未、終夜今朝雨降、終日甚雨、及晚鐘雲徐分雨
濛々、心慵不出行、

三日、丙申、天晴霞登、已時詣相門、來三月八日殿下御
春日詣、御厩舍人已下當色併可調進之由有命、其間事
等聊可伺申由、蒙命參殿下、申此由之次、予申云、八日
一定候者、御齋之中爲御遠忌日、不可被憚候歟、依此微
言忽被引入道殿御文書之內、御忌月不可有御物詣之
由已分明也、御願延引者依無心念思食歟、二月下旬宜
歟由申、廿八日御入內之外無尋常日云々、於御入內者
三月更不可憚、行啓延引何事候乎由申、但廿八日庚
寅、寅日神事無例歟由被仰、被引先例不外求歟由申
之、爲被尋仰遣召在繼、迴參之間中納言參、仍立御前
訖、不知其後事、三月之由有沙汰、御忌月事于今無其
沙汰、甚不得心事歟、尤爲奇、下名之間可及可然事沙
汰歟、貫首昇進有疑耳、外事聞而無益、日入退出、於宰
相門召具忠康、向二品亭、訪其病、女房出逢、昨今頗宜

安堵之由有返事、兩三度問答、已後退出、纖月未入、

四日、丁酉、天晴、午始參殿下、已御參內御乘車之間云
云、即退出、詣向右幕下亭、少々散不審、貫首昇進、

一人參、未開定頭、觀房、歟、他事今日被定歟、參議、賴隆

一人三位、前大貳來調、予自南門出了、如傳聞者、春日詣二月

廿八日定了云々、每事存外、昨日所聞及事、泰時々房

任官事、不可口入之由、自最初各稱之、彼兩人之妻各

舉中將、泰時、實清、太政大臣殿子也、非實俊子ニテ、時房、賴氏、定通卿懇望、顯定中將

辨加階、可超具教之由申、具實卿又以具教稱我嫡子、

頻推舉遂加階、定通卿忿怒無極、述懷狀送二品云々、

一寢之後自殿下預奉書、兼康、驚起見之、言家四位可慕

申、何事乎、心中甚冷然、故光能卿壽永元年大嘗會主

基國司賞光俊卿讓之由、承之由申了、雖夜中告送侍從

許了、

五日、戊戌、朝天陰、未後雨降、入夜大風猛烈、早旦宰相

送聞書、參議實世、兼、侍從藤爲氏、內舍人二人、大內

記光兼、大監物管野長重、式部大丞一、少丞二、音博士

中原師邦、民部大丞一、少丞一、刑部丞中原有光、宮內少輔藤信光、大膳進、大炊權助藤常連、和賀二合、典藥允連江鬼子、和氣氏成、少屬連泰、主殿助源家宗、主水正清原良尙、父、修理亮安部昌言、攝津權守丹波康長、近江守藤顯成、下野守橘公業、出羽守藤宣茂、陸奥權守賀茂在仲、安藝守源資綱、讃岐守藤親氏、筑前守藤信茂、左中將具敷、兼將監、大神宮功、右中將顯定、將監一人、左門尉藤康幸、已下右門三人、左兵三人、右兵二人、左馬允一人、右馬一人、從三位平親長、從四位下言家、伴資、安部晴綱、正五下同資俊、藤實文、臨時、從五上大中臣隆重、賀茂在定、藤親教、臨時、從五下清原友昌、武部、磯部行綱、兵部、外從五下大中臣宗吉、藏人頭親房、資賴、侍從言家、治部親長如元、坊咽河使中原行兼、掌侍藤信子辭退、參議賴隆、聞書送言家許、侍從新任九歲尤爲面目、但子孫悉侍從、且是宿報有故事歟、非下劣官、又何事在哉、意端不思此事、一言不出詞、人定存老翁所申由歟、已時許

言家來、參女院畏申、早參殿下、御內返云々、又向二品許、可參言之由示含之、拜賀潤月不可憚、袍申親昵公卿、大臣、大納言、當時被中權中納言有便歟由示之、午終許參殿下、少時出御、入見參、非辨官近將貫首二人相並、其例希由有成不審人云々、爲存知可注出其例由被仰、被引藏人補任、嵯峨、仁明、貞觀、然寬平、管家、高能、保元顯長、惟方、中辨、前院御時定經、此等之外頗希也、木工頭中羽林蘭臺之人、自然有其器之故歟、於此兩人者、今尤可然事歟、資賴朝臣當時參籠春日、未聞歟云々、親長叙散位、深有天憐、仍依彼懇望給薩摩國、成長無指過、雖成重任功、被推替下野、此外國皆本人、國司名替云々、明法博士云云、夜前死去、明政子也、去年秋任之、非器由傍輩競望之時申之、其家已絕歟、賴尙真人參、付維長讓任子息事、殊畏申之次、內々仰云、雖非可披露事、於汝異他之由仰之、助教可有闕歟、而業綱申之云々、汝爲直講、世々所推轉任爲例事、若可訴申乎、又若優一門、不可競乎者、申云、爲直講者助教闕、轉任爲恒例事、然而賴尙年少候、

必不可限今度、一門者已如滅亡、業網所殘遺老、有稽古之勤、沉淪尤可有哀憐候、於彼拜任者、偏可爲身上之慶、中家逐日繁昌、清家已如亡、於被任他人者、尤可爲愁訴由申之、予聞此事、老後之頑愚忽落淚、於今世者無存此心人歟、感歎而有餘之由申之、始今度大府卿競望、雖有師弟之好、甚忘仁義事歟、今世人老少貴賤更無此心、尤可貴事也、久候御前、臨昏入御了退出、先是雨降、歸家之後、忽大風發屋、春日詣廿八日、御入內行啓可爲三月、定日未聞云々、二月八日御退出、十六日立后、廿二日兩社平野北野、行幸、連々相續歟、今月十三日內裏盡咒師、秉燭以後大風殊烈、終夜不休、

六日、己亥、天猶陰、風猶烈、未後微雨降、未時許新兵衛佐高賴來臨、嚴父入道消息、存外任衛府、昔事皆忘却、每事示合可遇之由所申合也、當府事雖不知始末、於事無隔心可申承之由約束訖、容儀進退優美人也、禪門出仕之時、多年相馴之好歟、遺老之身相互不忘舊好、保敎朝臣存生之時又有芳心、

七日、庚子、朝天猶陰間晴、午時許參殿、明後日於春日御社、被修御神樂之間事等被仰、家司親氏可參、暫入御之間出中門方、成長卿參、不慮相謁、薩摩被召重任功、已被宣下重任由了、去比巷說不審事承之、忽束帶參內、付少將內侍申入之處、不可相違由承之、安堵不存知之間、相轉給替國、是即朝恩也、此由且爲申入參由云々、當時所稱穩便歟、又參御出居之間、法務御房御座替、見參之間又出御、平等院修正導師穆了、自進路退歸、修正導師之習、必不歸進路、自他方退、今違例之由被尋仰之處、不申失錯由、必不歸本路由、依此事有奇怪沙汰之間、又代始之外被改導師不吉、後京極殿御時被改、其年有不吉御事由遮申之、事尤奇怪之故、召執行公文男預等、委被問先例等、供僧自內院被出外、更被下之例、被改導師之例等、慥無詔飾可申由被仰、引勘可申由公文申之、此沙汰之間退出訖、淨妙寺陵鳴動、多武峯又鳴動、所々怪異等多、被始御祈等、泰山府君祭七座被修云々、歸家之後、宰相蒔繪弓籠隨身

借送新兵衛佐許、

八日、辛丑、終日晴陰、念誦不出行、入夜言家朝臣來、十三日欲拜賀、晝咒師之由承之、若無便宜歟、事未訖者、如藏人見物指合不見來歟、又有日次者延引何事在哉、由答之、又昇殿之望事、猶懇切爲示慶事、向頭右京大夫許、其次昇殿后宮職事等所望可示付由教訓、

九日、壬寅、天晴、午時許參殿、前大貳參會、暫言談、退出之後殿下出御、雖入見參、不及御安坐入御、即退出、參法務御房、得便宜心閑見參、頗及心事、日入以後歸廬、

十日、癸卯、天晴、巳時許寬法印來談、依十三日晝咒師、被宛小二人裝束、伴大松王丸自後高倉御時、依被仰付可訪食事由、廻向金剛心院年具卅課、教成卿備前正於衣服者基保卿承之、至于今度被宛此裝束、調出依事煩、又依松王所望、只沙汰給鵝眼八十貫了、此事年來無之、自貞應被宛金剛心院也、伽藍被寄人領、更又被宛人物於佛家、末代之法也、今年十月宮可有御滿頂、御室卅五、北

院一度之御例也、爲其事修理北院、一向被押懸、每度御灌頂之前、稱壇拂先有灌頂之人、實喻來三月下旬可遂、其前修理可終功云々、信繁法師又爲女院御使下向關東云々、積習前事歟、

十一日、甲辰、霜凝、天晴、巳後近陰、入夜微雨、即晴、相門只今被渡西園寺云々、即參右大臣殿、見參東御出居之後參殿、九條殿御出了云々、仍歸家、寒氣如嚴冬、明後日晝咒師、巷談先例不吉之由云々、可何樣乎、強無御覽御好由有天氣、保元之例非不吉、何不被遂乎由、殿下令申給云々、無御好者兼日停止可宜哉、又反唇之輩誰人哉、達天聰、頗可奇事歟、三合之年不可然由云々、爲少年侍臣等之說者、頗過分之口入歟、抑非假慮之御好者、不及被申行歟、御春日詣廿七日云々、變々之條外聞如何、

十二日、乙巳、夜月明、朝霜凝、巳時許詣相門、咒師事非可然如公事、事雖久絕非可闕事、無殊御好者、不可令申行給、而又已可被行由被催儲之上、今更不吉之沙汰甚異樣事歟、保元高倉院御時全非不吉、建久又依承

久、獨不可被處不吉、建久被行事爲不吉者、每事可被
忌歟、又如此事吉不吉之沙汰誰人之所稱出哉、難人所
申甚不便事也、已被催儲之上、依難人之難被止者、尤
可見苦、於今者早可被行候歟、凡は強て不被奉申勸
とも、候わぬべかりけりと可申、又氣比社沙汰問注、
無其故懈怠、無述事由、朝時之所申使者歟申之由承
之、如此事尤可被成敗候歟由可申由蒙命、參殿申此
由、咒師事全非申行、法勝寺者國家所可重也、咒師裝
束貞應以後無沙汰、各訴申、依不便有沙汰之次賜裝束
事、先々有御覽之例、如何由申之、尤可然之由有勅定、
仍所申沙汰也、保元三年全無凶事、高倉院又度々有此
事、至于建久下衆猿樂被召、先々無此事、仍只可召侍猿樂由所
申也、此上無職之難人之傍難、極不可然事歟、但今日參
內之次有傍難者、不可候由可申也、氣比社事、兩方互
逃問注、彼是參着之間、自然遲引也、重可仰遣平宰相
許由、有長朝臣承之、以相公請文遣長衡許了、今日內
內可御覽糊由有沙汰云々、爲家卿承之、予不觸耳、及

申時各參由申之、渡御泉屋、予雖欲伺見、頗無便宜歟、
寒風依無由退出、於門前有長朝臣送使可參由示之、可
申退出由之間、答之歸家、讃州弘田鄉事、彼鄉公文男
左衛門尉信綱可請由申、何事在哉由有相門之命、左右
只隨嚴旨之由答申了、殿下今夜御參內、可御々直廬云
云、今夕右幕下之室平産、女子云々、

十三日、丙午、朝天晴、沍寒、午時許參大納言殿、四條坊門大宮
見參之間、賴資卿參會、參長膳堂御月忌次、暫言談、退出之後、猶

申承、月出之後歸廬之間、青侍等云、只今地震甚荒、云
云、於車中不覺悟、此邊二三町之內來着之間歟云々、
地震近年甚不快事歟、尤可怖事也、晝咒師之日、人定
有所思歟、後傳聞、秉燭之後無程事訖、人々退出之後
地震云々、咒師之儀不聞及、

十四日、丁未、自朝陰沍、侍從來、今夕拜賀云々、兵衛佐
又來臨、詣相門、讃州弘田事、可令請公文男信綱、之由、
依有其命、本沙汰者訴申役夫等使、引付事可被仰合、
可停止由之趣申之、件文今日相計合書可給之由有約

寬弘二年 閏正月

百七十四

八

諾、即退出、夕宰相來云、明曉相門御坐水田、幕下、前相公、新中將等供奉山語也、存外今夜無成敗沙汰歟、無故遊放給事、人定傾思歟、歡娛之外更無他、行幸奉日詣慈立每事難叶云々、夜宿東小屋、二月四位侍從來云々、答他行由、曉鐘遲而雞先唱、即歸、十五日、戊申、天晴、已後南風吹雲、陽景陰晴、朝浴、念誦、自晚風殊烈、

十六日、己酉、曉月清明、朝天遠霽、依閑居徒然、聊招請人々、已時許備州來臨、以其車迎例禪尼、次法印、次三位、右少辨、會合之後連歌、賦五色、種轉、青赤黃白黑、秉燭之程聊差酒饌、戌終許百句訖、各被赴歸路、餘與多殘、互約後會、今日人々物語云、少將賴氏朝臣參熊野、於湯和左宿、與其侍後見、左衛門尉合枕臥之間、燈消眠覺、忽聞奇音驚起、秉燈見之、伴男顏加手被斬、唱念佛三聲即死、少將雖悲歎、猶遂參詣云々、甚不可然事歟、昨今已下向云々、聞事體、只共人之中所爲歟、昨日三位與大貳參明惠房之戒、貳二位中將着淨衣蔽其

面、交聽聞、雜人坐禮堂、小隨身下野某又着淨衣、上六寸在其共云々、昨日兩納言定盛、不見云々、

十七日、庚戌、自去夜天陰風吹、弘田事自相門有被示之旨、參向申子細歸、成私家下文奉之、又給信綱請文、次參殿下之間、今明固御物忌由、聞之歸家、已時許言家朝臣來、去十四日拜賀、兩社行幸舞人領帖訖、昇殿懇切無他云々、秉燭之程雨降、漸甚雨、風相交、雷鳴兩三聲之後漸遠聞、風雨猶猛、至于深更雷聲頻聞、

十八日、辛亥、曉月明、朝天晴、辰後沍陰、雪飛、寒風飛雪、念誦不出行、

十九日、壬子、霜結沍陰、入夜雨雪降、終夜不止、寒氣如嚴冬、午時許參殿、相國幕下御對面云々、未時許被退出之間、於御出居入見參、即入御退出、春日祭使少將教信領狀云々、

廿日、癸丑、天陰、微雨降、或晴或雨、夕大風、風雨沍寒、不出戶外、

廿一日、甲寅、天晴、夜雪宿、不及寸沍寒、依寒氣不出行、讀

岐弘田役夫等未濟、自相門昨日所召預之信綱請文十
三斛、依神部來仰舍其山了、近寒殊甚、一寢後南方有
火云々、二條南、京極四、殿下南町云々、已經程由聞之、
驚起之間漸滅了、夜依不能行步不出、

廿二日、乙卯、雨凝天晴、夜又陰、午時參殿、與前大貳暫
言談、去夜火間前宰相宗房朝臣殿上人等多參南町、大
略一町燒由惟長朝臣語之、昨日內裏有御鞠御覽、殿下
戌時許還御云々、鞠爲家卿、宗平、資雅、有資、自餘近
習等雖立加、稱不堪由云々、退出參大谷前齋宮、未時
許退出歸家、伯卿妹、放入道落胤言家先年爲妻、離後候此
宮、自去冬館居、義村子在京二人之中弟歟、自愛同宿
云々、又通具卿老後愛物師季中將妹、同爲武士愛物在白河
云々、能眞子歟、

廿三日、丙辰、自夜雨降、終日不止、詣相門、以忠廣朝臣
依風病不逢由有命、即退歸、依雨不他行、聊依有申事
也、歸後以書帖申達、有許容、極密々事也、

廿四日、丁巳、自夜天晴、午後又大風、早旦沐浴念誦、此

四五日單紅梅雖開訖、雨洗風摧、即有衰色、垂柳漸綠、
廿五日、戊午、朝天晴、辰後又近陰、雪飛、言家朝臣來、
退參殿下云々、心寂房來談、問療治之間事等、入夜宰
相來、此間偏寓直幕府、今夜適歸家門云々、是只醉鄉
歟、只今幕下被參殿之間云々、昨日又於右大臣殿鞠、
又法務御房頻有招請云々、廿一日內裏御鞠、東屏中門
壺、賀茂祠官等立、沙厚枝滋、其數不揚云々、

廿六日、己未、天晴、雪飛、寒風猛烈如刀、風寒、老身不
能出行、返牛僕了、頭右京又有腫物云々、行兼又腫物
及火針、但其後無增云々、

廿七日、庚申、天晴、殿下御物忌云々、不出門戶、東風猶
寒、如嚴冬、入夜女房退出、今日內裏又鞠云々、爲家資雅氏、公有、繁茂等被立云々、

廿八日、辛酉、天晴、適風不吹、晝陰、夜深雨、明夕行幸
云々、申時許右兵衛督來臨、欲謁之間、新源三位會合、
同時言談、共是子息、兵衛佐侍從行幸舞人間事爲示合云々、
自然臨昏、三位先被歸、及暗武衛被歸了、明日行幸共

寬政二年 二月

百七十六

不參云々、

廿九日、壬戌、晦、自夜甚雨、終日不止、入夜雨休、依十五日滿宿東小屋、曉鐘之後歸、

○二月大

一日、癸亥、陽景漸晴、午後忽陰、未時雨又降、午時參殿、前大貳暫言談、大貳立去之後、右大臣殿見參、仰云、夜前參行幸、還御天明、兩大將、大納言雅親、中納言、不騎馬別當、侍從宰相、左兵衛督供奉、自內所參來也、殿下又出御、仰云、春日詣不可待人々參、不可渡舞人、曉鐘之程出京可馳下也、廿八日曉以前爲遂訖神事也、供奉公卿未開定、右大將以下歟、曉參事吉例多、如此院有御見物之時、及巳午時也、即入御之後退出、乘車之後雨降、入夜猶不止、

二日、甲子、夜雨止、朝天晴、午後風烈、官人秦兼岑來、即相逢、每便宜有芳心之詞之由傳聞、本意之由相示、非指微言、依存道理自然口入歟、態來臨過分之由答之、久不合眼、已戴白髮、年齒之最弟也、足驚歎、爲人不好

凶惡、雖自然口入聞人不多、事披露誰人乎、存外事也、故殿并殿下多年被召仕、依存外事、當時在本府、子息猶奉公家之家嫡、其身不卑、所申道理歟、夕侍從來、行幸舞人雖仰狀被催實直、稱不審由若公有之嫌歟、尤可問奉行職事歟、

三日、乙丑、天顏適晴、長延入道送柑子下枝之次云、空體房正月下旬逝去云々、于今不聞及、甚以悲慟、四日、丙寅、朝天陰、雨漸降、未後又甚雨、午時許宰相來、雨止、一昨日於殿下鞠、三百六十之數再揚、右大臣殿、右幕下立加給云々、宗平、資雅朝臣參、昨日又此輩於法務御房鞠之後盃酒入興、西北紅梅昨今開、南京梅淺深皆開敷云々、

五日、丁卯、朝雲分、辰後晴、又大風、午時許參殿、大藏卿同被立大原野祭神馬、陪膳有長朝臣、職事信說、忠高付以良申云、今日職事一人可參大原野、日來催家國、依使者懈怠、不知申障之由之間、今日右大臣殿御奉幣、奉行不參社之由承之、可催誰人哉、仰一日比家

國參之樣聞食、何樣事哉、早遣召可構參由可仰、聞事體不足言

歟、不見附文在參山、只今雖被召仰、遠路事更不可合期、奉奉行懈怠之至歟、

行家司少年之上、非器父卿酩酊、殿中大小皆如此歟、

兩社行幸舞人五人闕如云々、春日詣供奉人未申領狀、

縱雖有御經營、無供奉人者甚可見苦事歟、付視聽驚

奇、人々云、八日直物御退出之日事又指合歟、直物以

後右大臣殿可令寄御車給云々、申時許退出、

六日、戊辰、天晴、午時參殿、前大貳言談之後、推參御

所、明後日白晝早速被行直物、可有御退出云々、諸大

夫領狀、其人數甚少、定見苦歟、御退出之路大宮、御春

日詣二條東洞院九條宮小路云々、早旦言家來、地下供

奉極無面目之由歟之、今朝參之次、無地下替、自位次

可供奉由承之由、盛長伊豆前司、重長改名、語之、權門隨身近衛舍

人等辭退嗽々云々、申時許退出了、入夜右兵衛佐來

臨、舞人事等示合、以青侍等令立置、如形示駿河舞求

子之體了、只作大輪蹈昇渡返事等許也、近代舞不過之

歟、

七日、己巳、天陰晴、入夜半月朗朗、巳時許頭沃菊湯、詔

宗平中將轉借兼輔少將平文、移送兵衛佐許、爲本樣

也、北政所今日御入內云々、直物爲明日、競望厚緣、群

集日非人不出仕、入夜見南簷之月悲殘涯、夜深忠弘法

師無爲歸洛之由告送、適以爲悅、

八日、庚午、天晴、未後陰、侍從來、繁雅入道女院御後見

此曉終命、左兵衛佐光成、舞人一臘藏人繁茂、同輕服

止了云々、忠弘法師來、能州吏務更以不可棄居、地頭

守護之張行、國務之滅亡、不足言事云々、但於其分限

者、如形行之了、存命歸洛、以之爲冥加云々、主從再合

眼、不存事也、今日此次聞、右幕下又日來有被示事、

修理職相憐示云々、事體尤大切事歟、但職磨滅之故、本所厭却

歟、其事尤不便、薄暮之程間巷有奔者云々、六波羅物

忿之由、相互成不審相尋、忠弘遣尋河東方、使者未歸、

但無殊事歟由答之、戊終許宗弘歸來云、陣邊同夕間頗

有馳走者、皆稱無爲由、落居了、雜仕等先相具參室町殿

所來也、於出車者未寄云々、夜半許車又歸、自室町殿

寬喜二年 二月

百七十八

歸來云々、腹病不宜、不見物、

九日、辛未、天陰晴、已時許見聞書、權少外記、中務丞、公輔解登

少內記、式部權大輔長倫、治部大輔範房倫、明法博士

中原章行、宮內丞、大膳權亮、主殿權助、左京權大夫菅

公良、和泉守政景、下總守高資俊、淡路守藤宗政、武士、選任、

左將監二人、右少將親季、將監二人、左門尉四人、少志

右門五人、左兵尉三人、右兵衛二人、左馬右馬頭一人、九イ

正三位良實、從四位上宗綱、去治、部、正五位下藤知經、高

爲宗、從五位上藤宗成、左馬頭不任歟、午時參一條町

殿、參右大臣殿、御出居之間、殿下自東殿入御、暫見參

之間、親氏少將內々爲御使參入由、女房被告申之間、又

令渡給、御共參門外歸、少時又還御、爲被立春日神馬

也、此間中納言參、又大藏卿參之間予退出、夜部扈從

右大將、大納言實親、家嗣、中納言經通、高實、定高、賴

資、參議伊平、隆親、經高、爲家、家光、夜部出車女房

一、別當殿、二、實快價部、按察殿、三、民部卿、宣嘩云々、

四、利部卿、五、少將信實、六、左衛門佐、七、仲房女、一條殿局、成

親妹八、家長朝臣、腰岐、九、甲斐、い、十、よろづ、一條殿、冷泉

殿、大納言殿、雅親、中納言殿、宰相殿御車寄供奉、馳參

一條殿、春日供奉人猶無人被催沙汰等不叶歟、昨日事

河東者只全無事由披露云々、推之醉狂之聞靜、非別事

歟由各稱之、平文移禪門返之、即返中將許了、申時許

定修來、頭注、

後聞、親房朝臣欲騎馬之間、馬驚落冠、不乘々車參

會云々、

十日、壬申、天晴、和暖、入夜大雨、今朝徹却火爐、已時

許參町殿、殿下還御訖云々、右大臣殿見參、直物之體

甚未練、大略散々云々、出車寄了後、宗房侍男等、俄引

其車寄打橋之間、令加制止、侍從宰相能忠、更不聞而引寄

之、其女房、新等、下車事甚奇怪也、急可乘之由示之、殿

下又出御、被仰奇怪之由、如抱乘而押乘了、是只稱所

勞由云々、其意趣非嫌對揚、御入內夜親房女右、今度

可乘返其左、而乘他人、鬱忿云々、退出參殿下、與前大

貳久言談、大府卿頻往反、吉田神主兼直申事、弟宮主

依其勞申四位事、但宮主有四品例歟、然者叙了可讓其弟等歟、又一代改宮主有吉例哉、寬治吉例有之由等申云々、自身又申三位、行等末代之人所望皆是無例、新儀過分濫望歟、有例理運事、餘命旦暮者之心中如何、依召參御前之次、仰云、如中將侍從參議兼修理大夫有例歟、申云、一昨日聊有承及事、其身未申此事、只如基定公兼舉其代乎由、右幕下被申由承之、參議給其職、更不可及代官之沙汰由、注進了由申之、入道法師所告也、非其具示合、資平、侍從、經任、侍從、良賴、中將、忠文、經成、資仲、賴盛、定輔、衛府督詣所覺悟如斯、猶其例多歟、左府平辭修理被申國、如發大將聞此事、被申能登事、仍今日示送了、返事未到云々、退出向二品許、春日祭御神事、被座里事歟、被出障子許謁申、又被出孫侍從我只一子、三位、孫又只一人鍾愛由被示、故亞相自少年見申、今更又見沒後遺孤、增老悲、亞相母儀不堪悲歎終命、已過中、不聞及、可悲事歟、日入以前歸家、

被仰和歌、如形書付進上、不可過之由被仰、春日舞人猶有未定事等、久清重有申旨等、猶將監者可任給也、行幸日猶依可爲御隨身官人、還御之後可被任、密々可存其旨之由被仰、兼岑舊老家嫡之上、已爲召繼長府年預、仍可被任右將監、兼廉不可爲兄下臘由頗雖申、如舊可爲將曹、而下毛野武平日來依府將曹、可爲一舞、而爲將監二人下臘者、定有訴訟歟、若辭退者其替無可然者云々、久清、兼岑、武平、府將兼廉、同、兼友、殿下久貞、右大臣廣澄、府官人、當賴種、殿下左賴岑、右大臣武信、殿府生、時人員、近光、日來不申左右、今日依召參入、被申子細、此外無事改催者武澄、爲侍伺候相國第、無稱武、此兩人之外實事宜物無之歟、行幸舞人資賴朝臣催之、實任朝臣、公有朝臣、親季、右少教定、侍從、宗教、同、高賴、兵衛顯平卿子、侍從、立后四位侍從經光催之、御點中將家定、雅繼、宗平、少將實任云々、辨有親、爲經、五位光俊、兼俊、兼宣、少納實文、侍從、已賴俊、忠俊、明後日十四日御書使具教朝臣、冊命勅使同人、立后以後御書使基氏朝臣、此輩

寬喜二年 二月

百八十

今日被仰下、賀茂祭使中將家定、具教、少將教房之間、隨勅定可催由被仰、

十二日、甲戌、天晴、依窮屈不出仕、漏刻博士泰俊朝臣來、昨日陰陽頭泰忠、自去月廿三日受病不食責伏之間、

辭陰陽頭權天文博士、猶去年祈雨御被賞讓之、以泰俊可任權天文之由申請付有長朝臣之時、聊加微言之由、有長

朝臣語之、此事爲相示也、聞及事爭不存輕微之忠、不可憑之由答之、國道有上臈正助在後、今度可任長官之由懇望、

兩職過分、仍存日去兩官申請此一事云々、庭梅漸開、若木之初花去年僅兩三開、今年及少々枝、明日忌日事猶示侍、嵯峨僧不裏改舊

好也、

十三日、乙亥、天晴、依忌日終日構扶念誦、午時許刑部權少輔經範來談、權大輔超越、重失面目愁訴等也、本自察申、近日更難得隙、此趣等惡心可伺之由示之、依假借即謝遣、未時許重家來、肝持病不快云々、長途供奉不便事歟、遲口老病、秉燭已後終經一部、老後如讀經、口意氣出入之故、腹中被引張、氣揚辛苦難堪也、

是每度事也、佛前居壇供、供燈明、以注記令唱卅二相、夕訖、自相門有恩言、此女房自去年衣色無可著物、萌木句欲著、非當時難得由先日申之、去年染藍衣一具送給、依身不具、預小事芳心、夜深宰相來談、

十四日、丙子、天晴、風吹、夜深大雨降、巳時許參殿、春日詣之由被申、氏三社奉幣立之間也、於庭上御被、資

高朝臣陪膳、春日使大內記光兼、大原野前兵部定俊、吉田、不見三人取御幣列立、陰陽權助國道御被了、光兼

持參御幣、通之退居四方、御拜前後兩段之後、給幣之次給告文、光兼

兼先出中門了、使次第進參歟、不見入御之後見參之間、前大貳參、惟長等傳奏、頭右京親房朝臣參立后間事、

頭資賴朝臣參、傳奏人不參、大貳承仰出逢入御、予退出、今日

法務御慶之後初參內給、師季中將申繼云々、宰相可參御出立所之由、夜前雖聞之、吉田例會合沈醉云々、

夜半許南有火、白川

十五日、丁丑、自夜甚雨、又大風、念誦、有教中將消息、明日冊命勅使俄被催云々、具教中將辭替歟、入夜侍從來、西紅梅北白梅盛開、

十六日、戊寅、天晴、風靜、立后日也、依今日事不審、早旦參室町殿、殿下自夜、夜中御東殿、付惟長朝臣、一昨

日被仰舞人事、一紙注出進入右大臣殿、見參之次伺承

事、大夫、右大權大夫、通方、亮、親房、權亮、右中將、源通忠、大進、

高權大進、親氏、宗房朝臣子、不知、大夫進、左大辨、家光弟、六位進

又宗房朝臣子云々、今日出仕公卿、右大臣殿、右大將、大

納言家嗣、中納言通方、經通、高實、定高、賴資、參議伊平、

經高、爲家、家光、範輔、實世朝臣、後聞不參、宗平、有實供奉云々、御遊所

作拍子、實基、付歌資雅朝臣、笙實有卿、笛經通卿、篳篥盛

兼卿、和琴家嗣卿、琵琶光俊卿、箏師季朝臣、四位侍從、

親房朝臣、師季、有教、有親、五位、光俊、經光、實文、兼資季、具教、實任、賴氏、左近定平、右近兼輔、實直、衛勤、冊命使有教朝臣、啓將、門信盛、範賴、兵衛公員、定具、辨

有親朝臣、少納言兼宜、左將師季、定平、具教、實任、氏

通、右有教、基氏、賴氏、實直、即令參東殿給、予已時退

出、靜俊書狀云、一昨日十四日若宮別當法印教賢於十

禪師實前修八講、童四人、舞二人、伶僧五人、伯樂四人、舞一人、四

人之内眷恩弟子春佛、已上南京、其外樂人濟々、遊宴

舞猿樂、山門又響應入與云々、兩方和合、珍事歟、申時許依假日參大納言殿、見參移漏、夜深歸座、夜深宿丑寅角小屋、曉鐘歸、夜月陰、

十七日、己卯、天晴、自殿下給御書、今日勅使御書御歌

事被仰合之次、皇后之父大臣之父、非宿老之身、可恐

可悅由被仰、實思前蹤、御先祖之例雖各存、御年齒并

計會之條、又希代事歟、天晴風靜、無爲被遂行之條、持

悅有餘之由申之、自相門又有音信、同申此御慶事、今日

儀後聞、殿上人座徹四位侍從座、長押下敷之、殿下御着

座、右大臣殿、大夫、三條大納言、權大夫、中納言經通、

定高、早出、參議伊平、爲家、家光、實世、亮、左大辨、中

納言經通、三獻殿上人亮資季二人着、被能殿上人云々、不儲、次

五位少進二人取瓶子、御書使基氏朝臣取御書時誤取

柳筥、相公示告弃之、昇沓脫之間、寢殿東弘庇南端北

面座、大納言實親卿、權大夫、參議三人各勸杯、垣下座敷面南上、各著之、傳達、實世不著、同弘庇西

十八日、庚辰、天晴陰、所栽之梅下枝、南庭、紅五、白一、木紅一、北

寬嘉二年 二月

百八十二

庭、水紅一、櫻南庭三各開始、以之發眼、言家來、後聞、

今日殿下、右大臣殿、權大夫、經高、家光、範輔、殿下御

坏、依參議不可給、參議經高、範輔、勘坏權大夫給之、

依不催公卿不參云々、申時許密見毗沙門堂花、過半未

開、

十九日、辛巳、天晴、已一點詣相門奉謁、殿中事總無行

事人、立后日萬事懈怠闕如、極不便之由歎息給、次參

殿下見參、親季朝臣舞人間事可加詞之由被仰、資家卿

每事口入定存知歟、示少々事等了、未時許退出、後聞、

今夜啓將還祿不催將佐、不知今日隆盛、於大將亭兩藏人

佐許參、宮司勘坏、權亮殿上人取祿、次八社奉幣定、殿

下、右大臣殿、大納言、實親、中納言、通方、參議伊平、爲

家、亮書之、不儲切燈盞硯、公卿著座之後初馳走、及

曉、次氏院參賀勘坏、大納言二人、中納言二人、參議二

人、四獻亮有親、五獻權亮實經云々、

廿日、壬午、天陰、已後微雨間降、風烈、今朝、爲翫八重

櫻欲參御室、自朝天陰風烈、仍止了、申時許大宮三位

大貳同車被過、乍驚相逢、望見毗沙門堂花之次云々、

夕被歸、入夜宰相來、語日來事、立后節會、定高卿自二

位中納言俊立後列、如三賴資又立其後云々、事訖退出

時、內辨右廻、左廻經、下膳後、經通右廻、高實左廻、賴資左廻、

伊平左廻、經高爲家右廻、宗光左廻、教雅少將所勞已

獲麟、面謁乎由示、今朝行向間、七歲童可首服由議之、

忽取寄直衣如形理髮、元服烏帽子也、始終可扶持之由

示付云々、病體更難存云々、悲而有餘、去十四日前中

納言範朝卿出家、聊有難熱事、非大事、以此次遂本意

云々、

廿一日、癸未、天晴風靜、已時出蓬門、京中野外櫻花盛

開、如雲如雪、參西郊大聖院遠望、宮樹開敷未散、就中

門內兩株階前八重、濃艶映水芥芳滿庭、實俞僧都覺寬

法印相謁、少時出御、予候簀子之間、覺法印申宰相參由、

又召御前、信實朝臣相具云々、即召出之後入御、法印催

連歌、孝繼執筆、信實朝臣賦物花何水何、甚堅各停滯

不尋常、尊逼僧都實俞僧都在西座、隔障子、覺寬、宰相、

信實在東、相構八十句、賦物大略盡歟、仍止之、次讀和歌一首、春日詠庭前八重櫻、和歌孝繼讀上了、不被出御歌

日漸傾予先退出、於一條大路日入歸廬、可謂數奇狂氣、廿二日、甲申、天晴風烈、已後風頗宜、參殿下、參御前、

少將親季日來隨身、舞人、勤仕、萌木袴壺脛巾指鞭之由資家

卿申、存其儀之間、三位父卿、先年勤仕之時、令負胡錄

之由申、仍俄相求弓箭、抑帶胡錄者又可着染分袴歟之

由、申不審由、令著二藍萌木、負胡錄之儀慥不覺悟候

之間、答此由候了、但治承三年秋八幡行幸、右少將資

時令著青緒染袴、令帶胡錄之樣、二側覺悟候之由申之、

取寄中山內府記可見之由被仰、召侍下知之、明日御馬

副以下裝束調進、人々進之、自然日躋、良久內府記持

參、予引見之、件日見物云々、辭別當之後也、舞人右少將顯家

隨身胡錄、同資時隨身胡錄萌木結染袴、侍從隆保、左衛

門佐業房隨身胡錄、童萌木、雜色二藍、皆紅衣白生單

衣、右馬頭定輔隨身四人壺脛巾、侍從信清、右兵衛權佐

盛定隨身胡錄、侍從定家、兼赤色、女、即生衣、右兵衛尉爲成、兼女

雜色萩、左將監信政雜色朽葉貫布、花蒲荀引へぎ、童

女郎、如此被記、往事如見、猶可令帶胡錄之由依仰送

書狀、右大將爲一員樂人之中、可令轉將曹之由被申、

召好氏被尋仰、爲上臈之輩被越者、可切本鳥之由嗽々

訴申、仍轉任難被行、以府生可爲代歟、其例多由又以

愚狀達之、府生又無其仁、明日已後可申沙汰由被申、

明日中宮女房見物出車、權亮通忠、中將雅繼、前駟等可申由被仰親

房、權右、殿下右大臣殿令參中宮給了、夕退出、以使又問

新少將、答云、事卒爾、弓箭更難求尋出之間、猶可令指

鞭由、只今重申候了者、明日御騎馬前後行列依仰書簡

授兼教了、殿下今夜御參內、於御直廬可被催具云々、

廿三日、乙酉、日出之後陽景快晴、曉更雲暗雨降、驚見

之間漸有雲間、天明忽霽、日出之程參一條西亭、右大

臣殿御裝束之間也、以康法、師奉仕、資季朝臣在御前、令着裏山

吹下襲給、御袴例、縮線綾、紫綵平緒、御裝束訖令出給之間退出、

乘車立一條面、大臣殿令參中宮給、即自室町面令出

給、前駟隨參會三人、久康、兼仲、官人久良、中將在御共、即向棧

寛喜二年 二月

百八十四

一八

敷、近衛北、大宮面、自近衛面辻子、下鴨一人敷、此間人未來云

云、相國御棧敷鷹司北七間新造、如例屋、此棧敷北鷹司

南有二棧敷、北端敷成卿、此隣武士、ヲカサ原云々、返

車迎女房等、冷泉女房來、侍從小兒二人、已時以後車

漸來集、皆在大路面、不立路東、以下人令窺見、已一點

御輿已出御、殿下御騎馬之由云々、其後時刻推移、適

神寶通過、頻立留車昇居神寶、不可然、此間中宮女房車

二兩、立相門御棧敷之西、雅繼朝臣車、前木句、通忠々直

之車、前木句、前駟行兼子左衛門尉云々、前駟左衛門

尉俊親、神寶渡了、神祇衣冠二人、束帶二人、後童、黃香

童、前木次御琴持、舞人非藏人左近將監紅裝懷國、馬草

毛敷、童二人紅梅唐紙、青衣、雜色四人花田唐紙、山吹被

皆押色紙形障子風流敷、右兵衛尉仲泰、紅打黃川原毛、

御倉小舍人、童前木山吹衣付梅花、雜色二藍、同花、侍

從資平、浪打衣、私馬馬草毛、云々、童二人前木山吹衣、雜色

六人、赤色、同衣、皆以同色絹押龜甲文、皆付梅花、私侍二人

付馬左右、男也、八歲云々、稚少、侍從宗敷、紅打黑草毛、

童二藍、山吹付山吹花、隨身朽葉袴付藤帶胡錄、雜色前

木山吹衣、出衣山吹花、侍從敷定、紅打、黑、童櫻前木、山吹

銅鑄、尾長雜色櫻、皆實同鳥、侍從雅繼、紅打、土草毛、童

二藍、紅打、紙鑄蝶ヲ透す、雜色前木濃山吹袖、同蝶透、

右少將親季、紅打、黑鹿毛、童朽葉前木柏藤付、隨身前

木袴付薔薇、雜色二藍濃山吹衣、付山吹、右少將實直、

紅打、綿イ草毛、武澄相副、兼日公有申請武澄行向、身井所從衣裝等邪

返上下黃地、錦衣付唐瓶子、童前木濃山吹衣、隨身朽葉袴胡

錄、雜色二藍濃山吹衣、皆以紙鑄霞地ヲ透、其上付金

銅、窠の文ヲ付、左少將公有、紅打、白草毛、童朽葉絹打

前木衣、隨身同袴櫻付、雜色花田打山吹衣、童雜色ノホリ

替、付櫻花、乘驕馬、次諸司如例、式部丞、少年、隼人正、

老翁、武士衛府、多供奉、其所從に令問て聞名、天野五

郎兵衛と云、但在左衛門先陣如何、朽葉舍人二藍、童

青丹末濃袴、黃衣、四人、小川三郎左衛門、朽葉舍人、同色茜

絹四人、鎌田次郎左衛門、前木童、黃舍人、窠文紺狩衣、

末濃袴、山吹衣四人、淡路四郎左衛門、朽葉童、黃小舍

人、蟲襖二、末濃袴四人、遠江次郎左衛門、赤色童、青舍人、大腰摺紺、末濃袴四人、駿河四郎左衛門、蟲襖舍人、二藍童、青丹末濃袴、齒衣、曾我太郎兵衛、岩原三郎兵衛、青童、黃舍人、紫袴四人、紀七郎兵衛、青童、黃香舍人、櫛紺狩衣、末濃袴四人、おこせの馬丸、老若、黃舍人、蟲襖末濃袴、黃衣、木工兵衛、木工入道ト云、相州專一者次男云々、青舍人、朽葉童、紺青二、額額衣四人、折烏帽子直垂男廿人、其鞆其羽、皆古今未見之體也、但無衛門兵衛之分別、皆渡了、檢非違使友景、横童、看督二人、火長二人、雜色四人、鹿子ゆひ狩衣下部四人、赤革腰、殿上衛府、黃表袴、櫻萌木半臂、福付裏縫、二藍山吹衣童、雜色四人、左衛門權佐信盛、權舍人、隨身二人、看督四人、火長二人、雜色五人、右馬助光衛、青舍人、二藍童、襖袴隨身、雜色三人、權頭有長、萌木舍人、今一人引梯水干、雜色七人之內持弓、左兵衛佐公員、朽葉舍人、二藍童、隨身蘇芳袴、少納言宗明、萌木舍人、雜色五人、公卿、治部卿親長、馬副四人、雜色

五人、左兵衛督基保、赤色、萌木舍人、隨身、雜色三人、右大辨、舍人花田、薄青、雜色四人、其衣飾織紋、侍從宰相、舍人萌木二藍、遠山吹箱、雜色四人、平宰相、舍人薄青柏皮、雜色五人、別當、舍人權、わかいろ、看督火長雜色四人、中納言盛兼、馬副六人、舍人青こさちんの水干、雜色五人、三條大納言實親、馬副八人、薄色黃香白袴付左右、萌木舍人一人、居飼雜色三人、源大納言雅親、馬副八人、舍人赤色花田、雜色四人、左右近將監不見、威儀御馬等如例、右大將番長武信乘狛狛、於相國御棧敷前兄弟如飛、右大將、紅梅下襲、左大將殿番長賴岑、乘栗毛、府生久員、左大將殿、御綱次將近年若人不見知之、上、拜龍顏端殿之間、愚眼忘他、不分別而過了、其數多歟、在後陣之輩不打並、少將教房童一人、隨身二人、皆經爛之文、裏形木、宰相中將實世、萌木袴、下賜微色歟、三木下、位中將實有、黃袴櫻所、殿下移馬居飼四人、御厩舍人四人、二行、番長左右、二行、右權、官人、二行、左右、御馬瀧口上薦二人張口、不替下袴舍人、二人仕御馬口、御厩舍人持御鞭在右方、居飼在御馬

寬喜二年 二月

百八十六

左、次瀧口十人、二行各五人、次下薦御隨身六人二行、染分袴、

左、未武、武行、時イ貞直、右、弘方、敦任、助久、昨日次瀧口

調度懸十人、二行各五人、檣上下負調度、雜色一人、次

頭資賴朝臣、童薄青、薄色柏、黃香舍人、藏人經光、萌

木袴、黃下襲、二藍童、二人、萌木舍人、雜色三人、無六

位藏人、御後殿上人經實朝臣子、萌木舍人、雜色四人、右衛門權佐

範賴、うさひの右衛門尉、近衛、黃舍人、二藍童、虫襖

に末濃袴四人、くらの、兵衛、黃舍人、二藍童、同色四

人、兵衛、近衛、在衛門後、次殿下御車、車副平禮乘尻、

御笠袋在此後、見物輩各歸、出車向北之後出棧敷、自

辻子東行、於南北辻子乘車、出近衛歸家、于時未時歟、

窮屈平臥、後聞、正四位下有親、行幸、大夫史大外記各

讓子息叙從五位上、宰相經高頻中二位、盛業、實有、基保

上卿已下追可申請云々、頭注

後聞、左中將宗平、資季、家定、實□、少將實任、教

房、氏通、右中將基氏、實蔭、隆盛、賴氏、兼輔、親

氏、

廿四日、丙戌、九坎、天晴、早旦詣相門、武士引馬參云々、仍暫

參町殿、殿下夜前還御冷泉殿云々、少時謁相國、慈賢

法印暫言談、來朔日下向湯山給、依招引兼日下向、可始

護摩云々、次謁主人、昨日光華自愛了、今日可向北山

由有命、次參殿下見參、昨日每事無爲、但騎馬之後已

經數刻、足極難堪之由被仰、以良朝臣申春日供奉人

人、申御馬事等、每人申請云々、入御之後、大藏卿三河

入道前大貳參會、予早出、久清兼岑今日任將監之由可

被仰云々、下毛野武平開將監二人、任山返電過去云々、舞人大略、左近將監秦久

清、新稱右近將監同兼岑、新稱、左近將曹同賴員、右近將

曹同兼廉、還稱、右近將曹同武澄、還稱、左近府生同久

員、右近府生同兼友、右近府生同廣澄、右近府生中臣

近光、左近番長秦賴岑、

廿五日、丁亥、天晴、南風頻扇、夜深大雨、四位侍從來

談、自昨日咳病、今日殊懶、雖精進念誦、不幾心神辛苦、

依宗雲法印消息、送少々前裁、進持明院殿云々、未時

許竊行毗沙門堂、於車中見花、過半散了、車雜人多、聞

心寂房來由、即歸相逢爲見秦忠朝臣病出京、其病尤危由語之、紅白梅栽一株、其樹各不可安、必可有將來之煩之由示之、即掘取紅梅別栽之、草樹事只隨此僧之進止、傳聞有除目、後開、不見開書、左馬頭信時、遇任所歷歟、四位、少屬久康、左、兵衛尉藤賴季、入夜宰相來、幕下依行啓供奉追下向有馬、可伴之由有相門命、每事難叶、雖申領狀心中不定、歸後雨降、

廿六日、戊子、朝天晴、午時許參殿下、舞人并移馬以下、人々申邪欲被分宛、事未定、諸方出來馬等且御覽、自相門被進平文移十具、例移十四具被進、鞞皆新調、如此過差雖驚目、殿上人供奉本領狀十二三人之內、被告刻限之時、多申觸穢頓病由云々、諸大夫又不足廿人歟、公卿只伺候之輩許歟、右大將被參、明曉刻限爲眞實夜中者、還有上下之煩歟、猶天明出御可宜哉由雖被申院、不御覽時、吉例皆取松明、出御猶可爲夜之由被仰、北政所露顯之御見物、鹿御車、公、連前近、又依夜儀止了、不可被渡舞人之由被仰定訖、中納言、大藏卿、前大貳等在御

前、職事以良所司等奉仕御裝束之間、南面簀子不敷弘筵之由、黃門忿怒勘發、敷弘筵之時不敷簀子事、實不見事歟、辭退觸穢之輩、少々可被除籍由爲申、被召頭大夫、申時許參、又重催之、散狀可進由被仰頭資賴朝臣、未進之、自同寮御馬十疋、少將親氏爲御使被進、自北方右衛門尉成季相具御厩飼口等、密々請取之、御厩舍人出立之間皆退出、不見之故也、信定朝臣逢親氏朝臣申御馬名、申終許久清申慶由、人々申歟、仍自北對方出西中門廊方見之、久清束帶立藏人所屏西方、府官人廣澄子息久貞、上臈冠之裝束、不帶弓箭、其外四五人歟、布衣、子息等、云々、職事以良衣冠出逢、歸入又出、如達殿上人等之儀、歸昇、久清二拜訖退出之間、惟長又下中門廊沓脫召之、久清入中門渡御前、扈從者皆渡、渡了居東、唐垣了、渡了又久清已下歸出、今度副、南築垣、出門了後、不經程兼岑參入立、職事家盛出逢、兼岑二拜了雖退立、無召人歟、已出門退出之間、人々召返、今度無、下達者、兼岑又渡御前、相從者和武、布衣、帶劍、兼友、同少年者等八九人許歟、還出儀同前、中門廊內壁間三間懸舞

人裝束、舞人等未參歟、每事遲々、咳病窮屈無術間、退出歸家、戌終許已付寢之間、新少將來臨、驚出相逢、非殊事、供奉之間事、少々示合退歸、

廿七日、己丑、天晴、風靜、鷄鳴以後參殿之間纖月出山、頗遲々訖、仍不參入、於二條富小路邊伺見、右大將已下公卿五六人已參入云々、以下人令伺御發成之間云云、少時先陣殿上人等騎馬、二條向東、仍立押小路京極見物、先祓等進行、行列不尋常、舞人九人打融了、各不令取松明、暗然御厩舍人等又不見、若遇參歟、諸大夫、布袴四人歟、殿上人信盛範賴已上不及十人、其面不見分、實經朝臣、資季朝臣、親季、皆束帶、隨身冠、此內前大貳子、朽葉童未渡、二人頗刷歟、一員以下御隨身下臈皆騎馬、御前朱絛過、左中辨有親朝臣、御車唐車、車副白唐紙、紫纒、檢非違使、次右大將、一員已下隨身騎馬、前駟六人、坊城中納言、此後漸天、馬悉已下又同云々、二條中納言、新藤中納言、別當、看督火長隨身、皆取松明前行、明辨也、平宰相、侍從宰相、左大辨、三位中將、隨身二人、松明前行、二人、立後、次前駟二人、衣冠、三位中將殿、御車、上、御隨身二人

騎馬、依少年所從、等令騎歟、此間不取松明、見了歸廬、無人之條雖爲珍事、天氣甚以相應、陽景晴、風聲靜、永日遲々徒睡眠、申時許南方有火、東風頻扇、久不滅、行願寺之邊八坂塔燒了云々、乘車出近衛川原眺望、煙雖赴坤不幾而滅了、歸後聞、非八坂、只行願寺之內塔燒、六波羅地藏堂新立八足門燒了云々、

頭注後聞、行願寺門內本堂一、彌陀丈六鐺佛堂一、五重新塔、霞田衛門同門西堂一、同門向能茂入道堂、六波羅向堂一、同西堂一、多寶塔一、六波羅二階樓門、廿八日、庚寅、天晴、風靜、已時許詣相門、昨日自夜宿法性寺、曉猶遲出見、車苑滿九條川原、依無所、遠南行立其末、綾小路宮御車、又自車後猶令立南給、武士行粧盡美云々、來朔日出京、二日可宿始湯屋、十一日又宿始水田新造屋、十二日可歸、中宮御入內十三日云々、退出之次逢行寬法印、參右大臣殿、見參之次申一昨日除籍人外歟由、八人被削云々、家季朝臣、越後前司、家定朝臣、左少將、伊成朝臣、右少將、顯嗣、兼高子字、時高、範輔、親高、治部卿、佐殿上

開不氏光成、光親卿氏通等也、九十九人之於四人者實

非仙籍之仁歟、今日暑氣忽生甚辛苦、即退出、西風漸扇、浮雲漸陰、

頭注湯山、幕下、前相公、拾遺、相公、實經中將供奉云々、

廿九日、辛卯、及曉雨降、朝間微雨、已後間止、北風吹散、風雨之間不

出仕、以下人令伺、酉時許還御已成之由云々、秉燭之

程言家朝臣示送、自途中脚氣更發無術平臥、南京供奉

人不幾、資季朝臣、御服御下、實經朝臣、信時朝臣、言家、

信盛、忠高、範賴、親季、宗氏、教信、經俊等歟、爲經朝

臣不騎馬、能忠朝臣又雖參不出晴云々、參不供奉、脚

病事甚不便之由答之、

卅日、壬辰、終日甚雨、雲奔西、酉時許宰相來、明曉一定

供奉湯山、今朝參內入見參、奏春日事等、晝參中宮、左

大臣殿只今退出云々、春日詣之間事問之、廿七日曉

參、右大將不帶劔不被持笏、兩納言國定、持笏下立中門

外、殿下出中門揖、御衣、令出給、次二公卿次第出如恒、

治部卿儲三條坊門京極供奉、自五條邊別當平宰相止、

國通卿八條止、定高卿馳融、三位中將殿又令馳參給、

其後大將三位中將三人長途伴申、不參佐保殿、直入南

京宿所、其夜戌時許束帶參佐保殿、大將則當、殿下出御

御座、三位中將殿令赴端座給之間先起座、人々皆、後經

高家光依仰移與、一獻泰敏朝臣持參、與座遠瓶子取基

邦取傳盃云々、次公卿下立、三位中將殿御履、實季、於

社頭着祓殿、定高卿、經高卿雖異姓、猶着座令居贖物云

云、一棚、殿下、兩納言、爲家、二棚、家光、實有、三棚、三

位中將殿、資季、殿下仰止親房、四棚、實經、此後早出了、次

日早參着到殿、於雁中奉刷三位中將殿之間、幕下參入

給、武信騎驕馬、名喚栗、如飛天、衆徒競見賞翫、殿下御答每度三

幕下、定高、隆親、經高、家光、親長、與賴資、爲家、實有、

殿下出御、公卿下立幔外、東上南面、出御之儀如例、黑

木屋昇着座之路、幕下昇南階、經已講座上并前公卿末

着與座、定高卿昇西階、自簀子又經已講上着端、賴資

卿昇西階、自簀子南行、入與末間着與隆親、自簀子經

已講座末并前着端、經高入西面中間着與、爲家、同別

寬政二年 三月

百九十

二四

當家光着端、實有卿、同經高、三位中將殿、殿下被仰可
着奥由、親長着端、別當、僧正、依殿下御氣色勸坏、已謀持卷

坏取之給、與張粥親長拂底、取僧綱祿之儀、賴資出西簀
進退甚宜

子、向南跪、指笏取祿、入西中央間、經公卿已講之中、僧

正御座東底北一座也、西面、隆親經我前路、於賴資同所

指笏、爲家同之、經高、同賴資、家光跪長押上、三位中將、同賴資、親

長、同僧正今一人親房取之、已講祿能忠、資季、有親取

之、僧綱馬別當二正、次五位衛府各一人引之、自余各一

正、役人同、事了自下、下立、殿下御、次第乘車參佐

保殿、家光親長不見參議依催一人着座、泰敏又持參坏、一献

訖被引御馬、下、即各退出、昨日廿九日、曉更着直垂、

密々出乘船、遲明殿下還御、令過給了後、幕下又微行

御衣、乘船、實有卿、實經朝臣等相乘、晚頭歸京之山語

之、不及黃昏歸了、

○三月小

一日、癸巳、終日甚雨、早旦心寂房來談、昨夕見侍從足

病、極大患歟、雖加灸點其驗難知云々、相門、幕下、前相

公已下、今晚已下向了由、忠弘入道來談、今夜雖十五
日滿、依土用中不宿他所、依雨煩難堪也、

二日、甲午、三終夜今朝猶雨降、已後雨止、雲猶暗、中後又雨、

三日、乙未、終夜雨降、晚天漸晴、風拂雲、午時許惟長朝

臣書狀、借召與申破損由、令差替疊、未時許參冷泉殿、

大府前都督如例列座、出御之次見參、去夜盜穿法成寺

寶藏、代々廊塗籠奉取銀佛、雖搦嫌疑者、未知一定由被

仰、明惠房去十九日爲戒被來、一條四股自十五日不食病、

甚日不被語其由、長口會只一度食事人也此七八日飯類不入喉、

只飲粥、此粥又絕之時可知存亡、必神當時無違亂之由

有其消息由被仰、今年五十三云々、濁世之佛日又欲隱

歟、無物之貧老依無施物、遂不能詣向、前世之罪報而

已、兩卿退出之後、及日入歸廬、初月高懸、

四日、丙申、朝霜如雪、蒼天清明、未時欲出仕之間、大炊

御門中將過談、暫對面、漸臨昏、仍返牛僕、偃臥筋力逐

日有若亡、晚天遠晴、纖月已明、

五日、丁酉、朝間陰、微雨灑、未後晴、午時參殿、座主參

給、御對面之間也、大藏卿兼高近代被加傳參人、參會、座主出

給之後見參、兼高往反、頭實賴、宮權大進顯朝申行啓之

間事、範賴申事等也、頭亮參入、直中臨事祭事等、使經

賢朝臣領狀、舞人五人領狀云々、殿下聞食訖、密々御

出立秋門之後退出、腰痛甚難堪、兼康語云、明惠房病氣

力甚弱被坐云々、本自被斷鹽梅之上、飯類又不通云

々、夕教雅少將母儀以侍爲使、身上欺事被示合、少將之

體逐日無惡之間事等也、故相公祈好難忘、每聞拭淚、

自相逢問答心事、

六日、戊戌、次日、天晴、午時許參殿、山階寺僧正參給、御對

面之間云々、大府卿兼高朝臣、言談、臨時祭舞人多不足、此

祭使無其人云々、當世事惣無出仕之人歟、今朝此殿大

番舍人、兼教座維也男、突殺三條僧正之寵童、白河之橋邊、件童逃犯其妻云々、

入京極面御門、於庭上被擗、賜檢非違使一章了云々、

法成寺盜嫌疑者猶被召出、各未承伏云々、今日最勝金

剛院御八講、右大臣殿令參給、有教朝臣御共、明日殿下渡御、

老骨無計略不參、東一條院、此間御不例之氣令腫御、

長成入道大伏水腫之疑由中、他醫不申云々、有長朝臣廿七日打融武士隨兵之中

之間、爲馬被踏斃、大腫苦痛難堪、歸京之後聊落居、

去三日次男藏人正月、初參、立出見之間又增氣、苦痛無

術云云、乍驚退出之後送愚狀、八幡近年有珍事、周防

國小僧參籠祈請、大般若書寫之願之間忽死、同行等奔

郊原、經四ケ日蘇生、蟻歸語談魔宮事、遂勸知識終書

寫、去月八日請求佛房供養訖云々、久清如本可爲御隨

身由、今日以惟長被仰合了、久清可爲隨參山先所云々、中宮使權亮、繼依先例可

被遣云々、臨昏母堂示送、言家弟法師猷圓法印弟子範

那智之由聞之間、有中風病氣退出、於播磨國死去云

云、如此物死亡、穩便事歟、連枝皆如此爲奇、

七日、己亥、朝天遠晴、早旦重以宗弘間有長朝臣、自一昨離堪、及是源溫氣雨株八重櫻、一條殿出來之由答之、枝橫木、花漸開、永日徒然、令

分栽菊苗、草不憚土川、

八日、庚子、天快晴、午時許與心房被過談、自殿下退出、

今日渡御一條殿、至于十四日行啓可御彼御所云々、未

斜信實朝臣來、中宮氏寺參賀無人由、依被催可參、昨

寬喜二年 三月

百九十二

二六

日參御八講、右大臣殿、按察源大納言、雅、宰相中將、伊平、平宰相、三位知家、範宗、宗宣、長清、基定十人云、於其座人々云、前參議宗房朝臣午時頓死、昨日酒會云々、驚而有餘、竊以、年來飽滿神供珍味、尤有恐事歟、往年棟範并又以頓死、重保也、其妻羽衣、所生範資又不幸短命、後輩可恨事歟、事體依不審問家長朝臣、在其家向、返事云、昨日午時許俄絕入之由騷動、遂不蘇生、前日酒宴云々、今夜葬送之由聞云々、土川如何、後聞大宮北行云々、入夜急雨降、

九日、辛丑、朝天遠晴、以使者宗弘、問有長朝臣、又問教雅少將、各危急之體、尊遍律師取定納言消息、觸季顯之許、近年此事連々、貧家極難堪、入夜兵衛佐臨門前音信、心神違例、已付寢、答所勞更發之由、

十日、壬寅、遙漢無雲、午時許參右大臣殿、一條四殿、見參、明日御方遠行幸可供奉、於臨時祭者不可參、內府可被參云々、祭使猶雖被責催未領狀、宗房朝臣非頓死、自廿九日病惱、疑風病由、不存熱氣之間、其日如赤斑、瘡物少々

出現、即終命云々、在世之間不信佛神云々、少時入御、今日心閑入見參、依無人少々有伺承事等、及未斜入御之後出南方、知家卿、長朝、前大丞、暫言談之後退出、窮屈無極、

十一日、癸卯、朝天陰、未時許雨漸降、臨昏密、午時許八條三位、長清卿、過談、臨時祭日事示合、未時許新少將又過談、今夕參行幸近將事、尤可被隨入道三位之說之由雖相示、未相調云々、雜談之後謝遣之、雨降、

十二日、甲辰、朝天晴、曉更女房退出、依風病發沐浴云云、昨今書朗詠上卷又點之、爲小童讀書也、凌老眼終功、入夜宰相今夜歸京之由聞之、

十三日、乙巳、朝天陰、午時許參殿、即見參、明日臨時祭早速終、行啓早速之由被仰、行啓奉行公卿、大納言雅親卿、中納言實基、具實、參議伊平、爲家、範輔、三位實有、光俊、資宗卿、行啓大臣乘車尋常之例也、而待賢門院行啓、花山左府衰老之時騎馬有例、仍右大臣殿御騎馬今度尤可然由、菩提院入道殿有御命云々、定高、賴

資、陸親卿等重可催由被仰云々、相門夜前深更罷歸、

可參宮御方之由被申、即還御東殿之後、職事經光參

入、重申散狀、兩納言猶申障云々、即退出、酉時許宰相

來、參內頭亮臨時祭奉行、六位舞人一人闕如、無可勤

者之由只今稱云々、此後誰人勤之乎、不足言事歟、仙

藉有障者、尤可催地下者、懈怠之至甚不便、公卿家嗣、

實基、定高、隆親、經高、長清、宗宣、親長卿等參云々、

舞人朝輔、侍從、能定、範繼、長信、中務、家盛、將監、定具、

兵衛、忠兼、侍從、忠行卿子、加陪從泰敏、仲國、使經賢朝臣云々、

左近少將敦雅朝臣依所勞待時、昨日已出家云々、悲而

有餘、月出之後兵衛佐來、附舞人間事等之山歟、即歸、夜深新少將

又來臨、清談移漏歸、

十四日、丙午、夜行日、雲腐收盡、天顏快晴、午時參相門、法印

□親實卿弟對面之間、依招請加其座、法印退出之後不經程

退出、行寬代奉謁、即參西殿、右大臣殿見參、仰云、行

啓不供奉、遲息事等爲催行也、臨時祭殿下御出遲々刻

限下由可申之旨被仰合、參宮給、殿下渡御、御髮御裝

束、以法師率仕訖、出御之間、陰陽師御共人御隨身不參、驚

催之後、番長下薦二人參、在一條面云々、依無人褰御車簾、侍從賴俊

可參、四位殿上人依遞重坏一人不出仕、奇異事歟、面々

辭退無其人云々、六位舞人仲親遂領狀、御出之後兼高

朝臣暫清談退出、秉燭以後令伺見、殿下還御訖云々、

戌時許女房令參內、着物具張崩木匂花山吹表襲、高歸

家光女也、乘車後、上童二人乘別車相具、櫻崩木箱、二人光同

兼伊員在共、少時乘車伺見室町辻邊、出車三四兩立一

條南、室町四且隨乘訖漸加立、山下寄歟、出車寄北對、絲毛金作

寄御厩東妻戸云々、依無所便、雖無打橋轅を内へ引入

て寄云々、法務御車、後車七歟、過西給、以下人令見、立西洞院西云

云、此間室町ヲ西行、自油小路出一條、立油小路東、半

許、其後良久而松明之光多出、騎馬歟、但打立云々、又

良久而過渡、五位四位侍從歟、不分別、左衛門佐不見、

左兵衛佐公員、次公卿、宰相中將實世、伯、右兵衛督、

三位中將實有、左兵衛督、右大辨侍從、平宰相、別當、

左衛門督、權中納言實基、源大納言、雅、右大臣殿、人々裝束

寬喜二年 三月

百九十四

二八

皆同、次權亮、權大夫、大夫、御與次將左、實任、右賴氏、
大進忠高、親氏、少進光國、屬等不見分、次殿上人甚
多、大略近衛將歟、不見知人多、廿餘人歟、次右兵衛高
賴、右衛門範賴、次出車絲毛金作毛車十兩、各前駟一
也、衛府人、次殿下居側舍人前駟十人御隨身、御車下薦御
隨身過了歸、女房退出、天明訖、北政所還御云々、

十五日、丁未、天晴陰、早旦沐浴、念誦、夜前勸賞、從三位
正四下通忠、從二位輪子、
從五下二人、御匣、內侍、

十六日、戊申、天晴、巳時許參冷泉殿、兼高朝臣云、自一
昨日御內裡、明日可有小除目、貫首未補云々、只今參
內之由示、即退出、頭被補通忠歟、有親馳走、御氣色
宜云々、即
退出、行啓御後實直泥障唐尾云々、少將教雅十四日夜
半許逝去云々、戌時許行吉田宿、夏節爲本所也、曉鐘
歸、

十七日、己酉、四月節、天晴、右中將基氏朝臣昨日補頭
於右幕下亭
習其間事、云々、尤可然事歟、殿下夜前還御云々、午時
許參冷泉殿、門前無人、令問下人、猶御內裡云々、不參

而參大納言殿、見參、仰云、來廿三日仁王會可出仕、
脚病
適宜、乃先可着陣被問日次、即申之、廿二日云々、如此
着陣無申文、只着陣職事下吉書、召辨下之許也、申時
許退出之後少雨降、夜猶間降、

十八日、庚戌、朝微雨漸止、天晴、大風、除目延引、明後
日可被行云々、若及重事歟、殿下夜前御退出云々、有
可達相門事、先達書狀、今夕可來之由有命、黃昏參門
前、侍來云、渡給吉田了、即退歸、宰相明後日參籠日
吉、七ヶ口
云々、公事繁多之比自由山事也、信盛之對捍歟、臨昏
宰相自吉田來云、祭使新少將親季可勤、車相門調給、
中宮使雜色十二人裝束被調送云、其車右幕下被訪、
近衛使舍人居側裝束同被調云々、中宮亮不叙留、宮中
事依無行者、資賴朝臣可任云々、每年弃置歟、不便也、
宰相昨日爲逢時氏向河東、廿八日一定下向由稱之云
云、

十九日、辛亥、天晴、巳時參相門、又被出了云々、自門外
歸、參殿下、兼高朝臣云、親房朝臣上階之後、年預華厩

舉申親氏事頗不許歟、既忠高又父卿懇望、萬事餘人所不見歟、年

預懇望之由也、尤不便、即出御見參、近衛使已闕如、新

任專不可有由有勅定、人又皆悉固辭、事已闕如、所申

任依有事恐、仰可勤由了、出立所三條坊門、故左府御跡、可借

用歟、中宮使久清、兼友、引馬久員、賴種、已被仰了、

大藏卿前大貳參、今日尊勝陀羅尼供養御導師真惠僧

正、僧徒大略參入云々、未時許奉行職事以良、申奉行家

司闕如由、尋思高之處、昨日仰親氏山答之、開親氏不承及山中之例事歟、猶可遣召親氏山

被仰、萬事懈怠太不便、公卿未參、定高、經高、家光卿、

三位等參云々、未斜退出、入夜女房歸參宮御方、共人、有弘、

頭注後聞三人之外、爲家、長清、基定參云々、奉行親氏儒

弱、

廿日、壬子、天快晴、已時詣相門、適奉謁、貞雲親尊兩法

印、前大貳、殿下御使、在中門廊、即退出參殿下、公性法印、

宮御使、而謁之後參御前、天王寺住吉之相論又及闕諍、仍

可被召神主云々、大藏卿前大貳又參會、高三位申神宮

文書事等、少時入御、兼高雖申職事等奏事候由、以資

親傳申、三重傳奏不可然事歟、兩卿漸言談、予退出、除目經通、家光

卿參云々、此除目猶非祭除目云々、有重疊之煩、尤可

被加此次歟、

頭注前丹後守光氏一昨日出家、故光親卿三男、母成清法

印女、修明門院大貳、

廿一日、癸丑、自曉更雨降、已時休、又降、未時天晴、聞

書到來、中宮權少進藤光基、附正光子云々、陰陽頭賀茂在、非宜物歟、

俊、雖無居病者此道不超次山中云々、助安倍國通、權助賀茂在繼、兼、權天

文博士國通、左將監藤定宗、左門尉藤氏久、兩社行幸功、藤季

信、元右、左兵衛尉藤政泰、兩社行幸行事功、左馬丞藤業廣、八幡功、

右少將親季可遷左、左馬亮吉永、右馬亮義永可削召

名、先度除目自兩方申之、任左右、其身同人成功不成

終云々、權僧正實信可爲興福寺別當、本僧正辭退云々、臨昏又雨

降、風烈、宛如暮秋、初冬之天雲飛東南、昨今歟冬落

盡、

廿二日、甲寅、天晴、居所北廂西一間指令繼、未一點參

殿、陰明門院唐鞍被借進御覽之、役夫工辨有親稱輕服

寬政二年 三月

百九十六

三〇

辭之、姑云々、右少辨光俊領狀了云々、祭主能隆依病獲

麟獻辭書云々、其子隆通、

當隆末子、造宮正四位、隆雅、二男、現在、號之長男

望其替、隆繼申所勞已獲麟、以辭退不可有其隱、重服

者爭居其職乎、暫不被任者、即可終命、其後可拜任云

云、

頗有、理歟、攝津守兼直、少納言、

造住吉社依難勤仕辭退國、今年、今冬山口縣五年終功云々、

兼高等又給國可造營由申之云々、祭使事、依

殿下之權、大略成寄歟、尤有其謂、申時許退出、手振半

臂下襲、依輕微事、可相構哉山示了、

廿三日、乙卯、天晴、宰相中將入道、

雅清卿

近日在京、腫物

所勞及灸之由聞之、仍以書狀訪之、經範朝臣來談、嚴

父雲路事等也、午時許覺法印又來談、

廿四日、丙辰、天晴、巳時許詣相門奉謁、眞壁庄事、以宗

保入道欲示達、日來有所勞、夜前出來、仍今日欲示之

由有命、即參殿下、不見參即退出、仍念誦早出了、來月

三日殿下水田御方遊之間、又被儲事等多云々、御裝束

已下、

殿下大臣殿御料御鈕各被留之

御共人料水干裝束廿具、御馬十疋、

牛二頭、公卿定高、爲家卿參云々、予雖被仰可參由、行

步不叶、於事見苦、不堪旅宿不能參、

廿五日、丁巳、天陰、午後雨漸降、早旦與心房音信、去夜

半許殿下御不例氣、遲參之後無殊御事、無其披露者、

漸及午時、忠弘法師又侍重佐之訖、同前由云送、仍參、

大藏卿、前大貳、三位入道加其座、菅卿退出之後、出御

入見參、

無違例御氣色

又入御之後、右大將被參、又出御令謁

給、御覽御馬、

駿河守重時所進川原毛又栗毛御馬

又同人奉大將馬、川原毛、是有虎文、

遣召御覽之後入御、大將被參御前、即退出、大番武士

相替列居門前、甚嚴重也、

廿六日、戊午、朝少雨、已後晴、窮屈偃臥、靜俊注記讀孝

經、

廿七日、己未、天晴、申時許良方小雷數聲、午時參殿、大

貳參會、申春日社司等事、暫見參、入御之後退出、給源

氏物語料紙草子、老筆更不可叶事也、桐壺可書由被

仰、甚見苦事歟、祭使可出立三條坊門、

故左大臣殿御亭也

一昨日

大府卿消息、來月二日子息傳法灌頂俄有相違事營之

云々、近日殊雖無計略、平絹下品被物一重送之、本意

之由有返事、

廿八日、庚申、朝天陰、已後晴、早旦以忠康、又問入道相公、猶無術由返答、書源氏桐壺卷、老眼惡筆爲料紙不便、夕宰相來、白吉今朝密々見時氏朝臣下向云々、單葛直垂夏毛行勝負征箭、令持黑作劍乘黑鞍云々、可然郎從三百騎許、自曉前陣進發、自身曙後出、七歲小兒乘小馬扈從、馬傍令持手執云々、

廿九日、晦、辛酉遙漢晴明、已時參殿、前大貳大藏卿相共

見參、今日祭主事仗議云々、能隆卿依病辭退、順資朝臣奉行中替輩

隆通、正上四位、父所學、年廿四、若年無例云々隆雅、兄父、兼力隆□、同、隆繼、父病已獲

可有憐之山、宣經、二人非、親姓歟參公卿內府、按察、正亞相、定通、

大將三條實親、大炊、家嗣、中宮權、通方、權中、實基、定

高、賴資、經高、兩大辨被催云々、右大將被參、法務御

房參給、御覽御馬、予參其所、華厩御馬也、四疋各被馳

了、殿下入御、予謁幕下、於此風爐可、被治風云々頗及心事退出、殿

下御參內、御覽之間云々、兩卿在御前、住吉天王寺事

又有沙汰云々、久清兼廉被召、被仰祭使禰事、雖申子細

各領狀云々、北政所密々令參賀茂給、去年桂供御人西七條神人等鬪諍、奔松尾神與事、其訴訟可被對決之由雖有沙汰、各訴其所、官、藏人所職事信盛稱父入道病隱居、仁和寺不致沙汰、已欲及祭期、橫謀不忠甚不便事也、如此者依厚緣更無其誠、爲神事極有恐、

○四月大

一日、壬戌、日蝕、十五分、虧初三八刻、加時未、後復本未三

刻、雲膚忽起、雨脚纔降、辰時雨止、依陰氣朝間開北面

遣戶、已後暗雲覆大雨降、蝕不可現歟、仍上菰、及申時

雨止雲飛、太陽適見不虧云々、不及須臾雲又隔、自相

門送預三尺机帳之帷、甚以美麗、背地石疊文、紫濃薄文、自

彼亭被調進宮御机帳之次兼申之云々、先是更衣被送

之云々、翟麥衣、青朽葉表裏、二藍唐衣、上重二人藤、

雜仕若鷄冠木如形拂出云云、此後定術盡歟、女房昨日

多退出無人云々、左信能、右金吾親、輔、官言公雅等歟今日所々更衣御裝束

平座等不可有之云々、甚雨尤可謂驗德歟、一長者四長

者兼イ覺教、承之云々、寺法務御房又修給之由昨日聞之、後

寬喜二年 四月

百九十八

聞、無此事云々、後聞、依他^{跡道}不現^{同中}、夕有更衣御裝束

平座等、賴資、經高、家光卿、左少辨時兼朝臣、少納言

爲綱參、奉行職事範賴云々、辨少納言不參如何由被尋

仰、有親、所勞、親俊、重胤、爲經、灸治、光俊、役夫工奉行之

間、所勞更發之由申、光俊馳參、申奉行催朔日平座由、

日蝕若、現者、平座不候歟、一定可被行歟、重可承由申

之、後不重相觸、夕平座被行由、傳々承之馳參之間、遲

參有恐之由陳了云々、^{申イ}

二日、癸亥、天晴、午時參殿、一昨日仗議、內府、大納言、

九條大納言殿、中宮權大夫定高、賴資、家光卿參入云

云、多舉隆通、或舉隆雅、又舉隆經、事未功、定文大辨

當座書上了云々、松尾神人訴信盛奉行緩怠被仰頭、持

病發不能申沙汰由申云々、明日御方違、曉鐘可出御由

被仰、行宰相家示此由、即歸家、御供人右大臣殿同令

參給、定高、爲家卿、資季、實經朝臣、忠高、能定、兼教

朝臣、盛長、惟長、家盛、教行、以良、兼康、基邦等八人

參云々、夜宿南棧敷、^{四月}忠弘從者云、入道宰相中將今

朝逝去云々、雖逝界有狂氣、連七言書漢字、本性好奉

公、不耻仲由之緇袍、建保憐其勤召加近臣、後高倉依

在藩舊勞、已執奏者之權洛吏務之恩、恐日前之造營、辭

其國之後、逢晏駕之時、失厚緣之威、遂稱無出仕之計、

逆世住于多武峰太子御墓等、今度白地出京、見付腫物

不拘療治而終命云々、年齡五十歟、四十九歟、曉鐘歸、

三日、甲子、天顏快霽、牛童之說云、殿下曉更御出、御乘

船猶不及曙、他人遲參歟、宰相在御共云々、午時許大

學頭朝臣來謁、所望不許之由述懷、甚以不便、昨日伺

招客、猶無勅許云々、右京大夫送書、來八日下向湯山云

云、近日此事連々、宜秋門院備前局當時在彼湯、譴責

不絕者也、今日又書源氏、<sup>紅葉賀、不
能書終、</sup>

四日、乙丑、朝陽透雲、已後天晴、月輪殿入講、先々爲四

五兩日、今年爲五六兩日、<sup>兼高
奉行、</sup>書源氏之間、口熱發齒

痛、朽齒極弱、付亭如少年嬰兒引落了、

五日丙寅、自夜陰朝後雨降、未時天晴、<sup>西時又
甚雨、</sup>已時詣幕

下亭、冷泉、心閑謁申、宮仕女房每時節廻轉無其計之由、

可被申北政所之由等也、即歸廬、東風雖頻扇雨間止、明日又大相爲方違被向水田、右幕下被伴宰相并實經朝臣、同往來河上云々、下人等之煩、甚不便事歟、申時許心寂房來臨、示合老病事等、

六日、丁卯、天晴、風寒、午時許參殿、祭主事猶未定云、大藏卿前大貳列座、高三位申、遷宮之時祭主若爲重服者、可有神事違例乎、有先

例歟之由被問、季繼惟任各申例不詳之由云々、人々

云、水田御方違之間、去四日御覽住吉方云々、此事外

聞頗不可然事歟、如何、此宰相落馬云々、三日事也、聽馬之聞入松中、懸

技落云々、仗議定文左大辨當座清書上之云々、今日見之書

宿紙、口供書、小紙也、以懷紙書取之、

祭主能隆卿辭退替、以何輩可被補哉事、

內大臣定申云、官職之道被登庸上薦者承所々例也、

隆通朝臣爲上首受譜第、加以明君知士明父知子、能

隆卿多年內舉定有所據歟、下臈無殊功者、隆通朝臣

被抽補何事之有乎、於年齡事者、近代尊卑不謂老

少、極高官升尊位、何至此職可有其沙汰哉、其上不

知神慮、宜在聖斷、

大納言源朝臣定申云、競望之輩各抱道理欸狀之趣、

非無所據、但抽年勞被優譜第者、隆雅朝臣旁似帶理、

若又能隆卿子息補任有猶豫之儀者、隆繼朝臣當其

仁歟、於隆通朝臣者、爲位階之上臈、登庸雖無憚、去

年群議以同前許不日定在聖斷歟、抑龜兆之條、雖同

于人々議、神慮難測、猶可被搜淵理歟、

權大納言 藤原朝臣定申云、隆通朝臣雖爲位次上

臈、有弱齡之難歟、隆雅朝臣雖爲位次下臈、年齡徐

闌、校量彼是、被優長兄何事之有乎、父義絕事、如下

無父之文者、於祭主者、其父不能口入歟、抑隆通隆雅

等朝臣用捨、暫可被閑歟、能隆卿子息之中若被補任

者、豐受宮遷宮在近、其父病危急歟、新補之祭主其

憚若出來者、令從遷宮事之條如何、撰可被行哉、被

尋此例之有無、可被定其人之用捨歟、其外之輩拜任

之條、此事定畢之上可有沙汰歟、此上可在聖斷、

中宮權大夫源朝臣、左大辨藤原朝臣等定申云、如申

寬喜二年 四月

狀者、競望之詞雖盡子細、吹毛之難不足證據歟、但壯齡并父義絕事、尤憚沙汰可被落居歟、其外之輩或稱宿老、或號譜第、許否之間可在聖斷、凡祠官者、擇六十已上堪祭事之者可補之由、載在式條、守其狀跡、且簡器量、且依年齒可被計補歟、若尙及猶豫者可決卜者、於御卜者、不可依例之吉否、只可決其疑之故也、

權中納言藤原朝臣定申云、所望之輩所申雖區、隆通朝臣位次爲第一、而弱齡之條背式條、隆雅朝臣位爲第二、年齡已闕、而不義之條有疑、被尋經家可被決兩人之間、可在勅定、抑能隆卿依老病遁申官職、如付朝臣言上之趣者、舉隆通朝臣、似塞他人之望、同于去年議定之旨、頗可有沙汰歟、

權中納言藤原朝臣定申云、隆通朝臣年雖爲壯、就位次上臈可被補歟、且依上首被補之例、寬平以來十餘代、聖代者多、亂代者少、尤就多例可有沙汰歟、能隆卿義絕輩事雖有疑、殆背父命之條如何、如孝經者、

父雖不父子不可以不子、此文難棄歟、隆兼隆繼等朝臣者、縱有其理忽難超上臈歟、神慮叵側、宜被決聖斷、

寬喜二年三月廿九日

隆通內々勘申、遷宮之時祭主不供奉事、弘仁三年九月十五日外宮御遷宮、祭主諸人有障不供奉、宮司清持一人勤之、長保二年九月十六日太神宮御遷宮、守輔親爲代、又今度內宮時被下其山御教也、予所書源氏桐壺、紅葉貳、二帖今日進之、

少時退出、夜宰相來、三々日之間近習咫尺、殊以快狀、於御前盃酒之興以及醉鄉、今日猶參右大臣殿、忽給御牛、落馬事、所騎之馬老馬絲イ唐絕也、依沙厚不留得、入松中之間、依恐枝放鎧、而落之間不立得、馬雖落無殊事、耳邊被摺松枝云々、翌日依旅之次、可見海邊之由被仰、納言大物尼崎等名字異樣也、住吉可宜由申之間、微臣不及申止、其時着所被置之水干、已出御之間、馳入宿所着獵衣、納言本自若獵衣、殿上人以下不能改着、乍水干供奉、自江口之下赴渡部方三里許、歷覽住江殿、即還御、

其夜猶盃酒之興申行亂舞、昨日於舟中納言中、若君童
殿上之間事、自水無瀬殿前御輿、納言止之、宰相以下騎馬、
自鳥羽北殿北出東路入御月輪殿、猶御共、第四座之間
也、公卿六人參、行香了各退出、修理一人在座之間云
云、入夜入御冷泉殿之後退出、今日相門雖有譴責、僕
從疲無舟而隱居了、月入之間歸了、

七日、戊辰、凶谷、朝天陰、已後晴、午時許頭汲菊湯、此間家中
雜人瘡病多云々、甚以怖畏、

八日、己巳、天晴、早旦與心房被來、一昨日又參殿下談
身、昨今猶依仰伺候云々、清定朝臣來談、隆雅朝臣歎事
等語之、至于今年二月無義絕云々、如此說者、偏驪姬
立奚齊重耳夷吾無其過歟、未時許四位侍從來臨、脚灸
雖盛爛、爲逢信定朝臣行向云々、山神人來責、事次申
入殿下云々、是志深庄前預所行光所爲也、何理何非兩
不知、夜月明、

九日、庚午、天晴、巳時許參殿、兩卿在座、至于未時無出
御、日朧水驛退出、去五日月輪殿入講、九條大納言殿、

中納言賴資、參議伊平、家光、三位範宗、基定、殿上人四
人、同六日按察中納言、經通、賴資以下如昨日、七人、殿
上人四五人參云々、左府直衣乘輿、五日白地參入、即
歸醍醐給云々、今日二社奉幣、伊勢、石清水、上卿大納言定通
卿、使八幡、中納言盛兼卿、次官信實朝臣云々、祭主未
仕云々、猶發問人々歟、若君御昇殿十三日、扈從右大臣殿、九條
大納言殿、中納言定高卿、參議爲家、三位實有被催云
云、同日仁和寺灌頂、公卿以下自御室被申、仍被催人
人、無高奉行云々、公卿殿上人堂童子、殿人五位二人、前日公卿一人、四
位一人、同可被催奉云々、近日群盜殊蜂起、故隆圓弟子
僧都公卿公子、白川房亂入、又近衛佛師小姑、法橋と云僧妻被殺
害云々、清貧無從者、將奈何爲、

十日、辛未、朝天陰、已後霽、申時雷電猛烈雨降、窮居不
出門、雨不濕地、雲漸晴、黃昏、

十一日、壬申、天晴、病侵心慵、不能出行、眞壁庄下野、請
文事達于相門、可沙汰之由有命、巳時許經範朝臣來、
嚴父欲讓任所帶之由也、雖不得隙可伺之由答了、稽古

寬喜二年 四月

二百二

舊勞無事之恩、甚不便、

十二日、癸酉、天晴、辰時許清定朝臣持來八重躑躅、

自根生出

之枝也、巳時許參殿下、依御風氣不出御云々、

例兩卿傳之說也

奏之人不參御前、以資親達事、極不得心、不散不審、即退出向右幕下亭、稱念誦由不被出、以縫殿頭業綱達之、殿下御心地何事哉、極不審之由傳申、非殊事、夜前雖欲參、不可驚山被仰云々、即參右大臣殿、被仰旨又同、心閑見參、明日殿下雖無御參、若君猶可被昇殿、相具可參由被仰、予進孝範朝臣折紙、密々可進給由申之、時儀傳聚喧嘩之故也少時退出、依老屈假臥、今日此破屋地簷、依立二間小廊也、皆七八間加作合三間擬中門廊、中立其南頭爲車寄、妻戶西依略儀不塗壁、皆欲立杉遣戶、唐棟、夕立柱、打足固了、申時許式賢來、相逢言談移漏、入夜退歸、十三日、甲戌、自朝微雨降、已後滂沱、夢想紛紜、聊念誦、昨日聞御風由、今日尤可參、甚雨風交、車之昇降不堪老者、不能出仕、午時如形上廊棟、坤角二間車宿上假棟、依雨止他事了、或人語云、昔如大業年中盡海內

財力之日、錢神尊崇之餘、態被鑄金銀之新錢、及數萬、是若爲分賜銅臺之宮妓歟、然間國家忽滅、大軍入陣、後主失計之時、以件錢奉納于神社、祝師豈備于神寶哉、他收于私倉、近日買愛子之官、欲分件金銀云々、可憐寶玉歸人間、後王不知鑒前王哉、又云、隆通贖勞品、二鵝眼千五百貫云々、隆繼付兼教、隆通付有長、隆兼申北白河院、又云、承久之比、關東之海上引網、鰯魚頸切無身之頭不知數被引、人成奇之間、其後軍乘勝斬公卿以下頭之時、以之爲吉祥、而近日又引網、同魚無頭之身多被引、懲前事怖此事云々、源中將童殿上扈從有所役歟由有消息、建仁之儀大略注送之、雨終日不止、申酉時之間風雨殊盛、入夜雜人云、未及暗之間令參內給了、冷泉扈從公卿四人、殿上人八人云々、雨入夜止終夜大風、

十四日、乙亥、東風猶猛烈、雲赴西、朝陽漸霽、宰相注送云、昨日人々參集、右大臣殿、二條中納言、二位宰相中將、去年冬初參云々爲家、左大辨、殿上人九人、師季朝臣、賢季

朝臣、定平朝臣、雅繼朝臣、實持朝臣、改名實經也、實經、

賴行、能定、次御裝束、仲家奉仕之、殿下出御、被召其所可奉扶

持之由被仰、其後公卿着座、殿下簾中召忠高、召御名

字、大藏卿、被下公卿座、次第披見、實經、嗣通、右イ、各端御名字、普通殿山中

之、次以良置圓座、弘庇、爲仲置視檀紙一帖、取重、次召頭

資賴朝臣、資賴朝臣着圓座、右大臣殿召給御名字、歸

着圓座書之、蔭孫藤原朝臣、長德公書位之由在小右記、然而代不書位、本或可書、皆不書來、仍不可書

山被仰、書了進簾中、退召二位宰相賜名簿、可付職、次維

長敷圓座、此間爲家起座、進對代東妻戶、若君出給、奉

扶持着圓座、南面、次置雜具、紺器打、次召總角人、家季朝

臣、依此事、還昇、着衣冠參御總角了、公卿起座列立中門外、右

大臣殿、先若、自中門內出給、若君御筵定平朝臣、嘉承其雨也、殿上

人指立、右大臣殿御同車參內、令立弓場殿給、右大臣殿

令着殿上給、頭出無名門外、二位宰相授名簿、若君經

無名門神仙門、立殿上口給、下侍四雲戶、前、依雨也、頭申可令著殿上

給由、即令着殿上西間給、頭範賴着橫敷、藏人置燈、頭

取簡傳範賴、範賴奉書入、次右大臣殿奉具、自下戶令參

鬼間給、次經上戶南殿御後、令參宮御方給、良久被出御

贈物、御本裏、資家朝臣取次、退出入御富小路殿、御裝束

之次、見御堂御帶、御裝束、浮文赤色織物闕腋、文小、赤

色下襲、縮線綾表袴、濃打同單衣、糸鞋、御帶、御堂丸鞆

有文玉御裾懸左肩、陣中御沓、於御後令脫沓給、今日

若宮着布袴可有御參內云々、密相猶參、御共云々、頓常小熱其勢加

增、仍付鹿角、所勞不參由、示送維長朝臣許了、及申時

心寂房來談、一日嵯峨念佛、請聖覺法印、供養善道像、公

棟敦通以下入道成群縮坐、狹小之座之中、常覺弟子教

脫、一念宗之、長云々、入其中、座狹而不安坐之間、超公棟肩入道

場、人雖屬目說法了、件教脫禮讚無指事、法印退歸云

云、泰忠入道于今存命、病舛頗似付減、但七十四之齡、

衰損之身定難存歟、松尾神人雖遂問注、一昨日祠官巫

女雖參會、七條神人不奉送御輿、空不遂祭、昨日僅出

御輿如形遂祭云々、如此事猶可被致其沙汰歟、甚不

便、入夜女房退出、依憚御神事云々、

十五日、丙子、天晴、已後陰、月蝕、自亥及丑云々、甲斐前司資親

寬政二年 四月

二四四

三八

朝臣示送、叙爵成就之由、侍從言家朝臣子、五歲云々、清家可

令叙之由、自叙位之比懸望、全雖不可忘事、依本性之

火急每度隨責、雖不甘心、去比示付甲州、丁寧芳志之

由答之、告送侍從許、又欣感無極、其後見聞書、雜任頗

多、諸事成功云々、中宮亮資賴、大學頭經範、民部權少

輔親嗣、刑部少輔藤知輔、美濃守源道尙、左近少將通

嗣、不知誰人、正五下祝部成季、成茂子、此五六月、父奔走、如救頭火、從五下清家、

父忌、不及委注之、日徐暮雲珍重、近日佛法之靈驗炳焉

歟、小廊敷板敷、少々打長押、三位知家卿被示刑部少

輔慶、便宜可申入由度々、示付、再三申之、又自宜秋門院所被申也、年已三

十無一宮、又雖重代事、已及衰老無衛府之好、只以八

省輔爲本望之由也、入夜雲暗云々、但付寢者、終夜不

見之、

十六日、丁丑、曉微雨、朝後止、巳時天晴、今日小廊妻戶

遣戶裝束大略如終功、又車宿料材木等少々到來、夜月

殊明、

十七日、戊寅、天晴、午時參殿之次、以使訪連歌禪尼子

思病之處、前兵部定俊送書狀云、禪尼一昨日他界、自

六日受病云々、浮生雖不可驚悲而有餘、暫伺候入見

參、自昨日咳病復尋常之由被仰、松尾西七條神人桂供

御人等訴、自去年于今相論、遂於記錄所遂問注、供御

人可進下手由被仰下、御厨子所供御人沙汰者、刑部丞

と云者不進下手、仍被付使廳使之間、件刑部妻語惡、

遠江守朝臣子武士令退散廳下部之間、自公家被仰重

時、又以武士被追件武士、武士搦刑部妻賜下部、令責

出下手人云々、今日北政所密々御入內、師季中將御共

可御九條殿、新姬君令奉具給云々、今夜御方遠行幸別

當家云々、相國又明曉水田方違、宰相實持中將等又被

召具云々、予退出、今夕立車宿二間、柱上棟、今夜宿南

棧敷、開曉鐘雨又落、乘輿歸入之後、漸以濤沍、

十八日、己卯、自曉雨降、終日不止、依恐小雜熱不行水、

夜前行幸、大納言雅親、家嗣、中納言具實、參議爲家、

三位光俊、顯平、親長、成實、參議實世、左將師季、資

季、實經、資俊、家定、實任、教房、氏通、右有教、實蔭、

兼輔、伊成、隆盛、親氏、賴氏、衛門信盛、範賴、右兵衛高賴、少納言兼宣、入御之後宰相退出、即幕下相共夜中乘船、相儲鳥羽云々、及乘燭女房歸參、有弘、有共、

十九日、庚辰、朝天清明、辰時許資親朝臣可早參內之由

示送、巳時參入、依咳病不出、可參東面之由被仰、仍參

入、抑無指仰經高卿消息給、見之、舉中經氏年預三枚委細狀、仰云、父

子共非其器量、於事分明歟、但又自讃毀他之詞、視

聽事披露所々、其心操頗不穩事多歟、去春伊平卿云、

左府已辭退、右幕下升進近明歟、九條大納言又依難

超哉、殿下御禪讓、右大臣可令辭給、納言關數多歟云

云、事已重事也、開口甚不便、如此事京本性歟、於愚意

者被召出之上、不可依官之有無、老者所望不便思給由

申了、右幕下又被申此由、於華廐者一昨日被仰親氏了、祭主同一

昨日隆通被仰下了、能隆卿存日舉申、位階第一者當時

之道理異他歟、此條實以今者力不及事歟、宮中每事凡

弱風情已盡由被仰、新制可有歟之申由之、次予申云、

代々新制宣下事多不吉候、只內々可被止之趣、雖非上

卿宣下、上不可好思食、乖御意之由被洩仰者、楚王細腰自然靡然歟、雖被下制、內々御氣色、權門之存知、不同之、披露還劣于無制歟之趣申之、治承三年八月新制、十一月天下大吉事、建久二年冬新制、三年春又以有事、建曆雖無其事、被下制自翌日被破、全無詮候歟由也、入御之後即退出、夕源中將被枉駕、清談入夜被歸、

廿日、辛巳、天晴、未時參殿、右將軍御對面、右大臣殿令參給、龍蹄等御覽云々、事訖入見參、大藏卿大貳共日薦、幕下猶被坐之間、予窮屈退出、宰相自晝來云々、水田座還無殊事、蒔繪壺依三位入道消息借取之、祭間近衛舍人等小要事等多云々、久清、兼康、稗風、廣澄、流、馬

廿一日、壬午、朝天陰、已後間晴、午後又陰、右武衛消息次云、治部卿着冬袍連日參內、近衛司之中着冬直衣參內云々、上下無其咎、陵遲不足言歟、予以愚狀申殿下了、承久之比範基四月冬衣冠參、勅定即被着改、建久

寛喜二年 四月

二百六

四〇

上品被仰出更無所忘却

七年宗經着冬直衣參内、親能見、遂失前途、實時四月冬

束帶勤陪膳被除籍、如此事尤可被禁遏歟、甚奇怪、以

事次可被申之由被仰、盡送三位入道許、祭使手振半臂

下襲十二具、

青朽葉半臂有志、下襲、引帶、裏生絹裏、一襲也、

入長櫃、數鐘、

忠弘法師調進、

今年用宣和、先々下品組、非國組也、

即送使少將許、若難用

者爲調改可有人煩、仍兼日送之、他行之間家人註付慥

請取由、左兵衛尉藤親說云々、其後雨徐降、不濕地止、

少時送返事、殊美麗云々、

廿二日、癸亥、朝雨止、天猶陰、迷歌尼他界之無常、年來

數奇之執心尤有追善之志、於彼中陰之際者、人頗有所

思歟、勸進依無心可猶豫、極熱又於事頗多、八月彼岸

十四日日次宜、或列迷歌之座、或有好道之志之輩之

中、勸進結緣經、於年々翫花道場可遂供養之由、昨今

示合覺法印、石火之身雖不待其期、所示置猶可被勸進

由今朝誂付了、未時許新少將以使者示云々、手振下襲

左近猶用青朽葉歟云々、此事領狀、極以後悔、去上旬

之比參殿下、以良朝臣持來祭注文、件注文自殿遣按察

許、令檢知之處、件注文に半臂下襲二藍と書たる傍に

青朽葉歟と被注付、此事示合予云、左近用青色事見及

之樣思給之上、時之有識之說、定有所被存歟、因茲下知

可染青色由調送了、而今此間無慥所見、甚無由、示送此

子細了、以書狀尋申按察、返事云、歟息心勞之外無他、

如此事皆以忘却、文書又紛失、被尋問之條甚無由、但

右近中將忠季雖宮使、猶爲右將令着二藍、右近少將成

經又令着二藍、成親卿雖非權卿、如此事定致沙汰歟、但

青朽葉由申ども不覺悟云々、甚不分明返事歟、忠明朝

臣云、此事甚不穩、所被申不得心、先年公俊左、令着二

藍、我又左、二藍也、被注付之旨如何云々、如此違亂事、

雖彼卿說、已以爲身上事、不運之餘也、仍雖入夜、此子

細示送以良朝臣許、

廿三日、甲申、終夜今朝猶雨降、朝猶示合、以良朝臣返

事云、昨日不知案内、青侍不申亭主他行之間、所申案

内也、按察被申旨顯然、不可及不審、所被調之體老尼

等見及、殊致信給也者、如返事者無違亂歟、陽景間見、

急雨或降或止、車宿葺上欲打長押、頗難熱腫、心煩不出門、夜雨降、

廿四日、乙酉、朝天晴明、入道賢寂東洞院東如形儲棧敷云々、心神甚雖嬾、依無外人欲假臥、午時以前向棧敷、人々多來坐之由告之、愁行向、一條北、高倉西、非角、依大路晴入高倉面小屋融之、以同車迎冷泉女房、相具侍從小兒等來、此向有兩源亞相棧敷、東定、向正方有使少將緣者云々、法務御房御座忠行卿棧敷、高倉東角、午時許渡給、車六七兩、今日使共人催遣殿下近習侍五人云々、右衛門尉成季、近習無双、故光季、後白河院近習、俊一子、俊親、故親康男、駿基成清成等一服、左門俊清、後白河院近習、俊一子、俊親、故親康男、駿基成清成等一服、子、親直、不知其人、妙音院口子、兵衛宗澄、宗久、午終雲俄起雷鳴急雨、假屋漏濕、不及一時雨止晴、雨以前以雜人令見、新藤中納言賴資、此宰相殿上人兩三在出立所云々、雨止之後、少時未斜看督渡、左十六人、右十五人、府生爲國渡、下部付、牡丹、頗中絕、志安部信安、下部風流、和草、次山城介渡、堀銅銀、紺地平結、馬副四人無他從、此間女使出車三兩、自北東洞院ヲ南二過、不知其由、次標外居、蘇芳狩衣男一人、卷纓六位

三人渡、若內藏、次尉一人、不見、下部裝束、咒師物具散杖鈴等也、次一人、明法博士、童白張、雜色槿、下部、雜色草切、不知其由、

次知重、童白、下部矢はく、具足云々、膠小刀等、次五位

基綱、時拾野、童白、雜色槿、下部檢非違使車具、之類也、次

行兼、童白、下部様々等懸衣、女房裝束、次藏助、馬副四

人、雜色三人、白張、無他從、次使車黑牛、牛童赤色紅打

黃單衣、二、簪簪袖大蝶、簪、簾竹林有虎、此風雨頗不甜心、次中

絕、久而又車來、馬助車云々、長物見、透、童赤色山吹

打白生、車牡丹付打交指繩、件車袖浮線綾丸上千鳥霞、

物見卯衣、簾松藤、次馬助渡、大面肥滿舍人、虫襖、童

萌木、簪簪、二人、上結如、雜色二藍、山吹袖付卯花、笠上

有牡丹、皆着よせ布、美麗歟、經時刻御琴持、琴柱裏、退

紅仕丁人十三人、上、芳狩衣恒例也、今年尋常移馬鞆美麗平

鞆也、次近衛使觀兼廉、唐綾袴付傍棕鳩、幸相調、武澄、

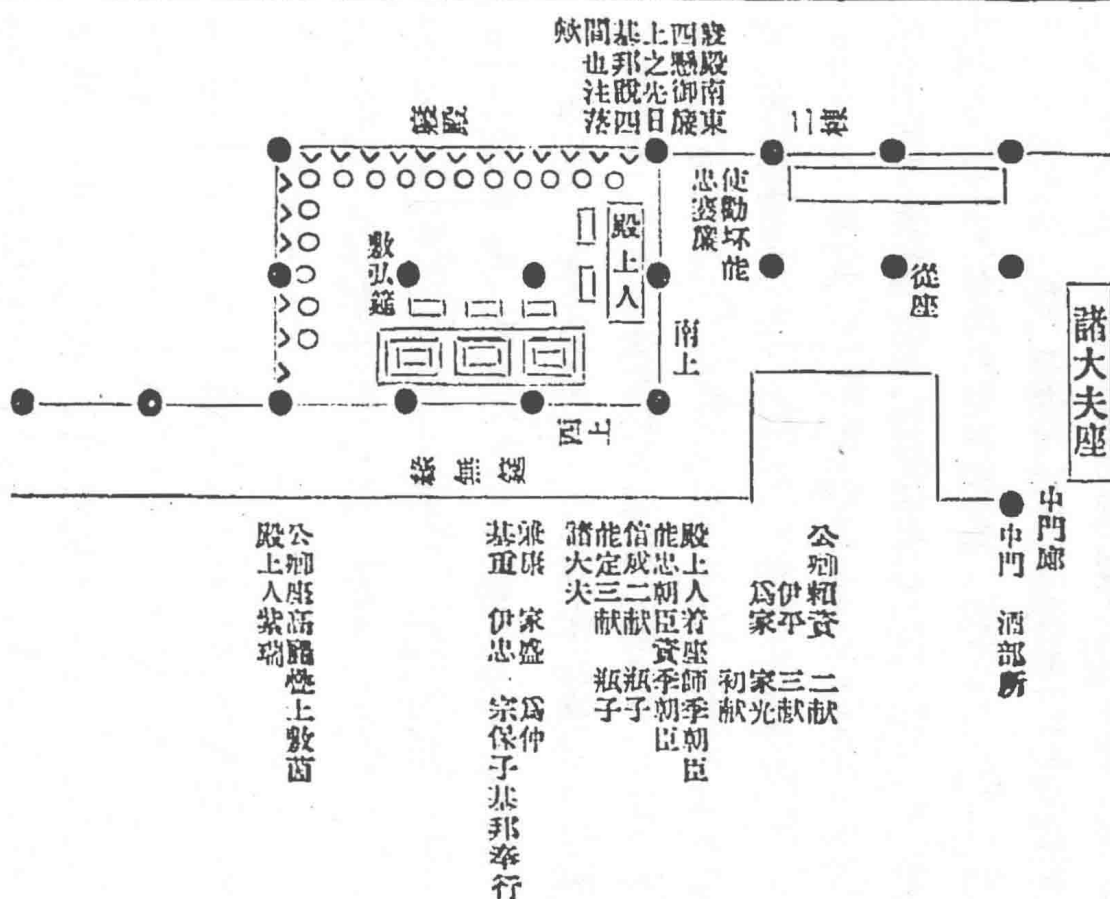
付銀、舍人虫襖、每物付簪微大蝶、馬副八人、袖有村浪、蠶

繪二人、袴付同物、手振十二人、青半臂手振皆懸裾、

依雨地、引馬廣澄、白襖付手鞠、武信子、衣帽、虫襖付扇、童

二百八

不忍云々、北白川殿當時葺、只隨時儀耳、上代花山院



爲第一出立所、建久兼宗卿承元忠明朝臣、雅經朝臣庇徹

簾、建久七年大宮亭、親能卿時徹之、建保六年盛兼朝

臣又不懸之、已上其人、願存歟建保二年家兼懸之、不限此一事

散々不足言儀也、同三年範茂又徹之、但以二棟儀用寢

殿、不可馮之儀歟、文治五年六條堀河亭、成家卿端懸

御簾上之、故左府自被見行之後、家說多懸之歟、此外

雖見不注付、又忘却、

廿六日、丁亥、朝陽晴、晝間陰、夕漸晴、午時許扶病參冷

泉殿、重房、兼廉、菅長重、菅高長等取置雜文書、明後

日廿八日還御室町殿云々、無出御之氣、付重房進入源

氏一帖、夕頗、忠明中將所書也、暫雖安坐無見參之便

歟、心中甚苦、即退出了、

廿七日、戊子、晴明、宰相明日季御讀經定參之由示送、

近日法師兵具禁制、惡僧多擲取、爲河東沙汰遣關東云

云、雖一旦可謂大切、但惡徒之富者、定帶兵具而安堵、

貧法師當遠行仁歟、未時蛭飼齒頤、手振痛示合心寂房、

廿八日、己丑、朝天陰、辰後雨降、季御讀經定延引當日

云々、近代萬事當日定、無供奉諸司之故歟小廊今日爨棟、以雨驟終功、夕以

下人令伺殿下、還御一條室町、殿云々、

廿九日、庚寅、朝天晴、午時許覺法印來談、去十二日灌

頂、公氏卿、受者、養父師季朝臣、經賢朝臣、時綱朝臣參、

師季一人取布施、二人空退出十三日家良卿、自此春參御室、若內々、被仰儀歟、不知其子細經高

卿祭使、去廿一日參入、申隨身祿、近日寺中殊催盡之

間、錦被物御綾各一重、綾五重被遣之云々、未時如一

昨日蛭飼、今日小廊立妻戸削板敷、車宿立東、依明日

欠日也、

卅日、辛卯、欠日天快晴、昨日季御讀經初、當日定眞壁庄政所

女御、下文、中宮權大通親氏、一人則當加列自相門賜之、即送宰相許了、明日

西園寺故亡室千日追善一日經六部、并弟姬君被出家

云々、後聞、御讀經定、右大辨參、仍舊定文右大臣殿、權中納言、富

小路中納言盛兼、新藤中納言賴資、侍從宰相、右大辨

賴資、範輔卿在南殿、四人在殿上之間、卿持病發由稱

之不着御前、三人著坐、南殿事了大辨早出、賴資卿加

行香、兩頭、師季、有教朝臣列之云々、此納言常目眩轉

寬喜二年 五月

二百十

四四

心迷持病發、依據此事發、仍不深揖云々、少年之人有持病、末世之令然歟、仁王會季御讀經供米年來被切付越前國、至去今年不懈怠、今御時被立替其所、荒野、已以斷絕云々、後日行事辨時兼申聞了、

○五月小

一日、壬辰、天晴、夕雨濕、午終許參室町殿、高三位參會、資親云、殿下北政所昨日御參內、今日還御之由承之、中宮御風氣云々、不聞及、至愚歟、與三位暫言談、去廿七日山階寺別當參給、依仰參詣申聞、殿下御對面、應從僧綱公儀無他人云々、甲州之外無人、明日北政所春日御參詣、三位御共云々、此事頗似無間斷歟、前々御時無此儀歟、自然有人煩歟、住吉天王寺相論事、今日可有沙汰由粗雖有其聞、殿中寂々、三位退出、即歸廣、二日、癸巳、天晴、午時許三井寺法印來談、自一昨日在京、明後日歸入、弟子小僧通大峰、籠那知之由相觸之後、委不知其所行之間、融峰之間、其所行例人之儀、殆不隨同行先達、又於那智無行法事、只以游戲爲事之間、三百日許之後、腰損有腫物、受病之後、尋聞播磨船行志深庄、數月病惱

終身、偏是冥罰歟、死後聞此子細云々、彼入道之子、名號皆以如此、極奇事也、依門徒之勸勵欲申僧正、如何之由示之、僧徒之習以器量立身、已爲法印之上座滿七十、於所習有何難乎、今日於殿下、住吉天王寺訴被召問云々、普賢寺禪閣出京給云々、不知、初月有光、

三日、甲午、天晴、午時許參殿、即見參、大藏卿御、昨日住吉天王寺之文書已委了見、仰含其理之處、各無辨申之旨、大略卷舌退出了、重究文書之道理、可宣下之由被仰事時於延久之被沙汰此由說歟、長寬仗議以下不被見分也云々、其大意、四至之習、東限某山西限某郷ト書ハ、某郷ヲ隣ニテ其堺過候ト云也、而各限ト云郷ヲ稱自領之故、此論出來也、兩方ニ有此郷、即一郷爲公領、在社寺之中也、此由也、理之、所當可然歟、且又住吉所持神代記口而、可經御覽由被仰云々、有長朝臣雖未平癒出仕已二度云々、語自初之子細、移時刻、各候御前、手頻示猶可慎由令退出、北政所昨日御參詣、今夜可還御、最勝講來十六日云々、酉時許退出、昏黑宰相來、自吉田殿、昨日依召參殿、社寺之沙汰訖之

後、於西殿之泉屋有杯酒事、殿下渡御、右大臣殿、右將軍、大相參加給、此間連々、各聞快然入興之由、於被召加、而目本意也、定納言之家中之儀漸及貴所、定招傍難妨公務歟、舊例皆有之、然而古與今異也、高祖蕭相未定漢律、曹參尤可被勵德政、付視催嘆息了、自相門送給菖蒲拾重織袴等、及丑時乘車出要路、聞曉鐘歸入、五月中、

四日、乙未、天晴、今日殿下御覽法成寺云々、午時許尋寺邊、下人云、延引來七日云々、或睡或起、永日空暮、日入之後大炊御門三位^{範宗}、^卿、枉駕、清談自然移漏、去々

年十月遭母喪之後飲水、病每多發、此間有其隙云々、過夜半歸、久安坐、老屈難堪、

五日、丙申、朝天陰、已後雨降、終夜甚雨、自宮賜雜仕裝束云々、^鹽、每物非私力、貧家耻也、身屈心慵不出、沐浴偃臥、雨夜心神殊惱、昨今不食殊甚、

六日、丁酉、自夜甚雨、未時漸休、心神猶違例、不食無力、云雨云病、無步行心、

七日、戊戌、自曉雨又降、未後漸晴、又陰、夜雨降、心神聊宜、腹中猶苦、

八日、己亥、自夜雨降、午後間止、陽景不見、今日依所勞不出仕之由示送惟長朝臣、念誦窮屈頻睡眠、宰相又參右大臣殿云々、例事歟、及夜景不出云々、後聞、翌日退出、

九日、庚子、自夜雨降、未時天晴、又急雨、夜月明、法務御房母儀日來參籠賀茂、今朝被借車、仍奉之、^{讓雨皮}、^{令持綱}、參月輪殿、及日入歸來、

十日、辛丑、朝天晴、昨日猶有熱氣、仍齒飼蛭、早旦高倉殿借車、今日入嵯峨被始例經云々、入夜宰相來、左右幕下之近習、世事不聞及云々、是只醉鄉歟、非愚老之所欣、

十一日、壬寅、朝天晴、午時雨降、終夜不止、宰相示送云、去月所預三首題、^{相門明後日之}、^{由被注題典}、延引其期不作歌云々、

病中甚爲悅、今年至于今日涼氣、未著帷、頗爲奇、自今日服藥、心神又違亂、大宮三位音信、有損手事、女房又

寬政二年 五月

二百十二

有病云々、

十二日、癸卯、朝天猶陰、陽景間見、午後雨降、申時許宰相來、參持明院殿入講云々、連枝納言二人經高卿參、昨日公賴範輔光俊卿云々、前參議一和尚存外事歟、脫束帶著直垂參吉田、日々夜々只酩酊歟、彈極之梗斷幹索、非木之鋸、漸靡之使之然也、耽酒言之人其身不全、歎而有餘、時儀又不可逃、齊桓好紫、誰知鮑肆之魚悲矣、

十三日、甲辰、終夜今朝雨降、午後天晴、夜月見、終日偃臥、入夜以宗弘訪後高倉院四條局中風病、近日俄中風之由、狂聖九一昨日語之、今年七十九云々、昔八條准后家稱南御方、執權、知盛卿愛而爲妻、後參七條院、治部卿局、奉養後高倉院、自西海歸之後、上四門院宣旨爲御乳母、承久三年之後又執權、近年手珍、近日片身忽不動云々、息女黃門示返事、但家中管絃之遊云云、大理、

十四日、乙巳、朝天晴、未時許又蛭飼、日來雖有障過之、申時許大宮三位托駕、稱病雖蟄居已來臨、不能遁避、愁面謁、參

殿下退出、

殿下令參持明院殿御入講、宗、平定平、賴俊御共云々、

近日東一條院侍所有

落書、九條邊凶黨衆會、相議可入兩女院御所、基定卿兼

教朝臣等家之由、甚不便由云々、殿下雖聞食、當時無

殊沙汰歟、

廣事卿、

是舊惡運物國朝、當時居住父宅、同所、又

業清入道宅、如然物集會云々、於落書者定高卿尋取了

云々、國朝群盜之條、年來世以所識也、依忠信卿家人、

往年無其沙汰、今爲雅親卿前駈云々、入夜謝遣女房、

今夜退出、

十五日、丙午、漢天遠情、申時雷電猛烈急雨、明日最勝

講、可被行僧事、剃頭者馳走、大僧都少僧都法眼悉望

法印歟、

無例事猶申之、況有院事乎、

云除目云僧事、絕望者只貧翁父子

歟、誰人加詞哉、沐浴之間不運法師來、不逢、未糾宰相

來、

明日出仕云々、

空體房異弟子以任算法眼書來、予依所勞着

帶、宰相令謁、

予在殿中、

先師遺跡事、故入道殿御時寄置御

祈願所、仍重申入殿下之處、被下御教書、親房、即依不當

論人、又殿下變改御教書、剩被召返前御教書、不聞食

候、兩方理非難治之由陳之、早以法眼書可觸二條中納

言由相示了、返掌御沙汰甚僻案也、宰相行吉田云々、
病翁盤居尤有便宜、愁交衆於事無益歟、入夜月清明、
女房歸參內、最勝講之間、殿下北政所若君皆可令候內
裡給云々、令參昇上御座禰給、御共女房官掌五人、上
郎二人、御座殿、冷泉殿、宣旨宰相相指几帳、權大夫中郎、檢重、
非口、來者、物具張袴、此外近習之輩只著生袴、參否隨便、且是又非公用之故也、殿宜旨近日稱病不參云々、夜前令昇御、候共之
後退出、明日殊早速可參之由有兩方仰事、仍念參、當
時聖代儀、御膳每日二度之外摠無此事、不供御酒、侍
讀之輩參時必召御前、時刻、秉燭刻限之程暫有御書、疑是
御座此等之外偏御北御方、親疎遠近之如形、況下劣者
不被召寄、於被召仕事ハ、天氣極快然平均、如蹴鞠事、
時々雖有御覽、凡不淫萬事、喜怒不形色、但又知食人
之本性歟、臨老病盤居之期、聞聖明之德化、先拭感淚、
十六日、丁未、朝天還晴、夜月又明、最勝講始云々、黃昏
之程、正親町東洞院邊有聞諍事云々、一條相門侍少許、冠者
欲搦逃亡從者之間、當時在所之主從等出逢之奪留之、

刺欲凌礫其身、負手無爲逃去了云々、
十七日、戊申、天顏快霽、未時忽陰、微雨灑、即晴、午時
許右兵衛督被過、依心神殊惱不能謁、乍立被歸、左右
手腫逐日增、是只中風之故歟、行步又近日殊違例、如
不蹈立、夜月暗、夜雨降、
十八日、己酉、自夜雨降、或止或降、未後風猛烈相交、
及昏黑之內大雨如注、間雖休止、雨脚不異飛礫、已及
深更、方違雖滿、不能出室、默止了、更可宿本所、
十九日、庚戌、簷溜未乾、朝陽初見、及巳時、又雨降、桔梗花初開、
今年終日雨降、或止或降、夕雷電、終夜雨如沃、
廿日、辛亥、自夜甚雨、申後雨休、入夜又降、雨止之後幸
相來、最勝講之間三々日參、初日殿下、右大臣殿、二監、下殿、
大納言定通、右將軍、中納言通方、實基、具實、盛兼、參
議隆親、經高、爲家、家光、出居師季、宗平、資季、顯定、
唐鑑東、例、堂童子忠高、宗氏、範賴、能定、夕座少々退出、
色下殿、經高加著之間、右府即起座、令行賑給定給、平相公不得
速立下座踰居、過給了退下、嘲諸人之失、又振舞山、人云咲云々、家禮於事如此、其時

可早出由示、仍著其替、其日殿下、右大臣殿長押突膝
有、令著給、定亞相、右將軍乍立昇長押座、自余又如此、此女房
望見、上郎突膝事歟ト申、勅云、さなき人も吉突膝、申
云、サラバ大將ハなどたけい高くてと申令咲給之後、
爲家參著之時突膝、いかなようわざまぞと申、又令咲
給之由後語云々、此事年來様々奇思之處、令仰聞之、
自寶子昇長押之時、予乍立不昇、佛名弘應又同、殿上又同、可然之人
師經公等皆乍立昇也、說々歟、定有習機歟、第二日、大納言雅親、基
家、家嗣、中納言公氏、經通、定高、基良、經高、家光、範
輔、親長、殿上、不來、其日基良上服著之間、進上戸之内、頗望
見還座恒事也、經高七人安座候、昨日も座可令著給之
由頻勸之、中將心愚又尋常之人也、憑其說又起、無左右
出上戸、上服不動之間又歸來、被詐于腹黒失錯之由人
人咲云々、太無由事也、初日行香不足、資賴立小板敷
之下、稱行香不足由、經高密語云、催行香不足事、貫首
五位職事有替目歟、今無之云々、是於小板敷可觸由
歟、於如此事は、雖不可然隨便歟、資賴又何不習傳哉、

只依吐人短也、第三日、右内府、定通、大將通方、高實、
具實、爲家、家光、出居宗平、資季、有教、通忠、二藍下膝
青染平緒
縫殿
卯花、實清、夕座中將退出時、資俊、家定、實清、伊忠
著、左光資、宗氏、右定具、經俊、其日不着座、右大臣殿
令退出下給、見之追推參、殿上人諸大夫一人不候、獨
身御坐之間、參入召求人、每事奉仕殊以快然、事了改
直衣、令參上給之後退出、第四日、雅親、公氏、經通、國
通、賴資、基良、經高、爲家、早出、親長、殿上、不台、經高以主
殿司請親長、又云、着殿上も大事也、可見其作法云々、
此人爲召人腹黒、爲子孫如仰如此事、可慎事也、殿下
一昨日御風氣御退出、今日頗可無人由頭亮稱之云々、
無凡僧講師、可彈指之世也、房々禪師給講師、清資任
僧綱之故也、今日又如此歟、
廿一日、壬子、朝雨止、天猶陰、午時許大風雨灑、夜前鴨
水溢、人難渡、今朝脫衣下人等云々、昨夕渡水下人勘
解由小路川原邊融、盜中栽物前殿大
衛舍人、路人花山院家人
衛府從者、聞許、
件衛府甲冑雖出向、村老等出逢、不及大事而散云々、

入夜僧事僅及見、大僧正良快、權僧正圓玄、大僧都三人、少僧都七人之內、全益、見知者也、律師八人、法印四人、快難宗源宗全知之、法眼五、法橋六、威儀師其字不分別、東寺灌頂行清、除目任人去年雖減員數、僧事容體不異去々年歟、源內府申行僧事、故入道殿下披開書、律師之官掌八人一度任、勝事由被仰之、今度又同、

廿二日、癸丑、終夜猶微雨、朝天如止、未時暫晴、未時許四位侍從來、自十四日御入講結願、出仕由云々、語云、今日

參殿下、無殊事、頭亮足大指有損事、不着機猶出仕云云、足事頗有恐事歟、最勝講之間無勳堂童子者、高長一人不領狀云々、中宮權大夫消息、五十首和歌十卷可合點由詔示、奉養皇子十三歲、令好歌給云々、如此事頗進退谷、定有無心事歟、陽景不快晴、日暮了、

廿三日、甲寅、朝天漸晴、有霧、非時歟、朝間灸左手頸、依手腫也、右

手同可灸、依足不立、非時物は不得立、仍不灸右手、陰雲初霽、暑熱忽催、今年之夏未煩熱、今日已難堪、今夜始離外掌燈、

廿四日、乙卯、曉月晴、朝霧發、鷄鳴頸依身體之痛眠早

覺、坤方有火光、隣里寂而無音、扶起望見、火已經程歟、雖遠方角依不審、以下人令見、自一條大宮歸云、大宮以西火也、雜人說、嘉陽門院亡云々、末代適作透波殿之家已斷絕歟、是京中之運盡之故歟、定無可遷御之所歟、僅以彼亭爲御住所、年始不改御廳敷設之由、年傳聞、忠信卿入道、又自春在京、居住彼御所北故左大臣殿裏給彼屋、之由、一日聞之、榮華之遺跡滅亡之時歟、見火之間天漸曙、鳥鳴、此間頻電小雷、朝陽晴、已時許洗頭、頗潔齋、未時許宰相使者云、殿下北政所渡御泉殿、吉田、女房黃門、可奉招引由被仰、八葉車可借給、即送之、承明門院黃門來臨、彼御所雜人等夢想重、頻可令避給雖有沙汰、依無其所、亞相不受、被行隨分御祈等、當時不令移他所給、殿下昏黑還御之由傳聞、

廿五日、丙辰、天晴、午終急雨、三度晴陰、午時許行寬法印來

談之間、雨忽降、少時休止之後歸、餘風來、是只雲路吹舉之隨賣也、入夜宰相來、自吉田相門以下騎馬還御云々、昨日午始許俄

有召、仍直參泉令洒掃、少時殿下大臣渡御、次若君女房、

寬政二年 六月

二百十六

御車、次北政所御車、親季被迎黃門參入、大臣殿令寄車御、北政所御殿中、

實親妹局

與權大夫二人參入、實持、中將、親季、兼敷、惟長、侍成

季之外總無他人、納涼快然、昏黑先被送女房、次又女

房還御、次殿下、大臣殿、依召與實持參御車、自一條殿

退出、兩人共近習快然、尤爲本意、但非愚父之舊好、相

門所緣之上、若無多言披露之心之故歟、或老女房近日

安事不穩之由、大臣被仰云々、法成寺事、知宣朝臣忽

奉行、不日寄材木且被修理云々、忽殿中之德政也、欣

感云々、夜深宿吉田、本所、聞曉鐘歸、

廿六日、丁巳、凶會、天晴、脚病聊雖以宜、自此上旬衰損加增、

脚如折不得立、雖不可驚又足悲、暑熱盛、

廿七日、戊午、凶會、遙漢清明、黃梅漸落盡、云花云實只見盛

衰、永日空暮、

廿八日、己未、凶會、天顏快晴、午時許宰相來、自右大臣殿退、出、參吉田、爲改

裝束也、不聞世事、

廿九日、庚申、天晴、大谷齋宮御春日京極之由、心地房

告、依金花開、令立給

○六月小

一日、辛酉、天晴、午時許但馬前司朝臣來談、良久清談、

又借拾遺參、本イ、右少辨取籠之間、以女子本借之、不食之心神猶不宜、

二日、壬戌、天晴、雖土用依非犯土、葺車宿拾皮、依非

重復日、雖有出門之志、心神猶不尋常之上、足病猶不

能行步、仍徒消永日、

三日、癸亥、天晴、未時許大雨雷電、即晴、爲祇園神與每

年行幸、今年右大將亭云々、又被盡海內財力云々、當

今之叡慮雖未知其可否、人心習前事先經營之、權勢之

輩吐握斂之詞、何日休民力費哉、近日幸清久在京、宗

清恐祭主之傍例云々、

四日、甲子、天晴、未斜又大雷雷鳴、午時許覺法印來談、

仁和寺中雜人傳雜說、可有任大臣云々、未時謝遣、行幸之間

沈澁之類已下被申、凶、昨今宰相送官氷、心神違例之餘、氷又

郊、無其實而馳走、不似年來、頗無其望、昨今車宿葺拾皮了、依土用不裏

棟、

五日、乙丑、天晴、未斜雷鳴大雨、申終天晴、賀茂祝村孝

頻來、總管先例有限社領不宛付祝役、莫大神事難勤之
山流涉云々、天下第一不運者歟、訴厚緣人、病者聞而
無益之由答之、厚緣之人只耽賄賂、不知貧者之歎云
云、酉時許八幡權別當法印宗清俄來談、幸清濫望及仗
議之由、一昨日聞荒說、逢定高卿之處、極虛言之說云
云、女子被召中宮事示合、夕退歸、一昨日有條事定云
云、

六日、丙寅、朝天晴陰、已後雲暗、未時雨降、入夜宮女房
退出、探御神
事云々、

七日、丁卯、朝天晴、未時許右馬權頭來談、移時刻夕歸、
修理亮時氏於關東受病、大略如待時、京畿馳走云々、
此家猶可有事歟、尤不便、昏黃又雜人云、相模四郎時
房朝臣嫡男有事終命之由巷說、物念云々、

八日、戊辰、天晴陰、午後少雨間降、不濕地、昨日事問宰
相、修理事有其聞、相州事虛言歟、昨夕河東從等聊圍
評、依此事有走者歟云々、今日聞、非時房子、義村子號
駿河次良、年來在京、
泰時號、去月之比下向著鎌倉、不經幾程、今

度自京、初發、相具從者、天曙夜警者悉退出之時刻相親殺
害、自身即於其傍自害云々、專諸荆卿之勇誰人所語
哉、時氏又死去之由、夜前聞巷遍披露云々、大谷齋宮
尼戶部來、彼齋宮女房伯卿妹、百家、
拙妻、年來有濫吹之聞、
自去冬爲伴駿河、次郎從高江次郎之愛物、去月相具其
夫、下於越後國云々、

九日、己巳、天顏快晴、巳時許宰相來、駿河事去比狂說
雖流布、相門邊已爲虛言說云々、武藏又既聞獲麟之
由、未聞事切由云々、近日無指事、一昨日可有百首歌之
由有殿下仰云々、題如治承、一題五首、每月十首可請、
作者大略、女房、右大臣殿、九條大納言殿、右大將、高
倉中、經通、二位宰相、伊平、侍從宰相知家、範宗、兩三、
位、行
能、信實、家長、有長朝臣、光俊、兼高、親季、隆祐、中宮
少將、同但馬、題治承之內、止爲加暮春、秋、止草花加早
秋、戀、止初遇、
加怨戀、雜、止神祇釋教加、
山家曉望、老者恩免可謂幸、前宮內
定所望歟、傍若事也、備後前司來談、幸清在京依、
願望也、伊平和
歌未得其心、是宰相所舉歟、堪能重代好士共闕、被撰

寬永二年 六月

二百十八

英華と將相之子滿朝、

十日、庚午、朝天陰、巳時晴、掃部助時盛爲訪時氏馳下云々、時氏四月比重病、得減之後痛癰病、難存命云々、此間摠暑氣宜、夜著袂衣、今日涼風颯然似秋天、未斜四位侍從來、東方事所陳相同、雖參殿無人寂寞、御西殿、外人不參云々、如聞者已無夕見之儀歟、甚以不便、侍從之說今日始聞、時房朝臣妻之母能惠得業自烟寬宮蘇生給之娘也、因茲宗平朝臣成所緣之儀、宗朝侍從、法師居住件尼宅、爲右筆之人云々、申時許下野家長朝臣室、爲逢女子來臨、依招請予又謁之、佛庇言談移漏、明月前歸、宰相自吉田來、改著狩衣參右大臣殿云々、不相逢、及丑時乘車出門、滿十開曉歸入、袂衣忽寒冷、取出綿衣著之、六月之冷氣未聞見之、不知其吉凶事歟、

十一日、辛未、遙漢朗明、夜月適晴、今日中宮女房被請吉田泉、雖立里必可參會之由、昨日再三有其命云々、但泉邊定寒冷歟、午時宰相來、滿青狩衣、薄色指貫、相共參、青筋白、日入之後依人々招引、直參內裡了之由示送、仍局女房等

令參、

十二日、壬申、天晴、未後間陰、少雨或灑、不濕地、申時許右馬權頭來臨、一日示付事、昨日於泉適無人隙、申達委旨、具承仰由傳示、今生之本意滿足者也、重猶申所存訖、身病逐日加增、行步進退已谷、雖泡沫之世、見住如松柏而無其闕、向後雖無調、只承殿無御忘却由許也、此條猶足抃悅、不經程歸、

十三日、癸酉、朝天陰、少雨不濕地、雲厚月暗、暑熱忽成、心神彌惱、臨幸之所結埒云々、下人等云、殿上人近衛舍人可有競馬云々、如此事自下不可被申行、甚無由事歟、入夜心神惱亂、

十四日、甲戌、雲腐彌重、暑熱尤甚、曙後雨降、即休、終日陰、入夜甚雨、自女房局示送、北政所御氣色之趣又同、有長朝臣詞畏申之由答了、早速示告有其恐、當時不可披露、承由之趣重示送、父子之親有限事歟、被洩仰是爲令聞歟、所答甚存外、忠弘法師粗示送殿下、左右大將至于此宰相宿所、自早旦出御、以泉屋積色々珍

寶、作山落瀧泉、似、唐垣屏風半帖、棚脇息皆作物、錦唐物、村瀧沈、丁子之類、金銀珠玉之外無他、今朝被獻龍蹄七疋、追被進呈殿下、一疋、景氣快然云々、隋朝之貴臣執貞觀之政は、太宗文皇帝豈塞嗜欲之源哉、竊以悲矣云々、晚景聞神興鼓音、夜沐浴之後甚雨、

十五日、乙亥、終夜今朝甚雨、臨昏西天僅晴、念誦窮屈、今夜又涼氣存外、臨曉著綿衣、

十六日、丙子、朝陽快晴、未後風吹、猶有涼風、朝間涼氣

如秋、今年槐花皆落盡、早速、午終許心寂房來談、洞殿

尼上毒腫之病、自五月十五日極以重、日夜療治、已付

滅給由語之、今日初出向白川方云々、今日又依涼氣晝

著袂小袖、雖脫苦患猶足奇、初月早出、片雲遠收、偏如

涼秋、

十七日、丁丑、天晴、入夜不經程月出、天晴、早朝涼氣、薄

霧如秋、但馬前司來臨、午時、清談移時刻、惜草子等、蟬

蛤日記、更級日記、隆房卿日記、假名、安、治承右大臣家

百首、卅六人傳、依同心人不存隔心、夜涼著綿衣、

十八日、戊寅、遙漢無雲、涼氣如昨日、已後有暑、未後天漸陰、無力窮屈、念誦頻息、

十九日、己卯、天顏快晴、辰時許清定朝臣入來、自一昨日任大臣沙汰出來之由密々有申人、聞及乎由大納言殿御尋云々、宰相音信不通之間、世事不承由申了、即乘車行忠弘嵯峨、爲送節以此所爲本所、未時許心寂房來談、夜月明、念佛房住生院住僧也、不食病獲麟云々、

廿日、庚辰、朝陽晴、已後陰、中時雨降、不及雨、未明出嵯峨、日出

入蓬門、夜前又行幸右大將亭、御方遠、任槐事雖未聞一

定、頗有其疑之由、昨日有長朝臣返事今朝見之、重示

送返事之由被仰云々、此由密々申大納言殿訖、臨昏中

宮權大夫被送南天竺、前栽、植之、

廿一日、辛巳、朝天陰、陽景漸晴、未斜俄大雨雷鳴、午時

許光家入道來、去年秋下向鎮西、相具保綱朝臣、此四

五日歸洛云々、未斜備後前司來之間大雨如車軸、雷電

猛烈、不及一時雨脚漸休、予所招請也、依數奇之源、來

八月供養結緣經有其志、愚札頗憚思、人々言談之次被

寬政二年 六月

二百一十

相觸哉之由示付也、前大貳近日腫物之病、非輕之由今

日始聞之、酉時許宰相來、陣日來無寸暇之由、此間殊

參內裡之上、右大臣殿召相門、又無其隙供奉還御、自還御後、

夜終日候御、歸家之時不及休息、曉更可來由有相門之責、即

馳出、相具覽圓明寺、實濟法印華嚴、未時許直被歸吉田、及夕

歸入家之間、殿下有召馳參、北政所御內裡、右大臣殿終

夜御雜談、朝退出、窮屈失度云々、十三日行幸、左右大

將、具實、隆親、爲家、基清、光俊、實有、公長、親長卿、

實世朝臣、次將師季、實時、教房、氏通、右宗平、實隆、

隆盛、親氏、內侍所家定、故被宛此役、教信、被置物屏風四帖、

六枚二、皆以染物作之、一以護袋爲色紙形、一押扇紙作

泉形瀧落、かれつくる筆の尻爲瀧水、村濃染物爲山、銀瓶又小瓶薰物

沈麝以錦作席、茶碗枕脇足軟錦、黃金廿兩爲金物、其日

密々有御鞠、敷猫搔、左右大將、隆親、爲家、成實、基氏、

親氏被引龍蹄七疋、又一疋被奉殿下、久清父子密々召

渡御前、三遲打ちがふ之間作法經御覽還御、公卿已下

如夜前、三位四人不參、公長、如夜中、基定、內侍所氏通被

改、右將不聞、一昨日行幸、持明院殿、左右大將、大納言實

親、中納言經通、不曉馬中次、具實、參議隆親、爲家、三位基

保、顯平、親長、參議實世、左將師季、宗平、實持、實任、源家定

實清、實光、教房、氏通、公有、通行、基長、右有教、雅

繼、伊成、兼輔、賴氏、隆盛、少納言宗明、職事兩頭、範

賴、奉行、經光、還御、右將六人皆悉退出、範賴不差人、

公卿列立之後、左將可渡右由示送、次將嘲弄、實持出詞、

引率家定、教房、氏通、自立明之後、更行西方渡歸、老

者公平之由有沙汰、殿下百首御會、今月中十首先可被

講、日次追可被仰云々、當時十八人、女房、右大臣殿、

大納言殿、以御覽可被中山被仰、又御覽息歎、右大將經通、爲家、知家、範

宗、行能、信實、光俊、家長、有長、隆祐、兼高、嵯峨禪

尼、中宮大將、但馬、伊平、予、先日出不審、未接可然

事、不知堪否、非重代如何由也、親季穩便之性不出傾

狀云々、一日所聞之任槐事、摠藏曾不觸視聽、公私又

其沙汰勿論事云々、

廿二日、壬午、天晴、暑甚、及日入西天陰雨瀟、百首之間

早旦此子細申大納言殿了、小曾、家隆卿昨日送舊狀之次、所勞重之由有返事、仍今朝又問安否、猶有増ば可向東山方之由返事、若被稱重由歟、一日比在信成前相公宅、翫鴨鳥云々、大宮三位音信、室家當月姪者病氣快云々、借彼舊狀事、一條少將賴氏入幡法印各領狀、大貳出仕之間重可申人數漸滿歟、

廿三日、癸未、天晴、已後天漸陰、自冷泉告送、去十八日修理亮時氏近亡由聞之云々、一家之廢滅云々、有側耳之輩、達有長初終許四位侍從來、參殿下、無人臣一人、由語之、即歸、入夜宰相示送、行兼明曉下向駿河欲馳下、自相門再三被示子細止了、殿下御會可爲九月十三夜由被仰云々、雲陰風不吹、暑熱如例、夏殊難堪、

廿四日、甲申、天晴、中後漸陰、雖下食依念誦沐浴、昨今暑氣、東小屋有蛇、以友村令取弄、腹中飲物、出庭中之間漸吐出之、蛙也、未死漸動搖、令入水中、無事存命云々、於蛇は弃川原、蛙已生非惡事哉、車宿昨日塗壁、今日塗石灰莖棟、未時許能登前司長政朝臣來談、凌暑

相逢、稱無心不經程退歸、駿河守重時不拘抑留之詞明曉欲馳下云々、河東無一人者、天下定爲夜討之場歟、夷吾之餘黨掃凶之心更不止、所期一旦之魚肉耳、甚不便事也、暑熱惱亂、一寢之後大雨如沃、

廿五日、乙酉、天晴、午後陰、雨雖灑不濕地、重時門出今曉欲馳下、昨日中使藏人頭中宮亮資賴朝臣舍輪言仰不可下向由、即申罷留之由云々、京中之安堵何事過之哉、未時宰相來、參右大臣殿云々、殿下百首無披講、十首之儀九月十三日夜一度可□□百首云々、此兩三日具實卿給飛驒國、因禮造興福寺國力不可叶之由日來懇請平所望之問、雅親卿生刺歟、無不便沙汰者愈騎馬之役歟、手足之奉公猶不廢身事歟、不經程又來、改著直垂騎馬參吉田泉之由聞之、

廿六日、丙戌、天晴、覺法印來談、

廿七日、丁亥、自夜雨降、午後天晴陰、雨宿夏天連々之西百穀豐饒有年之由、民戶已誇云々、相門五月會三首、於今者不及披講、可記進之由有御消息、即書腰折獻覽了、於今は詠歌摠以不堪、太見苦、前宮內卿返事、病猶不

寬弘二年 六月

二百二十二

五六

宜、不食之上種々事計會、無可憑之由云々、聞警不少、夜猶雨降、

廿八日、戊子、朝天晴、午時許大炊御門中將被過談、先度行幸還御不供奉次將被召忌狀事、不知子細由被談、其書樣未見由答之、只被示合大外記可宜歟、其狀、

右近權中將源朝臣有教

藤原朝臣雅繼

權少將藤原朝臣隆盛

藤原朝臣伊成

藤原朝臣兼輔

藤原朝臣賴氏

從二位行權中納言兼左衛門督源朝臣具實宣、奉勅一日行幸還御不供奉、辨申候間甚自由、宜進忌狀者、

年月日

大外記、、、、

大略此體歟、忘一一、此次聞、賴氏少將妻在定平朝臣許之由、本夫行事、殿下被問定平之處、節會夜不知女

來、可行汝家由相語、期日入來、經兩三日中歸去了、不知其人其行方由陳申、事已披露、行幸夜後人供奉人頗屬目、未歸來、子息等可付父可付母事等、當時喧嘩之由有其聞云々、如此事向後極不便、誰人通之哉、可悲之世也、飛驒因幡相博云々、金吾之懸望也、其夜傍將不觸可退出由、依所勞最前退出由陳之、入夜宰相來、

自吉田傳相門具言、

廿九日、己丑、天晴、今日結緣經重觸人々、侍從言家來、一昨日花山院母堂十三年遠忌、光俊、宗宣、親房卿、有教、言家已下云々、關東右府十三年下向招請之氣聞之、宰相云、依小除目可參內、借值、殿下御內裡云々、丹波國司殿分國守可爲可然人由雖被溢仰、知宣依申請被任朝仲云々、五ヶ庄又知宣給之、同作無量壽院云云、此事尤可然、此以造畢可爲大功、親房卿子親氏去今月勘氣籠居云々、依中物之、虛胡也、來月四日又御方違行幸云云、昨日中將語云、家季朝臣參總角事、依其人闕如、無習傳人、自去春被仰前右府、父子、被申云、於天子御總角は

家所習傳也、於凡人作法、故入道不知之、仍不及習云云、其後左府稱習得之由給、其說入道相國云々、因茲彼家依吉例家季令習之勤之了、而家嗣卿云、於他説は可信仰、亡祖不知此事之由、隨申含、左府坊亮之時、亡祖爲傳常參會之時、此事可習之由被相語、暗難申、相具髮長童云々參御、于時可申由答申之、後無其沙汰由承之、於凡人儀は、雅職等之家所存知云々、而今有此事、傳聞聊不審之由彼卿問次、奏問事頗被不審之沙汰云々、荒和祓如例、

可憐赤十九年夏、□之流年過半時、向後定知無再會、晚雲景色獨相思、

夏はつるけふのみときは程もなしわか世いくか
としらぬ月日に

乘燭以後侍從送關東出家之輩異名、已以數十人、古今貴賤亡者未聞此事、頗匪直之事歟、夜深之後宰相示送、中務丞、大中陰陽師大中盛明、惟宗重久、陰陽左衛門、大中在成、少屬、大中木工允、刑部丞二人、
平久盛、同時光、

安房守源顯清、飛騨守藤高兼、佐渡守藤雅家、伊平朝、名實歟、丹波守橘知仲、因幡守教信、兼、豐前守源賴村、將監三人歟、衛門五人許、兵衛四人、馬二人、造東大寺次官、從五位上、衛府之剩任次第渡去々年之儀歟、可耻、左門小槻、尉惟宗朝成、源成廣、小野重經、右門藤遠實、同保光、左兵中友景、藤家清、左馬橘資村、右馬藤義孝、上卿左衛門督、職事、頭亮、殿下御退出云々、

○七月大

一日、庚寅、天晴、宗清法印消息云、女子出仕事、中來廿七日可令初參、教訓扶持事所奉憑也、其夜裝束事同承存哉、依近邊尋承明門院女房示送之、蘇芳ぬき染單重、女郎表襲、濃引へぎ二藍薄物無文、唐衣、高遠單、文薄物、濃張袴、綾小袖、單重可懸形襪、上童朽葉單、重紅梅、雜仕、ぬき染單重、青結染格子布帷、例裳、ひす女郎花單重裳、晝沐浴、乘燭之程宰相自吉田來、昨日終日候内裏、無聞及事云々、對馬前司能重、親能法、師子爲相國御使爲病防馳下、十七日下著、十八日夕終命、廿三日出國、今日著京、武

州歎息、義村頻諫言云々、

二日、辛卯、遲明甚雨、辰時止、巳時天晴、徒偃臥、未時大雨雖漸微、入夜不止、

三日、壬辰、朝天晴、兵部少輔入道明曉下、來、近日在清閑寺、不歸參大原、

去春逢時氏朝臣、向日、難再會之由又問答、得脫之因

緣大不得心、今思此事極奇山談之、謝返之後大學頭來臨、予頗所招請也、依數奇盧胡之本性、結緣經勸進願文、可預芳心之山語之、依暑熱無心、不經程西方雲暗、

初月不見、

四日、癸巳、天晴、終日無事、

五日、甲午、天晴、按察消息又進入殿下之次、聊有被尋仰事、申所存之間、渡御九條殿、持歸黑狀了、

六日、乙未、天晴、昨日事申入殿下、可有勅撰、集歌之仰、其年限先例

無定、事遲速可依時儀哉、抑撰者尤被撰其器量、定家於道者無其機緣、不能繼家跡、況弃置謫居之後、悲淚掩眼、憂火焦肝、和歌之氣味隔境忘却之由也、仰云、去比聊伺天氣、頗以快然、東方之悲歎暫過其程、重可申出

歎、於今度者撰者在誰乎、專一勿論者於道雖可謂本意、

心中之望更無他、又近日若有其事者、事體頗不似前々

例、進退可谷事歎、前代御製尤以殊勝、撰之者可充滿

集之面、事體機間可然哉、聖代之勅撰、前代之御製員

數多者、當時所見有忌諱之疑、略其數者、定又有世間

之謗歎、前宮內秀入道彌可謔言彈指、彼是極難測、竊

以暫可過此程哉、大學頭重來談、且是五位餘効之長官

之時、文章博士不著察試之由先日有御沙汰、所行來全

不然、在茂成信等朝臣五位之時、上臈敦因光範爲長卿

等、每度參著之山所注出也、夜深乘車出大路、滿十五日、加汲日、

聞曉鐘歸入之後雨降、

七日、丙申、不食時已、自曉甚雨、已後漸晴、令拂隨分文書、及乘

燭沐浴、曉有早涼、自朔比萩花已綻、昨今漸盛、七月上

旬未見事也、聞又開、河崎想社每年今日祭之、今年稱

夢告、遍催近邊下人結構供奉云々、蓬屋在西地下部等

猶被駢出、後聞、十村許面々施狂風流、悉入前內府泉

亭渡庭、路次、云々、歌舞音滿耳、武家悲歌之最前、頗可有所

思歎、

八日、丁酉、天晴、自御室給御書、午時許宰相來、參右大臣殿、御宿內裏之間退出、今夕北政所御入內、可寄御車、仍暫休息、又向吉田、臨夕歸來、束帶歸參了、勅撰事內々可申行御氣色、來四日御方進行幸延引來十一日云々、事次聞及、少將教房出仕、於事穩便如所存事云々、庭訓令然歎、人之器量實不依其家事歎、氏通勤鈴奏、弓取副扇、甚悲事也、月初明、

九日、戊戌、朝天陰晴、帥殿御忌日、申付與心房、於本房令修廿五三昧、暑熱之比來臨、依無心也、頻可來之由雖被示思人煩也、必不可好聽聞、今朝奉水粥料小分物、大宮禪尼書狀、侍從日來咳嗽病之由存之處、疾已重、若是時行之疑歎者、聞驚不少、今年此事多之由日來聞之、常與寺付正、三條宮子伯父忠成女、母上四門院高倉局、依此事被終命云々、前宰相信成去比危急頗付減之由昨日所聞也、今年雨澤順時、民戶有天云々、夜涼非盛夏之景氣、還成人疾云々、

十日、己亥、朝天薄霧天晴、來十三日伎議云々、宇佐別宮千栗宮大破、資經卿知行肥前數年不致成功之沙汰、又燒失、及諸道勘文云々、廣田社先年燒亡、御體燒給等事歎、按察音信之次聞此事、入夜女房自內退出、暑熱平臥不謁、月明、

十一日、庚子、天晴陰、少雨灑、今朝謁見之次、初聞朝廷之大慶、心中感悅何事過之哉、未時許心寂房來、去八日嵯峨稱孫王之人世稱還俗宮、逝亡、數月赤痢、以仁皇子之一男云々、治承宇治合戰之比、爲遁時之急難、剃頭下向東國、爲俗體而入洛、建久正治之比雖望源氏不許、老後住嵯峨、以宗家卿女爲妻、於心操者落居之人歎、養申土御門院皇女、讓一所之領云々、知家卿送書云、辰御前昨日申時入滅給、此四々日殊增氣、來十三日可渡嵯峨、一腹之婦被生、之由、日來被約束、一昨日殊物念之間、昨日俄渡兼時之吉田、到著一時許終給、御所中悲哀云々、高野大相圖之女、母大納言隆季卿女、爲皇后宮育子御猶子、預少々所領給、爲故人道殿猶子、永奉仕宜秋門院、心操

寬政二年 七月

二百二十六

六〇

穩便、於事有譽無謗、文治御入內之時、被求上郎女房之時、或人何事在哉、由有申出者、故禪閣仰、年來之猶子兄弟之子也、爭爲官仕人哉、遂號辰御前、永被坐院中、

十二日、辛丑、天陰晴、夜月明、前宮內卿消息、不食之病猶以遲留、猶欲移山家、又有可修懺法之志、經之結緣事旁可察、極遺恨云々、事體彼岸之比近世之宿願歟、存知又定有其故歟、於經事者勿論之由答之、及乘燭女房歸參內、昨日猶有召云々、

取注後聞、皇后宮御養子姊事也、云皇嘉□信御所養季長乳母云々、

十三日、壬辰、朝天陰、未後少雨漸密、籠居七十日、依非重復日、有出行之志、今日仗議云々、殿下定御內裏歟、午始許參殿下、右兵衛督東帶、參、淡路役夫工事申入云云、三位中_{三位}、即參御前、法務參給、右大臣殿同坐、仗議今日延引云々、役夫工已近々闕如事滿耳、於中門方謁右少辨、中納言參會、今日故御前_{御母}、御忌日有御佛事、僧

等參入、依雨降退出、依涼氣下部、取入一寢之後大雨如注、夜半之後漸微、

十四日、雨止、朝雲分、已後天晴、早旦頭沃菊湯、自殿下給部類萬葉二帖、滋花玉院御物云々、第一第二等時入進書之、可書寫進者、自春手廬之後彌不能執筆、但給置可書試之由申之、扶微力念誦、頻平臥、月出乘車出之、雲路亂不輕歸入、近年民家今夜立長竿、其鋒付如燈樓物、張紙、舉燈、遠近有之、逐年其數多、似流星、人魂著綿、

十五日、甲辰、朝霧、涼風如仲秋、來脫力昨今萩花盛開、無力厄弱、念誦頻緩怠、申時許興心房被坐感聽聞、以之爲得分、平臥、雜人每年集會東北院相撲見物、唉聲騷動、近邊有怖畏、

十六日、乙巳、天晴、午時許參殿下、頭亮參、付大藏卿申役夫工諸國御訪事等、大略無領狀人歟、顯平卿女房雖新任、可進重任功_爲定、由申云々、土御門大納言知石見以來、未進成功、官廳粗雖有給功沙汰、不及損色功程之沙汰、而此御訪當時無計略、只可造官廳由申、自余

國々徧對捍歟、仰安房爲重任功者、可進二萬疋、一覽猶可進此功由可仰云々、其後出御見參、東一條院二條殿參之間、不心閑、平宰相來、存外參會及言談、申時許退出、入夜宰相來、明日資雅中將可初參右大臣殿、此事引導口入可進名簿歟、予初參故入道殿^{文治二年}之時不進、先考相具參給、召御前之後、奉公已三四代、雜役如匹夫、雖自身事其作法不知可否、成定朝臣初參、自懷中取書付、奏者之由聞之、他人之所爲多不聞之、事體以進爲本式歟之由答了、

十七日、丙午、天陰、辰後雨降、秋雨濛々、有涼氣、終日著小袖、取入灯見舊記、無暑氣、暗雨打窓、乍臥不能睡、仗議定甚雨歟、

十日、丁未、曉雨止、朝猶陰、不見陽景、夜雨降、校止觀、短暑暮、今日辻祭、^{大い}又御靈^{所御靈云々}、^{今出河之上八}御與迎云々、

十九日、戊申、終夜今朝雨猶降、秋雨終日不止、以疹手愁書始部類萬葉集、更不可叶事歟、夜一寢之後雨更如

沃、閑人之窓彌以寂寥、及曉纔以微雨、

廿日、己酉、朝雨猶降、已始天晴、未斜三井寺法印過談、依本寺之喧嘩出京、公家遣武士被仰舍之後僅落居、明日可歸入云々、三別所之相論事云々、定條書狀云、有寶五部大乘經者、極以輕微之值也、仍取寄見之、料紙素紙極雖薄、其字分明、無蟲損等、

廿一日、庚戌、天晴陰、午後又少雨、求鵝眼^{只一貫云々、尤可哀憐}、送定條許、^{本主在家隱卿家之向云々}、相傳取了、但此內大乘經卅卷欠云

云、朝校止觀、食後書草子、夜深出門外、聞曉鐘歸入、雲掩月雨不下、

廿二日、辛亥、八月節、朝天陰、已後晴陰、未時許但馬前司來談、謁申右幕下之次、聞宮中吉事云々、於今者已披露歟、今夜煩暑不下部、

廿三日、壬子、天晴、知宗奉書到來、持明院殿西可被立御所、西渡殿一間細川庄可造、兼敷設御籠白砂宛之、未聞事歟、不可申是非、申承由、十月事始云々、忠弘法師來、早可存知、不可懈怠之由示含了、時房朝臣妻可

寶曆二年 七月

二百二十八

六二

入洛云々、若此乳聖之故歟左衛門尉景直小野宿雜事示送、忠

弘之故聞之、臨昏宰相來之次、語殿下仰趣、中宮可有

和歌會哉、八月如何、時氏事頗無骨之比歟、可爲十月

乎云々、予所存者此事更不可被念、每度只可被斟酌先

例、初度和歌會ト云事、先必被行事歟、於八月は建久五

年之例、近々雖可有御一門之執心、所存全非吉例、又

和歌之次必有管絃歟、吉事之時管絃多憚之云々、旁

存不穩之由、定不叶時儀歟、家光妻忠綱娘參中宮御乳

母云々、后宮入內立后之後、況廿有余御時、弱冠下女

乳母初參、何代之例乎、慙而可慙、可慟哭、可長大息、

悲矣云々、

頭注一寢之後、南有火、春日南北京極東出朱雀云々、

廿四日、癸丑、天晴、深更雨降、午始許參殿、仰云、今日

假日也、密々連歌如何、申可隨仰之由、夜前仗議及深

更云々、右大臣殿、內府、土御門、九條大納言、右大將、

中宮權大夫定高、賴資、兩納言、平相公、左大辨書定

文、右大辨讀勘文云々、即渡御西殿、予乘車自門外參

入、午終許於泉屋有此事、右大臣殿、此宰相、有長朝臣、

盛長、兼康、資親等也、賦唐何々目、甚停滯極見苦、掌

燈以後已及深更、左大辨持參定文、以盛長雖可有御對

面、且依無內外可取進由被仰、定文二通也、具書等大束相具之今

夜終夜可令書留之由被仰書生侍等、明日祈年穀奉幣、

當日定辰時可參之由大臣殿被仰、其次可被參定文使定高卿、爲

家、可候基定、顯平卿云々、今年宇佐使先被催殿上人、

貞時、經俊、親高、經賢子、名忘、各固辭、可被除藉云々、

治部卿今夕參入、使節不能經營、只可被除藉之由申云

云、子夜百句訖還御、即如儀退出之後雨降、

廿五日、甲寅、自夜雨降、午後休、申時天晴、宰相參賀茂

之次、可來之由雖聞、已及秉燭以後、共侍等日入以前

來、先是參內之由語、遲怠甚不便、戌終許來臨、夜前依

承辰時之由、午始雨止參內、徒日膳、及申時大臣殿令

參給、即著陣、不給出題、如式令讀給、稻荷家長朝臣、

春日左馬信說朝臣云々、定了先參宮、中納言自如法、

未一點參云々、次顯平卿參云、伊勢幣之時、中納言修

理起座立隱壁西、顯平不動座、賀茂使座依不見不動、行事辨有親、職事亮、御劔役實清朝臣云々、此女房兩三日夜々雖有病氣、猶如例奉仕云々、自此家乘綱代車參社、光定相具、歸來已及曉鐘、社司又遲參數刻云云、

廿六日、乙卯、天晴、巳時參相門奉謁、若君御出家來月七日、受戒八日、北白川造營以後御渡廿日、彼是經營之由等也、參殿、御西殿云々、高長申入、歸來可參之由被仰、仍參入、於泉屋見參、去月所被召怠狀近將、於今は返給、可供奉行幸^{明後}山可被仰乎由、可奏之由被仰、頭亮大藏卿爲御使參八條云々、故左大臣殿後家氣比社祠官嫌爲國法師品軼、不可令庄務由申問事也、鎮西阿蘇宮池水湧揚怪異事、依光家入道語、以事次申之、事實ば可尋聞之由被仰、頭亮親房卿於御前語、權中納言實基、自夏依病籠居、此廿日許手足なえて不能行步、惡人僅立居、若終命歟、家文書可燒失云々、彼家已磨滅歟、尤可奇事也、申始許退出、今夜重續衣、

廿七日、丙辰、天晴、朝校止觀、已後書部類萬葉集、^{第二}今日中、今曉相門又被渡圓明寺、宰相扈從云々、入夜雜人說、臨昏被歸、忠廣朝臣從者令持袋、後群奔來之間、爲盜引剝被抑留、被斬損被奪袋云々、況他人之所從乎、可怖之世也、

廿八日、丁巳、朝天陰、午時許暫晴又陰、校止觀、午終參殿見參、可見御歌之由被仰、給兩御歌、未時許中納言參、三井寺僧綱等依召參入、三院喧嘩可加制止之由爲被仰也、中納言一兩度往反、頭中將參入、今夕行幸延引、八月二日五日之間日次宜云々、神祇官犯土事被尋仰、可隨其有無者、頭亮又申諸社事等、納言語云、奉幣日顯平卿著紅汗取例赤帷ヲモ、本儀稱汗取非件帷、是ハ小帷也、此事貴賤未見、但父卿^{光長}補藏人時、父權辨書裝束色目、假名送皇嘉門院御匣殿^{父卿}、許之中、小帷ソレモ紅と書、年來成不審之處、今度始見此事云云、仰又未御覽及事同指云々、申終退出、入夜宰相來、相門夜前宿給、^{違作之徒初}度如移徒歟、一身依今日始物詣精進、申

寬弘二年 八月

二百三十

假馳歸云々、此次間顯平卿帷事、答云、全非故實、口傳之體、彼卿殊汗流、依痛此事、紅帷依汗顯事、宜年來所好著云々、一日參殿之日、有不見知小男、浮線綾狩衣二藍指貫、是光盛卿外孫公濟云々、少將入道實重子也、令見百首歌、無指難、有宜歌等歟、歸後雨降、夜深大風、野分歟、

廿九日、戊午、曉後風休、早旦地震、非大動終日雨降、朝校止觀、終第七卷、

卅日、己未、自夜天晴、去夜々半許自女房局送云、少女認打破鏡、落板破有禁忌之由聞之、爲之如何、予答云、往年文治之比欲參六月初、役送之間自把鏡置臺之間、落板上、欲取上之處、自半破了、成恐申入道殿、仰云、忌憚又被衾之由雖有俗說、本書無所見、只可鑄改其鏡、早可參勤其役、即束帶參八條殿、翌日又女院御共參安樂壽院宿房、於自身者更無事祟、其鏡鑄改繫螺奉日吉社了、況又於他人破者、其人三々日許籠居、鏡同可鑄改也、如此事任不可驚奇、只依打落破許也、其女上童

今晚來此家云々、晚イ鏡賜鑄師了、朝間校止觀、未時口熱、飼蛭之後又校之、第八卷上卷校了、

○八月小

一日、庚申、朝間天陰、陽景不見、及乘初大午時許參殿、大雨即休

相國被參、諸人不達事、空日膳、右少辨、役夫工大神寶右中

辨、藏人、左右佐、大宮三位、宜秋門院御使漸及暮景少々申

達、予付讚岐前司、大淀庄材木少分思給事申入、粗蒙恩

許、兩庄所課安嘉門院御造作事依無計略也、神寶事用

途更不濟、一定事闕歟云々、甚不便、法務御房同御對

面云々、雖聞御參內、已及晚了予退出、自西門氣比社

司等參集、北門甚以喧々、喚忠弘示造作事、但知家依

此事爲使節向關東云々、然者非當時事歟、宜秋門院又

有御造作云々、被壞渡南御所于當時御所、殿下御所、信の小路之

西云々、所々土木只爲民力之費歟、放生會左衛督、新

宰相中將、實世、親氏、家定、信盛、左衛門、于今未役云々光成、左兵衛領

狀云々、

二日、辛酉、天晴、終日著綿衣、薄穗多出、近日小鳥出山

渡云々、菊花已含、朝校止觀、十七枚、未時蛭飼、兼康朝臣書狀云、明日相國參給、爲述歌參由者、申承由、於此事雖不堪、尤有聽聞之志、

三日、壬戌、天晴、午終許參殿、頭亮右佐等參入、傳奏人不見、但馬權頭以良申之、少時出御、可參儲西殿之由被仰、仍先參、有右幕下車、被坐內敷、不見、一身在泉屋方、良久而右大臣殿大將出給、暫言談之間殿下入御、大相又參給、爲家卿兼康參、被始述歌、尊卑父子各座遠而甚無興之間、光俊并有親朝臣參、依無人兼康又間筆傳奏、彌以無興、又二品親王黃斑頭二、被引獻牛、引入此前庭御覽之間、日已暮了、依句數不出來、料紙破之、昏黑大相出給、自余被留之間予退出、入蓬門之間、初月沒、北野祭用途藏人方催諸國率分、年預重責其所濟、切宛神人等云々、而年預五位出納俊元若狹國末加催、無是非付馬部之間、頭中將怒而昨日參內、召出引張下馬寮之間、年預不能催事、可闕如之由申云々、仍召辨有親、儘可催沙汰由被仰含、嵯峨入道孫王年來知

行小所二讓奉養育土御門跡姬宮、而依臨時御恩拜領、無故所勞後更任意相傳、無其謂之由有天氣、被付後院云々、可然事歟、今夜寒氣、

四日、癸亥、天晴、午時許僧正被入座、後殿下退出、清談謝遣之後、宗清法印來談、歸之後蛭飼、無蛭而、法務御房御消息、足白黑牛有一見之志、即引進之、被召止、不經幾程引賜班牛、雖申不可給替之由、又不返上、今日頭亮召具瀧口所衆中宮侍入勸修寺、上下成群見物云々、病老無其興不出門、

五日、甲子、天晴、申後陰、申時許右兵衛督被過談、子息兵衛佐下向放生會、當時雖有發所勞、猶出立之由也、其實卿更申所勞由、家嗣卿領狀云々、當時厚緣者只爲先遁避歟、過夜半乘車出門、待曉鐘歸入、明日雖滿日、明後日依歸忌日、今夜遠之、

六日、乙丑、自曉甚雨濛々、終日不休、今夕殿下若君、爲明日御出家渡吉水給、宰相當日、凌晨參云々、七日、丙寅、終夜今朝雨猶降、終日不止、校訖止觀第九

上卷、始下後聞、若君夜前御共、宰相實經朝臣、御共以康

法師經範等參儲、其外無人、僧綱一人不見、殆無常燈

云々、今日御出家之儀、殿下於門外御下車入御、御隨

身布衣負野矢、久清黃香裏著染付女郎生衣紅帷、兼友

賴和普通裝束紅引へギ、右大臣殿冠御直衣、御隨身上

郎冠、久貞生張白襖狩衣、殿下御簾中、以南面爲其所、

其傍弘庇二間爲公卿座、大臣殿、九條大納言、東帶、二

位宰相、伊平、東帶、侍從宰相、直衣、成源僧都奉刺、先是氏神

父母方令拜給、進退神妙、家時朝臣他門親屬等參入、

在彼御方閑所、以康法師可行此御方之由有相門命、逢

時取權云々、後日傳聞、書付御共殿上人等可尋記、入

夜宮女房退出、

八日、丁卯、朝陽間晴、陰雲未散、早旦送書狀前宮內卿

許、依老病無術、此間不能詣向之由也、今日向東山方、

依不食無減暫可經廻之由也、遙世已今明歟、多年之交

聞此事甚悲痛、彌增不厭離之恥者歟、未時許又飼蛭之

間、大宮三位來臨、暫以人間答之間、宜秋門俄御不例

由只今有女房書、念歸參之由示之、即被退歸云々、被出

門之後、不幾大風折木、少雨間交、及秉燭頗宜、入夜止、

九日、戊辰、天晴、朝奉書金光明經第一卷、巳時許前匠

作行能、來臨、暫相謁、謝遣之後即參殿、二條中納言大

藏卿相共見參、經範付有長朝臣、進昨日釋奠詩、序者子

息云々、賴資、經高、家光卿參、孝範朝臣參云々、淳高

、周房、、在賴、良賴、公良、宗範、保範、多忘却

了、御參內云々、御裝束之間予退出、夕宰相來、

十日、己巳、天晴、奉書昨日經第一卷、又始、止觀第九校

了、靜俊注記來、示付令語舍兄園梨、毗沙門堂坤阿彌

陀堂之中、片時立入有經供養、宿頭之由相觸、歸來示和

與返事、述歌禪尼早世之後、依有好士憐愍之志、聊勸

進同心人、來十四日欲供養結緣經、事雖似老狂、憐好

士爲示後輩也、此次語云、僧都聖覺法印弟子參、家居

住吉水、昨夕謁了、僧都宮內、令召、心神迷例、早可被歸之

由、依相示歸出之際、不經程不及他言語終命云々、聊

以驚奇、伴小善啓白欲語求佛房之處、此事若爲障歟、

書々狀、明旦可送由示忠弘入道了、故請歌仙所誦經文、
經範朝臣昨草送之、爲本意、今日清定分別品、式賢性女成
光行父子三人、普賢阿彌陀心經到來、他人無音、若有
忘却人、事定闕如歟、

十一日、庚午、欠日、天晴、朝校止觀、第十端二十枚、晝又經
寫、酉時許信願房大原、來談、入夜土御門黃門被來、廿
二日彼女院密々御有馬湯云々、自一昨日彼岸也、仍
雖精進無指所作、御室昨日自高野無爲還御山、法印告
送、

十二日、辛未、天晴、午上止觀十卷校訖、返本於明喻阿
開梨了、弘決第一、上下、又借請、申時許金光明第二卷
奉書訖、有長朝臣示送、武藏守泰時息女時房子、依難產
去四日終命、今晚園城寺南院、爲中北兩院衆徒拂地燒
失、已爲天下大事、今日可有殿上議定、御參內可候云
云、宇治御出延引、十四日事何樣候哉、予答云、閑人幽
居密々於佛經啓白者、不可依世上無常、惡徒逆罪之由
雖相存、人々結緣有違亂者、力不及事歟、若被送遣者欲

果遂、○以下囑文有、臨昏下邊武士鸛旌旗馳走云々、三井寺方
丈烟立由聞之、所願定有魔界之妨歟、前宮司範綱捧物
信願房供花、大炊三位錦橫被、光兼如給一卷桑絲歟送
之、自余人不音信、大貳示明日可送由、戌時許又仁和

寺方火光見、不久而滅、此際猶山東又有烟氣、
十三日、壬申、自朝雨降、未時許但馬守書狀云、自去夕
御祝候內裏、園城寺事不落居之間、還御可爲明日候、當
時僧綱被召集被仰子細候、兩院衆燒南院之後、南院衆
又燒南院、火間合戰、兩方互殺害、武士競向之間、惡徒
退散、南院衆少々相殘、兩院悉以退散、但餘燼不及堂
塔、僧房許燒亡云々、武士留居猶守護云々、經結緣人
人、猶觸緣相尋之處、明日可送由少々聞之、若非虛言
者、猶破石欲果遂、入夜明喻開梨來謁、示此所願子細
等了、今日送經人々、覺法印、兩品、捧物、被、大宮二位、生
物、備後父子、井子、誦咒、大貳、御被、長政朝臣、現符、
十四日、癸酉、三吉、朝天晴、已後快晴、遲々經卷漸待具之、家
長朝臣一案四、及黃昏到來、申始法印覺來臨、相謁之間、

寬延二年 八月

二百三十四

六八

前修理權大夫來臨、法印暫出、休息近邊云々、備州能登、前能登來會、乘燭以後予先密向毗沙門堂、入西門、昇阿彌陀堂北階、入北壺欄、兩法印來會、求佛房被來、暫入簾中、言談之後、出道場被始事、四人追加聽聞簾中、辯說如流、各感歎、事訖此四人取布施、雖數反自後戶取之、請僧三人^{木堂}在南座、同置布施訖頻撤之、次各退歸、經體雖出儉約式、頗尋常料紙表紙等相交、捧物注別紙、願文^{經範}、行能朝臣清書、過分事歟、事偏雖爲老狂善事、何事在哉、匠作備後束帶、在外威儀也、十五日、甲戌、天晴、早旦備州書狀云、今夜連歌尼有夢見事、來此家、有折紙假名書物、尼所詠云々、有數首歌、中央程夢覺悟、

山たかみとふ人なくと思しにひとりすむ身にけふはうれしき

此夢雖嚴重過分尤可憑事歟、已時許備州又來臨、束帶、西園寺布施取、參勤之次云々、言談之後詣北山了、予參殿下、三井僧綱依勅定、悉可入寺之由被仰下、又以

頭亮等爲御使被仰僧正達、各固辭有忽諸之氣色云々、頭亮申此事、重奏聞、猶可被仰遺歟由被仰、大神寶之成功事猶適雖領狀、無所濟之實聞事也、已及未斜、放生會乘尻一人闕如、被求尋之間、時刻已移、有限神事、刻限入夜參着者、甚不便之由雖申、更事不行、御拜又遲々、御髻之間予退出了、自八日斷葦、老後甚無力難堪、明日禪師御房御受戒、依相門被申又延引、可爲廿一日云云、兩度延引極不便之由、自本所雖被申、一夜延引云云、每度存外事歟、殿下御會百首、猶可爲九月十三夜之由被仰、放生會宰相實世朝臣所勞、^{近代人}皆虛病、經高卿又同、況伊平不出門外人也、別當依有威儀不勤公事、左大辨已役人被駈出云々、仲秋三五夜、雲陰月黑、

十六日、乙亥、天陰、已後晴、夜月陰、未時許長政朝臣來臨、稱右幕下御使、是一昨日小善隨喜之由也、相逢之次令申披月來事等、是官仕女房難治之聞事等也、臨昏歸、

十七日、丙子、自夜雨降、終日不止、朝間書始弘決第一

卷、九枚、
有二帖、

十八日、丁丑、天陰、雨又降、兵部少輔長成來、依所勞療
治間不逢、今日猶書弘決、枚數多而難終功、

十九日、戊寅、終日雨降、朝間書寫七八枚、依陰雲盤居、

廿日、己卯、天晴、朝書寫、黃昏出門參大納言殿、三條南
四仲

宅、見參之間自然月昇、撤掌灯、開曉鐘退出、方達滿夜
也、仍用之、

廿一日、庚辰、天快晴、午時許出中御門西、富小路東、見

物、辰一點定修
參吉水云々良久而前陣進來、無他供奉者、只前駐僧

也、平笠織生指貫舍人、朽葉、中童子二藍、付菊
紅葉、下法師

六人、次崩木、朽葉
引細、大略具法師六人、次蟲襖、女郎桔梗

萩、同花ヲ
互二付、次薄色、朽葉、押紫
洲濱、次薄色、黃香二人、唐紙

一人、次崩木、薄色二人、
朽葉押紫、次朽葉、青唐紙、次崩木、二藍、

虫襖龜甲、うらか
たき、次赤色、二藍、黃香、次黃香、蟲襖、唐

紙車輪、次檜皮、
薄青、二人、花田、蝶二
人、蝶二、次黃香ひ
わた、花田

四人、うす青四人、著綾指貫、肥滿法師、次薄色二人、

二藍三人、菱、ひわた、うすあな、と
くさ紙、大童子三人、次崩木、朽葉黃香、次赤

色朽葉、うらかた木、
大童子一人、次結染舍人、朽葉ゆひをめきかう、

次崩木、二藍三人、雜秋花、次崩木、朽葉三人、うらかた木、
大童子、女郎虫衣、次

崩木、器物三尺許
正末著之、朽葉二人、付龍
腹、口張大童、定修老僧也、

御車、牛童、
持雨皮、車副八人整蹕、牛童、赤色仕丁、上童二人青

地錦、付三瓶
拾金瓶、皆具居伺一人、從朽葉、童、赤色男六人、

置龜甲榻返三人、菊間、中童子六人、二藍、
紅打、黃稻繪二行、

立杏大童子二人、白張、崩木、くちひ
生衣、杏、次前駐四人、如

前、例網代車、小八葉長物見、牛童
二人、師口、蟲襖黃、上童花田紅打赤色童、朽

葉男四人、龜甲、前駐二人、如前、表白車、左府御
車、うす青牛

童片口渡之、即歸來、定修入此宅、改裝束登山云々、撰

預非人之舍人、態爲曝恥歟、平笠法師每度供奉、前途

超懸無面目、一事以上不可知之由予示送、此事達其

聽、被阿黨歟、尤有與、今夜北白河殿造營之後、御渡御

幸云々、公卿衣冠之由被催云云、盡窮屈不能見物、後

聞、右大臣殿令著衣冠給、御車寄、依騎馬所勞令參會

給、源大納言、衣冠、路頭
許不列立、右大將、衣冠、中納言盛兼、束帶、

參議隆親、衣冠、經高、爲家、三位基保、實有、親長、和年
到家

寬喜二年 八月

二百三十六

七〇

明神宗長清云々、不雨殿上人、束帶、檢非違使召使久清供奉、殿上有響、及曉更少雨、

廿二日、辛巳、自朝陰、巳午時暫晴、未後少雨、午時許參殿、自然日萌之間、兩度見參給、右大將殿御歌合點、尤令得骨給歟、入夜與右京兆共退出、

廿三日、壬午、天陰、少雨間降、午時許宰相來、一昨日依殊御命_{座主}早參、直衣、每事遲忘、親房、公長、束帶、宗時參入、少々雖加詞甚遲、事具之後、公卿等退出之間、

可乘車籠之由有御命、仍而被寄御車、棄了退出、馳歸家、改裝束參京極_{大相}、申此由、即與尊實相乘、扈從見

物、事訖直被參北白河殿、即扈從、殿下又有御見物所、爲御覽彼御所令渡給、又以日萌、大將被懸御衣等了、同車被歸了、又束帶供奉、可有殿上三獻之由有沙汰、大將被早出、一獻可宜由被命、仍隆範勸盃云々、即早出了、別當以爲經朝臣令申吉書、家時卿依年預役、去春闕八葉御車、今度又可闕庇御車由別當示之、庇執事可闕之由申之、相論喧嘩之間、辭年預了、御幸入御之

間、光俊長清曳尻列立云々、長清更無謂事歟、頭中將立公卿列、不具瀧口、依示驚、後悔耻痛云々、即參右大臣殿了、陰雲不晴、短晷早暮、

廿四日、癸未、天猶陰、已後雨間降、未後漸晴、自昨日咳病之氣、心神惱、

廿五日、甲申、天猶陰、雨間降、未時雷鳴猛烈、又甚雨、昨今雖精進、心神惱不能念誦、書弘決草子十二枚、日暮了、相門又圓明寺宰相供奉、曉更出京云々、

廿六日、乙酉、巳時天始晴、光家人道示送云、八條殿一卷經無量義經闕如、送其契寸法等、十三年御忌辰云云、依懷舊之志懋領狀了、可書御手跡之裏云々、彼御消息多遺、頗有便宜、咳病殊惱、夜忽寒而付寢不安、

廿七日、丙戌、朝霜如雪、午時許宰相來、一昨日依招引供奉圓明寺登山、臨水松茸千萬_{俱雨}、兼無其命、俄乘船

被下水田之間、無是非供奉、昨日歸京、自路次申御幸供奉山、騎馬歸、乘燭已下入家、戴冠參北白川殿之間、親高奉行、云、御幸只今延引候了、御車寄人右大將俄被

申所勞、他人又不參、問云、右大將領狀候歟、當時依所勞無出仕、親高云、催申請文、有勞若扶得者可參由被申、然者不可被致領狀事歟、但供奉公卿別當治部卿許云々、是皆奉行尾籠歟、其後退出、依窮屈失度、自今日可服蘇山兼申假了云々、尤可然由答之、入夜付寢之後、夜半許依例事向陰所之間、痢忽下如射矢、奇思之處心神迷亂、前後不覺、召寄青女等之間、不來以前絕入云々、兩三人來扶之後、僅蘇生反吐、不能歸來平臥路上、心迷而失東西、如蟻歸窠所、聞及之輩來訪、入道同來之後漸付寢、更不得心、無指不治事、奇而有餘、只老身之衰損歟、可悲身也、

廿八日、丁亥、天晴、遲明夢覺之後、又無指事、巳時許朝

喰、無別違列、右馬權頭今朝返上殿下、御某子之次示夜前事、依聞驚來訪、相

逢陳夜前事之間、興心房被過座、即對面、受護身、被歸

之後心寂房來、相逢語去夜事、脚氣所爲歟、可疑、近日

蠅漸弱而落入飲食、自然不知入腹中歟、是反吐痢極毒

也、蠅入腹中多頓死者云々、尤有其疑、大宮三位又來

臨、辰御前正日、依仰向堂之便路、依有長朝臣說聞此

事云々、同面謁謝返、故宰相後家教雅朝臣母、隨持病

之增、發厭離之心、侍從教定之逆心貪欲、隨聞不及憂、

只祈後世菩提、居住戶加之尾、去十六日午時臨終正念

而入滅云々、實是善人歟、明兼房偏被沙汰歟後事云

々、少將遺孤於今者、只憑拾遺相公云々、實無緣歟、

廿九日、戊子、天晴、巳時許興心房入座、仍受戒、曉小奉

小袖一領、未時許右兵衛佐來臨、愁相逢之次、聞夜部

御幸供奉事、家嗣大納言御車寄、供奉、別當、左右兵衛、

治部卿、殿上人六人、近將源家定許云々、還御持明院

殿了云々、又備後前司來、相替武衛山、訪昨日事歟、於殿下聞云々、即

謝遣之、

○九月大

一日、乙丑、天晴、靜俊註記來訪、夕聞、山上惡僧等又喧

嘩、切房々關靜云々、僧徒只爲磨滅本寺在世者歟、庭

上梨子今年結子、頗有氣味、仍進殿下、入籠指花、菊已

開、

寬喜二年 九月

二百三十八

七二

二日、庚寅、自今、自朝陰、乘燭以後大雨如沃、終夜陽景不見、短晷空暮、

三日、辛卯、朝天漸晴、巳時陽景見、右兵衛督母堂入滅之由俄聞之、以忠康弔之、自北白川歸云、老病雖久又無殊事、廿八日依頗減氣、御幸供奉、昨日大略如俄事、仍所罷罷此草庵也者、北陸道之損亡、略氣之故云々、近年無如

此事、田畝乍立枯槁之由、面々飛脚來云々、忠弘入道來

談、四國又損云々、於近國者、當時雖訴訟非殊損、重陽

日女房裝束今年一度欲調送、課忠弘取其料六十課、侍從言家母堂

相共今晚城外云々、三ヶ月發心地了後疲極、稱可向有馬湯云々、是爲遊放漁獵了、

四日、壬辰、天晴、右將軍被送百首草、甚優美也、且申其

由、入夜清定朝臣入來、稱所勞由、以人令答、是百首御會作者所望由云々、籠居之身不能口入、許否早可被申入由答之了、今夜女房退出、

五日、癸巳、天晴陰、夕陽晴、今朝書訖弘決第一卷、上帖、

草子百十枚、

六日、甲午、天晴、已後陰、今朝書始弘決第一下、自殿下給百首、合愚點又注進存旨等、靜俊音信之次云、東塔常行堂衆聞諍、去廿九日夜北谷善法房被切了、上執事信賴大輔聞梨、青蓮、即時西谷經藏房、靜超聞梨房梨本、切返之、其夜又自梨本方南谷井房、青蓮院方房、切返之、其後聞諍未止、大底不異圓城寺歟者、覺寬法印送百首歌、爲合點、之次、令見職事御教書、

茲歲有豐稔之聞之處、頃月以來連雨頻降、陰陽依不克調、稼穡秀而未實云々、下民甚憂、叙慮無聊、加之二儀之變、諸社恠異、卜兆之趣御慎不輕、自今以後雲收風靜、未然消衆難、西成可再熟之由、殊可有御祈請之由、令申入給歟、依天氣執達如件、

八月廿九日左衛門權佐行盛

謹上大藏卿法眼御房

儒士之文章甚異樣歟、法眼書誤歟、爲職事者可辨人之官位歟、未時許冷泉女房具侍從來、女房等相共行吉田云々、入夜宿尾張北今小路蛸廬、方迄、雖凶會日去月靈見了、仍宿、依無門

乘輿、曉鐘之後歸、微雨間降、

七日、乙未、自曉雨降、午時許與心房被過座之次、初聞此事、承明門院姬宮一昨日五日、子刻絕入給、夜中被仰可參由、依路頭怖畏不參、丑時重有中納言之局書狀、愁參問、於正親町富小路石見守相遇、令事切給了由告之、仍自路歸、昨朝猶頻招請、不申假於殿下者、不能參之由答之、聞此說始驚之、更非筆端之所及、黃門局即出家訖云々、不聞及之條、實以不可思議、月來於事有令惱給之由、如御形貌令損衰給歟由問之、更其氣不御座、實端嚴美麗御座云々、自誕生之始奉侍、戀慕之思可察事歟、足悲、但今日衰日也、何爲哉、今年御年廿一歟、母宰相中將通宗女、承久三年八月逝去、微雨間休、櫻葉半紅、菊蕊盛開、閑庭養眼、近日或秘說云、家嗣卿繼祖跡、密々入或權門之後家、是又有事故、可謂機緣熟、家風之所扇、可謂天之令然、即是前生之事而已、後聞、彼姬宮今夜々半許奉渡東山、女院令渡督三位高橋給、只留守女房兩三殘留云々、八日、丙申、自夜雨降、巳時雖見陽景猶雨降、早旦以忠

康弔黃門局、女房出逢僊問答云々、自誕生奉侍心中察之、申時許明譽聞梨來談、有禪聞梨事也、終日入夜猶雨降、甚不便、漸及深更、雨猶如沃、夜大風發屋、風雨連々、諸國損亡之聞、逐日滿耳、

九日、丁酉、朝陽晴、急雨間降、風猶不止、重陽日、菊蕊盛開、未見如此之事、自殿下又給御歌、百首、少々撰改進之訖、女房今夜歸參、萩經實、表蘇芳句、下二、衣、桐枝、白綾、衣、文、黃

青裏下平、捻合單衣、付裏、老年、朽葉表襲紅引へギ二藍、依今日物具用、面白浮織物、唐衣織、絹紅袴、練緯小袖、雜仕去本物、白菊、裏黃文菊、月下句遭世喪、仍今一人、不結、薄、芳草衣給之、戌時許參訖、以青女爲使、令參大炊御門殿門前、重問子細、鹽

湯第六日、四日、頗違例御氣色、又溫氣御坐、加護身、殊事不御、依醫申猶御湯、入夜又頗雖有奇御氣色、無事而天明、五日心地事外宜由被仰、又御湯、臨昏猶被仰

心地無事由、先々無如此事、頗足奇、秉燭以後俄振給、有御言語、無、御也、本性戀、御同少云々、驚奇奉抱給、凡不及是非之時刻、即時令振給、戌時御氣早絕、喚嵯峨相信房刺御髮、又雖剃白髮、

御氣絕之後也、女院即渡御高橋、次日猶雖奉守、御色次第變、七日夜半奉渡吉田本墓堂、土葬、範綱等在其堂、此院人跡絕、只女房六七人留候云々、誕生奉抱上之後、一日不奉放目、體貌閑麗、心操廉直、戀慕之思不可堪忍云々、如範綱上人事、大納言雖有沙汰之名等、閑似無音信云々、時儀又非可恨歟、他腹弟姬宮一人出家云々、和馴慈惠之暇故、不堪戀慕云々

十日、戊戌、天晴、風寒、每朝書弘決七枚、入道法師來、諸方損亡事等雖一同事、狹少之分限、無其計事等問答云々、覺寃法印返送歌之次、鎮西滅亡之飛脚今日到來云々、觸視聽計會、

十一日、己亥、凶會通過、天晴、入夜雨、朝書九枚、定修來、山僧

惡徒自使驅被召出云々、入夜自右大臣殿給百首、

十二日、庚子、翌日、天猶陰、微雨間降、朝書寫七枚、自殿下又

給御歌、未時許兩御歌重加恩點、各返上之、明日有臨

時奉幣云々、新三位顯平、其儀同祈年穀歟由音信聞之、

信盛催之云々、依天變佐異歟、諸山諸寺狂亂、尤有恐

事歟、夜半許出臥內、左膝忽如折、不能踏立、股脰苦痛難堪、惡人歸寢所、如無片足、苦痛無極、令打付寢、

十三日、辛丑、自夜甚雨、左膝更不踏立、朝見之股脰足

大腫、昨日雖不思覺不庭行步、中時無殊事、是只夜間事

歟、即大腹水腫之病歟、聞人上殊可悲之病也、雖有限

之壽限、病體尤痛思、以書狀問心寂房、凡此秋心神違

例、於事不尋常、連枝十餘輩、六角尼上之外不滿七十、

依思無益之事、不覺知此事、悲而有餘、興心房不慮被

入坐、雖對面非醫術人、心寂房有急事橫災不來、彌無

憑、終夜聞暗雨打窓之聲、

十四日、壬寅、朝天晴、風寒、辰時許心寂房來云、無異

儀、脚病之腫也、雖非安事、不可存一定由、加灸點鳩尾

胃管、依今日憚此一所、明後日可灸、風肢脰三足二、興

心房被坐、受護身、兩人先歸、宰相來、蘇後七日過、依咳病未出行、即始

灸八ヶ所、申時無爲灸了、腫上頗不熱、入夜聊行水、

依恐渴氣、只沃懸、今夜無殊事、家長朝臣再送書、初更不知病

十五日、癸卯、天晴、腫無術、申後偃臥、

十六日、甲辰、天晴霜凝、巳時許心寂房來、當時無增、灸

胃管、世一稱無殊事由、未始許歸了、宰相午時許來、此

疾之後心神極弱、無事惘然、自殿下給御書、以宰相令

申、申時許入道思弘、自長者僧正許歸來、嚴海法印吐難

澁詞云々、此事皆自本所推察也、甚無由、不可交事也、

高野大塔庄廣博所、背衆徒之心、任寄進立旁、上人讓可知

行由、覺仁法橋所訴訟、申入殿下、可申宣旨由有相

語者云々、所既廣博地也、與衆徒諍論事、有冥顯之恐、

道不可得事也、只依一旦之貪欲、不辨是非懸望、是年

來同宿之妻子之所好也、予自始不加詞各奔營、中付右大將

范蠡之長男、隨世之所好、爲楚使人之所好、制而無

益、其事宮女房依懸望、自殿下可被問長者、長者又內

內可相語歟由、右大臣殿被仰侍從宰相云々、仍以忠弘

法師今日所示送也、今夕心神殊損亡、甚庭弱、夜漸深

更、上南面之蔀、暫見月、頗慰心之後付寢、

十七日、乙巳、天晴、雪凝、朝間每事同昨日、宰相夜部依

俄召參殿由傳聞、是例事也、凶年下民之變、惡徒、同譯之世、通禁外聞此事無由、後聞、依明月

被召例五人、參泉至于夜半祇候、諫風尤不便、退出之間、中將

兼教雅長伴來云々、此次進馬、極叶御意、自井米等修理亮奏稱、一日此引

送云、自相門以主殿允其有御訪、面謁申病子細、令見腫、

又歸來蒙恩言、今日無殊事、靜俊注記來談、諸國損亡

非視聽所及云々、

十八日、丙午、天晴、霜凝、去夜今朝殊寒、午時許宰相備

後來、令見病體之後、隔物言談、申始許歸、今年三月九

月定分死由良算所勘送也、而迎今月有此事、恐而可

恐、但貧者無可買命之術、又非可惜之身、阿彌陀護摩、

自廿一日、可被修由今日亦送別當法印、在宇治云々、入夜前越前

守朝臣來訪、今日聞及由也、有小瘡疾、明曉下向有馬

云々、言談良久而歸、此兩人於事有其好、是各心操落

居之故歟、於予雖不可存親由、父朝臣自少年之昔、致

丁寧之志、深有其好、此子息又各穩便之心操也、仍存

芳心事、互不異一門之好、故兵部卿自同宿之昔、內心

不似予存、始終雖失本意、予如不存不知、至于遁世以

後、云付重家事、更有本懷之詞等、然而至于今日觸彼

寬弘二年 九月

二百四十二

七六

緣有無由、事甚以遺恨、近日又於志深庄、爲母不孝惡逆云々、惣不善之本性、云而無益事歟、

十九日、丁未、天晴、薄陰、已後晴、入夜俄大風雨、已時許心寂房來、無增氣、於今は可待灸之爛、若有不爛之氣者、重兩三可灸之由示之、又令取腹、腹中無別事成茂宿禰來、社司年來之第二頼貞去春死、惣管此間老病增而危急、頗依有秘氣、不見其體云々、親昵之中何及隔心哉、輔成所案歟、菩提院禪閣姫君、當時之腹、亞相一腹昨日辰時入滅云々、端嚴長髮之聞世所稱也、修明門院坊門局、光卿女、按

典與侍、依願病籠居云々、法印公曉、被來訪、以人答申、入夜聞、禪閣姫君二人被坐是姊云々、自春長病或增或減、去十三日請明惠房出家、年卅其後無爲、禪閣母儀皆歸

菩提院給、木綿女房侍僂少々相遺、十六日夕此所有憚、可向無常所由、自出立乘輿一町許被渡他所、母儀本白被占此所、自其夜高聲念佛音不絕、十七日辰時終、往生無疑云々

廿日、戊申、雲慘雨濕、間晴、已時許宰相來問、自相門被召、參向了、森後初備州又來談、令見百首歌、今度宜由答

之、夜前今朝腫體雖同、踏立足聊似宜、不披露之、夜猶時雨頻、

廿一日己酉、朝天晴、腫猶雖同、昨日踏立足、頗似無煩、見南庭菊花、短晷空暮花已移、

廿二日、庚戌、天晴、午時許覺法印來談、七條院御忌日、一日八講於歡喜壽院可被修由、自修明門以定俊被申御室、彼院寺領皆無實力于修理荒廢、被修中院御佛事、柳殿何事候乎由被申之後無音、十四日入夜弘亮奉書、御八講乍置歡喜壽院、於他所被行何樣事乎由被尋申、今夜及深更、明後日事如掃地、猶不可叶、何樣可候乎由俊朝申之、猶於彼寺可行由被仰下、定俊又自柳殿更運渡一日八講於彼寺、深更始之、御室依御咳病無御渡云云、自昨日禁裏五、擅御修法、信盛奉行書御教書、園城寺長吏僧正ヲ長者僧正御房と書之間、使付表書行親嚴僧正許即領狀、第二仁和寺尊隆法印勤之、可候軍茶利由仰之、領狀退問傍外賢海云々、驚奇訴申、信盛不知僧之位次、只於定高宅尊賢海事如重君、存萬人上郎由

歟、更改請、親嚴蒙請之後改定無謂由訟申、爲慰其憂
嚴海參大威德金剛夜叉快雅云々、自然移時刻、酉時歸
之後宰相來、參右大臣殿退出大定高山衆徒狼藉事、爲不被仰合
申參春日由、殿下在南京由、御存知此間事不被仰之
間、參長吏法務御房之次、定高被處梨本男山事不被仰
合由申、法務申殿下給、如例無御答云々、凡世上事更
以不足言歟、今日殿下無人寂寞、無參入人云々、

廿三日、辛亥、天快晴、備州未時來訪、內陪膳次云々、今
夜行啓一條殿、室町曉還御云々、靜俊示送云、二宮之

後山杉木多生之由、宮籠夢見之後、人々行其所見之、杉

木不知數生長、此事無社頭先例、不知吉凶云々、今案定吉想歟、又狹狹生二子、此事先凶事

云、戌時許宿今小路北屋、北小路北、富小路南、以此所爲本所、後

開、行啓右大臣殿、御車大納言雅親、家嗣、中納言高實、

具實、參議經高、爲家、三位基保、實有、公長、親長、啓

陣責任、實直、兵衛公員、定具、衛門兩職事、殿上人七

人、宮司亮大夫進親氏、還御、大納言二人不參、

廿四日、壬子十月朝天陰、午後雨降、申時許微雨、鷄鳴之

後歸、半月東昇、不取松明、仕運州手具

廿五日、癸丑、自曉甚雨、昨今精進、雖有念誦之志起居

極難堪、自殿下再給御書、御無事也、其次延曆園城南

寺不靜、凶年不熟、下民之憂旁聞、此間百首御會尤被

延、暫可被過此聞乎由申之、本自有御存知由被仰、

廿六日、甲寅、朝天晴、午時許心寂房來、灸之爛如存漸

漸付減歟由示之、但風枝之灸不爛、今七壯可灸、仍八

壯灸之、四十五本廿七、入夜大膳大夫一昨日所勞事聞及由來、

予以人謝之、

廿七日、乙卯、天晴陰、此間頭熱眼昏、仍沃菊湯、讀岐前

司今日被書送、衆生等之額、予輕微宿願、吉富庄之

旅人往反大道之邊、令立萱萱小堂、奉安千體地藏、故

定置此名、無佛世界、今世後世能引導云々、冥

途之伴侶、只奉仰此誓願、午時許宰相來、夜前被行僧

事、權大僧都行超、不知人、權少僧都慈源、受戒、禪師夜前大

相幕下參殿給云々、明日相門又圓明寺、紅葉之盛云

云、大將宰相尊實々持中將等供奉云々、未時與心房被

萬曆二年 九月

二百四十四

七八

來談參殿下退、出之次、之間、有長朝臣又來臨、相替被出、清談自

然及夜景、世間事等相互示合、病者安坐、雖經時刻、依

元久之舊好、有時談歎息之心、夜深女房退出、

廿八日、丙辰、天晴、殿下給御書、百首又々出來御歌可

撰合由也、即取捨返上之、前修理又音信歌事也、病中

不能分別之由答之、櫻梨檀梅等紅葉淺深滿望漸欲落、

廿九日、丁巳、霜凝、天晴、去比或槐門依世途之險難、御

領一所可給之由、懇望安嘉門院、依家領之隣、被申安樂

壽院領、依有鳥羽院御遺誡等不許、忍怨事更無道理由

緒、嗚呼之由有沙汰云々、事相一日所語也、以勅語承之云々、一日覺寬法印

言談之次、此事又以書狀切々被申御室、仍欲被求宛其

所之由語之、予此次語相公、相公奉語右幕下、右幕下

被聞驚、忽被申西郊、此事更不穩便、奉爲本所還可有

外聞之誹謗、沙汰不可候之由也、所被申本意、此兩三

年被資伏之由御返事、以相公書狀昨日可一見由被命、

偏是百里奚歟、悲而有餘、秉燭之程女房歸參、

卅日、戊午、天晴、無霜、申時許宰相來、自右大臣、殿退出、權辨爲

經去比有南都之訴、於勅使訪魚鳥料理飲酒高會、去

年事今年不可□□云々、仍被仰右少辨光俊、依清貧無

從辭退、昨日內裏召、以內侍殊被仰、猶固辭、雖何樣被

仰下不能參由申、勅定何樣と申、即解官歟由被仰、仍

信盛又所望馳走云々、今日殿下召光俊、猶廻秘計可下

向、及解官者依不便、有御教訓由被仰、猶雖不承伏、依

內々仰懇承諾云々、維摩會探題又別當被稱障、每度、仍

權別當僧正殊次有出仕之志、而定重有勤仕探題之志、

本下臈僧正雙而勤仕無面目、枉被止、彼子圓經可勤由

今日參仕懇望云々、甚無謂自由望歟、殊樣事也、慈賢

補法性寺座主云々、實驚耳目事歟、即是得時也、明日

欲參平座、射場始早速之由有聞、除目來月可被行云

云、今日秋季御讀經可被始行、上卿闕如延引云々、一

昨日相門自圓明寺歷覽遊訖松尾法輪嵯峨等紅葉、於

嵯峨入夜云々、大將宰相頭中將實持中將尊實法印等

供奉、暮天遠晴、秋景空過、依思病身、重悲再會之難、

^{頭注}行超後聞、前院御子一品親王□□子、大宮殿腹也、

○十月小

朔日、己未、朝天陰、未後微雨漸降、午時許心寂房來、風
枝折中央、灸二所猶無烟氣各重灸、風枝八壯、肝大壯、示無殊事之

由歸了、靜俊來、山上事只如日來云々、黃昏雨中有長

朝臣來臨、傳仰雖可謂本意、於重病身彌不堪、本望事

可書進委細狀之由也、^{款力}猶偏被窺天氣者、定雖達三漏

歟、後聞、平座、中宮權大夫、新中納言、侍從宰相、右大

辨時兼朝臣一人、只一献、光俊迎參不著座、少納言兼

綱、上卿奏見參之後著座、仍給目錄云々、

二日、庚申、朝天晴、日吉禰宜親成一昨日死、去月來老

病有若亡云々、今年八十九、好九十之賀算惜其命云

云、成茂丁壯惣管社務、定得時歟、申時許備州來臨、依

二品親王仰向嚙峨、寫善導影之次、入心寂住房、樹木

前栽之幽趣驚目、此病已施驗由自讚云々、秉燭之程

歸、

三日、辛酉、朝霜如雪、陽景遠晴、富小路中納言送書札、

献舞榭櫛事也、所勞雖獲麟、存命者可挿心由返報、右
大至殿又給御歌、以家弘爲使、依頓病之危急日來懈怠
由、示送右武衛許、有委細返事、

四日、壬戌、天晴、閑居病者無音信人、短晷空暮、

五日、^{癸亥、凶會、欠}自朝天陰、入夜雨降、未斜心寂房來、

灸體只同先々云々、及秉燭宰相來、北政所御參內、參

御車寄、右大臣殿可歸參由依被仰欲參云々、五節盛兼

卿一人之外惣無領狀、宰相中將宣經可去職由申云々、

梨本下手可出之由頗有被申旨云々、是內々綸言之趣、

二品親王承之、傳彼法親王給之故云々、日來梨本門徒

天氣快然、武士引我方之由名稱云々、相門湯山下向事、

幕下被申止云々、

六日、甲子、朝雲分、陽景見、已後晴、無音信之人、芝跡

之爛難堪、宜秋門院結願、定高、賴資、家光、知家、布

衣、基定、親長卿參云々、殿上人無人、

七日、乙丑、霜凝、天晴、前修理權大夫來、以人謝之、百

首草可撰定由也、病席無術之由答之、證寂房來臨、扶

寬治二年 十月

病相逢、大學頭來、昨日所草之狀、雖有耻憚令一見、枉可直付由詔之、偏吐褒譽之詞、更無所言、尤腹黑非本意由示之、入夜宰相來談、歸後沐浴、

八日、丙寅、天晴陰、未後少雨漸密、與心房來座、言談頗移漏、被歸之後、但馬前司來臨、自然移漏、酉時許雨後退歸、雖滿十五日甚雨、不宿他所、

九日、丁卯、天晴、病中書狀書一通狀送典厩許、他行云云、臨昏又送之、於殿下尋逢進入訖、有御感之由示送、乘燭宰相來、昨日新僧都御房參所々給、有可參會命、相門、辰時云々、巳時參殿下、束帶、徒日臘、及申後令參給、御共、隆承公實宜卿子、可被川一人歟、成真家時子閑梨扈從、有上童

云々、次女院又參會、引導兩女院御方、次參內、又參會、弘御所令入見參給、次宮御方濕雨、入夜退出、今日北政所御退出、御車寄又早參日臘、申時許參殿下、只今退出、世事不聞、例事也、五節美作、大納言、家關卿、尾張、納言、今一人被責、三條大納言、中宮權大夫、別當、大辨勞各久人可昇進由、雖無關馳走、實有卿申參議、內々仰不

仕之人暫可休息哉由、粗雖聞之、不知其闕有無云々、亥時許乘手與宿今小路小屋、聞曉鐘一聲歸廬、此近邊猶以欲剝獨往女衣云々、況京中之南方白河之方盜賊公行云々、兵衛佐送使者、禪門病又待時、

十日、戊辰、天陰、未後雨降、終夜如沃、伯三位送使者問病、

十一日、己巳、朝天陰、微雨降、未時雲漸分、陽景見、自殿下賜御書揮懷中、待入眼於無關無其術者、於御志者所存已定、申終又甚雨、日沒之間又晴、夜猶雨降、乘燭之後宰相示送、明日北政所入轎御參詣、口來參御共由聞之、延引來

十五日云々、除目又延引來二十日、只今自殿下退出由者、

十二日、庚午、朝陽漸晴、漢雲猶暗、巳時許備州來談之、間心寂房來、重示療治事等、宰相又來、備州云、山門猶狂亂、今明欲及大事云々、猶不出下手之由也、於綾宮聞之、三井寺三別所付南院、讚岐庄、承久以後沒官歟、付北中院之由關東成敗、仍無落居云々、宰相云、欲棄能州、此事僻案無極

之由答之、甚不便事也、

十三日、辛未、天顏快晴、午後陰、入夜大雨如沃、靜俊來談、山上猶噉々云々、今日使家僕堀乘前栽北庭、爲麥壠、雖少分爲支凶年之飢也、莫剛貧老有他計哉、入夜宰相來、參殿日臘、不聞世事、明後日八幡御共公卿一人、殿上人師季、能忠、實經、時綱、源家定朝臣可參云々、侍從公光祖母禁色戀所望、殿下仰於非據者奏聞先了、其上於有勅許者不可難澁山、尤可然事也、七代絕了、非相將子、但乳母子之幸、成範中將、循範少將可比之歟、

十四日、壬申、天明雲分、陽景晴、風又寒、讚岐佛田一村可被免國檢之山、信綱懇望云々、昨令申相門、仰遣行兼許了山有御返事、仍其旨示含章行了、檢非違使爲信綱母儀、頻被申此事、去年申請相門事、同此男所爲也、夕九條大納言殿引給栗毛馬、依心寂房失馬所申請也、付使給之、尤感悅、入夜沐浴、

十五日、癸酉、霜凝、天晴、水初冰、昨日馬曉更引送心寂許、今曉北政所御物詣、天晴風靜、尤以神妙、馬無用之

由示之返送、甚存外、

十六日、甲戌、朝天陰、終日雲暗、夜月漸晴云々、萬邦之飢饉、關東權勢已下減常膳之由、問巷說滿耳云々、原憲之樞、雖非病難存命歟、長病無期、短晷早暮、臨昏參社青女等歸云、衆徒昨日於梶井兵庫久良倍山上、今明可滅亡之由披露云々、

十七日、乙亥、朝陽晴、宮女房告送、昨日左大臣殿令參給、山門事等多有令奏給事等之次、聊令申出給、天氣強無御難澁之由被語仰云々、不述之身戀前事、雖兼不可憑、不思切之間、還摧心肝者也、申時許有教中將被來訪、依宰相來令謝之、只病訪也、兩三度問答、宰相雖參右大臣殿無聞及事由、只例事也、殿下人々濟々參云、世事甚不審、或云通方卿昇進云々、不仕之輩若去官歟、不聞及、

十八日、丙子、朝天晴、間陰、時雨灑、未時許住吉神主國平來、於簾中相逢、今年山口祭、國司申延七月如形遂之、今度造營惣不可叶事歟、境論事又沙汰、縱橫無聞

寬喜二年 十月

二百四十八

八二

分事云々、

十九日、丁丑、霜凝、天晴、橘樹作竹屋、午時許與心房來相謁、心寂房來臨、隨灸瘰癧漸々減歟、但三所許又可灸歟由示之、重疊之灸殊難堪之由答之、又自然可見事體由示之、宰相來問、心寂房歸、後問世間事、參右大臣殿、只今退出、左大辨參入、納言懇望事申之、侍讀九年、大辨參議六年、無如此沈淪例、見任公卿一年一度參內人多歟、勤否玄隔、雖無闕可有恩山云々、又一旦之理歟、別當又馳走云々、但除目不可任下名^{廿三四}之次、有人々昇進歟云々、大中納言之第一依不仕若可被罷歟、定高卿止納言、以小男任辨云々、近代之辨偏嬰兒之任官歟、兩頭申參議、有親罷辨申頭、儒辨依無其仁信盛又懇切、^{雖無才非器}於兩職者不可兼云々、藏人兼高當仁歟、於資賴朝臣者今度猶不可昇進歟、實有卿本自被舉之、如聞者新任參議皆以不中用歟、雖有無論之儀、於朝廷猶可被思慮事歟、愚老事世間又已謳歌云々、題如前者彌可增身耻、末代人口太不穩便、是近臣之洩事之

故而已、通方卿景氣似宜、國通卿無病可奔走由申云

云、本自非實病歟、伊平參殿之本意在此事由馳走、^{今度}若無

^{沙汰}歟

廿日、戊寅、天晴、風靜、巳時許禪尼令參詣社頭、^{當社不擇日次、}

老屈微述之身、神道佛界倦于今生之所請、然而依年來

之餘執、今日令參詣也、山法師之下法師四人奪路人之

劍、依叫喚雜人追捕、搦二人射殺二人云々、惡徒謀反橫

行洛中太不便事歟、捕得者向河東云々、家仲月來城外

之由來示、若是伊相公之令伺見家仲之形勢歟、答重病

籠居山、事趣猶依不審間宮女房、答無聞及事之由、入

夜又有書狀、申右大臣殿、於重事者下名可被行、但不

可有闕云々、若是御變改之故歟、

廿一日、己卯、天晴、午後大風、巳時物詣歸來之後、聞書

到來、復任、^{參議伊平、侍從基平、}民部權大輔平親衡、刑部權少輔藤

俊季、中宮權大進藤高嗣、光國、少進惟長、^{後聞、元權大通}

^{肥後入大間依被止、}左將監四、右三、左門三、右三、左兵四、

^{執筆令檢點給、}右五、左馬三、右馬二、正四位下平業光、正五位下藤朝

朝

輔、從五位上高階基重、藤爲清、父長清止、民部中之一、秉燭以後宰相

來、夜前開無人數由參內、內府始給、以下濟々、大納言

家良、實親、家嗣、中納言公氏、高實、參議六人、伊平宣經之外、

執筆、右大、依人多即退出、院宮御中文別當下勅文左大辨、右大辨清書云

云、公卿事下名可被行、其上存外可有重事、聞驚不少、

可謂言語道斷歟、右大臣殿俄令上大將辭退表給、一上

兵仗之望懇切、依無例爲憐愍有此事、只如夢、夜前公

氏出仕、天氣不快云々、

廿二日、庚辰、天晴、大學頭來訪、扶病相逢、秉燭以後宰

相書狀、下名可爲廿五日云々、御表廿四日、御拜賀兵仗、來

月三日云々、下名遲引、如承久三年冬例

廿三日、辛巳、霜埋庭草、朝陽快晴、飯室入道殿一昨日

令下山給之由有御消息、御坐九條付房云々、秉燭以後

宰相又來、昨日右大臣殿終日御坐內裏之間伺候、今日

又參御里亭、予所存委細雖申無承分旨云々、明日御上

表已露顯、定高、經高、家光等卿可參、爲經奉行、來月

三日兵仗、御拜賀、九條納言、爲家二人可扈從云々、推

之競望之妨等又申破歟、於予者本自老病之最中也、自

昔不運沈淪者雖多、再可昇進由爲人之口遊、而空漏恩

者未聞事也、在世甚無益、急以此病終命、第三事歟、

廿四日、壬午、自夜天陰、朝間微雨、已後止、宮女房書

狀、一昨日申右大臣殿、殿下懸御意、但其闕不定之山

被仰、又日夜候龍顏、非此、無不快之天氣、只仰彼蒼云

云、昏有長朝臣來、稱御使由、驚出逢、所望事更無御披

露、誰人所聞哉、深雖採御意、全無其闕、定高卿大辨可

任者可去官由申、辨官不闕者不可辭、其外雖競望多、

無關官由也、於不被任者實非此限事歟、如巷說者弱冠

皆被任云々、七旬病者更難待後榮之由申了、大將御辭

退事殊承驚、迷是非由示了、今夜歸參可記進兵仗宣旨

云々、兩卿可能官之由誰人所云出哉、已以無實云々、

廿五日、癸未、天晴風寒、午時許女房書狀、夜前殿下御

參之次、仰當時無闕、先日申旨未奏、捧心中相待事次

之間、忽辭案成卿之由聞之、當時全無所闕、又無可任

人之由被仰云々、於無關者實雖力不及、依聞競望拜任

寬政二年 十月

二百五十

之山所增耻也、於無其人者又可期無期事歟、申時許宰相自右大臣殿示送云、今日狀重被進御直廄了、御返事未被仰、善惡事未切云々、同刻有長朝臣書狀到來、自今朝稱々御秘計候、事未切、可有御祈念歟者、只今無爲術、送書狀與心房許、入夜右大臣殿仰、只今猶奏聞、更無疎略之由殿下仰云々、宰相使也、候一條殿云々、又置使者禁裏局、可告吉凶由示付之、鐘漏漸移、書信未通、亥時許女房書狀、殿下仰、闕已沙汰出了、今夜可任之處、其次々事繁多、只今不沙汰訖、仍來月二日可有除目也、更不可成遺恨、可相待也者、次第延引、魔界之恐雖難堪、仰趣已以莫大之深恩也、心神迷惑周章之外無他、少時有長朝臣來臨、言談良久、雖密事、大略忠房卿已被仰可辭由領狀、定高卿於大辨任者辭退勿論、大辨昇進者大理不可被越、仍今一闕、已被定了云々、此事猶無披露、當時只三位中將殿之由令申請給云々、通方卿、隆親、家光、實有、基氏事大略一定歟、辨信盛、忠高、藏人兼高等歟、於今者不可成不審由、頻雖相

示、事之障礙尤難知事歟、兩日光臨、日來傳奏芳心之至不可云盡、退歸之間宰相來、今日々臘、殿下只今御退出、依召參御前、不可怨之由能々可傳由仰事云々、此御秘計更以不可申盡、今夜任人左近大將良平、中將有資、右少將賴行、主稅頭在親、長衡辭、從三位通忠、中將如元、中宮權亮顯定、漸及曉鐘宰相歸、猶不能付寢、及鷄鳴、

廿六日、甲申、霜如雪、天快晴、午後陰、靜俊來談、依此事日來參籠社頭、聞一昨日由、昨日成怨下山、示含子細、今日又歸參云々、只恐青蠅耳、午時許心寂房來、腫當時無減之條、是猶存內也、又漸有付減之氣、此腫病之體物于療治有驗最上之樣也、自斯早速之減、本自不存由示之、秉燭以後忠弘入道歸京之由來告、依無聞分事馳上云々、宰相又來、於吉田例事不聞世事云々、雖夜深自是參右大臣殿、

廿七日、乙酉、天沍陰、未後雨降、臨昏甚雨、自殿下賜御書、能々扶病可致療養、愚意之所存不可定、或不仕或

有事故罷官職人、公卿補任之所見可注出、爲心中存知也、仍所見事大略注進、入夜雨、國平來問、一寢之後夜半、東有火、驚見川崎之東小屋、堤小路、四五家壞止云云、其後病苦不眠而達曙、漫此間、而鐘漏遲、

廿八日、丙戌、朝天漸晴、未時許宰相來、自曉詣吉田、與州馬五十疋入洛、被撰見云々、昏參右大臣殿了、昨今無聞及事云々、日來依寒風甚雨不宿本所、今夜宿北邊小屋、聞曉鐘歸、

廿九日、丁亥、遲明俄雨降、辰時陽景晴、女子香、參詣

社頭、明後日殊可抽信心由示付、今日無音信人、不聞世事、入夜宰相來、參右大臣殿、殿下御方大相參給、不入見

參、資經卿自八月之比稱不詣由止姬君、有大臣殿、御方之奉

仕、此間又可奉扶持之由申之、變改送旬月、又申旨不

可然、於今者不可奉仕由、以有長朝臣被仰云々、彼卿

本自其性不落居、無思定事歟、尤可被追却歟、爲經朝

臣爲年預、定無始終事歟、

○十一月大

一日、戊子、天晴陰不定、不聞世事、入夜宰相又來、明日本自非被定日云々、但明日參內可申定由殿下被仰、當時無變改御氣色云々、廿八日西方客星出、甚不吉事云云、徒送日數、定諸方之障礙出來歟、歎而有餘、少時歸參訖、

二日、己丑、霜凝、天晴、申始許宰相來、候殿下御前、今日可有御參內、無被仰事云々、右大將依御消息被參、即令闕給、有被合事云々、宰相可伺大將氣色由示付、又聞事體

非今日歟、何爲哉、入夜良久女房書狀、又非今夜云々、

猶必可被行事也、可憑思由北政所仰云々、今夜御入內

云々、已涉旬月、可期何日乎、亥時許宰相又來、雖參右

大臣殿、々下北政所未還御、幕下今日被參、不被任少年

之競望只今申請、中將殿御分給被任老翁一人可宜由

計申、被命云々、此事於朝議者雖可爲尋常、末代之儀

不可叶其馳走之衆心家光隆親互昇進、基氏念思之故、

自然可有無偏之化、不被行上御大切事、被抽無緣舊老

一人事可固於石、似被中止枉事實、是被遏絕無緣者

寬弘三年 十一月

二百五十二

也、甚無由、終夜甚雨、

三日、庚寅、曙後雨漸休、天猶陰、陽景間見、午時許興心
房入坐、冥顯魔姓之障難、悲而有餘由陳之、不可思切
之由頻被答、臨昏大風急起、初月晴、奇星見云々、

四日、辛卯、天晴、傳聞、夜前右大臣殿兵仗御拜賀、扈從
中納言定高、先被臨九條中納言、故
障云々、不達祓之口歟、參議爲家、殿上人師季

、宗平、有教、實持、親季、有長

朝臣送書、除書延引歟入候、然而種々御秘計子細等

候、暫可令待給、尙々申入候也、不可有御不審者、事體

無異議御變改歟、依有申破人、令恐憚世間給歟、於今

者更非可憑事、夜天晴見奇星、此星臘々光薄、其勢非

小、去二日泰俊朝臣示送、自一昨夜晦日、奇星現辛

方、在織女東天津良奚仲傍、其體客替之疑候、未及光

芒、如當時者客星之條無不審、客與替大略雖同體、占

文各別、其重變候、依事恐候不注進本文、未蒙密奏宜

旨、雖不及披露、如此時不出詞、近來彼處不伺見候、依

無由事內々言上、若事次候者可得御心候、答依病體居

由訖、

五日、壬辰、霜凝、天晴、傳聞、近江小野庄依本主死去、

內裏二品依宣旨知行、下遣使者之處、基忠入道稱寄山

門、所司前當宮仕法師下向追出二品使者云々、山僧偏

謀反歟、御乳母猶如此、況餘人乎、未時許備州來、客星

事上下殊驚恐由粗語之、不及子細、少時歸了、入夜宰

相來、今日參內參御前、具實成實廟
候、無指事、無聞出事云々、奇星

事、先例寬平九年、延長八年、寬弘三年、永万治承三年

有此事、甚不吉云々、但寬弘三年全無事、最吉聖代歟、

皇子降誕之嘉瑞耳、其後除目無音又云々、既十二月歲

內公卿昇進可有大除目云々、彼是縱橫此事無沙汰、實

力不及事歟、一昨日御拜賀、定高卿有
長連參、不待出御四殿、令參

殿下給、忠高申繼、北政所御方、實持中將申之、次北白

河院、有教御共
之中、申之、安嘉門同人申、御送物每度宗平

取之、師季御車簾、實持御沓、次內、宗平申之云々、左

大將隨身武直、衛府長也、武
守不孝之子、殿下一座季武被補番長云

云、一旦之
幸歟、

六日、癸巳、天晴、風寒、夜西天陰、星不見云々、無音信之人、宰相手有瘡、依苦痛不出行云々、

七日、甲午、天晴、風寒、寬治大納言殿御忌日也、宮女房書狀之次、明日殿下猶有可待之仰云々、是何日事哉、二條中納言執事之山、上童一人裝束色目有消息、近日之體有若亡勿論之由返答了、定忿怨歎、不可痛、入夜之後與心房引率門第五人被修廿五三昧、如形布施一昨日送之、曉鐘以前終事、被歸了、宿小路所也

八日、乙未、霜凝、天晴、北山雪白、客星事、依不審問秦俊朝臣、返事如此、曉夕東西之條驚而有餘、客星一昨日夜前全現候了、出現以後去二日陰雲不見候、其外者天快晴、連日見候、而此兩日者無引連、天曉見良方候、曉夕東西出現候之條以外候、

客星出現例、皇極天皇元年秋七月、甲寅、客星八月、陽成院貞觀十九年正月廿五日、丁酉、戌時、客星在辟、見西方、宇多天皇寬平三年三月廿九日、己卯、亥時、客星在東成星東方、相去一寸所、醍醐天皇延長八年五月

以後七月以前、客星入羽林中、一條院寬弘三年四月二日、癸酉、夜以降騎官中有大客星、如熒惑、光明動耀、連夜正見南方、或云、騎陣將軍星變本體增光歟、後冷泉院天喜二年四月中旬以後丑時、客星出指參度、見東方、宇天關星、大如歲星、二條院永萬二年四月廿二日、乙丑、亥時、客星慧見大微宮事、高倉院治承五年六月廿五日、庚午、戌時、客星見北方、近王良星守傳舍星、午終許心寂房來、事外付減之由加詞、但惡血之充滿非飼蛭時極難治云々、常隨給侍之小婢、依母病危急行南京、老病之最中失手臂之便、

九日、丙申、朝天晴、春日祭日也、康平御忌日有限之日也、仍入夜可被修由申付與心房、未時許大宮禪尼來談、去五日入夜歸洛、侍從同來入夜許始廿五三昧、宮女房適退出、明後日、十一御着帶云々、除目事殿下仰猶途可被行之由云々、五節以後云々、次第延引、只依申妨人多歟、更無其憑、右大臣殿又不可懈怠、猶々責申之由今夜被仰云々、曉鐘以前事訖、

寬弘二年 十一月

二百五十四

八八

十日、丁酉、自曉初雪降、雖隱庭草不及寸、明日故左大臣

殿十三年御忌、一卷經之捧物綾被物一重奉入條、後家、御坐、

鳥丸宮、無量義經一卷先日進飯室了、入道大納言殿、近宅云々、

御也、座主明日會合經營給云々、午時許長者僧正被過

談、參賀、歸洛、寺領等損亡又以不便云々、此間被修事等、二

品親王藥師、座主佛眼、圓滿院僧正八字文殊、覺朝北

斗、覺教、、長者於東寺講堂可修仁王經法之由被

仰、作堂被安仁王經法覺陀羅、大師御建立也、久絕不行、今承此事、但依無用途

延引云々、定高卿辭官非舉子息一事、惣厭世事、好籠

居之志逐日加增、剷除之志不可過兩三年歟云々、此事

所詮只做潜陶之體、而非道心歟、去夏辭退殿下御領、佐夜、

一付、被、被苑中宮御相折、不堪勤仕可辭此所由申、即被

納受、又成、怨歟、大理大丞昇進世以謳歌云々、師檢雖年久、

依外聞無由、予身上事不出詞、三位中將殿御昇進尤被

怠歟由相示了、聊養盃酒粥等謝遣、左大將御營等無物

散々云々、夜深宰相來、右大臣殿正月御產可爲九條

殿、而有今年之疑、於節分以前者九條有憚、當時之西

殿又如此之時不被用、仍被尋他所之間、又冷泉小屋可

借進由云々、尤可然事也、但家中雜人定不請事歟、九

條殿又左府無行方由周章、依此事定至于春被收公歟、

五節以後可有除目歟由、雖有髣髴之說定日不聞云々、

定是無性體事歟、

十一日、戊戌、天晴陰、甚沍寒、曉鐘以後女房歸參內、北

政所今日御入內、宰相參御車寄云々、後聞、頭中將自北白川院持

參御帶衣莖平裏等如恒、居盡、自取之付女房、次大進忠

高給之、持參二品親王、護身訖歸參進入、次權大夫問

時、忠高問之申歟、次宮主御禊、亮陪膳、忠高役送、次在親奉仕

御祓、役人同之云々、御帶女房權大夫實親妹、取之、御匣殿

被取進、主上令奉結給、北政所又令候給、役女房二人

白衣重物具濃打濃袴、後聞、八條御忌日昨日南京堅

義、味圓律師聖者云々、今日天台堅義、定高、爲長、長清、基定、以信、信實朝臣、能定、諸大夫家盛、忠實、昨

日爲長、長清卿、長成奉行云々、

十二日、己亥、朝天陰、少雨瀟、午後風雪霏々、未時許四

位侍從來、歸京之後今日參女院、安嘉門院白地渡御北

白川殿云々、風雪降止、臨昏小婢歸來、母病雖重、非危急

十三日、庚子、宿雪在屋上、朝陽晴、昏越前々司來、左府

御拜賀、安嘉門院々司申繼、問其作法、粗答之、宰相來、

東帶、北政所又御入内、御車五節之間殿下左大臣殿皆

可御々直處、帳臺參人、殿下、右大臣殿、家嗣卿、寅日

淵醉殿下可出御、左右府、大夫、大納言家嗣、權大夫經

通、國通、兩和中所勞盛兼、隆親云々、左府隔日風病發由被

中、新嘗祭卜合國通、具實所勞、宣經、所勞儘可參、山被仰領狀、園韓

神盛兼卿、鎮魂宰相分配、大原野祭公氏卿參勤、五節

參入、大納言御覽、中納言勤仕云々、查出仕中將實俊、

實持、有資以下廿餘人領狀云々、經高卿給大隅國、元周房知

之、又給東北院庄、近日悅喜馳走云々、日來清貧之由

誣五噫之間、有此事歟、按察彌忿怨歟、不便、戌終許宿

北邊小屋、聞曉鐘歸、

十四日、辛丑、霜凝、天晴、夜月清明、未時許心寂房來、

肝足灸治之邊雖立針血幾不出、仍不立、於今者連日可

惡湯由相示歸了、臨昏梅風流一送富小路中納言許、先

年所作同風情、栽枯背造小屋、居小兒、地并屋皆置裏

櫛、以護緒花田、并小緒等、各三遣水、其上以鐵付筆爲

水浪、以水入金壺油壺へにざら等爲立石、又有以錦爲

水引、此事新制云々、如此事強非制、雖長病間不默止由示之、

病中殊表其志、珍重之由有返事、月明思往事、

十五日、壬寅、朝天陰、霧深、辰後快晴、朝沐浴、念誦日

暮、夜月清明、

十六日、癸卯、朝陽晴、少雨灑、雲飛風寒、五節間事問宰

相、返事、帳臺公卿如前日聞、昨日祖、依人々遲參取松

明、兩頭、資雅、實俊、重長、有資、實持、親氏、隆綱、公

有、實直、通行、賴行、職事三人。忠兼、親季、忠高、經俊、

實隆、資信、實尙、經賢子、宮御方、殿下無御著座、左右丞相、兩

大夫、家嗣、經通、高實、國通、盛兼、隆親、兩頭著座、一

獻大進、二獻實持、御居劬云云、甚不便、三獻亮、四獻別當、五獻權

大夫、新嘗祭宣經云々、昨日候御直廬、自午時至于今

朝卯時見物云々、未斜陽景晴、實寂昨日吉富臺牙十課

雖輕微、隨到來送、心寂房許、於今年莫大之由示送云々、

寬壽二年 十一月

二百五十六

此病漸無爲歟、尤雖可欣感、依無其力尤耻思、

十七日、甲辰、霜凝、天晴、宗清法印來臨、女房芳心之由感悅、依夜鶴心歟、傳聞、昨日相、未及晚景童御覽、入夜公卿、左右相府、右大將家嗣卿、付童人少將親氏、夜月殊明、

十八日、乙巳、自遲明忽甚雨、終日雲晴雨降、宰相示送、

昨日酉時參內、左大將著陣、依中將不參被催人々、皆

對捍移時刻、過夜半氏通一人被終事之後節會始、內辨

左府、外辨家嗣、公氏、通方、經通、高實、定高、不出外辨退出、

賴資、宰相七人、宣經小忌取空讓、御酒勅使經高、召大歌家光、宣

命使爲家、祿所範輔、大歌代賴資、小忌國通卿、今夜不參、一

獻之間入御、內辨退出、被押懸公氏卿、節會夜中事了、

御前召之間天明、其後參宮御方、興遊殊甚、北政所猶

御坐于內云々、未時許雨中中心寂房來談、每度漸々可減

之由陳之、似無其期、菩提院禪閑不食御病遲留、雖非

危急存今度一定之由、渡坐木綿給、御子息皆參又被營

佛事云々、夜深月明、拂雲風又烈、

十九日、丙午、朝陽快晴、淨照房來、入道大納言殿日來

御坐八條、一昨日令歸飯室給、不食御病猶雖不尋常令

忿登給、被祗候之輩、不堪山氣多受病云々、夜深宰相

來、五節之間日夜寓直、頻參御前、晝東帶、淵醉日連枝

兩納言不出衣、其衣還而不委見、白色歟、例衣、二獻盃左

府被奉讓右府之間、忽參彼御座邊間、失度踞居云々、

參入夜亂舞、依貫首賞翫、資雅朝臣出白薄樣云々、此事實後

願不同心、只可歌由示合、有何事乎由答了、頭中將、願亮資雅、實、卯後、有實等偏示合諸事之間、衆衣狂女等稱弟子參內云々、奇怪也、

日三方御隨身殊折花列居、左大將御隨身裝束甚以不

法云々、節會訪五節所歸著之間、內辨被催一獻之間、

通方卿立揖退出見之、公氏欲競立、內辨咳止給、家例

不吉由微音雖申、不聞入退出給之間、慈行其後事、不似年來

之體動此事、彼人身之高名也、但不下小忌大盤不移大歌座云々、宣命使

依夜深吹曲、曲揖早速步、內辨不略舞妓拜、拜了見宣

命、是初度之儀存歟、資雅出仕殊叶寂慮、於事有其譽云々、寅日

持夏扇、此此事頗拔群事歟、予有所聞、今年頻示合宰

相之由聞之、彼中將只可持由一日密々所相計也、今日

猶參內、殊候御前賜櫛云々、殿下北政所若君、今夜御退出云々、親長依倭櫛好交衆外殿、入東階間、經臺盤末著與座、惣不及進退之沙汰、只如田夫野人、任意之通路也、如此者、爲公卿名字不便事歟、因茲實世朝臣不昇殿、公長又在御後邊、伴五節所云々、今年露臺不數假板檻欄簀子、殿上人二行相對立而舞、依宮御方御儀之前、雜人不立而太嚴重云々、隆綱朝臣調進御服打御衣之體、異樣奇恠之由被答仰、俄調改云々、參入夜紫御指貫、御出衣、淺御沓、寅日於二條小門內妻戶御覽給、殿下令候給、奉相候近邊云々、實俊相具力者法師三人、實持之下人腰令

指行倚、殿上淵醉亂舞之時、重長去年、自下侍踊昇施其藝云々、香女子、今夜自內裏歸來、此女房無寸假被召仕由、類以名稱內外近習、於老身無其益、廿日、丁未、天快晴、宰相參詣日吉云々、一宿、有教中將子息侍從、勸舞人之由昨今音信、雜色令著常色云々、廿一日、戊申、天晴、風靜、近日諸國所々麥多熟、或食用之由有悲說、不信受之處、今日見其穗出、如三月許、此

事定不就之由令然歟、尤不快事也、草木之體今年多有非常違例事、尤可怖事歟、櫻木多花開、在松崎邊云々、白河邊在、所々云々、筍生人食之云々、

廿二日、己酉、朝陽晴、風寒、殿下仰、今日欲著柳下襲、故殿不令著給、入道殿何年令著給乎、若覺悟歟、至于建久七年御出仕之間、御下襲被張事不覺悟候之由申之、若忘却歟、每度取御下襲、例打下襲也、賀茂臨時祭使家定朝臣、持明院中將、舞人朝輔、二條侍從、光衡、中務大輔、兼宣、納言、爲綱、納言、實隆、侍從、梅小路、範繼、侍從、氏通、高倉、少將、行通、大炊御門侍從、藤光成、近將監、源兼綱、同上、歌人家長朝臣、兼教朝臣、前民部卿、業繼、高藏人、仲資、藤兵衛、權守、所佐親繼、越中權守、經尙、淡路權守、範經、左近將監、同家尙、木工、館親良、大膳權亮、筆策親季、上野前司、人長秦弘澄、昨日日吉臨時祭使江文章博士周房朝臣、未時許徒然之餘、乘車、自病八十餘日、不乘車、今日曉昇、行二條町邊、欲見參內人、少時宣經卿御毛車、隨身蘇芳袴、其前後寂而無人、移時尅殿下御參、能思賴行、前驅六七八人歟、官人二人柳御下襲、知宗、範賴、

寬政二年 十一月

二百五十八

九二

家長、陪從、信實、通方卿、毛車、公氏卿、入樂破車、差綱、仕丁、裝束不可思議破損

盛兼卿、綱代車、差綱、白、張仕丁持兩皮、顯平卿、同車、家嗣卿自二品家町面

出、綱代車、差綱、前、頭中將出東家、於門外乘新車、舞人行通、一人步行

乘父車、衛府二人、童一人、二藍、唐紙、雜色六人、白青色唐藏、紙黃衣

人、雜綱、紅、打衣、雜色四人柳、衣、童隨身二人、襖袴、此宰相

及日入參、毛車、公事雖遲怠、參入不可待日沒、內藏頭隆

綱先是參、及暗無興歸家、依懷舊之數奇不治、股灸痛、甚後悔、

廿三日、庚戌、遲明少雪霏々、五陰、未時陽景見、傳聞、

昨日日入以前御稔、陪膳頭中將、庭座立明、召頭亮、下座、經壁

之、公卿家良、二獻、勳蓋親子、知宗、陪從隆範、家嗣、三獻、淑子忠、高、陪從信實、公氏、通

方、盛兼、隆親、經高、白後、爲家、著、自前、宣經、實世、二人、順

平卿雖參內不著殿上、但取花云々、初獻隆綱、範賴、

重杯、宗明、信時、春冬定役不足言事歟、於事不被直

立、陵遲之世、一事無其沙汰、悲痛而有餘、召中將歸立、

兩宰相中將可候云々、終日寂寞、入夜沐浴、

廿四日、辛亥、朝陽晴、宿雪薄、天沍寒、入夜宰相來、參

殿下云々、不聞一事、來廿八日右大臣殿可令渡冷泉宅

給、自身可居二條萬里小路、故家、其所惡所云々、無由

事歟、來月八日仁和寺灌頂女院御幸、依內御點、經光院

司催之云々、

廿五日、壬子、凶會、天晴、昨今少念誦、未時許定修來、月來灸治、龍居之由

之、貧乏不運、言談之間侍從官來、來、灌頂御幸馬鞍爲借

向權中納言許、依病隔物言談、手足損而不行步由被示

云々、少將實光兼尾張守申昇殿、殿下內々可然由被

仰、丑日依人數多不許由職事示送、存外云々、心寂房

來、乘車尤不治之由誠之間、大宮三位來臨、仍先相謁、

言談之次、新大將御營之間、女院御領可借賜之由被

申、殿下又御許、所々有其沙汰、又被撰嫌之間事不切、

忠定卿相傳參川、可被收公、爲人不使非幾事歟、損亡

庄々沙汰嗽々、院中惣不便云々、凡殿下御邊內外所被

行細々沙汰等、人口極嗽々不穩、遐邇側目之由定修同

語之、座主御邊又以無物闕如云々、中少年御弟子之放

遊等多、諸僧營造物、遺日吉祭木、領每人充之、面々愁鬱云々、客星曉

廻南方、公家御恨不輕云々、關東筭如夏人食之、郭公頻鳴、惣以天下人口不安止、每人陳之、悲矣痛矣、三位歸後心寂又歸了、

廿六日、癸丑、凶會、朝天快晴、有和暖之氣、明日中宮行幸又延引、來月八日云々、賀女院御幸、夜行啓歟、彼日宇佐使御精進始云

云、右大臣殿明後日曉令渡冷泉給云々、一寢之後宰相來、參右大、殿、大相自盡參殿、令謁給之間不入見參云々、

又是自由任意之德政被申行歟、明後日御渡一定云々、午時許之山被仰、二條家又借得之、他事不及視聽、是例事也、中宮行啓來九日云々、

廿七日、甲寅、天快晴、臨黃昏三井寺別當法印來談、在宇治白川別所、爲聞病子細故出京、明日歸入云々、自帝稚相見一人獨存、後會又難知、今夜宿白河云々、今日宰相渡坐二條萬里小、路歟、之山開之、殿下御風氣之由傳々說、

廿八日、乙卯、天晴、巳時許與心房被來座、去廿四日殿下例御心地不快、參護身、漸々令渡例給、一昨日猶令發

給、自日來候、右大臣殿今日御共可渡坐冷泉、大相府

近日又歡喜光院北實保狂女宅之近邊、東西南北一町、

俄被追立在家、可被立堂之由、居住等哭泣云々、爲忠

廣奉行悉點定云々、人憂之外無他歟、又密々北政所御

懷妊、正月御著帶云々、御一家御產相續無間斷事歟、

此內若有聊事者、定相互有違亂歟、尤不便、黃昏新三位

例、不被過訪、扶病相逢、自今日大乘會、來月三日臨時奉

幣、八日御幸、每被催領狀云々、謝遣之後大谷齋宮戶

部又來、近日御坐、昨日京極、夜深宿北邊小屋、到著之後雨降、曉鐘

以後暫止之間、歸來手興、之後又降、

廿九日、丙辰、雲暗雨降、已後雨止、天猶陰、申時陽景

見、

卅日、丁巳、天晴陰、近寒、故入道殿御忌日、如例沙汰送

嵯峨僧了、扶病念誦、老病已及八十日、灸跡猶不癒、實

是重厄令然歟、懺法阿彌陀經法華經、日暮眼暗、不終

一部、

○十二月大

寬政二年 十二月

二百六十

九四

一日、戊午、天晴、朝奉讀七八卷訖、申時許大宮三位來臨、大貳卿北野歌合可加愚判之由有宿願間、可構遂之由、依彼卿懇切來觸之由也、凡老毫前後不覺之上、當時病中不及是非、於病者送旬月、若雖有減瘥之時、無分別之魂魄、猶難申領狀之由答了、心寂房來、此長病已無其期、何爲乎由雖示合、腫猶不尋常之間、以膿汁之出可爲本意、灸瘡事不可怠思之由猶答之、今日腹灸又痛、昨今讀經、極以不治也、依氣動灸又破也、諸所作徒可假息云々、極難堪也、女房依有憚御神事、今夜退出云云、

二日、己未、朝天陰、近寒、已後天晴、實寂來語、廿八日右大臣殿申時許渡御、實持朝臣御共、秉燭以後女房御與令入給、又御車、實持朝臣御共、懸御簾敷疊敷砂等、皆儲之、無被渡之儀、宰相又居二條、渡御儀、已下東帶、秉燭以後宰相來、一昨日晦、參大乘會、五卷、賴資卿只二人日入以前參著、相待辨、親俊假奉行、依夜深納言召史仰鐘、又仰夕座鐘之後辨參、如形行道無袈裟云々、諸公事刻限又無人、世間陵遲、每聞長大息、

今夜參法成寺、一昨日右大臣殿令參給云々、左府今夕歟、殿下結願御參云々、堅義無貴人御聽聞歟、來八日御幸領狀之人、高實、盛兼、兩納言、隆親、爲家、兩相公、基保、顯平、親長七人云々、不足言事歟、雖被催御車寄人、大納言不參、具實卿乍出仕申不階山、或有申肥滿由之人、實不申用事歟、明日奉幣延引來九日、辭退了、每事馳走、頗過身分限、欲相觸騎馬所勞出來由云云、

三日、庚申、天晴、北門之向民家失火燃揚、平且、打滅云云、一寢之後西方有火、北小路北室町東云々、不經程滅得歟、行兼之家之四、牌小屋云々

四日、辛酉、天晴、未時許備州來、又爲示大貳間事云々、此事極難堪、公事神事已下有限事、病者皆申所勞由被免、和歌判更不可資、病者甚無心事也、答當時無術由了、

五日、壬戌、天晴、不聞世事、短晷空暮、

六日、癸亥、霜凝、天晴、靜俊來、山門此間適落居、梨本下手二人

送出、不經侍從又來、明後日供奉云々、三日大事人々多參女院云、御傍親少年直垂參御所、少將親氏直衣爲中使、御幸御車中將家定可付、勅定、尤可然事歟、先日內歸了後宰相來、御幸猶欲參、舍人欲令著櫛柳

云々、無其謂色歟、櫛秋色柳春色也、五節女房片身替之衣歟、尤不可然、有先例云々、是例大將教訓歟、不甘心、實親大納言、通

方中納言可供奉、公卿馬三疋可被借山、相門被命幕下云々、當時馬殿下御廳已下諸人所詞、皆被切髮之故無其物云々、極爲奇申請右大臣殿秘藏御

馬云々、中宮行啓來九日、又有不定之說、法成寺第三日參、家

良卿親長只三人云々、結願日殿下左府參給由傳聞、定修來、明曉爲登山參社宿此家云々、秉燭以後未方有微

火、宰相忿歸了、女房歸參內、依一日仰欲參北政所、御風氣違例山被仰、仍直參內、火即滅了後也、半月明、

七日、甲子、自曉雨降、巳午時滂沱、未時天晴、依甚雨定修不登山、徒偃臥、眠覺陽景見、

八日、乙丑、曉又雨降、日出之後或晴或雨、定修曉出了、巳時雲雨猶暗、午後間晴、雨脚猶不止、未時令伺女院

御所、賴資卿奉行院司父之外人猶不參云々、相次令見、公

卿兩三人、殿上人少々參云々、構乘車立一條左近馬場

哭方宗保入道門柳前、此間雨猶降、雪相交、陽景間見、

時刻推移已及斜陽、二品車過、一條東行、可北行、被相待被參歟、

著奴袴者二人、半靴在車後、侍等又在其後、少將親氏

相從、新車、隨身蘇芳袴相具、口、後見非供奉人隨身嚴重歟、其後不經幾程前陣進來、

路雖深泥此間不取笠、內一臘繁茂、青色袍、延次帶劍追

前人、不見知、後開家經卿子、侍從後高倉近習雲々、右兵衛佐高賴、隨身前木將、少

納言爲綱、藏人少輔經光、奉行、少將親季、隨身二藍、四位侍

從言家、不具、前兵衛顯氏、左馬信時、少將源家定、中將

藤家定、隨身蘇芳將、中將宗平、同、頭中將、隨身前木將、治部卿、左兵

衛、宰相中將宣經、隨身蘇芳將、侍從實相、中納言盛兼、通方、

大納言實親、具居詞、近代之儀歟、御車、後被出三色衣、別當在御後、檢非違

使知章、召繼長久清、白髮、如雪、出車三兩、中將實持、少將家

定、中將具教車云々、見訖歸、二品車又西行、親氏如前

相從、兼數月被催、嚴重御幸、殿上人加六位十三人、

內殿上人六人、公卿七人、世間之儀不足言事歟、後聞、左府時

御車寄給、衣冠、隨身前兵衛佐定具、一人打梨御共云々、言家後云、入御之參、

寬政二年 十二月

二百六十二

院司信時、顯氏、言家、經光取松明進參、左府頻召院司、中將家定不進、信時在近邊參昇、左府追下召付御車、院司令昇板、宰相今夜宿西園寺云々、定修夜歸來云々、九日、丙寅、自朝泣陰、午時雨雪交降、臨昏下人等云、御幸還御延引、宰相在西園寺、入夜右衛門尉景保卜云老者入來、家在近邊、可爲家人由、月來以女房示之、昔在後德大寺左府家、後在範茂卿家云々、來非人宅、僻案人歟、

十日、丁卯、夜雪埋草樹、積庭不及寸、朝陽出、地雪消、昨日事依不審問言家、返事云、昨日午時參佛母院、御灌頂延引、空退出、參西園寺之間、御誦經布施可取由親高示送、仍馳歸參、又事訖之間退出、歸西園寺、數反取布施退出、大納言實親、中納言通方、不取布施退出、宰相爲家、三位實有、時賢、長清、宗宣、親房、殿上人實持、兼輔、信時、言家、知宗、實尙、御灌頂昨日云々、御布施御幸還御只今欲參者、昨日四圍中實有、公長、宗宣、親房卿、午時許心寂房來、於所者頗付減、惡血一色漸散、只以暖氣、漸々可待由相

示歸了、寒風烈而浮雲飛、未後雪又降、入夜大風慘烈、十一日、戊辰、雪積三寸許、朝陽快晴、後聞、灌頂御布施大納言家嗣、中納言公氏、國通、賴資、參議隆親、經高、爲家、家光、範輔、殿上人師季朝臣已下御幸供奉人云云、一昨日當日、中納言定高、賴資親長卿等參、親高中山、嘆德布施庭儀、先々第一公卿取之、親高三四度來催大納言、事卒爾、兼不承之由固辭、次々又辭退、別當取之云云、布施取訖之間、實親卿參取御送物、大師御筆心經、御綱授之、不經程還御、大納言寄御車供奉如一日、通方、盛氣、宣經不參、宰相入西園寺、又新遣屋移徙、公雅卿實持等在之、仁和寺內々御贈物相門被調獻、錦埋火桶、銀鉢砂金、以紅薄機染、之、對香二十爲火、雪猶間飛、

十二日、己巳、朝雲猶泣陰、不見陽景、未時寒雨降、夜雨打窓、病身彌辛苦、十三日、庚午、曉雨止、朝陽鮮、日吉恒例入講、昨日送俊範僧都許、返事到來、可請定由領狀、未時許言家朝臣來、語仁和寺事等、當日當宣子爲繼高賴勤之、入夜宰相來、今日十三社奉幣、客星御所、使具實、經高、親長、親房卿、殿上人四位

隆範、信時朝臣以下、上卿內府假申所勞給、信盛使中納言可行乎山中、之、嚴重御願、殿上人爲使事更不可然、可催出大納言由昨日仰云々、昨日參殿下、密々御覽北山方云々、路落、宰相歸、夜宿北邊小屋、曉鍾以後歸、

十四日、辛未、天晴、風寒、午後風猛烈、雪飛、晚頭侍從來、傳右武衛消息、淡路國殿下藏人所元三櫻催、今年無術由申入哉由也、示右京大夫、可被付可然人由答云云、夙夜近習御乳母子、殿中事權勢第一女房、宣旨、兄弟猶不申事、百々日長病籠居、棄置物可口入哉勿論之由答之、其外被示事等、皆是可申渡事等云々、近日疎遠於殿中非人數、上下皆忘名字歟由示含了、播州小所越中、損毛事等、土民雜黨等訴訟半籠事、女房等沙汰散散、予本自不知事也、奇惟不便、招請宰相賢寂等、且令示含橫謀、至愚老去春請取正務、萬事皆闕如云々、十五日、壬申、天晴、曉雪屋上白、山、今日令拂始煤、風寒雪飛、

十六日、癸酉、朝陽陰、巳時晴、後猶沉陰、今朝右大臣殿令詣日野給、宰相御共云々、辰後陽景晴、巷說、大夫尉惟信惟信嫡男、承久合戰之後逃隱、爲法師、隱居日吉八王子庵室、武士聞此事、可被擯出由申座主、以門徒惡僧一昨日被擯取、武士向粟田塔前、其夕請取訖云々、迹戰場十年隱居、可謂奇謀、被擯之時雖其力強不及拔刀云々、巳時許定修來、向顯譽法印許云々、他門僧也、甚無由事歟、爲師匠山僧遺跡聖教之間事云々、相謁歸來、申時許退歸、今日日野北政所、御車歟、白一條殿出御、右大臣殿、自冷泉、宰相實持、親季各乘車皆相具馬、御共之由賢寂語之、中宮行啓一定廿日云云、大貳親輔女、右金吾殿下御子誕生、男子云々、十七日、甲戌、朝天陰晴、辰後陽景晴、宰相音信之次、昨日三方御物詣之次朝、東一條歸路、宜秋門法性寺、御共參廻云云、午時許賢寂告送、右大臣殿御產之氣、公私引神馬、自今朝有此事云々、以愚狀尋宰相、自夜御氣色、非取頻之體、殿下渡御、則還御訖者、入夜賢寂告送、御產成訖、殿下又渡御、右大臣殿御同車、令還一條殿給、少時興心

寬政二年 十二月

二百六十四

房又被告、御產成了、姫君云々、

十八日、乙亥、霜凝、天晴、日出之程賢寂告云、御產成了、夜前殿下還御之由承之後、今一事退引、御祈等終夜周章、殿下大臣殿又令入給、大相同坐給、至于侍等乘馬下鞍引諸方、佛供養御祭不可勝計、只今無爲令下給、賜驗者陰陽師等祿、參入人雖有被下立之由、終夜奔營之間、大略皆混合歟云々、御難產每年兩三度、甚有恐事歟、午時許又云、殿下入御僻事也、大臣殿令產穢給、宰相又參籠了、所々佛名荷前行啓等、不可參之由觸職事云々、淨照房來談、參入之次、自我茂來、仍照御產即歸了、申時許有長朝臣來臨、日來念忙無寸假、自昨夜至于今朝、御產之間立地上、窮屈難堪之由、言談之次、世事等適散不審、更非御變改、當時無其闕之上、今年無此沙汰、若有事故歟、明年殿下旁御重厄非一、恐思食之故最密々之議、新春不被待御座可有重事、其後諸人之望悉可有其沙汰歟云々、身上之歟只變改默止之條可增其耻、於有其沙汰者、卽是本意滿足而已、猶彼揀御意之由頻答之、黃昏

歸了、如密語者、天下重事、諸人競望一時計會歟、甚可

恐危者歟、都合之員數頗可爲未曾有事歟、大相、右幕下

皆御產被混合了、殿下依宇佐御神事、固被忌七々日云

云、今日於南殿有御讀經、客星御祈、

十九日、丙子、自曉雨降、終日滂沱、夜猶不休、今夜御佛

名云々、午時許頭沃菊湯、及夜半月明、

廿日、丁丑、天晴、風寒、午時許覺法印書狀、弟子小僧手跡、自十

四日喉腫、自十六日飲食不通、又度々絕入、已五々日、

如待時云々、甚不便、近年無纖芥有其好、極以歎思、中

宮行啓一定云々、乘燭以後送女房料車、共人兵衛時忠麻保、上堂料車、雜仕料車、寶藏令沙汰、宗弘爲雜仕扶持令參、戊

時許資親奉書、上郎女房料被召車、依女房私料進內裏

了由申之、所被仰甚不得其心、曉鐘以前行啓成了、車歸

來、

廿一日、戊寅、朝天陰暗、終日不見蒼天、未時雨降、以忠

康爲使問覺法印疾、歸來云、日來如待時、自夜前聊似

宜云々、右大臣殿女房昨朝又令絕入給、殿下、大相、幕

下各馳走給、又無爲云々、但今朝相門幕下、宰相供奉、北山之遊云々、

廿二日、己卯、朝天漸晴、早旦心寂房來、向六波羅方之

次云々、惟信法師被擄取之後、年來同意之輩露顯、被

召取三人、山僧律師、梨本、大原僧正夜前被出、仁和寺僧一人、掃部助

時盛近習之中、相繼之內、如後見、號江中務男一人在其內、本姓義郎等云々

又告此事法師猶不被處忠、猶被召籠、今朝發遣關東飛

脚、木綿禪閣御病、此兩三日又危急坐給、嵯峨執行江、號還

死去、時行歟、如形小佛事之時相加僧也、午時許三井寺法印來臨、一昨日

參勤尊勝寺灌頂、如讚衆語出有事煩、翌日可被行最勝

寺之由、兼相觸職事、信盛、辨親俊、懈怠、寺家率爾申不

叶由延引、夜前由催讚衆、於途亂今夜欲行、上卿宰相

尊勝寺、不參、辨一人參云々、年中神事佛事只聞陵遲、甚道

恨歟、以宗弘問覺法印、歸來云、十七八日之間六度絕

入、不能飲水、十九日夕膿血頗出之後聊辨是非、今度

若存命歟、親成自始療治云々、

廿三日、庚辰、霜如雪、天遠晴、申後微霰零、

廿四日、辛巳、欠日、朝天陰、辰後晴、未時許越前々司來臨、去

年給播州本所領之後、元三料半物雜仕裝束四具調進、

重厄無術、父子共元三不出仕、知行兩損亡殊甚、爲綱

常爲病者、尋常之時稀也云々、飯室賜御消息、自本住

所猶移住奧山之由被告仰、義懷中納言跡云々

廿五日、壬午、天晴、晚鐘以後南方有火、甚遠、又西方有

遠火、仁和寺方云々、南火後聞、七條堀川方云々、此日

來半籠女房局雜事、越中殿岐守事、自始非予所好、依不當橫謀

等已及其所滅亡、當時之闕如、向後依不便喚寄賢寂、

猶押懸了、貧者交衆惣以不可叶事也、云時儀云所行旁

不穩、戌終許宿北邊小屋、今年遊軍當東、爲自然用意

東山方雖大切、依無其所只宿例本所、宰相吉田大相被

渡、傳聞、依此事又馳走經營云々、今夜予乘車入宿所、

少雨不經程止、青侍等云々、行幸持明院殿、禁路一條町、

北行、中宮御所北路、東行、室町北云々、中宮女房車歟、

非出衣露顯之體、立御所艮角、少將公有乘狛狛、曉馬、曉鐘之後

歸、星顯晴明、

寬永二年 十二月

二百六十六

一〇〇

廿六日、癸未、立春、天晴霞霽、黃鶯已囀、白梅纔開、和暖之氣
熙々、宰相書狀云、昨日觀音院灌頂先々爲御代官略儀
也、今年御出之間、嘆德布施先例參議役也、及闕如構
參乎由有御室仰、法眼庵產穢混合不被憚者隨重仰可參
由申、其後無音、今朝不可參歟之由重尋申之處、可構
參由被仰、頗雖存外欲馳參者、宗平中將書狀、左府若
君元服理髮事有彼御語、正治勤仕之由聞之、其作法注
送哉、其事兼不習先達、更不知子細、當日依入道殿下
仰、如形注給次第勤之、所書付甚雖見苦、如此事本自爲
人不存隔心、仍書出送之、首服事甚以不得心、只依相
將之男歟、末子之繁昌、必爲御一門放埒之源歟、定又越
階之望歟、入夜僮僕之說、宰相馳參仁和寺隨役云
云、

廿七日、甲申、霜結、天晴、午時許心寂房來、此兩三日所
願、又有發增之疑、依奇思問之、灸治漸癒、膿汁猶不出
得之故、惡血無行方、如此不定歟、蛭出來之後可有平
滅、只以鹽湯可洗由陳之、嵯峨禪左相府依禪閣御病危

急、昨日參住木綿給之由語之、典藥寮昨日、施藥院今
日、送恒例白散、至于如此事、前官之身頗存外事也、賜
例祿紙一帖、橫ヲ縱ニ卷天以一枚裹之、入夜宮女房退
出、去夜依兼仰參內裏、內々殿下令承給、召少將家定事、與相公局相承、少將親季相伴、帥典
侍引導參御前、此際事委有尋仰事、依仰於殿下、御座問聽聞、殿下兼
可參由令申給、臨期御風發不令參給、頭中將御裾、所
作本拍子隆範、末定平、笛經行、篳忠兼、和琴隆綱、內藏頭
無能實後、事訖又召御前有仰事等、宰相來、語日來事等
之中、若條間御佛名前日一臘藏人仲達、以書狀與參、指
繼兼綱、當日事可奉行、稱所二臘分配、有限之上事又率
爾、三臘當時候、尤可勤歟由示之、其後無音、當日夕範
賴參入於所、行大盤之間來其所、佛名行事闕如可勤由
誂之、昨日申隙由之後無音、只今召成不可叶由答之、
又催光成、三臘無所存領狀、範賴歸去後、更云合人々
散狀、皆故障返事也、無參人歟、御裝束已下不便之由
答之間、更變改辭退、範賴申事由、稱別仰猶仰兼綱、依
率爾乍衣冠且見廻令敷座、東立屏風之間、範賴來見、

即奏事具山、已告已出御山、兼綱逐電著束帶之間、不仰御導師以前、催出居可升之山、次將一人不參、先是

依納言一人不參、內々被仰家嗣大納言、續參入云々、地下家定朝臣雖無催爲用意推參、求出其人令著座、公卿隆親、經高、家光、實世、五人、依無殿上將無申栢梨者、殿上出居不行之、少將親氏別仰雖俄參、遲々不勤仕、六位只二人、殿上人參、頭資賴、五位藏人信盛列行香云々、凡此職事之體不足言、父卿猶不委沙汰、只有親妻父、扶持之如此云々、中宮行啓供奉人、公氏、通方、宮司、隆親、宣經、親長卿、廿日宮佛名兼依可有御產定、人々多參、臨刻限定延引、定通、通方、經通、定高、賴資、隆親、經高、家光、宣經、實有、公長卿、實世朝臣、節分行幸、盛兼、隆親、宣經、顯平、親長卿、少將親氏爲御使參入、只今融由仰事云々、其夜俄見物、左衛門督依私方違、不供奉行啓、參宮之間借車、冷泉殿、妹、但馬、女、三人乘之、後日雖簾中皆見知之由仰事、去十六日、日野實持朝臣俄馳車、落御車前、其日宰相以下自川原

皆騎馬、實持、親季、兼教、以良、家盛、兼康、兼仲、教行、基重、

廿八日、乙酉、霜凝、天晴、四位侍從來談之間、興心房被坐、右大臣自廿五日無爲、今日參殿給、可令渡一條殿給山有沙汰、日來日夜馳走、窮屈無術山被示、各歸後但馬前司來、言談移漏、申時許歸、今日仁和寺舍利會云々、以宗弘又問法印、於今者付滅云々、宰相一昨日參、殊被悅仰之由傳之、周防前司盛親來、世途險難事、其詞極不便、坊城相門近習者也、天下吉幸富有之家、無一分之恩願云々、入夜女房歸參、

廿九日、丙戌、天晴、霞登、昨日申時木綿禪閣遂入滅給云々、法性寺殿二男、仁安元年七月攝政、廿二、三年二月如舊、二、承安元年關白、治承三年十一月有事遁世給、廿五、五十二年、春秋八十六、周防筑前兩國爲彼御分、子息前攝政入道、前左大臣、隆、大納言忠房、興福寺前別當大僧正實尊、前天台座主僧正乘間、其外法印又兩三人歟、非名、聖人、宰相書狀、右大臣殿元三猶可御坐冷

寬弘二年 十二月

二百六十八

泉、今日殿下大臣殿御參內之由承之云々、

卅日、丁亥、天晴、霞隔山、午後雨降、追儼之次有小除目云々、又拙心肝、宿運可悲、重付女房申入、雖懸心事妨等多、雖春猶可計略之由被仰、事及外聞不被行、是招障礙之道理而已、即是面々厚緣有引舉人之故也、事妨更非他方事欺、被任納言之上、不被許一身欺、專可思切之度也、悲而有餘、申時許解除、陰陽師定帳云、今日初來、老後年始雖無送迎之勇、今年故改南面簾疊、去春少々雖儲不改、長病遂無身上吉事、隨又簾依破損甚改之也、年始之間稱遠所物詣由不可逢客人、宰相不可來之由兼示含了、去春右司郎光臨、甚存外之故也、抑白氏文集之中多有此句、人生七十稀、於先祖多不過六十給、先考獨雖餘九旬給、近世之後也、戴白髮及此齡之人、氏公卿之中、始祖以來四十六人、尤可謂稀、

右大臣近衛大將繼綱、延暦十五年、七十、

左大臣緒嗣、承和十年、七十、

大納言冬緒、仁和三年致仕、八十、

左大臣良世、七十任右大臣、十二月致仕七十六、寬平八年任左大臣、

中納言民部卿春宮大夫有穗、延喜七年、七十、

大納言按察使國經、同八年、八十一、

參議右衛門督清經、同十五年、七十、

大弼近江守興範、十七年、七十四、

修理大夫枝良、同年、七十二、

刑部卿玄上、承平三年、七十八、

大納言按察使扶幹、天慶元年、七十五、七十任中納言、

言、

參議治部卿當幹、同四年、七十八、

左大臣仲平、天慶八年、七十一、

參議民部卿忠文、天曆元年、七十五、贈中納言、

貞信公、天曆三年、七十、

參議宮內卿元名、康保元年、八十一、七十五、任之、

清慎公、天祿元、七十一、

左大臣在衡、同年、七十九、

中納言民部卿文範、永延二年辭、八十、長德二年八十一、

參議修理權大夫安親、長德二年、七十五、

左大臣顯光、治安元、七十八、

仁義公、長元二年、七十三、

左大臣實資、永承元年、九十、

前中納言實成、寛德元年、七十一、

中納言治部卿經通、永承六年、七十、

右大臣賴宗、治曆元年、七十三、

大納言能信、同年、七十一、

資平、同年、七十二、七十六任、

宇治關白、承保元年、八十三、

二條關白、同二年、八十、

參議師成、承曆四年、八十三、

前中納言民部卿泰憲、永祿元年、七十一、

中納言經季、永祿二年辭、七十三、

參議左大辨實政、應德元年、七十四、

長房、康和元年、七十一、

前參議左京大夫公房、同四年、七十三、

中御門右大臣宗忠、保延元年、七十七出家、年八十、

中納言實光、康治元年、七十六、

中納言兵部卿資信、保元三年辭、七十七

太政大臣實行、永曆元年出家、八十一、

京極宗輔、應保二年、八十六、

伊通、七十三、

內大臣宗能、仁安三年、八十三、

參議俊經、文治元年辭、七十三、

前中納言光隆、建久九年出家、七十二、

基家、建仁元年八月出家、七十、

況亦百年以來唯十人、貧道微運前生之罪報、已知無物、不具今生之作善、又闕緣底、纔爲壽老之人、於官途者雖爲沈憂之身、又不及予之輩非無之、只以清貧之無比類、若爲延齡之冥助歟、且奇且恐之故注此事、北野僧送卷數之次、稱備神供乞菓子、家中本自無如然

寬喜三年 正月

二百七十

物、賢淑菓子十合遣之、入夜後雨止、

寬喜三年

定家卿于時前參隨
正二位七十歲

○正月大

一日、戊子、曉雨降、朝雲分、辰時陽景晴、朝間念誦、奉拜不動尊、今年既滿七旬、不圖壽老、尤依恐思稱物詣由、不可逢客人、兼示宰相訖、但開門如例、巳時許女房裝束出來送之、紫勾衣、表唐綾、紅單衣、紅打山吹表襲、崩木唐衣、去年新制元三可替一具云々、巳時許見齒固鏡、未時許有弘持來聞書、宰相參殿下訖云々、左將監藤資綱、元右、右源兼氏、安部國吉、由國監修理功、左門尉藤清義、外宮神寶、藤光能、仁壽殿修、中原爲季、右藤盛重、中宮御所、左兵衛紀久繼、字佐神宮、小野朝重、中宮御所、藤高元、御所、右藤祐章、中宮御所、藤盛正、法隆寺、削召名、右將監中原家綱、漸及日入殿下拜禮始之由聞之、遇忌甚不可然歟、黃昏以後大風猛烈、

二日、己丑、朝天晴、春雪飛、宰相書狀云、殿下拜禮、九條二條納言、別當可參之由申、被相待之間移時刻、坊門納言參入、仍被始、右大臣殿令練給之間、九條參會、坊城平宰相、右大辨、治部卿、兩頭、辨官、時兼之外、有長、兼教、右大將拜禮以前參殿早出、被參中宮、殿下不令參給、上官等二條遲參、北白河院拜禮、右大將、三條、大炊、公氏、國通、定高、隆親、經高、爲家、範輔、宣經、實有、親長、一列、頭中將以下七八人、親高不持笏、諸人咲置、小朝拜、殿下、右、內、右大將、兩亞相、公氏、通方、高實、國通、定高、具實、隆親、經高、爲家、立可場、定高具實不列御前、隆親立、節會內辨、右、外辨、內、公氏、高實、國通、定高、具實、隆親、經高、已下始終、爲家、範輔、宣經、公氏、自軒廊退出、御膳之際內辨令退出給、自余皆出、國通卿內辨、昆屯不下箸之外、無一獻之程入御、御口酒爲家、宣命宣經、夜半許退出、節會頭亮奉行、神妙、今日白河至于法性寺可參廻、明日可參御室者、未時許右少辨門前控軒、依告物詣由歸云々、依好士之數奇、每年枉駕、過分之芳志也、暮天晴、初月細、殿下今日令參女院給云々、

三日、庚寅、朝天遠晴、賢寂來語、宰相出了、爲此元三冷

泉家門被塗腋壁云々、彼地尤爲吉所歟、賢寂被立半部

御車云々、宰相今日出仕以後、又可參北政所御車寄云

云、纖月無光、五位藏人三人忠高持輔參中宮、推參殿上

人兩頭、重長、有教、實持、顯定、有資、資信、親氏云々、

四日、辛卯、朝天陰晴、已後雨降、終夜滂沱、宰相昨日參

右大臣殿、嘉陽門、三條、內裏、花山院、女御、御室、持明院

殿、長吏僧正、實清法印宅、御坐所、殿下秉燭御車寄、聞食日滿由

無程還御、不御覽殿上淵醉推參云々、今夕修正、定高、

範輔、公長、親房卿領狀、殿下無御參云々、修明門院不

被改翠簾云々、可然、敷訖改之、申時許自女房局示送、

御產頗有早速之疑、裝束料唐衣生袴、白平、可悉用意、

今明不思寄之間極以驚奇、示含賢舜、若爲此間者、尤歲

內可存事也、裝束定及闕如歟、

五日、壬辰、朝雲漸散、已時雨又降、日午天晴、依欠日叙

位明日被行云々、或晴或陰、云風云雨雲不定、閑人徒

臥、盡猶眠、入夜又大風發屋、近寒終夜達、且霰零水

結、

六日、癸巳、朝陽霽、寒風烈、已時許宰相來、布衣、一昨日

修正領狀之人不參、依雨、可有御出、無人之由忠高示送、

馳參之處御堂無人無燈明、忠高不申沙汰、今日執行參殿、申

及深更之間退出訖、弱冠之憐緩不足言歟、左大辨勞階

載勘文之由有殿下仰、若恩、今年勞階人甚多、況諸院御

給人數定多歟、基定卿子二人給陰明安喜門御給云々、

叙位右大臣殿令參給、明日一上輕服、之後着陣、節會早

速云々、送書心寂房許、返事云、自廿八日夜中風病加

灸云々、存外不便、覺寬法印送自筆書、付滅、午後大風

彌猛烈、寒氣殊甚、萬物水閉、入夜四位侍從來、今年初

參女院云々、終夜大風、

七日、甲午、天晴、風靜、午後又風、在簾中、掠水猶以氷、

已時許宰相書狀、叙位右大臣宮文、定通、實親、公氏

卿、其外通方、定高、隆親、經高、爲家、範輔、宣經卿、實

世朝臣、入眼具實卿、實世朝臣云々、叙人正三位爲家、

臨時、家光、策勢、正四位下時綱、臨時、從四位上安倍忠

二百七十一

博士 正 叙 刻

同正

定八
門陰陽

五年
爲細

從五

通關、

勝博純

源仲雄

外記、
知

弘繼

大中

光、同、

中臣基

同藤

惟賴外

麟貞次

景良、

事去年

御計由

然之由

起、後、

日、乙未

雖被念

辨退

粘之間

言公氏

絶輔

右實

博輔、丘

上
實
光

白河院

宣統二年

5

日、丙申

猶雖不可驚、御沙汰之趣殊忝、向後有憑歟、下臈多超

越歟承之由雖申入、女院御給、頭中將懇切申給、不及競

申之處、基氏當時無其山何返上由勅可定、以二品舊狀

件御給可賜伊成之由令申給、忽被叙了、抑叙列作法所

敷訓無相違由承之、其中伊成二拜、光衛同之云々、氏通二拜、置

弓立左右左、坐不左右左、乍坐一拜、立二拜、三人相

替、若其故候歟、答云、御給事實以嚴重承悅、彼二人作

法、帶弓箭不舞踏、只二拜之由稱大炊御門左府說、入道

左府實房、入道相國賴實、緣者皆用其說、近代之儀也、

普通之說皆以舞踏坐、左右左許略之儀惣不聞事也、只

至愚之故歟、其少將之體不足言之由承之、以此言不舞踏了、不舞

踏之說、本文介者不拜云々、以介者不拜之本文、帶弓

箭而不舞之儀、無性體事歟、兩公之不知史書之間、妄

推量之儀歟、依無答不及疑、午時許乘車行賢寂之宅、依生氣方

今年初出門、見孫子之少女歸、今夜適風不吹、御堂修

正、右大臣殿令參給、宰相同參云々、夜前法勝寺雖領

狀、北山招引不參云々、例事也、後聞、殿下御參宜秋東

一條院、

十日、丁酉、天晴、霞發、或人消息之次云、今年十々日之

間勝事多、小朝熊神鏡自去年秋開此事、十二月晦日御下著本宮、

禰宜等參集御裳濯河評定、一禰宜成定其實無不審之

由發言也、他人同申、爲奉校合一々面奉返、海中巖腹

之處自然令付木跡給了之由、昨日以次第解奏聞、未曾

有之嘉瑞歟、大外記師季白馬節內辨召付軾被問馬頭

代之間、言語不詳、驚出腋陣被扶雜色、纔乘車歸宅、不

能下車、中風云々、陰陽博士貞光一昨日赴他界、今明

自關東入洛、欲往外史之者有之云々、喜瑞事可悅、又

可恐、每聞摧肝、乘燭之程宮女房初退出、亥時許宿北

邊小屋、曉鐘以後歸、

十一日、戊戌、天晴陰、終日雪霏々、午時女房歸參、殊依

被念召早參、有弘景保在共、外官除目十九日可始之由傳聞、賢

寂相具少女等來、傳聞、歲暮以後天王寺僧徒、依住吉堺

相論、金堂以下閉戶滅燈云々、朝議云、申旨不聞及、僧

徒之反逆每寺事歟、

寬喜三年 正月

二百七十四

一〇八

十二日、己亥、夜雪僅白、朝天快晴、興心房書狀云、右大臣殿來十五日令渡一條殿給、昨日右幕下相共令參殿下給、除目事評定之由有其聞、令還給之後、侍從宰相數刻在御前云々、近習雖聞密事、更不可洩愚老哉、幕下又定障礙歟、尤可秘之、定高卿去年冬延引婚姻、來十五日、如入內經營、可行花山院、女房童女裝束每人關送之云々、重尋不審事、於宮女房許、得便宜申北政所、又令申殿下給、無左右仰、但快然之由、入夜示送、昨日定事又不然云々、今夜又依召參內裏云々、戌時許南方有火、徒然之餘棄車行向、花山院南町、高倉西、平門宅一字、不移他所、滅了歸、

十三日、庚子、朝天陰、已後晴、申時又陰、夜前參內、退出之時寄車長橋邊、猶備寂寥、極以忝、幾於幾年舜日哉、本所御懇切之餘歟、御書每日不闕、或及度々、近代更不聞習事歟、以承保之往事與宰相房共參、以宗弘爲使遣大外記師季朝臣病、歸來云、加灸治廿餘所之後無增減、若得減瘥者可來謝由也、申時許四位侍從來、參殿下退出云

云、戊終許宰相適見來參御堂、今夜依中宮御產定修正可遲云々、世事不聞及由每度事也、幕下被立門之由、日來傳聞、問之、破唐門被立棟門、檢皮、寢殿南廂被直弘間云々、即是大變料歟、四然者又定被忿弱冠歟、被棄老翁歟、每聞增悲、白馬內辨忘代官仰詞給、外記伺氣色之間、諸卿申驚更不被出詞、外記頻伺、僅被勸唇ヲ、外記猶不聞之間、さのみはいかにと被命、通方卿代官事被仰之間、稱唯退、奏宣命退歸之時左廻、未曾有被奏之後早出、公氏卿受取、御膳以前左大辨夜前燒亡之時、乘毛車遇花山院前由成實卿語云々、若拜賀歟、御齋會始欲參、被駭北山、年始之遊不參、其後又弓會可有勝負事云々、接其事者、公雅、實有、實持、高實、承久以後之仙洞一事不違歟、可謂國世之宿報、中宮御所事猶不始、修正亂聲音聞云々、仍參了、

十四日、辛丑、自夜天陰、巳時漸晴、寒風慘烈、巳時許興心房來坐、自舊年□直右大臣殿無寸暇、明日令渡一條殿給、猶可候之由被仰之上、殿下又自十八日可候談

身之由被仰云々、雜人說云、夜前殿下可有修正御出、御堂依無燈明、御出止了、寺家使依先例催賣油、使定高卿令追立之間無辨濟庭云々、庄力藥師堂修正、借川崎觀音堂油燃之、丹波五ヶ庄知信檢注之間、百姓逃隱、擅供闕如、只居十四枚云々、本望事被拆殿下御心可被行之由、門々戶々悉以謳歌、是又定高卿之披露由、

十五日、壬寅、天晴、大風夕休、日入之後初着布衣參殿下、有長朝臣入見參、依召參御出居、右大臣殿自今日御座、來十八日俄有行啓、廿日每事依指合除目延引之由被仰、今日中可被行啓御車之儀也、御車副裝束卒爾之間難調出云々、蘇芳將也十九日於內裏大般若供養、堂童子

先例殿上五位云々、月來雜事等粗申承退出、月明風靜、依今夜仰公卿補任聊有注出事、不付寢之間月過停午、南方有火、煙炎熾盛、久不滅、以下人令見、曉鐘以後滅了、歸來云、自四條町出南、綾小路北、六角町四條坊門以南、西洞院室町商賈之輩悉燒云々、情思身上事、不眠而及鷄鳴、

十六日、癸卯、天晴、未後陰、夜雨降、午時許小童爲定令參女房局、被召出御簾前云々、申始許歸來、定修來談、夕歸、今日北山弓負熊之興遊天下遍聞云々、近年之歡娛、不異大業之江都云々、今日奉迎貴人、如此事甚不穩所歎思也、御重厄之年雖有謹慎之題目、全無祈禱之實事、貴賤之公人定忌蹈歌日歟、

十七日、甲辰、曉雨止、朝天晴、秉燭之後有長朝臣來談、今年稠人無隙、未伺得御氣色、去年推事體、於御懇志者勿論更無變改、隆親聞此事、爲職不可遺耻、被任他人者只可辭大理之由及悲泣、家光帝侍讀后乳母、一日不可後群、伊平一宰相初參御家人、只休此事也、三人懇切依難扣、任槐之次四人可任有沙汰云々、於三位中將殿者非此限、今度可被行歟之由云々、予云、三位殿令任給之上、四關先不可有之、本望先餘命難知旦暮之上、御座之間能居承傳々說、心中之不審無爲方、多年奉公之志已空、御入內御春日詣每事隔視聽、至于今度盤居之愁摧肝、七旬之浮生更不可待向後、天下之披露無

寬喜三年 正月

二百七十六

一一〇

其實、而彌學嘲弄、旁雖難慰心、中將殿今度御昇進、任槐日令任大納言給、尤道理令然事歟、隨無可任大納言人、遂無變改可被任者、雖不知餘命又可期其時、但於彼御昇進以後者、不存一日之朝思、只居職欲終命如何、答云、其條不及不審、更不可有辭退、本自僻案之身、思此事頗有耽心、今度遂一日之望、御產之間出仕第一之望也、彼御昇進之後被任、而以命爲限、是第二之望也、他少年等雖一人先被任、而被棄老翁者、二世之恨在此事之重示由了、抑殿下内々御氣色、今度重事可被行之由承之、不示無極之由雖問之、不知之由答之、又世事人性等粗言談之間、過夜半退歸、度々來臨不可謝盡之由陳之、抑所存雖如此、浮生之習有非分事者如何、悲矣云々、重事御讓事改年可被忍山去年聞之處、當時其事不聞、極不審云々、今年御重厄謹慎八々事計會、未曾有事云々、恐不可恐、

十八日、乙巳、朝天陰、未後雲忽降、申時許宰相來、白一條殿退出、爲行啓供奉爲改裝束也、明日大般若御讀經、内裏儀

明後日行啓還御、廿二日八條朱雀放關東右大臣後家堂供養、自東方布施取被申相國、人々被催遣、廿四日御產御祈、十三社奉幣勤使、今夜行啓被念云々、女房車、思保、上童車雜仕車付宗弘遣留守御所、又局女房留云々、夜少雨交雪、溜聲聞、

十九日、丙午、雪積二寸許、辰後天晴、午時許出南方庭上、堂前有小人頭、乍驚立五體不具穢簡、令取棄之間、心寂房返事云、不食遂日增、腹張加待日云々、近年於予偏相憑之間、此事失東西者也、醫術者雖多、以符合爲大切、若終命者、老病之餘命何爲哉、入夜賢寂來門前、依寒夜不能相逢、宰相勤奉幣使、彼日以前不可入由示合、讚州公文左衛門尉信綱稱身病由、子息男令參之由申、相具來云々、有名簿、信綱子息廣綱云々、佐々木兄弟同名歟、初參之志神妙之由答之了、此男自相門被命之後、弘田事無虛言未濟、於田舍者存外事歟、宮女房明後日可參詣日吉之山日來出立云々、而有此事、不叶神慮歟、依無可出之所止了云々、於予者依本社禰宜親成

稱注置社頭之由、產穢七十日、死穢三十日、產日數雖甚久、不可破社家之說、只隨其說而過卅日、好參詣人又多、社司等又不嫌之由說之由聞之、付其說欲參詣歟、本自不同心事也、

廿日、丁未、霜凝、天晴、巳時寒雲流陰、以宗弘爲使問心寂房病、送微志之雜物等、巳時歸來、相逢語、病體腹脹食事不通、雖加灸更不得減、難存之由陳之云々、療治事偏相憑、極以悲歎、今夜女房事可送宰相車之由示付、臨昏定修入來、禮拜講用途依損亡未下、有結衆訴、富永庄被收公云々、是本自存知事也、又不可觸、不運之至極、聞而無益之由答訖、宿報披而、心操又僻案、尤可謂道理、

廿一日、戊申、朝天晴、雪霏々、巳後大風近寒、夜前行啓深更云々、寒風難堪、不出簾外、

廿二日、己酉、天晴、風寒、以知村問心寂房、於今者水漿不通、無力有若亡、不可過四五日之由、以信弟子小僧傳示云々、病火急不可思議事歟、歲末廿七日來此宅、

廿八日送書返事、自其夜受病云々、定修書狀云、富永事非勘氣之體、可給替之由被仰前途事、見參之次被尋仰、於今者只僧綱所望、但被叙法眼者、可休沈憂之由申入了者、非不快御氣色者、本意之由答了、

廿三日、庚戌、霜如雪、天快晴、備州來臨門外、聞穢由云云、以下人間心寂房、大略待時云々、

廿四日、辛亥、天晴、心寂房從者來門外、昨日申時遂終命之由告之、無常雖不可驚、此病後偏憑彼療治、未復尋常聞此事、悲歎計會者也、於今者無內外、相憑者不可有之、老病危急之身以何扶餘命哉、今日奉幣、依大神宮有穢延引云々、可怖事歟、今日自內裏被渡御產御調度云々、只傳聞許也、除目事巷說縱橫云々、賢寂來、適談巷談等、戌時許宿北邊小屋、曉鐘歸、

廿五日、壬子、天晴和暖、自昏雨降、終夜如沃、堀東白梅盛開、堀葉南庭西柳、柳三本夏陰晴之故聚一本其跡栽西庭八重櫻、閑

人只以之支徒然、申時許家長朝臣來談、巷說月來一定由成悅、相待之處、承相違由甚遺恨之故來訪、今日訪

寬永三年 正月

二百七十八

幕下亭、被憚關東之聽歟由被命云々、彼是說實否驚奇、只辨士舌端歟、

廿六日、癸丑、曉雨止、朝雲分、昨今無寒氣、中後雨同降、午時許

興心房被來坐、月來所期已變改歟之由示合、不退轉祈念之由被答、先是定修來、富永庄相博示山芳心御詞也、雖無物本師之領也、仍辭退了云々、

廿七日、甲寅、天晴陰、早旦有長朝臣來臨、御使、季有被仰

含之旨、昨日付此朝臣、被憚遠所之聽之說出來、殊承歎

之由申之、其條先不及是非、不思食寄事云々、次被捧御意、必可被遂行之由更不可疑思於今度者先所被收公、

第一惡相之間事、雖爲近代之流例、是皆仙洞之新儀、權

女之所行也、更非理運事、而爲母儀仙院御沙汰付所緣被仰了、件闕爲我得分之條、本所々存尤可痛憚、隨基氏

朝臣昇進如水火申之、叙慮又懇切之餘、可叙三位之議

出來、其事又以不穩、仍難抑留參議昇進、但所聞兩虎共以嗷々、兩人相並可任由又上御本意也、且猶可相待之由仰含了、非此兩人第一參議得此時被參上歟、只可隨

勅定由所存也、定高卿又忠高三事之望殊爲本意、先有侍中金吾之望、不念辨官相轉、依此等子細猶任槐之次

可被出御歟、可相待其時之由也、今承披之旨、云道理云御志、事已至極、不能申左右、畏存之由申了、所痛者只

七旬之餘命難待旦暮、縱無變改、不異徐君之劔歟、度々光臨芳志不可謝盡之由相示了、午終許大炊御門中將

來臨、東帶、中宮御機密、今年公事等少々言談、元日節會傍將如

行幸陣、列、校書殿前取杵、經橋木北就胡床、一身在月花門下被出籠、更用遲參之儀、白馬御會雅繼朝臣遲

參、不令立杵直進、傍將不置胡床、進寄之後更令催立杵、胡床就之間、猶正笏向杵、久而思出懷中之乎、御產

之間事等粗問答、先年注付反古等取出、依年來約束不存隔心、謝遣之後歸入之間、宰相適來也、日來事等少

少聞之、去廿二日八條堂供養、只以本廳殿爲堂、武士陣列其門、公卿到向

人、大納言雅親、中納言公氏、定高、盛兼、賴資、參議隆

親、經高、爲家、三位公長、長清、親長、親房、雅親、盛兼、隆親、本所、自余皆三條前太政大臣被作式、遺策召仕中將師季稱奉行

自始立中門廊、行事殿上人師季弟三人、家定、定、具能忠、藤家

定、實清、賴氏、兼輔、宗氏、宣實、貞時、知宗、已上相、門能、諸大

失、本所、仲能、仲房、遠兼、仲業、仲泰、仲能、仲遠、六位等

十二人、錦被物二重、雅公、次錦裏物、依錦公卿可取歟、山

師季示之、宰相不取、能忠、取之、依錦裏物在被物之中不謂其

心、二重織物二、御綾六、唐綾十、綾十、法服鈍色、童裝

束六之、綾懸子物各二、又直透裏物早出不見、讚衆被物

二、懸文等云々、御室令進給之間、公卿可起座山作次

第云々、御着座之後公卿着堂前、大納言入道、出見殿外、中宮被渡御

調度日、廿四、殿下出御、大臣殿、兩大夫、經通、定高、具

實、隆親、經高、爲家、家光、一人座、不著、今年人多中風、宗宣

卿自元二日中風、十一日出家、忠行卿又中風、廿四日

出家、每聞摧肝、殘涯何爲乎、

廿八日、乙卯、天晴、已後寒風猛烈、蓬屋西小路、自昨

夕流水忽漲失通路云々、右大將家小池被入京極河、其

水絕、水鳥失便之故、仰鴨禰宜被上河水、仍俄掘流云

云、若遇霖雨者、定如晉陽三畔歟、

廿九日、丙辰、天晴、宰相書狀、除目初夜左右相府宮文、

大將實親、家嗣、公氏、參議經高、院宮、家光、下勘文去、夜通之、實世、

去夜左府宮文、家嗣、通方、具實、盛兼、參議爲家、家

光、範輔追加、高實、顯官舉家嗣、高實、盛兼、爲家、範

輔、明日十三社奉幣御神事執筆不被參、定通卿稱病、

大將領狀被勤云々、宰相今夜又出仕着陣云々、申時許

下人說、清水寺闢亂、參詣人自大門外歸云々、自去秋

懺法衆と云僧徒、與惣寺僧不和、切房被拂之翌日來隱

居延年寺邊、日夜勒兵欲報仇之由有其聞、入夜間從七

十人許遲明襲來作時、本寺僧合戰之間、進寄雖不利而

退、疵傷者多、十餘人被殺害、塔本爲戰場流血云々、近

日諸寺悉闢亂、尤可奇事歟、

卅日、丁巳、天晴、寒風烈、微霰零、已時許聞書適到來、

任人雖甚多重事已不被行、甚爲奇、權勢厚給之京、面々中破歟、大外記

中原師兼、兼口依非分超越出來、關東舉、師季讓目來所聞也、同師員、侍從藤兼政、大膳

權亮三善直衡、山城守中原秀朝、大和守三善爲俊、近江

守源信綱、介藤賴行、兼美乃守仲遠、出羽權介信盛、兼

寬弘三年 二月

二百八十

能登範賴、播磨權守實持、備前權守親房、周防介源通成、長門權介藤伊賴、紀伊守光俊、兼、阿波權守實世、左中將定雅、權少將公親、右少將公光、左將監五、右四、左門六、右門四、左兵五、右兵督光俊、拔任、附六左馬頭源義氏、少允三人、瀨口、右允二人、正四位下隆綱、從四位上信時、正五位下邦成、藤雅繼、藤實尙、從五位上仲房、從五位下藤冬忠、殺倉院別當直講中原師朝、從五下中原友景、使宣旨左門少志安部親直、世事日來雖聞一定之由、秋風敗葭關、以道理被遏絕事、又依權勢之力反掌、觸視聽無向後憑、少年諸大夫之忿怨、爲朝家之重事歟、自由任意之詞成朝議妨、入眼宮文大將、執事無違失、早家良、公氏、高實、其外經通、定高、爲家、範輔、實世、清書盛兼、範輔、實世、今日奉幣當日定、有大爲家書定父、八幡賴資、賀爲家、松長清、平顯平、稻隆範、春經賢、大原信實、住吉時綱、日吉周房、吉宗氏、祇兼宣、北經俊、

○二月小

一日、戊午、天晴、大風、每日、下名今夕被行云々、忿怒之強力勝負如何、午時許漏刻博士泰俊朝臣來談之次、見故秦忠朝臣自筆處分遺言狀、分與所領于三人養子、光俊、忠各可懸養後家、違其狀者爲惡魔可取殺由載之、光泰俊、忠貞光去年不與其物、又破取堂廊文車宿等之間、十二月朔成曆勘發之由有人夢、去正月八日俄死去、彼文書泰俊可管領之由書置之狀也、事尤嚴重、可怖事也、以光、忠養母、泰俊守遺願、養母、泰俊守遺願陰陽博士闕、國道以下競望、以最末物兼致水魚志云々、養母、泰俊守遺願宣被任、當今在藩之時、舊臣非器非道云々、典藥權助和氣貞行來談、依無醫道知音、依賢寂年來相知所招引也、良久言談、足腫屬暖氣者、自然平減歟由相示之、夜深付寢之後宰相來、參殿、大中之昇進人事如入眼夜之間者、公氏、伊平卿歟、參殿、大中之通方不超者不可出仕之由忿怨、隆親三位中將殿之外被任他人者、可辭別當、不可執聲、家光又可辭大辨、各其憤如水火、上下令惶懼給、而不被行歟、甲斐前司實親舉□依黃門繼望聲任中將、花山院男女威舅威嘲朝議、去年固於在信盛申三

事、下名來五日云々、但廿九日執紼訖、冷泉亭經高卿日

參其所、推之又所乳母歟、信定又同參云々、本乳母◎此下則文アルカ除目

執筆不敷加圓座、先跪長押上、端、受殿下御目着執筆圓

座、每事早速被終申之處、信盛不留荒出、納言不催儲

清書、上卿被催受領舉之後、遣召在家盛兼卿、因茲徒經

時刻云々、家嗣卿所望入眼執筆云々、是喪父之不勤遺

恨之由歟、九條中納言菅文不聞板音放列、是左府被奉被殿下之說

乍立昇青瑣門、自身之失錯歟、膝行甚少又荒云々、公氏卿第三

膝行之時、突右膝自左膝行、不鳴板、進退甚荒、

二日、己未、霜凝天晴、申時許備州來、左京權、任權下、闕出

來之由昨日聞及所告送也、參內殿申入、共御氣色宜云

云、中務爲繼被催御產鳴絃、領狀了云々、

三日、庚申、天晴、山霞適有春氣、已後陰、木工允宗弘依

母死去籠居、蓬屋彌無人、初月高懸、昨日西天雲掩、入

夜之間雖未及披露、聊有事疑之由、自女房局告送、自

裝束等少々送之云々、重尋之、無指御事云々、

四日、辛酉、天晴、近寒、朝令伺局邊、曉鐘之程參御所之

後、御寢無音、鷄鳴之程內御使被參、雖申入無爲之由

答之、申始許源中將師、被過談、東帶參中宮之次、宮中當時無指

事、但昨日馳參外人別之後及鷄鳴候、陰陽等少々雖參、

未被始御被云々、御產當日夜之儀等少々問答謝遣、親

尊法印堀紅梅一株送、予一昨日付備州之使所請取也、

不經日數、芳志之至也、殊以欣感、當時盛開、單梅也、色

濃香勝、日入以後參殿下、四殿、有長朝臣申入、參御前

暫見參、入御以後暫謁、有長朝臣退出、繼月有光未入

山、今夜宮有千度御被、二品宮令參護身御加持給、南

面依御被無路、右大臣殿奉引導融、日御座可有御參由

被仰、七佛藥師、此宮南大納言家普賢延命、座主、自來十二日御

室孔雀經法、其御所未定、陰陽師在親、國通、在繼、三人

召、惟範、季久、在朝、忠光、兼宣被召加八人所御云々、

助教師行中風逝去、源中將乳母賴基朝臣妻、中風云々、每聞

摧肝、何爲乎、

五日、壬戌、天晴、霞聲、去夜一條堤群盜入、斬殺家主前

大藏大輔賀茂在季、老龜非人、但在宜朝臣舍弟不二大藏者云々、定修來、富永事

寬弘三年 二月

二百八十二

俊範猶催、衆徒令訴訟、平有知行之志、仍被召了、替可給法成寺領云々、臨昏歸了、下名事殊不觸耳、又無音信之人、御產事又無聞事、

六日、癸亥、天晴、去夜北邊毘沙門堂南群盜入云々、近隣

也、已時許聞書到來、雜任甚多、侍從藤教房、藤冬忠、

家嗣子、左大辨嫡男云々宮內少輔藤資定、式部少輔藤光朝、範朝子、本所被改任歟大內記

菅公良、木工權頭源盛長、左京權大夫藤信實、伊賀守

平保房、上總介教藤季、壹岐中原行兼、左少將教房、親

季、將監五人右少將基長、教信、將監四人左衛門尉光成、藏人尉

六人、右門四、左兵八、右兵十三、左馬二、右馬三、正三

位經時、從四上忠尙、從四上賴經、少將如元正五下爲永、止

工、源惟長、藤業教、止從五下祐時、使如元、兵庫頭知

經、人云、父已死去、爲讓此官稱存生之由、自女院被申

任、已時許參殿、經時卿直衣、參會、叙位之時聊申入、

今度不存朝恩自愛之由相示、即參御前、有長朝臣申、

平宰相參入、九夜御養產之間、北白川院御沙汰事之

中、治部卿虛言狂亂、禁裏被驚仰之間事等申之、流懸

雖被調出之故、欲借渡七夜懸盤之間事也、依彼卿勤仕、

爲省事所構出也、爲勘發被遣召之、本自虛言橫謀失身

者被召仕、被補年預、非今始事歟、除目御申文、別當就

筆、任例令書上之處、更破之書改其封字、書北字一字

之間、有奇異沙汰、別當痛此事云々、予事次親申、建久

爲咒咀御被出御川原候き、其事件事許候歟、又依先々

吉例被行候歟、仰云、舊例河原之儀常事也、今度尤可

令修、入御之後退出、彼御殿之儀粗注進之了、臨昏依

今朝御消息詣相門、有僧都御房御車、仍自門外歸了、

戌終許左京權大夫來告拜賀之由、已付寢了不能起出、

以人謝遣之、

七日、甲子、天晴、依徒然又掘庭樹替其所、賀茂祝保孝

來、喚寄言談、自少年相見、今年六十六云々、四位侍從

來、參殿日入以後詣相門奉謁、不及時刻歸廬、病後之

身進退失度、行步有若亡、

八日、乙丑天晴、未後陰、夜雲晴、朝沐浴偃臥之間、別

當法印來臨、隔物乍臥言談、金剛童子法、法印護摩壇

勤仕之故被召出老僧、尤可承自分御祈之由申、可修入

字文殊法之由被仰了、此次問諸壇所聞及、孔雀經、御

寶、佛眼、仁和寺宮、二品親王、御驗者、普賢延命、座主、尊

星王、覺明、自、北斗、冥海、六字河臨、慈賢、如意輪、道觀、醜

千手、道慶法印、殿御弟、不空絹索、其輪法印、八條左府御子、烏莠沙塵、成源、五

壇、中壇法務、降三快報、軍太海、大、金剛童子伴僧、僧綱猷圓、

實興、大僧都、公、公統、前、忠尊僧都、忠尊、經舜法眼、實經

房能法眼、實因僧、實仙、公雅、圓命律師、本寺、欲智律

師、穆千已講、前刑部大輔家方死去云々、年來沈淪不返、實

々年相門頗懷感之詞等聞之而死、實不還人然、覺經僧都交伴僧、依輕服被止云々、

九日、丙寅、朝天晴、自夜腹痛苦痛、未時許頗落居、巳時

宰相來、去六日中宮萬卷心經供養、聖覺又說法殊勝云

云、經通、定高、經高、爲家、家光、親房着座、導師被物

經高、布施殿上人取、其後泥塔供養云々、親長虛言被

召問、全無陳狀承伏退出云々、相門以物語歌可令書障

子繪之由一昨日被命、可念書出之由今日頻被命、不堪

右筆難治、

十日、丁卯、天快晴、源氏物語歌書出先奉覽、早旦以知

村令堀賀茂植植邊紅梅、保孝、沙汰、民家之木雖無其姿、栽南

簾前、月前宿北邊小屋、曉鐘歸、月未入、

十一日、戊辰、天晴、午時許參殿參御前、諸御修法等明

後日可延引、用途詮分關如事等有沙汰、今夜御方違行

幸、持明、院殿、可有御參云々、暫逢有長朝臣、臨昏退出、

十二日、己巳、天晴、風靜、曉鐘之程聞御產御氣色、不堪

不審參西殿、無人、寂、實持朝臣着關腋出來云、只今行幸還

御訖直參云々、入泉殿方、改直衣上詣、參宮、今日殿上人

一身睡眠天漸曙、重房資親等纔見來、與心房又被來、

依召參山、少時之間、行參子引導參了、前大式來加、暫言談、父禪門中風病不

食如待時、於子四、年兄、此輩皆雖布衣、入東殿小門徘徊打橋

邊云々、予不堪行步不窺參、又分散之後三位入道、能季

來加、良久言談之間、雜人等稱御座已成由、已二、熱、侍等走

來云、皇子降誕、兩人重問、一定飯已落南面、無疑之由

每人稱之、聞之感淚忽催、每來人重問之、猶々稱一定之

由、漸及已終、依老屈退出、與心房又被來、參入之後於

寛喜三年 二月

二百八十四

一一八

風爐殿可祈念之由被仰、依内裏二品候不參御所、經少時程大相高聲告皇子由給、宮中欣感、御驗者二品宮祿、右大臣殿令取給、法務御祿右大將云々、是又未曾有之儀歟、心神還周章不能委記、未一點猶依不審歸參西殿、又以無人、時光藏人、問御驗者祿間事、親王御馬二疋、右少將賴行、左府生久清、左少將伊忠、右府生兼友、法務御馬、諸大夫爲仲、左番長賴種、高階基邦、右番長兼利引之、勸賞事今日不聞及、大法結願只今可被行由聞之、謁新少將之次陳所存、今度御吉慶情案舊例已無比類、承曆吉例尤雖規模、所養猶難比實事、寛弘五六年又雖符合、竊以偏是宮中殿中之御吉慶也、天子最愛儲皇坐給、家嫡猶幼少踐位、五年三位、六年左衛門督、自余之例勿論、今日之儀誠以非口所宣、非心所例歟、少將即參彼御所、具申入所申、歸來傳御旨、此慶實以無比類、東一條院御時、雖一旦眼前見此舊儀、猶以超過先祖之由存之、而以不肖之身、已追寛弘之佳例、自愛更不可云盡、玉體殊大にたのもしく拜見、早速に令拜見ばやと

御存知之由被仰、感涙忽下、申恐悅由退出、御湯殿明日云々、自余事不聞及、

十三日、庚午、朝雲飛、午後風雨、巳時許猷圓法印被過、

間昨日事、驗者賞於其座被仰、宮舉權僧正實亮給、八十餘老、僧云々、其身凡人、近江額田庄と云所の物也、當有云々、公性法印之師也、仍申請之、法務御分法印公緣、

元前少僧都、有家卿子、年來者也、七佛藥師結願遅々及昏、其賞公賢任大僧都、公卿卿子、金剛童子法賞讓給、仍本寺本房寄進中宮御願

申請阿闍梨二口、是爲永代事、遇身上官途殊自愛云云、嚴重賞讓給、尤爲面目、深恩、今度謹摩壇勤仕、殊

有快然之氣、普賢延命賞成源又法印、是又雖年少有淨行知法之聞尤宜、法印逐年充滿天下、今度僧正又剩加之條、爲朝頗不便

歟、遠忌事如例示送嵯峨僧、扶腹病念誦、心神殊不快、頻發出之間休息憐緩、申終許宰相來、直衣上給、自朝候、適談昨日

事、供奉行幸、源大納言、雅、右大將、大炊大納言、左衛門、別當、爲家、顯平、親長、實世、職事基氏、信盛、範

賴、兵衛光成、高賴、左將師季、宗平、有資、公有、右將左實持渡、隆盛、親氏、伊成、少納言兼宣、還御源大々將列立之

間、聞御產御氣色之山參宮、于時人未參、驗者二人坐、御加持兩人御坐之上、御弟子各二人副候、陰陽師在南簀子、御被陪膳如能忠一人、師季、宗平、有親、爲經、隆綱等權督勤仕大麻、自西面進入、定高夜明有長、同、親房等四人祇候寢殿乾方緣內、御使相續馳參云々、令取頻給之後、頻又御落居、御邪氣甚強、上下極以恐痛之間、法務御房裏御簾放詞加持給之間、遂以被駢渡、不及御腹痛平安降誕、此間頭中將爲御使參入、頗經程欲歸參、暫可相待之由招留之間、大相御聲被稱皇子之由、基氏聞之駢參了、其後付御使之便奏聞、獨有恐重參入可奏由、依殿下仰馳參、車、乍直衣入立舘戶、於弘御所北御壺庭申此由、帥典侍奏、仰聞食由、歸參乘車之間、頭中將又騎馬馳參、其後着束帶歸參、兩驗者出給之間、公卿皆悉奉送親王、右大將以下扈從、立中門妻戶內給之間、各先出下立、下賜兼山、北妻月了親王下給之間皆跪地、各至御車下歸昇、又法務同大將以下猶被奉送、大納言以上、中門廊、公氏以下奉送參入公卿、左大臣、御產以後早出兩大夫、大納言

實親、家嗣、中納言公氏、經通、高實、具實、盛兼早出、賴資、參議隆親、束帶、經高、家光、範輔、宣經、三位基定、直衣、隆長、大法結願、宮廷參給、及晚景公卿束帶着座、右大臣殿、右大將、實親、通方、定高、具實、賴資、經高、爲家、宣經、諸大夫引御馬、其後權亮持參御劍、赤地綿袋又、入白生組袋、亮啓事由、令敷茵座之儀如例、勅使持參御劍、殿下御束帶自令取給、持參令置御枕給、令歸出給、大夫取祿被進殿下云々、令取給賜勅使云々、御臍緒殿下令奉切給、入夜參人々、源大納言、雅、九條大納言、中納言國通云云、猶直衣、若下袴改裝束、歸參、御湯殿今夜者、讀書博士淳高朝臣、長倫朝臣、侍讀、師兼、秉燭以後與心房凌雨被行廿五三昧、定修靜俊來令聽聞、夜深雨止、天漸晴、曉又雨降、先是僧達歸了、十四日、辛未、朝雲分、寒風烈、自昨日經一部今日終功、佛前居併供燈明、以靜俊聊啓白如去年、臨昏南面緣端如形作檻欄、中央間作三級階、蝸廬雖不可然、見庭花望山月、憑之有便、又不堪行步、老身爲昇降也、人定嘲

寬永三年 二月

二百八十六

二〇

歎、今夕氏院參賀云々、夜月明、

十五日、壬申、天晴、風又猛烈、終日不休、念誦窮屈、不

聞世事、入夜宰相來、依御讀經結願有催、已時束帶參

殿下、聞食公卿不可取布施之由被仰、仍日膳、御湯殿

大納言三位^{別當}勤仕、一昨日共待夜景被始、今日白晝

之由被催鳴絃、爲繼範保之外皆悉迴參、又入夜明日辰

時之由被仰、今夜之儀右大臣殿、九條大納言殿、三夜、

殿下、左右大納言定通、雅親、大夫、五獻、實親、中納言

公氏、權大夫、經通、實基、高實、具實、四獻、盛兼、賴資、

參議隆親、爲家、三獻、已上着座、經高、家光、宣經不着、

先大臣前物殿下陪膳、^{有長役送、諸大夫四人}左府、兼教、右大臣殿、

光兼、初献有長朝臣持參、二献頭中將、^{瓶子藏人兼綱}汁物、^{爲家中上}

三献以前氏院參賀、次三献、^{親高}朗詠詮通、實基、盛

兼、^{令月、知宗}次四献、^{瓶子大}次五献、^{夫達}擲拔笏人經通、盛

兼、^{定能細之故歎}御乳母按察三位歎、^{家嗣卿妻、二品}按察三

位、大納言三位、皆祇候、^{後聞、每日自}昇机人宗平、實陰、

引繼、實持、顯定、取彌、皆下膳爲先廻、粥間人不聞、着殿

上人座人、師季、宗平、實陰、實持、顯定、忠高、今夜御湯

之間着座、右大臣、九條大納言殿、通方、定高、經高、爲

家、家光卿、昨日右大臣殿、大納言、兩大夫、三條大納

言、一昨日右大臣、大夫實親、家嗣、通方、定高、具實卿、

^{順注}入道定經卿一昨日逝去、七十四、爲經不憚到此院參

賀云々、如何、

十六日、癸酉、天晴、已後風又猛烈、終日寂寥、只對紅梅

與翠柳、日入之程宰相來、直衣、御湯殿訖云々、右大臣

殿、九條大納言殿、權大夫定高、具實、爲家、三位中將

殿、^{發浮文指貫紅下袴}家光卿、不着、改着束帶歸參、今夜公卿參

二十六人云々、推之不參人、內府、基嗣、^{祖父國通、時々}

勞歎、伊平、^{身保}宣經、^{珠被催求失云々}其外見任皆悉歎、公賴卿、

笛、實有卿、雀、拍子、實世、琵琶、家真、箏、經通、筆架、成忠、

和琴、家嗣、付歌、實雅、

十七日、甲戌、天晴、風寒、早旦參西殿、夜前事鷄鳴以後

事訖皆寢云々、殿下御東殿、依無人請出舊女房參河、

^{故北政所女房}渡御之時可被披露之由示付、談往事退出、^{也、候此殿}

寛弘三年 二月

二百八十八

遊館箏和琴之外大略散々、琵琶絃切云々、

頭注今日令奉垂皇子御髮給、皇后御自ラ云々、御臍緒昨

日令落御、

廿日、丁丑天顏快晴、自未時陰、尊實法印被送早梅下

枝、先日所請也、薄紅梅頗重、栽南築垣邊、巳時許參殿、御東殿云々、

昨日定修所送之申文付新、少將進入、仰云、沙汰之時可

奏聞、只今渡御云々、即入御參御前、心閑見參、七瀬御

祓七ヶ日連日自公家被行、皇子御祈使承曆諸大夫、七日、康和五位上用承曆者、治承又諸大夫也、用康和者、元永又殿

上人也、雖然猶可用殿上人之由被定仰、仁王講五大力

新奉圖云々、二鋪氏寺參賀廿三日云々、御乳母内々沙

汰、右大將自内殊被仰家嗣大納言歟、雖競望多當時二

人歟、御入内、三月廿日歟、御五十日、四月十二日、内廷儀、定乘法眼參會

語云、常樂會十五於本寺中門外賴房卿子三位と云傳御

也、無故被殺害、未曾有不可思議、覺遍法印弟子法師

突之、醉鄉之故歟云々、本自於南京獨孤者也、且依上

仰年來爲弟子、事卒爾依無其住所、昇入我房人宅、不

及半時死去了云々、實可驚事歟、

廿一日、戊寅、天曙雨漸降、終日濛々、月出以前、天晴、閑居雨中

卷南面簾、只對紅梅翠柳、或睡或寤、吟詠尤甚、專動感

情、宰相示送、去夜九夜、殿下、左右大納言雅親、基嗣、

大將實親、中納言通方、高實、國通、定高、盛兼、經高、

三位中將殿着座、具實、賴資、隆親、爲家、範輔、宣經、

實世不着、穩座大將云々、二献資賴、三献經高、四献國

通、五献通方、北白河院御使中將家定、公卿着座之、後最初召之、三献

後朗詠、

廿二日、己卯、朝天無片雲、巳時參西殿、兼康入見參、東

殿、可有渡御由被仰、頭亮暫言談、參東殿、高三位、少將定

平朝臣暫言談之間、渡御參御前、少時於南庭久清末子

右大臣、殿近衛乘騰馬云々、此間退出、仰云、東宮不座給之時、不

立坊而直踐祚親王、崇德院、六條院、土御門院皆不吉、

於堀川院者、實仁東宮依坐給無御立坊、不似當時歟、

一歲立坊之内、清和鳥羽院春誕生、秋冬立給吉例也、

雖一歲五十日百日立給、冷泉安儲、先帝又不吉歟、仍今年秋冬

猶可有立坊歟由存也、申云、此條尤可然候歟、但竊案、猶國家之煩歟、又一昨日仰云、重厄旁計會依恐思、可去棄大名之由思慮之處、忽有此事、榮華之最初辭遁之條頗不叶時儀、更爲之如何、申云、御愼之條實怖歟思給、御辭退尤雖可爲攘災、所承置木星入命位、不滿足之人有其年吉慶、滿足之人愼尤重云々、付之案之、當時從一位太政大臣累代之御所期也、何謂至極之御官途哉、御讓以後奉號大殿御出仕、兵仗如元、御子息御攝錄、是豈非至極之御運哉、殆似令增榮華給、彼是極難測候、返々御案可候事歟、云御祈請、云卜筮趣、難被決候歟、愚意案之、御辭遁猶背事理歟、

二十三日、庚辰、霜如雪、天遠晴、未後陰、昨日法務任大僧正給之由、歸家之後聞之、今朝間有長朝臣、答云、近日可有僧事、其次可令任給、未被仰下、座主可辭大僧正給、是又僧事口脫力之次歟、其次定有候任等、除日又有巷說、勸賞成功之輩可任之由云々、定日不聞云々、午終許少輔入道來談、近日在清閑寺云々、申終歸、今日氏寺參賀、山階

寺權別當圓玄以下云々、今日徵橘木覆屋、西北薄紅梅盛開、入夜入道又歸來被宿、

二十四日、辛巳、天晴、少輔入道日出以前歸、差強飯粥、午時許參殿、自東殿還御、七瀬御被自昨日始、昨日七人催出、知宗、親高、定具、兵衛佐、宗氏、忠兼、侍從、經氏、隔日可參之由雖催、或三度或二度、當時領狀猶被催云云、今日兵衛佐公員、侍從實尙等領狀云々、北白河院爲令奉見皇子給可有御幸云々、明日歟、殿仰云、贈物只可用古儀琵琶、予申近代之儀、内々物可被相副候哉、時儀若無興歟、何爲乎之由被仰、先例之降誕、悉帝母后不御座、今度偏新儀歟、實是爲御幸運之最、又仰云、我可參詣石山、依有御堂御願書、去年立願、已以成就、寬弘口云々、其比石山人廻參詣、近年願希歟、

斯注 文德清和陽成之外、祖母后不御座、

二十五日、壬午、自遲明雨降、未後雨漸止、申時陽景晴、朝間融、風猛烈、雨止、已後甚雨、昨日甲斐前司資親云、前大臣相具侍一人、遇鷹司河原之間、爲盜被剝取主從

寬喜三年 二月

二百九十

衣裝、裸形而歸家云々、縱雖虛言甚難堪之世也、況洛外
行路男女更難途前途云々、是偏身上事歟、去月於鳥羽
造路大納言又有此聞、共侍三人皆被取馬鞍云々、雨中
對花柳、悲殘涯、雨漸止、陽景晴、而花色鮮、及秉燭又
大風、

二十六日、癸未、蒼天遠晴、白日尤鮮、夜前、及夜中僧事

小除目云々、（任人三人、刑部丞、紀伊守資繼、
（定俊、光實子）左兵衛尉時光、僧事勸賞

他事多交、濟々云々、不見聞書、大僧正、其、僧正、親殿、權僧

正實（世間云、開闢以來顯密一能皆同如、凡
人任僧正之始云々、只富有一得云々、法印五人、大僧

都五人、少僧都、法眼、律師、法橋、巳時參殿、御東殿、

資親、兼康等見來、高三位良久言談、移時刻退出之次、

逢有長朝臣、三位中將殿令參給、言家、基邦在御共、外

祖入道黃門忌日八講、今年於綾小路宮被行、卿相以下

群參、（言家參
云々、明後日北白川院御幸中宮御所、（經光奉行、
被副云々、退

出之間逢七瀬御祓使、退紅仕丁捧標、相副御撫物、予

扣車、御撫物過了、使又扣車、早可被融由辭謝過了、夜

宿本所小屋、曉鐘歸了、

頭注去十九日三位賴房卿出家、年五十五、

二十七日、甲申、蒼天遠晴、今曉大相圓明寺方違、（等相實
子供奉云々、非方
違、夕被歸云々、巳時許參大納言殿、（四條坊
門大宮、見參移漏、日

入以前歸家、秉燭之後有叩門者、扣車云々、吉田春日

殿依有可云事所來也、事體存外依無由、以青侍等年來

依不奉知難申達由令答、度々問答之後慈歸了云々、所

傳聞之狂人也、可恐可奇、一寢之後南方有火、春日京

極商賈去年燒所也、

（頭注）朝廷八重櫻（今年僅開、

廿八日、乙酉、天晴、未後陰、巳時許與心房被來坐、次受

戒、窮屈偃臥、去夜京極火後、又綾小路堀川賴房卿家

寢殿一字燒、放火者擲得云々、夜半許鷹司白川燒亡云

云、

廿九日、（丙戌、自朝天陰晴、風吹、早旦貞行朝臣來、胙足

此間猶有腫增氣、令見之加灸點了、雖難堪即加灸腹二

所、（巨國胃管
卅一壯、膝下德島三里上連絕骨三十一、足大衝、（今日
坪、

左手頸又其上、廿五、左指本三所、（廿一
壯、依手損左許先灸

之、未後宰相來、殿下今日又御小灸云々、一昨日御幸、公卿直衣催、通方、東帶、盛兼、隆親、爲家、親長、來、中將家定、付御車、院司四人取松明、能忠、房一、經光、知宗、殿上人、儀衣知宗之外、若東帶、右大將御車寄、下騎皇子御乳母三人已被定了云々、大將大炊大納言別當云々、一昨日殿下西園寺、宮女房車一兩參、此女房不參、其日聊御風氣不參、御氣色宜云々、

頭注
櫻悉開、

○三月大、

一日、丁亥、天陰風烈、晝後如揚沙石、早旦宮女房依御神事退出、御邪氣、猶時々御違例云々、巳時許灸足大衝卅一壯訖、乘燭之程女房歸參內裏、二品補典侍、可渡參之由頻有芳言云々、雖奉公本意、今年祭非微力可及事、仍不能經營、不可有此事之由、密々付有長朝臣欲申殿下、

二日、戊子、蹄忌通夜大風雨降、荒屋破壞、早旦送書有長朝臣許、可申之由有返事、甚無由也、被嫌凡卑被止禁宮

御陪膳、夙夜宮仕依失便宜、慙欲被補典侍、爲貧者極

以難堪、連日大風摧折花樹、破壞墻垣、未後大風彌猛

烈、匪直之事、極以怖異、纔開始八重櫻乍莖吹剪了、

三日、己丑、風適休、朝間少雨、已後止、未時天晴、今日

聞、貞曉法印鎮倉右大將息、年四十六、逝去、及廿年籠居高野山、不

病臨終正、病臨終正母禪尼依彼悲歎又待時、行寬扶持、伴羅尼、念云々、共在攝州云々、相門明

後日下向湯山之由、日來被出立之由聞之、今日適延引

之由有其聞云々、非病只依旅行之好也、宰相、預備所從告入首陽山云々、來十七日御室

高野御物詣云々、是又同前事歟、鴨禰宜宅從者醉圖諍

殺害云々、今日端午七夕重陽等日、家中盃酌聲高殊爲

耻、可制之由、昔聞庭訓、即如此事歟、

頭注
隨躑躅鴈皮等開、

四日、庚寅、庚寅、三吉、天晴、自今日申付與心房修不動供、殊宿願

也、申時許靜俊來談、有長朝臣示送云、昨日事申入了、

前驅出車等事皆可爲上御沙汰、自余事可遣注文、且人

人訪等且尙可有御沙汰、更不可及私煩由被仰云々、其

上及對捍者依有事恐、不及重辭申、竊案之、定又後于

寬政三年 三月

二百九十二

一二六

闕如事被押懸歎、殿中事皆懲前事無所憑、入夜女房又示送、殿仰云、或人聞此事、周章不可知之由答了、車藏人方所調也、出車衣二品一人_{北政所御事也、內二品}、可沙汰、童女裝束相國大將可令調、履子絲鞋近年兵衛尉功也、被物少々祿絹等蓋出來哉云々、事實者甚神妙畏申由答了、

五日、辛卯、蒼天遠晴、今夕御方違可爲持明院殿、而俄有行幸中宮、自一昨日有其沙汰歎、無事煩先例等之沙汰、御入內依可爲四月儀、有此仰云々、言家朝臣書狀云、祭近衛府使若闕如者、可新任之由所申也、北白河院灌頂御幸供奉依不諧、無術失計略之由母堂歎之、使節所望甚不便事也、其本性只今不及答子細、只聞之許也、夜以雜人令伺見行幸、深更歸來、已及曉鐘云々、殿下御參遲々云々、

六日、壬辰、天快晴、入夜少雨、傳聞、還御忽延引、今日御室町殿云々、頗希代事歎、委事無告語人、午時許聞、還御明曉云々、未時許依暖氣始着袂小袖、言家云、明日

最勝金剛院殿下御共被催、偕牛、私笠置微少事者、曉賢寂沙汰送了、病者一寢之後宰相來、乍臥問答、行幸先被催、恒例御方違_{持明院}、由、退可爲中宮御所、頗被制之由有重催、仍召具馬副早參后宮、御邪氣猶不快之間、殿下御遲參、夜深行幸、故可有勸賞_{北政所御叙位歎}、殿下可有御拜之由等被召仰御隨身等、人々相待還御之間、鷄鳴以後俄承延引由各退出、供奉人、大納言雅親、家嗣、中納言通方、馬副、具實、參議隆親、馬副、爲家、宣經、三位基保、成實、公長、親長、右大將任騎馬所勞被參儲、右大臣殿令列立給、左將師季、宗平、資季、有資、實持、家定、實任、公有、家定、實清、教房、右將有教、實蔭、親氏、伊成、兼輔、隆盛、實直、賴行、兩頭、五位藏人三人、高賴、兵衛、檢非違使志二人、日出之程着衣冠早參、其後右大臣殿令參給、成實卿參、出御中門方御覽、晝後近習輩群參、右府御隨身二人騎騰馬、頗臨昏被進貢馬五疋、近將等引之、_{二人}資雅、公有、親氏、實清各乘云々、其後於寢殿西盡蹴鞠、爲家、資雅、有資、公有、親氏、實清、入御

御所之儀如恒、寢殿南面着席御興寄、以西面爲若宮御在所、北面后宮御所、以二棟方爲內女房候所、例公卿座疊二行敷之、猶爲公卿座、以此所供朝夕日御膳、如季御禮經等時、朝餉之儀不居臺、淳高朝臣陪膳、近臣等多上結直衣、公有着下袴負弓箭、鞠次將等懸纓、頭亮束帶參、祭使猶闕、臨時祭使未出來、今日時兼參入之次猶可勤山、以親房卿被傳仰、不及子細不可勤仕之由申荒言了云々、私案之、數多若年近將不勤、七旬四位少辨所被仰無其理、但不申子細荒言、實言實又過分歟、南階西簀子安大刀契之儀如恒、

七日、癸巳、天陰、少雨濕、夜月猶陰、鷄鳴之後宰相着束帶參行幸云々、天明了、日出山不、之程還御成了云々、辰時許傳聞、勸賞、從一位藤一子、從二位藤原良實、從四位下藤原公相、大夫應侍從其元、是又可任中將之科歟、後明、超公親公光、親戚深欲被付公光、實親親馳走、訟訟難甚間、大將之威被申被了、相國不被口入云々、終日無聞事、

八日、甲午、朝陽漸霽、午後陰少雨、夜雨間降、分栽庭菊、傳聞、昨日最勝金剛院殿下、右大臣殿御同車令渡

給、兩女院殿渡御、殿下御着座云々、大納言殿、中納言定高、參議經高、爲家、家光云々、大相有馬湯來十七日云々、來廿二日殿下石山御參詣、鹿御車、供奉人布衣、公卿四月八日中宮御入內、來十一日直物云々、每開增悲歎、午時許中務爲繼來談、鳴弦木五位十人之外、以良家盛加、六番各二人勤仕云々、信實朝臣有中風疑、灸治籠居云々、閑居、雨中心神殊惱、

九日、乙未、朝雲漸晴、已後天晴、言家朝臣來、即參二位中將殿中、此間頗近習云々、長者僧正被入坐、參賀及之次、清談之後被歸、今年八十二、猶起居輕利云々、

十日、丙申、朝天陰、午時雨降、夕止、

十一日、丁酉、天晴、四位侍從來、臨時祭使闕如、被聽昇殿勤哉之由、二位中將殿內々被仰云々、勤仕之條猶定其力不可叶歟、尋常出立期日已近、最略儀卒爾之催不及當色等之儀、兩三日以後道理歟、今日領狀可爲中間之程哉、申可勤之由、不及當色者可有恐歟由答之、禪尼同來臨、興心房被來問、良久清談、及時刻被歸、侍從

寬喜三年 三月

二百九十四

又云、臨時祭定平朝臣領狀了云々、甚穩便事歟、賀茂祭近衛使又闕如云々、世間儀可驚奇、典侍事已以一定由示送、此事猶不便、極以不可叶事也、上御訪定漸々後了、如予身上事歟、宰相注文云々、不告不知、入夜宿北小屋、臘月催懷舊之思、治承三年三月十一日始通青雲之籍、遠步臘月之前、于時十八、寬喜三年三月十一日猶戴頭上之雪、僅望路間之月、于時七十、大谷前齋宮少將局覺朝僧正妹也、年七十七、實有卿在此屋之向、櫻門、去八日終命云々、每聞故人之歸泉、彌悲老翁之殘涯、曉鐘歸、月已近山、

願注
八重躑躅開、

十二日、戊戌、朝陽陰漸晴、午時西北雷鳴雨洒、日入之後前左馬長綱來談、十六日始南山精進云々、十三日、己亥、遙漢霽、大陽明、後白河院御忌日賀茂一切經云々、宰相適來、典侍可中沙汰由雖被仰、每度當時無定歟、今日參殿、重欲申此事、惣不可叶事歟、私力更不可及由猶中山示了、有馬猶可被駟具之由有其命、

每事聞之如夢、大不便事也、十四日、庚子、天快晴、申時許中書來、中宮御所夜部依俄召僧侶參入、大般若御讀經被始、若有御違例事歟由各成不審云々、女房不音信、秘藏之故歟、中書今夜宿、入夜開宮中無爲云々、

願注
後開、祈年穀奉幣上卿內府、使闕如、範輔八幡、範宗賀茂、顯平兼二社、里亭內覽及夜云々、每事懈怠、似前殿奉幣、範賴奉行、四位仲國不參、外記給有長稻荷、

十五日、辛丑、蒼天遠晴、巳時許伊勢清定來、近日巷說又吸々、任槐之間一定云々、聞及歟、類實卿一定山雖開巷、既又不知實、不中山云々、冷泉亭正月造改門、土用以前立南面庇柱、當時造作之山承之、身重病灸治、出仕子息故不來問、世事不觸耳山答之訖、若非二人者實可悲事歟、貞觀忠仁公以來爲執柄弟、爲他門人被超之人未聞及事歟、誤脱アルカ幾元服正五位下、不歷參議任中納言中將之人、爲大納言之時、雖上臈大將無任大臣之例歟、幸運任意之世、更不

及先例之沙汰歟、令逢此時給、爲御先祖爲朝議實足悲
痛者歟、左府自御產九夜鼻血出起座、其御病于今不
止、色損及絕入之氣色給時多云々、是又魔姓之所爲有
事故歟、日入以後出小廊待、新月蒼天無行雲、晚鐘之
後及暗退出、

十六日、壬寅、天快晴、此三ヶ日剃結甚辛苦、臨暮景適
瀉、心神極惱亂、入夜宰相適來、殿尊勝陀羅尼、逆卷不
着坐、

定高、經高卿、兩大辨、基定、長清卿云々、典侍觸廻、人
人以領狀、履子六人料祿布右少辨藏
人左佐等出來了、童女膝下、

相門不伴湯山者不可訪、若來之關如事皆可沙汰之由
有命、明曉遂供奉云々、大將せもの法眼公審法眼等云
云、本性實以難治歟、任槐事全無聞及事云々、

則注
臨事祭使、定平朝臣依祭使任右中將可勤仕、仍臨時
祭又無勤人云々、有限巡役非賣官者無勤仕之人、

十七日、癸卯、朝陽快晴、悲七句之白髮對八重之紅櫻、
未時許東北煙見、大原辻之邊小屋四五宇依放火燒亡、
近邊雜人打滅、賢寂來次云、宰相若有恩免者、自水田

歸洛、可參詣殿下石山御共、云彼云是不定經營、行旅
之難事、極以有煩云々、

十八日、甲辰、自朝天陰、南風吹、及申時晴、夕雨漸降、

朝沐浴之間心神苦惱、念誦不貫、偏平臥、未時許受智
院得業與と云僧來示、季大納言僧都と云一人之子云

云、始末不知之頭之訪事、誤脱アリ示身病并存外經營等之事、

定含遣恨歟、今日傳聞、一昨日物狂之山、持成童、十七
八許、

昇御殿取盡御座御劔拔之、自鬼間奔融、兼綱聞此事告

繁茂、左御
前、繁茂奔出之召童、立月花門下拔劔奔廻、繁茂

奔懸抱之、從者等遂反接稱物狂之時、其日又右大將家

云々、永久千手丸之時物歟、尤可被考問事也、被放免

者向後不便事也、後聞、此四ヶ年於日吉社頭人皆見知

物、狂童先入右大將家、次參内云々、定放免歟、言家朝

臣云、昨日中將殿御共參一條殿、祭使猶闕如、賴俊能

定競望、猶可勤仕之由申入之間、三位入道參中、能定

平可被任山云々、今年使更不可叶事也、任本心不調所

望、其力不及者及世間大事歟、甚不便、

寬政三年 三月

二百九十六

一三〇

十九日、乙巳、自夜雨降、午後休、天未晴云々、祭使侍從雅繼可出立之由内々勅許云々、所聞競望之中可然事歟、灸治已爛、苦痛難堪、

廿日、丙午、天晴、臨時祭云々、蒼天無雲、紅櫻歟冬未零、艾跡痛而徒偃臥、

廿一日、丁未、蒼天遠暗、有敕中將書狀之次云、昨日事、

御禊陪膳頭中將役供、信成、御笏頭亮、使早速取御幣、

暫之由有天氣、舞人朝輔、一行通、六、五忠、兼綱宮主退出

之間落笏、取之更揖、於仙花門下又落、參公卿、殿下、

柳御下襲、左府、同下大納言、家其、高嗣、中納言、公氏、高實、參

議、隆親、宜經、實世、定高、隆親之外皆着坐、召使頭亮、使左少

將定平、白檮色三人、舞人朝輔、侍從、爲繼、能定、貞時、

忠兼、一獻之後、參、新舞不具雜色、行通、隆嗣、左衛門佐、二獻之後、平繁茂、源兼

綱、行幸、四位陪從、家長初臣、仲國朝臣、初獻、頭亮、陪、信盛、二獻、

左府、陪、公卿九人之外、垣下街重、兼立、三獻、家長重坏師季朝臣、隆綱朝

臣、捧頭花基氏、隆範、舞召基氏、殿下御下襲被懸欄、

自余、今度灸殊痛、終日如病者、賢寂來、有馬事不聞及

云々、歸後云、殿下石山御參延引了、東一條院春日御參籠云々、此事連々、先々后宮無如此事、於今無由事也哉、前齋宮又雅氏頻參籠、只長房入道夫妻所勸申也、不願外聞之不穩歟、

廿二日、戊申、曙後雨降、午後休、未時許有長朝臣來臨、

適有被仰事、其後只言語道斷而已、非可測先、直物廿五

日、之次、可有公卿剩任、基氏參議事自望勅許、御志

如水火、因茲求參議之闕、經高任修理者可去官、左府

非淡路者不可替修理之由和與懇望、仍不、被行、參議之鼎峙

三人有片時之遲者、可切本鳥事、爲朝家大事、大理御乳

執事、内近習、二大辨、御侍讀近習、中將、一參議、始參殿下進名簿、

位中將殿兄公、后御乳母、此料也、勞十年、下鷹中將

超、故止忠房定高官、又可被加十大納言、汝爲前官之

身、當時不交衆、不成此恨、今廿日權可相待、有任槐其

闕出來歟、必可令任、二位中將殿鼎奉免、雖有勅許、爲

基氏被召忠房官、依子息事不可妨申、雖可爲將來之例、

不可令任者、此次密語巷說、任槐已以一定歟、四月云云、予先私云、如此天下之勝事謬舉虛受剩加之上、無

緣老翁爭中是非乎哉、今廿日可相待由仰、是過分之厚恩也、畏悅承之外無可申詞、但世上事自他之望、松容之次伺承事、昨是今非皆以如夢、有申妨人之時、如霜露消滅、更無其憑、又雖過廿日、他少年有忿怒之人者、御恐惶又同前歟、實可悲、答云、殿中事實儀只如此、更雖無所憑、如當時者似無其人、實有卿又經廿日者、納言懇望出來之條、是臨時處分歟、更非臨時處分、第一參議兼中將權門之二男、已餘二十、升進無疑事歟、身上事近日問巷雜人皆依有中止人、不可被行由遍稱之云々、當時無御忘却之仰、殊畏中山示付了、執柄連枝元服、正五位下、經中納言中將任大納言之人、漏大將大臣之闕、何時何人之例乎、此事先日皆有御存知、今即如夢、更非御意之理非、唯一兩人之所申行歟、可悲可痛、定通卿能以使者申左府云、御上表一定歟、若其事候者必兼可承之、乍坐超越依有耻、早速爲剷除也云云、每人頭、刺適辨黑白之人無其沙汰、素食非器下劣弱冠、爲朝家大事被行剩任、時儀實不足言事歟、又石山

非延引、已停止歟云々、是又如何、答云、有中止人歟、一凶年飢饉之中、尋常行粧之御出爲世煩、一上古靈驗群集之道場也、末代偏被處天狗之棲、今御參詣如何云云、此兩條本自兒女子之遍所存也、何因被立御願、依諫言停止乎、只如老翁權官、驚而有餘、可慟哭可長大息事滿耳目、無間斷、又或說云、疑堯讓被忿歟、非芻蕘之狂言云々、三歲之例甚不快、二歲又永萬一度也、幾一歲爭被行昇壇之儀哉、一歷中納言中將人爲凡人被超越、一執柄之息爲二位中將、卑賤參議三人登用、一左相府一旦雖被授非分大將、不異同圈牢、即被止其兩職、御父祖御自身並家之伯父一家子息、無故解却四人、耻辱一時計會、今度御攝錄光華椒房寵愛降誕、只爲御一門之耻、大相一人之任意、超過福原平禪門歟、於賤老身上事者、更非世間之道理、又非當時之謬舉、只依無冥助每度有障難歟、可悲之運也、灸爛病侵、發切魂消、不眠而聞曉鐘、

廿三日、己酉、朝天陰、申後微雨、午時許長政朝臣來談、

寬永三年 三月

二百九十八

未時貞幸朝臣來、灸治之爛體叶本意之所存、當時無限之由陳之、

廿四日、庚戌、自夜雨降、下人云、昨日一日馳上、自山崎一身入京云々、盜賊公行之道甚不便事歟、勅喚之趣不知何事、右武衛齊狀云、左府被罷淡州、仍匠作相博事申入候處、剩可被收公武衛之由有沙汰、存外周章、雖申女院已不許歟、申子息次將、猶以不許云々、匠作倭止、本自甚無益事也、予年來戒其事、今如此、實是運拙歟、法皇近臣於今者棄置訖、

廿五日、辛亥、終夜雨降、曙後止、午後大風、夕又雨、親疎無音信之人、已時許相公適來、昨日參內、殿下御歸京事、御直處

來廿八日行幸中宮、彼御所四面、可被立鞠懸、其間事云云、武衛收公誰人申候由雖問、任人不承及、如昨日承者、修理好歟由聞食、無其望、凡不可有其沙汰由被仰云々、有闕者懸望由、雖本自知食、重□□日向、又有闕者相博之事同申入云々、除目御前之儀左府參勤給、右府令申行給、直物被延了云々、湯山無指事、途中又無

爲、今日申時許猶參御直廬之山示之歸了、右兵衛佐高賴、送使者、入道老病逐日增之間、久不音信云々、

廿六日、壬子、終夜甚雨、朝止、午後天晴、已時權大納言公氏、通方、兼、權中納言隆親、兼、良實、參議基氏、兼、左中辨親俊以下次第升、右少辨信盛、右小史小槻朝侶、兼、侍從左經成、同師繼、源顯良、內舍人少監物、圖書、內藏頭有親、補藏人頭、漏刻博士安親職、同助教賴尙、直講中師光、兼、民部大輔藤俊兼、主稅頭雅衡、兼、兵部卿盛實、兼、刑部丞、二、宮內卿隆綱、權大輔兼高、補藏人丞、一、修理進、二、勘次官、知宗、河內業賢、下野藤業俊、權守若狹藤基光、丹後權掾、出雲權守淳高、兼、左中將賴經、將監、三、右少將雅繼、將監、三、左門權佐忠高、兼、尉、五、右尉、五、左兵衛尉、六、右兵方、左馬、三、右馬、二、正四下隆經、從少將、從四上賀在氏、父在、從四下大中臣隆弘、知經、正五下經成、安嘉門院、從五上橘以良、止式、源教行止馬助、和氣伊成、賀在直、在親止主稅、宣茂、文宣、後御祈、藤資忠、止宮內、權大輔、平季賢、左馬權頭如元、權少外記清信

秀、給大半助筆字辭退、大納言忠房、除目之體勿論、去年春一旦之沙汰、甚見苦事歟、自始可被捨之、一日內々被仰之趣又相違、極以不審、內々令窺宮女房、申右大臣殿、於今度爭有相違哉之由被仰云々、宰相衛府事又雖敬慮有御憐愍、其間不出來山二品被語云々、事若有實者爲本意、

廿七日、癸丑、朝天陰、微雨間瀝、夕後又止、晝侍從來、朔日參、中納言中將殿四月六日御拜賀、八日行啓御供具、九日御五十日、每度御共事被仰地下、旁失便宜、雖頻令申給不許、爲之如何、先々地下者御共候歟、答云、地下侍從御共事先々不見及、又無其人歟、自身少將叙留之後還升以前、依入道殿仰參御共、又故殿左大臣御時、爲地下身每度御共、一身供奉、是次將猶參內之便異他、但如拜賀事、多庭上役者、至御五十日者人定屬目歟、奉爲上如何由令申歟、大理同六日拜賀云々、傳聞、今夜內裏御宿殿下御座、明日行幸中宮、被裁懸木云々、爲夏節本所雖借請西方小屋、依雨降今夜不宿、

廿八日、甲寅、朝天陰、雨間降、巳時蒼天忽霽、夕日殊鮮、夜深宿西小屋、轉法輪止于南、宮小路去へ、少輔入道密々寄宿屋請受、待鷄鐘之間

聞前聲令見一條面、行幸松明見云々、遲々如何、不經幾程鐘聲忽報、即歸宅付寢之後、宰相來宿云々、

廿九日、乙卯、天顏遠霽、雲膚收、晝曙後宰相來談、去廿

六日仁王會日、依無催直衣參中宮、殿仰、此御方仁王會無人可參、申承由退出之間、範賴參云、聞下向有馬由、

不申內裏無人可參又領狀、殿下散狀有御尋、申云、侍從

宰相治部卿之外、不日宰相只今領狀、見任公卿一人不

催儲、不便由被仰、右大臣殿俄令參給、申時被召御隨身、即退出、

改裝束參內、依內々別仰、公卿卒爾參會、大臣殿、家

嗣、具實、經高、宣經卿、實世朝臣、檢校定高、範輔、自

官參、定高早出、秉燭以後雖承表白、常灯滅暗然、行香公卿八

人、親長、次參中宮、大臣殿、具實、經高、爲家、宣經、長

清、基定、中將雅繼、行香親氏、奉行忘火馳取、俄遣召

兼綱、藏人公金、長說、經數刻、次參北白川院、宗氏奉

行、具實、經高、爲家、宣經、□長、長清、基定、晝安嘉門

寬弘三年 七月

三百

院被行了、宣經、長兩御方早晚各別旁不得心、宣經所々

兩度參云々、實世參安嘉門、歸路自然參內云々、夜前行

幸、左大將、依此參行幸、右將渡後被立御所、入御具實、經高、

爲家、宣經、實有、顯平、親長、實世、基氏、相具左將師

季、有資、家定、二人、教房、親季、伊忠、右將實蔭、親氏、

伊成、少納言兼綱、職事經光、左衛門隆繼、兵衛光成、

左、高賴、定具、有、業時、非藏人、今度夜部被行女官除目、

典侍藤因子、參中宮、以字也、子以宰相上卿具實、宰相爲家、

忠高使宣旨、此次下云々、昨日參內、主上有御鞠、退出

之間自殿被召、口入又參御鞠、退出參行幸、今朝又可

有御鞠云々、主上始御鞠、殿下、右大臣殿、家嗣、爲家、

成實、基氏云々、已刻一點歸參訖、戌時許送使云、窮屈

之條不可供奉還御所退出也、今日有御鞠、此夕又殿上

人又鞠云々、實雅、有資、宗平、親氏、少將公重長又被召亂舞

云々、還御深更云々、

卅日、丙辰、朝天陰、巳時晴、早旦殿下、右大臣令參日野

給、宰相又供奉云々、今夜此侍可退出、自明日於里亭神事、

依無事便予移居北屋、以此屋爲神事所、祝光兼來、祭

供奉可無障由可祈念之間誂之、老病遂無減、而春景空

盡、昨日事粗傳聞、殿上人先鞠、爲家、成實、資雅、有

資、衣冠、親氏、公有、其後御鞠、御所、殿下、家嗣卿、具

實卿、雖不堪爲家、成實、資賴、資雅、被召其後又殿上人

宗平迴參會、重長舞、深更還御、殊無人、具實、經高、顯

平、基輔、實有歟云々、深更典侍退出、付寢了、不知

之、

○七月

一日、乙酉、天晴、未時雲雨雷鳴、不濕乘燭以後乘車之北

小屋宿、

二日、丙戌、七天晴、東方明而歸廬、飢人且顛仆、死骸滿

道、逐日加增、東北院之內不知其數云々、薄暮興心房

假名狀云、御讓事已以一定、明後日許若及外聞歟云

云、於被恕者以成就可爲本意歟、夜深賢寂又告送、已

及披露歟、暗夜叩門武衛來臨云、昨日供奉行幸、左大

將已下十人、兼隆奉行扶腹病參之間還御、於持明院門前

忽更發依無術、馳歸病臥、今日雖有召不參之間、實持朝臣今夜來、五日御拜賀資雅朝臣可供奉之由、殊可示送之旨被仰之趣示送、御拜賀何事哉由奏之、又云、關白御慶也、乍驚馳參、仰云、今日此事定訖、來五日殿下御上表、即日詔書拜賀也、扈從可催人、新大納言高實、中納言、中將定高、隆親、賴資、家光、實有、經高、爲家、此外經通、國通可相觸山被仰、御連之早速無物取喻歟、一日延引奉幣明後日四日發遣、平野七日詣賀茂使殊被催參議、經高觸穢、宣經脚病、不催四位今二人公長、基氏、自陣可立諸社殿上人云々、實基卿雜色長、尾張前司第一長、已入飢、可拜先公墓山稱之、向德大寺愁歎之中、不及此沙汰由返答、其男歸路顛倒、一兩日死訖、聞之相驚、送靈牙於其宅云々、況予家僕從者皆稱腫損山、此際聞曉鐘即歸了、騎馬云々、夜有涼氣、

頭注一宮御方荒和祓右少辨忠高忘却不致沙汰、夜半勅使被不審仰之後催其事云々、父子尾籠之至歟、全無其沙汰、供奉人、大將隆親、盛兼、家光、資有、爲家、

基保、成實、親長、基氏、右將師季、宗平、實持、資俊、實任、實清、親季、氏通、少將實定、右實蔭、隆盛、伊成、親氏、宣直、光成、雅繼、少將、少納言長成、

三日、丁亥、天晴、午時許言家朝臣來談之次、聞中將雅繼先日闢諍事、武士各申追捕、隣家及傷之上取雜物、進下手人之上、可造預破壞屋由申、中將申無實由、不遣下手、仍不可參殿下御邊由被仰下云々、中將通時、前備後守賴俊、親俊辨弟、除籍、雖在關東、於其前途者不可依昇殿、當時不出仕人仙籍無要由云々、草廬西小路繼小路轉法輪、死骸逐日如增、梟香徐及家中、凡不論日夜抱死人過融者不可勝計云々、

四日、戊子、朝天陰、終日有陰氣、去夜三條坊門猪隈有炎上云々、付寢之間雜人稱遠由不知之、群盜乘車欲入、距戰之間付火、一町許燒、殿下、左大臣殿以下參內之人濟々云々、遠所非人不問女子安否、未時許興心房過座、此間殿下御邪氣殊令發給、日夜候御前、或夕或夜有異事等、親季奉打御脚、若睡眠歟、二人女房奉取付、爲追出立奔之間無其物、又黑手取御背之由御

堀河三年 七月

三百二

覺、悟令燃給、念召護身令吐給之後、令復例給、時々刻々有如此事、中宮又御違例、是皆現形生靈之邪氣云々、清談移漏、臨昏被歸參、

後聞、未時許殿下御出、庇御車御隨身上臈冠、前驅

六人、師季、家平、有教、御共令參持明院殿內裏給、

五日、己丑、朝天陰晴、午後快晴、未時許定修來、座主具

給攝州小所、殿下大番舍人吸々事等愁歎、更事不可行

事也、世事不觸耳、

昨日十社奉幣又延引、來十日云々、

六日、庚寅、天晴、未時許武衛駐送、夜前御拜賀供奉人、

御參所、內裏、中宮、大殿、北

政所、公卿中納言中將殿、

憲、二條中納言、定高、四條中納言、隆親、別當右兵

衛督、殿上人有親朝臣、頭師季、資雅、

平、有教、能忠、侍從、資季、定平、雅繼、隆綱、

經、實持、御香、實任、賴氏、實清、親季、光俊、信盛、

兼高、賴行、忠高、範賴、賴俊、侍從、能定、忠俊、藤光成、

源兼綱、平繁俊、藏人、前驅有長、兼教、正光、

永光、惟長、高嗣、以邦、忠廣、知仲、知家、

加賀、盛長、定俊、家盛、家國、馬助、重光、兼康、

以良、教行、親嗣、兼仲、知資、忠泰、時長、

和泉、藤賴季、藤宗基、源忠光、

被進、御隨身左府生久員、本、右廳頭被召具、

長兼利、右久則、又依問送答事、新大納言忌日憚

云々、賴資、家光、經高卿不被催、殿下御上表座、

下吉書御覽座、中將殿、定高、家光、經高、

親、氏院、執事忠高、年預資賴、上御廐經俊、下御廐教行、

氏院辨爲經云々、

隆親、實有家禮、高嗣等輩蒙百千度責、猶以對捍被

召仰、資賴、親房等適出來、不足言事歟、

七日、辛卯、天晴、小所名字等如此日、先々音信事稱飢

饑無物之由、多以默止、或少分有若亡云々、令拂文書、

是纔閑人之所携也、申時許武衛來、直衣、參北政所御車

寄、御參內、神祇官、今日月次神今食被行修理職、於北廳前構假

屋被行之、神今食上卿家光卿、大殿一昨日令叙從一位

給、御同位御座次無便宜之故云々、但兵仗猶御謙退無

其沙汰、來二十一日可有御拜賀云々、祇園御靈會十二

日、前日有例行幸、殿下御馬、浮雲雖來往、片月猶清明、

八日、壬辰、天晴、午時許雲雷雨降、不濕地、大宮禪尼來臨、

從下向播州、有其好之由歎之、本性所存全不及加詞事

也、其上又欲赴關東云々、皆是賢慮而已、昨夜大谷前

齋宮群盜入、剽女房衣云々、武衛消息云、奉幣使延引

之度、每度勤仕不便、可催替經高由被仰訖、仍不神事

云云、

九日、癸巳、朝天陰晴、雲雷雖有聲雨不降、帥殿御忌日、

於嵯峨聊修之、又詔申興心房修廿五三昧、於此宅可修

由被約束、昨日自殿下適退出本房之由被告、予頽齡已

七十之非人纔獨殘、往年內外子孫雖無知恩之心、數十

人在世、次第近去仕事催悲痛之思、入夜雲膚霽盡、月

色清明、初夜以前被始讀、或中央之程南方喧々、放火云

云、出雲路而牛童不知其主、小屋打上、火燃揚、路人告之打

滅云々、兩殿下御所相替大殿四、新殿東、御、適令復尋

常給、昨日暫可休之由被仰退出云々、在高卿去月以

後病涉旬甚弱云々、月入之後事訖、被歸宮小路虛空藏

堂、

十日、甲午、朝天快晴、昏黑忽陰、大雨降、不經程止、傳

聞、去六日長賢法眼母終命、自去月比喉有痛事、食事

不輒之上、痢病日久云々、一昨日八日葬云々、以下人

說聞之、去月中旬其息女等尼在京之輩皆下向由聞之、

今年七十七云々、大殿給御書、行幸委次第有者可進、

中納言中將殿明日御供奉、非身上事、本自一紙不注置由、公卿將事本

自非身所期、所不沙汰也、明日行幸依太白方、槌鐘之

後出御云々、

十一日、乙未、朝天遠晴、未時俄雲雷、大雨即止、臨昏猶

雨降、夜深雲晴、雞鳴以後行幸云々、關白殿內大臣、中

納言中將殿、中納言隆親、參議實有、爲家、三位基保、

四位宰相二人供奉云々、

寬弘三年 七月

三百四

十二日、丙申、朝天晴、未時許雷鳴不雨、自昨夕北車宿西妻令破棄、雖非幾事、雖聊事爲不近西路頭也、申時切棄了、今日可有競馬蹴鞠與由自去月被議云々、定又有七珍萬寶之儲歟、夜月清明、

十三日、丁酉、欠日、天晴、未時許黑雲起自乾、雨、雷鳴、去晦荒和

祓時刻、郭公數聲之後無其聲、鶯舌又至、此晦朔高聲

如叫、此四五日又罷其音、猶在竹樹之中、隨時節廻轉、依催其

興往々、傳聞、昨日競馬、一番隆親卿、久清、儲勝、二番

基氏朝臣、武信、勝良及數刻、武信追良、三番爲家卿、賴種、三度之後再進寄乍遠追

勝、四番、親氏朝臣、久則、儲勝、非與勝負、五番、又基氏、儲勝是

又非殊與云々、其程久兼俊渡御前時五人、此外實季無結不乘、勅二度返御、中納言中將殿、

盛兼卿、實有、爲家、基氏、殿下御騎馬云々、泉邊渡、綾

橋敷紺簀子、向厩立御椅子、珍寶也、等類云々、不委、仁和

寺宮自九日御發心地、一昨日令發給由聞、昨今送愚狀

於法印、今日無餘氣令平減御由有返事、於大聖院一昨

日今日同御祈念無他事云々、尤可貴、夜月明、

十四日戊戌、天晴、入夜之間俄急雨、無程止、扶老病讀

經、小阿射賀飢而無音、彌闕乏云々、

十五日、己亥、天晴、日出之程地震、室宿火神動云々、又

不吉旱魃災殃云々、昨今所作隨堪終之、午時許武衛

來、一昨日祇園臨時祭使右少將賴行、隨身豐給、舞人關

白殿番長久則、近衛、種武子、左右大將隨身各二人、本府四

人、久則乘騰馬、アサ太郎、天治始被立年之儀歟、家老奏宣

命、兼高奉行云々、舞人被渡御前、自是又詣吉田了、昨

日北山大納言入道會合云々、京中道路死骸更不止、北

西小路連日加增、東北院內不知數云々、小阿射賀庄民

自六月二十日比至于近日六十二人死去、依觸穢身憚

等無上洛者云々、夕陽漸陰、雲暗月黑、明後日雖爲秋

節、依爲歸忌日今夜宿北小屋、月適見之後更陰雨降、

聞曉鐘之後雨隙歸、

十六日、庚子、天猶陰、雨間降、已時許如沃而暫休、近

日不食病殊無力、今日服藥、又以汗穢、午未時許雨又

如沃、又暫休止、夕陽忽晴、入山之後雲又晴、終夜大

雨、

十七日、辛丑、遲明雨如飛瀉、雷電、一聲猛烈二聲微、
朝雨猶如建瓶水、已一點許雖纔止、雲猶奔北又如沃、
鴨水大溢云々、午時青天忽晴、白日尤鮮、四望雲收、終
夜月明、

十八日、壬寅、朝天晴、午時許大炊御門中將來臨、扶病
言談、不經程賢寂傳々說、世間有事、東風有亂政誹謗
之聞、如然事、欲差青鳥、聞新所御慶暫止其事云々、因
茲又臆病彌可被遇絕無緣望、大相自一昨日瘡病云々、
夜月照南端、深更典侍適退出云々、言家明曉赴攝州、
有稱

十九日、癸卯、天晴、暑氣昨今殊盛、日入之後謁典侍、似
父不知世事本性歟、今夜大殿一位御拜賀云々、關白
殿御拜賀日、宣旨褒御簾、相公取進琵琶、左大將殿拜
賀時、又相公御簾同琵琶、大殿御直廬可爲五節所、仍
宮御方下臺盤所被移北對妻、女房局彌狹少云々、
二十日、甲辰、朝天遠晴、已時許與心房被來談、又殿下
日參無間斷云々、又金蓮房來、面々難病者等令見暑熱、

甚不聞世事、月出清明、

二十一日、乙巳、淡雲遠晴、午時許武衛來、一昨日御拜
賀、蒔繪螺鈿劍、公卿三人、新大納言、而中納言中將殿、
別當、殿上人七人騎馬、師季、雅繼、實持、家定、信盛、
忠俊、忠高、乘車、不知其山、參、殿下御見物、御車、相門發心地
之疑非其事、耳腫給之故小溫氣付減云々、他事殊無聞
事、具實基氏各給新興之庄、美福八條後白川三度御聽下文分明佛殿房普成佛院、佛聖訴
訟、基氏分自安嘉門院二品召給云々、一昨日又參陣、
書尊勝寺八講僧名、具實上卿、相引參寺、暑氣如昨日、近日
盛歟、親長卿、宗明朝臣、

二十二日、丙午、天晴雲收、已後間陰、午時許能登前司
長政來向、晦比下向勝間田湯云々、賢寂來云、兼教朝臣
次男勾當稱參清水寺步行出門、於弘誓院丑寅角被斬
殺、人不知之間乳母男漸々聞付、尋取捨川原屍葬送云
云、不知何人所爲、又落胤之童成人有不善物、雖疑當
時秘而不披露云々、
二十三日、丁未、天晴、早旦小浴、今日止薙、與心房被

寬永三年 八月

三百六

一四〇

過、依被念不謁、暑熱猶盛、

二十四日、戊申、天晴、武衛書狀、去夜氏院參賀、

一献、二位大納言基福出仕
殿重献、中宮大夫、瓶子、範賴、
經光、

二献、中納言中將、
左衛門督、瓶子、賴行、今一
人、不見、

三献、經高卿、
爲家卿、瓶子、經氏、
宣實、

四献、長倫朝臣、
信盛、瓶子、爲仲、
盛長、

五献、雅繼、
實持、瓶子、兼康、
教行、

此外九條新大納言、新中納言家光參、先是以左大辨被

申一上事於右府云々、日入已後典侍歸參內、

二十五日、己酉、天晴、陰雲間起、未後更晴、萩花漸開、

暑氣猶盛、雖不念誦不魚食、

二十六日、庚戌、天晴雲收、兵部卿送百首歌草、雖忘歌

興一見合點、

二十七日、辛亥、天晴、午時許左京權大夫來談、扶暑熱

相逢、參殿下云々、依近隣聞及歎、忠房大納言母去冬所

讓賜之神閑庄々、皆嫡家被取返、殿下御
沙汰、又有執智之約

束云々、宣殿上
若君、惣以天下之習俗、父之遺誡、先祖本願之

追善、不懸人之意端、即是時儀也、彼禪尼又非尋常之

本性、年來任意張行、高聲謗言、不耻憚外人云々、入夜

宿直雜人等云、兵衛督夜前參入、殿御方違御共、其所北
山稱妙

見堂、靈所之近邊也、可爲御山莊之地云々、
愛宕護山脚天狗之所集歟、甚無由之所也、明日祈年穀、中納言

中將殿上卿參勤給云々、藏人右佐範賴之所從之衛府、

又書謀書宣旨任僧綱、範賴私賜檢非違使之處、其男迹

去了、近日有沙汰云々、藏人若被解却歟、斯範賴又兼

三事歟、尾籠人幸甚之秋也、

二十八日、壬子、朝天遠晴、明後日朔日、中宮行啓里亭、

非指故、只不
附之宮中歟、賢寂來云、九月十六日公卿勅使發遣權中納

言隆親云々、予心中今年有物詣之志、時已計會、江州

喧嘩又定成事煩歟、尤爲歎、今日兵衛不參陣云々、他

人參歟、奉幣延歟、

二十九日、癸丑、晦、
附忌、去夜風雨聲間聞、朝雲赴西北、巳時

陽景見、雖風烈雲起雨僅濕、不濕地、

〇八月大、

一日、甲寅、風雲赴西北、陽景猶晴、洗頭念誦、東風終日

吹拂、猶無涼氣、秉燭以後宿北小屋、即送典侍車、行啓

條、西殿云々、此所年來頗有不吉之聞、亭主猶不被坐、

今再被渡、長者有博陸御慶、被用吉所歟、曉鐘以後車

未來之間、南方寄東、有微火、驚見申候間車來、仍歸廬、

此間火光勢、不夜半許行啓、女房車寄西南小門云々、火

光忽興盛、如雪飛、又如雷動有聲、雜人說、尊勝寺所

殘之塔云々、此間自承曆之比至于承安、予成天下公私

滿耳造堂塔、及老後只聞其燒失、不聞造營、雙臺滿眼

伽藍寶塔悉爲灰燼、其跡爲荒廢郊原、空割置萬戶之庄

園、悉爲惡人之衣食、一分不宛寺用、付視聽有悲、

二日、乙卯、朝微雨、辰後青天見、曉火伴塔燒了、適非銅

盜之所爲、二條之南有少々在家、其敵放火之間焰付塔

云々、已後更陰、午時許西天晴、雨脚降、入夜武衛來、

去二十八日依俄召參大殿、御方違、陸清卿女、翌日還御、

參殿御方、又參大相、退出之後、腹痛俄痛、終夜病惱、

昨日祈年殿定、平相公病、大辨穢、右筆闕如由被催、仍

又欲扶參之間、定又延引、猶可參行啓由被催、仍供奉、

兩大夫、寄御具實、家光、經高、爲家、基保、公長、啓將隆

盛、家定、若宮御內裏、宮爲被渡御邪氣御退出、二十日

比可有御入內云々、腹痛籠居之日勝事出來、參朝臣

傳奏間、記錄可辨光俊脱于大殿仰候任意之無實、四人論

人文傳御覽披了、問房一人力本光俊參殿之次、申此仰趣、仰

四人文書可見一方由、不可口口申事由、皆悉可評定由

承之歸參、以々良申此由、尤可然、本自可見一方由承

之、翌日參內欲議定此事之間、惟任又大殿仰有承旨、不

可見三方由難濫、不遂議定退出、辨此由申殿下之間、

以有長被申大殿、大殿令驚給、以誰人申示由被仰之

間、辨失色取寄件日家記、切出進覽具書、此事忽逆鱗、

兼教籠居、御領二ヶ所被召之、事趣驚付有勘當、殿下

御耻歟、重代被召仕事異他、殿中執權可謂無雙者也、

慟哭而有餘歟、不限此一事、記錄可無實仰重□寄人等

歎息云々、明日侍從爲氏可申拜賀、有存旨更々不可來

蓬門之由示含了、今日祈年殿當日定、八幡盛兼、賀茂

範輔、西定松尾範宗、平野顯平、上卿通方卿、早旦催具、

寬弘三年 八月

三百八

北野使大內記自社頭歸、日入以前參殿云々、放生會中宮大夫通方、領狀、宰相未催云々、右筆三人之外四人未役云々、

三日、丙辰、朝陽雖晴、湛雲旁凝、權辨返年來所借之拾遺集、此辨一昨日入勸修寺、老僧等垂淚云々、明日長者爲經忠高屋從、頭大夫等入東洞院大路、爲見物儲棧

敷云々、五位藏人兼隆又入、◎以下闕文アリ侍從拜賀事夜前

聞之、車倫宰相少年總角絲、用世間之人所用之組、使童花田、小舍人童二人杖上下白生單衣、下著白帷、共侍有弘、

今一人賴重子男云々、日入可參內之由出立、

四日、丁巳、朝陽晴、靜俊註記來談、山上社頭飢饉又狼藉、未尋常云々、日夜暑熱甚於夏、入夜武衛來、夜前拜賀於殿上口一薦相逢、自北可參弘御所方山有仰事、拜舞了、經西對西參弘御所御緣、御所露顯、女房達參會、蒙種々仰、令刷衣袖御退出、參中宮御所、示惟長御使他行、殿下典侍相共出御中門、早拜可昇由有仰、即參上、又蒙種々仰、自東庭參大殿御方、以良申、又出御、北政所御

又被召御前、次殿下御所、殿御中宮御方、故可參山許也、次參持明門院殿、爲繼扶持之、被召御前、女房皆被出簾外、賞翫過分、西院御覽已無其故者也、甚忝、仍今日參上故畏申、十日之比入道外祖、可出京、仍欲向吉田、其次可來由諾之、來七日行幸供奉、八日參日吉、九日可始蒜、腹痛此間殊更發云々、夜前兼敷朝臣來示、讒言無實、無陳方之由語云々、

五日、戊午、天晴陰、自夜大風頻扇、夜猛烈、朝間依徒然、以盲目書小草子、暑氣殊甚、賢寂來談、物詣之間事、

六日、己未、朝間猶大風、少雨漸止、已後晴、典侍示送、內裏聊御咳氣、殿下令早參給云々、入夜又無殊御事之由告之、

七日、庚申、天晴、未後俄大雨、暫而休、徒然之餘自一昨日染盲目之筆書、伊勢物語了、其字如鬼、未時許但馬前司來談、世事等少々聞之、申終歸之後、小浴之間、右京大夫俄托駕、流汗構出面謁、舊勞空而有恨之由述懷、

尤可謂道理、奉示所存了、入夜謝遣之、微月適明、

八日、辛酉、天晴、念誦、暑熱甚難堪、未初刻與心房被過談、自然移時刻、又被召護身、只今退出之次云々、此事於身極難堪、身苦窮屈筋力疲、極無一分恩顧、乘輿出仕、法師原飢僅無計略之上、法務御房深處奇怪程可詭言失之由、逢諸人吐詞給、奉見逢時、下地踰居、全以無禮、逢我含長楊子吐唾之由稱給、始終必有此祟歟、內外無山云々、每聞事驚耳、被仰付御祈供料以下大小事、無實無物云々、新殿下傳奏、近習被仰爲經信盛、又辨官無例由更有沙汰被止、被入公良云々、長イ、吉永近習之替、殊有虛言之聞、然有凶事歟、未時雷電大雨再降、自然移時刻、及日入被歸了、天晴月明、大殿下依知息院殿例、可乘檳榔庇車之由、內々被仰由先日聞之、思此事不可然、御堂京極殿不令乘給、知息院殿以今案始令遣出給之由、故殿所被仰也、法性寺殿又大殿之時不令乘給、今被追彼御例、於事有冥恐之由、可被申由予誂之、予如此申由被申入、然者可止其事歟、抑袍文又雲鶴、彼殿御文也、欲著其文、

同可憚歟由彼仰云々、予私云、御車嚴重、路人縊索必可驚、冥慮又可恐、於御袍者綾文雖異、其色皆同、遠見不可異冥、又強無分別歟、何事候乎由今日所答申也、雖棄置之身、猶中被所存許也、直言正論不可心阿順旨而已、雖仰不請之御詞、又不可乘由被仰出、事不思食定歟、今日言談之次、親季御恩其祿漸々及千餘斛、五六百歟、又衣裝雜具日夜賜之、壯年之身更不可爲貧者、而所從一人無事宜者、其身衣裝以下無尋常時、遂爲成茂聲、是自身所存好云々、今聞此事、其性不可立身歟、甚悲事也、

九日、壬戌、天晴、殘暑雖難堪、朝霧似秋天、午後乍晴雷鳴、雖非猛烈經時刻、校伊勢物語了、不聞世事、入來客人雖稱男女近習之由、一人無音信、及日入俄陰大雨降、無程止、月雖晴墨雲頻掩、

十日、癸亥、朝陽晴、午時許聊陰雨澀即止、萩花盛開、每朝槿花養眼、午時賢寂來告、侍從來告爲見外祖母向吉田之次云々、無程來、拜賀束帶裝束也、宣二人、侍二人、如其夜、進退

寬治三年 八月

三百十

有度、容體本自尋常、令舞踏見之、練習頗超于當時出仕之輩、依有雨氣令念出、賢寂云、神祇官造作之料、入道五十貫已送之、仰付右兵衛年預資一令造、暇代同付之、此事尤可然、又同員數自吉田女房許可沙汰云々、此事尤可然、又有材木等云々、若宮侍始清撰御點被加有私云云、此等皆過分、專不存事也、只被優一身之耻歟、若年之幸人榮華上下甚無益歟、入夜雲陰、月黑、雨又間灑、十一日、甲子、朝雲暗、雨間降、雲不定、未時許武衛來、放生會別當昨日領狀可相具、檢非違使催廻稱無領狀、又以辭退、宣經卿依申所勞、先被止出仕了、經高輕服事、闕之由兼高催之、仍申領狀了、於闕如者爭申子細哉、但沙汰之趣不尋常事歟、大理領狀歟、入月催廻、蓋出來哉、爲申身障臨期領狀歟、雖外戚人放生會下向強不可有煩、是只天下新儀也、江周房釋奠詩、依齊光卿跡可補貫首之由書註、被示怠狀云々、凡近代儒中尺箋詩、皆白癡任意之註、極見苦事歟、此男御產御祈奉幣、依大內記障書宣命草、消書之時依不內覽、私改歡字書

歟字、伊勢祠官其宣命進殿下、賀茂使爲家於社頭披見、摺改其字持參覽殿下訖云々、本性奇怪者歟、以言依宣命奇怪被止大內記、尤可被滅事歟、不忠不善者尤可被棄、予云、先度已參勤之上、卒爾下向、略前駈何事在哉、參議不具一說也、兩度卒爾不可有難歟、今夕御方違行幸又可供奉云々、夜月又暗、

十二日、乙丑、朝陽晴、賢寂告云、放生會被止了、實世朝臣被責出云々、

十三日、丙寅、自夜雨間降、雲或晴、無音信之人、不聞世事、入夜月不見、雨間降、

十四日、丁卯、朝天猶陰、陽景僅見又陰、徒睡眠之間、平宰相消息、近代駒牽事次第被借失了、仍如形書之送之、此公事適爲取足打驚駭、上臈宰相年來出仕之間、此卿未參勤云々、入夜之後窗外雲晴月明、

十五日、戊辰、朝天陰、已後陽景晴、去夜臨曉始著入綿物、今朝暑氣猶宜遺懷、放生會供奉之景氣已矣云々、賢寂云、昨日吉田泉大殿、關白殿、太政大臣、內大臣、爲家、

親季參、隨身侍

信季、成季、爲家私侍光兼

競馬云々、今日暑氣又如日

來、臨昏武衛來、秉燭以後雲南奔、月東昇、良夜屬晴、

近年難遇歟、參行幸夜、放生會領狀猶快然之由二品被

感、後朝實世朝臣實出由兼高告送、上卿通方卿、辨信

盛、忠高申瘡病由間催儲、臨期雖病落得、左衛門兼

行、猶依爲略儀不被止信盛、左衛門代、兵衛定具教氏云

云、行幸供奉、右大將公氏、隆親、爲家、基保、長清、顯

平、基氏、

公氏之外皆選御供奉

一番成季、久員、

勝負甚久、成季追、久員取永付突退融了、成季被任競馬不得日歟

二番賴岑、久則、賴岑雖無過失、又久

而退籠了、

左衛門

武信、又甚久、武信追負了、武信

一人、

誤脱アルベシ下々ヲ著踏進、有存旨歟、以競組正失著物也

四番廣澄、賴種、勝、五番又成季、

私相具光兼被召出、三迴之内、光兼伺見成季馬進寄、

三迴訖只二度折入打ちがふ之間、光兼打入馬ヲ引返

て、前伺見所を追、成季不存而負了、其後杯酌入興扶

醉、今日又殿下日薦、今夜猶參内、在俊辭陰陽頭、國道

在繼競望、主計頭宣俊死去、競望無不望申者云々、明

日可參詣日吉、衛府之後初參、

束帶可具前庭、但不乘車、爲氏又相具

明後日

歸、即不服蒜、

中題假云

月明而思往事、

無手無足無官無祿

十六日、己巳、天晴、去夜着綿衣、今日終日着袂小袖、日

來自日出程至于夜半着帷流汗、賢寂來云、武衛及巳時

參社了、以成茂宿禰可令申祝、年來親成申之、子息可

相繼、惣管其忠難去之上、任官拜賀日、輔成雖祠官不

出仕、猶父一周之内有憚乎之由也、先於今度者尤可

然、入夜宿北小屋、月明、漸及深雲滿月暗、聞曉鐘歸、

十七日、庚午、曉少雨、朝猶陰、朝沐浴始精進、但老身依

不食難堪不斷草、辰時許武衛歸浴云々、終日着綿小

袖、夜下蔀取入燈、俄涼氣存外、

着綿小袖、又着綿衣

十八日、辛未、天陰、午時許西方有火盛燃、送車於宮女

房許、北小路室町別當家乾隅小屋一兩云々、被壞止了

云々、徒然之餘以盲目、日來時々書大和物語、今日終功

了、是又狂事也、互可嘲多、自九日書始、家中明日可相

具者等不令見火所、終日着綿如昨日、草子如形校了、

平生所書之物、以無落字爲惡筆之一得、老老心脫落數

行、書入之心中爲恥、明日有參詣春日之宿願、遠路之

寬弘三年 八月

三百十二

煩貧家之不具、年來懈緩、近日官途事已絕望、在世之計已思切訖、最後爲拜氏社也、終日天陰、明日若雨氣歟、

十九日、壬申、臨曉雨降、未明被了、乘輿共人隨在、知村、

房任、實里、知方、京極六條出川原、自法性寺路天曙、老病之後

久不見路頭、長途只思往事、七十懷舊之淚付事難禁、治承四年春五條亭燒、夏比居住外祖母法性寺宅、遷都之比自是出仕、法勝寺以下御所等、常往來此路、先妣凶事之時、明

月之前愁生、非存非亡、又經此路、於稻荷鳥居前奉禮

南山御幸還御、雖非人數度々參儲深草木綿、山薄我毛

加宇穗色盛而如圖畫、宇治橋以西、建久元久之往事如

浮眼、奉禮八幡、伏拜過贊野池、立入所非丈六堂、儲奈

志如堂、此堂又安元治承之昔度度來入、其時破壞、今

度見之新葺檜皮、內外如新造、佛壇立犬禦、前栽紫苑

不似老翁之舊骨、堂舍更新身朽損、下人等食事之間、

式寶存外來會、一昨日令兄歐之時沐浴之間、明後日參春日由云送之故也、相具酒肴、共侍

力者法師會釋、雖念思抑留難談、及半時歟、自宇治雨

止了、以舟渡木津、過般若路、芋、我も加宇、刈葦、蘭、女郎花色々開敷、情感非一、申始許入東大寺南向小屋、賢寂所備也、乘輿之窮居、老骨摧而僵臥、脚病甚難堪、故待暗

夜參社、自此門前東行、春日野南行、於二鳥居前着裏

無、取付男共如蚊入慶賀門、昇西階參御前、故禪閣每

度雖人多必携手令懸給、雖非強力之身一身供奉、今夜

惡人猶以危急、紅榮黃落之悲心中彌切、以故神主遠一

子令申祝奉幣、次參若宮奉幣了、歸參御前久祈念、此

間月出、有雲、不見、

今も唯月の都はよそなれと猶かけかくす秋そかなし

き

あけぬ夜のわか身のやみそはてもなき御笠の山に月

は出れと

有へてはうきふしまちの月なれやふくるわか夜にな

けきをゑつ、

夜漸深、風入骨之間退下、臥宿所了、終夜聞鹿聲、

廿日、癸酉、自曉雨降、雜人等遲怠、天曙了出宿所、於東

揭曉力

大寺前途鹿昇居輿禮之、渡佐保河、雨漸滂沱、下簾不

於宇治

能眺望、風相交、衣頻濕、又入昨日堂小食出路、雨適

止、入平等院、只見廻本堂、御所前栽花色勵心肝、此寺

之破損未見如此事、星霜之推移之故歟、寺務之懈怠之

至也、每見令痛思、依行步不叶、不參阿彌陀堂退歸了、

於稻荷烏居北乘車馳歸、申時入北邊蓬門、骨髓如挫僂

臥、典侍爲沐浴今朝退出云々、平臥無力、隔障子相謁、

今日仁王會云々、日來不聞及昨日左馬長綱來問云々、秉燭

之程典侍歸參、去夏聞及事、無變改之景氣之由之外無

聞及事、入夜雨又降、窮屈前後不覺、

廿一日、甲戌、朝霧辰終陽景晴、筋力猶難起揚、終日僂

臥、芋穗盛出、萩未落、

廿二日、乙亥、朝天遠晴、午後陰、秉燭雨降、賢寂來、可

有小除自由有聞、又延引歟、陰陽主計頭歟讀岐信綱最小分

早未濟之云々、雖不足重陽之日一具且可下行由示含

了、申時許與心房來坐云、去十八日自一條殿退出云

云、久言談、但無聞出事、伊平卿籠居閉門云々、臨昏被

歸之後雨降、

廿三日、丙子終夜今朝甚雨、賢寂傳聞事、關東給奥州進

備中國、已爲中宮御分、行兼又目代、右京國務、經時承

讀岐國務、依此等事可有除目、法務御房下向有馬湯、

日來出立給之間、肩二禁見付給、親尊前陣下向、自武

庫山喚立醫師等、非殊事、但可奉灸由申云々、天王寺

訴關東可被改別當由申、仍又座主可補給由相國被計

申云々、是非座主補、後院左馬寮之兼帶歟、寺僧之愁

訴又以萬倍歟、吉水御遺跡不可有其餘哉、年來車副秋

久自去夏之飢饉漸々衰損之由聞見、近日疾亡病也、依

難存一昨日出家之由昨日申之云々、多年伴鶴髮可、悲今

六十九云々、舉次男、年二十云々、猶欲召仕、午後雨如沃、及申

一年之弟歟、長男左兵衛督許、時休、夕陽漸見、典侍車猶持櫛

廿四日、丁丑、天晴、今夕中宮御入內云々、隆親卿來十

月伊勢勅使一疋可引返由消息、心中冷然、所勞獲麟難

待期日之由答了、入夜送典侍車、夜半許歸云々、殿下

去年冬誕生給、姬君日來不例御坐、龍子修學院給之際

寬喜三年 八月

三百十三

寬喜三年 九月

三百十四

天亡、不被披露云々、於姬君は何事在哉、

廿五日、戌寅、天晴、未後陰、昨今構扶奉讀經一部、又奉書金光明經第三卷了、去年禮物以前書二卷

廿六日、己卯、夜雨降、朝雲出、賢寂來次、聞神祇官已壞欲上棟、公卿勅使十日以前蓋終功哉由、當時催勸云々、尤可然事也、蒜無爲服了、近日薤食云々、

廿七日、庚辰、朝天無片雲、臨昏南庭梨子奉典侍局、

入三籠掃色々花、入長櫃、新物、桑同入小籠相具、淨照房來、賀茂

祠官等訴惣管殺害人之由云々、其替競望馳走云々、

廿八日、辛巳、天顏遠霽、梨子進大殿、付女房一籠、北政所、典侍

女房廣門、二籠佐佐木如法經前、安嘉門院、以禪尼齋付二籠、條殿局、一籠、件木兩株今年依其

子多也、昨日籠存外備于觀覽云々、花色之面目也、昨

日聞、證寂房自夏不食病、七月許聊付減、一兩度出京

兼時入道后日講師、之後、近日又獲麟云々、

廿九日、壬午、欠日、朝天陰、微羽降、不濕地、午後雨降、

漂々雨裏無來客、只見林叢漸變衰、七十頽齡秋已

暮、流年流水逝無歸、

卅日、癸未、天陰晴、雨又間降、反照忽明、巳時許興心房

被來坐、禪尼受戒、今日奉書終金光明經、賢寂來云、兵

衛督蒜後今日七日滿、來四日太相湯山之儀止、而內府

相共行水田、運有馬湯可被浴、前相公、武衛、實持朝臣、

尊實、公番、實禪等悉供奉、又經營出立歟、前生之宿報

歟、爲見任者服藥之後又城外、甚不便事歟、典侍日來

構新制所從等不營重陽日事、今日聞內御方皆如例、仍

俄周章云々、本自爲如形者、此日不著衣裝、甚見苦事

歟、萬事只朝事夕變不足言事歟、又示含賢寂、付視聽

厭却之心深、后宮御匣殿祖母年來訴訟自北政所被仰

關東、適止沒官被返本文、依行寬當時知行、太相被申

止抑留云々、彼祖母雖有出家之名、多年密通愛念人

也、依行寬抑留實不便事歟、時儀何爲乎、今日又暑氣、

晝着帷、證寂房病依察思、今日表微志、以自筆感悅、

○九月小

一日、甲申、天晴、夜雨降、午後又有暑氣、又着帷、萩花

盛出、

二日、乙酉、朝雲分、陽景見、晴陰不定、暑氣猶殘、自朝
着帷、間證寂房、逐日庭弱無其憑云々、其居所東北房
最惡所云々、居住者此五六年每年逝世云々、兄弟子母件
子母等又後
見、皆家中可
然者云々、遂不去其所終身歟、

三日、丙戌、朝陽間晴、陰雲頻掩、賢寂示送、吉富公卿勅
使事被免除了、大殿來六日入御宇治、武衛被召具、相
門水田延可爲十一日云々、暑氣如昨、辰時許小雨降、
巳時天快晴、申時許雨又降、右兵衛督來、自殿下退出、
天王寺可沙汰鎮由被仰關東、遣武士召取凶徒事、惡徒
所行已以至極積儲藥、藥之上放火之條、更非下向武士
之進止、佛法最初之寺若爲灰燼歟、後悔可無其詮、親王
督有御辭退、聞有後日沙汰宜歟之由申之間、親王已難
抑留給歟、其督又法務懇望、只在此事、無勅許歟、永不可
被召仕之由申內裏殿下給、山僧兼聞此事、急可燒園城
寺、又欲振神輿云々、大殿仰、此事座主法務共有所緣、
可止親王寺務由示關東之由、親王被成疑云々、惣不可
加詞由內々被仰云々、被補座主歟、其成敗又全不可追

前師之跡、必定可負傍難、法務又山門之訴實不便之由
被歎仰云々、大殿必定可令會維摩會之結願給、前日着
佐保殿、當日公卿參會可扈從云々、其人七人、基嗣、高實
卿、中將
殿、定高、和實、家光、實有、爲家卿等可
被賜信云々、久經承末代不知可否、大納言定通、雅親、家良
實親、中納言國通、不出仕、子細如何之由被尋仰云々、
殿下御所之中以康入道新造厩牛屋、立御馬五疋御牛
三頭、剩懸御前翠簾、儲敷設、諸人褒譽云々、世上之儀
只被摸承久之仙洞歟、萬事云而無益、申終歸了、相具
兩息方違、明日滿十五日、明後日雖爲歸忌、依雨降今
夜不他行、

四日、丁亥、自夜雨降、終日不止、入夜大風、
五日、戊子、雲晴風烈、貞幸朝臣來、見脣不可有不快事由
稱之、

六日、己丑、漢雲遠晴、朝霧始聳、去夜寒氣忽催、巳時許
初鴈聲聞、宇治曉更取松明御出云々、定修來談、昏參
座主御房云々、聊可傳申事示付了、巷說云、信綱辭近
江云々、東方有存信
歟、可懸、今夜御方遠行幸云々、亥時許宿北邊

寬永三年 九月

三百十六

小屋、牛童歸來云、日沒以前出御宇治、於木綿邊及暗、還御、中納言中將殿、御同車、右兵衛御共、於宇治定高經時卿等參會、歷覽之後御舟網代邊御覽云々、聞曉鐘歸、後夜猶長、

七日、庚寅、天晴、武衛示送、宇治御共、定高、經時卿、資季、親氏、有長朝臣已下七八人許、中納言殿御同車、亥時許歸着、參行幸、內府、大納言基嗣、實親、中納言具實、隆親、參議實有、爲家、三位公長、左將師季、有資、實持、氏通、右實隆、隆盛、伊成、雅繼、少納言爲綱、職事有親、經光、範賴、窮屈不參還御、臨昏大宮三位來臨、言談移漏、其子息刑部少輔智資親經外孫、年廿八、不知其由、去月十六日於嵯峨母在所邊、出家了、雖可驚存神妙由云云、又柿本影讓與兵部卿了、宜陽門院當時御一條殿、

四、御湯治渡、御車寄依他人闕如、九條大納言殿基家參給、夜陰事云々、已出仕歟、至恩也、初夜鐘後歸、

八日、辛卯、朝陽陰、朝典侍參佐々木如法經所云々、共人忠康早且送車、已時雨降、不濕地止、陽景不見、入夜車歸、自

夕甚雨、夜雨打窓、

九日、壬辰、雨止、天陰、雨猶間降、練貫小袖、襟袖袴、午時許送典

侍裝束、薄色生衣五、文蝶、紅、單衣、女郎表襲、赤色唐衣、兩物、古物、

雜仕裝束青紅葉、青二、朽葉三、蘇芳、單衣、唐綾生小袖、今一人、菊裝白下蘇芳袴、單衣、平袖小袖、

午後甚雨、夜雨滂沱、入夜武衛來、參平座、大納言基嗣卿早參、中納言家光、參議爲家在外座、上卿典召、官人

や候、一音、召、官人不聞、又如前被尋、參議傳仰、官人參、上卿仰、奉行職事乙なたへ、兼高進與座蒙命、同如例、歟、奏

聞、仰聞食由、上卿又如前被尋、官人や候、官人參、召

辨、時兼朝臣進與座、宜陽殿裝束事承退歸參、申裝束訖

由、此間大納言公氏卿、左大辨等參着、次移着、公氏卿

昇着之間、大納言家良卿入宣仁門加其上、右中辨時

兼、權右中辨光俊、左少信盛、少納言長成着座、一献、

少納言、二献、少辨、次粉熟飯汁、次三献、權辨、上卿仰、左大

辨召侍從、大辨仰之、少納言起座歸參申不候由、次上

卿召官人、二音、如恒、官人參、召外記、外記參、召見參等、以

下事如恒、奏聞歸着、見參入道方卿、迎參不見、仍返給令除、云々、見參目六

給少納言、右中辨忠高少納言綱爲遲參不見來云々、公卿勅使^{十月五}神祇官北廳造出者、可有行幸之由有天

氣、於北廳者蓋出來乎由奏了、天王寺親王全不可辭退由被申、陰陽頭國道被任者不可用長官、不可隨公事由、在繼觸諸人、書起請速署、季久云、國道被任之條至極理運也、季久可申權助天文博士之闕身也、速署了被

^{所力}

任之時、申其替之條尤不穩、仍難加由答之、然者各不同由噉々之間慙加之、在友又國道理運也、在繼又至極之理也、但難加署之由一旦雖相示、同被資落了、殿下召在繼、書起請由聞食、極以奇怪、被任國道之上、不用長官於不可出仕者、各可進其相傳文書、皆可被燒失、只可被公任國道一人之由被仰之間、卷舌退出云々、倣于諸寺惡徒陰陽又謀反奇怪、不當事歟、相門水田^{十一}一定云々、內府、武衛、前宰相實持、中將尊實、能性、實祥、公審供奉、入夜聞、證寂房夜前遂以他界云々、自建曆之比依西郊經廻知音已年久、緇素相馴之輩、悉以歸泉、雖老後之習付視聽難忍、貞覺僧都^{右中辨貞覺朝臣}眞弟子、

母證憲法印長女、始爲海慧僧都弟子、爲密宗師、僧都逝去之後棄出世之路、着黑染與求仙房共有能說之名、又豫請用、近代之女尼隨逐彼兩人如雲霞、至于終身之時惡可緣悲事歟、信乘圓金兩律師一腹弟也、共爲出世者、十日、癸巳、夜雨止、星隱明、朝雲出、薄霧簪、終日僵臥、不聞世事、入夜月明、

十一日、甲午、雲往來、霧紛紜、曉夢驚、歌枕聞隣村聲、聞東西呼人、長衡朝臣赴水田之間、僕夫催駕歟、出去之後夜未曙、悄然無音、聞窓盡悄然思、單寢先催懷舊情、旅客待明群動劇、愁人殘夜老眠驚、只憐秋鴈繁書信、不識晨鷄告別聲、節物未忘涼潔變、故人悉去隔他生、未時許與心房被來談、兩殿下令渡佐々木給、後高倉院四條局^{黃門母}、老病獲麟待時、件黃門今年四十九、重厄物惡、爲少將賴行被取筑紫庄、隆親卿其娘離別、令還母喪云々、賢寂來、內府今日行例幣事、追被向水田云々、雖有湯治之名、其本意只爲遊放云々、和泉境、^{本自有}又可被見葦屋、布引、阪麻、明石云々、賢寂以房

寬喜三年 九月

三百十八

一五二

任令吊四條局病、執權之時雖如怨敵、自壯年知其名人也、失時治病不忘舊好也、

十二日、乙未、朝天遠晴、夜月陰、朝書終拾遺集、授女子、依權辨供籠本不終其功、依適返以盲目染筆、及昏黑詣向二品二條亭、依御神事訖、只今參內之由、留守

男答之、非指事、可謁女房由示之、故三位中將維盛、女子

禪尼二品相謁、暫言談、綾小路宮令參給之間被馳參云

云、俄而宮退出給、後車三兩、天王寺、此世宗清法印以宗友、

有云送事、女子所勞加灸治、久不出仕之間事等也、仍

此女子香、同事行典侍局、可示達由舍之、即歸來歸蓬、

雲滿月暗、夜深雨降、

十三日、丙申、自夜雨降、辰時許休、終日天陰、日入之後

雲僅分、月及已忽屬晴、涼秋九月々方幽、況寂閑人憶

舊遊、良夜清光晴未忘、當初僚友往無留、不眠不臥謫

居思、誰問誰知沈老愁、白露金風爰計會、滿袂吹袖淚

泫々、

十四日、丁酉、天晴、淨照房來談、下旬於攝州欲湯治云

云、夜月無片雲、

十五日、戊戌、天陰晴、月昇初陰暗、夜深明覺法印音信、

弟子僧勤仕來廿七日寺家重役、大御室御忌日、來月五

日宮又高野御參詣、扶病參御共、公卿勅使御訪經

營、御室還御無其期云々、尤可然歟、賢寂云、明後日兩

殿下御回明寺、武衛自水田馳參會、又可歸水田之間舟

以下事奔營云々、水田偏遊行風水爲卿之儀云、天下只

遊放歟、被到向所々、各盡海內財力云々、

十六日、己亥、長凶會過、朝土川始、朝天晴、武衛去夜歸京、今朝在京

云々、日入以後來、夜前與中將乘船歸京、爲明日御共

也、今日參殿、只今罷出、御出可爲明曉、參人々大略如

宇治、定高經時卿參會、實持資季親朝臣以下云々、神

祇官行幸止了、諸門燒所殘待賢門不斷穢云々、內府又

白地歸京、仲能在京時傍者也、十九日下關東、下向之間言談要事云々、以

信繁入道先日被仰遣法親王、可止天王寺者、著藁履可

逐電、院愁悶主上御憂惱之由也、此仰上不及是非御辭

退不可候、但天王寺不願放火、可搦惡徒者、可隨仰、若

燒失可有御痛者、可隨重御計由申云々、彼寺又彌興盛
退絕親王云々、相門十四日歷覽華屋之後、被宿行寬
房、供奉人兩相公、中將、實祥引馬、兩法印公審引牛、
其後歸水田、昨日被始湯、不可有他出行云々、以桶二
百每日運有馬湯云々、

頭註資雅朝臣依召參、有長、兼康、盛長、以良、教行、家
盛、時長、公良、大內記、

十七日、庚子、遙漢清明、未時許兵部卿枉駕、好士之餘
歟、相調移漏、及日入謝遣、聊雖有出行之志、心神已屈
平臥云々、天王寺事被問公卿云々、十二人歟不憊聞
、右內府、按察、四大納言、定通、實親、家嗣、通方、中納
言定高、賴資、家光、參議經高、範輔歟、雖辨士舌端於
此事何爲乎、

頭註基家、實基、具實卿、都合十五人云々、

十八日、辛丑、自去夜雲陰天暗、已後漸晴、與心房來坐、
未時戒聽聞訖被歸、一宮聊御咳氣、北政所令入內給云
云、大殿又御咳病、予自去夜頭痛支節痛、今朝猶行水、

心神甚惱、櫻井僧正去朔比爲湯治被向攝州山庄頓滅、
法親王與圓滿院僧正遺跡相論有喧嘩事云々、前左府
法眼又被相交云々、僧正不被觸穢、大小內外僧徒之訴
訟千萬歟、所謂諸苦所因貪欲爲本而已、而入夜咳病甚、
辛苦難堪、

十九日、壬寅、凶夜月陰、朝天晴、終日病惱、夜有溫氣、
廿日、癸卯、自夜雨降、天大陰、猷圓法印書狀之次、成賢
僧正早世、天下之富人也、範圓僧正又其病火急云々、
覺朝又老病云々、良忠阿闍梨と云者死去云々、予外舅
之子也、昔外祖母家恒不論尊卑皆以亡歟、
二十一日、甲辰、終夜今朝雨降、已午時間休、未後甚雨、
心神辛苦、已時許與心房來坐、聊被語夢、護身之後被
歸、辛苦不能眠、月及已天晴、

二十二日、乙巳、朝天遠晴、典侍更衣事經營重疊、愁人
受重病旁難堪之故、晦比可退出由頻示送、每時節無
人、不便之由問答之間、賢寂猶可構汰沙由領狀、仍入
夜又告其由、夜半辛苦如例、

寬永三年 九月

三百二十

二十三日、丙午、朝天晴、菊始開、未時許右少辨忠高奉書、下家司長櫃來掛入細櫃、其狀

維摩會御下向料、講堂幡被新調候、其内二流令縫進給哉之由、大殿御消息所候也、仍上啓如件、

九月二十一日

右少辨忠高

謹上前民部卿殿

逐上啓禮紙先例之間、被宛氏人々候也、家中無右筆者、雇向僧令書、講堂幡二流可令縫進之由謹承候了、但自去十九日受重病候、月來所勞老身重沈、火急病難存命候、卒爾不慮事候者不便候、仍不能給置、可然之樣可令披露給候、恐々頓首、

自筆不書、七旬無官老翁先例誰人乎、細櫃不解封、本幡等返使者了、

二十四日、丁未、曉月明、朝天無雲、大宮禪尼之弟尼在官家朝臣姉不述一屋家昨日來、當時居所佐々木小屋西地沽却之由語之、今朝遣賢寂令見、令持小價直、未時許歸來云、地檢知閑寂無人地也、但本主古券置京、明日可持來由

申、仍不賜價直歸云々、幽僻立錫、典侍之弟女子善惡無所憑之故、雖方丈之地爲宛彼料所令買取也、月未出、眠覺辛苦、月昇鐘鳴之後又聊睡眠、

二十五日、戊申、遙漢清明、菊花已開、昨今雖不行水精進不能念誦、良算法印送日蝕勘文、十月一日卯刻、可慎病辰云々、已有病、雖可怖貧者何爲乎、入夜典侍適退出、依宮中人^{給力}不候、雖被處不當防重病之由奏聞、明夕可念參、御匣殿蒜相公同、適不被出冷泉殿、此咳病重惱幼、權大納言殿許候云々、備中爲中宮御分、相國撰三ヶ郷被申請、蒙御恩由悅喜云々、

二十六日、己酉、夜霜白、朝日鮮、已後陰、喚金蓮房令見女房疾、少々加灸點云々、典侍五ヶ所、背三、胸二、弟二所、高歸五所、乘燭以前灸訖云々、賢寂來、買取佐々木地券、賜直物了、但隣地有尺寸之違亂等、土用以後可專沙汰云々、戌終許典侍歸參、灸治小浴雖可勞風病、今夜必可歸參由夜前綸言有恐之故也、夜深雨間降、二十七日、庚戌、微雨天陰、未後甚雨、兵衛督夜前歸洛、

今朝殿下御共參佐々木、歸路可來由示送、大炊御門中將來臨蓬門、所勢不能謁之由乍車間答、申後雨如沃、二十八日、辛亥、終夜今朝雨猶降、心寂遺跡禪尼許昨日送最小分物、示朴悅歎由、非木石不忘舊好之志也、雖輕微事非當世之時儀、至愚之僻案而已、巳時許武衛來、昨日參佐々木、明日十種供養、伶人笛公賴、宗平、經通、伊平中障笙實有、琵琶公審法眼娘相門女房堪能、孝時法師、導師季、孝通娘、家定申障、筆築定季卿、孝道可參、打物料云々、可聽間由雖被仰、依着座無心不可參、依可參內即歸了云々、終日雨猶降、夜深雲晴云々、二十九日、壬子、朝天猶陰、朝陽間見、乾方虹、病雖無減無溫氣、身垢穢依難堪、今日沐浴巳時之後、當時無增減、三位顯平卿書狀、可獻五節舞姬云々、安房國內裏大納言局兼長大納言女、母信定入道女、日來聞產氣由、奉誕生皇女云々、秋日早沒、暮雲僅登、菊藥初開、蜚聲猶殘、十種供養儀家長朝臣注送之、先吹盤涉調々子、次傳供鳥向樂之間、天童十六人供花、天童左右重裝束也、件童十六人定案、僧正沙汰還云々、頗無其故亦歎次惣禮、

宗明樂、

一段、花、秋風樂、二段、香、採桑老、三段、要路、

蘇合三帖、四段、抹香、同四帖、五段、盤香、同五

帖、六段、燒香、同破急、七段、轆轤、蘇莫者破、

八段、衣服、白柱、九段、伎樂、輪臺青海波、十

段、合掌、竹林樂、昇樂、萬秋樂破、下樂、千

秋樂、

伶人、

笙、大理、樂人豐原近秋、

笛、五條二位、宗平朝臣、家清、樂人大神量基

筆築、實俊朝臣、樂人安倍季茂、

琵琶、女房讚岐、孝時入道、

箏、女房公審娘、師季朝臣、

大鼓、家長朝臣、

羯鼓、舞人狛近真、

鉦鼓、舞人多好氏、

伶人着座之後、諸大夫置樂器、爲仲、家盛、以良、教行、

貞永元年 六月 十月 天福元年 正月

三百二十二

時長、御導師聖覺法印說法殊勝云々、他公卿以下不
參、殿下御簾中、殿上人在公卿末長押上、家長、孝時入
道在簀子、松殿七ヶ日舍利講、殿上人諸大夫同座院
中、後高倉御時又同、今度相異、

貞永元年

○六月

十三日、壬戌、依昨日承旨先參關白殿、今日不參內、職
事早參由所來觸也、早可參之由被仰、仍參內、毛車、經
明義無名神仙門著殿上外座、四第、頭中將實雅朝臣、出上戸
相觸氣色、歸參付內侍奏候由、承勅歸出、仰云、古へ今
の歌撰比進貢之女與、正笏承之、稱唯、敬音、貫首退歸、
揖退出、今故染筆書廿卷之草案之端、

○十月

二日、雖撰歌未調假名序代並二十卷部目錄、注一紙
色紙加禮紙、先內覽即奏聞仰者、位署已下可用今日奏覽之儀

由同奏之、

貞永二年 癸巳 ◎改元天福元年

○正月大、

一日、丙午、三吉、神吉、歲下食、屋上雪白、山頂雲晴、日出以前拜神

社本尊、念誦訖、已後解齋、着冠直衣見齒固鏡、午後許
大炊御門中將來臨、在外過分、逐年此、芳心歟、隨身崩木袴、參院北

面、自是參女院、參殿之由云々、及未斜下人說、殿下於
門外御乘車令參大殿給云々、此間內府書札被尋魚袋、
參詣之時所用在金吾許、今度不及其沙汰由申之、酉時許有弘孝弘等來次聞之、金吾

不參御藥、但早參可見千壽萬歲之由有仰事、束帶念
參、其後可參所々云々、追儼之次小除目、侍從一人任、藤
敷基云々、

二日丁未、蒼天快霽、白日尤鮮、早梅盛開、黃鳥高歌、
午終金吾來、新車、牛意源膏白銀、昨給螺鈿鈿有文帶、昨日早參御藥訖之間、四

條納言別當三人候御前、御藥參、內府、大將、左金吾、

此二人匠作、奉行六人云々、次參殿、無拜禮、大殿拜禮、權辨光俊中之

殿下給、九條新大納言、高、中納言中將殿、伊平、實有、

賴資、家光、經高、爲家、範輔、基氏、外人一人数、資賴卿、有親

朝臣、殿上人頭辨、親季、光俊、職事三人高嗣歟、次北

政所拜禮、宗平朝臣、職事歟、中之、人數同前、次大殿、殿下已

下連車令參院給、新大納言、中納言、伊平、爲家、四人、殿

上人中將殿、宗平、有教、資季、親季、賴行、能定歟、院

拜禮、左衛門督申之、大殿令練給、飭創代本地伏輪細御

子例、右內府、大將、中宮大夫、新大納言、中納言、正欠、權入

參議七人、宣經、納言以上一列、參議一列、殿上人一

列、頭不立、宗平、資季、實隆、中將殿、爲經、通氏、親氏、光俊、職事等歟、下薦競出、中納言中將

殿以上留、大殿令練還御、殿下、新大納言、中納言殿家禮、次中宮拜禮、大

令參御前殿中給、了、此間已及發、亮申之、殿下不令練給、土御門大納言參

加、次參內、無小朝拜節會、懸御、內辨、一上、土新兩大納

言雖着陣早出、外辨實有、盛兼、內辨同、時早出、爲家、實命、範輔、

早出、實世、御酒、勅使、有親朝臣候外辨、昇殿之後內辨退出、

權大夫行事、每事下殿無指失、三位長倫卿不立拜禮、參所云々、之

外不出仕□日參禪門內相府了、今日先參女院、可參臨

時客云々、夜前節會退出之後、聞無人由、又直衣參院、

各謁已及酉時、以下人令伺、內府猶不被出、權大夫別

當實持、實光、賴氏、實清朝臣車立門前云々、臨時客夜

陰事歟、可奇、終日有和暖之氣、日入以後微行、纖月如

弓高懸、宿賢寂宅、依近々便宜、典侍時程退出、女房御

匠殿冷泉殿之外無人云々、打出紫匂、柳表襲、蒲荷染

唐衣、身裝束同衣、山吹表襲、青色唐衣、御服紅梅匂、

十赤色御唐衣、地文椒散花梅折、枝、背匂白文、寢殿南面階間、同東間二

間之外五間、西面三間有打出、猶有念忙事等、不經程

歸參、亥時許又名謁訖、金吾直衣一、身名賜、來臨、大略參入之

後、被待土御門大納言、春日徒暮、彼卿參入、時給細御、有文帶

兩息相從、省嫌、銀御、公卿列西上南面、如大響、時歟、右大將獨被立

中門南方、北面定有存旨、歟、不知其故、內府向土御門大納言揖、大納言

答揖、中宮太夫以下不揖、不知、其由、殿下御沓中將殿取給、

大納言願定、右大將基平、大、中納言以下昇中門切妻、公卿座

留尤面目歟、自是參大殿云々、不立叙列、來十日北政所

御慶申以前可參廻云々、晚月清明、始着直衣參安嘉門

院、謁女房內侍之間、左少辨來帶、來、女院御方女房被待

由引導、仍參、黃門被出逢之次、子侍從參院北面、金吾

可芳心由可傳之云々、定存忠歟、可申由領狀、不經程

退出、籠居廿日許、骨髓更休息、故腰損足痛、彌不能行

步、半月照軒動幽襟、追儼夜昇殿又加、資俊朝臣、實直

朝臣、侍從宗教、中納言中將殿夙夜供奉料云々

八日、癸丑、朝陽晴、微雨降、已後快霽、金吾注送、白馬

節會內辨、一上外辨內府、中納言中、大將、中宮大夫、中納言中

將、左衛門、新中納言中宮權、叙位藤中、叙位新藤中、

家光、爲家、御酒、左大辨、書加叙別當、叙列、左宰相中將、

實世、宣命使加叙、從四位下道嗣、教房、侍從、從五位藤

清輔、將陽門顯親、通成、實雄、道嗣、少將如元、爲繼不

除目可叙列別當時兼、兵部顯定、賴氏、實清、通成、皆

郵踏、白馬奏以後兩大將退出、中宮大夫、內辨左馬頭

代賴行、右有長奏取繼、宗平兩大夫、參議三人伺候、他

皆早出、中將殿令引陣給、外辨昇殿掌燈、明後日十日、

北政所准后之後始令參內中宮給、屋從殿下、內府、九

條新大納言、中納言殿、新中納言、權大夫、爲家、殿上

人、自內院被催出車毛車五兩云々、念誦日入以後休息、

夜月明、遠近堂舍鼓音聞、近日尊卑家々猿樂握瓶、積

山岳湛淮泗云々、獨醒更不視舞、不聽歌、又無琴詩酒

之友、只對早梅之花樹、慰憂鬱之懷、

九日、甲寅天晴、未後陰、去夜曉鐘後乾方向小屋群盜

五六自後地入云々、腹取屋宅云々、未時許但馬前相司

具日向國司親繼、來談、南籬紅梅漸開、

十日、乙卯、天晴、已時迎禪尼、依吉日自今夜前金吾家女

房等法勝寺咒師見物云々、權辨芳心云々、一昨日御齋

會始、九條新大納言、新大納言、新中納言、中宮權大

夫、二位宰相、右衛門督、左宰相中將、修理大夫、有親

朝臣、盛兼、家定、藤中退參夜前法勝寺、金吾、經時、親長卿、有

親朝臣云々、今夕北政所御入內、女叙位、入夜月明風

靜、戌終許出一條伺見出車、主乘了立一條西、向總門立

天福元年 正月

三百二十六

一六〇

北面、源卿一門四人修理車云々、前駐北面上四小時內府被參之後、殿上
衛府各三人半物不知誰人、上殿、人已騎馬之由聞之、於正親町東洞院見之、先地下前駐
前駐、年少六位二人在前、人頗分別、次內院殿上人云々、但
不嘗見之人、通氏、通行、親氏朝臣之外不見歟、範賴、
供率、頭辨、無中、次御車、唐車次出車、次殿下、居伺舍人、
前駐六人、毛車、不參隨身移馬、次內府、次中納言中將殿、
新中納言、中宮權大夫、右衛門督、隨身二人取松明、見了
歸入、後聞、於院御所御車寄西二棟中央間、有弘庇、當時
所、公卿列居南庭、當殿殿坤、新大納言腫物所勞云々、
十一日、丙辰、欠日、天晴、今日院御所小弓云々、是實之
近代往年雖有小弓名、其物（異力）、新物新作物也、非大政始、十四
弓、非小弓、中央物也、令位舊、尤可謂尋常之儀

除目廿二日始由金吾示送、

十二日、丁巳、天晴陰、午後大風發屋、紅梅漸開、夜深金
吾適來、今年日夜無身暇云々、今朝維長奉書、北政所
只今御參中宮、御車寄闕如可馳參由頻催、仍打梨馳參、
頗被刷御出也、前駐只二人重被催求之間、兩殿御衣、同
車令參給了、及日入寄御車、忽令差綱、道只今還御之後
召騎馬維也

所來也、聞日來事、一昨日供奉殿上人皆取松明、列居
中門外、本所職事入中門內、內裏同在東中門外、御車寄
時要、公卿又人中門內、供奉人親俊朝臣、宗平朝臣、資季
朝臣、有資朝臣、實持朝臣、通氏、親氏、賴氏、
、親季、通行、兼高、信盛、忠高、範賴、經光、顯
朝、能定、李賴、經俊、信光、宗教、少將能忠、兩方地下歟、
門內、職顯氏朝臣、信盛朝臣、付御車、諸大夫有長、
兼教、秦敏、維長、盛長、教行、兼仲、兼綱等
歟、又資親地下公遠歟、殿前駐以良、家盛、知資、知信時長、
資憲、泰敏家國、中納言殿前駐、基邦、時光、每度此二昨日
小弓、東馬場殿庭、內以孔子賦分左右、勝方左、隆親卿、基
氏卿、御頭位以後資季、家定、家任、實清、
、行綱、北面、業時、負方具實卿、為家卿、光俊卿、成實
卿、有資卿、隆盛朝臣、親氏、博輔、繁茂、明日御幸
行啓公卿可被催分由兼日有沙汰、其儀改可為御連車
之儀、出車殿上人車、公光、顯親、通成、
云々、御堂修正始、殿御參、公卿闕如由兼高催云々、仍

又參、治部只一人上座云々、加其上之間、通今年御方々女房見物不聞云々、二月廿二日初入御宇治、爲氏被催、臨時祭舞人殿中將殿令勤給、法性寺殿御子孫以後於舞人者久絕事歟、無朱雀院、而每事新儀歟、舞無其沙汰者還失舊例歟、

十三日、戊午、夜雪積庭、朝後猶降、雪埋紅梅、閑庭催興、未一點雲晴、風烈雪消、盡祠官忠成來、今日座主宮細素拜禮、每年々始有此事、其日不定、以吉口其首被仰御座南面簾

中、先僧等、次祠官禰宜已下二行立、房官僧申繼云々、夕風猶烈、雪又飛、雖有御幸見物之志、寒氣難堪、進牛僕了、後傳聞、殿下、紅打出衣、綾右大將、無出衣、劍中宮大

夫左衛門、織物、藍色指四條新中宮權、新藤二位宰相、右衛門別當、已上直衣、無劍左宰相中將、修理大貳、已上、治部顯

平卿、資雅卿、織物、藍色指有親朝臣、已上、宗平朝臣、東帶、有資、色指其實蔭、直衣、野鉞家定、細鉞、顯定、細鉞、公光、細鉞、

隆盛、細鉞、兼高、細鉞、顯親、細鉞、通氏、細鉞、同、細鉞、忠高、細鉞、經光、細鉞、光國、細鉞、已上、信實、細鉞、實持、細鉞、親氏、細鉞、實清、細鉞、親季、細鉞、範賴、細鉞、顯朝、細鉞、已上、來帝、細鉞、衣冠、

十四日、己未、天晴、兩殿菩提院御覽、新殿今夕御方迹、釋林金吾又被召具云々、近習追放、重役勤仕前後相違、

今日持明院御月忌、昨日問人數、賴資、親長、光俊卿參云々、依座次嚴重不能參、臨黃昏四位侍從言家來、除夜入浴、未參公所由稱之、官途奉狀等付權勢之由云々、

付前中納言訖、白河東副又申入道相國、又自河東有申座主事、志深庄民卅人許爲神人、不隨庄家事云々、喧々不絕歟、但來月依堂供養布施取又可下向云々、只答尤可然而已、月不明、

十五日、庚申、朝陽快晴、兩殿今夕猶宿禪林寺云々、不知其由、御共人々皆不歸云々、兩方近習極可失便宜事歟、明日遲參之由頻被仰、中納言中將殿同車令駐參

給、先菩提院夕禪林寺之由、賢寂來談、政治御齋會竟日被召具、無詮事歟、明月無片雲、今朝典侍書狀、昨日聊御風氣、護身之後無爲云々、

十六日、辛酉、天晴、風靜、未後陰、夕雨降、不聞世事、十七日、壬戌、終夜雨降、朝天風烈、

天福元年 正月

三百二十八

一六二

十八日、癸亥、雪埋庭草、朝陽晴、雪間飛、念誦日暮、蓮花王院御幸、但行啓之有無不定云々、夕聞、行啓止由、寒風老病不能見物、

十九日、甲子、朝天快晴、金吾適注進日來事、御齋會竟、

土御門大納言、中宮權、藤中、新藤中、有親朝臣、踏歌、

內辨、內府、左衛門、中宮權、藤中、藤經高、實世、資賴

卿、有親朝臣、爲家雖老、依人多不射禮、新藤、新宰相、有親、

夜前御幸、殿下、大將、淺香、中宮大夫、九條新、高倉中

納言、上卿、左衛門督、四條中宮、權新藤中、東常經高、

爲家、基氏、實世、來、資賴、親長、顯平、師季、資雅、有

親、殿上人親俊朝臣、隆範、十四日、資季、信實、有資、實

蔭、家定、中將、顯定、御劍、通氏、隆盛、宗明、信時、親氏、

光俊、通成、經光、忠高、博輔、季賴、少々、六位家清、仲

時、初夜導師咒師、三手、後夜導師、布施實季、寺大僧正以

下布施大將已下、大將自中尊新大納言已下大廻、布施以

後、經通以上四人經御前、具實隆親已下大廻、次龍傳

毘沙門、次杖、次鬼、次還御、最勝光院入講、家光卿、上卿

親長有親等

參云、小弓之妬勝云々、夜前少將內侍送書狀、今夕隨體

可參由示送了、未時許大炊御門中將來臨、言談自然移

時刻、及黃昏參殿下云々、御齋會竟、本陣勸杯、有效、

實蔭、家定朝臣、出居有資朝臣、親氏朝臣參、乘燭以

後、先入資寂宅、逢金吾暫言談之後參御所、尋內侍、已

以御寢無路便由、金吾傳之、名聞已訖不仍向局□久言

談、散日來不審、夜半許宿賢寂宅、月陰雲晴、

廿日、乙丑、自曉雨降、已後休、天猶陰、曉鐘之後歸家、

未時許行寬法印來談之間、金吾又來、法印歸後、金吾

依內府招引又參大殿、不知、

廿一日、丙寅、朝天漸晴、昨今只見和哥、千五百番歌合、白

近代歌面々雖稱雄、更非尋常歟、可謂自他之耻、

廿二日、丁卯、天晴、式賢來、稱病不達、蓬門常稱所勞

由、此男依多言本性示病臥由、

廿三日、戊辰、天晴、金吾來談、夜前除目始、權大納言、

中宮大夫、高倉中納言、經、新中納言、伊平、參議經高、

爲家、範輔、實世、有親、宮文時兼、爲經、光俊、忠高、頭

辨奉行、當時無外人聞及事、參議宜經官頭中將可任
名譽之由披露、實首親望、實俊可任參議之由出所望云

云、大宮三位來臨之間、又以相謁及黃昏、金吾入夜歸、

廿四日、己巳、朝陽陰、午後微雨降、申時甚雨、今日北政

所令參春日給云々、禪尼詣祇園吉田賀茂、未時歸川合川社、有候候間

明日中宮御入、中一日人不參云々、今日院尊勝院陀羅

尼供養、導師長者大僧正、自賢寂宅被具威儀云々、夜

雨、金吾示送、今日院參公卿殿下、兩相府、四大納言、

權大將、中宮大新、七中納言、高倉中將殿、四條新、當小路、藤新、藤、六參議、經高、

爲家、基氏、實世、資賴、有親、三位三人、親長、顯平、長

清、新大納言、中將殿、藤中、治部、東常、殿上人隆範、宗平、資季、實隆、信實

實任、實清、通氏、宗明、兼高、忠高、經光、光資、宗氏、

知宗、資定、光國、博輔、合點、衣冠、尊勝陀羅尼、殿上人往年

不參人歟、自建永承元以來、密々他所御幸、近習人不

著冠、疎遠又不參、自爾以來陵遲歟、

廿五日、庚午、朝天猶陰、巳時又雨降、即晴、及午時不聞

除目、行啓延引廿八日云々、午終助里持來聞書、參內裏伺聞

已時許消書訖、卿脫力上經通卿、有親朝臣右筆云々、難任之

外無指事、少納言重房、宮內少輔藤俊國、權醫博士丹

波季康、針博士同忠成、山城中盛氏、典、大和藤盛家、

美濃隆盛、兼院分歟、越後權守宣經、兼院分歟、播磨藤家定、兼院分歟、美

作權守資賴、兼院分歟、備中權守有親、兼院分歟、土左源教行、壹岐中

原師胤、筑後藤親賢、代始一病、左右各、將監、左右各、左右衛門又五

人、左兵衛四人、助里、左將監、右衛門有賢、御監大將、

右兵同、左右馬各六人、從五上藤基綱、藤家方、止宮、內輔、藤

重綱、止守、使宣旨兼氏、金蓮房今年始來、此次間、前侍從

廿八日卒去、入道信定猶子、

廿六日、辛未、夜雪埋草木、朝陽猶返陰、先年千五百番歌

合、尋出缺卷尋兵部之次、折簷前紅梅之雪送之、

今波世爾簷波乃梅の花、遠佐、埋波立鶴春乃雪矣

返歌、雪消天晴之後、

今は世に簷波の梅茂雪消て猶行末の春にさかへ

む 觀日在外、

未斜兵部卿忽來臨、及日入謝遣、齋宮御歸京之後奉行

天福元年 二月

三百三十

經營、又參問於岡屋津御乘船難波、實於渡部候之云々、御祓之間

可供奉云々、

廿七日、壬申、霜凝、天陰、已晴、未斜權辨來臨、心閑面

謁、及昏黑大嘗會可奉行由承之云々、明日下名云々、

夜雨降、昨日普賢寺禪閣入京給、龍人武藏著柳衣乘御車上座、路人皆見云々、

廿八日、癸酉、自夜雨降、已時天晴、今夕行啓、御入內云

料、午時許與心房被來坐、參大殿退出、昏黑大風雨、不經程、行

啓延引明夕云々、

廿九日、甲戌、已時見聞書、權中納言藤賴經、右中

辨光俊、兼、權右中信盛、左少忠高、兼、右少辨經光、

父辭中納言、侍從源雅光、同資基、大膳權亮藤長政、中宮權大夫、五節二合、

彈正少弼藤重隆、若狹守藤隆氏、土左守藤家教、兼、薩

摩守重國、治部卿國也、名替歟、不知、左中將公相、少將氏通、右少將雅

繼、光成、三人、叙位、正四位下、超藏人頭右大辨左中辨、於老身可謂慶歟、盛經成長大

同、辨又正四下通氏、正五位下隆祐、止侍忠俊、從五位上藤

公茂、雖任叙爵其數多不駐之、資基賜源姓云々、中納

言十人、勤公務者只家光卿一人歟、去夜南隣、一條四小路角小屋

山法師宅、群盜入、斬其從者法師童、雖未死不及療治、負痛

手叫喚、路人成市云々、金吾又示送云、若狹、北白川院御分、美濃替、

薩摩、基氏卿、若狹替、土佐院分、美濃、大殿、備後又可爲院分云

云、今夕行啓行幸、明曉還御、行啓又還御云々、送典侍

車、助里在共、又後聞、備中已被辭申、可爲播磨之替、

而本所不被舉任人、仍不任云々、被辭申之上、更不被

請取歟、

三十日、乙亥、霜凝、天晴、行啓、女房車天曙、日未出、歸來、金

吾示送、行啓、兩大夫、中納言中將殿、四條富小路、爲

家、實世、公長、師季卿、有親朝臣、行幸、右大將、中將

殿、四條新中納言、伊、權大夫爲家、實世、公長、有親、

行幸及深更、出御南殿之後、忽御六羽、無御乘輿之間、

及延引之沙汰、御寢之間御乘輿過夜半了、不經程還

御、次行啓還御、天曙云々、未時許少輔入道、唯圓來談、

今夜聞、住心房、中風病、已歷年、遂以入滅、今夜葬送、

○二月小

一日、丙子、朝天快晴、去夜微雨云々、兵部卿明曉參齋

宮御迎、明日攝津國御被云々、今夕御方違御幸、

二日、丁丑、天晴、藏人大進送書狀、下名後朝姊老尼

長力卿嫡女、事居良女也、父沒後爲尼、其嫡才有職超于兄弟、長子時句云々、逝去、于今不出仕、可除

服出仕由被仰、厚顔而可出仕哉、父子相繼超越、可悲

可耻云々、當時所存雖有其理、適堪奉公之人忽隱居、

爲世爲身無詮事歟、又自本爲父之末子、無私傾人也、

自然依公人可扶身歟、予所答坊官賞得境之上、適堪公

務上卿去職、申請之所募已重疊、是即超越之尤固之故

歟、還可謂御本意哉、忍忍辭出仕可爲上計由也、予去官

之後、宣下事無請取人、家光卿入日野之時、上宣事惣

而默止之由所示送也、伊平卿十二月廿七日適示可着

陣由、催具諸司之處、臨期稱隙空延引云々、金吾示送、

夜前御幸供奉、中納言隆_{香符}盛、花田、爲家、柳、大理、

直衣、資季、花田、有資、白、家定、_{赤色、取}隆盛、親氏、二監、實

清、柳、光俊、_{奉行、花田}家清、白、藏月高懸、

三日、戊寅、朝陽快晴、鴨光兼來、喚出之間、前左馬長綱

來談、左京權又來會、中務爲繼除目叙留被仰了云々、

未被仰之人、少將伊忠、實躬、侍從經成各懸望云々、近

日群盜每夜騷動、其響遠近互聞、急難之至雖末世、視聽

不及事歟、餘命待何日、以壽難終歟、悲哉云々、未斜大

宮三位相伴舍弟前兵衛佐來臨、即相謁、武衛先歸、三

位九條宿所之隣群盜又亂入、流矢及家中云々、及昏謝

遣、初月又明、

四日、己卯、自朝天陰、未後微雨、少時天晴、薄紅梅入重、

盛開、垂柳漸翠、天明翫花柳之丹青、夜來悲盜賊之急

難、言家朝臣書狀、依關東堂供養事明日又下向、三月

可歸洛、念々不參者、日入之間行冷泉、_{金吾自畫御輪、候御所云々、}向中

納言一日有一札、以房任近邊參來之山示送、_{同伺候之、問云々、}乘

燭以後共退出之由聞、欲向彼亭之間即被來臨、仍面謁、

金吾雖同出、無程又歸參以後、戌終許被歸之後、宿賢

寂宅、金吾名謁了又來談、及深更、明日近習公卿殿上

人可參齋宮御迎之由被仰、中納言_{四條}參議金吾、三位、

左兵衛、大貳_{所勞}、已上直衣、資季朝臣、有資、家定、

、家任、實清、歟、可早參之由雖被仰下、此中

元福元年 二月

三百三十二

納言御車寄、白晝京中可見苦、可出京之由相議、可參
向赤江、兵部卿自一、昨日參云々、明後日又頗可有尋常御鞠、其事承、催入々々、學

大歟

問料未被仰下、右府御成怨偏流涕、無殊競望之人、家

光卿雖當其仁、不可競之由和解、大儒始奉四人、依無

例難澁歟、在氏故爲俊子、寓直殿中將殿之故有憐愍歟由大

儒成怨云々、右中辨卒去之間事、左中辨卒去尋常恒例

也、尤當其仁、又爲右中辨行其事由申、兩人事早任各

申旨可奏由、殿下被仰頭辨、而不申左申右事之間、任

殿下令申給可被補歟由被仰下問、殿聞食此事被答仰、

頭辨頗不穩由有沙汰歟、居職不幾此沙汰出來由、人又

有所云歟、時兼置左中辨補之、被止日向國之時、依有

申旨、爲別儀之故、今度左頗當其仁歟由上下存之云

云、左衛門督正月熊野詣、中旬可還向云々、

五日、庚辰、天晴、未明歸廬、巳時許左京權大夫來臨、申

時許齋宮已令入持明院殿給之由雜人等稱之、甚早速

云々、安嘉門院御御堂御所云々、

六日、辛巳、彼岸始、天晴、風烈、朝念誦之間腰痛忽發動、左足

又不被踏立、苦痛無術之間、午時許平臥、長政朝臣來、

予去年有所遺恨、久不音信、年來好士依不可棄、昨日

付京兆有示送事、聞之所來也、隔物相逢、言談經程退

歸之後、左大辨於門外被示可謁由、所勞失東西之間、

不及相扶由答之、後可來之由示之、即被還了、金吾來

臨、暫言談之間、又依召酉時許馳參了、能例言談之程

腰痛又宜、極奇思、於朝間者殆前後不覺也、明日午初

刻參赤江邊、京中有見物人等、人數如前所聞云々、右

大將室三品又生女子云々、

七日、壬午、天晴、關東禪尼

往年知音、陸保朝臣妹、

送書狀、舊好間

答、未時許東乃中務尉と云武士來門前、付家長朝臣書

狀、自昨日腰損不動身、不能對面之由示之、自門外歸、

着直垂云々、乘車其衣與乘物不相應歟、或說云、其手

跡歌風體奉似九條大納言云々、當世好士、毫及而猶在世珍

重知音多出來歟、可從漁父之誨哉否、

八日、癸未、朝天晴、早念誦之間小地震、

井宿帝釋動歟、吉云々、今年

八重紅梅花乍含乾落、開數不幾、寒氣之故歟、不得心、

午終許大外記師兼朝臣來問、於殿中方相謁、師季朝臣事、傳和歌事相交、外記應造營不日之功、予爲上卿之日、殊加感言之時、誇其詞可蒙道芳心由傳之、其日領狀之上、重有此音信、依思社稷事無是非承諾了、言談訖退去之間、見□□之揖、又聞稱唯之音動舊意、更拭淚嗟乎、早衙之執心何日休、伊勢權禰宜永元老翁、來、又隔簾相逢、即又好和歌之故也、

九日、甲申、朝天陰暗、巳時雨降、大貳消息云、彼安嘉門院年預雖辭申、座主宮殊被計仰云々、來十三日中宮姬宮爲御猶子始渡御之間事等申沙汰云々、是依八條院庄二歟、寺領等又定有事煩歟、臨昏金吾來、候院之間自殿有頻召馳參、有小弓事、兩殿、安季、實持、親季、兼康、敦行、盛長、惟長、一昨日院御覽鞠、大殿、大將、隆親、基氏、成實卿參候、鞠時賢、資雅卿、宗平、有資、賴教、宗教、宗方、隆重子、行景、長繁、皮堂子、寧王法師、親乘孫、三百八十并揚、十三日姬宮御渡有可供奉催云々、春日祭辨忠高、三事之後結構、近衛氏通、十日、乙酉、朝天快晴、賢寂夜部歸洛、午時許前修理大

夫書札到來、迎蓮上人、近隣知音也、依有面謁、本意傳示由也、雖不知誰人、扶病開障子相逢、武士入道云々、近年住舊里法性寺圓法院子外祖所作堂、跡由語之、又好士之一分云々、先考先妣墓所聞傳、讀例時由語之、尤本意由相答、賢寂來、夜月明、一寢之後西方有火、雜人等云、大殿御所也云々、一條、四殿、棄置之、腰折不能寸步、出門絕思、不移所滅了云々、此間聞曉鐘、火滅月入、雜人說、令渡東殿給云々、彼地已三度燒亡、不吉事又繁多、當初板屋小屋相國居住之時燒了、其時被仰居住之時、有建保籠居事、忽被入安居院、其事雖爲汗湯宿所、女房等往此所之間也、其時殆荒廢、渡尋常之後更造作、以西爲晴、花亭秀康馳來、有召籠事、承久亂逆、又無爲之後、於彼亭被聞殿下御籠居事、不經程忽燒失、其後改作、南立總門爲東晴、故院俄渡御即崩、有中陰事、其後又改寢殿被渡最愛姬君、長病天亡、次宗家又長病臨終、被渡北山之後、久被棄之間、東殿在怪異、殿下渡御此所、忽有今度御廢之後被處吉、今又如此、案之又不可被造歟、

天福元年 二月

三百三十四

一六八

十一日、丙戌、天晴、不聞世事、兩殿御坐東殿、軒騎參集云々、申時許與心房被來坐、自殿退出、放火去御寢所、二三間之內云々、御覽燃火令驚出給、當時雖無披露、御文書等大略不被取出歟云々、放火者已擄取承伏了云々、此事、此信、定高卿侍之從者男云、御物具等又不取出歟云々、自正月被始不動供、慈賢正月勤仕、二月可勤由被仰、依腰痛無術辭申之故、慈賢猶延修之間有此事、彼僧正遂被隱居了、更不可然、早可修之、極可謂冥加歟、上下諸人大略只以存命爲事歟、不便云々、西并北御門不燒、乾角侍屋殘云々、入夜金吾書狀、今日參院、內府奉仰賜播磨之一村云々、院分最初國之最前入御恩之人數、當時之時儀面目餘身歟、答心中感慨由、御成敗之早速極以忝、

十二日、丁亥、自朝雨降、巳時許雪更降、梅花盛開敷、賢寂告送、件所雖小所、細川庄占隣、又非荒廢之地、專悅思云々、

十三日、戊子、朝天漸晴、朝出臥內之間、腰又違損、苦痛

難堪、雖參佛前不能禮拜、終日辛苦、未時許兵部卿來臨、扶出相謁、大府卿申、舉四人事被問兩中納言、共申何事在哉由云々、淳高卿彼卿肖父祖所存不^レ由稱云云、今日、參院、賴資卿前殿所賜之播州、中納言典侍給之、歟憂無極云々、當時此輩之事不委聞云々、二品、伴典侍、帥、淳高、加元、行綱、繁茂等云々、列此人數、猶々參事歟、不經時刻被歸了、忌日事賢寂送嵯峨、地藏供養並非時、一旦湯惟湯新等也、與心房於此佛前被修廿五三昧、建久四年長病之中遭此喪、悲歎之志勝其連枝之中、不圖存命迎四十年遠忌、戀志雖切、貧家之無力所不幾悲哉、入夜典侍初退出參內、又參室町殿、火事危急不足言云々、於文書者大略被取出、於如御物具者當時御裝束以下無一物云々、十四日、己丑、天晴、霜凝、年來在此家四竈、送與心房許、強入湯屋也、夜前被見了、仍不論日次、典侍歸參、未時許右中辨來臨、言談臨昏、率分事未被仰下云々、

十五日、庚寅、雨降、終日陰暗、入夜之間雲暗之上、非日比之天、偏如暗夜、雖不見月輪皆既之蝕歟、亥時漸如

月夜云々、

十六日、辛卯、朝天晴、已後陰、夜深雨降、不聞世事、

十七日、壬辰、自夜雨降、未時許止、天猶陰、申始許金吾

來、近日又可公卿昇進、依大理使廳厭却懇切可被取

闕云々、仁安承元建曆承久依輕忽之亂政、被求非分之

闕官、極不穩事歟、近日咳病世俗稱夷病、去比夷狄入

京、萬人概見云々、是又極不吉之徵也、何爲哉、不可以

亂侵華、慈賢去夜逐電、居住近江國百濟寺

自本所占之辨地、親花樹院

水石、惟長爲御使馳下了、自年來深厭世事、以事次逐電

云々、

十八日、癸巳、長門守兼友來、相逢之間又兼直宿禰來

談、扶病謁之、申始許眞昭入道來、言談及昏黑、入夜宿

賢寂宅、

十九日、甲午、天快晴、曉月無片雲、鐘報之後歸廬、長政

朝臣來談之後、迎逆房來、不聞、

廿日、乙未、天晴、靜俊書狀、去十七日、午刻、無動寺之門

徒切東塔南谷房二字、大谷房、等覺房、十八日未刻自南谷毀無

勸寺合戰、自三方進寄、二方被追返、今一手自存外谷

底打入、切房二字、寶成房、仙霧房、うれしや水之曲はやして歸

入南谷、兩方死人多、負手者有其數、其後無動寺又可

寄南谷由評定、下法師剪無動寺境內之木、無動寺法師

乃傷之、南谷之下人殺其法師之故、此事出來云々、親

王座主之時、山門破滅之由世之所稱也、彼親王又偏好

兵給、參入僧徒皆相具甲冑弓箭之所從云々、不知其

由、信實朝臣書狀之次云、資隆朝臣

前右衛門佐死去云々

雖無常之

習、殊以存外、心操穩便之人歟、天之興善不信事歟、去

十日事云々、

廿一日、丙申、天晴、左目大腫、是依見歌也、招典藥權助

貞幸令見、非眼病雜熱之所爲也、不可及大事由答之、

桃花盛開、八重櫻細木、開始、毘沙門堂花半開云々、

廿二日、丁酉、自夜雨降、未斜陽景晴、晴陰猶不定、夜雨

間降、長政朝臣來、

廿三日、戊戌、欠日、朝猶雨降、雹交、巳時蒼天晴、天乍晴雨

雪交降、大風間發、櫻花之後雪霰、非恒事歟、明日祈年

天福元年 二月

三百三十六

一七〇

殺奉幣金吾勳使云々、家長朝臣曉下向湯山之由示送、南京常樂會之間又有鬪亂云々、

廿四日、己亥、宿雪棟宇白、天晴、午時許徒然之餘、扶目病行毘沙門堂、乍車伺見、花半開歟、雜人之外無殊人、

少時歸來之間、兼直宿禰相逢、長政同車云々、不見而歸來、申

時許兵部卿、大宮三位、同車、音信而過了、入夜金吾來、

奉幣使入朝使家光卿、當日定、上卿右府勳右筆、職事忠高、辨經光、

使顯平卿、有親朝臣、四位季宗、爲繼、不及昏黑自上御

社退出云々、即著狩衣參名謁了、明日參綾小路殿八

講、明夕持明院殿御幸、翌日可有御鞠云々、明日又殿

下氏院參賀、廿八日御即位由山陵使云々、上卿、中宮大夫、

使伊平卿、有親朝臣、三位等領狀、被催經高等、臨時祭

十四日、使未催出云々、宰相三位中將被催、

廿五日、庚子、朝天快晴、未後陰、夕雨降、去夜姪女獨立

毘沙門堂、及深更稱待人、今曉雜人等見了、於惣門外

被殺害云々、午時許長政朝臣爲內府御使來臨、相逢且

令見目痛之體了、一寢之後金吾來宿、御幸供奉明日可早參、

大將御車寄、鳥帽子、直衣、不踏馬、隆親、盛兼、爲家、資賴卿、殿上

人只四人、公有、親氏、公光、御飯、直衣、光俊朝臣、昨日入講

始、與別當早參、始事之後隆親卿參、又早出、左大辨追

參、相替退出、今日家光卿有親朝臣參云々、

廿六日、辛丑、終夜今朝甚雨大風、及巳時雨猶不止、金

吾歸參了、紗白襖、淺黃指貫、風雨之日定無興歟、雨頗休後八幡

權別當超清歟、來、依目病以人問答、柳可移植之由約束、退

歸了、午時天忽晴、風又頗休、今日御鞠御覽被遂者、今

夕還御云々、夜間還御之由、

二十七日、壬寅、朝天快晴、目腫、自作日付藥、車前草、去夜

汁稱□猶有增、又貞幸朝臣來、雖血忌日令加灸點、

顯二日料、左手五所、年來中風、中將入道唯庭坊、忽來臨、目付藥之間、

以人謝之、無草事也、兩納言、隆盛、金吾、大理見毘沙門

堂花、又參持明院殿云々、傳聞、

廿八日、癸卯、天晴、左衛門行尉範自大殿來、堀八重櫻、

此間、少灸治、目腫不能指出自己始及未時、下人等不昇

出得、行範先是歸參了、早旦超清請印、又堀取柳木了、

灸早旦頭二所、已時手臂上等五所、雖非多甚窮屈、未時又歸來、昇入車出了、申時許唯圓房來、見毘沙門堂花、今夜可宿、臨昏被出、暫言談、今日殊無力、又平臥了、

廿九日、甲辰、晴、朝天快晴、唯圓房早旦歸、目熱氣同昨

日、朝出庭上聊行步、無殊煩、歸入之後腰病又發出、欲立不能、極以奇、行寬法印來、隔障子言談之間、永光朝臣登岐、來會、同乍隔相逢、歸後左京權大夫來、又乍臥內隔物言談之間、大宮三位又被過、於同所清談之次、去十八日賢寂語出勝事猶一定事云々、男一人來左大辨宅、貴下并富小路中納言成殺害之計、度々伺之間、猶有憚思事不遂、案此事若冥加被坐欺、依漸後悔來告由陳之、大辨乍置其男、馳向中納言許告此由、相議只搦伴男過河東、所陳同前于男詞、顯平卿語云々、更難信事欺、此事披露之後彼三位出仕如元云々、三位又向兵部卿許由云々、今日每月會也、左京云々、厭律師於伯僧正許當日連歌、起座稱心神違例山頓死云々、雖歌

不得骨多年見馴者也、可悲、今朝御所朝鞠訖、參大殿、西園寺花御覽了、入夜歸由金吾示送、昨日山陵使上卿中宮大夫、使中納言伊平、參議經高、爲家、有親、三位顯平、師季、終日夕膳、亥時出陣云々、入夜典侍適退出、

○三月大、

一日、乙巳、天晴、已時許隆承法印相具小童來臨、隔障子相調、即留童歸了、典侍今日適逗留、憚御灯之聲、臨昏黑送迎事、童歸了、

二日、丙午、沒、天晴、金吾參詣日吉云々、明曉大殿開之故

欺、已時許沐浴、目腫之後、午時許左京來臨、隔物言談、撰無

事等言談、夕女房下野來、謁典侍之次聞及、隱岐國守

護武士等私鬪亂不靜由聞云々、秉燭以前歸、即典侍又

歸參、頗有召

三日、丁未、土用、天晴、迎蓮坊來訪、以人間答、大宮三位被傳

折紙二枚、宜秋門院、按察殿、往年予與故三位中將詠當座腰折、

不足言不及書留、不慮在彼人許、依有書落可書繼之由

天福元年 三月

三百三十八

一七二

也、仍書付返送了、殷富門院大貳と云女房他界之由聞時、於彼院染筆書付歌也、忘却經卅餘年見之、舊游零落、瀧老後之淚、

四日、戊申、天快晴、前齋宮戶部夜前來、今朝歸參、伯三位妻盛實朝臣入道女、取夫之宿衣入廳物、三位即見付取棄之、

追却妻之所從等之後、又欲飲酒、浮黑散成奇、捕陪膳少女間之、重又依妻室之語此散交於飲酒之由承伏、服瀉藥反吐、其妻閉籠障子內、永不可行他所由吐詞、三位出其屋座向宅云々、相具二十年、數子之母挿此害

心、世上可恐事歟、晝寢寂來之次云、巷說、隱岐之守護佐々木左衛門以八島冠者先年於今熊野邊被追討者子、爲讃岐守護代、

無是非擊殺出雲守護代、一島勒精兵構城郭、出雲又發兵雖欲渡彼島、島船津爲嶮岨、渡者難方舟、當時只發精兵廻籌策云々、若及重事者彌爲天下之煩歟、六波羅使往反

出雲無
曉云々、

五日、己酉、朝陽間陰、午時許雨瀟、又止、靜俊來談、父

入道病又頗宜、存命歟者、東塔無動寺兩方城郭猶不拘制止嗽々云々、

六日、庚戌欠、終夜大雨、曙後止、朝天陰、未時陽景見、承明門院黃門被來謁、典侍今夜宿金吾家、明曉與女房等

參日吉、明日可歸參云々、

七日、辛亥、朝天陰、金吾適音信、昨日參最勝金剛院、早參家光、經高、範輔、師季卿、有親朝臣參、到于酉時、奉行有長不參、無佛具、只今借用歡喜光院不渡敷語、仍早出、中納言中將殿未令門給云々、參院御鞠名謁、今日列見無人、午時催無人由、依無僮僕不能參、所々鞠與被裁切立、日々馳走云々、

八日、壬子、朝雨降、終日不晴、念誦之間永光朝臣來問、又良算法印來謁、依目病隔物、典侍歸京、即參宮之由聞之、歟冬盛開、

九日、癸丑、巳時天晴、未時又微雨、巳時許金吾來、今日參長講堂云々、又院召御鞠、馳參了、左京權來臨、一昨日參御八講、兩殿入御、公卿九條新大中納言、經通、中

將殿、家光、參議資賴、三位頭長清、殿上人隆範、重長、

信實、宗平、御共、實任已下不委聞、昨日北政所春日御

參、令奉具今姬君給、御車寄伊平卿、殿上人四人騎馬、

能忠、定平等歟、不委聞、引替牛依以、臨時祭使三位中將

通忠、舞人兼有、消撰之聞、只兼日之催許也、領狀通氏

朝臣、實直朝臣、實任朝臣、侍從公忠、實忠、公濟、實光弟、

實有卿猶子、資平、子、四位舞一人闕如云々、陪從爲

綱一昨日領狀云々、明日中宮御入內、十日許可御云

云、昏黑春日引替童歸來、自九條口前行云々、

十日、甲寅、雨間降、未後甚雨、午時許金吾來、昨日參長

講堂、右府、權大納言、右大將、盛兼卿、爲家卿、範輔

卿、有親朝臣、辨信盛、事訖參院、名謁以後、四條中納

言、兵部卿同事伴大五行左金吾門、招引歸來無指事、

及深更各分散、舞人實陰朝臣領狀云々、左京權大夫

來、隔物中宮御入內云々、送典侍車之次、黃門歸參承明

門院、不及深更車歸來、

十一日、乙卯、朝陰、晝晴、下人等云、法成寺執行法橋

歷經、自去年有病氣、去月中旬入精進屋、參詣熊野、兩

三日之間病加增、難逐前途由思煩、前達強相勤、將參

之間又落馬、更求與始不扶乘、僅雖參本宮、如目盲不能

奉見、雖全三御山、自是退路、於和泉國一昨日於路頭終命、其齡三

十、爲人愛廼雪之傾城、微力之所及旦暮經營、病根之

源發自過度之由雜人等稱之云々、雖無識非器者、寺務

依相傳、隨分房人等於事知子細歟、縱雖有令申奇計

者、於故實練習之一得者斷絕、彌本寺之荒廢歟、蓬

門之近邊僅居住者、追旬月死去、村里之滅亡尤可恐事

歟、況老及病翁哉、兼直宿禰來、以人謝、中務權大輔

來、隔物言談、八重櫻一條殿、枝繼木、已開、欸冬未落、養閑庭

眼、

十二日、丙辰、朝天猶陰、雨不降、家光、爲家、知家、長

清、有親參云々、民戶又憂雨、妨參秋、云々、今日殿尊勝陀羅尼

供養、今夜行幸室町殿、秉燭以後不經時刻行幸了云

云、右大將、中納言中將殿、四條中納言、左衛門督、實

世卿、有親朝臣、

天福元年 三月一

三百四十

一七四

十三日、丁巳、天猶陰、巳時陽景見、天曙、驚啼後典侍車歸來、金吾夜前腹痛更發、雖扶參自路退出、病臥之由示送、日來不休息之所致歟、

十四日、戊午、天猶陰、陽景間見、夜大風、臨時祭刻限以前大殿初令駕牛車給、御共又被催由示送、今夕又中宮還御冷泉殿之由、午時許有其告、初夜鐘以前行啓成了、車歸來、

十五日、己未、朝天晴、金吾示送、牛車伊平、爲家、資賴卿、扈從先令參院給、次內裏、入北門經五節所東屏戶

敷政門、又令昇御後給、此間御禊已訖、出御々々拜如例云々、庭座殿

下、二獻後令加垣下給、右內兩府、中宮大夫、左金吾、已上勳孟、中納言

中將殿、迎參、挿花之後、隆親、伊平、重坏、瓶、子信光、爲家、重坏、瓶、子實定、基氏、資

宗、顯平、有親、陪從重坏、頭中、使三位中將、馬副六人、雜色八人、柳侍衣

綱結衣、無取物、舞人實隆、四人、通氏、二色六人、單實任、蘇芳單衣、六人、童一

人、實直、新木單、侍衣、紫紫平結、赤色、實春、同平結打物四人、童衣童一人、公齊、四人、童二人、實春、二人、二處打取物四

人、資平、新木單、侍衣、四人、童一人、師成、童口人、兼氏、檢非、遠使、非藏人

重資、朽葉、二人、加陪從家清朝臣、信時朝臣、爲繼朝臣、爲綱

朝臣、光時、教行所勞之間、猶依責終日出仕云々、甚不便事歟、予又念誦之間、申時許心神違亂、有悶絕之氣、一寢之後入夜又起、明月如秋、漸深有陰氣、

十六日、庚申、朝天陰、已後雨降、

十七日、辛酉、天陰、雨間降、賢寂來云、入道字津宮、以義村書

狀來冷泉、其狀云、堀川二位父子不和事、右衛門督京

極中納言可令和平云々、尤迷是非、以其狀先送按察許

了、無返事、入夜以法師爲使被示近事、無傳、於予者三ヶ

月之病已獲麟、世事耳外之由可令返答之由、惡逆者受

末代之生、不祥及外人、甚無由事也、前匠作被過、乍障

子之內謁之、

十八日、壬戌、雨止、雲漸散、午後天晴、金吾依腹痛難治、

申身暇今日始服藥云々、蒜根雖生爲藥由貞幸說云々、

烈風、八重櫻四散、廿一日夏節前日、伴日歸忌日、仍今夜

宿本所、金吾服藥之間在此宅、物語繪月次事評定、闕

月今旦求出之間、及曉鐘不寢、歸廬、天陰月暗、

十九日、癸亥、朝天晴、未時許左京權來談、又依繪事參

大殿之次云々、賀茂社司季保來、以人示所勞由、

廿日、甲子、天晴、下人等說云、長清卿次男依振子之閭

靜、捕近邊地藏堂法師之子、面縛其小童、依爲山僧弟

子、山僧成怒亂入家內、欲取下手人、依其事三位逐電

隱居、家中無人云々、未時許典侍退出沐浴、入夜歸參、

澀州廳宣二枚今日以女房狀給典侍云々、尋常之所女

余所賢寂尋聞註出、雖令申其所皆給人々訖、仍難召返

之由被載伴狀云々、是只被撰最下之故也、二處名號即

是不足言之故歟、但國務右京兆奉行、眼代同奉私家人

云々、若不似行兼之猛惡歟、美作經時卿又行之云々、

日來撰出物語月次、十二月、不入源氏并狹衣、於歌者拔群、

然、源氏當時中宮被新圖、此所撰、夜寢覺、御津濱松、心高

東宮宣旨、左右袖濕、朝倉御河爾開留、取替波也、末葉

露、海人刈藻爾遊、以十物話撰每月五、金吾清書訖、又

加一見、見返之付繁茂進入云々、以取交爲興、又蜻蛉

日記十所許撰出、同送金語許、紫日記、更級日記、中宮大夫

將進之、自承明門院被撰、其所、已書出進入了云々、其外蜻蛉所殘歟、仍之書出云、近

日此畫圖又世間之經營歟、更級墨畫隆信朝臣娘右京

大夫尼、書之、殷富門院號姬宮之人被書詞云々、爲能

書云々、源氏繪詞內府被書、一昨日二三卷書出被送、

手跡尤宜歟、飯室固辭云々、尤可然事也、大殿被仰手

振由不令書給、頻被申宜秋門院、老眼不可叶之由被仰

云々、此繪如聞者、可爲末代之珍歟、典侍往年幼少之

時、令參故齋院之時、所賜之月次繪二卷、年來所持也、今度進

入宮、詞同彼御筆也、垂露殊勝珍重之由、上皇有仰事

云々、伴繪被書十二人之歌、被分、月々、正月、云々、二月、納書、

齊信卿、參梅、三月、天曆、四月、實方、五月、紫式部日記、六

月、藥平朝臣、林、七月、後冷泉、八月、道信朝臣、九月、和泉式部、

風吹告風、十月、馬內侍、十一月、宗良少將、未、十二月、四條大納言、二卷

繪也、表紙、背抄、軸、水繪、來月二日中宮院號云々、末代

事、念此

廿一日、乙丑、霜結、天晴、夜甚寒、已時許清定朝臣來、

近日、在正親、次聞及事、藤中納言家光卿、和泉國春日社

町宮小路邊、修造功固辭、前左府聞及被懇望、仍相傳伯耆、件國可爲新大納言

天福元年 三月

三百四十二

出仕之料由家光卿申不可堪之由上、申請造營、世以成不

審云々、甘棠之奇計較人歟、棄耻貪欲、不顧傍難歟、

是又在世之上計也、以泰乘被補法成寺々務了云々、治山并門跡堂

堂佛聖灯油斷絕不治之聞被充兼康家盛衣食歟、足驚

奇、隔物言談之間、加賀前司泰光朝臣來臨、猶不能謁、

以人謝之、英華之餘流無禮非所存、昨日物語之抄出、

已以進入、事體尤叶御意之由有内々御氣色云々、極以

參以下閣文今日取出撰歌見現存歌等、今年未見、古歌雖極盡、

當時所載猶以非凡俗限、現存雜人交于先達之中、足耻

痛歟、未時許典侍密々送更級日記新圖、即返上、

廿二日、丙寅、天晴、未後陰雨降、但馬前司、三條宮御使持御歌、長

門守、兼友、禪相門御使、持彼草大德、來會、隔物各相謁、同時、但

馬弟法橋又相具、皆是只勸換之作者之加増也、又南京實綠得業使來、見

尙客人由歸去云々、

廿三日、丁卯、夜雨晴、風烈、午後晴、去年十一月之比造

作散々之比、此家橘樹懸生絹小袋、其内有梵字、至愚

之心不驚、蓬屋破散之間、女房方如護物歟之由存之、

可持向女房許之由示含助里、愚者忘却置片角、此十餘

日以之授女房、物體不普通、裏不動繪像、今日奉見與

心房之間、被驚奇、偏是咒咀之梵字詭祕事等、如此事

尤早速可見付事也、已及數月、尤□術之得力歟云々、

即急被送本房、早歸構咒術等可流河水由被示之、此次

聞、大北政所自去月御不例、漸々御増、是世之所稱主

瘦病、彼兩御弟不吉之病只同體、尤可怖事云々、彼御

邊適賢慮仁義之人也、極以不便、予自去冬物惡病惱非

一、今聞□術極以恐思、身非人數、誰人有意趣哉、恐歟

而有餘、入夜又雨降、

廿四日、戊辰、朝雨止、漸晴、入夜左近大夫親賢入來、

和泉國者故殿伺候後、在信清公之家、今在禪相門家、以人問答、

廿五日、己巳、天晴、午時金吾來、昨日、不經程歸、長清卿

云家中、云路頭、有狼藉者、可行其刑罰之由公家被仰

武士了、居住本宅云々、大宮三位書狀之次、飯室入道殿御消息、

日來依治病出京、來月々輪殿追善可交之由雖被仰、重

申暇明曉歸山之由示給、尤可然之由令申了、昨今念誦

猶甚苦休息、

廿六日、庚午、天晴、未時許兵部卿來臨、僅開障子相謁、湯治之後今日初參院、又參北白河院路次云々、齋宮御立后事、依每事不叶、可爲六月、但中宮御院號、四月、御三日、同與依可被念、來月可有御入內事等、且申沙汰云々、老病閑人恩問殊恐悅由謝之、乘燭之程金吾來、大殿來廿九日御春日詣、參尊勝陀羅尼之次承此事、御共可參者、兼承拋萬事可致用意、若人數不可闕歟、給治病之暇可服藥由惟長申入、後朝云、今度九條新大中納言、中將修理大夫、奉行、三人可參、仍不被申由示之、成悅、服藥罷居之間、昨日俄構參哉由被仰、隨分行班威儀雖非晴、爭構出哉、眼直方服豆之後病等發勿論由申了、家光俄參云々、彼兩卿各不諧如例、更被申隙歟、顧貧乏無恩勵出仕者、故棄置任官分憂兩方馳走之輩、無出門隨事之心、遠路卒爾之催可謂奇特哉、此御物詣何故哉、家長朝臣云、巷說爲御出家之由稱之云々、世上事終之人自他御好歟、來月五日又攝政殿御拜賀扈從被催云々、吉

事扈從每日事歟、推之內舍人隨身歟、定又無內舍人器歟、侍小男隨誕生皆爲左衛尉、何物當其仁哉、不及深更歸了、

廿七日、辛未、天晴、未刻大宮三位被過直衣參院之次、之次、聞

月輪殿御忌日一品經事、有延引之聞、中宮御院號、

三日、攝政殿御拜賀、五日、大嘗會國郡卜定、六日、如此

之間、恒例八講之外善事等可爲後日歟云々、月輪殿念御御事、入道殿御道善事並大殿

御事、入道殿御道善事並大殿夕雷鳴一兩聲雨瀝、

廿八日、壬申、天晴、牡丹盛開、早旦金吾、夜前資雅卿、

隆乘法印來、吉田今朝歸云々、賀茂重實、重政子、迎蓮房、

僧圓家大夫房圓盛能書僧子、來、皆以人令答所勞由、

廿九日、癸酉、朝天陰、已後大風甚雨、早旦吉水御使住

學生僧來、又是歌仙云々、以人間答、巳時許金吾來、女房與禪

尼等參賀茂歸之間也、侍從勤七瀬御被使云々、大殿令

參春日給云々、夜前九條殿風雨定爲人煩歟、申時以後風彌

猛烈、入夜之後舍屋悉動搖、其響如雷、雨脚又甚、怖畏

天福元年 四月

三百四十四

尤切、築垣假葺皆吹散云々、

卅日、甲戌、自曉風聊休、天猶陰、門內八重白梅自根折

伏云々、其根朽云々、日來不知之、所馮之花樹也、瑠璃之脆之故歟、惜

而有餘、櫻桃梅梨所結之子、乍青落敷、法成寺之內北

御堂金堂之北、顛倒云々、寺務頓死、堂宇顛仆、滅亡可奇恐、

昨夜群盜幕所之內入、殿下御厩舍人宅逃隱、於隣屋之

間放火、御馬一疋私馬一疋燒死云々、行寬法印來談、

開闢仁和寺宮來十四日自高野令歸洛給云々、未後又雨

降、風猶雖烈不似昨日、典侍臨昏黑參一條殿、夜深歸

參云々、風雨之景氣無春盡之色、損枝綠樹之中牡丹獨

盛開、

○四月大

一日、乙亥、天陰、風猶不止、夕後雨間降、午時許金吾

來、世事不聞及、一昨日社頭之儀、路次供奉進退失度

云々、資季朝臣一人揚鞭先馳歸之由夜前告送云々、直

物又延引、靜俊書狀云、無動寺惡徒又寄南谷切房三

字、即時南谷衆又寄無動寺、數刻合戰、承疵者廿餘人、死者
兩三人、無動寺六人

佛法破滅之期歟、

二日、丙子、朝天陰、青天間見、

三日、丁丑、天快晴、去夜群盜入能季卿家、家主南京物

詣之間破隣垣入云々、今夜中宮院號定云々、後聞、一

上、兩大夫、定高、具實、伊平卿、相公三人參云々、

四日、戊寅、天晴、院號藻壁門云々、殊以存外、故入道殿

下有被仰旨、今被用之、驚而可驚、未時許金吾左京侍

從相具來、又小僧禪胤來、自關東歸洛云々、持來
武士歌稱厚緣由歟、左大將去

廿九日辭退給、經光書
辭狀、兵仗并一位事自上頻被仰、固辭

云々、被仰旨無
例事歟、

五日、己卯、天晴、小時等於
御前承仰、未時消定朝臣來、扶病面謁、

所語事、大將事去月廿日比禪閣奉請前殿給、歸洛給之

後無音、廿四日俄有辭狀之沙汰、廿九日被奉了、自上

兩事頻被仰、近代八省輔辭退、加階之例見苦之由有御

痛、兵仗又及五度辭退給云々、平座初出仕給云々、大

納言殿懇切被申、廿八日御物詣念忙由無御返事、今月

重被申御返事云、於社頭取孔子賦、五度黃門告之由被

仰、相將之任爲孔子賦者、向後輕々不便之由重雖被中、遂以不許、於今者以同門總刺辭退云々、但不可剗除之由有御命云々、不知其由事歟、來七日任大將一定云々、廿九日柱下公良參吉水、入夜歸家、所從四十人許、路頭動搖大風最中、途中雜人稱車強盜叫喚、勇幹之輩放矢、大風之最中不能披陳、流失中車、所從蒙疵、不慮不祥云々、入夜宿賢寂宅、夜半許名謁了、金吾來之次云、宮小路納言雜談之次、老臣本座事宜下之由被告云々、極以存外、

六日、庚辰、朝天晴、遲明乾方有火、歸蓬戶、聞一條北、大宮四、夜前事依不審以書狀尋黃門、返事云、於無御所望者偏僻案歟、頭辨口宣如此、

貞永二年三月卅日 宣旨

前權中納言藤原朝臣定

宣令列本座

藏人頭右大辨藤原朝臣親俊奉

定高卿參仗議、爲舉藻壁也、不及不審、但貫首可書高

字歟、不知故實、二位宰相書狀云、俄可勸直物下名、加任國司書違國次第事、在勘文可書入歟、可切繼歟、有所見乎云々、此事全不聞其說、但於愚案者切續之條有何難哉、尤可被尋先例、外記存知分明歟由答之、

七日、辛巳、朝天陰、已後雨降、雜人云、昨日午時許奏乘御堂拜堂、有長父子已下俗形群集、又相具武士云々、今夜御方違御幸、右大將御車寄不騎馬云々、

八日、壬午、天快晴、午時許金吾來、參殿、只今令參院給云々、直物延引、今日有臨時除目、十五日改元云々、公長今日傳奏、布衣、一領、重生單衣、其下着帷、着生薄色指貫云々、如此者非一身之勝事、不被御覽咎如何、今度於春日令取孔子賦給、中將雖存理運之由、若背神慮者、只一向可致信心、大納言基歟申、可被任歟、實親卿又失生涯之計當時參籠社頭云々、被書此三人之處、三度每度被取羽林之由內府被語云々、雖似任官之輕、被祈請申之趣、實可謂無表裏哉、但此事尤理運之令然事也、競望不可然歟、寬仁之例已符合、何有人愁

天福元年 四月

三百四十五

天福元年 四月

三百四十六

哉、未時許蛭飼、頃下、年來頻好之、去々年以後二年付金蓮說、豈面熱與盛難堪、示合貞幸朝臣相待程出來之間、今日々次宜云々、但依彼說三十飼之、

九日、癸未、凶天晴、未時許大宮三位被來向、參大殿退出、示合撰

歌之雜事等、大祀歌未被仰云々、先是見聞書、參議基

保、無兼官、不知其闕、後聞有兼官云々、左近大將良實、兼、治部權少輔平高

兼、河內藤基綱、具實卿給、水人被收公缺、和泉藤顯方、府、前左、甲斐平康

友、備中平時高、右府、御分、伯耆藤業茂、阿波橘以良、左大將、殿名替、

周防源教行、東大寺、國名替、右中將公基、祭使、得分、雜任充滿紙三

枚、四位信盛、飛驒推給經通卿、替不舉任人云々、件國

當時不中用如信濃云々、寂身入道來、依窮屈不逢、今

朝又長政朝臣來、日來悲說、宣經讓職ヲ貫首云々、昨

日定高、中覽參議、之由歟、故成卿參院云々、少將教房去年祭使申

明年可勤由、今年對捍、重被催勤者、可任中將由申、依

超數輩不許、猶被責申可辭官由、次第奇怪之由有沙汰

之由、日來聞之、本自輕朝威之人也、萬事只稱聖靈之

苦、又與定高會飲而存世間任意由、昨日流涕云々、定

又被重其淚歟、宣經又不用常命、只以定高申讓事、殿邊已快然、今不被任、若無勅許歟、相門父子被舉實持夕郎、殿許又快然、天氣不許之故、不被任參議歟、尤可然事也、

十日、甲申、天晴、申時許暫雨降、未時許又蛭飼、

十一日、乙酉、朝天快晴、中務來談、內舍人隨身之間有

請印事參內云々、今夕殿下隨身御拜賀云々、申始許兼

朝爲禪門御使來、且令見目腫、奇間事等申子細、又歸

來、有子細等、光定權守、有事故賜假今夕他行了、於今

非人之身、勿論雖聊事無可顧之力、自去年密々處不善

者之輩、喧々無指證據、爲人不便事雖不聞入、咒咀厭

行等事又有所疑等、雖不知真偽向後無益、不能惜留、

十二日、丙戌、自曉雨降、辰後如沃、未後間晴、酉時許金

吾來、參殿云々、夜前內舍人隨身、檢非違使康清子左

兵衛盛季孫被召云々、公卿伊平、實有、家光、經高、爲

家、有親、時方通作、痔又發不出仕、殿上人騎馬入、宗平、有

教、資季、實持、親季、光俊、忠高、經光、院申繼爲經奉

行、女院申繼光俊、院號之時定用之外、隆盛光俊加院司云々、明後日女院殿上始、姬宮渡御指合、御月忌無人由親高示送、所勞四箇月籠居、不能出仕由申了、十五日改元云々、

十三日、丁亥、天晴、午時許長政朝臣傳內府命之內、密語云、老臣本座事、不申大殿、付盛兼卿奏聞無謂之由有御咎之氣云々、答申云、依病者之身、不及申出々仕事之間、盛兼卿本座宣下了由示金吾、金吾語此由、依不審宣下之狀有實歟、向職事奉行哉、將傍輩同被仰歟、依不審尋申由示送、返事云、口宣狀如此、愚意無疑存知申其由、今案之、定高卿事歟云々、此間答何付彼卿所望之疑可在哉、宣下之由依告問子細許也、一々存外、又是可謂不運之令然、未時許兵部卿狂駕、言談之次、物惡至極之故及此沙汰之由語之、比與事歟、夜深典侍退出、予付寢之後也、

十四日、戊子、天晴、典侍自今日於賢寂宅始適賜、懽懽不便之故也、日吉忠成持來歌、其歌雖無狂氣、仍加

感言、傳聞、今夜姬宮渡御安嘉門院、十七日前齋宮御入內、明日改元云々、

十五日、己丑、陽景晴陰、午後天晴、念誦窮屈、夜月朗明、付寢不見之、

十六日、庚寅、朝陽陰、傳聞、年號、天福、式部太輔所撰後晉高祖七年々號也其辭不幾而絕、申云々、福字始唐昭宗景福歟、朱全忠陷諸州、其音似

周代天復、討亂復位年號也、訓讀似周代天祐歟、四日

全忠遷唐都于洛陽、全忠來朝享大廟改元之號也、八月

兵犯宮門、以昭宗年號立爲代始之年號、朝議之趣不觸

耳、所被用如何、只如向暗夜、漢武帝建元以來一千三百一十一年、魏吳蜀南朝北朝雖並、不用福字

者可、金吾適示送事極不委、一昨日、十四日、殿上始、公卿大

納言通方、中納言伊平、隆親、實有、家光、參議經高、資

賴、一獻隆盛朝臣、二獻修理、瓶子爲氏、三獻實有卿、

瓶子經光、殿上人十一人、實持、通氏、中將殿、定雅朝

臣、爲經、親氏、親季、忠高、經光、爲氏、博輔、追加院司

家光卿、忠高、今夜二品被渡新造近衛富小路家云々、

姬宮渡御安嘉門院、騎馬實有、爲家、有親、新大納言

天福元年 四月

三百四十八

一八二

高、參會、隆親、爲家取御贈物御本琵琶、俄被補院司、去十一日被任馬助、源盛朝

盛親一門、公雅卿後兄

衛門兵衛尉任、

不見聞書云々、明日參宮御入內、

公卿毛忠風從

十九日女院

御幸始、爲氏供奉云々、永光朝臣來次云、雖入北面人

數有存分遲參、此間初參、明日齋宮前駐即被催、仍可

供奉云々、申時永光朝臣又來、今朝言談事達申由也、

相逢之間、金吾來、世事無聞及事、小五月御幸可然之

由有云々、雖云々、無神社御幸以前新日吉如何、又御忌

日惣可憐歟云々、御忌月事被問人々、但先是奉行兩

將、左資季、右家定、就馬事大略催具云々、件日御幸

有御點、大納言通方卿、中納言具實、隆親、盛兼、參議

爲家、基氏、資賴、大臣二人、大將參會云々、舊例大臣

大將皆參御幸、此御時無此事、爲道騎馬各被稱出車

歟、甚無其間、

十七日、辛卯、書札之次、右中辨示送、去夜國郡卜定、

近坂國、丹水上、一上參陣給、公卿家良、通方、檢校、隆親、伊平、

檢、經高、實世、伴卿右筆遲參、內覽御物忌、忠高徘徊

門外、徒聞鷄鳴分散、改元夜同名謁、終以參陣不聞其

詞、福字漢土不快、我朝未聞第一聞惡之由、一同被申、

天復無其沙汰云々、上卿福宜歟、一同可定申、此上勿論云々、大

應、仰號、嘉惠、或佛名、又菓子、前藤右大辨喧嘩忘仗座禮云々、

兩人同心安土亞相罵合、永光朝臣又來傳命、事體其舉四五十首雖書

載、無飽滿之宿意歟、如諸國之田園佛寺神社之領不可

痛、不可惜、帝之曾祖、博陸之舅、母后之祖、堯母門之

甥、將軍之祖、過于魏武晉宣周隋之草創、任意獨步誰

人論是非哉、況又一人不辨物由、只從漁父之誨而已、

夕淨照房來、將來女子、賀茂綱平妻□□□養之最愛(關文アリ)、宜秋門按察房

吹舉、令參一位殿、一日來借毛車、公卿車無前駐事、雖

不相應、只隨尋出借車、令持榻、助里房任在共、今夜始

令着濃袴、老翁結腰、不經程歸來、即乘社司車歸了、授

手本一枚、如註此間雨降又止、雲不定、

改元定、一上、定通、定高、賴資、家光、經高、範輔、有

親、

十八日、壬辰、朝天晴、風烈、金吾注送、左大將殿夜前御出

立所、伊平、家光、經高、爲家卿、前駐十六人、四位二人、六位二人、

殿上人五人、車、定平、家定、少將、賴行、能定、宗教、番

長弘澄、御出立遲々參了、參宮源大納言、雅、右大將、大

宮中納言、實有、富小路、盛兼、爲家、別當、實世、有親、隆

親卿領狀不參、殿上人宗平、實隆、實行、已下十四人

歟、親氏、顯氏付御車、御後官人繁茂、於車三兩、出力殿上人車、

左京極來談、兆力兵衛佐高賴問、小五月念人事、

十九日、癸巳、天晴、及日入之程行賢寂宅、入道痔發危

急、不出臥內平臥、妻母助里又病臥云々、大略難存命

歟、典侍二人、金吾、侍從、弟實、其此禪尼皆集會此謁

廬云々、存外及乘燭、事以上雖咫尺無加催者、兼高經

服其後不二丈昨日光國奉行之故無音云々、及乘燭侍從先

令裝束、平緒實基卿次金吾裝束了、乘出車參了、即又侍

從令參、贈來於此予先出、依路頭怖畏念出、路當小路大炊

云、立高倉西之間、不久而大殿密儀、女房令立高倉東給、

後車漸集、先是右大將殿自此大路被過了、左大將殿洞院南

行給、一條殿令出、依御車近立洞院之西之間、大僧正御

車、本在島丸四、又不久而殿上人進行、暗夜全不見其面、

小男有二人、不分別、著其次爲氏、童赤色袴衣、乘駿馬、案御

云、其後四五人雖過不知、次具隨身之輩多過了、平宰

相、有親、宰相中將實世、別當、無有金吾、中納言盛兼、實

有、隆親、此間殿下御車立洞院辻給、次左大將殿、次大

夫、大納言、次右大將、御車之前院司取松明過、殿御車

前皆棄松明、大進光國、顯朝、已上歟、不見分、維長、放光、忠高、

親季、隆盛、中將又多、惣不見分、顯定朝臣有之歟、次

御車、御後修理大夫、五位尉繁茂、出車十兩、車副之體、皆如此者、

前駐二人、束帶、次歸入、殿上人渡之間月出山、天晴風

靜、一寢以後前駐有弘等有歸入之音、已鷄鳴云々、即

乘車歸廬、兼開、殿上人有數々、實隆、親俊、實持、隆

盛、通氏、實仙、親氏、實清、、親季、、光俊、、

兼高、知宗、忠高、忠俊、經光、惟長、爲氏、博輔、顯朝、

光國、昨日追加殿上人此外、資季、通成、能定等十二

人、交名自殿隨仰可被加之由被奏院云々、

廿日、甲午、朝天快晴、夜前勸賞、正二位伊平、從四位上

天福元年 四月

三百五十

親季、超親保、通行、實直、甚長、教房、正五位下順朝、午時許與心房被來座、聞賢寂病被到坊、少輔入道來談、

廿一日、乙未、天晴、未斜三郎入道眞昭來、其身得歌骨、言談之詞甚以優也、自然移漏、乘燭以後歸、就相示之趣、得其心之體、不似相馴人、尤有問答詮、

廿二日、丙申、自朝天晴陰、申後微雨、夜景漸滂沱、昨今上下社司送葵之輩多、保孝、每年、重寶今年、彌平、二日女子之故、光榮、

廿三日、丁酉、終夜今朝甚雨、雲奔西北、及未時雨脚休、見物定入興歎、傳聞、使出立土御門堀川、前殿立去給跡也、他事

不聞及、申終之後細雨又降、此間檢非違使已渡了、過富小路各乘車分散云々、酉時許又甚雨、先是使渡晴了、透車歸了、乘例車諸大夫四人束帶、侍少々相具過此邊了、未參着社頭之程、甚雨降云々、

廿四日、戊戌朝陽晴、念誦如例、金吾音信、廿日於馬場殿內々被結競馬、終日伺候最中、依康房誂着下袴參禪亭、相具住吉大童參吉水御行法、數刻及日沒退出、依非受戒之期不送出家云々、右中辨輕服、大嘗會不奉

行、萬事違亂歟、祭御見物、攝政殿綱代御車、上皇御同車、被上前後簾、牛童殿、遣御車、殿御隨身久員、兼世、

下北面五人、久政、久重、季兼、行親、宜季、次殿上人車二兩、實季、親氏季、賴房從、檢非違使十人、永親、章久、光村、茂村次男、三人五位、康

仲、俊親、行範、親直、章秀、已上、大志季氏、府生國生、禪相御棧敷、內府、公雅、尊實、公審、實時、入道實清、實雄、別當爲家、出立所、實有、爲家、

基氏卿、殿上人實蔭、實持、初獻、賴氏、穩座瓶子近代四位久絕事歟、實春、二獻、繼兼廉、武延、廿一日參禪亭、終

日醉鄉、廿二日依無人終日伺候、依無假不來由也、廿五日、己亥、天晴、入夜雨降、念誦之間兼直宿禰來談、

本性聰敏、依知音多聞世事歟、雜談之中、院號定間事等之語也、藻壁門定高具實等同心、內々開破定那歟、左大辨殊難

之、壁字玉土兩作、事未切之由、大辨一上存給、具實爲玉字由出詞、一上所見何說字由問給之時閉口云々、時

輩聞此事、法性寺殿御存知嫡家存給之由近日反唇歟、宜秋門院々號之比、兼口事也、予候御前之時、其時故殿令候殿中給、予八條左大臣

殿候、仰云、藻壁門不可用門也、先壁壁之作未分別之

由、故殿法性寺殿御事也、被仰賴不書其作給、其上藻字不吉也、

門號日盡了歟、於此門者不可用、承明雖內門當紫宸殿南庭、可爲母后之名、是又無心也、宜秋門尤宜歟由被仰、言猶在耳、今世人依被用之、入道殿不知食由存歟、尤可恥事也、於口傳故實者、依鴻倫不可知、被弃古老、誰人申出哉、國平宿禰又相具老童來相逢、十月以前不可削頭云々、大童子白髮極缺昔事歟、今日新日吉御馬馳、奉行將左資季朝臣、右家定朝臣、前修理親忠朝臣、依鼓昇殿云々、

廿六日、庚子、朝雨間降、已時止、天不晴、雨猶降、午時許覺法印病發初來臨、言談之間、金吾來、小時法印歸後、日向守親繼來、金吾對面、去夜兵部卿家二條、群盜入、任意取物云々、誰人遁此歟乎、悲而有餘、近日一條橋破壞、少將一人落車其身打損云々、不知誰人、新日吉競馬乘尻左武澄、兼利、二人、久員、殿、廣澄、大將、武眞、武茂、武任、久武、武利、渡名、右武信、久則、院、賴種、殿、廣直、國文、下野兼武、種武子

廿七日、辛丑、自昨雨、或降或止、去夜治部卿家人坊城邊富有下郎宅二箇所亂入、富家雖討留二人、即時終命云々、訪兵部返事云、方違他行之間亂入散々云々、

廿八日、壬寅、天晴、已時許少輔入道來談、祭見物事等、府生檢非違使不拔梓不懸肩令持、不聞事歟、兩日梓拔之令持鞘指、說依人相替、兩日使令持取物と云は雨衣、鷹等也、於笠者猶有之、雜色長一人取其笠下持深沓、祕說云々、未時許大宮三位被過談、及晚鐘、此間典侍禪尼等渡此宅、明夕又依頻仰可參云々、

廿九日、癸卯、欠日、天晴、三位入道能季卿、被來向、少將不申轉任、有遷任藏部之志、如何之由被示合、殊叶愚意之由答之、末代之羽林只爲家超越之官歟、自他無益之故也、相次但馬前司雜談、及申終、典侍今夕可參之由頻隨責、久籠居、日次有憚由加詞止之、

卅日、甲辰、辰後雨降、午後如沃、未明典侍參了云々、未出臥內、不知之、昨日典侍語云、女房、參宜秋門院之次仰云、藻壁門可忌憚之由往年聞之、今世二八門毛善久

天福元年 五月

三百五十二

成事歟、ト被仰云々、賢貞之御本性不令忘庭訓御、極忝事歟、何不被申合哉、件門院號以前兩三日之間忽顛倒、當時有憚之由範輔卿申之云々、沐浴偃臥之間大雨、荒屋漏濕、未斜雨脚休、及日入漢雲忽晴、

○五月小

一日、乙巳、朝陽漸晴、金吾書狀、昨日大雨、兩殿日野御御同車

共濕損、微牛馳損云々、大將殿已下令騎馬給、御馬仆立、不令濕給、

二日、丙午天晴、金吾來、昨日參法性寺、世講、今日適無

指事、小五月御幸曙後早速之山有沙汰、安樂光院御入

講十二日、如例布衣御幸云々、

三日、丁未、朝天薄陰、陽景間晴、申時微雨、入夜、頭沃

菊湯、金吾來賜大殿御歌集、籠居以後絕不蒙仰、今有此恩賜、金連來、令見小婢衰損、如灸點五箇所灸了、

四日、戊申、自昨甚雨、終日如沃、秉燭以前爲方遠行冷

泉、近日賢寂宅連夜群盜窺來、乘車馬襲來由稱之云々、

依怖畏不宿、亥終許金吾自御所退出、名賜、四條富大貳

四人候御前、自然及深更云々、夜半許付寢之後南方有

火云々、不知遲明凌甚雨歸廬、

五日、己酉、朝雨猶如沃、巳時陽景晴、去夜陣口坊門南、

新宰相有親家群盜入、宿直者打合追反云々、帝闕之陣

口猶以如此、急難何爲哉、今朝鴨水一條、盜人不渡云々、

及巳時簷溜雖猶落、陽景間出雲、巳時下人等云、夜火

鹽小路高倉群盜襲來、打合不入之故又放火、定手午後

又甚雨、及日沒有隙、左近真手結依雨延引云々、終夜

猶聞溜聲、

六日、庚戌、陽景雖見雨脚猶不止、傳聞、嵯峨禪尼嫡女

具定、密難產終命云々、或云、此事及度々、菩提院、其年四十、

本性未代之賢者之一分、自嚴父存生之時、有產業之奇

計云々、連枝輕服之由云々、若謬說歟、又祕藏歟、未時

許兵部卿被過談、夜前密令被召例和歌云々、五月五日

歌五首兩納之、隆盛、金吾、大貳、兵部卿、親氏朝臣、繁

茂云々、近日又焚惑犯三星、無先例之變之由云々、凡

東方并朝家事、巷說衆口噉々、七月可有大事之由自月

來謳歌、不限連夜之盜賊、急難非一、長命之貧者何存

哉立后六月一定云々、申終院參云々、入夜兵衛佐來臨、病者依暗夜之煩不能調、

七日、辛亥、陽景間見、漢雲充滿、未時許金吾來、參殿、俄爲御院參被召車之間、爲乘替所來也、御幸女院出車本二兩依可爲三兩、被召爲氏車、夜前右中辨仰之前御時修明門院出車每度勤仕、今世被處卑賤無此催、今二兩人數者可謂者可謂面目歟、牛童卒爾異樣云々、仍藥師院丸賜裝束可出立由示之了、土御門源大納言通、七箇日輕服、檢校障之由觸職事、左金吾不披露輕服由云々、夕又甚雨、漏濕難堪、去夜冷泉門前又有奇物、夜中過程東過行之間、爲伺見青侍二人登車宿之間、二人共見奇物、有火光、非松明之體、物體大脂燭之姿歟、其色頗青、萬手小路南行、冷泉向西、其長過人事三四尺許、面如鞠大顏、法師之姿、捧脂燭有眷屬、長不小路辻夜行屋ヲ昇天、屈從之由見之間、於左大將殿南平門程云、如人下へ可行歟二音、言了忽失了、非幾行步之程、二條面有火光、同法師高倉ヲ西へ過、眷屬猶在不昇屋、雅相公之跡柳櫻梢ニ透天、大頭猶見天西

融了、二人共見之、更不得心云々、冥顯之怖每聞動肝、末代猶有物歟、

八日、壬子、朝陽晴、以助里嵯峨承不審事、又非儲說、驚申之由示送三位侍從許、返事云、來承及、只今可遣尋云々、聞此事若祕歟、如聞者火葬訖後、不知之由返事、非普通事歟、年來聞心操尋常之由、若傳家風歟、念誦日暮、

九日、癸丑、天晴、日出之程行冷泉、令任御所奉行、右中辨之外無人云々、辰時許女房侍從小童等行棧敷、外祖棧敷也、在馬場北云々、及已一點金吾參了、乘出車、牛童、舩木淺黃帷、裝束白綾單、狩衣、水文紺村濃よりく、濃香帷、淺黃練指貫、立烏帽子、舍人薄青白裏、馬七里、出六角東洞院立車、見物車不幾、此間人々多參歟、御幸御路、宮小路南、三條西、洞院南、六條東、不經時刻前陣進來、人數如兼聞歟、有六位一人、壯年之輩多、着色々生衣、頗稱老之輩着單衣許歟、奉行辨香帷織襖、少將公光浮線綾白狩衣、匠作以上大略直衣、四條納言一人布衣、香織襖、平禮、御隨身上臈二人

天福元年 五月

三百五十四

御同車、御車後不發出移馬四疋、檢非違使、布衣、下臈御

隨身騎馬、次北面、出車顯親朝臣、通成朝臣、同大顯、爲二兩也

氏、女房衣不重物、具非捻重、普通平重、甚懦弱、其綾皆

有筋文、或如格子二筋、或如鞭摺、皆是今樣物歟、今日

近習上臈御匣殿已下皆乘之云々、非式法之由歟、各有

布衣前驅、無半物車、見了歸廬、猶已刻也、終日僵臥、

競馬經時刻還御、秉燭以後寄御車云々、他事不聞及、

十日、甲寅、自夜微雨降、已時又甚雨、金吾送折紙一枚、

一番、武延道、持、武延先參、人、實持、隆盛、武澄祿二、隆範、

宗平、

二番、賴種道、持、賴種先參、隆嗣口祿二人、兼利賴行朝

臣口祿二、中將、家定、親氏、

三番、久則勝、勝、久則師子、伊成、實清、

四番、弘直、國文、乍勝不宜、祿一、宗口、

五番、武直道、持、弘員先參、祿二、光實、

武直、祿二、知宗、顯氏朝臣、

六番、兼安祿一、基平、

先是下人說云、七番依經程被迫入云々、今日供奉御幸

由示送、安樂光院御、八講事歟、雨殊甚、酉時許如沃、終夜不止、

十一日、乙卯、雨猶降、昨日未時甚雨、御幸、右大將御車

寄、束帶、具實、隆親、盛兼、爲家、有資、隆盛、公光、實任、

束帶、實清、博輔供奉、御入講、土御門大納言有親朝臣之

外無人、隆親卿、束帶、仍爲家俄束帶、具實卿又同、始朝

座、待人參、別當參、行香不足、辨信盛立、夕座始之間、

經通卿帶劍笏着座、又立徹之還着、此間又改着裝束、

供奉還御之由金吾示送、此御入講今年不始事也、年來

不參歟、本性散々人歟、此事猶過分、

十二日、丙辰、朝天晴、夜月適明、早旦長政朝臣來、傳內

府御消息、被送、歌也、暫面謁之後、及午時食事、近日不食之

氣殊不快、今日服薤、成茂宿禰又來談、

十三日、丁巳、天晴、

已時占之、

依神事違例、不淨不信所致之歟、公家可慎御々藥事

歟、

維範朝臣 忠尙朝臣

定昌朝臣 季尙朝臣

業經朝臣 兼宜朝臣

有盛朝臣 忠 俊

神祇官

卜怪異事

石清水八幡宮所司等言上、去十二日注文備、去七日巳時、高良社御正體鏡鳴動、今日卯時同社御正體鏡二面重鳴動光耀事者、是依何咎祟所致哉、

推之依神事違例、穢氣不信所致之候、可有公家御^{上カ}□^{慎カ}及天下并怪所口舌驚恐事歟、

卯時占之、依神事穢氣不信所致之歟、從震巽方奏口舌兵革事歟、

天福元年五月廿一日宮主大膳亮從五位下卜部宿禰兼躬

從五位上行權少副大中臣朝臣知業
從四位下行權少副卜部宿禰兼健^{細カ}
從四位下行權少副卜部宿禰兼氏

上卿土御門大納言定 正四位下行權少副卜部宿禰兼直 藏人宮內大輔兼高

本日ノ配事ハ二十三日ノ配事ノ換入ナルベキモ、多少異同アルヲ以テ、原本ニ從ツテ姑ク此日ニ收メタリ、

十四日、戊午、天晴、大宮三位書狀云、去五日御一家一品經供養、^{月輪}導師、聖覺、自其日四箇日入講、山法印、

^{前左}大藏法印、南、尊勝院法眼、^{八條}勸修寺法眼、^左證義吉水、^{自七日體物不參給、但別事不御座、}此間天變重疊云々、八幡高良

御正體去七日巳時鳴、一昨日又鳴動、永曆中御前鳴動、其前後無此事、又春日若宮巫女御詔宣、來七月有

怖云々、申時許金吾來、束帶、參安樂光院結願、土御門、定通、四條中納言、^{家光}藤中納言、^{早出}二位公賴、別當

大貳、^{大臣二人}治部新宰相、有親、行香僅滿、小五月事少々聞之、西座、兩土御門、左大將殿、資賴卿、東、右大將、左衛

門、四條富、左衛門、殿上人鼓、隆範兄弟、知宗、宗明、親高、平禮、壯年多着生衣云々、^{又時鐘歟、行事將實、}夜月清

明、

天福元年 五月

三百五十六

一九〇

十五日、己未、辰時地氣朝天快晴、雖服薤沐浴念佛、左京來談、夜月晴明、

十六日、庚申、雲不逼而微雨間降、夜又同、前宮內卿書狀、病適有隙、此間有面謁之志之由也、所勞猶無術、只以書狀可承由示之、又有內府御消息、

十七日、辛酉、天陰、雨間降、如昨、深更甚雨、經乘阿闍梨

仁和寺僧、八年以來、來臨、扶病面謁、是又依勅撰懇望也、竹隱居跡尾寺云々

園五十首作者也、不可點之由示含了、圓經法印送其身並二親歌、雖非優美各又不可弃也、何爲哉、

十八日、壬戌、朝雨濛々、未時陽景見、夜月明、或人云、

自四月廿八日至于五月三日日吉社頭蝶雨降云々、治承七宮治山、山上滅亡之時有此事歟、每聞動肝、又聞、

金吾緣者妻母、於天王寺爲入道前攝政妻之由、態告送

女子並本夫許云々、自稱之條言語道斷事歟、禪門六十二、女四

七十

十九日、癸亥、朝天陰、已後天晴、乘燭以前行賢寂宅宿、山月照衫、有弘被聽內北面、主統光華逐日照耀、出仕

之計次第衰弊、無其方術、賢寂蚊出語之、小五月供奉經營失計略最中、單重十領無送川途令機、遲沙汰怨鬱勘發、女子周章經營送之、爲備威儀也、末世之儀雖勝事多、猶未曾有事歟、侍所居纓儲衣裝日夜營之云々、

廿日、甲子、鷄鳴之間、月無片雲、歸廬、已時漸陰、金吾來、禪門方達之間腹痛發給云々、午始許法印覺、來談、未始許歸後、不經程右中辨又被過問、清談自然移漏、入夜歸、普賢寺殿發心地此七八日每日發給、危急云云、天下古老彌無其人歟、客人面謁、窮屈失度、

殿脫力

廿一日、乙丑、天晴陰、牛童九云、普賢寺昨夕事切給了云々、前殿當時若御座近衛殿歟、車馬競立云々、中將入道音信之次云、禪門一昨日例方達、河陽、腹痛被發事外被煩、自歸路直被渡西園寺了云々、聞驚者也、近日世間凡無安穩之計歟、爲之如何、金吾返事云、禪門如日來被坐今出川北亭、腹痛落居給歟、今日參季御讀經結願云々、後聞初日也、乘燭之程給攝政殿御書、被副折紙一紙、無指事之間、久不申案內、何事侍乎、抑大嘗會歌人

誰人當其仁乎、可令計給、儒者二人、例白川堀川鳥羽頗以吉歟、又一人可爲四位歟、公卿二人例先例不分明、一度例不快之由覺悟如何、委細可注給之狀如件、

五月廿一日

御判

折紙

大嘗會繪所風俗所預和歌人例、

白河院

繪所

悠紀、左中辨文章博士實政、主基、右中辨文章博士正家、

風俗所

悠紀、民部大輔政長、主基、散位源兼俊、

和歌所

左中辨實政、美作守國房、

堀川院

繪所

若狹守正家、右少辨文章博士敦宗、

風俗所

刑部卿源行家、左京權大夫源俊賴、

和歌所

左大辨式部大輔國房、前阿波守行家、

鳥羽院

繪所

式部大輔正家、文章博士菅在瓦、

風俗所

木工頭俊賴、右京權大夫家俊、

和歌所

太宰權帥國房、式部大輔正家、

高倉院

繪所

內藏權頭長光、文章博士成光、

風俗所

刑部卿重家、左近權少將定能、

和歌所

式部大輔永範卿、散位清輔、

跪請

大嘗會和歌作者事、

右所被副下候之例炳焉候歟、於被用此例、使者三度之例儒者二人候、尤可然候之處、往古例或如取輔等、不限二人詠進、又輔親卿詠候之外、吉不吉之例大略儒者二人候歟、即是儒者堪詠歌之人多候之故、且被用堪能候歟、顯輔卿耽道懇望詠進以後、非成業連々勤仕候、儒者連卅一字者次第陵遲、於今世者一門兩卿之外大略無其仁候歟、因茲每度被用彼家候、公卿昇進極難遂候之時、一人猶希候、況二人勿論候歟、當時奉公出仕之人、皆叙上階之時、被求其外候

天福元年 五月

三百五十七

天福元年 五月

三百五十八

者、少年嬰兒歟、如此斟酌候者、又隨時儀二人無其難候歟、於見任者愚眼見及其歌候事、未及十首之間、暗難辨堪否候、被撰和歌堪能候者、前納言、知家卿、尤當其仁候歟、被用儒者二人候者、一門兩卿之外無其人候歟、非儒相交吉例、仁安三年、貞應元年、又以神妙候、若被嫌公卿二人候者、非參議四位已下誰人可候乎、大祀所作者辨存歌趣之人、爲事爲道尤可爲公用候歟、被懸存知、如此候、以此趣可令洩披露給候、定家誠惶誠恐謹言、

五月廿一日

今可及此沙汰者、去年諸御產以前予伺御氣色之時、知家卿可然之由仰、至于昨今無相違萬事反掌、不足言事歟、

廿二日、丙寅、朝天陰、巳時晴、夜前事密々告送三品許、返事又如予案、變々尤可驚事歟、自夜前巷說云、禪閣事未切給、有蘇生之聞、午時許已以定說云々、今日又披露、關東遠江守被誅云々、不拘制止京上、於途中被

害、在京之時惡事犯亂非例人之故乎、爲氣色、又虛言歟云兼直宿禰送出之次、八幡宮怪異事、昨日被行御占、仍注申之、

神祇官

卜怪異事

問、石清水八幡宮所司等言上、去十二日注文、去七日巳時高良御正體鳴動、今日卯時同社御正體鏡二面重鳴動光耀事者、是依何咎祟所致哉、

推之依神事違例、穢氣不信所致之上、可有公家御慎、及天下并怪所口舌驚恐事歟、

天福元年五月廿一日 宮主大膳亮忠躬兼力

從五位上行權少副大中臣知業

從四位下行權少副

兼繼兼力 忠氏

正四位上行權少副

兼直

卯時占、依神事穢氣不淨不信所致之上、公家御慎口舌兼力 兵革事、維範、忠尙、定昌、季尙、業經、兼宣、有成、忠

俊、上卿一大納言、藏人兼高、齋場所爲御忌方、節分御方違無沙汰之由沙汰出來云々、毎事聞驚者歟、

廿三日、丁卯、夜雨降、朝天猶陰、雨猶間降、金吾來、世事又不知云々、昨夜例御方違、右中辨奉行

廿四日、戊辰、夜雨止、猶陰雨又降、金吾又參季御讀經之由示送、今日結願歟、已時許與心房來坐、南方發心地平減給、爲令悅人可披露此事之由、示含祇候人々給、是與言歟云々、兼直宿禰又注進昨日御卜、

四月一日亥時、占云、依神事穢氣不信所致之上、怪所有口舌事歟、

同三日寅時占云、神事違例不淨所致之上、公家可慎御々藥事歟、又從良震方奏口舌闕諍事歟、

神祇官

主計頭繼範朝臣、漏刻博士兼經朝臣、博士定昌朝臣、主稅助有盛朝臣、大允忠俊、

卜怪異等事

問、金峯山寺言上、去四月四日注文備、今月一日亥時勝手若宮寶殿內陣震動、其響如雷、所奉懸外陣之御正體三體并銅鎗箭、雖風不吹懸緒不切、令墜落大床上

御、同三日寅時同御殿內陣震動、御正體鎗箭墜落、同前事者是依何咎祟所致哉、

推之、奉爲公家無指咎怪所、可有闕諍病事歟、問、同寺言上、同三日午時小守御寶殿外陣之御正體二體又雖風不吹懸緒不切、令墜落大床上事者、是依何咎祟所哉、

推之、怪所可有驚恐病事歟、

天福元年五月廿三日 從五位上行權少副大中臣朝

臣知業

占云、依神事違例穢氣不淨所致之上、從巽坤方奏口舌動搖事歟、

從四位下行權少副卜部宿禰兼繼
從四位下行權少副卜部宿禰兼氏
正四位上行權大副卜部宿禰兼直

上卿藤中納言家光卿

世俗之說、此怪未曾有云々、大祀歌、賴納言知三位可詠歟、公卿二人例依不吉頗未定云々、申時許長政朝臣來向、詔云、近日變異、同安元二年、其後無此事云々、

天福元年 五月

三百六十

廿五日、己巳、去夜雨間降、晨後天晴、昨日御讀經結願、大納言、雅、高、中納言、具、盛、家、南殿、參儀爲家、有親、南殿、行香不足、資家仰度者、實蔭、親氏御殿出居、有效、通氏二人早出、實清南殿事遲々不參、加出居、賴行、氏通、去夜殿九條殿御方違、於大將殿被改御衣乘御私車、與資季御共曉歸、今日依見楊梅進貴所、今年此物又不運云々、昨日興心房謁申之次、老物衰損驚目、今來月又重可愼之由被命、彌怖畏可被祈念之由申付、於頽齡之命者非可惜、可耻冥慮、只逃群盜之殺害惡病之忽然、遂剷除之本意、臨終正念、以之爲今生之望之由令祈念之、昨今雖服藥不魚食、申時許兵部卿臨門前、音信依無力無術、答所勞由不謁、

廿六日、庚午、朝陽晴、今日止服藥、暑熱已催汗流、心神彌不快、

廿七日、辛未、天晴、金吾示送、今夕姬宮御行扈從、直衣三々、明日又日野詣、暑熱重役前世宿報歟、村民說云、此近邊舊泉關々宜泉、往年臨幸之地、近年前內府居住、今年爲禪亭加修理、昨日始宴

遊、廻雪飄飄、終日以夜繼、山岳淮涸、暮有賜、武士固門、禁維夜深分散云々、大業江都之歡娛今在斯處、前左馬權頭季宗朝臣來臨、建保之比頻有芳約之好、近年甚疎遠、成辛示驚左京權聞之來謝云々、扶病面謁謝之、去年今東一條、晴天南風忽扇、明日又甚雨歟、未後雷鳴、申時許金吾來、今朝日野詣日出之程、資季、一條殿能忠只三人、午時自法性寺二人退出、能忠留候、可選御又姬宮渡御院御所、乘車可參云々、千載集正本廿卷、孝行於關東自武士手買取、年來持云々、於蓮華王院取歟、無所納之手書云々、雖舊損不及不中用之程、可進御所云々、村民之說虛言也、禪亭近日無遊宴云々、長衡率子息等經營、儲饗祿招請光村舞女十三人、仙樂歡娛之故、下人等披露、又有其故歟、明後日下向云々、

廿八日、壬申、天晴、夕雷鳴、雨暫降、夜前催反閑、忘却陰陽道他行、求尋之間及夜半云々、御車寄、九條新大納言、御共伊平、毛車、東帶、爲家、殿上人實蔭、實持、實任、賴氏、雅繼、隆嗣、資光、地下五六人、出車二兩、明日大北政所

御車寄不參云々、立歸又云、御車寄今朝事也、去夜愚借狀也

牛事也、兼直宿禰來問、依炎暑無術不逢覺法印、與心
房依先日約束來臨、對面、法印暫留言談、治部卿親長
卿一日比着束帶向真惠僧正房、出家事、再三雖辭退、
遂相共入經藏剷除受戒、相具法衣着之、冠已下朝衣置
中門廊退出云々、所爲頗可然歟、人心不同、雖奉公不
忘今又遂此事、不似不仕之白髮歟、又以超越、可恥可
悲、

廿九日、癸酉天晴、暑熱殊甚、僊臥之間、永光朝臣來問、

隔物言談、近日不食無力有若亡、和歌沙汰懈怠之由示
之、禪室腹病非平減、尤可被慎事歟之由談之、實清入
道一日比與客人圍碁、臨夕入藝居方之間、顛仆之後閉
口無言語、中風歟經四五日死去、其身往年任將監、非昇殿物老

住若狹國司當初、以濃州所領寄賴定卿爲彼家人、老後
爲內府母儀三品乳母、號六條之夫、施光華、賴房卿幼稚之
昔、依庶兄資賴大橫謀、欲失世途之時、實清自隨生養之付入
道納言之納勢、遂全其身、不被奪又處分家領、即實清

之奇計也、今年滿八十云々、妻八十五、忌而不穢云々、

勝事歟、入道伊時卿家供三人群盜露顯、武士來責、盜
逃去了云々、四位仲兼從者又皆悉爲群盜、武士雖責

之、稱八條禪尼關東右府後家、家警固者不出之云々、仲兼本自有虎狼之野心

士、近日禪室吉田泉亭臨幸、經營無他、示九日之由有

兼日之聞、聊被申延歟、如聞者更極嗜欲之淵源、欲

催驕奢之荒淫、高臺深池之望、金銀錦繡之翫、增雕琢

剝倭之饒、添奇巖怪石之勢歟、隋朝之歡娛、定忘後車

之誠歟、件臨幸又可爲密儀云々、不可有此事之由前日

被定了、又被申破歟、炎暑之間連々依可有渡御、被省

威儀之煩云々、又有連日之微行者、爲亡國之前蹤歟、

六邪之執權如舊、草創之德政何爲哉、桔梗花初開、萱

草自中旬開、

○六月小

一日、甲戌吉日、朝陽快霽、午時許少將伊成朝臣來臨、稱病

重之由不謁、暑熱難堪、普賢寺殿去夜遂事切給、定暫有事憚

歟由存而來由被示、先日態披露給之由、巷說又虛言

天福元年 六月

三百六十二

歎、雖非當時之柄臣、國家之元老、貴人之畏家、世間之歎娛暫可憚、

二日、乙亥、朝天晴、典侍早朝白地退出、近日院中新近

習加增、土亞相兄弟、弟自春、參東方、前中納言敎成、定高、又參

東方、昨日有出御、大納言中納言已上三人、非御服路公雅卿又參當御所、有親朝臣入厩

方、又六番々衆、御幸、參議御隨身、北面御車副等、連々

供奉之煩、歎息之故此事出來云々、下郎之心只見今熊

野淨衣河陽直垂、不知以往之事之故歎、申時許金吾

來、新女院馬長、蘇芳淺黃帷引、新制云々、臨昏黑下人等稱二星取合

山、望見西天、今日無纖月、太白之傍、東南方歎、一寸許有小

星、人云、取合之後離去星也云々、此間典侍歸參、金吾

又歸、

三日、丙子、朝天遠晴、傳聞、二星事、太白歲星相去三寸

迫犯了、占文之趣、白衣之會兵飢之由云々、少輔入道

來臨、普賢寺御事、五月三日聊有御風氣、四日戊申、如

發心地惱給、或每日、或隔日、自十二日食事不通給之後閉籠、聖

護院僧正一人之外不被寄人、昨夜已時御氣絕、御子息

已下修佛事、成人煩事一切停止云々、勝地被返奉本

主、此所又只以破壞爲期、不可修復云々、其次云、去春

御硯目六本候と出、何物乎由被仰、申云、蓋上伏赤木、

無文無其裏蔭繪御硯也と申、果而有之、御感云々、左大

辨於小五月棧敷發心地付惱云々、不經程歸了、五位殿

上人平禮甚不可然由示之、是又不知古人悉平禮歎、夕

殿下賜御書、大祀無事、公卿二人建曆一度之例也、仍

一人可爲非公卿人、已無其仁、經光如何之趣也、申云、

所存先度委申候了、不被用公卿二人者、經光之外其人

不候歎、不知歌趣、三人俄勤仕、不可然事歎、中納言不

可見放之故候、申此趣了、今一人又爲若納言者、已無

他人歎、於其歌者未知是非之分限歎、纖月初見、二星

頗在云々、

四日、丁丑、朝天遠晴、洗頭、始念誦、言家朝臣入浴之

時、即下向志深庄之由傳聞之處、近日瘡病發動危急之

由、草提希尼歎之云々、天無行雲、炎暑殊甚、督三品

傳、承明門院女房被請恩歌、僧房寵童受歌之料云々、

五首、甚雖輕々事有所思納受、今朝送腰折、文治之昔、列漢宮之綺羅之時、遙感春風百草之色、今折臂翁之身雖老彼禪尼之言爭默止哉、非木石之故忘傍難嘲、未時許大宮三位被來問、兩儒沙汰之後、機緣事不可爲愁由雖存、出仕之次猶何樣候哉由示、源少納言歸來、不被仰身上左右、四位儒詠和歌無之、當時未定由被仰、不得止而退出云々、縱雖爲吉例、臨老不詠歌一首、俄勤仕大祀、極不穩事歟、依暑熱甚、日入以前謝之、入夜賢寂初送小分之氷、夜猶難堪、臥板及曙、日未入之間下人等又稱星取合由、可弃之世也、後聞、此星自白晝見云々、又太白經天歟、五日、戊寅、天晴、去夜群盜徘徊坤辻邊、北行又歸之由小屋者告之、針拔下誤脱アラフ落折松伺此宅歟、未時許藏人大輔扣軒音信、答老病難起揚之由、依暑熱無其術也、先是已時許淨照房來、金吾又來會、自春所開院御方繪、月來所被新圖、今日可有御覽、大政所今朝令入院給、不經程各歸了、

頭註

正三位家信卿北白川院年預、親長闕也、

六日、己卯、朝天遠晴、依筋力不堪、今朝奉幣帛於日吉社、以老嫗七ヶ日令參籠、今月可慎之告等計會之故也、未時許金吾來傳殿下仰、大祀歌猶不被決、公卿二人建曆一度之例也、不可用歟、四位儒者無其人、經光去年中宮和歌之外人不見其歌、行能朝臣頻所望如何者、申云、和歌堪其事不可闕公事之人、前中納言、賴三位知家之外無之由度々令申、公卿二人於被憚者、經光忘自身堪否、以其名詠進、父卿扶持者事不可闕歟、貞應吉例、悠紀正三位、主基辨、已相叶、是一、次行能朝臣所望若可被許者、如此人詠此歌、只始于顯輔卿、彼一門吉不吉繼踵、其外亡父一人相交此事、猶不穩之由頻有申旨、舊例中古以下、非儒詠之、皆文章生辨黑白者也、非偏白丁、仍彼家外猶雖不可然、於彼朝臣者、其家代々每度書此御屏風、練習此歌、誰人比肩哉、又詠歌之跡非浮詞、事雖似新儀、於此事頗異他、用捨時儀、雖事闕如、年來不連卅一字而忽勤仕此事、爲道不穩事

天福元年 六月

三百六十四

一九八

歟、賴資卿、子息猶不似他、知家卿、行能朝臣之外不可被用他

人歟之由申之、爲朝爲人所申無私、先例事於無人者、強不可有沙汰事歟、晚月明、

七日、庚辰、朝天晴、早旦中將入道唯連被過、扶病相謁、

不及須臾、今日不聞神輿鼓音、先々雖遠聞、晚月清明、此撰歌其數自然多、今日切棄卅餘首、

八日、辛巳、朝天遠晴、金吾示送、大嘗會作者猶未定云

云、昨日攝政殿初度御上表已時山被催、及秉燭伊平、

家光、經高、爲家、有親、中使實有卿、爲家、出合取本御

表、左大將殿令取祿給、又姬宮還御、高實、伊平卿扈

從、殿上人有教、實蔭、實任、雅繼、隆嗣、昨日以書狀示

合師季朝臣事、志貴皇子萬葉集載數首、新古今自他任

彼集撰上之、又被入了、今案、此皇子如國史著無體所

見歟、將其讀著與施基可同歟、然者御諱可無便哉、答

云、伴皇子如彼集者、歌人內春日、板井、海上三人王、

世貴皇子之子云々、如令示給、若施基之音可通歟、日

本紀點セキ云々、若有同人之疑者、追號天皇繼體始祖

也、不可被書名字、被載田原天皇可宜歟、重案之、有事

疑、御諱可無便、未決疑、諡號又可憚、彼御歌二首今日

切除了、又所案藤元真入新、訓讀有憚、兼房朝臣已爲大

相國名字、非殊秀逸、此二人同除棄了、故者名雖事舊、於時可存機間之故也、相泉道經又今度不撰入、是皆今案所斟酌也、半月清明

九日、壬午、朝天遠晴、未後陰、夜月漸晴、但馬前司臨蓬

門、暑熱難堪、兼他行之由令答客人、未時許內府御消

息、播州上還越部下、應宣廻秘計、今日奉典侍了者、并

悅無物取喻由令答申、賢寂感悅、是月來懇望也、適聞

吉事、可謂恩、

十日、癸未、朝天晴、近日之閭巷買兵弩者充滿、民口偏

稱敗亡兆之由云々、京畿皆有其心、奇而有餘、辰終許

下人說云、去夜大貳家燒云々、南面臥、而過夜半入寢

所、令下部之後歟、以助里令驚訪、帥殿大貳之時度々

逢火事給、旁可怖事也、歸來云、大炊御門北、猪隈西東

小屋二十許燒、群盜放火也、北風掩他付所々打滅、希

有逃了由有返事、行寬法印來臨、扶病相逢、不及、師重

朝臣重勘送、國史所載日本紀施基皇子、時也、體記云、

師貴皇子、類聚國史云、光仁天皇寶龜元年十一月甲子

詔云、現神大八州所知倭根子天皇詔旨止宣詔旨乎、親

王王臣百官人等天下公民衆聞食宜、朕以劣弱身忝鴻

業、云恐利畏、進毛不知爾退毛不知爾、所念波貴久廢彼御

命自獨能美、受給武止所念能美、法能美、追皇掛恐御春日宮

皇子奉稱天皇、又兄弟姊妹諸王子等、悉作親王冠位

上給治給、又以井上內親王定皇后止宣天皇御命衆聞

食宜、續日本紀云、靈龜二年秋八月甲寅、二品志貴親

王薨、遣從四位下六人部王、正五位下縣犬養宿禰筑紫

等監護喪事、親王天智天皇第七之皇子也、寶龜元年追

尊稱御春日宮天皇、今案、日本紀并體記所載施芝期師

其字雖不同、其音已同、施字異音、聊貽不審、不及指

南、且五字一音之上、續日本紀註、志貴同名之條已顯

然也、於今者可被用追號歟者、事已無不審者、今度尤

可奉書載、愚意所疑頗有其與、仍註之、朗詠集書此御

名、建仁撰進無之、時雖有所疑、一身不及出疑而過了、

新古今被書皇子、不可然事歟、

十一日、甲申、朝天遠晴、兼直宿禰注送卜形、

神祇官

卜怪異事

間、住吉社司等言上、今月二日註文備、去月十七日已

時第三神殿鳴動事者、是依何咎所致哉、

推之、依神事違例穢氣不信所致之上、可有公家御

慎、及怪所驚恐繫四事歟、

天福元年六月十日

宮主大膳亮五從位下卜部宿禰忠躬

從五位下行權大祐大中臣朝臣定氏

從四位下行權少副卜部宿禰兼繼

從四位下行權少副卜部宿禰兼氏

正四位上行權大副卜部宿禰兼直

上卿藤中納言家光卿

藏人右少辨經光不參

天福元年 六月

三百六十六

二〇〇

占云、依神事穢氣不信所致之上、公家可慎御々樂事
歟、又禁裏可被誠火事歟、

漏刻博士業經朝臣 權曆博士定昌朝臣 權天文博
士季尙、
玄蕃頭直宜、
曆博士道茂、
權漏刻博士清基

已時許親尊法印來臨、扶病相謁之次云、今年御八講臨
幸難叶事歟、寺家破壞并至于小事不具、無處于催促、
敷設御籠難調出、此修理事已被仰合關東、寺家所司等
下向、于不歸洛、已及期日不便云々、申時許金吾來、大
祀歌申趣難委申、猶以未定云々、見撰歌、月前歸、風烈
雲飛、遂雨不降、立後來二十日、前日御幸持明院殿云
云、

十二日、乙酉、朝天快晴、夜月明、已時許明日行幸止由
自典侍邊傳聞、是尤重事歟、不聞其子細、驚而可驚、女
院無御同與、齋宮依無物無入內、仍兼日白地可令入御
由日來聞之、若被改神輿之路者、甚不吉事由、先年所聞
也、時儀如何云々、申斜兵部卿音信、答所勞無術由不

謁、金吾示送、齋宮一昨日御瘡病之故、一位殿可令同
輿給由雖有議、住吉鳴動、初度御物忌、行幸又可被憚、
仍有議定、少將井神輿被用冷泉、自寛治元年至于七
年、每度如此、於御靈會路者三條之外之例不吉也、此
條不可憚云々、然者年來閑院皇居以後每年行幸甚無
益歟、時輩只以無煩爲先歟、

十三日、丙戌、朝天遠晴、前修理權大夫來臨、扶起面謁、
大祀歌事雖未定、去夜金吾霍亂纔落居云々、左近大夫親賢
馬、逢少將、實任咎無禮歟、以飛礮打其後、親賢自禪亭
退出、白晝於大炊御門東洞院實任朝臣侍等凌礮打破
頭及小刀傷、相門被驚、永不可來寄之由追放、奇怪之
由被奏聞云々、此羽林惡遠江聲也、習緣者歟、未時許
大宮三位番狀、今朝此御教書到來、悅思給、

可令勤仕大嘗會主基所和歌給者、依攝政殿御消息、
且上啓如件、

六月十三日

左少辨忠高、

謹上大宮三位殿

度々被仰下之間、每度未定不審之處、無相違之條悅申之由示之、此事去年秋已申定了、今先例沙汰違亂、甚無詮事也、於無其人者何依官位可有沙汰哉、例不吉之由月來在人口、更被用無山事歟、桂月清明、一寢之後南方有火、當南不遠、遺於冷泉、歸來云、六角南、鳥丸西、火赴南、仍不驚云々、

頭註見物如堵、親賢頭破、馳參相門、見物倭子扈從、

十四日、丁亥、朝天遠晴、憚尼以下參詣旅所、去三月所令傳便風愚狀、兩國司并師資朝臣返事到來、勢州守護所使亂入停止、有下知之狀、已時許良算法印來、隔物謁、神輿奉行落云々、

十五日、戊子、天晴、未後間陰、承明門院女房迎寄、示合關卷紐組事、臨斜陽令歸參了、月前一寢之後南方有火、不遠、近衛南、萬里小路西小屋少々燒云々、即滅了、十六日、己丑、朝天陰晴、曉禪尼物語脂力即歸、已時許金吾伴侍從并外祖來、依數奇爲見撰歌也、霍亂以後窮屈未出仕、實任朝臣內院除籍之聞云々、少々見之、未斜歸了、山月雲

暗而漸昇之後晴、

十七日、庚寅、天晴陰、光家入道來之次云、宜秋門院按察殿昨日他界、此七八日稱風病由退出、漸增氣、於九條邊事切了、息女先帝女房三條殿、於此近邊遭喪云々、自文治御入內、自然相馴、今聞此事足于悲痛、六十九云々、

十八日、辛卯、天晴、金吾來、爲繼朝臣來、典侍片時送御所新書圖、令悅目即返上、諸物語相交、月大給十二卷、當時能書之人々

書詞、座主親王、前內府、九條大納言、行能朝臣、清通入道、範宗三位二禁俄及大事之

由、以金吾說信始聞、以助里相訪之處、歸來云、今晚已他界之由、子息等示返事云々、雖生死之習、猶驚而有餘、昨今無常殊以悲痛、年來所聞六十三云々、月出之後清明、今夜暑熱聊宜、

十九日、壬辰、朝天遠晴、眞惠僧正自一昨日於神泉祈雨、自廿一日法親王於法性寺圓堂可修愛染明王法云云、知息院殿御忌日八講、二年殿重被修、今年於月輪殿被修云々、三年之內被改其所、已又陵遲歟、泰乘入法成寺之後、年中恒例佛事彌以如無云々、悲有餘、山

天福元年 六月

三百六十八

二〇二

上諸堂泰乘之所交、皆閉戶滅燈無人跡云々、金吾相具中務來、終日取奇目六、機過半夕歸前左馬季宗朝臣來、稱病不逢、光行入道孝行等來、晦比下向相觸、同不能言談、明日立后、明後日新女院御幸室町殿、布衣、中一日可御、有御點被催、高闕率行雖申無力無術由、猶可構之由被仰、極熱連日事不休肩歟、炎旱涉日、民戶已憂云々、夜無露草木枯槁、今日存外有涼氣、乘燭着小袖、

廿日、癸巳、遙漢無片雲、立后日云々、無露而早涼生、還不得其心、右中辨音信之次、今日依立后密々御幸持明院殿、入葉御車初度隆盛、親氏朝臣供奉、御路次可入御二品近衛亭、爲申沙汰只今參入云々、已時許金吾來、御幸非早速事、大殿中將殿令參御車寄給、出仕之人皆指合由被仰云々、長政朝臣來談、實任朝臣可被解官云々、父卿依披陳不知由、如舊參院云々、今日未時許金吾取荒目六了歸、三位資雅卿以使借牛、引送黃牛了、長政朝臣云、大隅前司改名忘却康業、去十四日他界、自去年修明門院中殊以伺候、知御領行雜事云々、年六十五往年見馴人已拂

底歟、

廿一日、甲午、朝天無片雲、皇后宮大夫家嗣、兼、權大夫具實、兼、亮顯氏、權亮公光、兼、大進知宗、兼、權大進平惟忠、少進藤定兼、權少進藤成俊、大屬安部成朝、少屬同資高、兼、權少屬中原職仲、兼、

廿二日、乙未、天無雲、夜無露、去夜新女院御幸、室町殿大

殿網代御車、院御牛、御車副召次武延、出車二兩、伊平、爲家卿、光俊朝臣、能定、資光、高嗣、顯朝供奉云云、忠成書狀云々、去夜本社大宮寶殿振動、今日發聞云々使

者下人說、亥時御殿之內有似取相撲之音、次又有銅器落破之音、又振動本社全無一度、如此之例奇勳云々、

去十五日諸司法師之訴、祭日社司騎馬過其前事、被召決被處社司不當、成茂代官社司解部、社司當時愁訴之最中云々、左京權大夫來談、依秋節宿北邊小屋、鷄鳴歸、晨明月清、

廿三日、丙申、天晴、終日風吹、昨日雖風雲頻飛、遂雨不降、長者僧正又被修如意寶珠法云々、依或者所告、今

明閉門物忌、雖不可信、而無損歟、興心房被來、加小護身、午時許

金吾來、依殿召參菩提院之次、昨日參皇后宮、公卿座

敷南庇、殿上人在弘庇、兩大夫、隆親、盛兼、家光、爲

家、實世卿、殿上人有教、實蔭、雅繼、資定、初獻、英、二

獻、勅之、三獻、隆親、一昨日定通、雅親卿、兩大夫、經高、基

保、基氏、二獻經高、三獻權大夫、節會內辨右大將通方、

具實、隆親、盛兼、宜命、家光、經高、基氏、實世、有親、左

大將殿、實有卿參加、本所一獻內府、右大將、二獻通

方、具實、三獻隆親、盛兼、但內府、右大將、左大將皆被

着端之間、右大將執环勸左大將殿、依爲我本座不立

去、此儀未見事也、可奇之由大殿被仰云々、旱天大風

彌損草木、四條京極邊廳不開目云々、夜無露、

廿四日、丁酉、炎旱彌甚、去冬所堀之井淺而水旱乾了、

令汲垣外本井、式賢來門外、月來城外之由示之、答物忌之由、

明日故入道戶部十三年忌日、息女姬君經營聽聞哉之

由雖被觸、於今者極熱出仕勿論之身也、今日雖念々意

展金吾適領狀、終夜如焦、亥時許女院還御、私車歸、

廿五日、戊戌、旱天如焦、日色赤、午終許大宮三位被來

向、難談之中家衡卿皇后宮亮嫉妬之訴尤甚云々、家臣當時

位上卿也、親昵之喧々無由事歟、流汗平臥之間、右中辨

來臨、芳心如刑罰、謁之間法印覺又加座、辨相、臨黃昏

歸白川了、昨今適斷章之間、老後偏斷食無力、暑熱如

亡、立后四位侍從、有教、家定、實蔭、爲經、光俊着座、今三人

不知、五位兼隆、經光、信光歟、是只戴冠出仕之人歟、

真惠雨不降而可結願、親嚴雨任意之由放詞領狀、于今

無驗、天之令然歟云々、中將家定朝臣宅有賣扇紙下

女、常事也、其給七月廿二日天下可滅亡、面白き之由書文

字巖草木、其紙賜人、覺悟顯然之由下女稱之云々、件

紙進上院御所了云々、

廿六日、己亥、天漢逐日清明、巳時許備後權守有季入道

淨意、來、其歌依爲重代不存忽諸之由、日來音信之次答

之、本意之由來示之故也、齋院長官有房孫、父有仲也、午時

許宗平中將於門外音信、稱所勞無術之由不謁、暑熱不

可堪忍、

天福元年 七月

三百七十

二〇四

廿七日、庚子、遙漢遠霽、午時許法印^實來臨、宮明日令歸本寺給、依心神猶違例賜暇、今日歸之次也、依數奇雜談、又以病者之身移時刻之間、東南之天黑雲漸起、真惠僧正昨日歸本寺了、賢海於醍醐修法、又雨不降而結願了云々、聞此事大僧正法驗猶待他人結願歟、法印歸後、漸及日入大雨忽降、簷溜漸流、猶有浮雲之氣、日沒以前西天欲晴之間、雷公頻發聲、秉燭以後雨猶如沃、及于深更不止、極此事歟、

廿八日、辛丑、遙漢晴明、片雲收盡、夜雨、田夫欣感云云、武士於六條川原行斬罪、雜人聚見云々、以鎧爲質物借鵝眼、不返借物而打殺取返鎧之犯人云々、賢寂病適付滅始來、明日南殿例日野今度今夜宿給、被通用兩月分歟、金吾又被召具云々、極熱騎馬不便事歟、所被經營泉臨幸、泉水不出之間、于今不被遂、被待雨水云云、

廿九日、壬寅、天晴雲收、夜露滿庭草云々、昨日巷說稱可有除目之由、今日不聞有無、夕有二品舊狀、皇后宮

半物已下名字可撰申云々、先々不知此事、可廻愚案之由申了、日入以前被了、

○七月大

一日、癸卯、天晴、未時東南陰雷鳴、早旦窈窕等名字書載^{有紙}檀紙、^紙副書狀、^{以範立}奉二品半物、久方、敷島、止古止葉、雜仕、玉松、笛竹、眞賢木、綾杉、比須末之、波津草、若水、即有返事、此名字尤宜云々、日出以前典侍退出、洗髮、長者僧正依雨感悅參所々、自愛自讚云々、皇上不合嫌御、令坐膝上御親祭牢云々、雨ふらしたるめでたし、又布らせと有仰事云々、勸賞非身上事、東寺可被寄國之由被申之、已時許金吾來、昨日日野御共之後、胎固根更發付藥、不出仕、來五日御幸^{法勝寺}、可供奉、被催人數、不幾又無領狀、兩大將、衛府督、四人隆盛、兩納言、有親朝臣、資雅卿領狀歟、未時歸之後、罪方忽陰、雷公頻發聲、法印示送云、雨貴、大僧都隆快爲法印齋助叙法眼、^{三條大納言}眞惠神泉御讀經參日申延、猶可行孔雀經法之由申法親王、內々被退絕申歟云々、先

是水天供之輩皆含恨云々、座主宮前座主申所勞不被

修云々、去廿五日大殿令講最勝經給、聖光法印說法

兩殿令書、一品給、聞者感歎、其事訖向入道戶衛忌日所、能忠能定

之外、夜前除目^{四條}上卿、皆三分歟、中務三人、內舍人十八、

少監物一人、圖書一、繞殿一、大學助一、允二、治部一、

雅樂一、玄蕃二、刑部八、宮內一、大膳權亮一、木工二、

主殿木助一、忠二、疏一、修理亮一、進一、津權守左將

監十七、右十四、左門卅一人、右卅二、左兵四十九、右

卅二、右兵四十九、右四十五、左馬十八、右馬十五、已

上二百六十五人云々、爲炎旱之德政、被求尋成功者云

云、彼政之體誰人意見哉、朝議已不足言歟、驚而有餘、

申時陽景更照、無雲雷之氣、夕典侍歸參、

二日、甲辰漢雲遠晴、已後間陰、明日臨時十社奉幣云々、

微雨雖灑不濕地、

三日、乙巳、曙後忽陰、雖雨降即止、青天見、午時許超清

法印來臨、昨日示所勞之由強入、以人間答、所詮只列

勅撰懇切之志也、持來明惠贈答歌、事驗頗可謂幽玄、

可相計由答之、未後天猶陰、初月不見、賢寂告云、入道

成長卿今朝遂逝去、月來不食病、依獲麟出家云々、依

家人在隣聞之、眼前嬰兒載霜雪歸泉、每聞悲慟、

四日、丙午、天晴、陰、纖月明、

五日、丁未、天曙雲暗、辰後快晴、法勝寺御幸久絕、病者

有見物之志、已一點行賢寂宅、令問刻限、人々小參云

云、左大將殿、右金吾、四條自門前被參之後、又乘車

見、二條富小路、右大將、源大納言參入訖、二條東行見

尊勝寺東、車多立了、仍立其北、良久馬前陣進、六位二

人、家清爲殿上人二十餘人歟、不知隆嗣歟、有隨資光、

博輔、又有隨身具人賴清、知宗、光資、忠高、氏通、賴

行、親氏、公光、實清、家定、少將、爲經、實隆、親忠歟、

久不見頭辨、新宰相、有親、兵部卿、新源三位、資雅、右衛

門、左兵衛、富小路大定、實有、舍人二監權、伊平、四條、

隆、左衛門、舍人二人、左大將殿、右大將、源大納言、雅、

御後檢非違使、親清、北面十餘人歟、今日雖赤日照、颯

風頗涼、即歸廬時儀軌每人用寶物、昔如此御幸自跡只

天福元年 七月

三百七十一

以總不切落爲公平、近代之所存一度之供奉實以大營
歟、依之又無人歟、雜色又着綾生衣、宣下人去大理令
着之如何、後聞、爲經朝臣付御車、公光朝臣取御劔云
云、

六日、戊申、朝雨瀟、即天晴、兼直宿禰注送、

占云、依神事違例穢不信所致之上、從怪所良異方奏
口舌闕辭事歟、

主計頭修範朝臣

權曆博士定昌朝臣

曆博士道義朝臣

神祇官

卜怪異事

間、日吉社司等言上去六月廿二日注文爾、今月廿一
日亥時大比叡社內陣有大鳴音、其響高及門樓之外
事者、是依何答崇所致歟、

推之、依神事違例不淨不信所致之上、怪所可有口舌
動搖病事歟、

天福元年七月五日

從五位上行權大副大中臣朝臣知業

從四位下行權少副卜部宿禰 兼繼

正四位上行權大副卜部宿禰 兼直

上卿藤中納言

辨信盛朝臣不參

事藏人大輔三守不參

一昨日前大納言兼基卿已下、
僧正三、母儀逝去、禪閑
人法印、

御事以前重病、獲麟前後不覺之由有其聞、依其事彼

御事隱而不令聞、遂經卅餘日入滅、年七十五、一、寵愛
年奉長云々、

專房、數子誕生、老後出家、暑熱客人甚難堪、稱他行

由、

七日、己酉、天晴、令拂雜文書、金吾昨夕參社、可逢曉大

殿開云々、女房着帶以後全不參神社、奉幣猶憚歟、昨

日奇問之、當社之習至當月參詣之由成茂說云々、多年

雖參詣未聞此說、若社司之不憚父母服之體歟、背恒規

之說也、申時許沐浴、雖有一度之雨、赤日之照耀猶如

焦、井水已乾云々、川崎惣社祭殊結構、歌舞叫喚、民戶景氣似豐年、月前宿北邊、天曙歸、

八日、庚戌、陽景照而涼風至、招金蓮房令見小瘡、面上雖爲身癖、昨今殊有痛、尤可爲重事歟、只如例者也、可付山朝子之由示之、有所慎閉門、夜大風、

九日、辛亥、黑雲滿北、赤日出山、井水悉乾、冷泉邊又同云々、賢寂外孫春連、赤痢甚重之由昨日愁悶、今朝問安否、度數聊宜云々、早風吹塵彌損草樹、客人等來、稱他行之由不逢、夜前又俄有小除目云々、申時許金吾來、昨日又殿下御共日野、騎馬、宗平、朝臣參今日禪門、內府水田方

達、實持供奉云々、御幸還御、忠綱見物車前板置細脂、無隱忍氣色云々、堂童子左方資光信光、右方博輔高賴、十社奉幣、御卜、方角、八幡、家光、松尾、長清、上卿定通卿早參行事、幣料遲々、申時發遣云々、終夜大風、月陰雨不降、

十日、壬子、曙後雨降、不及地濕、雲漸散、東風猶烈、雲起西、午時陽景見、一昨日除目、受領三人、飛驒源資

信、下野源雅宗、當宗名如何、豐後藤宗兼、兵衛尉紀久

信、寬弘二年、宜陽門院當年、御更衣功、依此事除目歟、從四位上家清、從五下光成、重

長子歟、雲飛風烈、及晚陰、風雨相交、終夜不止、

十一日、癸丑、大風猶同、未後風止、雨快降、申時甚雨之中、大亞相公枉駕驚謁、在外依好歌之志來訪由被示、甚雨無心、不經程謝之、終夜甚雨、

十二日、甲寅、朝雨猶降、已後止、未時又甚雨、金吾來、以尋常黃牛替斑牛、引送幸清法印許云々、例安居也、入月清明、

十三日、乙卯、朝天晴、夜月清陰、曉少雨、權離之露頗有秋色、已時許興心房被入坐、俄宿願來十六日參訪太神宮、即可歸京之由被示、振歌事山僧閑梨二人、性昭法師子覺

識子來、以人令答、少將通氏朝臣被送其草、凡競望、千萬無尋常歌、大殿又御菩薩院、金吾被召具云々、今夕行啓供奉公卿、尤可被免徒事之日也、偃子之遊難堪事歟、

十四日、丙辰、朝微雨即晴、黃門歸參土御門殿、小御不、例云々、

天福元年 七月

三百七十四

二〇八

挽起終每年所作、筋力過年有若亡、至于黃昏奉讀一部、居而不能起、起而不能居、老苦之令然、乍生如亡、二代之御盆存例送嵯峨、月明雇香、女子、令禮不輕、軍令引出俗習有父母者今日魚食云々、於予不忌憚、適好念誦者齋日暈食極無其詮、訪世々父母事、不可依今生二親、

十五日、丁巳、朝薄霧初見天陰、早旦奉禮佛奉讀神咒懺法例時等、存例午後依無力休息、今日聞、一昨日后宮入內、兩大夫、雅親、通方、隆親、伊平、基保、爲家、基氏、成實、有親朝臣、啓將氏通、隆盛、御後十人許、勸賞兩亮欲叙、例喧嘩可相、正獨叙云々、后宮御內、本母后明後日泉御幸可被遂云々、未後微雨、申時風加、御堂孟蘭盆遲々云々、左大辦宰相參了、夜微雨降、

十六日、戊午、朝雲分、天漸晴、已陽景晴、朝金蓮房來、耳下有少雜熱、令見之例風熱也、非別事云々、午時許左京來臨、參院之次云々、九條大納言殿有召可參由、若此撰歌事有御尋者、彼御好風體惣非愚意所存之間、

不通達其心、力不及之由、只不憚可被申由示付了、好今樣之相異也、相奉不可有遺恨事也、未斜自賢寂宅小兒來、今日可爲乳母者、腹痛無程得減氣、力復尋常了、戌終

許乳母來、迎賀茂若宮祝彌平妻、依無子欲養、自是不付

人、即令乘車、例小兒相具、沃懸地鈿入赤地綿袋、懸子二

入油壺等、又懸子入隨分衣裝、細長薄背二重襪、小袖三帷

云々、伴物等典侍申公物送之云々、呵梨帝十五童子舊

物也、先是金吾來、明日泉俄大北政所令參給、又被召

御車寄、可早參、御共公卿可參會、上結有恐由難申、今日不

仰、參公卿、殿下、右大將、具實、隆親、盛兼、爲家、基

氏、成實卿、女院今日御着帶、依此事兩殿北政所、明日御興

云々、御車深不可被、殿上人騎馬被指分、家定公光等參女

院云々、公卿可被引鞍馬、殿上人不置鞍、殿下二足、二足

所々風流物又自諸方集會云々、終夜月明、

十七日、己未、朝天晴、已時許金吾使來、大路見物車立

由告之、雖無其志出京極邊、召次來迎車、御與御路、仍又

提面土御門以南縱牛暫立、猶頻追諸車、未始許御與令

融給、殿上人三人、下北面三人許騎馬、別當乘車恩從、

御幸未成云々、暑氣如熱難堪、歸來即被幸云々、入乘御車、

殿上人三人、北面少々被下御簾云々、出車不見之由、下人等

稱、御輿已前具實盛兼隆親卿車過了、各具侍、余無指事云々、秉燭

以前程還御之由車馬昔聞、秉燭以後金吾來、窮屈之餘

不委問答、休息泉邊雖賞飯、上下不解劔、被引馬、中納

言以下騎、具盛兩卿之外各馳、此外無指事、殿上人七人、資季

朝臣、有資朝臣、家定朝臣、隆盛朝臣、公光朝臣、親氏

朝臣、博輔朝臣、乘四條納言車、上北面行綱、繁茂、行兼、不知其人、成

時、忠時、季繁、下北面長親、助直、康景、友景、參儲、久

政、信季、俊清、行親、親方、長親子、女院御共、御幸御共、信廣、季

兼、信盛、末光、重、此下闕文、大僧正御房之風流以赤錦

爲橋被立鶴、以沉爲橋柱被渡女房之中水云々、卿殿上

人馬之外無別事、上北面之中被出風流物、以扇爲籠、

以色々村濃染物絹聚積之云々、微妙風流雖千萬不難

見、女房之中事也、今日殿下第二度御表使已參內了云々、爲祿

取繼束帶歸參、窮屈不便之體歟、來月五日宇治初度爲

氏被催云々、人之經營不休肩、雖有厚祿猶不可堪事歟、月陰小雨落、夜深天晴月朗、

十八日、庚申、天晴、此間無殊事、祈年穀云々、今朝不撤

却昨日風流物以前、重時駿河、可見物云々、嗜欲之源風

流華盛之開、聞、強非朝廷之要、皆是末世之耻而已、國主預

過差之響應、依小男之官位述懷、傍言辭退館居之詞、

即是先期之儀式也、執事院司播州之國務、依公光勸賞

辭退、實宜依爲人從者放一家、極大非人云々、鶴鶴

庭叩、始見來、秋氣之早歟、萩花一枝開、昨日直衣御服一具被

懸衣架、被具赤色御帶之由聞之、向後存此由歟、即是

朝之耻也、彼相門即直衣用赤色帶之人也、右金吾又倣

其體、口傳故實經時代消滅、永光朝臣注送昨日事、可

謂芳心、泉殿次第先入御後御歷覽、次出御、馬場、次引御

馬、先水干鞍御馬、殿上人牽之、次引攝政御二正、上北面牽、殿上人請取、

次引公卿馬、下北面役之、或於御前自賜、或引出僕從

取之、次引殿上人馬、役人同各賜之、次供御膳、陪膳內府、役送

殿上人、先是殿下卿門退出給、次公卿前居候、上北面役、事畢殿上人於馬

天福元年 七月

三百七十六

場舍東面泉座給膳、本所侍役之、次上北面給膳、役人同、

十九日、辛酉、自夜晴陰、曙後雲暗、雨間灑、典侍爲參內

借車、未時許金吾示送公曉法印夜前今朝之間他界、

六十日來中風之病、不能動身有若亡之由聞之、其上如

頓死、中風習也、北政所御春日詣延引、於殿下聞及云

云、不憚欠日、早可除服之由答之、明日典侍、隨聞及今日

何事在哉、遺跡無可音信之人、放埒之體不及問答、不

暮以前車歸來、於賢寂門解除了云々、日入之程大炊中

將來臨、來月五日宇治供奉事等示合、依人依事歟、只

平轍例較可置哉由答之、今度不可有隨身由遮被仰云

云、乘燭以後謝之、禪尼等令除服、

廿日、壬戌、天晴、午後雲暗、小雷不降、一昨日窮屈殊

甚、不及起揚、仍今日聊念誦、月不快晴、

廿一日、癸亥、朝天晴、徒平臥、永日暮、賢寂來、

廿二日甲子、天晴、午時許法印來臨、清談之間忽陰、大

雨降經時刻天又晴之間、小雷、金吾來、無告人、及申時

法印歸後暫言談、不經程歸了、來月宇治殿上人多領狀

人數不可闕、爲氏欲申所勞由、出立不叶少年者不可參

事也、今日暑熱殊甚、汗如瀉水、入夜猶難堪、月出之後

付寢、方違雖滿日不能他行、

廿三日、乙丑、天晴、午時許雨雷不濕地、巳時許迎蓮房

來、隔物言談、

廿四日、丙寅、天晴、金吾示送、座主宮昨日還補天王寺

給、今朝所參賀也、本人依人勸辭退歟云々、於病者之

身者、寺務去來只耳外事歟、有長等之在俗定友度相連

歟、寺務雖誰人佛物爲人物事一目歟、大宮三位被尋古

語拾遺、即借送之、

廿五日、丁卯、朝天晴、巳時陰、鷄鳴歸、巳時長者僧正賀

茂詣之次被來談、式賢來、稱病不逢、夕心神違例、

廿六日、戊辰、朝天陰晴、未後雨濛々、與心房昨日被歸

洛由聞、仍奉書狀返事、昨日無爲歸洛由被示、入夜典

侍退出、

廿七日、己巳、天晴陰、雨降止、金吾來、明後日廿九左大

將殿初度詩歌云々、此殿番長弘隆依異樣、又不當追

却、被召召仕賴岑云々、泉亭又被申請臨幸、慙勅許云云、

廿八日、庚午、天晴、典侍朝歸參、金吾書狀、明日又泉臨幸、四條納言、大理三人可參由被仰下、無人事殊爲面目、勅喚甚

參、又定有咒咀讒言之殃歟、內外之參且悅且恐、今度被申行競馬云々、撰廿六人、只被懇甚、往事故歟、昨日聞及、家隆卿撰卅六人

云々、是遠所勘定歟、尋金吾歌云々、南朝北朝之撰者共在京、有勅撰之沙汰、一老徒然有御訪之由歟、建保

之禁裏歌猶以有嫉妬、況於今世事哉、彼卿當時無貳心忠臣也、又若雖卅六人同撰集歟、申終許有長朝臣來臨、自去春不音

信、驚謁稱々病惱無其隙、聊得減之時、被召出馳走又更發、乍思懈怠之由言談、及夜景歸、暑熱此間殊難堪、日夜偏着帷、

廿九日、辛未、朝天陰、辰後晴、暑熱殊甚、巳時許永光朝臣來談、臨幸御所事見了參、今出河之路次也、今日被進御牛、一頭、被進、又被置扇、女院御方有茵云々、競馬近衛舍人北而名譽輩被撰之、禪門不被參、咳病之、山云々、女院渡

御、御輿如先、乘燭以前下人等稱還御之由、此事於今者不可被奉儲

歟、昏雨、禪尼自春日京極來臨、大谷當時、處件所々、今夜宿明日可歸、又今夕迎寄禪師姬、寶寂城外之間、成人以後田舍下向、不便仍所喚寄也、

卅日、壬申、朝天晴、日出刻限大雨忽降、兩禪尼早旦歸參齋宮、春日、京極、千載集爲仲章朝臣被燒其上帖、被召禁裡之後、惣不持、不散不審、適依逢證本密染老筆、自廿六日

至于今日書終上帖、書始下帖、此集作者之位署、題之年月等甚無謂事多、昔雖諫申惣不被信用、只任意被注

付、今見之慙思事多、惣付萬事任當時之存知、不被勘見先例准據事之故也、辨物由之人定成誹謗歟、於顯昭

季經等者又不可分別之、或人云、夜部作文歌人不參無歌云々、

○八月小

一日、癸酉、天晴、未時許願下飼蛭、卅餘、

二日、甲戌、終日陰、西北方雨降云々、此邊不然、夜前自南京方來使者小童云、當時南都云貓騰獸出來、一夜噉七八人、死者多、或又打殺件獸、目如貓、其體如犬長

天福元年 八月

三百七十八

云々、二條院御時、京中此鬼來由、雜人又稱貓膀胱病、諸人病惱之由、少年之時人語之、若及京中者、極可怖事歟、金吾示送云、座主宮御病之由雜聞欲馳參、昨今暑熱聊宜、雖着帷汗聊休、夕又云、宮御瘧病大事御由、公性法印相逢云々、

三日、乙亥、朝陽晴、未後雨間降、未時許蛭向飼、卅許飼、嚴增阿閼梨依蛭飼不逢、不堪無骨歌人、爲人無由事也、終夜微雨降、今夜又暑熱、

四日、丙子、雨間止、午後天晴、酉時又甚雨東天不降、自晦朔

之比萩花盛開、昨今終日番草子、不知疲、只老狂歟、徒然之身無携事之故也、

五日、丁丑、朝陽間晴、午時微雨灑、午時許兼直宿禰音信、書寫之間示聊他行之由不逢、昨今權大納言頻賜書札、好道之故也、未時書終千載集下帖、不願老骨遂終功、此集之跡猶以遺恨多、每夕陰、今夕初月見、夜猶熱而不脫帷、

六日、戊寅、朝天晴、實寂今晚赴播州方由夜前示送、已

時評金吾、兩殿、南北政所、大將殿皆一昨日渡御九條殿、參御共宿候、供奉人等不參之間、每事馳走、臨期限前中納言參、大殿網代御車、兼友御共、露顯御見物、北政所八葉御車、即御共見物了、俊親之出立諸人褒譽、家子五人、孝弘、一、二俊親妹夫、三嫡子小男、四猶子、二條殿侍、五舊翁、郎等十人伊東の判官と云武士來扶持出立云々、日出之後不經程出御、秉燭以前令歸京給云云、先前駈諸大夫、

志作藏人季宣子、

兵衛尉 藤 區、二藍布狩衣、藤文狩袴、越中前司 結花女郎花生衣、

高 經、所賣狩衣單、薄色指貫、

左馬助 資、青結狩染衣、紅結染衣薄色指貫、

知 行、薄青狩衣單、薄色指貫、

教 國、所木狩衣、薄色生衣、薄色指貫、

前中宮大夫 長、薄青織襖、薄青織襖、

右馬權頭 有長、薄青文織襖、白引陪木、

地下公達、

大隅守 範、薄青狩衣單、藤文紗薄色指貫、

和泉前司 長、二藍狩衣單、薄色指貫、

民部少輔 嗣、薄青狩衣單、薄色指貫、

親 康、仁加色狩衣、薄色指貫、

兼 盛、花田織襖、薄青織襖、

兼 長、薄青織襖、薄青織襖、

兼 長、薄青織襖、薄青織襖、

兵衛佐
教氏、所黃狩衣單、
二藍指貫、

殿上人、具隨身赤
色敷、

親俊、

有敷、白織文紗狩衣單、
薄色指貫、

資季、薄色指貫、
薄色織襖香帷、

爲經、薄色指貫、
薄色織襖香帷、

賴行、薄青狩衣、
薄色指貫、

知宗、花田狩衣、薄香帷、
淺黃指貫、

經光、薄色狩衣、

李賴、花田單、
薄色指貫、

宗教、精木狩衣單、
二藍指貫、

御隨身、

久員、賴和、久利、

御後官人、

俊親、家子、郎等十人、
侍員部大夫、花田、

宗南、六位、

中務少輔
長信、花田狩衣單、
薄色指貫、

宗平、薄皮狩衣單、
薄色指貫、

能忠、薄青狩衣單、
薄毛指貫、

雅繼、薄色生衣、
薄色指貫、

少將具隨身四人、
薄色指貫、

兼平、薄色指貫、
薄色織襖香帷、

忠高、海松色狩衣、香帷、
淺黃指貫、

能定、二藍女郎花生衣、
二藍指貫、

忠俊、女郎花狩衣、薄色
生衣、二藍指貫、

宗同
宗繼、花田、

宗茂、

左衛門尉
源親直、花田、

同平貞時、

右衛門尉
同宣季、薄皮狩衣、

左大將殿御方前駐各參之後、依大殿仰被差別、
藏人大夫、光、花田香帷、

時阿波守、良、宮襖帷、
薄色指貫、

以金吾歸後、法印來談之次、自隱岐歌川首許云々書進給
由被仰、高野宮當時歌御沙汰不得心之由、内々雖有御
不審、書出可進之由被仰定惠園梨、傳法院舊年訴、定
毫張本七人猶可召進之由、此兩三月自關東被申、大股
又奏聞、文基、陰陽師文鏡子、日來在京奔走、頗無納受之處、
等歟、

獻金漸々相積、功能露顯歟、此間被仰下、仁和、伴張本
更不可參、依定毫欲心定聖續及磨滅歟、極不便、又或
說、天王寺猶塞路閉籠、又云、吉水僧正有籠居之聞、
自殿邊不、惜天王寺而遁世不知耻、雖長顯密不便事歟、
快云々、此間少輔入道來會、同時對面、相伴山僧、法橋、梨本之
張本僧云々、依數奇來云々、仍先對面、即謝遣之、此後

左衛門尉
藤俊清、蘇芳香、

同中
行親、虫襖、

左近大夫將監
家盛、薄色織襖、薄色生
衣、薄色指貫、

左近大夫將監
資憲、白襖帷、
薄色指貫、

以

金吾歸後、法印來談之次、自隱岐歌川首許云々書進給
由被仰、高野宮當時歌御沙汰不得心之由、内々雖有御
不審、書出可進之由被仰定惠園梨、傳法院舊年訴、定
毫張本七人猶可召進之由、此兩三月自關東被申、大股
又奏聞、文基、陰陽師文鏡子、日來在京奔走、頗無納受之處、
等歟、

獻金漸々相積、功能露顯歟、此間被仰下、仁和、伴張本
更不可參、依定毫欲心定聖續及磨滅歟、極不便、又或
說、天王寺猶塞路閉籠、又云、吉水僧正有籠居之聞、
自殿邊不、惜天王寺而遁世不知耻、雖長顯密不便事歟、
快云々、此間少輔入道來會、同時對面、相伴山僧、法橋、梨本之
張本僧云々、依數奇來云々、仍先對面、即謝遣之、此後

以

金吾歸後、法印來談之次、自隱岐歌川首許云々書進給
由被仰、高野宮當時歌御沙汰不得心之由、内々雖有御
不審、書出可進之由被仰定惠園梨、傳法院舊年訴、定
毫張本七人猶可召進之由、此兩三月自關東被申、大股
又奏聞、文基、陰陽師文鏡子、日來在京奔走、頗無納受之處、
等歟、

獻金漸々相積、功能露顯歟、此間被仰下、仁和、伴張本
更不可參、依定毫欲心定聖續及磨滅歟、極不便、又或
說、天王寺猶塞路閉籠、又云、吉水僧正有籠居之聞、
自殿邊不、惜天王寺而遁世不知耻、雖長顯密不便事歟、
快云々、此間少輔入道來會、同時對面、相伴山僧、法橋、梨本之
張本僧云々、依數奇來云々、仍先對面、即謝遣之、此後

以

金吾歸後、法印來談之次、自隱岐歌川首許云々書進給
由被仰、高野宮當時歌御沙汰不得心之由、内々雖有御
不審、書出可進之由被仰定惠園梨、傳法院舊年訴、定
毫張本七人猶可召進之由、此兩三月自關東被申、大股
又奏聞、文基、陰陽師文鏡子、日來在京奔走、頗無納受之處、
等歟、

獻金漸々相積、功能露顯歟、此間被仰下、仁和、伴張本
更不可參、依定毫欲心定聖續及磨滅歟、極不便、又或
說、天王寺猶塞路閉籠、又云、吉水僧正有籠居之聞、
自殿邊不、惜天王寺而遁世不知耻、雖長顯密不便事歟、
快云々、此間少輔入道來會、同時對面、相伴山僧、法橋、梨本之
張本僧云々、依數奇來云々、仍先對面、即謝遣之、此後

以

金吾歸後、法印來談之次、自隱岐歌川首許云々書進給
由被仰、高野宮當時歌御沙汰不得心之由、内々雖有御
不審、書出可進之由被仰定惠園梨、傳法院舊年訴、定
毫張本七人猶可召進之由、此兩三月自關東被申、大股
又奏聞、文基、陰陽師文鏡子、日來在京奔走、頗無納受之處、
等歟、

獻金漸々相積、功能露顯歟、此間被仰下、仁和、伴張本
更不可參、依定毫欲心定聖續及磨滅歟、極不便、又或
說、天王寺猶塞路閉籠、又云、吉水僧正有籠居之聞、
自殿邊不、惜天王寺而遁世不知耻、雖長顯密不便事歟、
快云々、此間少輔入道來會、同時對面、相伴山僧、法橋、梨本之
張本僧云々、依數奇來云々、仍先對面、即謝遣之、此後

以

天福元年 八月

三百七十九

天福元年 八月

三百八十

大雨降、又休止、法印歸、夜猶熱、

七日、乙卯、朝天陰、即雨降、間止、未時大宮三位被來談、前宮內歌州首許可書送之由頻譴責、遂書送了、書題可書歌本意有之由云々、殊急責取之云々、長者僧正書狀、御修法了可歸本房宇治、雨不降、自殿預纏頭佛德物吉由、自讚可貴、

八日、庚辰、自夜甚雨、申時蒼天白日間見、巳時許興心房來給、日來重惱、適少減、禪相門俄被惱之際、頻招請所扶起也、大殿又日來種々仰被召尋、仍兩方欲參、近日人多病惱有溫氣云々、今明日有所慎、立物忌簡、簾付物忌、秋中庚辰庚戌可慎由昔有庭訓、金吾來、

九日、辛巳、天晴陰、未後甚雨、中務來談之間、兵部卿來臨、扶病言談、自然移漏、凌雨被歸、中務云、宗行卿後家、宗氏所憑周防乃宇美庄、資經卿忽申給、宗氏失世途、母尼不廻時刻馳下關東、

十日、壬午、朝天快晴、巳時許經圓僧都來談、一日比舍兄朝臣傳、午時迎蓮房成茂宿禰同時來、相並對面、未

時許金吾來、大殿禪門皆無別御事、座主宮平滅給、一昨日八日、小除目、大監物一人、內藏允一人、從三位藤實經、無他事云々、去八日萬機旬依雨延引廿一日云云、十月兩大臣輕服、大納言定通卿節下勤仕云々、知宗催安嘉門令旨、十月御棧敷御幸、可調進女房表襲唐衣各一具、申領狀了、夜宿木所、昨日曉鐘以後歸、

十一日、癸未、自夜天猶陰、已後雨又降、午時許淨昭房來之間、左京權又來臨、甚雨之後各歸、

十二日、甲申、天適晴、依彼岸始扶起念誦、午時許但馬前司來談之次、漏聞世間事等、自身未被觸示、若隔心之中歟、

九條大納言殿撰卅六人令書其真影、信實、被進隱岐歟、其事又有取捨沙汰、被仰前宮內歟、以撰歌本望忽入興歟、是皆推之許也、臨昏家仲來談次、自隱岐召京人々歌、於北野有歌合之由觸緣傳聞、去春事歟云々、每事別儀歟、今夜行幸云々、

十三日、乙酉、天晴陰、未時許金吾來、夜前行幸、右大將、四條中納言、左兵衛、右衛門、別當、宰相三位、通、中

將少納言重房聞司奏以前進出、出納告之令退云々、今日御逗留內裏、有犯土明曉還御云々、主上自乘御々與云々、此五六日之間、孝範朝臣入道、歸泉云々、殿下三讓表、經範朝臣二度書之、第三度未被行云々、文道大卿只一人歟、可惜可悲、

十四日、丙戌、天晴、今日又暑氣流汗、然薄穗已出、萩花散了、

十五日、丁亥、自夜甚雨、終日不止、朝間殊以甚雨、放生會供奉人不聞及、未時許金吾來、參西園寺、

依例懶法號渡、今朝白地出京、昨日依中納言入道範朝卿招請向岡前、故輔三位

家光、十三年忌日、聖覺法印說法、其次謁督典侍、

佐渡聞食勅撰由、若奉載彼御製者、相構不止計略可示合由有御氣色云々、尤可然事也、知食物儀之仰歟、

行幸還御、三位中將之外同前、主上又自乘御、御成人

如五六歲、放生會伊平卿、有親朝臣、經光聞及諸衛不

知、源家定每年參勤云々、雅清卿以來依私別願、每年

供奉之人出來、頗不似公事法事歟、夕歸了、夜猶雨不

止、

十六日、戊子、朝猶微雨、終日濛々、午後心神違例甚爲奇、當時無指事、又甚不快、口味又違例、不遂此清書之尤可爲遺恨、

十七日、己丑、終夜今朝雨猶降、申後天漸晴、典侍退出之次加小灸、今日依吉日印文損忘、左手三所許灸之、

十八日、庚寅、朝陽適鮮、河崎慈應寺、被渡最勝四天王院之後、今日遂供養、聖覺、廬催近邊、昨日奉送被物一重、御

願寺之爲體可悲歟、柱繪屏繪等皆如本渡之云々、念誦之間、午時許少輔入道來臨、不經、未時與心房授戒給、

其後猶出見辻祭、院御覽、一條東行、今出川北行、入禪相門、又參入持明院殿云々、懸風流用錦繡金銅、歸來後

與心房歸給、夜着綿衣、灯取入、

十九日、辛卯、朝陽晴、早旦典侍歸參、家仲來次、問放生會事、上卿前駐二人、家仲叙爵、今一人同歸物、入夜着社頭、宰相不具

前駐、雨間每事遲々、又有訴等、神輿入御、及未時舞取笠相撲及深更、乃後夜歸云々、金蓮來、今日庭實梨子

天福元年 八月

三百八十二

二二六

依虫損落失、令取進上、女院御方之外今年加一籠獻前大僧

正御房、昨日典侍進一位殿御方了、今晚禪門被下向有

馬云々、公雅卿、實持朝臣、尊實、公卿、唯進房供奉、

廿日、壬辰、自夜陰暗、已後甚雨、午後天晴、未時許迎進

房來、如此輩不可入由有沙汰、頻見來尤不便、芋穗色

殊盛、梨子進安嘉門院、付二條殿、

廿一日、癸巳、夜雨降、朝後或晴或降、今日萬機旬云々、

出居左中將宗平朝臣、頭外上旬以後事歟、女院御產定

御調度御覽又今日云々、其後訖兩院渡御近衛二品新

第、明日可有退御云々、金吾來、不參旬、有暇云々、不可然事

也、未時許右中辨來臨、東帶、旬出居侍從左中辨參不

定、若不參者可動、有催出次之次先來之由、金吾相共

言談、御產定爲院司可奉行由被仰云々、自然經程參內

了、金吾夕歸、可參會近衛云々、典侍同參、

廿二日、甲午、天顏晴、雲雷収、去夜有痢氣、脚病者依大

切不療治、今日無餘氣、九條三位音信、稱所勞自門外

歸、午刻許退御云々、

廿三日、乙未、天晴、良算法印早旦來謁、淨昭房來、四位

少將兼輔卒去云々、痢病、去十八九日事歟、是定輔大納

言遺跡相繼子也、嫡男親定卿、二男兼信、當時乞食云々、不聞世事、少將入道

具親、可來由有音信、答所勞由、以書狀兩三度問答、

廿四日、丙申、天晴、少將入道具親、來臨、扶病相謁、兩息

各光華之由今日委聞之、近日物吉無極歟、少將教信去

比出家云々、於高野遂之、源大納言爲聲、吹舉又違背

等之間發心歟、或云、違背以後無渡世之計之故云々、

又聞、兼輔備後庄寄桂宮相模奉行得分、任意所立也、二品早被給他領、又

曉望云々、哺右京大夫被來謁、自然清談及夜漏、今夜

初聞、親定卿豐後、兼高樞督下野給云々、夕郎得分歟、

可恐世也、大殿自今日御九條殿、四五日文書沙汰云々、兼直宿禰又

送此草、

占云、依神事違例穢氣不淨所致之上、公家非慎御々

藥事、從怪所并巽坤方奏口舌動搖事歟、

神祇官

主稅助在盛朝臣

權少允在職

卜怪異事

問、鴨御祖社司等言上、去月廿三日注文備、今月廿二日未時東御寶殿外殿師子兩方銀花見出事者、是依何咎祟所致哉、

推之、依神事違例所致之上、怪所可有驚恐事歟、天福元年八月廿日 從四位下行權少副卜部宿禰兼賴神祇官

占云、依神事違例不信所致之上、怪所并異坤方口舌動搖事、

卜怪異事、

問、北野宮寺所司等言上、去月七日注文備、今月一日酉時自顛倒之一夜社立烟事者、是依何咎祟所致哉、誤脱アルカ

推之、依本所神事違例所致之上、怪所可有口舌事歟、

同日 署同

上卿權中納言、伊平辨職事、不參、

廿五日、丁酉、朝天陰、微雨漸降、未時甚雨昏止、昨今念

師、臨昏金吾來、御產定依不參不知其議、事訖之後渡

御近衛、上皇御車、女院御輿、殿上人各三人參御共、

有寶、親氏、家數朝臣、四條別當、兵部四人依仰參會、渡御之後出

御、大將陪膳、供御膳各預膳、次名謁宿侍、後朝大將被

參西郊、大井川近邊建立山庄儲馬場之由被申、忽今日可見

由相議、還御以後即向彼亭、四卿有寶、親氏、亭主已下

巡見、相共向公棟入道家又見之、又歸本所、少膳之後

歸參云々、御產御祈之間、當時御所依可無便宜、可御

近衛新所、仍又立副屋經營事多云々、

廿六日、戊戌、雨終日不止、夜猶打窓、方違昨日雖滿、依

雨夜之煩不出門、

廿七日、己亥、朝雨猶不止、北方雲漸晴、已後陽景見、無

見聞事徒暮、

廿八日、庚子、朝天晴、巳時許金吾來、湯山二七日之由

雖被企、惱氣猶不快、依可被歸京、內府明日被向水田、

依招引可伴申、今日又詣內府云々、所惱違例之間、遠

所下向本自不可然事歟、南京僧二位得樂云々、來示季頭訪、答

天福元年 八月

三百八十四

庭弱不能助成之由、

廿九日、辛丑、朝天晴、午許少輔入道來談、未時許六條三位入道音信、依窮屈無術答他行由、被送歌草、夕宿本所、甚雨之後昨日歸忌之故也、自夜雨降、曉鐘以後歸、

○九月大

一日、壬寅、自夜甚雨、午時休、未時天晴、金吾家殊無人之由、女房示送、禪尼至宿、

二日、癸卯、朝天陰晴、夕禪尼歸、金吾只今歸着、彼不例事無爲云々、今夕皇后宮行啓之由傳聞、不知其故、

三日、甲辰、朝雨降、辰後天晴、雲雨不定、有長朝臣隣後見法師住所群盜入、斬殺房主、盜又蒙疵死、雜人競見云々、誰人逃此難、頭懸菊湯、未明許金吾來、湯山依

咳病被歸京、昨日別當相共自今津騎馬歸京、即參御所、□□□□三條少將來臨面謁、不經程金運來、去夜群盜踏破金蓮小屋檜垣爲通路、又破中垣入隣家、緣以存命云々、初月雲間纔見、

四日、乙巳、天曙時雨降、朝陽晴陰、未明金吾來、夜前無人之隙、伺御製事、頗依快然、資季朝臣令書題送入、明夕可送有印、

五日、丙午、天晴、夜前和歌延引云々、金蓮房來、傳聞、女院千度御祓、一昨、日歟、陪膳宗平、能忠早參勤仕、有教、雅繼、中將、權督、雅繼帶劔云々、不知其由、

六日、丁未、天晴、大宮三位被過談、大祀歌可見之由也、大概宜歟、得骨人不可依事歟、及秉燭被歸、右衛尉成季依去夏事不好出仕歟、可寓直女院門、宜秋、之由申請、大

殿伺候彼院之間、一日比有放布障子之盜、侍追欲搦之間逃去、成季從者也云々、事重疊、成季耻病云々、子息光是イ男先立出家了云々、依造營無沙汰、伊與、尾張、並、御社和泉、南徒衆發訴云々、

七日、戊申、天晴、金吾來、五首歌被尋仰云々、夕歸、

八日、己酉、土用、自夜雨降、爲繼朝臣來談、勅番、候安嘉門院之間云々、爲繼、賴清、兵衛、知宗、長氏、光成、少將、公齊、侍從、良賴、周房子長綱、前左馬、今一兩十二人六番結

之、各一月五、金吾來會申時許歸、

九日、庚戌、凶會、天晴雨降、宗家朝臣使者下人來云、母堂去六

日他界無申限云々、答承驚由、去月招請下向志深庄、

不經程無常之習、雖不可驚、旅行之後極以早速、今年

六十四、今明閉門付物忌、女房裝束貧家營出云々、寶寂沙汰

也、裏面白、但其裏續繁筋云々、近日筋繁、棄燭以後西方有

火、一條北萬里小路東云々、此邊無小屋、非近之由思

息之間、西風利而烟炎吹掩如雪落、無人貧家失東西之

間、右馬權頭來訪、相共於廊妻見火之間、大貳少將來

臨、人々使雖音信無實救火者、良久而金吾來、後左中

將被入坐之間、適火滅了、中將暫言談、金吾相共參御

所了、月清明、伯中御門入道、中御門中將、京極中將、

持、兵部卿、但馬前司、送使者、

十日、辛亥、天晴、物忌閉門、典侍參內云々、助里在共、夜待有

弘母相共歸洛、

十一日、壬子、天晴、淨照房來、永元來會、言述懷奇物徒

事也、未時許六條三位入道被來坐、相謁、金吾來月前

初乘車參大殿、源少納言入見參、即出御、被仰月來事等、入御以後暫與有長朝臣言談退出、凄涼月前思往事、動幽襟、

十二日、癸丑、天晴、金吾來談之間、左京權又來臨、雜談之後各參御所、月前參安嘉門院、以僮僕申女房之間、內府被參、存外及清談、散月來不審、病後初參之由、即被參罷中、仍退出、月陰晴、

十三日、甲寅、欠、朝天晴、時雨濕、入夜間陰、亥後月明、遲明

告來云、如御產之氣事御、所存來月也、然而不似他御

不例云々、日出之後聞、人々已群參云々、晝并臨昏伺

聞、大略御落居云々、八幡別當法印音信、稱他行由、

十四日、乙卯、朝天晴、夜月明、日出以後着直衣、平相指貫例直衣、

參院、無人之間也、季賴在中門廊、行御祈事昨日一日佛

奉安中門、五體、雅繼朝臣、中將布衣、徘徊、暫居二棟弘庇、右

中辨參、惟長適見申參由、引導參馬場殿、御裝束之間

也、御氣色之體、非偏御產、御腹時々令痛給、又御邪氣

頻令發由被仰、令昇給之後、依無路妨於典侍局適謁、

天福元年 九月

三百八十六

二二〇

當時非殊御氣色、只邪氣之祟歟云々、少時自北門退出、金吾參、入實寂宅喚妻孥等、今日不還、依不重夕也、與心房被宿、此宅東方謁申、夕金吾來、月清明、頻雖伺聞、只同御有樣歟、

十五日、丙辰、朝陽快霽、日出之程參上、攝政殿仰、大略如作日、去夜又令發惱御、御物氣渡御落居云々、高嗣

又奔出奉告、大僧正御房又令發御、殿下即御參上、左大將殿

同、諸驗者五人同參上、御加持之後、又殊事不御歟、金吾實持朝臣等參之後、已時許退出、一長者僧正可宿此宅之由、先日被示云々、仍歸吾廬了、今度御有樣愚意甚怪思、心神無聊、臨昏聞猶如昨日歟云々、

十六日、丁巳、朝陽晴陰、秋風嫋、庭樹已黃落、典侍返事只同昨日、御邪氣殊露出、彌御違例多云々、依無殊聞事今日不參、夜月陰、

十七日、戊午、朝陽晴陰、夜月暗、典侍有御神事、時イ明程不可退出由、未終許退出、一昨日朝邪氣快、渡後頗宜移御上皇御所、可爲近衛殿之由人々頻雖申、當時無其事

云々、秉燭之程歸參、今夜不可參上云々、

十八日、己未、自遲明雨降、不辨色、告云、御產成了、感悅之處重尋申、使歸云、今一事遲々御、又男女御事不聞云々、推之皇女歟、不堪行步、老者兩日煩多、不能馳參、極以不審、御產以後上皇渡御近衛亭云々、頻雖令伺、及已時無聞事、殊以甚雨、午時許下人歸來、局者書狀、典侍自曉未下於後御事者成了歟、猶驗者達雖奉加持、人々氣色極奇云々、金吾曰、今騎馬不及取笠馳參院、又馳歸云々、又々來、雜人等漸稱御絕入之由、聞此事已以無憑事歟、未時許猶不自書、以人可調送袈裟之由示送、早速雖不取、敢不及加詞、今年廿九不堪其悲、何事在乎、申刻許參、此同離止、北政所、白地渡御一條殿云云、御車寄此局、仍暫在本陣廐西方、平宰相直衣依召參、以有長朝臣被仰合、此間事大略申所存、宗光卿同於此所聞之、三四度往反、先是殿下不令穢給由、彼御共人著沓、此間又天下皆不可憚由云々各脫沓、心中吞悲、視聽事不入耳目、北政所御車出了由聞之、仍於局

介招出相達、御產之後猶有御言語等、只今苦御身御、與心房伺候有御戒、合掌聞食御氣色、大略其間漸々御閉眼歟、心神迷惑、前後不覺云々、御胞遂不令下給、御身當時猶不令冷了御云々、自簾後聊見其面、即退出訖歸家、乘燭雨又降、

十九日、庚申、天晴、自曉金吾私家又有產氣、非火急云云、度々雖相尋、當時無殊事、午時許聞頗取頻由行向、侍男來云、產成了、女子今一事遲々、但在朝々臣密々來、更不可有事、只今可成由稱云々、須臾之間成了、例律師醫家貞幸等引馬各退出云々、承悅參冷泉殿、逢局者、大殿只今入御、召平相公、被仰雜事云々、夜上下無人、甚等閑惟畏無極云々、每事存外無路便、而不來謁退出了、不聞世間事、金吾籠居了、折節如何由雖示可休息云々、

廿日、辛酉、夜月朗、天無片雲、世間事依不審、以書狀問二位宰相、返事云、昨日參、深更退出、無日次之上、一事以上未及定日沙汰云々、如一昨日聞云々、土用之上

無日次事、悲中之悲也、雖有出行之志、與心房可來之由被示、仍相待、午終許被入坐、一昨日事等委語給、心神迷惑難注付、十七日巳時許參入、御相貌違例多、御體定有御苦痛歟由申、未及半時忽令痛御、聞人頗有發信之氣、御加持等騷動之後、又聊御落居、依召度々往反、夜半彌又有召、參後大略御危急、遲明御產欲成歟、大殿仰、片足令出御、驚由御周章、雖然不久而令生給了、男皇子、巳亡給了、後御事遲々之間、御氣色已以如變、下御頂髮可奉授戒由、大殿被仰、仍奉授、驗者逃、タモツトモ、無御詞、此典侍聞食歟由申、有聞食御氣色、至于第七戒、每度令領御、有御合掌、其後大略令終御歟、如今聞者、如此急難之中善人之御終歟、北政所女房奉引懸、奉出近邊、其後奉臥了、暫退下、又有召參、可有御出家之儀由被仰、仍持參頭剃奉剃、刑部卿親房卿女、典侍御髮ヲ分、又以水奉濕、無煩奉剃了、奉令着御衣袈裟、典侍以念誦御手爾奉令持、急可被徹御綿衣疊乎由申、又退下、此上大殿仰、猶雖不混合人、可叶御用由被仰、無性

天福元年 九月

三十八

體事歟、依風病無術歸本房、今朝又被召參一條殿、只今罷出也、覺印僧都候近邊、可念誦由蒙仰了云々、私事父母自身公家上皇御衰日、皆悉有憚、重日之外無日、今日奉示合、猶於公家者非殊祗候、廿三日可宜由相定了、第女子年來有此本意、以此次可伴由頻懇望、是又尋常之儀也、自一昨日許之了、年三十八、無所歷、所思取穩便事也、悲歎心中窮屈不能扶出之上、典侍招請母儀、仍密令令參、自去夜局在本西方云々、秉燭以前歸來、明後日^{廿二}於寶寂宅洗髮、可歸參云々、廿四日御入棺、三十日御葬送之由内々有沙汰歟云々、又云、院中無人、怖畏無極、宿直者大切云々、此由心中吉事家雖^無心力、依此家無人示付金吾了、金吾參院云々、產事若不披露歟、夜深月清明也、

廿一日、壬戌、朝雪繽紛、時雨俄降、午時雲晴、靜俊堅者父喪五十日過了、來談、去十五日夜丑時歟、於大原見及大星^焚、追月責寄入月中了、出月西欠入不見出云云、今夕諸社諸寺怪異天變惣不可勝計、全無驚懼御祈

且是無物之故歟、遂如此、向後猶不便事歟、未時許參舊院、無人寂寞、惟長一人徘徊於局、聊言談、右京大夫能忠朝臣在東方云々、不廻而退出、參大殿、又以無人、近習者不見來、季繼宿禰適參會、僅言談即退出、入夜金吾來、此間私產穢不及云出之由、人々相示、出仕如例云々、其後男女房惣不入見參、朝間御念誦之外偏籠、御供膳事如絕思、座主宮爲諫言參帷帳前給、只聞御涕泣御音、流淚空退出、北白川院入御、無便由被仰、召狩御衣之後、無御言語、而御落淚之間又咽淚、還御事尤有危急之由上下歎息、御所向京極殿舊樹極不快之由人々申給、欲令渡御持明院殿云々、禪門悲歎、今度又無比類、如兒子涕泣云々、本所御有樣臨此事猶以在外被恐魔性歟、先不令籠候、凡自月來次第之沙汰懸有傍難、此後事又以同、右中辨奉行事被召仰、無是非領狀、可辭退寮務之由申了云々、諸人當時雖有感氣、是又將來不可有其賞、每事無其憑、時儀云而無益、御產之時刑部卿^{右京}女、奉抱、後御事進々之間忽如絕入、の

けさまに臥之間、大將殿替奉抱給、如此之間、御身自然動搖、彌有不快事等云々、是又魔縁所爲歟、在朝御着帶日以後三ヶ日可參御反問由被仰、初參日御邪氣強盛御急被渡御物氣、可有御反問由申、更無其沙汰、何初日以後不參云々、座主宮又御帶加持、必吉凶事覺悟、此御事必可有事歟由被仰別當云々、右大將室三位帶時、必一人可有事由被仰、親氏誕生之時、母子無爲、二品有不奉信氣之間、經十五六日誕生、女子天云々、廿二日、癸亥、夜月晴、自遲明陰、微雨降、辰後陽景見此兩三日有殘暑之氣、陽景暖而蜂多飛、又雨頻天陰、御入棺遲々間、最惡事歟、旁增悲歎、今年菊花極遲開、昨今纔綻、木葉已黃落、午時許大宮三位被過談、參院_{今日始}退出云々、兩大納言兄弟取笠三人達公卿座云々、此御葬所月輪殿東西印圓僧都興造小堂被召云々、御墓所參、牛車極難堪歟、京極川邊凶事、稻荷坂墓所詣前世宿報也、時雨或降或晴、

廿三日、甲子、非三寶吉西風吹、朝天晴、辰時許禪尼香、次女行也

天福元年 九月

賢寂宅、典侍退出、沐浴相具可向興心房菩提院云々、公家御衰日猶有披露之恐、母衰日人不可知、明曉遂此事之由、可披露之旨示送了、未一點向菩提院房謁申興心房、不經程女房等來、即始其作法、房主紙二枚三被書左右字、各一次分左右髮各結之、次懸水瓶湯、先是令拜父母國王氏神、只作能也、戒師取頭剃被剃始、左髮三、右髮一歟、次剃靜俊替剃左髮了、共人取其髮、裹左字書紙、多、次剃右、又如此、次其上又委剃、終懸湯洗、次著衣、帶、次戒師取袈裟、誦文被授、尼取之戴返之、戒師又誦文被授、三度戴了、又取之結之、被着筥了云々、起改座、次第又如此、二人着袈裟了、相共參持佛堂釋迦如來、道場戒師昇禮盤被授戒了、各退出、如形布施物相具來云々、如手箱物歟、隨之不委見、予先歸了、女房急歸此宅、御葬以前祇候人、宿他所無憚由房主被免、仍歸此宅之間、入夜金吾來、雖御葬以前猶祇候人退出、可有日次沙汰由、二位宰相示之云々、仍夜中令歸參了、子日事又強不及沙汰歟、金吾令伴參禪門、內府今夕被聞此由、所

天福元年 九月

三百九十

二三四

存車七種便之由被示云々、自大殿女房、有長物見車歟、由被召舊車、車軸等甚弱、險阻路有非分之破損者、遂亂之謗可無限事歟、甚不便之故粗申其由、貧者借車由、定爲不快之基歟、其日五六日之間、一日百千之車蓋被調哉、二親外祖於今者奉忌諱、被借車之間被召破車、可彈指之世也。付視聽悲多、大殿永不參御前給、如嬰兒奉懼給之故歟、御兄弟其後不奉見給、每事聞驚者也、廿四日、乙丑、朝陽快晴、未時許參院、於殿上階子上、與知宗言談之間、內府被參、被入寢殿東西廡中之後、以知宗暫可候由被命、存外日廡、左大辨頭辨來加、先是兩大納言兄弟在公卿座云々、內府被加其座、以知宗被召着、于大辨修理加其座、內府被示云、雖非態議定、當時御所之間事、各可申合由被仰下、此御所舊木之向、於事無便宜由有申人々、又可爲御所々無之、內々被行御卜之處、此御所雖始終無凶、當時口舌病事由卜申、土御門堀河終始總不吉由申之、持明院殿雖御卜吉、女院御同宿不可然由思召、仍右大將亭大炊御門鳥丸、其西、府方、

當時居住泉亭等如何者、各於御卜不吉者、尤雖暫渡御他所可宜由一同、予申云、此中鳥丸其作已尋常、雖尤可宜、隔築垣隣家範宗卿、去夏有事、其門前御路猶憚之、一町之內無骨歟、泉亭偏如山庄、雖無威儀度々已爲公所、去年爲御見物入御、暫爲御所、何事候哉、於陣近邊者、白河院態召、內裏近邊人家連々爲御所、故可被庶幾候歟、上下大略被同心、內府被入簾中了、職事兼高進來、主上御倚廡代之間事密語、各被申所存歟、不委聞、右大將被加座、于此間退出、參舊院謁女房、相公今日事、只傳聞許也、事々又迴々無音歟云々、依及日入退出、永光朝臣禪門御使來臨、歸了云々、今夜御入棺云々、

廿五日、丙寅、自曉雨降、終日不止、午時許永光朝臣來、女房出家事世習聞不存可存事、爲近習人被思切之由、殊感申由等也、其次久言談、謝恩問由、未時許大貳被來訪、御所可爲冷泉殿由定了、依禁中無人、皇后宮去廿日俄入御、御車左衛門督兵部卿供奉云々、繁茂弟小

男、夜見古木成臆病歟、病惱云々、縱雖非實事、如此所尤不可爲御所歟、與心房返事、去夜丑時無爲被逐了、印圓、覺印、圓覺、惟長、宰相殿、權大夫殿、勤仕之、入夜宿所邊聞鐘歸、

廿六日、丁卯、朝天陰、午後天晴、巳時許參禪門亭、於北面出居仰云、咳病猶無減之由被命、述心事退出、參殿

下、依召參西御出居、仰云、御錫紵倚廬代事猶未思得、內府殊可爲嘉承之例之由被溢、兄弟大納言等同歟、彼初踐祚之日也、永萬治承無是非隨彼歟、是已御即位訖、永萬治承又同、

萬機句又了、彼二代不然、何被憚之哉之由存也、只今被尋出、橘廣房記御覽之處、嘉承江帥可有此兩事之由申云

云、彼時無此事、隨江帥申由人多稱之、已以虛誕歟、實不審之由申之退出、參舊院、藤中納言、二位宰相、修

理、右中辨候、暫加其中、有長朝臣往反歟、大殿未時許御參被召親季車、御葬送之儀庇御車、御車副二人、隨官四人、侍男六人取松明前行、次公卿上人已下云々、當時可被催人、兩大夫、納言、新大納言、高、權中納言、伊、參議三人、經高、爲家、

實顯、三位、經時、殿上人十七八人云々、裝束二位宰相束帶例衣冠歟、下袴、雜色二人、非結裝束、取松明、布衣又相交歟云

云、予退出、辨云、雖承奉行由、御前僧未被下、近習等皆知歟、八

人云々、此員數如此之時未聞之、准八條院御時云々、

不得其心、凡每事不定又遲々、吉凶皆如此、高嗣以指

圖道場事等被仰合相公、昏黑歸家、一昨日被奏遣令、

右中辨爲使、土大納言上卿、上卿無宰相、警固召仰右少將親繼左

門忠高之外尉等云々、垂御簾止警蹕、相門命云、賢海

申所勞不參、此御祈此間頗狂、穴面白我所祈請成就之

由身稱云々、定高卿頸腫物甚有怖、有似故院御事云

云、是深恩者心中狹逆心之輩也、蒙天罰歟、院御修法、

座主、內御修法、上乘院僧正、可修給云々、此局上童小女立臺盤

所腋戶下之間、聞哥笛亂舞音、成奇見之、北壺折鳥帽子

男亂舞云々、其後心神違例、不食而臥云々、極以可奇、

入夜金吾來談、渡御冷泉亭來廿九日云々、

廿七日、戊辰、朝陽晴、天漸陰、大藏大輔親繼爲富小路

中納言使來由示之、即相調、世間事典侍身上察思之由

三百九十二

退如何者、然者不著殿上直可著陣歟、將可着例殿上歟、

又藏人着素服不着例殿上、日給簡封如何、藏人一人不着而可行歟、將雖給素服、又着吉服可行簡封等歟、兩卿已下不議定申、依新儀大略奏吉歟、度々雖往反、無聞出、公事、非其仁者不及委聞、但給素服更着吉衣事、故入道殿深被難仰事也、今被仰其由事、尤以不當、心中思而聞之許也、適御裝束之僧等已參入、源大納言_{直衣}又參入、此間妙香院參入、又御對面云々、時刻移後事始、辨觸大納言申此由、歸來仰鐘、各着座、大納言、家光中納言、宰相、高、三位、明辨法印講師說法了、各起座、少藏人手長各取布施、被物三裏物、已下殿上人、宰相、三位又取請僧被物、手即退出乘車、路頭見物車已塞、無寸分路構乞受、二條東行自大炊御門廻入宿所、不經程聞出御由、次第、

當日曉依吉時差、遣行事於山作所致其沙汰、陰陽師同參向、早且召行事院司下賜可給素服之人々夾名、_{安元自五位院}院司召主典代下給之於嚴任、吉時令裁縫、女房料、_{唐衣或加裳、院司等御之時必加之、此間川鹿組、}公卿料、_{如直衣、殿上人已下料、如狩衣、已}

上用商布裁縫畢、任刻限自願各送之、或又以使請之、晚頭行事院司卒侍等令奉仕御裝束、_{其儀、御手水供膳在別、}之儀如日來、刻限先被行御佛事、四位院司申事由、觸可始之由、公卿上首次公卿著座、次前僧著座、預兼可置花筥、御導師著禮盤啓白、說法畢、導師復座、次賜布施、御導師被物三重、裏物一、布一結、題名僧被物一重、裏物一、稱皇寺御誦經、_{自今日每日溫室、今日以後每七日可被修之、}佛事卒御前僧可參會御堂、硯御車於出御方庭上、無榻、御簾懸簷半、_{垂懸之、懸草可短、仍以紙捻結綴之、}御下簾、_{宵末}懸之、御車寄具兼儲之、_{御屏風御几帳如例、出御之後即送還御堂、又可儲供之、}次出御、先蓋御車、_{六人}付轎、御車寄人參邊、立屏風几帳如尋常、公卿已下列坐庭上、_{皆悉先於便所着薰香、}殿上人取松明、北面下臈六人又取松明伺候、先是御棺役人一人以脂燭燃付御枕上燈、召彼下臈一人給之、令移付松明、可殘分五人、_{安元例如此、建久無此儀、}行事院司取松明進候御車邊、次本役人昇御棺奉移御車、以御方爲鴟尾方、昇御之人、

以滅緒末結付前方梓乏手方、昇御枕方之人、又以件

天福元年 九月

三百九十四

二三八

緒結付後方手方、皆引違結付之昇御之人自御車前
降立地上、以紙捻結付前後簾於御車軸、役人各退
去於便所著藥沓、治承儀著藥沓昇宮上、然而平生之儀度々例如此、

少引御車懸御牛、出御、自西面北門、其路行事一人候留

守、安元二人、河內守、光遠、民部丞盛實、次竹箒、自廳進之、拂拭御在所、件役常例

用藏人、安元無所見、正寢板敷召工令削之、加奈久津納微一合可流無憚方河流之由下知之、安元河水

流之、又切放筵之下簾已下、遣同河可切流之、御竈神仰

廳令送無憚方之深山、廳官一人相具之、女房乘車、

安元二兩、會山作所、路頭行列、先北面下膳六人取松明前

行、二行相並、次御車、廳官六人付轅、御車副二人遣之、牛童

持御榻、北面下膳四燒香、如蕭物、安元此役各別歟、候左右召使四人持

相從、用此儀之時納免於和袋懸頸、御棺役人等近候御車邊、以仕丁持雨皮張

筵、次公卿、次殿上人、四位五位六位次第一行、北面下膳等、次主

典代、已上僮僕可依建久例、到東山御堂近邊於嶮岨所

控之、先放御牛、廳官等付轅引立、召加召次等、廻御車、立御

堂前庭、立榻、以隨尾方向御堂方、公卿已下列居前庭、

次導師呪願參進、數章、御車後方奉仕所作、預立聲、兼所作可儲候、

畢、導師呪願退出、即賜布施、各、次寄御車於御堂、御

車寄人、其具兼又儲候、參進寄之、次本役人參進奉昇下御棺、

暫安置御堂底、此間御前僧已下列立便宜所唱合鼓、

勅使參入門外、四位院司相逢歸入、申公卿院司、々々

々々、又出逢申御返事、件勅使度々參入、次第每度如

此、次以御棺奉安元底、此枕金泥法花一部納御經爲安置御枕上、建久以來加和構之、本役人

人數指不地者召加之、從之、各降自石階安石辛櫃內、可奉懸布綱

歟、次御棺四方入小石等、本役人等之外可召加侍等、侍等運之、次覆石

蓋、其上覆四寸半板、其上、敷平石、加土築固之、次塗

石灰、件事次第如此、然而依安元例追可有佛壇、隨事

之便宜、作所相計可進止、久安石置上、奉行又構轆轤奉入御棺、堂中隨便所

打燈械等舉燈、又役人等差脂燭、聽諸之、此間於便所有舉

物事、行事便可、山作所行事、御車屏風二帖、几帳二本、使用御車寄具、御座

兩三帖御膳具、御盤、御手洗棟等也、件物長數度々例不同、件但久安安元如此、

舉物等檢御車之外出御以前送之、可令儲候、御膳具御盤盤、退紅仕丁昇之、

御牛給導師、安元例如此、但彼時觀智依爲顯宗爲導事師若呪願、騰次爲上膳者可給呪願歟、

訖人々歸參本所、依世俗之志、可用他路、先於山作所邊各以菖靈撫

身棄之、作菰蠶可聚洗水、但無水之所非此限、次被行每日御佛經供養、本尊

前立佛臺、奉懸御佛供燈、素紙法花經一部分置題名

僧座前經机云々、錫杖等各可加座之、爲明曉也、公卿著座、御前僧著座、

預兼置花筥、說法華賜布施、御導師被物一重、絹裏一、

題名僧各紙裏一、護摩師料送壇所、次例時、上下退出、

今夜始護摩二壇、御在所、御堂、

役人、

御車寄、源大納言、權中納言、

前火、景範、宣季、季有、衆三人、

脂燭燃付御枕上灯、令移松明人光國、燒香役四人、

不知其名、同料炭持四人、廳召使、

御棺役人、如元、印圓、覺胤、惟長、高嗣、顯朝、光國、

留守者、俊清、能親、

山作所行事、前周防守顯嗣、非院司也、

導師、貞盛、咒願、呪願、明弁取御牛、

已上布施取、能忠朝臣、顯嗣、

舉物行事、顯嗣、侍景範、雨皮張筵仕丁抑留□□□之由聞候

也、

御棺役人不足之間、良圓門弟等寄加之、

歸參人々、權中納言、藤中納言、二位宰相、修理大夫、

高三位、但早出、殿上人奉行之外不見候、

素服人、土御門源大納言、權中納言、藤中納言、右京大

夫、能忠朝臣、惟長、高嗣、顯朝、光國、藤原範重、

侍、宗尙、惟宗、景範、中原宣季、同季有、上日衆四人、

女房、御匣殿、冷泉殿、宣旨、公卿卿女、民部卿典侍、尼、左衛

門督、信能卿女、刑部卿、權大夫、尼、常陸、和泉、

供奉人、土御門源大納言、權中納言、大宮中納言、藤中納

言、二位宰相、右衛門督、修理大夫、高三位、右京大夫、

能忠朝臣、雅繼朝臣、爲經朝臣、經氏、能定、季賴、惟

長、高嗣、顯朝、信光、光國、藤原範重、侍、行兼已下不知人數候、主

典代、親直、曉鐘之程人々歸參之由聞之、下人等歸、金

吾奉行辨長途步行、他人皆前後入閑路云々、

○十月

一日、天晴、朝懺法拂曉了云々、每日御佛供養申時由

天福元年 十月

三百九十六

二三〇

辨示之、依其告參入、謁女房間、已事始、藤中納言金吾等着座云々、依憚運座不出、大貳參、暫言談、入夜退出、資季朝臣返事、金吾送之、壺返進候、內裏儀、主上殿下若永冠幸抱給、出御、自秋戶中御心中、資季以劍璽、頭辨一人昭燭、入御倚座代、取入廣御所北面其後公卿已下於二條西門東腋、四上北面、着素服、四條中、別當、親俊朝臣、宗平朝臣、資宗朝臣、有親朝臣、實清朝臣、兼高、忠高、六位藏人等粗相注進候、又御參リ事替々可記預候、素服人數々不審候、

二日、癸酉、天晴、參着懺法座、晝間無人由、未斜參入、修理高三位三人著座、隆承講師說法甚妙也、金吾不着座、同取布施、修理之、後取之、宗平朝臣束帶、卷纏、參之外無外人、三日、甲戌、自朝陰、夕雨降、參懺法座、此次每日供養、取布施退出、未時許衣冠歸參、伊平卿衣冠雖參、給素服之人可在其座由、示之隱居了、仍非人之身隨事、經高束帶、卷纏、爲家、同之、基定、束帶、卷纏、有親、束帶、卷纏、五人着座、貞雲講師、經氏、束帶、藏人、堂童子取布施退出、雨已降、

四日、乙亥、朝天漸晴、參着懺法座、例講了、取被物入正面疊末座、僧前出自座末、辨取裏物、予直退出、申時許二七日儀始由聞之、入夜金吾來、申始大殿入御、例衣、帽子、直衣、御座、中、東座、公性、東座、中納言具實、伊平、賴資、參議經高、爲家、範輔、已上衣冠、卷纏、資賴、卷纏、有親、卷纏、二人直衣、殿上人、宗平、資季、雅繼、能定、信光、二人、橫置、經氏、範氏、布施如昨日、夜前解陣上、隆親卿御誦經使定開關云云、

五日、丙子、天晴、朝參上懺法訖、例講訖、取被物退出之間、金吾參入、參院今朝御身固出御之間、入見參退出、每朝可有此事云々、昨夜法勝寺圓堂、羣盜亂入破壞、未及檢知、今朝仁和寺宮可令馳參給云々、本願御安置以後、未被開本尊也、世之濁亂悲而有餘、今日明旦不可參由示之退出、歸一條宿所之間、有長朝臣奉書、有殿下召、未時許馳參、賴尙真人參會、暫言談、依召參御前、入道殿建久諒聞御直衣之色程有御尋、只非濃色、鈍色、有也、下、見、程、平、絹御直衣、御奴袴、尤又御冠卷纓候由申之、宿老歟、高

貴歟之人、若諒闇垂櫻人見及歟由有御尋、親陳貴賤惣
不見之、貞應始此事候歟由申之、內府可垂櫻由聞之由
被仰、近代之人存間、總非心所測歟、可令渡西殿給云
云、退出偃臥、覺法印來談、此間思企事示告了、

頭註
內裏櫻木花多開、建久二年有此事、寒暑相半而天氣

好時、雖有此事、又非吉相、一尤可奇事歟、舊院又如
花開、トアリ、

六日、丁丑、天陰晴、午終參殿、二位宰相候御前、退出之
後有召、諒闇之間事等被仰、宗平朝臣參於御前、暫言
談、入御之後參舊院、例時已了、僧俗退出云々、今日源
大納言、通、權中納言、伊、金吾、九條三位、基定、資季
朝臣、素服院司等云々、人々退出之後、與右中辨暫言
談退出、宅、賢寂維摩會辨爲經俄申所勞、光俊朝臣奉行、信
成朝臣上皇御錫紵事奉行、經光月來重病、昨日被責、
忠高一人兼三事者、先例殊到威儀、纔兩三日之間、御
事難經營由父卿申、此事道爲經又宜由內々有其聞、儘
可下曲被仰了、夜雨間降、

七日、戊寅、朝陽快晴、日出以前參謁女房、相公參殿、暫
言談、獨在御懺法座、事訖退下、午時聞鐘聲歸參、民部
卿早參暫言談、僧參之後、辨示氣色、予民部卿着座、金
吾依連座不着、修理大夫、高三位追加、公性說法優也、
事了取布施、下修理金殿上人、有資朝臣束帶、參人不
幾、

八日、己卯、朝陽快晴、日出之程參上、辨參後懺法、高三
位、金吾參會、每日供養、隆承法印說法如流、聞者抽感
可貴、師跡遂不絕、依脚病無術、不取布施退出之間、下
人等云、大北政所御參、人々馳參云々、日來不聞及、乍
驚聞金吾、即來云、今朝大將殿侍走來、北政所御產由、聞
欲馳參、着參者寄車哉由被仰、即馳參尋申、全非御產、
侍御俄例御絕入之氣由、聞而欲參由被仰、即同車令
參給、夜部御心地損由被仰了、丑時許有御絕入氣、周
章之間、漸令渡例給、只今無別御事由聞之、退出所參
此院也者、又驚人目歟、甚以不便、此次云、於御幕所欲
修輕微佛事、若思企者最前可宜歟、尤可然人不修以

天福元年 十月

三百九十八

二三一

前可宜由答之、諷誦文無可詭人、爲之如何云、予云、近代之傷、實只名字許也、經範等身有憚、前中納言之外無人歟、然者行向可觸由示、即行向領狀云々、此次今日欲出仕、予參者無首示由相示云々、近代人痛此事、於身運之通察雖不可願、於前官者今一事歟、仍今日不可參由答了、最後出仕有妨、可謂遺恨、未時以後人々漸參云々、高倉中納言、經直、左金吾、衣冠、前納言、和實二位宰相同、右衛門督、同重、左大辨同、修理、直衣、民部卿、東帶、源三位、師衣、新宰相、有親東帶、隆承彌勒供養云々、待殿下御參、已臨昏御參、御直衣、入西門、經通謁前、令入簾中給、堂童子光資、宣實殿上人不委聞、金吾又來、小善明日之由俄思企云々、

九日、庚辰、天快晴、日出之程藤中納言、紫服、右中辨暫言談、一身又在座、懺法了退下、午終金吾來、例講訖、參御墓所云々、仍爲念御佛事、早參、僧又參入着座、定言講師說法了、予辨金吾素服、五位等取布施、無手長預持來、即退出參左大將殿、見參之後退出、向右大將

亭、若得便宜者、籠居御事也、依犯土事他行由、侍男來示、後可被申由、示付歸家、宿願事、金吾今朝得便宜、示付帥典侍云々、入夜金吾微少之善遂行了、惟長朝臣拭感淚之由示送、雖有經忽之謗、最前尤神妙、敬白

請諷誦事

三寶衆僧御布施麻布 端

右國母聖靈、當暮秋之微寒、先朝露而即世、中陰之御忌、漸向半、本覺之妙果、宜奉祈、是以所彫刻者、西方教主彌陀佛、瑩黃金貴顯尊像、所模寫者、中道實相最上乘、連玉軸貴加貝經、方今吉曜也、良辰也、供養之、稱揚之、仰願諸天衆會、哀愍證明、華開合掌、何求離根之殘露、香從至心、不待海岸之暮煙、以此功德資御菩提、抑弟子久慣犬馬之心、遙仰靈斯之德、難路樹塗之露底、忠勤無懈、如轉繞門之月前、思憐非空、至于彼光沉響絕、出有入無、華帳燈消、望故宮而增悲、玄池波咽、含新土而添哭、常憶芝砌長靜、竭

忠誠於夙夜之中、豈圖柳車忽去、營終制於陵墓之畔、不定之理何勝言焉、聊叩三下之響、遍驚十方之聽言、不盡心任佛知見、乃至自界他界順緣逆緣、依此飄飄威力、悉耀相好光明、所修如件、敬白、

天福元年十月日 弟子參議正三位行右衛門督兼伊豫權守藤朝臣敬白、

一様手半皆金色、阿彌陀如來像一體、法華經二部、布施導師被物一重、絹裏一、絹十疋、請僧三人、被物一重、絹裏一、絹五疋、

十日、辛巳朝陽快晴、未時許參安嘉門院之間、持明院殿、仍參入、知宗云、自昨日例御胸令發御、謁女房驚申、近年此御事常令發御、今年已二度云々、參女院御方、黃門被出逢之間、二品又被出、私本意事、心中祕藏、忽預露顯之威、言尤憚披露也、不經程退出、酉時許權中納言伊忽狂怒、乍驚相議、爲東和歌事云々、好事之故歟、月前被歸、予下小廊西面、還對頻被謝、言談之次、同事貞應中陰、前右府被尋申、入道相國答云、治承

安元、故在府辨自身帶劔、建久依存長講堂、勿論今度猶可帶歟、但可在意、後日不可帶由被示、命云、何不帶哉、答依爲御出家也、今思此事後後朱右大將又同云々、不審云々、但彼御正日、嘉承中右記、去年御中陰、人々帶劔、今日皆解、如何由註之付之、今日彌不可帶由被命云々、

十一日、壬午、夜月明、自曉俄甚雨、已後休、辰時許洗頭、午時興心房來給、金吾新禪尼來會、先首着狩衣奉謁、依命拜父母墓天地、又奉拜氏社國皇了、取衣帽分左右髮、先首被授要文、戒師剃頂給、次靜俊剃左頭了、以湯次剃右、予先奉觸戒師、寬弘八年信成卿記、出家人先可剃髮由有所見、今用來之儀如何、雖有其說、多只先剃髮、後剃鬚由被命、頭剃了、次入東面着衣歸出、南面戒師取袈裟、誦文被授、戴之奉返、三度如此、次着之參佛前、戒師着禮盤被授戒了、如形奉布施、既袈裟施五正入細襪小僮了歸給、以金吾令申禪閣大殿殿下、夕歸來、各示被感仰、禪閣被送賜頭剃莖、よるにしに火あり、かはたう

天福元年 十月

四百

革室のみなみ、一條のきたときく、

十二日、みづのとのひつじ、てんはる、まらうどのあつ
まりこぞる、さらに物まうでのよしをいひてかどを
あけず、いんぎんほうゐん、兵部卿、左京權大夫かど
にきてとはる、みなあはず、

十三日、きのえさる、てんはる、ゆきよしのあそん、なり
まさ、ながみつ、又きてとぶらふ、かしらさむくてえ
あはず、ともむね、あまもんゐんの御いのりのま所の
こときのふけふいひをこせらる、けんじやくにさた
すべきよしふ、きうゐんのけちあん程のことたる
べきよし、みげうそあり、けん見おなしくさたす、

金光明經功德天品也、三枚歟、入夜京極中將實持朝臣、被來

間、着袴相謁、夜前深更自伊呂代還御本殿、御置役如

前、有御契云々、金吾示送、昨日御供養、大殿着束服令參給御佛事以後令參

院給、雅繼朝臣御共、内大臣、諫關、直衣、雅繼如恒、經通、伊平、家光、基保、爲

家、公長、經時卿、今日經高、束帶、爲家、資賴、束帶、師

季、院御沙汰五七日、七僧法會定兩周、束帶云々、昨日

殿上人無人、今日實蔭、家定、中將、範氏、御懺法昨日一
人參、今日藤中納言經時、有親、昨日大將殿始修懺誦
給云々、中將歸後雨降、終夜不止、

十四日、乙酉、朝雨止、陽景晴、巳時許送車、尼典侍詣興
心坊、開眼不動小畫像、以御帶細奉侍云々、兩尼又同車、今日又荆

頭、長政朝臣爲內府御使來、相謁謝之、金吾今日日佛
懺法之次被行、隆承滿座感涙、修理大夫於法華堂修佛
事、明辨講師云々、明日四七日始、着諒闇可着白衣云
云、夜風慘烈、

十五日、丙戌、朝陽出、巳時許時雨、典侍辰時彌歸參、申
始許金吾來、冠、直衣、爲大殿御使參院、圓堂盜露顯事云

云、賢寂從者男、出市見賣金銅者、擲取行俊親宅令問
之、果而承伏、使盜送重時許、信綱不廻時刻、遣武士近
江國賜之云々、俊親別功由被申歟、自是參舊院、夜月
明、風殊寒、密雪降歟、

十六日、丁亥、朝陽晴、簷漏落、雪解歟、自剃頭、齒熱氣
殊増、日夜苦痛、金蓮云、頭熱之降也、今暫難減云々、

法印來臨、初相謁、忠遍於法華堂爲盜被剝、被取佛具等由、仁和寺披露云々、發御墓之由有聞云々、若枝葉歟、

十七日、戊子、自朝陰、申後寒雨烈風、前宮內卿、前但州、送歌吊通世事、大宮三位被臨蓬門、答物詣由不逢客人、金吾書狀、昨日懺法無人、日佛大辨宣實、一昨日大殿御參、富中納言、三位幸、左兵、民部、九條基定、忠高辭藏人佐、^{十五}日、父病、獲麟云々、入夜寒風彌烈、

十八日、己丑、大風發屋、時小雨、剃頭沐浴之後偃臥、日暮了、

十九日、庚寅、朝陽晴、今日奉書、始法華經、去年諸料紙序殘、紐易事、品奧偈、大谷齋宮以戶部被訪、仰此間事、

廿日、辛卯、天晴、金吾示送、五七日御佛事、以吉日被縮行也、昨日大殿御參遲々、其後臨幸、酉時事始、殿下、內府、源大、吉劍、右大將、同、高倉中納言、^{吉、無}左大將殿、具實、隆親、劍、實有、盛兼、^{吉、無}公賴、^{吉、無}經高、同、基保、^{同、無}爲家、^{無劍、}範輔、資賴、^{已上、}公長、^{若殿、}吉、^{若殿、}笏、長

清、同上、基定、同、有親、^{同、無}殿上人隆範、纓自下差已下十五六人、堂童子左方光資、宣實、範氏、右、宗氏、經光、資定、七僧講師聖覺之外御前僧、聽衆六十四、實蔭纓下差本重也、今日經及比丘、偈猶不終、賢寂宅尼達歸來、^{十五日}今日舊院女房參御墓所云々、惟長修御佛事、昨日尼女房遂入見參云々、御聽開所、^{大殿座、}一昨日大風之日被問參人金吾只一人云々、大北政所廿三日御出家之由云々、

廿一日、壬辰、天晴、寫經不幾、比丘偈以下至于花光偈、夕前左府恩問通世事、

廿二日、癸巳、天晴、午時許金吾來、^{御身因見參、舊院懺法日、佛供養了、}關東申止大殿北政所御通世云々、定高卿病付減、消成不覺歟、剃頭、寫經及長者偈之半、日短筆遲、

廿三日、甲午、天晴、申時陰、入夜甚雨、昨日五七日、隆親卿、實有、賴資、^{衣冠、}經高、^{吉、東}基保、^{吉、直、}爲家、公長、大殿御參、今夕冷泉小兒行、始車引入資季中將家云々、今日書終二卷、

天福元年 十月

四百二

二三六

廿四日、乙未、自夜甚雨、未時陽景見、今日御月忌始、伊平卿、黑直經高、吉直、公長、殿下御參籙中、殿上人資季、雅繼、堂童子經氏、資定、金吾示送、今日始三卷及化城之始、

廿五日、丙申、朝陽晴、夕金吾來、御懺法始之次例、公性講云々、成實相公房於法華堂佛事、講師自上被宛定言云々、庭弱小女房依志所修小佛事、被尋問、被切懸、非器講師、至如此事交衆難堪之佛邊歟、又雖名字無修佛事者云々、是伺候者不知耻之故也、今日經不書終化城奧偈、手遲日短、侍從僧正眞兼歟、被臨門前云々、令答物詣由、又家長朝臣來、同答他行由、近日客人抑難堪事也、

廿六日、丁酉、天晴、以助里爲使、謝昨日僧正馳行不調事、下人等云、金吾難色長二人聞諍、殺害一人、互被刃傷云々、本自無難色、又聞諍殺害度々、甚不穩事歟、今日北政所御事云々、聖覺導師□□□□、經化城奧偈及人記品一枚、剃頭之間彌不及枚數一品經、手分金光明

功德天品、相具綾白被物、房任調送相具、衛門督可進由示含了、皆悉金泥經也、但水精軸、

廿七日、戊戌、朝天陰、小雨降、即止、巳時晴、未後又陰、季宗朝臣來問門外、令答他行由、日吉忠成來門外、今日法勝寺御齋會以前、本所結緣供養云々、經自人記品及寶塔品四枚、日傾雲晴、夜沐浴、

廿八日、己亥、朝天漸晴、巳時陽景見、金吾示送、昨日結緣經、大納言通方、中納言經通、大將殿、隆親、伊平、實有、盛兼、參議經高、爲家、實世、公長、知家、經時、有親、法成寺御齋會、同時事始之由、依有告合點人覺立參寺了、直參寺人、雅親卿、長清卿云、今日與侍於御墓所修善、如形作四種供養佛前、講師請僧三人料兼送僧許云々、取入長櫃、自此宅送之、使替白助里、光兼、在女房共相具引替牛、巳時送之、未時當南有火、西風甚利、牛僕皆往之後、家中總無人、構求令尋問、小冠等歸來云、冷泉北、富小路東、左中辨宿所已燒了、風烈而火赴東御所之東方、雖危急人多打滅、於今者過候歟云

云、追々歸來者稱無爲由、申時助里來、車馳歸被參了、
顯朝、惟長參會法華堂云々、歸參之時衛門督寄車、殿
下出御、襄殿有被仰事、雜人群集、不追得之間、取立蘇
立車傍云々、非分火災雖劣無之、希有無事、凶之中吉
歟、經自寶塔品之末番終勸持品、

廿九日、庚子、天晴、夜傳聞、今日兩座共聖覺參入、大納
言通方、高實、中納言經通、伊平、實有、參議公賴、經
高、爲家、範輔、有親、爲氏、勸堂童子云々、禪室導師、
布施五十、請僧十五云々、大殿導師四十一、請僧十二、
是下人
等說也、經安樂行品涌出品三枚、

○十一月大

一日、辛丑、朝陽快霽、朝間經及壽量品一枚、今日剃頭、
暫休息、堂童子光資、經氏、宗氏、範氏、今日舊院御法
事云々、公圓僧正、是陀羅供、散
衆三十人、大納言定通、家良、中納
言、大將殿、隆親、實有、盛兼、參議經高、爲家、範輔、基
氏、實世、資賴、長清、吉服
一人、有親、御願文、家光
卿、
後聞、故公修法印贈僧正事盛兼卿今日宣下云々稀

代事歟、

二日、壬寅、自朝陰、未後雲晴、終日風烈、夕甚雨、今日
臨幸、臨時御佛事云々、公卿定通、家良兩大將、通方、
高實、經通、隆親、實有、盛兼、賴資、經高、爲家、範輔、
基氏、東常、實世、同、資賴、公長、知家、經時、有親、先是
行兼引物付衣、童裝束、通經、
小袖、車牛牛童裝束、賴法師高、
導師隆承、事未訖、甚雨降云々、

三日、癸卯、朝雲分、巳時晴、午時許金吾來、曉亡日依火
御不□□□出御、東面近習人々候御前之間、知宗中門
廊、妻戶懸尻問答廳官、甚奇怪、一突頸之由有仰事、親
氏聞妻戶、因幡內侍傳奏事、尾籠人申事不可申繼有仰
事云々、此男月來物吉之由、見及逢頭官官闕、運之拙、
猶可甚事也、經昨今不書得、昨日及分別品之半、今日
及法師功德之始、入夜奈良老若兩僧來謁、若僧性懸房
猶子也、師匠依籠在京云々、御法事夜僧房之童、如女
姿昇堂上、大番武士獨留、後朝
乞受、或云、導師僧正之童云
云、

天福元年 十一月

四百四

四日、甲辰、朝陽晴、御正日以後、女房不可留舊院云々、
是又雖不云似幸習無事、禪尼於今者可居住此宅、北舍殊而念雖非一之故、被相定歟、狹少、失便宜之間、以年來住所相讓、愚僧移坐此屋東端一二間、今日御匣宣旨、兩局於法華堂修佛事、依前殿相公之語、金吾又參云々、經及神力品端、

五日、乙巳、曙後時雨、朝陽即出、已時性惠房自醍醐出京、午時許成茂宿禰來、此日以後不憚云々、相逢、明曉歸參

止頭、金蓮云、中將清親朝臣妾產胞不下而終命、今朝經及藥王品初一枚、依客不書、剃頭、金吾相具老童來、
白浮線綾持衣、紫織物指貫、自禪室參吉水、今夕出家、六日受戒云々、

六日、丙午、天晴、今日右京大夫修佛事、隆承法印布施卅五、諸僧被物二重、布二結、公卿經通卿、已下素服納之、二人爲經、爲資、公長等不委聞、性兼房弟相具子新發意來、大原僧正御弟子、今日又登山云々、經及妙音品、七日、丁未、天晴、日來女房不可留候由、有其聞、雖不似常例、隨時儀歟由存之間、今日又可祇候之由、有反幸之儀云々、只就人申狀變候歟、何事是何非有關東引物

云々、鑿牙五十石、鵝眼卅貫、絹五十疋、其外與心房租卅疋、鵝眼廿貫云々、入夜助里歸來云、典侍白地退出宿高倉、此家太白、明曉於此宅沐浴可歸參、舊院他女房大略退出、冷泉殿祇候歟云々、此事必可遂、放火群盜之耻不便事歟、與心房租修例廿五三昧、寬治御忌日也、經及陀羅尼品之末、寒月明、後聞、源大納言、雅、左大將殿、中納言隆親、盛兼、參議經高、爲家、公長、基定卿、有親朝臣、兩殿令聽聞給、明辨爲講師、不喜以前之事訖云々、金吾每日二度參、遂不闕云々、

八日、戊申、朝陽快晴、寫經、申始許奉書終勸發品、老後盲目遂此願、心中聊感悅、金吾來談之間見車、大宮三位來臨、依風病更發、不能而談之由、以金吾令謝、去五日以後有名謁云々、今日春日祭使可立由、俄有沙汰、源少將家定、皇后宮亮等勤之云々、知家被免出仕云々、午時許淨昭房來、禪室此七八日被痛耳、被加灸四十八、體三尺阿彌陀像被造立云々、去夜群盜入家信卿法住寺舊宅、即放火燒了云々、家主居住、若不然歟、近日

姊小路鳥丸居住之由云々、秉燭以後禪尼歸參、舊院冷泉殿之外、當時無參人云々、

九日、巳酉、天快晴、性惠房歸醍醐、去五日來、言家朝臣一昨日歸路之由觸送、當時無暇、十五六日之後、可謁之由答之、今日經無量義經說法品不終與一枚、

十日、庚戌、朝陽快晴、今日徹平敷改云々、源大納言參仕、經終十功德品格、始普賢經二枚、夜方違宿北邊、聞雞聲歸、

十一日、辛亥、朝雨降、午時陽景見、又陰、經至偈三行、日暮賜大殿御書、或人夢有女院御歌、

まよひこしわが心からにこりけり

すめばすみける池の水かな

この世にてあひみむことはしかすがに
はかなきゆめをたのむばかりぞ

御和

すぎやすき日かずのほどを思ふにも
かすなきものはなみだなりけり

池水のすめばすみらんことはりは

もとの心のきよきなりけり

二首非量義理之相叶、可謂秀逸之殊勝、近日夢告多聞、其心兜率之引接歟、此池水之心、又是八功德池候心歟、凡御在世之儀、情案之、尤權化之御體歟、只拭淚行者也、夜金吾來政源大納言、參議有親大少辨不參、左右中辨、源少納言參平野祭、左右大辨梅宮、實有別左兵衛督參鎮魂祭、十四日分配可參云々、依窮屈風病申暇、十八日御

月忌以後欲下有馬、今度維摩會辨爲經卿勝事、一辨侍追前、別當僧正辨、一坐眠寢事二山の阿闍梨と云、一講師向

勅使房時、以青侍令着衣冠令出逢、一又坐眠弘庇、此事世以謳、內藏寮以御教書返給、右中辨、訖、近日可有臨時

除目云々、舊院女房今日權大夫歸參、只三人同候、今夜御方違、御幸持明院殿、

十二日、壬子、朝天陰、巳時晴、奉書終普賢經、書始無量壽經、及四十八願之始、日已入閣筆、夜風烈、今日大外記師兼朝臣來問、令物詣之由、不忘舊好、勵心緒、

天福元年 十一月

四百六

十三日、癸丑、朝陽晴、寒風烈、前左馬長綱來問、又構他
行由、經十枚許、日沒終、

十四日、甲寅、天晴、風寒、越前前司相具子息^{少納言}臨門

前、猶令答他行由不達、經終上卷、又下卷七枚許書之、

十五日、乙卯、天晴、風寒、未時許金吾來問、式賢入來、

答念誦無暇由、經下卷二枚殘、今日前殿修去年周忌佛

事給云々、夜月清明、

十六日、丙辰、朝陽晴、午後陰、未後雨降、巳時許長實法

眼來相逢、不經程、經終雙觀經、書始觀無量壽經、

十七日、丁巳、朝陽晴、奉書終觀無量壽經、申時老後願已

遂、尤欣悅、入夜尼典侍參院、^{重日雖不得心有可參御氣色云々}參入見參、

有御哀憐之仰、不似北邊云々、

十八日、戊午、朝陽清明、早旦尼達參法華堂、^{助重}權大

夫局修小善云々、巳時歸參、御月忌在里女房多參云々

未時許金吾已下可赴河陽云々、^{博イ}隆法印、右中辨、中務

爲繼相具云々、今朝奉書心經轉女成佛阿彌陀經、又借

出他本校觀無量壽經了云々、唯蓮房^{中將}入道、被臨門前、答

他行由、

十九日、己未、朝天晴、午後薄陰、未時許左京權大夫來

談、去十五日於左大辨西京家、前殿有御佛事、權大納言、

四條中納言、富中納言、賴中納言經高範輔卿、信實、伊

成、光俊朝臣之外、無殿上人云々、及日沒言家朝臣來、

今日初出仕、參座主宮、自是參殿女院云々、今朝剃頭、

廿日、^{庚中}朝陽快晴、入夜大風寒雨、此兩三日寒氣殊

甚、腹痛更發、僵臥之間西山入道兄弟來臨、扶病言談、

不久而歸、侍從閤梨卜云僧來、隔物相逢、新寫經十四

卷、令調卷、腹中痛之上痢病又發、

廿一日、辛酉、朝陽晴、屋上雪白、依病氣之煩、不得已而

今朝魚食、可耻可悲、依大谷齋宮召進車、^{致通中將入道安居院宅}未

時許長者僧正參賀茂之次之由被過、差湯漬、依種々天

變多、於東寺修仁王經、法修大法事十餘度、嚴海每度

爲護摩壇、以今度賞、可申加僧正之由申入、被仰無闕

由、然者可辭大僧正之由申入之由被談、被歸之後保孝

來、又相逢、天變連々之上、彗星欲出之由、司天奏之行

此法之上、更不可出由有自讚詞等、

廿二日、壬戌、天顏快晴、臨昏雨雪紛々、近日天王寺又

有掘出新記文之披露、今月之內可參詣之由、舉首群集

云々、新記文每
年事缺金蓮之所語也、入夜尼典侍參一條殿、宿

此宅、

廿三日、癸亥、夜雪宿早、朝晴、風殊烈、自湯山送書、無

爲下向、與侍無
相事依太白方不歸參、今朝剃頭、法華堂護摩

僧三昧等可候由、只有其沙汰、去七日以後、當時無人

跡、依無用途、雖有限事不能被始行之由、夜前一條殿被

仰云々、萬事只不足言歟、凡卑之輩猶一周之間、不聞如

此事、可悲之世也、舊院惟長只一人日夜馳走、侍一人

仲季法
印子男之外無人影云々、宰相局籠于栖霞寺云々、

廿四日、甲子、天晴、雨雪降、早旦典侍歸參、已時許小野

宮少將入進來臨、近日在京云々、天王寺非記文、北白

河院御夢想之由云々、曉力晦比可歸參、彼寺僧又近日訴本

執行僧、仍塞道路云々

廿五日、乙丑、朝陽快晴、昨今點雙觀經、消日纔及下卷、

夜方達、宿北邊隣家、終夜高聲念佛、聞曉鐘歸之間、纔
月出山、

廿六日、丙寅、朝陽晴、房任申云、吉富庄寬賢律師可知行

由、入使者相門之由、庄民騷動、賢寂代官共東西云

云、尋常之儀雖不可信、今世事依成功之員數之時、不

顧骨肉、又暗難成安堵之思、仍且以書狀奉尋內府、返

事云、全不承及、定無實歟、只今能向可尋申、即時又被

示、全無其事勿論也云々、仍一旦以依估仰房任、令下

知庄家、但謀書惡徒之習、書改庄號、不顯領家、雖無

始終亂入、人領常習也、此由又示送金吾許、此宅并所

所早梅其花多開、或又紅梅開始云々、昨日恍惚之餘、

忘今日歸忌日、忽見歷驚之、深更行西宗弘宿所、聞曉

鐘一聲歸、

廿七日、丁卯、朝陽晴、雪纔埋草木、未時許深草齋宮尼黃

門令姬爲見法師來臨、定納言於今者平滅云々、迎進房

來、依塞風不達、高野御室賜御書、

廿八日、戊辰、夜雪積一寸許、朝陽晴、

天福元年 十二月

四百八

廿九日、己巳、天晴陰、朝間點訖雙觀經、牙塞甚、

卅日、庚午、朝庭雪白、巳時許紛飛、忌日事送嵯峨云々、

扶病自日出及夕陽奉讀經一部陀羅尼阿彌陀經、如例金

吾昨日自陸地一日馳歸之由、今朝告送、

○十二月小

一日、辛未、朝天快晴、尼典侍詣栖霞寺、早旦、去夏之比

女院御夢想、奉見嵯峨釋尊之由有被仰事、仍近習女房

達殊被參詣云々、助里、兵衛宗弘、殊房任馬着淨衣令參、雪間飛、剃頭、午終金

吾來、夜前初參名謁、今日御身固參會、次參禪亭、指事不御

坐、又可參院、廿五日出山行細川、廿七日着明石、廿八

日西宮、廿九日歸洛、只遊放而已、

二日、壬申、天晴、未時許隆承法印來臨、面謁、臨昏迎蓮

來、明後日赴關東、明年秋可歸云々、仍相逢、

三日、癸酉、天快晴、初月高懸、夜雨降、鍛孫姬髮、未時許

隆榮律師一昨日自關東來由來示、隔障子言談、臨昏歸、

四日、甲戌、朝天陰、已後陽見、晴陰不定、入夜雨降、曉

晴、今日有除目之由傳聞、

五日、乙亥、朝陽快晴、夕後寒雨、無除目云々、剃頭、點

觀無量壽經了、西本返納、與心房大谷

六日、丙子、朝陽晴、巳時許與心房來談給之次、聞左中

將源通時、十一月廿三日於關東終命、候安嘉門院、女姊妹子俄退出云々

姬宮、春日局、今度除目可被補頭之由告送、使不到着死

去云々、運之拙非人力事歟、大臣孫、大納言三男也、五

十餘、爲義時聲、而義村頻舉、遂不假公卿之名、可悲事

歟、隆榮律師又來、不經程、金吾來談、去二日季賴坊僧大進、補

五位、藏人經高卿所募、而競望、咄忿怨詞、其後不出

仕云々、知宗簡居之後、非指勅許而出仕、已被許出仕

了、分配公事可奉行歟由示送、資賴卿出仕之上可然歟

由答之、即其事付伊與內侍奏聞、難申事歟由有御問、

申知宗申由、可奉行由誰人云哉由、被仰、修理大夫申由

申、可問資賴由有仰事、即問之、出仕之由承而申候之

由申、成恐退出、其後知宗久簡居、今度頗超過前事歟、

出仕事不知食云々、御堂御入講、參人初日、殿、左大將

殿、權中納言、藤中納言、家光、經高、資賴卿、資季朝臣、

忠高、奉行朔日左大辨一人、五卷殿、右大臣行遣以前退出、左

大將殿、家光、爲家卿、三日家光卿一人、結願伊平、賴

資、資賴、公長、長清卿、忠高、堂童子二人行香、殿上人

不參、五日宜秋門院御懺法結願、先皇嘉門院御忌日、

覺經講師、次結願、成源、實具、寺左大臣公卿子成増、九條新大

納言、伊平、賴資、家光、爲家、知家、基定、師季卿取花、

有敎、能忠、時綱、賴行、爲繼、信光取之、重長、資季朝

臣不取花、宣實參云々、元三御藥、可參人內大臣、右大

將、具實、隆親、基氏、資賴卿、資季、家定、隆盛、公光、

親氏、博輔、今日依番可歸參院、

七日、丁丑、朝呀寒、雨間降、夜大風、

八日、戊寅、自夜天晴、朝陽殊晴、未時許白雪忽降、陽景

雖間見、及日入沍陰、西風猛烈、入夜後月明、星見雪

止、後聞、西園寺入講、實有、賴資、家光、爲家、資賴卿、

行香、實持、實清朝臣、忠廣加云々、

九日、己卯、昨日雪積地三寸許、朝陽漸晴、陽景間見、草

木雪消、庭雪猶白、已後漸消、通賢寂適歸路、新發小

僧覺源來、中時受戒之後、即始十八道加行云々、後聞、

西園寺實有、經高、爲家、實世、公長、長清、基定卿、能忠、有資、實持、信時、實清、能定、宗氏、實卷、

十日、庚辰、朝陽晴、不陰而寒雨時濕、

十一日、辛巳、霜如雪、朝天晴、鷄鳴以後引替牛三頭、引

獻七條朱雀承明院、月來御經營金力原御堂纔被終功、

依明日供養聖覺今晚渡御、女房多參、車五兩、引替多尋

由、依女房示、引獻三頭、今夕御宿圓明寺、大納言領、明依欠日歟、

日渡御御堂、件所被奉安故院御骨、被立此堂御遺誠云

云、金吾音信、京官除目、大乘會來十五日云々、已時許

有禪關梨來、隔紙障言談之次、問天舌受戒事、

十二日、壬午、朝陽晴、後更呀陰、後聞、女院御堂供養、

前內府兄弟三人皆率子息列座、資雅卿一人相加云々、

十三日、癸未、天晴、後白雪紛々、忽積地、夜前傳聞、內

府當時居住土御門堀川之後、男女子息相替病惱、及危

急之間、忽可被去其家、依無其所、可被渡金吾、冷泉源

大納言舊妻家、依牛養事、在堀川、出家被借之、女房局只三間、依

無便宜被追遣、金吾女房等愁悶云々、上皇年始可御近

天福元年 十二月

四百十

衛亭由、有其沙汰、世以不甘心之間、二品爲方違宿其亭之間、兵部卿女忽絕入、又狂言如醒、可行鳥丸由稱之、同刻限大將室^{鳥丸此家也}、忽病憊、又懷胎猶不快云々、去月十一日中將家定、騎馬萬里小路南行、依月明見近衛面件亭、異方隨身所之後程、其長均于樂垣者十人許立並、心成怖畏、見後歟由問從者、在馬西方物、只見南不見其物、在左方舍人男獨見之、稱怖畏之程、馬過近衛丁、其間中將再見東、猶在其體不分明、府合其人牛馬多引云々、其前又有大車、頗如物影、不分明云々、依他人不見、中將又引返、其馬更近衛大路向東、無其物、仍又歸南行了、其後經七ヶ日、舍人男病憊、狂言經七日死了云々、依衆口噉了、元三事不定、廿日御佛名、一夜可渡御云々、京中通作中門二棟、家三个所、已有魔所之聞、在世之貴賤又邪氣之病、面々露顯、可驚奇事歟、已後雪止、陽景不見、辰時又引獻牛、典侍相公、四尼、今夕參院御所、送車夜半歸云々、隆榮律師又來言談、亥時許歸、十五日下午云々、

十四日、甲申、朝陽陰、昨雪殘、入夜金吾來、參持明院殿、^{御月}一昨日聞無人由、公卿六人參云々、昨日始依召參、^{本參人、實親、盛家、基氏、成實、光俊、卿等歟}、元三猶不可御他所云々、內府來、十七日可被渡冷泉、明日除目、當時公卿昇之不聞云々、神今食依神宮穢延引、夜前被行、十五日、乙酉、朝陽晴、寒風烈、長實法眼依僧綱群參出京之由、借車俄示送、牛童他行了、金吾牛飼來取車了、臨昏來、年來所愁鬱之範圍僧正、黃圓房領寄菩提院新儀事、彼一院衆徒聞、披子細書送去文、存外喜悅、申別當僧正之處、又加預判、本意滿足之由語之、今日群參事押取山階寺運上米三升、寺法師正尊開梨配流、五郎冠者と云々、男禁獄事、九月十五日申、此事依天下大事默止、今日又群參、大殿仰、早經奏聞可有御沙汰、感悅歸寺云々、今度參、過半不參云々、圓經、覺遍、親統、公統、賢信、長實、堯圓律師、尊良、^{圓經律師、師子、郡子}、清信、^{大納言律師、稱公清卿子}、信乘、野田、五師得衆四十人許參云々、十六日、丙戌、朝陽殊晴、夜月又明、未時許望見閉書、侍

從源資時、具親朝臣、次男朝時猶子、去藤兼繼、中將雅、繩子也、內匠

頭丹波經長、治部卿隆綱、左中將道嗣、少將實躬、連任、

左衛門權佐範賴、右經光、兼、正佐、藤雅平、家信、繩子也、從二

位基保、從三位有親、從四位上光俊、四位資能、止右衛門佐、

雜任雖多省、先々聞書々落歟、

十七日、丁亥、朝陽晴明、剃頭、

十八日、戊子、天晴、雲收、金吾昨日猶參大嘗會云々、夜

前安嘉門佛名、實有、爲家、長清、基定卿、隆範、有教、

爲繼、宗望、行香云々、未斜大宮三位被到坊、剃除以後

初相調、一昨日爲訪舍弟、尊家當講向講房、其日兄弟二人之外無人、

依久不逢向兵部許、參院不逢、參大殿、於中御門町奉逢、前

衣冠、御猶參一條殿、北政所合入、御院給由、日來、由問、所來也、

宜秋門院廿二日還御九條云々、寺前大僧正御房熊野

詣、明後日、給、通發三御山各七ヶ日云々、自然移漏、及日

入被歸、面謁之間孫次郎童來、爲見、御房行向、御次云、久不見

之間成人、此童本自有器量之氣、依二親不愛赴出家、

七十年夏勢所興得之家跡、至子孫又無跡路之名字歟、

可悲可痛、保安以後九十一年維月之名斷絕、又以如斯

歟、乘燭之程傳聞、御月忌講筵始云々、大殿愍御參日

暮歟、早參、寒天僧俗甚不便、過夜半南方有火、朝聞

四條西洞院云々、

十九日、己丑、天晴、寒風適休、入夜雨降、令拂蓬屋煤、

申時許典侍退出、沐浴留宿、昨日大殿內府御其聽聞簾

中、大納言通、已下公卿多參云々、具實、隆親、伊平、家

光、經高、爲家、資賴卿、

廿日、庚寅、自夜微雨降、午時天晴、昨日兩殿、大將殿、

衛門督宗平、資季、實持朝臣御共、每月日野詣云々、親

所來風歟、下名今夕可被下云々、未斜典侍參請涼寺、七

日參孝弘、房任、助里在共、房任可參籠、夜宿直事、召上

細川莊民等、今朝金吾渡三條坊門之由傳聞、入夜助里

來云、日入之程參着儲東局、歸路於法剛院及暗、今日

車馬僧徒濟々、公卿一人逢路出京云々、一切經會日

歟、

廿一日、辛卯、天晴、昨今左兵衛督頻音信、助教師朝舉、

天福元年 十二月

四百十二

勢州實山寺預所可補事難去思之由云々、雖同在世慙未送書狀人也、忽吹舉之詞雖迷是非、思之今世事只如斯歟、仁和寺宮御傍親定又申本所歟、早可成送下文之由、示賢寂了、入夜狂巫來之次云、內府今朝被渡高倉了云々、

廿二日、壬辰、朝天陰、雪紛々、巳時晴、巳許金吾來次聞、下名又今夜由云々、十九日內御佛名、隆親、家光、爲家、實世、有親聊、宗平、雅繼、棟、實隆、實清、棟、雅繼、三人、廿日上皇自朝御近衛殿、其日當時御所板屋葺檜皮、具實、盛兼、基氏、成實卿、親氏等各一字葺之云々、其夜御佛名、大納言家良、通方、中納言具實、隆親、盛兼、家光、經高、爲家、實世、有親、事了還御了云々、廿一日皇后宮御佛名、具實、實世、爲家、有親卿、事了退出、乘車之間、忽坤方見火歸參、押小路南、堀川東、吹懸御殿上、甚雖有恐、即滅了、尊勝寺灌頂、辨不觸分配人、具實、不知之間事缺、依院仰、家光卿參勤辨、參官奏、上卿一人行之、歸之間見火參內、其夜官奏、殿下令

候給、右大臣、宰相中將實世書荷前定、三位中將殿拜賀、宗平、資季、雅繼扈從、前驅八人、爲仲、盛長、兼康、家盛、資憲、家國、教行、時長、御車五緒青簾、久清稱先例由、追前一聲、廿五日荷前、聞無人由領狀、可參東一條佛名、上卿未出來云々、賴資卿三事事、於西園寺泣示付、雖非其仁中旨、委申殿下、其後委聞食由被仰、深恩之由兼悅送、兼帶以後又自愛餘身之由、并悅無極云々、竊以彼卿子息三事過分之由、雖世不許、經光坊官勢、道理至極歟、於今兼帶有何難乎、實山寺家下文付使送師朝々臣許了、

廿三日、癸巳、天陰雪間降、師朝々臣悅送之次、送下名開書、雜任百人許、侍從宜繼、大貳次男、殿上人、二品猶子、式部權少輔良賴、大學頭光兼、長倫、辭權大輔、中任云々、文章博士經範、少弼藤宗保、右少將通能、前內府、子云々、從四位上藤良教、從四位下藤重隆止稱、從五位上源康長、信盛辭文章博士、今年中於今者無公卿任人歟、適無驚目事、

廿四日、甲午、朝寒雨降、巳時陽景見、午後又牙陰、幽居

寂寞、無視聽事、經晷早暮、戊終許南方有火、風烈而烟不昇程、又遠而不辨其程云々、久而滅了、

廿五日乙未、朝天陰、巳時晴、下人說、夜火東寺由云々、乍驚以下人遣見、午時歸云、西寺之內下人宅、失火吹付塔燒了云々、本自荒廢之寺、何爲乎、今日適天晴風靜、

廿六日丙申、天冱陰、陽景不見、閑居殊寂寥、寒天又陰、嵯峨參籠、已滿七々日了、

廿七日丁酉、天晴陰、未時許金吾來、一昨日勤荷前使、權中納言伊平、三位顯平卿只三人、兼栢原深草、夜深參東一條院佛名、九條新大納言、子時許被參、長清基定卿云々、今度任少弼、宗平朝臣舉子息任之、近代珍事歟、未甘心事、家長朝臣來臨、剷除以後始面謁、自然及昏、遠所聞出家之由、頗被驚仰、雖有其志忽被許之條、如何之由、有密々仰云々、極以存外事歟、親季、成茂娘去月離別了、關東女多入洛、聞之、月卿雲客多與

妻離別云々、隆盛少將切入幡妻髮、凡近日壯年人々所存皆同云々、嵯峨人々歸來、今度參籠之間、禪左府密密參御堂、相謁給云々、存外爲本意、又中院尼上三位侍從母儀、同被來訪、詠歌多有贈答等云々、

廿八日、戊戌、朝陽快霽、女院令當百日給、舊院三尺彌勒像供養云々、南京上人當時名譽云云、未知名、參由傳聞、北政所又

女院常令持御手箱、懸子、爲佛場御銘鐫佛像供養、聖

覺法師云々、後傳聞女房局者說、北政所令入給、午終程事始

大殿、前左府、內府御座、例籠中、着座、公卿九條新大

納言、左大將殿、權中納言、藤中納言家光、右衛督、民

部卿、高三位、殿上人甚少云々、兼聞上人昨日申隙不

參、聖法印兩座共勤仕、彌勒喻伽論、御手箱佛、公審法

印細工殊勝云々、明日又有除目歟、貫首之競望未馳

走云々、京官下名各別任人時、無此僧、又被行之歟、更

不得心、戊終許宿北邊本所北屋、

廿九日、己亥、天晴、曉鐘之後歸廬、未時許覺法印來談、

文曆元年 二月三月五月六月

四百十四

續素遠近世事所入耳、只貧者之告道無他歟、申時許
歸了、年來除夜解除、禪侶非此限不行、恒例鬼氣祭令
修、

文曆元年

〇二月

八日、金吾舊狀、柏夾之木兼日存知之時用黑木由有其
說、何樣存哉由可尋申之旨、禪室御命云々、如此事爭
習知哉、如仲家朝臣定分明存歟、只木竹共皆用白由所
承也、可被申此旨由答之、

九日、壬申、朝天晴、春日祭、辨少將自內府亭出立下向、

禪室自昨日
御座云々、見物已刻許出門、辨少將去六日禁色宣下、

先前駟笠持、如恒、次移馬舍人二人、朽葉所
木衣、次辨侍、騎馬道
前、

次隨身例體色隨
身也、二人、新木上下
題目結衣、狩胡錄、毛沓、次前駟六人、

大夫將監忠任、唐綾御侍
衣、兼衣、知資、青織襖、
練色衣、行光、白織襖、
練色衣、忠廣、

狩衣、以邦、藤色白、永光、海松色、
真白衣、練吳綾、次辨、直衣、紫浮文指貫、

萌木衣、紅單衣、半靴、野劔、鹿皮細
尻箱、侍十人、次衣櫃、退紅
仕丁、下家司彈正忠相具、柏夾木用白、社頭縫腋蔭繪劔、
前駟束帶隨身褐、袴制
六、大殿仰、中納言中將勤上卿時如
此云々、

廿一日、巳時許向聖覺法印安居院房、訪其病、濁世富
樓那遂爲遷化之期歟、實是道之滅亡歟、悲而有餘、今
年六十九云々、先師七十八云々、

〇三月

十二日、申時許金吾來云、行能朝臣終、勅撰清書送遣
之、仍清書廿卷、入御給
舊、草廿卷持參、大殿進入之、此事
已果遂悅思食由被仰者、聞此事心中殊感悅、即歸了、

〇五月

(日闕夕)密々下給御製五首、付内外無望
三少年、欣感之間、廿卷
草案片時可進入、御一見之後即可被返下之由被仰之、
雖未定狼藉、倉卒注出之、

〇六月

三日、庚午、進入之料紙、色紙、自筆鳥跡表紙、青藤物、紐

紐、軸、摺書、葉丸、當時所載歌一千四百九十八首、後拾遺佳

例加給御製今二首、可滿五百首之由令奏之、豈計扶桑

之影、徒往蒼梧之雲、空斷今者無所期、所殘之草急燒

棄之、及十月下旬、不慮之外舊院之草本自大殿被尋召

云々、

○七月小

一日、戊戌、漢雲遠晴、乘燭之程、宿北邊本所、來四日秋

節、三四兩日依歸忌今夜歸宿、

二日、己亥、星躔清明、聞曉鐘歸廬、早旦典侍退出、興心

房來謁給、申時許金吾來、殿下仰、諒闇鞍雖說々多、沃

懸地大夫所用、財宜由云々、每事御邊不異尋常歟、暑熱殊甚、

乘燭之程典侍參、

三日、庚子、欠、朝天陰、辰後晴、暑熱難堪、覺法印示送、

明後日御室高野入御高尾、

四日、辛丑、七、朝陽晴、陰雲赴東南頻陰、早旦家仲來、又
乘朝音信不相逢、

五日、壬寅、朝快天晴、已後暫陰、暑氣頗宜、早旦乘車出

門之程、可告之由示送金吾、又以下人令伺御所、歸來

云、雖公卿未參、有被念之氣色、已姑許出門、少時金吾

已參、入葉車、舍人薄青、隨身鈍色袴、濃打衣、如例孝弘

在共、相次少將參、並帶青白單衣、舍人黃香、隨身同、有弘光兼在共、不連其

後少洞院西邊四條納言參訖、左衛門佐、屬從、良久二品

車被過、侍四人、有屬從車少時先陣進來、藏人衛府、仲時

立、少將爲氏、隆嗣、季賴、奉行、高嗣、根袍、隨身鈍色袴、經

氏下職人、隨身白袴、少將雅繼、氏通、光成、教房、舍人二、家清朝臣、

顯氏朝臣、少將賴氏、家定中將、實持、實蔭、家季朝臣、二字衍力

頭中將、隨身白狩袴、紅單衣、小隨、三位中將通忠非子隨

身白狩袴、右衛門督、左兵衛督、身也、富小路中納言、盛、

大宮中納言、實、四條中納言、鹽上卿在左大、將殿前尤可然、左大將殿、右

大將居飼御所舍人、裝束色、色相替、御隨身、御車副如例警蹕御

簾上、下道御隨身步行、別當根袍、檢非違使長親赤衣鈍

文應元年 七月

四百十六

二五〇

色袴、北面五位以下皆諒闇、依暑氣無術不見訖歸入

了、殿上人少々公卿又少々追前如例、金吾父子不違歟、敎成卿

乘輿入此邊、棧敷俄懸簾、其外多有棧敷、愚眼不見及、

青侍等云、鞍大路希了螺鈿之由歟、黑鞍橋押紙、鋪燈

舌短多、手綱淺黃、又有同村濃、鞍覆若濃打歟、黑由稱之、裏

色不見云々、未時還御訖由聞之、御幸以後雖陽景晴、

涼風颯々之間、依見物懇切不借車、典侍乘少將車云々、

夕以繁茂被御覽之由被仰下云々、晚月纔見、

六日、癸卯、朝天陰、金吾示送昨日日本上卿、雅親、列立頭中

將、御親、家季付御車夕座訖還御、四條別當相替候籬

中、御前公卿皆悉著座、堂童子高嗣、範氏、隆嗣、經俊、

證義、賴惠、圓經、兼藤、聖基、長靜、賢信、信承、公全其外

不見知、座主^{四大}_{門北}、常住院、本房、鞍覆左大將殿經氏鈍色、

他人如例歟、鞍右大將、三位中將例鞍、左大將殿、左兵

西別當沃懸、地人々前皆進之、一身不進、今日又參寺

門云々、未時許助敎師朝、重服、來臨、去年所示立錐非

本望由神祇辭退云々、返之甚不得心、中媒和說歟、足

奇、母喪歟、晚月明、

七日、甲辰、朝天遠晴、川崎惣社祭、雜人飛礫之間、雜人

狂者中矢斬合死者六人云々、

八日、乙巳、天漢遠晴、扶起念誦、夜月陰晴、南方有火、

遠而不見、又不久、

九日、丙午、朝天快晴、曉金吾來、夜音動了休息、辰時許歸參之次

云、御幸日、堂童子并諸僧多對牌、及別沙汰、惟忠、宗

氏、資光被召籠、知圓申障之、參陰明門院入講被止公

請、即歸參、今日又參最勝光院入講、其後先帝御正月

之由聞欲推參云々、太子建成之改葬魏徵送之事理雖

可然、夙夜之近臣參凶事之座時儀可計由示了、師殿御

忌日興心房於虛空藏堂被修廿五三昧、夜腹痛不尋常

不詣向、禪尼等聽聞、後聞金吾南方出仕止了云々、尤

可然、

十日、丁未、天晴、雲收、未明出門、行佐々木見唐梅木、

其木如棹無枝、高七丈許、在樹中不中用之木姿也、歸

路入中將入道宅面謁、巳時歸來、彌阿彌陀佛數雅、開流

罪由忽隱居云々、蔑王事歟、是又傾城等之所爲歟、夜月明、

十一日、戊申、天漢遠晴、陽景尤鮮、已一點許法印來臨、
高尾之内、有別所覺、延開梨之跡云々、難談之間及未斜、去八日參松尾、今朝

奉謁禪亭之次云々、夜月無片雲、

十二日、己酉、朝天快晴、定修今月朔書狀到來、將軍家
產御祈、修法十三壇五度、延引事煩多、去廿六日朝、義
時朝臣五郎男實有朝實一腹、誤突切腹度々絕入、或狂氣自害
之聞云々、當時驗者祈之、又有小恠異妖言等云々、竊
以此一門年々每六月有事、匪直也事歟、

十三日、庚戌、朝天遠晴、日入之程乍晴少雨、

十四日、辛亥、天晴、暑氣殊甚、辰時許承榮法橋爲御使
來云々、答他行由、今明日客人殊難堪、拭汗扶病奉讀

經一部、逐年衰損窮屈若有若亡、夜香按イ尼公爲代官、

令禮不輕、車食供存例送蟬蛾、申終許金吾來、御幸日
以後御脚氣御不快無出御、供御殊御違例云々、驚歎不少、末世之

儀代々偏以狂亂至于今、朝廷無人而雖德政不被行、於

叙慮无一事之非據、思之還可恐危事歟、南京自一昨日
和解無爲云々、當時憤鬱物三井寺許歟、今日參御月忌、左兵長清二

人云々、即歸了云々、今朝槿花初開、女郎已盛、萩一兩
枝僅開、

十五日、壬子、遙漢快晴、朝所作等如例、奉讀一部、突暑
難堪、老身如亡、平臥之間興心房被來、香尼宿願奉讀
嘆不動尊、扶起聽聞之次有戒、今日東北院雜人相撲過、
例年終日叫噪、昏分散之時拔劍放矢有死者云々、夜月
雲多而不明、

十六日、癸丑、欠歸忌、朝天遠晴、昨日舊院女房供花結願、明

辨啓白、已金吾一人參、家光卿早出參御堂云々、御所
只同御事云々、聞此事桑門一身摧肝、在朝賢者如去年
醉鄉歟、澄惠法眼御導師云々、以聖覺法印書狀來臨、依所勞

不調、援歌歸了、北壺桃昨今熟、仍進所々、舊院女房之中安嘉二條殿、

未時許都督被過入、扶暑熱清談、當時雖不參御前、傳
承惱之樣、御手足事外御遠例、御行步不快之上、供御
事殊不被聞食、御腹苦御頻結、基成等所進瀉藥令服御

文曆元年 七月

四百十八

二五二

之時、頻有御反、是御邪氣歟、壯年近習達只雖存無爲、由心中極惡思、明靜一昨日承此事之後、驚歎忘寢食、萬事未兆可有御沙汰事也、安不忘危、御祈事不可有他事、漸々雖申女院御方可有披露由悅、此次申付了、心神無聊、申時許歸了、夜月清明、

十七日、甲寅、朝天快晴、未時許典侍參御所、世間傳々

之說、御惱非一、御脚氣、御痢結、少御溫氣、大腹水腫

之體、御手足腫御由、清成語人云々、愁存命遇斯時運

之極歟、慟哭而有餘、不知手足之所措、又傳聞康光去

比入洛、五月事之故歟下旬可還下向云々、金蓮云、栗田口前

亞相忠、後家手上腫物、基成兄弟如例療治、次第增氣及

大事於其所、清成御惱事已爲重事由披露云々、非心所

測、四五々事令相並御云々月前宿本所、曉鐘歸月陰、

十八日、乙卯、朝天又遠晴、又送車、御月忌遠路參、每月事也、

牛、車歸後示送、昨夕參入、無下々口惜之成了、不對面

由被仰出、供御事梅一之程被聞召、十一日殊不出御前

云々、御所中如護身僧音聲惣不聞、甚寂莫云々、聞之

更不得心耳而有餘、人皆如醉歟、承榮法橋爲宮御使來臨仰云、有宿願自廿一日百々日可參籠日吉社頭、若有參社之次者可相逢者、委答所勞之體申仰畏申由了、夜雨纔降、地不濕歟、

十九日、丙辰、朝天晴、巳時許少雨地不濕、昨日冷泉新

御所上棟、遷者殊勝由聞巷謳歌御所御修法二壇僅始云々、座主宮

大僧、長者僧正、午時許金吾來、御身固之時雖御常御所

簾中、前々參置皆參御前緣、其外不入見參、事體只邪

氣歟云々、去今年所々雜人說、聚洛院僧正之靈可有集

之由多謳歌云々、北野造營國司力盡不可造中門廊、

日米工等不參、禪室又被送用途材木等、今日又造營云々、念歸

了、入夜示送、依無人由相催、參尊勝寺、上卿、左金、基

定卿三人參、辨忠高云々、

廿日、丁巳、朝天遠晴、世間只同事云々、永日既夜月明、

廿一日、戊午、天晴、巳時許興心房被來談、大略有御増

无減歟、只去年同御惱之體云々、承明門禪尼又來臨、

兼朝朝臣來答所勞由、不逢、未時許雷鳴數聲、雖雲暗

雨不降、金吾來、御惱大略同御事、基成等三所許御灸可候由申、被召貞幸之間申云、此事御脚氣治身之上、大腹水之氣交御、若御灸可催者可及數十所、以三所御灸全難抑、後白川院御時只如此、賴基、時成等又三所奉灸、已及大事了、貞經一人三所御灸不可候由申、今

度又同前、御灸不可候由申旨、頗此御意之間、已御腫止了、御足猶不令踏走御、貞幸申云、於御膚者已御減入、御體之內御風猶不審、相構可被出御汗由申、昨今御汗多出御、被召在朝之處、依所勞不參、頻被召、私又示送、

一昨日參入、參御前御召、又御身固別御事不可御歟由

申、終夜候御前、三ヶ夜可催由申、二ヶ夜不眠而伺候

云々、豫聞此事、歡喜之淚且難禁、又修御祭事領狀、

旁六千神、宮令奉加事、持御几御阿久比無之云々、昨日經通

卿、入道家衛卿等參云々、今日語事等頗慰心、雷鳴微

微之後愈歸了、夜雨暫降、月出後又清明、

廿二日、己未、朝天快晴、朝永光朝臣來談、御惱事猶殆

御増歟云々、禪室昨日申時許參給、夜深退出、故院高倉

御足不令立御、御身腫事五六年有御惱、自十七至廿二御歲、奉見習之故我不驚由、夜前命給云々、已時許金吾來、只同御事歟云々、在朝去夜猶參入、終夜伺候云々、御祈數多被行云々、金蓮云、右大將侍七八人醉鄉群出入造營之所、與番匠行事口論及謗言之間、自禪亭被示送其由幕下尋問、伴侍皆追却云々、

廿三日、庚申、朝天遠晴、已時許覺法印來談、禪室之次云々、此

次聞關東聞披知宗違勅之由、伴所地頭補玄亞相室、仍

其庄被付廳、知宗五衰現訖由禪室被談云々、違勅之放

光頗是非之處散不審了、

廿四日、辛酉、朝天遠晴、草木漸有枯槁之氣、民部有憂

云々、心神殊窮屈不異病者、構扶奉讀經一部、口熱發

動、自冷泉姬君被渡此宅、扶持女房服蒜之間、无其人

之故被預尼中云々、申時許典侍參御所、夜深車歸、內

會景氣不似先日、被召御前、喜悅餘身、此書御徒然由

仰事、金吾等卜之云々、推之於事快然歟、感淚先催、

廿五日壬戌、天晴、又同近邊井水乾云々、午時許金吾又

文曆元年 七月

四百二十

來、當時非殊御減無御行步、在朝初夜奉探御脈、右御手御足有御違例、只左手無事至于昨今、玉體無別御事由內々申云々、依無日次廿八日可奉仕御祭、宮藥師法訖、可修法華法經、大法、又五壇御修法、上乗已下真惠僧

正又可修大法、長者又承早御祈云々、昨日浦の遊參議衛府三人家時、實清、光俊、辨、資季、範繼、信繁十餘人下御臺庭、宮殊令入與給、典侍示送云、於御心地者事外宜思食、御手足更不叶由有御事、供御事又窮小如無云々、私心神昨今殊違例、極恐奇、今日念誦不扶得、忠成宿禰普信、來月癸酉、六七日壬申、十四五日庚辰、四ケ日殊可祈念由示送、終日及夜、深更病惱、

廿六日、癸亥、陽景逐日熾盛、樅花辰時萎、草木有難色、金蓮云、三條京極引千僧供之所、任尊法眼融過之間、被咎被切破車、童法師被刃傷、法師死了云々、終夜林風雨聲、星隱彌照曜、夜猶無露、

廿七日、甲子、朝天無雲、巳時許金吾又來、昨日頗又御不快、今朝如日來殊事不御、山門好士佐阿闍梨快明以

春日三位書相具二字來、稱病不逢、返二字了、明快座主名字爲山僧可憚哉如何、未後願下飼蛭、血頗留之間、四條中納言忽狂駕、驚出相謁、御所邊醫家等申旨獨不審多云々、被見詠歌及昏被歸、

廿八日、乙丑、天晴、又內夜無露、未時許金吾來、昨日祈年穀奉幣、上卿內府被出立之間、忽病惱被發出、雖難治已臨刻限、依他人不可參強被扶參、雖心神迷亂無爲終事由示給云々、使伊平、資賴、長清、顯平卿、四位使闕如、依院別仰爲繼朝臣勤春日使、稻荷遂無其人、五位非人勸欺、自殿被催出人、有長著例狩衣伺候云云、或人云、昨日山伏四五十人參殿下門前、不知何物、依御物忌開門、開門之時可參由稱歸云、其身六角堂云々、金吾不知此事云々、左京權來臨、參御所之次與心房被來坐、予面事外腫之由驚奇給、極雖驚思飼蛭之故、若本之熱氣等所見欺、他人殊不驚、凡近日心神殊惱、每事違例尤怖思、

廿九日、丙寅、天晴、已後雖陰雨不降、去夜々半許東方

有火、程久、可然家歟、河東遠而不知其程不見、下人等畏亂世間

而不行南、今朝尋申與心房、使不歸以前、辰一、點歟、乾有火、

驚見不遠、進車於安嘉門院御所、歸來云、御所東隣云

云、地藏堂々一字燒了、火滅云々、使歸云、與心房北一

町餘馬場と云邊下人小屋一村燒云々、村中有堂等云

云、其北安嘉門院淨土寺云々、近日三位家信卿牛童子

與陰陽師文平と云物牛童聞諍、依文平有理、大理仰使

廳令致沙汰、家信卿令奪取其車荷車之間、使廳重擄取

牛童、有不穩事等云々、金蓮來、昨日面腫事雖告示、

無其違例由陳、近日殊心神違例、雖恐思無異事由頻稱

之、終夜東風吹雲、雨不濕地、

○八月大

一日丁卯、朝天晴陰、大風如昨日、夜又同、未時許金吾

來、景氣同昨日、無殊事、法華法自前殿被沙汰進、每物

華美路人爲壯觀云々、一日聞、山伏具兼大和國男子

息相論文書、子童奉寄金峯山之間事云々、山伏群參、

不可然由被仰、退歸了云々、蛭向伺、未時終之、申時許

櫻井宮御使參川來、蛭狼藉之間、隔物申披存旨等了、

二日、戊辰、朝天遠晴、東風拂木葉、日出之程永光朝臣

以使告送、關東貴人等遂以他界、使四ヶ日馳著云々、

故前幕下之孫子於今無遺種歟、召取平家之遺經嬰兒系力

悉失命、物皆有報何爲乎、午時許大炊御門中將被過

談、東帶、院參之大、家信卿兩息少將、右衛門、供奉、放生會近日經營云

云、申時許與心房立入給、加護身被歸、入夜金吾來、關

東使基濟書狀、京可爲穢哉事、外記勘申、又今夕可被問公卿

云々、彼產事生男子、不吉、後夏不成而逝去、偏如去年

云々、重時朝臣馳下云々、

三日、乙巳、天晴陰、風如昨日、午時許與心房又加護身

給、未時猶飼蛭、金吾示送、大法結願御馬引、諸衛佐闕

如、被催少將、可爲吉服云々、粗示送、□□近日裝束染

色有煩、浮線綾白狩衣、女郎綾單衣、二藍指貫可宜歟、

金吾十三而任少將、其年隨此役尤可勤事歟、乘燭以後

宿本所、曉鐘之程南方有火、即歸廬之後不滅、七條極

東西三町許燒由、不慥聞、商賈之百強者於許史者歟、誤脱アラ

四日、丙午、朝天遠晴、烈風猶不止、午時許金吾來、無殊
聞出事、東方被用穢了、大北斗法延引、長者大僧正雖
度々辭退、且依年始後七日勤仕、被懸祈雨孔雀經御讀
經勤仕者、可行法由雖被申、當時不被仰、自七日圓滿
院延命法被修、昨日七人御下、一同申大吉由、自夜前
被渡御物忌、定山伏猶群參殿下、甚奇恠也、明日結願、
御馬二正令^{引脫力}一正隆繼左門可引、兵衛佐公員、教氏、定
具、右門皆不昇殿云々、一日穢事定申、公卿內府弟大
納言南儒、經高、資賴、範輔卿云々、申時許清定朝臣來
向云々、少浴之間不謁、

五日、丁未、朝天無雲、曉尋朝來、暫言談、旱天逐日有焦
然之氣、草木不堪、去月南京度々有大雨、平地如河流、
又雷鳴猛烈云々、今年京無高聲雷鳴、申始許典侍自
一條殿白地退出、御腦頗有御增之間非他事、御胸中極
苦思食、御邪氣之由內々被思食云々、無驗者之上、他
驗者難加本意、被退絕驗者之故、無御物氣之由頻稱給
之云々、甚不忠事歟、故聚洛院僧正之靈之由、自諸方

有一同之說云々、或夢、或巫覡等之詞歟、最後之恨又
非無其理、貧者絕望、富者被舉之故、有如此事歟、近
日權勢之狂女其名^{支那}姬姥^宇隆清卿女、觀室^{稱三位中將殿御乳母}之中、侍等與
御廐舍人鬪諍、打損御馬目切尾、依其事召下手賜使廳
之間、又准后禪室內府親昵之御中有喧嘩云々、近習女
房帥典侍發心地退出之間、彌無人不便云々、一日比
入夜之後、定高忠高等邊騷動、御惱及大事之由告廻云
云、極以奇恠、一昨日火事實說、烏丸西、油小路東、七
條坊門南、八條坊門北、拂地燒亡、土倉不知員數、商賈
充滿、海內之財貨只在其所云々、黃金之中務爲其最、
自翌日皆造作云々、商賈富有之同類相訪者如山岳積
置、先隔大路各引幔居其中境、飯酒肴不可勝計、纖月
初明、

六日壬申、遙漢無片雲、自明日七壇炎魔天供、又依無其
足一口分、金吾勤仕、內相二壇、家光、經時等云々、已
時許御身固之見參了來、御有樣無殊聞出事、御邪氣雖
纔渡、甚微々歟、今朝以賢寂示合、在朝返事之旨來語、

大略雖同前、猶心中不恐思、去夜同參候由委示送云々、末世之神歟、心中極傾感、左京中務來、午終許金吾歸參、吉直已及刻限由、右中辨使、仍少將令參、白浮線綾狩衣、張平相二藍指貫、色不宜、女郎綾單衣、文龍相具半靴野劍、通亞相、少將御被借、紫革之綾、左京即相具、於御所西方可扶持云々、今一人隆繼御隨身將曹二人、久清、兼不經幾程少將歸來、有弘云、一御馬栗毛、少將久清返白帷、次御馬白荳毛、隆繼赤色張裏狩衣、薄色指貫、女郎生衣單衣、兼廉柏皮色白帷參、公卿遂而不見分云々、此間又巷說往々不快、有馳走者云々、心神迷惑失東西、日入程金吾書狀、公卿權大納言、右大將、左衛門、兩儒卿、大辨、修理有親云々、家季院司召公卿、光俊仰賞、追可、中時、大納言重被申、又御胸セキアケテ御足冷由、少々馳走、只今令復例、御退出、又可歸參、在友馳參伺候、猶不傾動、季尙又御卜、無爲由申張、只驗者闕如云々、聞此事聊慰之間、秉燭以後少時使又來云、如書御事已經程、當時失東西云々、相副與村童尋申歸云、已及半時

歟、人々群參、雜人充滿云々、又以助里重云々、參金吾不見逢、逢右中辨、被示云、御氣絕已經時刻、不能申左右云々、心中更不辨前後、又不散不審、不睡眠而摧心肝之間、金吾適退出、于時聞、結願之儀不及出御、但無殊事而事始了、引御馬、公卿取布施之間、内々周章取自分布施了、忿廻北面方之間、行綱、繁茂等須重室、不及問答之間、殿下依大法見物、令出給、宮可忿參給由被仰、奔廻示其由、辨進申、此間最未布、宮忿立參簾中給了、御氣荒御足冷由有聞、漸及日入御落居由披露、退出而示此由、不及片時、乍立參舊院謁典侍、即騎馬猶辨、馳參之間、秉燭以後參著、上下已以周章失東西、内府可奉告大殿入道殿之由被命、即馳參申此由、歸黃昏之程、慥不辨刻限、別當奉抱之間仰云、物の見えぬ、去年女院有此仰由聞置、乍驚忿催掌燈、持參掌燈簾外之間、不奉見御氣色之程ニ、御頭令擲懸肩御、驚而欲奉見之間、御喉鳴てやかて御氣絕、其後勿論驗者被尋、群參全無詮、及亥時許、人々勞心様、日來奉公之陰德被召入二

文曆元年 八月

四百二十四

二五八

人、爲家、被免拜見、宮もこちくと被仰、聊無御違例
實季、御色すこし青させ給許也、其後退出、人々雖分
散、與左中辨伺候、只今所罷出也、他事議定等未觸耳、
悲歎不知手足所措、即歸家了、老身雖昨不能眠、鐘聲
雞聲相續而曙了、於今者男女兩息偏立道路歟、世間事
如何、其器誰人哉、重時等可然武士馳下了、京中無人
歟、凶徒又可得時、旁無存命渡世之計歟、

七日、癸酉、朝天無片雲、閭巷又云、内裏日來有御違例
事、驚尋典侍、聊事不御云々、人口猶可恐、與心房來
給、參大殿退出云々、辰時許勅撰愚草廿卷終置南庭燒
之、已爲灰燼、奉勅未開卷軸以前遭如此事、更無前蹤、
無冥助無機緣之條、已以露顯、徒可蒙誹謗罵辱、置而無
詮者也、午終許金吾又來、自早旦雖參、未及事沙汰、只
今内府宮御對面、經高卿早參、又如然事歟、實基卿布衣
又參入、兩殿無御參、或說少將公有朝臣出家、不知、去
今年不交殊近習云々、及黄昏有弘來云、依日次不宜來
十日可被定、今日奉返御枕、可放御座筵、此役隆盛朝

臣、律師隆信、隆宗子、品猶子、繁茂父子惣四人、他事無沙汰云
云、夜月明、

八日、甲戌、遙漢彌晴明也、已時許金吾來、行綱上北面、自
御在藩近習、出家了云々、大理頻有其氣色、殿下則食故被仰子
細、夜前傳示御返事旨、只今參欲申云々、殊可示止、彼
家又無其人、御外家已滅亡歟、不便由加微言了、粟田
口後家去五日遂逝去、醫家所殺歟、尊長後家又朔日逝
去云々、自春不食云々、炎天逐日如焦照、申時許下人
云、姬姥宇昨日參詣七觀音、此丑時許頓死、夜半許念
佛音十返許聞云々、老少相競何日哉、上茲月清明、
九日、乙亥、遙漢無片雲、及日入金吾來、昨日腹痛俄發、
早出加療治落居、今日早參、只今罷出、無聞出事、明日
每事可被定役、御入棺明日歟、其侍人大略隆盛、博輔、
僧都隆信、信繁、入道、繁茂、行綱入道、忠時等歟、素服内
府、衛府督四人、盛兼、資賴、光俊、大貳、成實、資季、家
定、隆盛、家時、博輔、奉行四位信盛、三位經氏等歟、山
作所方角皆塞、已方一方無憚、仍被召能具、不知、僧都

長嚴僧正 觀音寺邊所領、御佛事此御所依賀茂社領可憚弟子也、

之由、貞應同申、猶不審之由識者等申、仍於他所可被行云々、抑雖非御葬禮、出御々所被修中陰佛事有例歟、極以不□所聞及、密々奉盜出奉渡其所、更御葬禮常例歟、極以不審、月又明、

十日、丙子、晴天又同、遲明剃頭、日出之程參禪室、即奉謁快然、散月來之鬱、世事等被示之趣甚神妙、又叶愚意、此事然者何雖少々、此趣事不被行哉、心中驚思退出之間、二位公賴卿被來會、暫安座言談之後歸廬、廬主今日被參大殿云々、歸廬休息之間、公審法印來臨、扶起謁談、經程之間左京中務來會、法印參院、今日有沙汰由雖聞、未及披露歟、內府參入、經高供奉、信盛執筆云云、御佛事於近衛宮小路可被修由聞云々、覺源下山、今日歸吉水山借車、午時歸了云々、一日比補有職云云、禪室吹舉給、康房芳心歟、申時許長者僧正舊狀云、可候御修法、桂枝有罷入事、有伴樹歟者、令使折取、不_聞、_{云々}、□□□自晝天陰、乘燭以後雨降、頗以甚雨、夜深

雖漸々猶聞雨聲、曉更止、

十一日、丁丑、天猶陰、辰後又雨瀟、世間不審間金吾、返事云、人數等事同一昨日之聞、今夕出御一定也、件出御以前始佛事例時事、今度無之、事訖歸參、土御門可被始云々、御名後堀川院云々、甚悅思、此御名年來代代無申人而無此事、今如此聖代之御名可然事歟、奉爲公家尤可爲吉例歟、又此兩三日巷說、上皇姬宮夭亡給、未知定說、凡虛言凶事不可勝計、每人稱重病由云々、已時計金吾來、姬宮事又無實云々、今夕御路、出北面、自當時門前之樹東路、自南惣門前、室町ヲ南行、北小路ヲ南行、土御門ヲ東行、高倉ヲ南行、六條ヲ河原ニ出テ、如去年御路、最勝光院南ヲ觀音寺大路也、此堀川殿之怖畏事、昨日重有委說等、此由申兩殿入道殿等、各可示內府由有御命、雖申其由、事已定難被改云云、聞此事只依惡靈之引導、各不被願身命歟、其事件裏著素服事、_{誤說アラフ}時兼卿有父母者切狩衣尻、狩衣指貫之面生相也、帷白、又日次事代已寅日全不憚由、_{在朝}明日

文曆元年 八月

四百二十六

二六〇

吉日也云々、有資、實清雖所望常候內之輩也、人數不可多云々、光俊又雖申不許、僧圓經、隆譽、尊親法親、不顯喻、經圓、覺經、貞惠、智圓、良盛、僧盛弟奉行、得、此外忘却云々、十二人也、實賢、實真、法印、聖覺、宗源、快雅、辭退云々、未後又甚雨、申終許行賢寂當時宿所、春日、高倉、四、高、無門寄車於外戶、指笠入、日徐昏、車送典侍局、開而先陣進去、武士馬數多過了、武士渡、相並令取松明、廿人許歟、次下北面六人取松明、左門尉盛季、範列、其各不聞、長親、知景、使、信廣、資直、五位皆亮、又四人付御車云々、左門久行、兵衛近員、忠廣、二品忠光、今一人、此邊者、不見知、庇御車上北面歟、僧俗雖群行不分別、從者二人取松明、僧若隆審歟、御隨身等又供奉、不見、次左門督、緋色二人取松明、共人七八人歟、不見分、次富小路中納言、同前、次左兵、次右門、次別當、修理大貳、兵部、次資季朝臣已下殿上人歟、有道州民等、次又武士如前、步行、次引馬、此間又甚雨、車歸來歸廬、朝聞御土葬儀、鷄鳴人々歸參、鬼殿

御佛事、天曙退出云々、萬事禮法甚以等閑、定又無御墓所沙汰等歟、裏書云、寬喜良快僧正補座主之後、菅良賴居住彼堀川殿、點書之間在前小女、召仕、忽稱仁快云々、良賴奇問答云、仁快とのし聚洛院僧正不知歟、有可云事所來也、良賴驚下長押、又云、範實力參北野天融可喚入、有可申綾小路宮事、試令見、範實乘車天過土御門面、示大切事由、招入範實來、參北野、參綾小路宮云々、座主事、前日御氣色宜由內々被仰、仍差使申松殿、山階寺別當天臺座主相並御光花由也、有悅思由御返事、其夜事變改被補他人、依此恨九日と云に啼死了、於聖上御事者、猶可奉守行、此政之輩皆可滅亡也、範實云、然者座主、可令怨座主給歟、答云、存生相並時行德已劣了、仍雖伺不得隙也、座主ニハ可還補給由可申宮云々、此庭柳二本、我待涼風慰翹居所也、仍常此所云々、今奉守之詞雖相違、在彼處由顯然、尤可被悅歟、十二日、戊寅、朝天陰、辰後又雨降、終日深々、朝興心房音信、殿下俄令渡親季朝臣宅給、親季渡座惟長宅、仲

親季宿所同宿、仰修不動護摩云々、此御渡不聞其故、又或說云、關東之告時、殿中至于兒女歎焉、止言笑之音、今度事無悲歎之氣云々、內府依內御乳母、夜前不被供奉云々、入夜猶小雨、不見月、

十三日、己卯、朝雲分、辰後陽景、見金吾示送、去夜以告時著其衣裝束、次參本所於門外著素服、自取出、脫又返送、是皆時兼卿說、昨日未時許、衣冠參懺法始程、內府、直衣、左衛門、

富四條、已上、衣冠、家光、束帶、經高、衣冠、基保、直衣、範輔、束、無

基氏、資賴、有親、成實、已上、衣冠、懺法之後每日御佛、次初

七日兩座隆譽、御誦經使被立、當童子宗、氏、立實、素服之人有要時

參所々無憚云々、今朝懺法之後、與左中將參御墓所、

只今罷歸、例講、內府、大將、隆親、家光、經高、基保、爲家、基氏、資賴、實季、午時覺法印興

心房被來會、殿下依金花開令立去給云々、終夜雨降、

十四日、庚辰、自朝雨殊如瀟、申時間休、今明日有所存、

閉門物忌念誦、甲午歲秋節癸酉月庚辰日四金計會、木

性者可慎恐由昔受庭訓、八卦當年星皆以重厄也、兼存

壽限由、今貧者不能祈長命者、又期何歲乎、不立道路

之前終命者、可隱身耻歟、

十五日、辛巳、月缺、朝雲分、巳時陽景晴、定修付上夫之便示

送事、七月廿六、日未時、大法九七日延引、上下、預恩、車宿驚座、大土公

祭牛迹奔、庭上騷動、五壇之中壇佛供犬喰、雖取頻落

居、日久五郎自害狂亂也、尊長靈付由渡邪氣云々、京

畿嚴重之靈露顯之盛歟、賢寂來、雖輕微御佛事名字經

營云々、夜月明也、不憶見、

十六日、壬午、欠日、朝天晴、早旦剃頭、巳時金吾來、著直、垂、每日

二度參入、他所事不聞及云々、懺法爲家、基氏、光俊、

資季、光俊、一昨日實持朝臣束帶々細大刀、平緒、無笏、參入、

人々告後解劔可登事也、去十三日隆承法印房僧又俄

天狗付吐種々詞云々、吉水靈云々、魔界得時歟、繁茂、

成時、高三出家、一昨日、女房、近衛好、別、當、典侍、二人出家、御彈、今日例講、內

府、左門、素服、四條藤中、經高、基保、爲家、範輔、資賴、

光俊、成實、資季、爲經、實任、光資、

十七日、癸未、曉漸雨、朝陽晴、今朝御懺法之次、被引御

念誦、假殿、云々、左門、四條富、經高、爲家、資賴、光俊、成實、

文曆元年 八月

四百二十八

資季取之云々、秉燭以後急雨頻降、月出殊遲、例講內府、基保、兼服、爲家、資賴、有親、光俊、成實、家季、資季、信實、有資、實清、宣實、夕裡門被參、

十八日、甲申、朝陽晴、日已入南簾、暑熱猶如盛夏、萩花盛開、午時許法印來談、大殿御消息被進宮、隆清卿女所領等讓三位中將、可有御存知由云々、御返事可申高野宮由、又同事被申高野御方云々、早速御消息、尤今世之符合歟、三位中將仁和寺宮御領預所尤得分之至要也、故八條左府歡喜光院庄預所見苦之由厭却給、不叶時儀事歟、上乘院僧正如發心地、每日重惱危急云云、金蓮云依公實僧都招引參府主宿、今日發心地、四度可奉封由被召入、退出云々、被修御祈人々如此可寄事歟、月出宿本所、聞曉鐘歸、月清明、

十九日、乙酉、朝陽晴、未後陰、申時雨降、御懺法衛府四人、修理大貳、兵部資雅有引物、皮子手筥入樓帶及資季此次有例講、次二七日御佛事、內府、直衣、大將、同、通方、衣、隆親同、賴資、直、家光、衣、經高、同、範輔束、有親、直、殿上人有教、

有資、爲經、通氏、經俊、堂童子信光、資定、左右金吾大理、黑直衣著來服在殿中明日及秉燭參堀川殿、謁掌侍無憚者、兼可被示其由哉之由示送、金吾返事、何事在哉者、籠居法師參入雖不辨可否、二品邊未音信、依有事恐所思企也、夜雨間降、

廿日、丙戌、朝天晴、未一點大雨即止、陽景又晴、今夕推參事未置居內侍由金吾告送、未始實家朝臣見來、去十日出國馳上云々、關東葬送廿九日云々、依服者凶事後不出仕、其以前著平絹白狩衣、時々參將軍家云々、秉燭之程參著堀川殿、堀川北門、昇北對妻示掌侍局、高三入道來可參南面道場之由告之、仍自西庭更昇中門廊參入、高三又來會于時無人佛前有燈明、依招請座未座僧座、掌侍於素服簾中相謁、又參二品局達申旨等承返事、少時退出、有弘扶持於晴門乘車、歸廬之後聞初夜鐘、依夜行內所念歸也、夜雨降、

廿一日、丁亥、朝雲晴、巳時又雨、入夜大雨、雷電一聲、巷說御墓所事不法、如露顯之由有世間之謗云々、行其

事人寧不存忠哉、彌增悲歎、

廿二日、戊子、朝天晴、今日藻壁門院周忌御法事、覺教僧正爲導師、六十僧云々、未時許右中辨來臨、束帶、清談移時、參舊院、冷泉、刻限無其期之間退出了、導師圓玄僧正也、卅僧云々、右佐奉行云々、御墓所事尋申、御葬翌日參、善惡無人跡可被用舊堂由事、即凶事職者經高所計也、萬事其外他人不加詞云々、本自半作無隔物堂也、坂□下地□御棺高堀之奉安其上掩土也、一時許伺候之間、護摩僧出來、聽使所送壇等精好欲返遣、如此事故不再造、雖不法可納受由頻加詞、然令請取了、其日歸御所、令達二品等後同參、拜見端立明障子御墓上置石倉立大櫛云々、護摩僧其寢殿屋南面群立、見往還人云々、御葬夜、奏遣詔使家季朝臣、其夜御倚廬兩頭實蔭、給、素服人隆親、伊平、實有、範輔、實世、有親卿、職事等之外實蔭、實持、光俊著之、今夕出御、仍可參內云々、生涯之案自他云而無益、只迷暗夜歟、廿三日、己丑、天陰、已後晴、自今日彼岸也、只斷葷平

作、心神殊違例、咳病歟、纔奉讀半部、昏金吾來、昨日

實基卿直衣參著、例講座取布施上、首內同日大貳於御墓

所供養佛經、一部尊親請僧二具皆一重一裘、講師靈

牙卅石十一口籠僧、御懺法之次引被物一重、今日故女

院齋會於無量壽院被修、右中辨、右少辨、左右行事昨日舊院、大嚴准后令入給

攝政殿、大納言通方、左大將殿、家光、經高、範輔、有

親、基定卿甚無人云々、爲氏令參堀川殿、當時雖無殊

事、按察三位^{大將}室每日自里參所相具女房、成實、俄病氣

之後、重惱狂言祕而不披露云々、夜初有涼氣、

廿四日、^{庚寅}減、朝天快晴、昨今之間奉讀一部、心神殊惱、

廿五日、^{辛卯}、天快晴、已時與心房下立被過、依腰所勞

無術乎申暇、只今歸本房、一昨日宇治三室戶山依制樵

夫喧嘩、殺害三人、宇治住人等成怒、即成軍陣致合戰、

燒三室戶在家二字、殺害十餘人云々、近日天變又頻示、

執柄御燒云々、定聚辭東大寺別當、其闕競望、金蓮云、聖護院

僧正不食病涉月危急之由云々、基成兄弟又被召付云

云、今夜尋出綿衣、

文曆元年 八月

四百三十

廿六日、壬辰、朝天陰、已後微雨間降、昨今之間又一部、
咳氣惱而久偃臥、晝不著帷、依涼氣堀庭中草木替其所、
依樹陰也、金逆持來關東出家輩交名等、注裏、夜雨如沃、

裏書云、關東七月廿九日戊時葬送、時房、泰時、義村、民部權少輔、
不知其人、駿河太郎、佐原三郎左衛門、ヲ、スカ左衛門、信

の民部入道、續松伊賀馬助、三條民部大夫、火取役城
太郎、與昇和泉新左衛門、小野寺四郎左衛門、三浦太
郎、內藤七郎左衛門、佐原新左門、遠江五郎、伊豆左門、
川豆左門、川豆八郎左門、出家女房シノヤ殿、越後越
中大進大所人々、民部殿、トイ殿、ユムロマチ出家、侍

備前左門大夫、川野九郎左門、同又太郎、牧三郎左門、
生野左門、チメクタノ七郎、同次郎、足柄七郎、藏人豐
田左門次郎、美の殿方、スノマタ刑部、同三郎、辨太
郎、中間二人平次、コタイ次郎、籠僧八人慈性僧都、實
改名辨律師、寺不也、辨律師、知名、辨已講信範、寺、土左關梨、二階堂、宰相
也、關梨、聖號三位關梨、利部僧、覺音房、高野殿、阿關梨、二階堂、
逐電人、寺、松殿法印、金輪、安祥寺律師、如法受、中納言

僧都、字能子、定泰、弟子驗者、七日佛事□前々被定其式、導師被物

五重、十物五、裏物一、請僧被物一、三物五、裏物一、

廿七日、癸巳、朝雨止、天猶陰、未時陽景晴、金吾注送、

昨日三七日殿下令參給、內府、大納言定通、家良、大將

通方、中納言三人、隆親、實有、家光、行力泰參議三人、皆平

素服八人、成實未著云々、甚不得心、在簾中、堂童子宗氏、經俊、殿上

人信實、實蔭、實持、通氏、關文、御佛事存今月由諷誦、

經範朝臣今月忌月也、過今一兩日猶可詵彼朝臣歟云

云、尤可然、他人無可書人由答之、經又半部奉讀、平臥

剃頭、

廿八日、甲午、朝天快晴、涼氣忽至、昨經奉讀一部、咳病

殊惱、腹病又不快、兩事相兼殊辛苦、今日晝著綿衣、入

夜腹病殊增加、痢病今日十餘度、服高良香聊落居、依

寒氣群盜每夜競發云々、近邊聞其響、

廿九日、乙未、朝陽無雲、冷氣俄如冬已重、彌咳病殊惱、

卅日、丙申、朝天晴、去夜白波已門邊音信之由下人等稱

之、餘命已迫歟、又云、毘沙門堂執當云々、法師立伺大

津群盜伺此近邊云々、未時許金吾來、小善事明日欲遂
諷誦、經範朝臣書送滑書、右佐三尺地藏菩薩像摺寫法
華六部、顯譽法印導師、請僧惣一重一裏、導師裏物絹
廿疋、請僧同七疋無他物云々、不似近代事、雖可有人謗
只隨所堪何爲乎、素服之外出仕人惣不幾、殿上人惣不
見云々、時儀實不足言事歟、信實隔日三實任、時々、光資
等之外不見云々、天下無辨知物由人之故也、

○九月小

一日、丁酉、朝陽晴、賢寂送御佛事目錄、御佛三尺地、御經

撰寫六部、布施導師浮線綾被物一重、薄物一絹裏一、絹廿、

短冊一枚、題名僧十一口、綾被物一重、蝶文シ絹裏七

疋、短冊、預三人各絹一疋、短冊、賢寂只一人奔營、絹

□無合力者云々、四條中納言、別當大貳、兵部、源三

位、實雅、家季、資季、有資、家定、中將、實任、信實朝臣參

會云々、右中辨引綿、各六八百兩云々、例講內府、左金、

盛兼、經高、爲家、資賴卿、信實、資季朝臣、

二日、戊戌、朝天陰、巳時晴、午時許兼直宿禰來臨、雖神事

身天下充滿、不可忌憚、八幡僧等猶有混合之聞云々、
五月大府卿於北野宮今度造宮可打瑠事令筮、隨見示
不吉由、寺僧等大不請云々、他人又卜而打了、遷宮以
後初度祭被付宮寺了、近日天變之聞、八月四日以後災
惑犯鉞星云々、建仁二年春有此事、冬通親公薨云々、
海水至淀河一筋融而爲黑血色、其中魚醉死、食魚者皆
死、仍近日不可食鮮魚云々、夜前典侍退出、沐浴夕歸
參、

三日、己亥、朝天遠晴、武士多入洛、掃部助時盛、殊群盜

可守護由被沙汰云々、時盛七月晦日、重時昨日入洛、其外猶多入洛云々、

剃頭咳病辛苦不沐浴、暮雲多而纖月不見之間、行北邊、

方邊、入夜金吾來臨、小善事不見苦由僧徒沙汰由傳聞、

貞惠故送書狀、圓經又稱其由、今日四七日殿下令參

給、宗平中納言、後內府被取布施、五大納言、三中納言、隆

泉、三參議、皆平、一三位、基定、參云々、內府第二姬赤痢、

依危急被渡安居院、昨日天亡、五歲無殊披露云々、今夜
梅宮社前武士群居守護云々、曉鐘以後歸、

文曆元年 九月

四百三十二

二六六

四日、庚子、天陰、終日不晴、巷說重時朝臣今度入洛、郎從千騎云々、兩人之外入洛武士十人、

五日、辛丑、朝天陰、辰後雨間降、未後甚雨、承明門院女房借車參故姬宮御墓、車即還、生死無常雖世習、愚僧親昵只往反御墓所灑懷舊之淚、可謂運命、終夜雨降、

六日、壬寅、雨猶降、覺法印書狀之次云、聲明師尊遍僧都昨日朝頓滅、其病如霍亂、年五十八云々、無常如競馳甚雨

之內、大宮三位被來問、扶病相謁、去月廿日比四位侍從數房公出家云々、首服遁世何故哉、安祥寺法印逐電在伊豆國、定豪僧正付屬變改之由愁歎云々、恰恰不穩事歟、人々在世只以無子孫可爲本意歟、悲哉云々、終夜猶雨降、

七日、癸卯、雨猶降、臨昏反照聊有光、夜雨猶降、

八日、甲辰、西北天聊有雲間、辰後陽景快晴、一昨日被仰、八代集歌^{各十首}、書出進上仁和寺宮、有子細云々、有恐惶事等何爲哉、所被召又爲面目耳、未時許金吾來、自十二日二度參、一身不闕云々、不聞世間事、兵部卿一

昨日著素服、昨日出仕每日例講、公卿三四人自然參會云々、公賴卿常參、三位基定之外不見、申時許次郎童來、

九日、乙巳、夜小雨、朝猶陰、午後雨又降、午時許次郎童歸了、金吾示送、今日左金吾御佛事、導師顯瑜、布施三十、題名僧被物二、裘物綿、懸子、布一結、右大將、四條納言見奇退出、富小路、日野經高、基保、範輔、資賴、光俊、成實、資季、隆盛、宗明、光資、實直之外無人云云、月明、夜深雨降、

十日、丙午、自夜雨降、已後大風、午時天暫晴、故女院御墓所御堂供養日云々、依五七日指令、早旦之由有聞、凌雨送女房車、牛二、永光朝臣來問、近日在圓明寺云云、即歸、初夜鐘以後車歸來、月陰雨不降、

十一日、丁未、終夜今朝猶雨降、入夜月陰雨降、昨日源納言、通、伊平、家光、有親、基定卿、有教、能忠、雅繼、^{御車}高嗣、顯嗣、朝光、國維長參云々、^{脱アルカ}御堂美麗云々、明辨長說々時刻云々、午時許長者大僧正被入座、^{其後脂之大}

東大寺別當事過御中陰可被仰下由有御約束云々、關東將軍家俄被召嚴海法印、非日比事者無斷之由申云々、今夜典侍除素服云々、送車、於東門外京極川邊除云々、深更月明、

十二日、戊申、朝陽快晴、未時乍晴雨降、午時許法印來談、御室來廿一日可令歸入高野給云々、尊逼去三日

參、當時御室數刻言談、次參衣笠、姬宮名號、入夜頓病退出、

終夜惱、自四日朝不及言語、五日曉事切了云々、未時

許興心房來給、依殿下召又參廻之次、北政所御方隨身、今夕可宿

富小路云々、即被歸、夜月透雲飄々、金吾來、一昨日

五七日、北白河院全修給等身阿彌陀脇士、座主宮、御室、攝

政殿、兼中、右內兩府、大納言定通、雅親、家良、家嗣、中

納言隆親、賴資、參議經高、範輔、三位通忠、殿上人廿

餘人參云々、不委見、隆範、家季、信實、有資、實持、實

任、教房、少將雅繼、爲家御誦經使、著位袍、堂童子惟

忠、範氏、資定、宗氏、講師聖覺、七僧六十僧、昨日^{十一}日、

太政入道殿臨時御佛事、等身阿彌陀經金泥一部之外

十二部、講師圓經、布施卅七、被物錦一、色々御綾五、

同文、綾十、文大例布施法眼橫被念誦、香爐宮、鈍色裝束、

童裝束四具、染綾二、懸子絹同、綿絲、色革、各二、布三

結、銀釧一腰、題名僧被物三、錦橫被絹、綿布二釧、加例布施

十、內府、定通、右大將隆親、家光、經高、範輔、有親素

服、皆取布施、布衣、實持不取、巡布施取、導師釧如例、祿

置座傍、若是本所之命歟、人屬目、盛兼卿引絹十疋綿

百兩、五七日々、殿下右大臣殿逢路給、殿下西洞院ヲ

南、相府土御門ヲ西、相門前駟過洞院辻之間、殿下舍

人居飼出土御門西行、兩方前駟競下馬、各令間給、御

隨身下馬被扣御車、以賴賴早可令過給由被申、相互間

答、遂殿下令融給、御共殿上人步行引車立了、乘車實

任□歟、資俊、伊成又下車云々、存外嚴重之儀歟、雖不

慮事非遠程、兼可被伺見歟、

十三日、己酉、朝天雲晴、巳時許出門參仁和寺宮、本御所南僧坊也

法印兼參會、即申入□出御、隔年序入見參、催淚行者

也、入御之後法印相共見小池駕、暫之言談退出、嚴海

法印來、觸關東下向事云々、良夜月雖間晴、夜深又陰、

文曆元年 九月

四百三十四

西傾又在雲隙、

十四日、庚戌、朝天快晴、朝沐浴始念誦、土御門殿黃門

被來、女院又密令去御所給、依人夢無夕歸參、月出山清

明、夜深又雲多、

十五日、辛亥、朝陽快晴、持佛堂佛壇寄東壁奉渡冷泉、

舊院御佛爲持佛申請可奉渡由、典侍日來示送、不可合

此小堂、雖非如法事先奉渡、可求堂宇歟、微力定不及

歟、堀川殿今日二品御佛事聖覺云々、入夜月清明、深

更又陰、月出之間聞初鴈、

十六日、壬子、曉月晴陰、時雨間降、朝陽快晴、曉月之前

地震、雖不荒其程久怖驚、畢宿若非凶歟、司天勘文一

通見及、又不吉無極云々、秉燭以後金吾來、今日舊院

自去秋至于去春夏之比、奉爲故女院御筆御經辨近臣

結緣經、聖法印辨說云々、素服之輩之外、內府、大將、

隆親、經高卿、親忠、家季、有資、宗平、宗明、實持、隆盛

等數反取布施、捧物被物師講師加御物、御服、御草子起座

時自取御鉢、昨日二品三尺阿彌陀、公卿今日人々外、

家光、範輔、賴資卿、隆範、信實、宗明、信時、有資、實任、

惟忠、實直、範氏、講師同、布施廿八、

十七日、癸丑、天晴、今日法勝寺御齋會云々、黃昏出門

參冷泉洞院、謁親疎禪尼之間、別當參會、相共暫言談、

月昇之間退出、于時御齋會僧車多退出、

十八日、甲寅、朝天晴、未後陰、夕雨降、夜深典侍退出、

朝參法華堂、已時歸參、大殿准后殿下令參給、隆承申

云、一品經讀誦千部事、人々進捧物、金吾分愚僧進云

云、資季朝臣又同促、不知猶金物沙汰、女郎生衣云々、錦

二重、織物唐物色々生衣等相交云々、秉燭各還御之

後、女房等皆退出、相門家人等請取御所云々、一周如

夢馳過、無爲退出、適可謂冥助、傳聞、前大僧正常任重

腦給云々、覺實怨靈可有祟由兼有雜人之說、近日凶事

皆諸僧正之靈云々、飯室入道殿又不食病出京給云々、

賢寂御佛已奉運出、今夜依雨奉安金吾許云々、

十九日、乙卯、自夜雨降、未後間止、不見陽景、安嘉門院

臨時御佛事明日也、先日催被物、今日可奉由使者來

示、即獻之、重九有三位返事、賢寂奉渡釋迦三尊、暫微

光奉安持佛堂、入夜金吾來、昨日懺法、四人別當、例講、

內府、大將、左金、四條、左兵、修理、今日懺法、別當、修理、大例講、內府、大將、

相實、家光、爲家、懺法次、大將被引宿衣色々、同色二箇、按察

入道例時之次又宿衣、明日臨時御佛事、安嘉門隆譽、

懺法之次土大納言可引宿衣、隆親卿鈍色裝束童二具、

明後日公光朝臣、眞惠、昨日久清於御墓所御佛事、別

當、資季朝臣相共參詣、聞大藏卿書誦誦、淳高卿又於

御墓修御佛事、兩儒、覺經雖不著御服、卅日以後恒參交

素服座、御中陰以後、猶女房如當時可候堀川殿、事也、

廿日、丙辰、天晴、午後陰、寂寥而日暮、金吾音信之次、

懺法之次、大理御佛事智圓講師、布施、題名被物三、爰物

布二結、例講之後、安嘉門御佛事、隆大納言、布施二十、

綾被物十、題名被物二、爰物內府被取、惟忠傳經高爰

物、其次隆中納言引物鈍色裝束童二具、相府、土大、大

將、土源大、衣冠、隆親、家光、東、經高、範輔、東、實世、有

親、東、長清、隆範、實信、有資、通氏、實直、宗明、惟忠、

範氏、資定、二人、堂公光明日午時云々、

廿一日、丁巳、天晴、

廿二日、戊午、天晴、

廿三日、己未、天晴、三々日不聞世間事、入夜聞、昨日中

將家定引物、生衣、入納、式衛門尉忠光、被物、明日曼陀羅供以

前二品又御佛事、繁茂入道御佛事、昨日經通卿初出

仕、日來所、勞云々、

廿四日、庚申、天晴、與心房來給、聊被說戒聽聞、

廿五日、辛酉、天陰、已後間晴、不聞世事、承明門禪尼退

出、未時許金吾來、昨日素服皆參大殿、御烏帽子、御炎盛、

殿下、東帶、右內府、大納言定通、雅親、家良、大將通方、

中納言隆親、實有、家光、笏、參議經高、笏、實世、有親、

兩人、殿上不委見、隆範、家季、信實、宗明、有資已下歟、

堂童子親高、宗氏、宣實、資定、三十僧、慈賢曼陀羅供、

其後參御墓、御誦經使家定、少將朝臣今參、此次傳々

嘉禎元年 正月

四百三十六

廿六日、壬戌、自夜天陰、陽景僅見、庭樹之梨子依炎旱損失、僅所殘獻前大僧正御房、親尊法印觸穢、有他人返事、名字不見分此間兩三日聊少減之由有御命、金運來云、昨日入道納言範朝卿之室逝去、臨終作法無違亂、自誦要文往生之由披露云々、往年廻雪奉行知重月來在關東、去月廿一日損足、今月朔日死去云々、金吾來、今日閑居不聞世事、又同前、

廿七日、癸亥、朝天陰、已後晴、微陽徒暮、不聞世事、

廿八日、甲子、朝天遠晴、寒霜忽結、未時許典侍參一條殿、准后可有南京御物詣、以前參殿由被仰云々、昏黑兵衛大夫家清來談、來月上

旬付仁榮法眼下向之便赴關東之由示之、暫言談之間

典侍退出、早可參由被傳仰、

廿九日、乙丑、時、纖月如絲出山丈餘天曙、草木蕭條、漸陽

空暮、

嘉禎元年

○正月小

一日、乙未、陽景快晴、朝奉拜神社本尊、已時許見夜前

開書、侍從藤雅世、雜任四十八人、式部八人、兵部四十人、伊勢、藤原

大隅、藤盛、可削召名云々、午時許金吾送武州假名狀、勅權佐者感、

悅之由也、今年以後吉慶之先表祝籠之讀經一部阿彌陀

經、酉時休息、早梅多開有春氣、

二日、丙申、朝天晴、日出之後返寒、未後雪降、眠徒覺無

携事、

三日、丁酉、朝天猶返陰、夜雪宿草樹、從辰刻陽景晴、午

時雨降、即晴即陰、雨雪不定、臨昏纖月高晴、太白甚

近、戌時許南有火、春日北、鳥九四、棟、先是孝顯來、今日

修理亮藤綱、來冷泉引馬五疋、二疋之外子息、三人各一疋、金吾又與馬

一疋、朝日申時許參陣、於左衛門陣請取大番維人、以郎

等分庄門云々、相門殿下元日御出仕、大將殿、別當、皇

后二宮權大夫、宗平朝臣、有教朝臣、雅綱朝臣、隆盛朝

臣歟、實平、家定朝臣、少將、賴行朝臣、二人連車云々、典侍晦朔無爲、昨今又異例、二人不同心、

四日、戊戌、朝天晴、典侍針跡臆又快出云々、今度事殊存外由金逆雖成奇、又有滅氣、申時兼直宿禰來臨相謁、除目十一日可被念行云々、但國多故歟云々、播州不待一同被念取歟、薩摩雖被宥如、法師國務不可有解退云云、適末世之賢士歟、十一日經高卿父忌日執筆無其人云々、伊勢守景祐行兼從者、殿近習所舉如何、長朝所行散々被追罷、此間脫文アリ、自讚獨步人子息可悲也、及戌終金吾來、直衣、參大殿、御直衣、令參北白川院內寢歟、參殿入見參、次參禪室、預數盃之間夜深了、除目廿日比被延了、實基卿辭納言尾張國等、全非僞申之詞、年來罷居、去秋出仕、所存已顯歟、其上持病相候、常如絕入、非出仕之身、帶職行吏務、依有其恐無矯僞辭申之由、申時禪室無故被止兩事之條、非朝之道理之故、又可被罷良卿職本自被申一州、仍被求闕國、如此沙汰之間被延云々、有納言之闕者乎可申任、不可疑殆之由、預快然恩言、若是專言寺務之體歟

參議勞十年、大辨二人超越、帶頭職、大理又超越、爭不被許容由被令云々、極月廿七日諸人拜賀、前殿能召寄人々、兼令待給、一上御座借座、只二間也、頭左大辨自前椽進奉召書之後、居長押了、返給不結申退出、雖頭左右辨可依人、甚實據由有沙汰之間、門前追さやい前各出御覽、辨少將每事神妙、跪座末中央稱唯、昇長押進參奉文、敬居而候、返給結申退出、忠廣相候、取履進寄、不着履逗留尋申、遣人吉書返給之時、不可歸參、後必可存知由示付退出、穩便殊勝由各御感、其車長物見袖扇文如元、物見上下小八葉袖內不融文押突雲白色紙云々、實持卿成受領功云々、實範朝臣罷居、不越宗平之恨元日殿下令參宜陽門院給、扈從伊平、實賴、服車、實持卿、冬如頭、賴行、能定古車、二日陽明門院云々、自是參無量壽院、伊平卿參內聞云々、

五日、己亥、天晴陰、自朝經一部阿彌陀經、以後休息、實寂來、來十七日有參社之念之由示合、除目求官闕同國隙、沙汰巷說又歌云々、極力二三十日之內公卿連々昇進、

可謂末代之極、寧不悲哉、

六日、戊子、天晴、金吾示送、今日參御月忌、無量壽院修

正夜、伊平、範輔、爲家、長倫卿、宗平、忠高、至夜半不

參、以職事兼綱令始事退出、僧參統四口、近年後達無

知及人欺、長朝追儺奉行、上卿宰相已下事不沙汰、元

三中被追寵、元三間出仕人、殿下、一上、大納言、高、中

納言、伊平、賀宰相、賀世、三位、賀持、上七人、平座、平中納言未

着陣、依列位著宜陽殿行之、實世夜半少將兩少辨、少納

言重房、以上三獻、平納言所語也、典侍今日又無爲、入夜又

送書狀、午時參堀川殿、信盛申時參、無堂童子、及日入

以後事始、右大將、左金四條爲家、有親、成實、黑衣、殿

上人實清、實直、只二位判官代一人只今退出、窮屈之

由也、事體世間儀不足言事也、

七日、辛丑、朝雲紛結、陽景間晴、經圓大僧都來臨撰入

云々、本意之由示之、一首被遺之、涯分満足之由尤以

穩便、衆徒當時無音云々、前後相逸欺、冷泉竊盜取女

房衣云々、無警固者之所致歟、狹少家爲貴人居所、無

不見者、其中凶徒知道出入耳、與心房來給、相謁之間、

夕中務爲繼朝臣來談、入夜宿本所、昨日、曉鐘以後歸、

八日、壬寅、朝天快晴、未時金吾適來、東帶街自是參殿可

參御齋會、又依頭中將語可勤王祿、新任之輩平納言之

外無出仕人、行幸無人之由頭中將頻雖相觸、進后宮出

車爲氏令供奉、於身者有方角憚由度之、不經程出後大

殿賜御書、五辻行幸之時、大將之比供奉事不注置、若

有所見歟之仰也、承元之比老將疲舊勞不注付由申、建

仁三年故殿初騎馬、夜大將留洛不參着、次將不立替、

奏名謁不候之樣覺悟由申了、

九日、癸卯、下
食戊、朝陽晴、已後
沍寒、未後雪紛々、長朝自七

日又出仕云々、去年親季所離別之成茂女子、自歲暮廿

九日新宰相親俊居住其家云々、曉更禪室被下向河内

新開庄、金吾、內府被伴、知信營、明日歸路可被留吹田、

右衛門尉、明後日圓妙寺、永光
奔營、三ヶ日歡娛之遊云々、今夜

行幸五辻舊宅、老桑門猶爲違遊年方、四、昏出蓬門宿景

房七條北小路坊城屋、賢寂又來、宿露霏々、今夜一條院渡御定高卿

宅、定高卿來、俊親卿積飲食引牛馬云々、伊賀可替任國、信盛又欲申伊賀、年來本意滿足、萬事任意歟、雨雪交而長途深泥、

十日、甲辰、朝霞掩日、夜雪埋路、辨官出宿所、日出之程歸蓬門、正寅當養者方、吉慶之先表也、雜人說云、左衛門尉俊清大殿殊近習、着袴夜、可引馬仰嫌行乎辭退今一人不聞、蒙殿

下勘當、子息四人相共被追却、知行二所他人已給、其身出家了云々、後白河院北面近習子參大殿、爲無二之

近習、得境逢時今如斯、不尋常事歟、實否問賢寂、俊清

子右衛門尉忠兼與敦尙子有官別當民部大夫、親茂可引由被

仰、申父嫌由開解、大夫從者由被尋仰子細之日、女院后宮

御時、大番物ニ被搦贖物、懸頸被付、纔稱御所侍由被

引隠了、弟兵衛尉又中宮ニ居昨日大番ニ被搦之由、親

茂又申之、相互喧嘩之故、俊清父子皆追放由承及、出

家事未知云々、又與行親可引由被仰、俊清申旨、諸大夫宗門事

無御沙汰歟、惣不可引給馬由申、又親茂被追却、重經

對馬、子時重民部大夫、行親引一疋、今一疋敦尙大男、民部大夫、通

成左衛門尉云云、應通子、夜行幸、左大將殿、伊平、實有、基經、資賴、

公長卿、定雅朝臣云々、具實卿改在后天宮御方不供奉云

云、侍左四人、右五人、兩頭供奉云々、左衛門高嗣、右

兵衛尉賴清、左、宗定、教房、能定、爲氏、右、定平、實直、

賴行、氏通、雅繼、

十一日、乙巳、朝陽快晴、宿雪未消、終日沍寒、四望山皆

白雪、庭上猶半不消、

十二日、丙午、天晴雪飛、酉時以後積地、右大丞音信、未

拜賀云々、禪尼等參祇園吉田云々、仁和寺宮除夜籠高

雄給、明日令歸、此事今度始云々、師員入政爲德政、口入歟云々、

乘燭之程歸由聞之、終夜雪降、月又明、

十三日、丁未、朝天晴、夜雪積地二尺許、巳時許金蓮來

云々、禪室去夜被宿吉田、只今騎馬見川原雪給、於一

條乘車還給云々、

十四日、戊申、宿雪白、朝天晴、辰後又沍陰、賢寂來次語

世間事、一昨日定高卿父子在信盛宅、家主子加冠欲飲

食之間、教成卿掌客使來招請兩辨相共行向、入道三位

嘉祿元年 正月

四百四十

二七四

家衡經行等醉鄉、白拍子三人、客主亂舞酩酊、引馬二疋、入夜月清明、禪尼參賀茂、金吾來、直衣、畫秦綱所進馬、兩方各二疋相具參殿、殿下參御前、大殿戶部入道參間也、不見節分夜南北政所以下渡御今出川、自晝御座後亭、盡海內財力、行兼行事、實持稱供奉給事不參內、與行幸資季又御共、依此與以參內、及夜半雪、朝大殿准后出軍二兩、俄御西山、於中納言局家野、供膳、宗平資季等供奉、諒開布衣、昨朝吉田非夜前宿、見雪、被渡內府、將中具、金吾供奉云々、夜部參法成寺、殿下御參、知家、親俊、御齋會始、通方隆親卿未明參、講師勸修寺、八條左府御子、稱病遲參、具實、伊平、範輔、經高、爲家、實世卿、及深更行香、兩方、各取□俊西行香人數不定由、辨隔机申之、兩平家微笑云々、其後定雅相公拜賀着陣、依憚其路頭不催仰給由、範輔卿嘲弄云々、法勝寺辨、辨少將承之、未隨神事、信盛修行、少將可行春日祭云々、王祿參內御齋會以前、勤之、有親卿經光勤仕、上官未參被退出云々、明日正月日野可參、宗平、實季山野遠路供奉爲失於途歟、

十五日、己酉、朝陽快晴、沐浴潔齋、明後日有參社之志、御齋會事依不重間大炊中將、返事云、昨日參殿、御共九條法性寺之馳走參行云々、少時通氏中將返事送之、其狀之趣、去夜雖非御物忌、依永萬之例、於南殿被行、被因例如何、新大納言、高、中納言伊平、範輔、參議經高、定雅朝臣、著右仗、通氏、伊成、氏通朝臣、公卿於階前着座、通氏自本陣着靴、於階前着出居座、少將宗定入日花門、於宜陽殿軒廊着之、已上皆靴、不着座、次將猶着靴、取祿路一同、宰相中將一人於南廂無行香云々、本自無行香人也、萬力元永高記、非次將殿上人狂着靴取祿、就此等着歟、長久元年頭中將帶劔着淺履取祿、是例也云々、猶可用之說歟、久不物詣、與破損、覺法印借送與雨具等、十六日、庚戌、凶合、朝陽寒、白雪飛、奉讀經一部訖休息、夜月清明、十七日、辛亥、天晴雲飛、已後快晴、已時少將來、相具出門

參詣、關山雪消路無煩、路頭之悲有其聞故歟、至于下

女等、往反者皆相具弓箭兵士、申時參着、福宜來談、

此間雨、少將令奉幣了、^{福宜}、月出之間出宿所、^{如何}、奉

幣、^{忠成}雨止地濕、暫候御前、月昇退下、少將通夜、老屈

入宿所、今日經時卿自雨止精進、次參詣云々、

十八日、壬子、天快晴、天明出宿所、於辛次日出之時、入

蓬門之後、典侍參法花堂、在共、^{孝願}信大夫局相伴、及日入

被歸、宰相局外男女不參云々、宜秋門、^{月輪殿}入夜金吾來、御室

修正結願、殿下御參、在座者三人、公長、^{親後}殿御退出給、家

光卿自御齋會參、御齋會內論義、建曆依大祀以前於南

殿被行由見之、去年粗申其由、殿下仰、每度於御殿被

行由被仰被行了、而今度高嗣奉行、勘先例永萬一度之

外皆於南殿被行由申、仍又如此、結願又公卿八人粧出

云々、十五日政始、長朝催之、家光、資賴卿、辨一人、忠

高、入夜遂之云々、十七日參勝光院、公卿五人、除目任

人事、其後公私無言說、甚以無旨云々、音力

十九日、癸丑、朝天陰、小雨、即天晴風惡、返興、扶起奉

讀一部阿彌陀經、申時以後又僵臥、戌時許金吾來云、

二位宰相此晝風病不有出仕之由申大殿、内々仰右衛

門督、難勤仕者執筆定闕訖給由殿下被仰、不願身堪否

爲不事闕、只隨御教說之旨可書付由申、被仰出乎由、已

賜御硯筆墨、莒文土代等去年平納言所書大間等退

出、明日來可示合由告之、老僧雖不知始末、事同之、如

聞天之音樂、全奉伺習事也、只度々見御一門習禮、暗推

知事趣許也、洩窺事等注付一卷、一日比授之、依有便

宜經御覽之處、更不可進之、祕事等多被書了由、今日

被仰云々、爲耻爲悅、多年雖有執心、身有限更以不堪、

不得其時而空兼了、今逢闕如時勤仕此役等、以名字爲

面目、誤脫アラフ盡意所存過昇也顯之榮望、壽考之後分今生本

意、一時滿足喜悅之外無他、即歸後及子夜不付寢、只

思此事、

廿日、甲寅、朝陽出、雲漸晴、申始許金吾聊向硯、如形雖

習禮、申文無一通、只舊四所籍許可及練習、其時者、^{服束帶}即

着狩衣參殿下訖、大間事可、^{何御氣色}外記還任兼國勘文關官寄

嘉祿元年 正月

四百四十二

物諸道舉等見合、兼國關官粗注付之、兼國人二十人、不載關官、甚多領滿歟、

廿一日、乙卯、陽景快晴、天氣和暖、自朝奉讀經一部、又
剃頭、日入以前行冷泉、昨日參殿、參以前參大間事蒙
仰、今日雖有習禮之志、無申文一通、不及取向、短晷已
暮了、仰天之外無他、昏黑左中將被訪來、相共對面、有
申文等、有沙汰云々、無聞書事、戌時許歸了、且喜且
恐、及子夜不付寢、

廿二日、丙辰、天快晴、夜前自身覺悟失錯之有無不審先
問之、凡心神失度之外雖無他、兼存知分限、無殊望失

事、月出之後、誤脫アヲシ召鷄鳴之程有終還申之體散々、公卿轉

任、御出仕人有之、入硯宮了、申文假令大殿三通、殿下

二通、右內府各一、兩大將、左金吾、伊平、實有二、家

光、範輔、實世卿歟、下勘文十餘通云々、右大將、中納

言經通、所望叶歟、出仕不重、具實、隆親、伊平、基良、人々退出後、人々替座、實

有、家光、範輔、有親、親俊、莒文、左右中、左右少辨、辨

少將進退美麗云々、殿下子息被仰含事等多、勘盃之後

公卿皆退出云々、奉讀經半申之間猶可來由示送、仍午

時許行向、又無沙汰出書、去夜下勘申文十四通、大外

記書寫送之、其一見人々之大略書儲尻付、兼國人又注

別紙、宛定其任國、殿下勘文去夜悉任了、外記返事定早速事

終殊勝之由示送、職事之中辨是非者只右佐許歟、季賴

取目六、不尋常云々、夜前師兼朝臣文章生散位近平不

被任云々、今夜又可早參云々、日入之程歸廬、如粗聞

及、可勤仕之條人皆驚思歟、如賴資卿人、經高卿ヲ彈指

云々、前殿御不例御由有其聞、人々多參集、爲世尤可驚歎事、

廿三日、丁巳、天快晴、又問前事、返事云、後夜程事訖、

權大納言、左門伊平、實有、家光卿、有親、親俊、莒文

如初、去夜頗安堵無失錯歟、如當時者大納言不被任

歟、有行幸賞歟由密々被尋外記傳承、經高大藏卿相轉

詞有疑云々、所存於鴻儒加任者非訴有冥恐事歟、但正

三位之中極無骨、上郎甚多被叙二位事、第一良家之由

所存也、內府以書狀有感言、自愛過顯官之望由參申、

午時許行向、拔出叙位事、惣不知其事、只可伺御氣色

由示、又每事細々問參外記、殿下未時許御一條殿由開

之、仍御參内後可參、秉燭以後歸廬、
廿四日、戊午、天晴、曉更未明、使者持來任人折紙、披見
之、

參議爲長兼

中務大輔藤行長光附解退替

侍從藤公朝

治部卿言家

木工權頭藤仲能

山城守中盛俊外記

大和守中定平史

伊勢守隆行藏人

伊賀藤光清

下野守源定兼

出羽藤光衡

因幡平範綱

薩摩平成宗已上名替云々

美濃權親俊

讃岐權定經

近江介資季兼

大藏卿親房兼

左少將輔通兼

右少將敷定

左馬權頭兼敷

右馬助資信

解退 經高 光衡

從二位 公雅 爲家父兩社行幸實 從三位隆綱

正四位下 爲經 實光 光俊 宗明正

從四上 通行府 家直府 高泰敏 藤公親 和氣

貞幸

正五下

公貞未給

藤忠兼白川給

藤教氏府

資親

實春

範氏宜秋未給

藤親嗣

從五位上

季通

祐通

雅平府

三ヶ夜無爲神妙由蒙殿下仰、先叙位、次除目、於事雖
存外、早參入見參、多散不審、着座以後早速書終給、頗
異他由存知つ、於作法故實者非所知、殿下令申大殿給
之由密承之、太郎はいか、候らん、次郎に訓程の事は
皆知て候う、存外事歟、成長語之、顯官舉候座人、高
實、隆親、伊平、家光、範輔、法公有親卿、親俊朝臣云々、
雅親卿可早出九條、經御後隆親卿以下出敷政門云々、
二品事猶々感悅、此間事以書狀付源少納言給、此間御
返事、今朝無御神事者可參之由申、明日有御出仕事由
被仰、仍午時許參、以良朝臣入見參、暫逢有長朝臣間、
有召參上、快然見參、申所存等、儒卿加任殊勝德政由
盡詞申了、二品事面重畏申之間、殿下御參、除目眞實

嘉祿元年 正月

四百四十四

二七八

神妙由被仰、姬宮巡給御申文而下勘一事不可然、後思出由被仰、外記又勘上了、不存失金吾又參被下出、大殿入給之間退出、參禪室、又奉謁快然、日入之程歸廬、天陰雪飛、經高可解退、無所申請云々、大略怨鬱歎、範輔卿三不可被任云々、光衡父入道不孝、隱居始相公局宅辭官云々、除目之間事、云日來云今日少々雖聞及、忘却不能注付、

廿五日、己未、天晴、沍寒過于冬、寒氣入骨、鼻垂疾忽惱、印圓法印來賀、扶病謝之、昨朝二卷今日六卷奉讀一部、心神違例平臥、申時以後雪浮々□□、入夜雪止星見、

廿六日、庚申、雪積地六七寸許、朝陽漸晴、經一部之間、未斜金吾來、兩殿御吉田有召、仍付左京車來臨、自是馳參云々、左京父子暫言談、日入以後歸、

廿七日、辛酉、朝陽快霽、今朝傳聞、金吾昨日向西八條關東後家八講所、此事詳事云々夜前宿八條賴重宅、今日猶可向云々、加階最初不得其心、自大殿催遣人々由昨日傳

聞、各依無人被指遣歟、又昨同所召下人々於吉田有杯杓、定高實持卿等、兩殿御馬、大僧正同騎馬供奉給、岡崎方御覽云々、竊以雖無外人、猶諒閭年如此事如何、似無人耳目、入道大納言殿給書札、大理事類立耳之間、除目錄勤仕無望由聞之、二品又悅思、入道按察又消息、此兩事并選歌一見之志示也、送未定草案一部、未時許沐浴、休息之間淨昭房來、

廿八日、壬戌、自夜微雨降、已時陽景晴、一昨日定納言已下相引參大僧正御房、又孟杓、入夜分散、昨日依大殿仰向西八條八講、家光、資賴、有親、公長、知宗、師季卿、有教、能忠、家定、實任朝臣已下諸大夫等、明齋、貞雲、隆承、顯親、凡僧四口云々、下名今夜由云々、經一部申訖、右大丞被來問、言談頗移漏、入夜、

廿九日、癸亥天晴雪飛、沍寒殊甚、已時許見聞書、雜任六十四人歟、正三位實世、臨時從四上實雄、信盛、從四下朝輔、正五下通能、伊賴、冬忠、清良元、中師景、從五上丹波康經、藤盛季、同朝房、同兼綱、同宗基、從五下源信宗、同範親、源定兼、右衛門尉式賢、可爲左參河守隆

朝、越前守藤長隆、經一部訖僵臥、昨日大丞說、經高卿本意爲替大藏卿、菅卿每日行向訓釋蕩其心、不載相傳詞、只今上解退狀、無故罷其官、忿怨無極云々、儒卿辨說不可有虛言欺、不便々々、前後御病似邪氣云々、夜前辨少將候官奏、午時許典侍參一條院、入夜歸、大殿御風不快云々、春月雖斷葦、窮屈不能指所候、

○二月大

一日、甲子、朝陽快晴、送賀札菅相公、憚桑門之身過數日之故也、未時許興心房來臨、連日參大殿、任官競望猶如雲霞、來十日比又除目云々、所謂末代之儀欺、公俊卿殊憂公雅超越云々、臨昏金吾來、又於禪亭醉鄉有酩酊之氣、不能心事、言家朝臣來示昇殿望事、八省卿地下頗非恒事欺、

二日、乙丑、朝天晴、宿雪薄、兵衛佐賴清來臨、相謁之間永光朝臣來、相替退出、昨日白地出京、今日又歸圓明寺云々、

參議常出仕事等次第送新相公許、爲報門弟一分之深恩也、有本意返事、夕金吾來、傳孫子吳起和歌好士事、

是末世魔界之祟欺、只早可申入大殿由示之、即參殿、入夜云、定可許所請欺者、御方違御共參九條殿云々、言家朝臣、夕送書、昇殿被仰下之由有女房消息、申力參感悅由了、

三日、丙寅、朝天快晴、入夜宿北邊本所、聞曉鐘歸、

四日、丁卯、自朝雨降、終日漂々、今日以金吾狀重返勅

撰清書之人許、住吉遷宮殊無心隙所預置也、有可念書

返事、昨日姬宮准后宣下差人數被催內府、源大納言、

九條新大納言、大將、中納言力不於中伊平、大宮、實有、右金吾、頭

中將、勅使實有卿、給祿無此事、比イ

五日、戊辰、朝猶小雨、已後晴、未後風惡、一日比依被示

送旨、直物祕藏次第愚記等書出送菅相公許、年來本意

由有返事、入夜大殿仰京極北政所御歌有見出事、尤可

加入欺、申尤可然之由、

六日、己巳、自朝快晴、池上猶沍氷、早梅不開、入夜金吾音信、

今朝參法花堂、晝參堀川殿、權大左門、四條最中、左

兵別當親俊、堂童子光資、光國、無他人、光資取裏物、

嘉祿元年 二月

四百四十六

二八〇

七日、庚午、朝天陰、未後雨漸密、覺法仰來臨、去冬病後初出行云々、與侍參內裏、憚年始之間久不參由人々被示、以御神事隙參堀川殿、謁申歸內裏、快然入見參、召寄蒙仰、元大僧正參給又見參云々、臨深更雨脚如沃、雷電眩晦怖畏無極、終夜雨降、曉天星見、

八日、辛未、朝天陰、小雨間灑、午時陽景晴、昨日今日間奉讀經一部、申終許公賢僧都來臨、扶起相謁、自然移時到月前被歸、金吾書狀、柏夾木兼日存知之時用黑木由有其說、何樣存哉由可被申之由、禪室御命云々、如此事爭習知哉、如仲家朝臣定分明存歟、只木竹共皆用自由所承也、可被申此旨由奏之、

九日、壬申、朝天晴、春日祭辨少將自內府亭出立下向、禪室自昨日見物成群、依寒氣不能出門、未時許金吾來、辨少將十六日禁色宣旨、宗光已時許出門、先前駟笠持如例、次移馬舍人二人、朽葉明次辨侍、駒馬次隨身、色隨也、二人、新木上下狩胡錄毛沓、次前駟六人、大夫將監忠保、唐紅衣知資、唐紅衣行光、白鶴裏忠廣、時衣以邦、藤色

白裏永光、海松色次辨直衣、紫浮文指貫、萌木衣、紅單衣、半靴、野劔、鹿皮細侍十人、久正、盛範、廣經、宗經重光、紀久宗、爲經、知景行親、重繼、重光吉田衛門子信季、檢非違使宗繼子、次衣櫃、退紅仕下家司彈正忠相具、柏夾木用白、社頭縫腋蒔繪劍、前駟束帶、隨身袴、胡錄殿仰、中納言中將勤上卿時如此云々、申終許參堀川殿、入油小高三入道引導、入車寄妻戶內、二品被開障子、去三日適退出里第之間、不慮下長押之時顛倒、損足大腫兩三日苦痛殊難堪、御月忌日猶扶起跛參、未立揚由被令言談、及秉燭以後退出之次、大貳參、令聊述心事退出、

十日、癸酉、自夜天陰、微雨降、辰時許西有火不遠、人云、藏人佐當時宿所也、乍驚送使者、自隣權大夫局家出、一卷文書不取出、乘車在門前無牛云々、使男見付藥師九喚寄牛云々、權大夫又在向小屋由示、又與侍求車之間、乘濃州車云々、失火云々、貧人甚不便、申時許忠成來、

十一日、甲戌、朝天陰晴、臨昏治部卿來、來十七日可拜賀之間事等相示、秉燭以後沐浴之間、少將內侍子息信爲來臨、依沐浴不面謁之由示之、又淨監房女子來由固心此宗車參大殿云々、可官仕云々、但絕名號有耻、不令持榻、不具侍、

十二日、乙亥、朝陽鮮晴、簾際紅梅開始、奉讀經一部、殊以無力、已及終日、

十三日、丙子、自夜天陰、已後陽景見、未後又晴、自朝經一部未時訖、暫休息、申時許與心房來給、戒聽聞訖、入夜後廿五三昧如例、例忌事等送嵯峨、兼夜半僧還歸後、助里云、於一條室町見昔相公拜賀、前駐六人、實聞之、

□□給打長候、宮內少輔俊國、俊親朝臣子外孫、兵部少輔高

成、少納言長成、大內記公良、修理權大夫在賴、左高卿來子、

各舍人賜裝束、雜人兩三人不具量、車新調、車副弘結平禮、乘尻牛轡前木敷、今夜先參北野、參一條殿由下人等稱之云々、

十四日、丁丑、天快晴、經一部奉讀了、例時間大宮三位

被來、子息中間先着布衣、吉服、欲參殿之間事等清談之

間、僧都少將內侍子來加、三位被歸後暫言談、又勅撰所望之

後、河治莫歟、黃昏歸了、今日於阿冷泉馬場修理亮泰綱遊放

歟、笠懸白拍子醉鄉歟、金吾午時許來、即向其所訖、公

私忌國哀非蒙服、本意雖存無外人由、人甚不便、三位

語々、具親入道以重時行向前黃門許、訴候者事柿本事

不知由答、置歌歸云々、至極之僻人歟、駿州勅撰地頭

殊異他歟、

十五日、戊寅、天快晴、經一部奉讀、午時與心房授戒典

侍給、聽聞、成茂宿禰申始許來、入簾中言談、明日歸坂本自

一昨日殊窮屈、

十六日、己卯、朝天晴、午終經一部訖、典侍參一條殿、入

夜退出、婚姻御營一定三月下旬、有其沙汰云々、一寢之後南

方有火、其勢猛也、下人說、自錦小路町及四條坊門今

出西洞院室町等云々、明月無片雲、後聞、四條北、室町

四、西洞院東、六角南、皆悉燒了云々、

十七日、庚辰、天晴、午終經一部訖僵臥之間、未時許左

嘉祿元年 二月

四百四十八

二八二

京來談、今夜治部卿拜賀付簡云々、戌時許冷泉姫君俄
病惱之由下人來告、助里尾張尼奔行、歸云、如霍亂危
急、興心房來給、在友朝臣來占、無別事由示之間即復
例、大殿令兼給、有召馳參御方違所訖云々、九條殿、

十八日、辛巳、朝天晴、陽景透雲、未後陰、聖覺法印不食
病、今月以後殊無力、逐日弱由昨日雖聞及、今日可向

訪由示隆承法印、今明自身每日有指合事、廿一日來進
由示之、仍止了、典侍如例參法花堂、權大夫、新
大夫局相伴、下人說

云、宜陽門院又雜熱事云々、申時許歸送女房達、今日

不讀經、補他
事調、入夜金吾來、夜部前大納言家御方違又酒

但依私方違退出、宿賴重宅曉歸、自明日暫向嵯峨有可

見事云々、晝陰月晴、

十九日、壬午、
沒、朝天陰、已後甚雨、申時陽景見、陶門絕睡

眠、簷前梅過半開、

廿日、癸未、朝雲飛、微霰零、已後晴、風惡、入夜宿本所、

一昨日滿十五日有雨氣、不出鷄鳴歸、

廿一日、甲申、朝天陰、南隣竹中鷄高飛鳴十餘聲、卯刻、

忌避無其術、詠鵬鳥賦、不奇驚耳、春天群鳥發音、竹村
之間尤來馴歟、已時許問聖法印、安居院房甚病、承法
印先面謁、雖狼藉無便宜、可面謁由、被云出參本意由、
入寢所前、逐日無力庭弱不能起揚由言談、猶其詞多、
依無心不經程立出間、寄女車、高倉殿來訪給云々、性
怒房相伴、付車役可來蓬屋由詵之、忽同車歸、昨日參
九條殿一宿、今朝乘基定卿車所來也云々、濁世富樓那
遂爲遷化之期者、實是道之滅亡歟、悲而有餘、今年六
十九云々、先師七十八由被陳、碩學能說於今斷絕歟、
廿二日、乙酉、自朝天陰、未後小雨、酉後漸密、已時許高
倉殿來望給、未時許性怒房相共被渡京極殿宅、中御
門、申
時興心房來給、殿下自昨日腹痛御惱、人々并參、大殿
御渡、今朝猶不快御、依祈年穀奉幣御神事今日僧不
參、准后御春日詣已被寄御輿之間、南都衆徒蜂起、御
神奉出移殿之由自奈良被申、令停給云々、猶是大安寺
別當事訴訟云々、

廿三日、丙戌、通夜今朝甚雨、午始許興心房使來云、依

物忌事自朝參殿下御所也、不聞他人音信、不審無極、以下人令見、歸云、(興心房當時物忌、依無紙筆不委申由示給、殿中奔走、神馬被引諸方云々、連々急事非心之所及歟、及未刻適興心房書狀、自一昨日御食御不通、不被開御目、御腹痛雖落居、惣不及御言語、今朝參護身、聊被開御目、又參上、事外御目輕由被仰、御粥聊被召寄、被始御祈、佛眼法、法務大尊勝供、快雅、樂師供、成僧、不動護摩、圓照、承之、

廿四日、丁亥、朝陽晴、已後陰、尋申興心房、自昨夕又殊不快候歟、御食事如絕思御、無力庭弱殊甚、雖不幾殊以令弱給歟、前大付正雖護身給、當時無宜御氣色、腹痛又令苦痛給云々、午時許治部卿來、昨日內裏爲御方違渡御記錄所、殿上人卅人許束帶依催參取脂燭、大殿左大將與御參、今日大殿尊勝陀羅尼供養依催參、事遲遲之程來由云々、此病極不便事歟、世上之儀只如風前灯、雖浮生之習猶匪直也事歟、及午時金吾來臨、所勞不能安坐、不出衆中、夜々參閑所、御有樣不委知、近日

男女皆驚歎云々、申時許歸、黄昏有教中將被來向、參尊勝陀羅尼之次、言談入夜、未時許不審餘典侍令參兩所給由、後殿只參姬君御方、但爲尊勝陀羅尼大殿白地渡給、入見參、年來無病之人始如此、殊恐々被仰傳傳說、此夕方聊御食事令觸給、日來無名字、又御邪氣快渡、頗以爲賞云々、尊勝着座公卿、伊平、經高、額出仕云々、有親、公長、親俊朝臣云々、又人々云、御經營事延引無日次、可爲十月云々、御祈數多被始云々、

廿五日、戊子、天陰、雨不降、未出臥內、超清法印來臨、驚起相逢、訪安居院歸洛之次云々、雜談自然經程、已及午始聞見歸、昨今之間終一部、各半部、酉時許窮屈偃臥、金吾音信之次、今日御食事頗事宜御氣色云々、如下筵今日有御少減是有實由有申者等云々、

廿六日、己丑、天陰、已後微雨、申時陽景晴、法師此三四日食事一向留已進給之由、今朝返答之、末世老身付視聽空歎、殿下昨日宜御之、邪氣快渡由有其聞、大殿還御、准后御渡殿云々、簷前兩株紅梅早盛開、南垣薄紅梅同

嘉祿元年 二月

四百五十

開、金吾音信、南衆徒御轉奉渡、一定發向由相議、長者御祈停止、若宮御神樂制止云々、法師御房密々子細等爲示給招請、兼敷揚鞭馳下云々、此在事等自本其源皆有事故、圓經覺遍長房入道等皆密々同心、欲亂南都、以其張本爲骨肉所申悉許用、依可讒言被惡定立一人云々、八難六奇之心、中難測量云々、禪室又新開方違、廿七日、庚寅、物忌天晴、治部卿又來、昨日參座主宮入講、入故道中納言遠忌女院殿上人參上、自大殿被催遣人々云々、源少將宗定、六角少將氏通、牛童關評、拔刀奔入門內、宗定牛童猶結黨伺由、氏通成恐不見後事退出由語之、予依諸病無術不能出仕、替可被披露此旨之由示典侍、令參舊院並大殿御所、入夜未歸、昨日參入公卿、雅親、具實、公長、基定、顯平、師季卿、殿上人、隆範、有教、資季、有資、定平、宗明、宗定、夜深典侍退出、二品足病漸被付減、舊院閑寂、少將內侍所給播州所領停廢云々、芝焚蕙歎、殊有沙汰所給也、不異木石事歟、參室町殿、黃門局姬君御共參御所、奉侍之間及深更、御物氣雖快渡御、憔悴無力令衰損給、

事過日數之程不能行步、御膳苦痛止、御食事被召寄、中相交名字許珍御減、准后不令立去樣大殿猶御後殿云々、廿八日、辛卯、朝陽快晴、匠作清書上帙終功、自金吾許送之由、披見握翫之、下帙又送之了云々、今日殿下第三度御上表之次、大臣御解退云々、覺法印午時許來臨、言談及申刻、今日不聞世事、休息之間六條三位入道相具前武衛被來驚謁、最愛之餘可見知老入道由云々、言語之間昏被歸、廿九日、壬辰、朝陽晴、自朝經一部、阿彌陀經如例奉讀、休息、金吾來、參殿退出、前夜第三度御表作者、藤中納言清書、宗光卿、將殿、伊平、宗光、資賴、有親卿等參、勤參可爲後日、天永例云々、使中將雅綱朝臣、山階寺猶可有寺務由、以頭辨被仰本人云々、昨今御有樣只同事歟、此事猶可怖歟、禪室不被恐思云々、卅日、癸巳、自夜天陰、朝雨濛々、午時許與心房來給、戒聽聞之次、殿下御有樣自廿六日以來非危急、御食事聊

令取觸給、御言語等尋常候云々、昨日爲御祈可參籠鴨御社由蒙仰、適頗休息、自社頭由語給、天變猶多云々、不委聞、法華一部阿彌陀經讀誦又平臥、昨今機似春氣、仲春日來如嚴冬、

○三月小

一日、甲午、吉、朝陽漸晴、和暖、午終々一部、剃頭、簷前梅已落始、次紅梅二本盛開、蝶來飛、申時許金吾來、自殿退出、

御有樣同日來、同入大殿見參之次、消書半出來、外題御筆所望由洩申御氣色、似可許草本、且可進由被仰云云、來四日勅奏、大臣、依請、自餘如元由云々、臨昏地震、星宿龍神勸歎、夜星晴、曉天陰、

二日、乙未、天明雨降、午時陽景晴、午終々一部、雨止天晴、申時許隆範朝臣來談、

三日、丙申、日出以後漸晴、寂延入道送柑子下枝、栽持佛堂前、今日不聞世事、

四日、丁酉、朝天天快霽、寒風猛烈、准后白地入御室町、不審、御平減宜、體披露歎、由女房有返事云々、

五日、戊戌、天快晴、早旦二品於舊院被供養普賢畫像、

以舊御服圖之、典侍爲聽聞令參、午時歸、御懺法之次貞惠爲講

師、法印、由中、大將、四條納言、衛門督、兵部卿、有資朝臣、左

兵衛又參會、被面謁、其後參室町殿、大將召、殿下事外

宜御、有御筆御書等云々、笠置微小善如例明曉令沙汰送、追年輕

微事猶雖無其計、存命之間不可默止、午時終一部、申

時左京權大夫來臨、昏北隣僧院聖法印遂事切給云々、

雖日來聞無臨由、悲而有餘、此間左中將音信、心神疲

而稱他行由、秉燭以後孝弘來、爲衛門督使向隆法印

許、午時許事已一定云々、同傳子詞由示之、人使多來云

云、宿本所、

六日、己亥、減、朝陽鮮晴、已後陰、鷄鳴歸、終日偃臥、剃頭、

殿下今日又御増、

七日、庚子、自夜雨降、終日濛々、有教中將音信之次、昨

日參最勝金剛院、伊平、基定、師季、實持卿、家定、少將、

光國、奉行、基邦、同行幸云々、今日雨中長途人煩多歎、

八日、辛丑、欠、朝陽晴間陰、大風、南北遠路參、金吾腰痛又

嘉祿元年 三月

四百五十二

二八六

發、一昨日西園寺實有、爲家、基定、實持卿、御月忌、大將隆親、基保、迎養、爲家、資賴、有親卿、殿上人光成一入參、昨日最勝金剛院、左大將、行高、木所、爲家、有親、知宗、長清卿、親俊朝臣云々、終日寒風、時々念誦、入夜金吾來、自殿退出、先日御灸、於長、醫道僻案依御邪氣渡御減由女房偏存知、諸醫從伺候閑殿、不參御前、實無御減之間、今日基成奉見御腹、脹增不便由申、又奉灸之間諸人成恐、南京事、召老之輦稱新別當寺務之始、停衆徒吹螺之音、本訴猶不定嗷々、心中未知安否云々、明日季御讀經定、菅卿右筆云々、長講堂入講始、右府、權大納言、右大將、本上卿、領脫力、有親、公長、親俊朝臣、不狀由權辨語之、明後日可參云々、九日、壬寅、夜霜如雪、朝陽快晴、未時許與心房來給、殿下昨日三所、今日三所猶御灸、醫家存脚氣、女房稱邪氣、御腹猶高脹又無御起居、晝依仰候殿、夜賜暇向大納言室町_{盛興}、邪氣又之上下可參東一條院由大殿被仰、申無從遠路無計略由云々、

十日、癸卯、朝天空晴、早梅未落、景氣似正月之中旬程、午時許法印來談之間、京極之女不慮來、相示令對面、今年重厄事等示含、而欣感各歸了、夜月明而映梅花、開紙障望閑庭、十一日、甲辰、朝陽晴陰、午時許雨降、未時大風、與心房書狀、大殿自昨日御風、御四殿、殿下御有樣只同事歟、大納言室又病重、當時候殿下云々、京中商賈之輦有飼善馬者、相門召寄價直相論之間、有兼言由蒙讒言、桎械枷鎖被打調之、隣里之稗販等悲泣歎息云々、申時風止雨密、十二日、乙卯、三月節、朝天空晴、金吾來、一昨日參長講堂、實世長清兩三人、仰鐘、泰綱自國所相具栗毛馬、有名譽、入洛之後母乞取禪室又被聞及之間、嚴父又勘發取返、今日就禪室云々、龍蹄喧嘩之比歟、相具參云々、祭使被催、輔通可申合、遠所一身難申領狀由申云々、申時許又歸來云、行能朝臣終勅撰清書送遣之、仍清書廿卷、入冠給宮、草廿卷持參、大殿進入之、此事已果遂、悅思食由被仰者、聞此事心中殊感悅即歸、

十三日、丙午、天快晴、比丘尼三人、乘車、參詣日吉、去年凶徒之怖畏、京中之世間雖旁思憚、不拘制止遂宿願、又以不及相諍、孝弘康房任在共、巳時許以金蓮令加灸點、左眉已下至子頭六所、左風枝等要所是也、自己時至未時灸訖、此間淨意備後權守有學入道來、依請受與草本廿卷、今日鳴社一切經、舞樂等如例云々、常樂會、宇治一切經、無舞云々、

十四日、丁未、朝陽晴、夕雨降、尋申與心房、大殿御風氣同樣御、不可殿下又同事御、昨日御氣色頗宜、御腹少宜御、御足腫左御減、今明休息不出仕、夕方可向大納言許云々、午時又地震、立イ抑宿火神動給、同星宿、

十五日、戊申、夜雨降、曉雲晴、朝陽鮮晴、奉讀經一部觀無量壽經、不聞世間事、申時與心房乍立來給、殿下昨日不參、今日奉見、御足事外令腫增給、御氣色又重令見給、大殿又御溫氣也、旁不便云々、京極女此御病始三月三日有御減之由給、但五六日猶有御隙者、三月節後戊巳日重御慎由稱之、今日御增極怖、入夜以宗弘令伺殿邊、於兩殿間逢金吾、與實持卿參大殿示送云、殿御邊無承

分事、大殿御邪氣又令發御、僧正御房護身云々、大將殿只今御退出云々、明月無行雲、戌時許未方有火、令聞路人說、德大寺中納言三條家燒亡云々、京中適一町家所殘也、萬事只爲世滅亡也、不及他所云々、曉鐘之程又西方有火甚遠、若仁和寺邊歟、

十六日、己酉、朝陽快晴、已後漸陰、夕雨降、剃頭、小念誦、無力不讀經、夜前火非中納言家、六角南、油小路東、火至堀川西、面イ失火付棄出來云々、未時許長賢法眼來、

自正月八日遁世、着黑衣步行南京由稱之、大殿法印補別當給事、前大僧正全不存可然由給、少齡本寺京公請無所歷與補此職、無一人之例云々、長房入道知行寺領相違、太怨懣、太政入道可拜領寺領、懇望新寺務之始噉々云々、歸去後又信弟子童五歲來、先是始今尼公來儲、此子可爲金吾子由約束云々、

十七日、庚戌、終夜雨降、朝風吹雪、辰後天晴、今日姫君力於冷泉昨日、景可來云々、遠近桃花開、未時許治部卿來談、申時許金吾來、自殿下退出今日御腹猶御灸、御手足腫有御減氣、御言

嘉祿元年 三月

四百五十四

二八八

語無違亂之由、教行語云々、大殿又御邪氣歟、殊事不御、祭使敎定領狀、宮使亮被責領狀、季御讀經廿二日可被行云々、

十八日、辛亥、晚月朝陽清明、午後天陰、昨日又書草子、傳聞、大殿御風雖無披露實不輕御云々、

十九日、壬子、自夜微雨降、已後間止、猶陰、冷泉姬君被渡此宅、金吾引率、而今朝之嵯峨、依有犯土事不相具小兒云々、大宮三位音信、自十二日於八幡沐浴、今日歸京云々、

廿日、癸丑、終夜今朝雨猶降、南庭八重櫻僅開、已時物詣人歸來、復陽景忽晴、未時許與心房來給、三ヶ日腰痛籠居、今朝參殿、御足腫又減氣、御腹脹宜御、但御起居久絕御食事如無望、大殿宜御云々、夜宿本所、聞曉鐘歸、

廿一日、甲寅、朝天晴、已後陰、自夕雨降、午後典侍令參室町殿、依身病不能出仕、爲散不審也、夕歸云、老病事令申大殿、於我病は頗付減歟、未及沐浴、不梳頭之間

不對面、於殿下者猶似無其期、今日又不快於昨日云々、又以黃門令申准后、只同事也、心中可察由被仰云々、廿二日、乙卯、自夜雨降、午時止、未時陽景見、閑庭櫻漸開、不聞世事、

廿四日、丁巳、天晴風靜、未後天又陰、隴夜雲深、午時許典侍參法華堂、依御日忌不參也、無程歸、月輪殿花盛云々、念誦經一部、心神殊惱無力而平臥、姬君歸冷泉、自嵯峨歸云々、夜深金吾來、參殿大殿同御、明日并禪室可有御參內、御有樣只同事、但隨日數積弱候歟云々、明日季御讀經結願可參、

廿五日、戊午、東風雖吹朝雲漸晴、辰時陽景晴、午後天陰、大風吹花、今日未落、念誦窮風不讀經、素俊入道號十金房來、賀作者事、扶病相逢、請取草子退歸、一枚可進云々、金蓮云、前少將雅具近年爲師員聲、得境無極、而此春入洛、其勢數百人、欲企南山斗數、入精進屋之間、妻室終命產由飛脚來告、而如燬云々、宿運不依人力事歟、可悲、金吾書狀、二條中納言如此示送由披見之、今日攝政殿御上表可候由

其沙汰候、忠高遣召候、定遲々候歟、御參事御用意可候、攝錄猶大殿御還御由信盛說云々、季御讀經、雅親、宗良、具實、伊平、南殿、基良、爲家、資賴、有親、定雅、南殿、今朝仁王經結願、大殿御參、主上出御、實持着直衣扈從、如輜蓋職事之外無人云々、聞驚事非一件迷是非、萬事希代未曾有事歟、夜深風雨猛烈、以宗弘可被行事、歸出、今夜後日御衰日有憚御表止了、只今退出、左中將相具隨身參、只今欲退出云々、不催人不披露以前可有日次沙汰、黃門存知甚奇怪、巷說已公事出來被召由誰人稱之云々、

廿六日、己未、曉雲分、纖月見、朝後更陰、大雨、巳時雨止、天間晴、未時金吾來、經範朝臣卒爾御表草持參之後、高嗣御衰日如何由申出、即被延了、内々之聞已以云々、大殿又可御攝錄、明後日御拜賀云々、殿御有樣又不及當時危急、只追日庭弱依無所望、及此沙汰給云々、季御讀經一大納言領狀俄不參、弟二被參、早著殿上、下臈可奉行由示之、長朝觸申其由、權大納言云、

不參、昨猶向上臈參、乍令服奉行未聞事歟、但於陣は問方

可罷著云々、於陣又南殿二位中納言基可被勸給、未隨神事由被答、此事又於身難申左右、座中可有御計由、令伊納言可勤仕由領狀、實錄實持卿着直衣扈從、御修法出御前々惣不見及、人々聞驚云々、惟教子非密奏身而申客星事、依他人不見彼處無異說、翌日加階任天文博士、傍官等奇驚、菅卿又見其客星由稱之、又拜任參議、此等事爲其徵由有密語之輩云々、一夜太白入五車星中、非恒行度迹未曾有變云々、依此事御上表事俄有沙汰云々、

廿七日、庚申、凶會朝、天陰、陽景間見、小雨又降、庭花昨日落盡、梨花盛開、午終許覺法印來談、未終與心房密々音信、事已近々給悲思由被示、未聞他方說、法印歸云々、須臾之後、雜人牛童等御祈僧徒只今競出之由來告、金吾來參歟、不見由聞之、仍示送之、今朝參退出、又參内後歸、未知之、可馳參者、臨昏賢寂來臨、頻諸僧退出馳走云々、典侍又馳參、暗夜漸深星不見、典侍先歸云、大

嘉祿元年 三月

四百五十六

殿准后皆御座彼殿、以我車權大夫局ヲ乗テ令參之
間、相公近日御宮無人被召祇候、自彼御所歸參、晝重又三所令灸給
之間、始熱キ由被仰、日來世余所數十帖、全不令痛給歟、若是吉事給之由
醫師等申之間、御絶入、其後諸僧賜暇競出之間蘇生有
御言語等、其後女房等皆立去立屏風、其内澄月房、松
尾、與心房、慈心房民部卿入道、三人臨終作法奉勸念佛、只や
いと令惱給、身苦歟、腹痛歟、人不明、起揚又臥など被仰御、小使等
事又被仰、准后ハ屏風外ニ御、大殿禪相國ハ又他所ニ
令相對給由語、權大夫局又歸來、所云相同、事未切給、
又無望云々、愚僧又腹脹身苦付寢了、亥終許有弘來云、
金吾使入道殿退出給了、以金吾早可有還御由被申大殿、
大殿還御、先是慈心房早出了、兩上人猶在御傍歟、大
殿還御之後猶歸參念佛音殊高、此間令終給歟由承之、
可申此由者、御絶入仰退出之後、盛長參御殿、後事等
執筆進御筆、御判體被加、被仰事分明云々、
廿八日、辛酉、今日一日吉也、明日欠、朔日以後凶會、朝天陰、老身又殊辛苦恐思、
辰終與心房被來、昨日申刻許聞御灸由、依不審申可參

由、參御前奉見之、御目不似日來、驚恐思、御灸不可候
由申、醫師等不聞入之間、忽御絶入之氣、猶雖奉護身、
止此事御祈僧等可退出由有沙汰、其輩騷動之間、令復
尋常給、有御言語等、盛長執筆、慈心房讀上、具聞食
之、取之御覽、召筆被加御判返給、須臾之間猶可見由
被仰、又令取給之間、御氣色忽然變、種々雜言大略如
例喚、不安御體、高聲憚外聞、又讀經念佛、與慈心房奉
抱控奉念不動本誓之間、頗令鎮給、只やいと被苦給之
後、大略其體夜半忽高聲令念佛給、十五反、又中絶、又十
反、其後猶同體、已曙了、自大殿今日猶無爲御哉由被
尋仰、慈心澄月不可有別御事由各申、圓譽只今危急之
由、聞人有不請之氣、彼御雜言等以後、御形貌已下皆
違例、死相已令顯給、彼二人不見知、及辰時御喉鳴、已
事令切給、慈心先早出、次圓譽退出、大殿於今は不可
穢由被仰、只今罷歸本房也者、具聞此事悲歎彌催、教
行念立訖、即遂出家了、被歸後巷說縱橫、申始許金吾
來、參大殿、雅大納言參陣、大殿攝政詔有^{將イ}事行之、詔

吳氏書持參、雜人說御拜賀無其事、只內覽事傳覽、

此間不可有御出仕、尤可然歟、是又禪室被申云々、北

政所今日御出家、准后猶不可有其事云々、參藏人經時

卿、依姫君御乳母也有長、盛長、奉行、以良、宗盛、有長子共、兼康之外

當時此等之外不聞及、御佛事於月輪殿可被修、御墓所

又其近邊云々、平座無出仕、宰相之由催用領狀了、於今

者只參陣、參衡勤之、不可好近習由相存云々、此事老父

年來所好思也、殊喜悅由要應、此間禪室被計存事大概

甚神妙叶至愚之心云々、予心中有所思、依恐人心不出

口外、賢慮已被案此事被申出、過此間心閑可察由被仰

云々、雖此間猶非攘災之計歟、自近衛殿昨日以右少辨

被訪申云々、尤可然事歟、昏黑金吾歸、先是治部卿來

談、昨日去夜今朝頻出仕由也、一日季御讀經出居少將、

宗定、氏通、賴行、實春、堂童子惟忠、親、宗光卿子資定、大僧

正一昨日歸白川給、昨今事手振心迷、始末錯亂不能注

付、又二昨日居住大谷邊日向司宣親、奉公權亮親長子也爲不善

姫君後見、隨分爲備非常、令持劔楯之間、惡之者成群

盜嫌疑、大炊助入道、不知實名、筑紫大賴之子也云々欲擄取、入道在他所

之間、所從等成此儀先觸六波羅、不聞返事之前、日向

客人會飲之輩逃散之由聞之、無是非襲寄之間、客人逃

去、日向入切拔求之突殺了、斬頭、日向子爲座主宮童、

又有山法師、其妻兄弟爲武者、仍又爲執仇已欲企合戰、

駿州制止、觸此子細於關東、可隨成敗之由示合云々、

其宅洗血付物等、有此嫌疑之後稱蛭飼由云々、

廿九日、壬戌晦、欠、朝天空晴、不聞世事、午時許典侍參一條

殿、不經程參內裏云々、頗存外、秉燭之程歸、無殊聞出

事、准后御二棟北面、姫君奉副給、不見參、姫宮御方不指事、殿下

御攝錄二ヶ日御禪事不聞食凶事、今出川殿邊事御申

沙汰、經時卿一向奉行、今夜密奉渡法性寺、爲中陰御

佛事、被申請月輪殿于女院云々、奈良別當法印御房夜

前馳參給、禪室盡被參、此外事不聞及、內裏快然入見

參、故院御事不令奉忌給、御在臨時事、二邊臨時也、生而神靈歟、春景

已盡、鐘漏漸闌、

○四月大

嘉祿元年 四月

四百五十八

二九二

一日、癸亥、朝天快晴、平座、權中納言、伊、右衛門督、左少辨忠高二、權辨兼高、少納言長成、一、參、無他人、二日、甲子、關文ア後間晴、申時雨瀝、金吾凶事供奉參籠事、父重病計會由昨日申合禪室、父重病難見放由申入、何事在乎由被命、仍參室町殿、相尋之處、前納言注人數所計申云々、仍子細示忠了、時兼卿勘出例、定隆兵衛佐時以下、近、服供奉鳥羽院御葬云々、此事雖御事、以下關文アリ一周少年最末五位之例髣髴也、近代之所忌來、強不可申破、遭喪籠灰之分限依深恩又所緣歟、今度不可然、秉燭以後金吾來、素服之人兼參近代多忌來、依父病不參何事在哉由、禪室內府無被命云々、廿八日辰時事、以下關文以下只今可參由被催、訟事氏長者兵、以下關文之後如吉事々無其沙汰、職事不同覽云々、月輪殿可爲喪家、恒例八講於宜秋門院九條殿、可被修、光國奉行、兼日領狀可參、三日、乙丑、朝天如墨、自夜甚雨、申時雨止、梨花帶雨散、戌終許不及遲々、見物雜人歸出東門、今出川南行、東

洞院御門東、高倉南、九條東之由聞之、四日、丙寅、辰後陽景間見、申時小雨、夜前供奉人賢寂注進、有親、經時卿、資季、去年親忠、賴行、忠俊朝臣、親力定云々、五日、丁卯、朝陰、辰時晴、治部卿書狀、來九日殿下渡御右大將亭云々、入夜金吾來、宜秋門院八講今日只一人、伊平師季卿可參云々、昨日參內、伊平、以下關文平通氏朝臣已下多參入見參、擬階奏、梅宮祭實有卿勤仕云々、六日、戊辰、至今朝天陰晴、東風吹、新樹八重櫻開始、欸冬以下衆花色々滿眼、近日巷說家々并悅、三月十八日師員爲兩殿下御使揚鞭馳下遠島、兩主御事、以下關文被仰遣、往還七日可馳歸、定納受歟之由、以下關文事每家經營云々、七日、己巳、朝後甚雨、臨昏雨止、夕陽見、昨日舊主御月忌、內府、右大將、隆親、爲家、實世、成實卿、資季、舊卿忌、關文參、有親卿雖通氏朝臣、堂童子光資、範氏、事訖參宜同今日不見云々秋門院、御南殿、午後、退參新大納言、以下關文平師季卿、有

教朝臣、兼高、宗典侍參室□□□□今日以中風手書終

草子二帖、三月廿六日始、及黃昏大風猛烈、典侍歸來、明後日

御渡一定、西亭府前右、東大將、兩方借進姬宮之春日殿、密

述懷可奉渡安嘉門院由平雖被申、又無許容、少年玉體

被恰厭却悲歎云々、三條大納言室又危急云々、

八日、庚午、快晴、八重櫻盛開、未時蛭飼、臨昏金吾來、

參北白川院灌佛、隆納、示明日殿下新所御渡以後吉書御

覽、吉服可參由兼康催云々、平野祭依無人可參勤、

九日、辛未、朝天空晴、未後陰、未時許覺法印來談、道□

□□□一昨日逝去、年五十六、當世能讀也、申時□□

□長清卿臨蓬門、答老病平臥由不逢、戌終南方有火、

十日、壬申、凶會、朝陽遠晴、申後陰、月更明、夜前火四條坊門

北、京極及六角、北、未時蛭飼、美濃兵衛佐來問不謁、

十一日、癸酉、晴、衆花漸落、雜人說、稻荷御與迎日田□

□師子舞聞諍互殺害、師子不舞、

十二日、甲戌、朝天空晴、未時金吾來殿下御西亭、室町、

吉事儀伊平實有卿已下三人候座、頭中將、左少辨、家

司親嗣、不坐、平野祭同辨兵衛內侍、姬宮御烏丸方、與

心房來坐、明月前宿賢□□□□寂節

十三日、乙亥、夏節、吉日、朝陽漸晴、午後陰、日出以前出賢寂冷

泉來嵯峨宅也、午終金吾相具少將來、暫可在中院云々、

自夕微雨、入夜如沃、終夜不休、

十四日、□□□後微雨、已後休、雨間降、

十五日、丁□□北力陽力景晴、

十六日、戊寅、朝陽快晴、午時許印圓法印被來訪、先金吾、又典侍

稱病重不謁、未時許金吾來、永光朝臣爲禪室御使來

臨、隔障子謝之、日來世之所謳歌之重事、中務爲繼安

聞正說云々、故高野相□□女九條院孫、背相而執行其家事

爲後見、其後女房爲當時妻長成母也、朝家重事、存國忠八度申大殿、不

彌珍イ九度申、頗許十度申而遂被立使、又示定高卿、二度危

思之、三度同心又示師員、二度三度盡詞、領狀揚鞭之

由於彼比丘尼家自讚、聞者隨□□□元來其志尤懇

切之人歟、其謀老目黑即危イ以下開文アル

十七日、己卯、朝天空晴、未時許忽陰、申後甚雨、日向守

嘉祿元年 四月

四百六十

親繼朝臣來訪、以賢寂令謝、又十念房恭俊尋來、以助里

謝之、已時許聞書到來、祭除日侍從藤教經、大監物紀文元、

皇后宮少進橘以□□□依氏長者不遺養
出立女阿云々、內藏助和氣貞兼、

□□中役康、長門守菅長成、兼、此外雜任十七人、右

兵衛尉高階行季、北白川
院藏人、典侍藤幸子、後聞、自殿宣旨

補典侍者先例如何、

十八日、庚辰、微雨猶降、西風猛烈、安嘉門院二條殿退

出、□□□訪典侍、

十九日、辛巳、天晴明、入夜甚雨、准后寵人黃門、明日出

家、去冬父喪不替
服、在御殿內、未時許兵部卿被來訪、以助里謝之、尊實

法印來臨、中院、
云々、金吾來、明日可出京、家光卿久有所勞

辭職云々、豫又深恐怖、不可望其闕由誠之、金吾過分

顯官也、以參議□□□於納言者實以過分、更不可念

思、

廿日、壬午、辰後又雨降、終日如沃、金吾出京之次又來、

藏人佐備祭出車、領狀了、當時之儀牛童不刷車副、如

匹夫云々、

廿一日、癸未、朝雲出、已後晴、中將入道公棟
朝臣、音信、答所

以下闕
文アリ、

廿二日、甲申
脫力、朝陽晴、淨素入道來訪、以助里令謝、乘燭

以後金吾歸入、夜前參殿、來廿八日入夜可有御參內、

殿上人可扈從、少將參哉由被仰、申領狀了、今日聖法

印法事、中陰之間請願宗、只慈
賢曼陀羅供所還言也、公卿一身、四條中納言依
出立典侍不來、殿上

人語輩少將光成、爲氏、權辨、兵衛清本所語資定、信光、

隆仲卿子、侍從□□□長六位相具、俊職子檢非違

使、右衛門
年預、相催、儒徒感悅云々、訪藤中納言、依思子息

事去官云々、女使典侍出立此冷泉家、左兵衛督鷹狩入

圓明寺、儒徒取鷹入皮子、付永光足取之、外戚素服人

也、發御陵盜事、天武天皇大內山陵云々、只白骨相遺、

又御白髮猶殘云々、祭使禮近衛使廣澄兼康、久清
凡平、官

使季武、賴口、武澄
子、賴景、子

廿三日、乙酉、朝天陰、已時陽景見、未後又陰雨、申時許

密々乘輿行中院、見中島藤花、夜雨如沃、

廿四日、丙戌、猶甚雨、已後間止、日入天晴、國平宿禰住

告來訪、

廿五日、丁亥、天晴、金吾來、來廿八日殿御參內儀、改殿上人騎馬云々、

廿六日、戊子、朝天時、申後雨降、

廿七日、己丑、夜雨止、朝天時、傳聞、主上聊御不例、或云痘瘡之疑、件事春以後少々有其聞云々、

廿八日、庚寅、天晴、巳時金吾出京、承源律師來訪、午時許權大納言御使馬九盛重來、所勞事恩問、猶以人謝申、恩言尤感悅、

廿九日、辛卯、朝天陰、已後間晴、巳時許郭公數聲聞南方、初聲已無間斷、午時許金吾歸入、昨日參內、於鬼間隔障子入見參、痘瘡御氣極輕、無御溫氣云々、晚頭退出、少將可早參由頻催、乘

燭以後令參、不經程各騎馬、藏人知茂、殿上人爲氏、高嗣、忠高、實任、雅繼、頭中將、追前、前駟忠泰、兼仲、以良、兼康、家國、爲仲、維長、兼教朝臣、御隨身兼友、兼利、院御久安、日來兼末武、大將殿前駟基邦、以忠、時光卿一人、無程還御之後吉服朱器御覽、依無袍不參左京中務

等來、中務見祭使、不取松明渡大路了、雜色檜皮白裏云々、使出立所、二條諸宅修理、公卿闕如求出、兼季卿先來、家中求冠束帶令着之、殿上人雅繼、賴行、宗教、吉服、隆兼、隆仲皇后宮使出立、定輔卿、二條光三、三位兵部卿、頭中將來云、以下闕文アリ、

○五月小

一日、癸巳、朝天陰、未後雨降、午終自中院頻招請、雖怖壁耳、依難逃乘輿、入北土門出逢、入道引率三人子弟、入道引率二人留好士云々、列座東庇、予、金吾、左京、彼入道在南面、中務加東面、始連歌、過半之間窮屈、入障子西乍臥聞之、賦御何一之何、及六十句、黃昏各歸、修理實得骨、存外事歟、

二日、甲午、朝天晴、午時許金吾引率妻孥出京、依老病宜由也、大炊御門中將來訪、相謁、去廿九日殿下御直衣始、頭中將不帶劍懸帶、有教雅繼朝臣二人帶劍、大將殿參會給、

嘉祿元年 五月

四百六十二

二九六

御拜賀不蒙催、申後雨降、入夜大雨雷電猛烈、夜深休、三日、乙未、朝天晴、初月朗明、如片月、巳時大僧正被來訪、參北野、平野、清涼寺、法輪寺、更無窮屈之氣、今年八十六、大宮三位被來訪、面謁雜談、或人云、師員可馳歸由、成案揚鞭無歸洛之日、更迎寄妻子云々、群賢之議定不異嬰兒歟、金吾有所惱由告送、

四日、丙申、朝天晴、巳時雹降、即晴、申後雷鳴、依所惱不審、賢寂早旦令出京、返事云、去夜無殊事、明後日御方逕行幸欲供奉、此草房符合閑寂之病者在山家之由披露、雖大切地形、南有小河、如敗塢鳴動、流水自西垣入、潺湲自北方出、偏如船筏之浮水、春秋之土薄水淺、其惡易觀、年來所見夏居水地多有瘡病之難、又有水腫之怖、又水雨雷雹板屋如擲石、仍有出京之志由告送了、

五日、丁酉、朝天快晴、早旦乘輿參栖霞寺、孝弘助里房任相具、傳參佛前、拜三轉之靈像、當寺執行僧越前、申上、燈明小念誦之後入禪尼局、七々日次拜阿彌陀堂、

河原大臣所安云々退出、所着衣一領送越前許、食訖出宿所出京、過左近馬場、有埒木末所平張、廿二年本府舊房、有懷舊之思、午時歸入、蓬門向所栽之草樹養志、昨雹此邊如飛礫、積地不消、拾入楸、今日猶不消、大猶柑子、稼穡已損由民口不安云々、金吾不參行幸、少將供奉云云、

六日、戊戌、朝天遠晴、巳時三比丘尼自嵯峨歸來、又淨昭房來、天顏快晴、優臥廬、非寒非暑和且清、適休辛苦之思、是又依不聞世事也、自禪室預恩問、

七日、己亥、朝陽快晴、延久聖主御國忌也、夜深金吾來、去夜行幸冷泉、中納殿下、兩大將、左門、二位中、基、權大夫、四位、宰相一人、左將通氏、爲氏、實春、右雅繼、頭二人、兩勅負等不委聞、還御、日出々御、明日北白川御堂一切經供養御誦經使關如、被責少將云々、御誦經次將役歟、

八日、庚子、天快晴、端午日、賀茂競馬、四條納言、右大辨資雅卿會合見物云々、武士集會、今日暑氣始如例夏、

念誦之間著帷、去三月賢舜調出車、無事次未乘之、依吉日始乘、出應司川原見北白川、退出人早速事訖皆過了云々、僅十餘車見之、黃昏歸入、

九日、辛丑、朝天陰、辰後晴、昨日儀間有數中將、還事云、依殊催左大將殿御共、七僧之外六十僧堂童子左長氏、良賴、忠氏、右信光、惟忠、範氏、公卿內府、大納言通方、左大將殿、中納言、基保、三位、光俊、長清、顯平、實持、殿上人隆範、已下十人許、度者使通氏、模、御誦經顯氏朝臣、昨日非近將人可動、領狀神妙、山被仰、少將不參山開之、度者祿、基保、御誦經祿、有親、后宮御誦經惟忠、祿大貳、院司家清朝臣申繼、三度作法皆不同、七僧安嘉門加布施云々、三人使給祿皆不拜云々、

十日、壬寅、自曉雨降、終日甚雨、入夜金吾音信、凌雨參法勝寺、源太、雅、本、二位中、基、爲家、有親、親俊、又參持明院、御八、隆納言、爲家、有親、光俊、親俊朝臣、行香家清、信盛、辨、行事、光成、堂童子親高六位云々、十一日、癸卯、朝天陰、辰時巳時居所前簾見出微少銀

花、今年連々怪異、雖恐思者何之乎、以賢寂令問在友朝臣、口舌病事不輕由占、可修百性祭由詔之、明日吉由領狀、

十二日、甲辰、自夜雨降、女院御入講度々可參由雖示合、依禪室命、又方違供奉、夜月明、在友朝臣以次男令修祭、相逢謝之、屋四面打簡、

十三日、己巳、朝天陰、已後晴、未時許兼直宿禰來臨、祭主隆通去月父服過了、前左府領御厨神人爲祭主被打殺、相門訴訟之上、事又顯然、一門下膺競望馳走云々、其中嫡孫隆宗子、其器採用山世頗許云々、菅相公春奉幣定日右筆、懸膝昇橫座、更立又坐揖、上卿一上、遮授風記折紙給、懷中後座染筆、更尋申社次第、授訖由被仰付、驚而取出云々、

十四日、丙午、朝天陰、雨或降或止、午時許興心房來坐、未時兵部來臨、扶病相謁、謝遣之後金吾來、十一日奉幣上、源大、八幡、隆納言、賀茂、爲家、松尾、平野、顯平、當日定省兼日領狀、前日辭、安樂光院入講第二日、基保、第三、實世、

嘉祿元年 五月

四百六十四

二九八

基保、光保、經高、爲家親俊、第四、經高、爲家親俊、不始以前退出、參長講堂結願、通方、隆親、基良、資賴、有親、公長卿、密々說、東方書狀、家人等一同申不可然由之趣、以泰時狀申、無將軍御消息、又別不申禪室由密語給云々、實者之所案、向後尤不便、

十五日、丁未、朝雨猶降、午時如建、終日不止、明日故攝政殿御法事、明後日正日兩日可參由金吾示送、去十一日先帝周忌御法事、新大納言高、無他所出仕、別當知家長清卿參、定高卿近日病發不出仕、

十六日、戊申、夜雨止、巳時天晴、十七日、己酉、自夜陰、朝雨降、巳時陽景見、暑氣已催、十八日、庚戌、朝微雨降、辰時漸晴、巳時許典侍參法花堂、權大夫局相伴、孝弘在廡、未時歸、肥前守家廣來、相逢了、與心房來坐、聊說法、奉安釋迦三尊、儲机佛器等、始終供養法、及日入被歸、於法花堂惟長朝臣語云々、彼御中陰每事不便、禪室引物絹十綿百、背卿穿牙六課、前納言臨時御佛事之外無宜事、一周北政所可御坐月輪殿、

十九日、辛亥、天晴、金吾音信、十六日七僧法會、講師定玄、公卿經高、爲家、實俊、資持、親俊、殿上人資季、定平、賴行、忠高、親定、光國、十七日茂々、快雅、殿下渡御、大將殿、經高、爲家、爲長、早山、資賴、有親、經時、基定、實俊、實持、親俊、資季、定平、賴行、兼高、忠高、顯嗣、親定、信光、光國等自今日南殿御讀經、三々延曆園城興福寺僧六十口、大般若每日行香云々、乘燭以前行賢寂宅方違、少時金吾來、今日南殿御讀經、延曆、當日定通方卿、親俊朝臣、出居辨經光、職事高嗣、出居左實清、御願趣、右通氏、度者公卿通方、基良、爲家、實世、有親、親俊朝臣、殿下御參、御直衣、御隨身上郎冠、雅親御廡、兩方行香、東公卿出居、西殿上人親忠、實清、顯嗣、惟忠、信光、光國、今二明後日公卿同人參歟、明日隆親兩宰相等、六月朔日除目、御直廡始、納言可任云々、廿日、壬子、自曉甚雨、天明歸廡、取笠入門、終日甚雨、廿一日、癸丑、朝天漸晴、今日御讀經、覺遍、親綠、賢信已下僧綱六人、公卿良通、通方、基良、爲家、實世、公

長卿、出居定平、渡左通氏、左行香公卿出居、右親忠、隆兼、六位三人、公卿還着陣、有申文、大辨、不居膳早出、

廿二日、甲寅、朝天陰、已後晴、今日政云々、近日郭公音不絕、罹麥十五日始開、仲夏如四月、覺源閣梨來、入夜金吾來、政上卿雅、夜可參由被示、有親卿又參、仍不參、廿三日、乙卯、朝天晴、昨日三條大納言室於香隆寺邊出家、覺教僧正戒師、容助法眼大納言子、剃頭、病及旬月、未時許兵部卿被來、雜談移漏、

廿四日、丙辰、朝天陰、已後晴、源大納言通、音信之次、大祀事預問、明年可宜由申、可爲今年由定了云々、申時許大炊御門中將來談、及黃昏、

廿五日、丁巳、朝少雨、已後晴、

廿六日、戊午、天晴、今明雖物忌不開土門、不忘書狀、

廿七日、己未、朝天晴、殿下自一昨日五夕日善惠房戒云云、典侍參、未時許歸、予本自不知書文字事、嵯峨中院障子色紙形、故予可書由彼入道懇切、雖極見苦事愁染

筆送之、古來人歌各一首、自天智天皇以來及家隆雅經、入夜金吾示送、今度除目不可有指事由殿下被仰云云、又依被催吹田方違、方違供奉、

廿七日、庚申、朝天快晴、午時許管相公枉駕、驚扶相謁、直廬初除目、承久勤仕事被問之、蒙昧忘却、見注付物可申由答之、去三月以後予不音信、今日又有存旨不問他事言談、彼日愚記書出即送之、於殿下門前令入車云云、

廿九日、辛酉、晦、夏至五月中、朝天晴、午後陰、昨日金吾風病不接吹田事、午時許寂身入道入來言談、不經程歸了、

○六月大

一日、壬戌、朝天晴、不開世事、永日暮、

二日、癸亥、自夜甚雨、已時陽景晴、入夜金吾來、昨日依自吹田被歸詣迎圓明寺云々、

三日、甲子、朝天晴、未後陰、典侍參堀川殿、申時許歸、午時許左京權來談、申終許雜人說云、南京衆徒成惡事向八幡、被仰武士發向八幡云々、武田宇都宮修理、已馳

嘉祿元年 六月

四百六十六

三〇〇

向、戎服美麗云々、入夜聞、雖各向六波羅、今夕不向歸家、家猶用意云々、八幡朝庄、春日^{大炭}占隣、論耕作水、

八幡庄民打殺大炭庄民之故、衆徒欲燒拂八幡云々、左

京所語、去月晦日參前殿御佛事、^{故入道殿}公卿十二人、

家良、隆親、基良、賴資、範輔、經高、有親、公長、知家、

長清、顯平卿、親俊朝臣、^{殿上人}信實、資俊、伊成、家清朝

臣、光俊、顯氏、二人雖參不取布施、不似當時之朝廷、

人數甚多、德廣之所及歟、彼御邊一代列雪路者、雖當

時地下皆列殿上人云々、^{無人耻而各出達}

四日、乙丑、朝天陰、辰後雨降、未時金吾來、武士昨夕各

歸家、而去夜衆徒已發向由夜中有馳來使者、仍可馳向

由夜中被催、今朝未時急會六波羅、見物之人成群、日

出刻限皆發由、其中修理亮泰綱其士卒依員多、赤江淀

渡船少、而一日不可渡得、夜中遣人令踏木津河瀬、有

步渡所之由來告、仍一人可向宇治路之由企之、於河原

打分向法性寺方、其勢五百騎、行粧鞍馬以下美麗異他、

距衆徒不可令燒八幡由雖蒙仰、衆徒所行兼雖存、有不

拘制法者、其後事如何、臨陣後不能申是非歟由兼成不審云々、來十四日天武天皇山陵使可遣勅使、參議無其人由長朝催之云々、抑山陵使事諸陵頭未復任、助又闕、被任之後可有沙汰云々、

五日、丙寅、朝雨灑、天即晴、衆徒燒一庄、逐電之後無職事云々、

六日、^欠丁卯、已後天晴、曉尋入來之次語、奉見山陵者、傳

傳說、每聞增哀慟之思、於御陵者又奉固由有其聞、定

簡略歟、於女帝御骨者、爲犯用銀篋、奉棄路頭了、雖塵

灰猶可被尋收歟、等閑沙汰可悲事歟、

七日、戊辰、自夜陰、辰時雨降、間休、雖物忌只閉門、強

不忌人、申時許金吾來、武士猶在八幡云々、衆徒燒薪

庄早歸之間、大庄廳住人後群、逐北武士生虜三人、是

彼庄張本、又截群盜張本云々、昨日參法北堂^{大將被達路}午

時許參堀川殿、大將、通、大納言、監、中納言賴資、經高、

爲家、有親、^{殿上人}資季、有資、實隆、已下多參、堂童子^{光資、惟忠}、

講師圓經、南京指事不聞由稱云々、平納言參前殿御

佛事、病又仰範賴辭紀國云々、方違雖當一昨日不出門、八日、己巳、終夜今朝猶雨降、臨昏殊甚雨、際尋歸了、今年郭公猶聲不絕滿歎、

九日、庚午、朝天猶陰、已後晴、去春不爛灸跡無故苦痛、重^壯之^壯月前行賢寂宅宿、本所、金吾來、武士猶不歸、

兩社所論之堺雖遣實檢使、南京使不來、而不遂實檢歸云々、近日勝事、治部卿入道親長、少年以來愛念女^{松曲}、

弟、夫妻闊靜離別、妻與姊同事參禪亭門前、以忠光問答、不能決出被命、即行六波羅悲泣、親高又申背院、仰檢非違使被退出其宅云々、

十日、辛未、朝陽快晴、日出以前歸廬、大內山陵使親俊領狀云々、

十一日、壬申、天快晴、月殊明、清定朝臣來相逢、

十二日、癸酉、朝天陰晴、申時大雨如沃、又晴、此間在病氣痛瘍歎、心神殊屈、夕但馬局來謁典侍、終夜雨滴、月又間見、

十三日、甲戌、朝天陰、巳時晴、未時許與心房入坐、入夜

行冷泉亭、金蓮房來次、痢結少便、頻催心神違例由示合、煎桃花令服渴藥、乘燭以後腹中鳴動、聊停之間心神迷、而喚少婢懸之間絕入也、不覺悟、須臾蘇生、不能行步、跣歸平臥、途中又反吐之後聊復例汗出、歸例寢所、付寢之後僅雖見月傾、不及言語夜明了、

十四日、乙亥、朝天陰、辰時晴、今朝雖無力無殊違例、禪尼詣旅所、書金吾示送、行幸日出以後、公聊左大將殿、具實、伊平、基保、爲家、公長、定雅、左將家定、實清、教房、輔通、右有教、定平、氏通、教定、職事宗平、高嗣、內侍所能定、賴行、季賴、還御可爲明後日、軒廊修理、爲內裏守護指進武士與吉上闢諍、重時申此事、召吉上賜武士和平云々、入夜金吾來訪、實持卿借性圓僧都家居住、棧敷昇降之間落馬損身、兩三日之後安堵云々、十五日、丙子、天晴、以忠康間權大夫三位、今日無職事云々、

十六日、丁丑、天晴、一昨日夕武士自八幡歸京云々、未時許大宮三位來訪、扶起相謁、今夜行幸還御云々、

嘉祿元年 六月

四百六十八

三〇二

十七日、戊寅、朝天陰、辰時甚雨、無力之餘服薤、

十八日、己卯、天曙、大雨、辰後止、未後又如沃、依「權

大納言良實、利加權右中辨忠高、左少辨兼高、超右經

光、刑部權大輔家盛、少輔業教、皇后權亮通成、勘解

由長官爲長、兼、左中將實任、少將定具、右中將公光、少

將公香、右衛門佐高階泰定、右兵衛佐藤雅平、正二位

基良、實有、正四下公相、從四下忠高、正五下藤光衡、

中原師爲、雜任甚多、

十九日、庚辰、朝大雨、天色如土、巳時漸霽、午零陽景見、

夜月猶不明、冷氣催着綿小袖、

廿日、辛巳、朝天晴、夜雨間降、治部卿來、依可任官多、

猶可有除目云々、一昨日殿下御八講拔無四位、別仰召

有教、應物、言家取有經云々、伊平、爲家、爲長、資賴、有

親卿云々、

廿一日、壬午、朝雨又滂沱、送賀札於左少辨、依位次加

左之由也、昏金吾來、今夜所緣入道次女本小笠原
要離別、其身雖

固辭、父強勸令嫁千葉八郎、故可乘金吾車之由詔之、

依八葉車借此家車、紀伊國所望者三人、惟高、有御占、

三度占之、皆不吉不任、

廿二日、癸未、天猶不晴、午後陽景見、去九日神祇官穢、

月次神今食明日被行、伊勢使祭主欲勤、前左府訴未

斷、隆雅朝臣可勤之由被仰、祭主又訴、今日被問兩官、

實親卿誤説アルカ
藏后入交出
仕人無之、內府被申、祭主有其訴、可爲先日御沙

汰之趣、大納言殺害實否事未切、就初官可爲使云々、

右府他行給之由無御返事、申時許定修死去之由有傳

傳說云々、所從等未告着、不定歟云々、

廿三日、甲申、天晴、伊勢使隆雅朝臣可勤由夜半被仰云

云、昨今黃梅落盡、此三四日郭公不鳴、

廿四日、乙酉、朝猶陰、午時雨降、巳時許曲侍參法花堂、

伴冷泉殿、申時歸、

廿五日、丙戌、終夜雨打窓、曙後休、陽景漸晴、來月朔又

除目云々、

廿六日、丁亥、終日陰、夕又甚雨、今日止薤、不聞世事、

廿七日、戊子、
土用終日又終夜甚雨、深更金吾怖畏雨夜甚不

受、明日參月輪殿御月忌、明後日攝政殿氏院參賀、大將殿御拜賀御共、出立所被催、吉事重疊如雨脚、大嘗會諸司皆着吉服云々、

廿八日、己丑、朝天陰、雨又間降、夕治部卿來、明日大將殿依風家殿例、殿上人六人前驅十二人四位六位各二人、來月可有任官由云々、入夜殿下給御書、大嘗會檢校已下皆被

改、歌人又可然、承保寬治天仁三代吉例、儒者二人也、家光卿之外無其人、菅相公恐謗難由申又非儒者、家隆卿如何者、申云、當世作者之仁去年具申入了、儒者二人最吉尤可然候、菅相公內々不思放由年來承及當時無其人、謀其仁勤仕何難候哉、又非儒者家隆卿世定歸伏候歟由令申了、

廿九日、庚寅、朝天陰、雨間降、伊勢幣定、一上着陣給、參議不參由頭中將示送、俄參陣由示送、夜雨猶降、卅日、辛卯、朝天晴、金吾示送昨日事、午時參內、一上即參給、大辨少將召日時、以外記內覽、日已暮了、以官人相尋傳奏人、不出逢云々、日入歸參、秉燭退出、改衣參拜

賀所、鳥丸中納言隆伊、參議爲家、資賴、有親、親俊先出、

中門三方拜、季賴、有教、堀氏、姬宮申之、前驅十二人、

四位兼教、正光、五位爲仲、以忠、兼康、時長、基邦、仲

雅、資敏、六位二人、殿上人有教、定平、賴行、言家、經

氏、長朝、次參賀、中門儲座、一献兩中納言、二献實納

言、爲家、三献、資賴、有親、四献、經範、□□、五献、雅繼、實任、夜半退

下、來月任大臣一定云々、已時許曲侍參內裏、黃昏歸、自

內參殿、入准后宮見參、室町面又鳴、御鳥丸、殿下御足難熱非大

事、無御步行云々、

○閏六月大

一日、壬辰、朝天晴、未後陰、昨日暑氣、郭公又鳴、昏金

吾來、一昨日御躰御卜、二位納言被參、件日吉服辨少

將、禁色、縮緬赤、二藍下重、非色下重、辨、頭中將、職時長表袴、爲經、長朝、高嗣、着吉

服時皆如此、大將殿、內、宣陽門、宣秋門、東一條之後、北

白河院參廻給、此間東一條鳴、令右大告給、渡御督

典侍家、

二日、癸巳、天明雨瀟、朝陽鮮晴、未時飼蛭、

嘉祿元年 閏 六月

四百七十

三日、甲午、晴陰、午時雨降、天又晴、早旦沐浴、始念誦、
四日、乙未、朝陽晴、午後陰、未時又飼蛭、雨漸降、雷電
猛烈、雨如沃、

五日、丙申、朝天晴、午時大雨、不及須臾止、暑氣難堪、
六日、丁酉、終夜大雨、朝陽晴、申終有長朝臣來臨相謁、
主基歌儒卿兩卿各固辭云々、

七日、戊戌、朝陽晴、暑氣殊甚、未後雷鳴小雨、入夜金吾
來、昨日御月忌、內府、家良、通方、具實、隆親、基良、爲
家、有親、親俊九人參、伊平卿止雨奉幣

八日、己亥、朝陽出雲、風猛烈、巳時雨降、庭樹林檎入籠
通脫力
皇嘉門院北白川殿、有長朝臣奉書主基歌、兩卿辭退、經光如
何由被仰管卿、更不可有難、經光少年忽勤仕重事、無
先蹤由申之、

九日、庚子、仲終夜雨止、朝猶陰雨間降、宗全法印臘物、
伏欠早世、神護寺別當競望云々、未斜與心房入坐、黃昏左
右中央指見付透水袋、心中周章、喚金逆以燈令見、以
針出其水、入唐墨可試由示之、

十日、辛丑、終夜今朝雨猶降、巳始陽景見、遲明入金蓮
見足、當時無事由、祝言頗成安堵之思、金吾來、明曉俄
下向吹田云々、時儀不及加詞、幸清法印俄臘物云々、
十一日、壬寅、朝天適晴、幸清法印事間隆和法印、只今
自八幡罷歸、當時不見安否由答之、

十二日、癸卯、朝天晴、足當時無事由金蓮稱之、

十三日、甲辰、朝天晴、夜月陰、夜半許南有火、後聞、四
條油小路至子綾
小路

十四日、乙巳、朝天晴、夕雷電、雜人說、春日一御殿鏡破
落由云々、公圓僧正河宇木家燒上云々、印圓法印被訪
典侍、暑氣難堪不調、一昨日十一除目、左宮城使實雄、
右信盛、造東大寺爲經、防鴨河使經氏、紀伊守藤家
清、

十五日、丙午、未時許雷雨、日入晴、月前宿北邊本所、
凶會
十六日、丁未、朝陽晴、夜雲充滿月不見、與心房音信、三
秋節條大納言室夜前被終、

十七日、戊申、朝陽晴、賢舜令築南垣之破壞、

十八日、己酉、欠朝天晴、典侍權大夫局伴參法花堂、助里在共、申時雨又降、

十九日、庚戌、終夜雨降、朝天陰、禪尼數輩乘車禮近日所力可聞三尊像、近日京中道俗騷動禮拜云々、奉寫善光寺佛云々、鷄鳴以後南方有火、

廿日、辛亥、朝天晴、曉火、錦小路富小路所緣入道宅門燒云々、子息左衛門尉賴業妻昨夕死去、邪氣、賢寂從者等所稱云々、午時許源大納言通、依八幡神輿御入洛馳參內由聞也、日來不聞及奇驚、自方々漸々聞此事、

廿一日、壬子、朝天晴、宗廟騷動雖傳々說不觸非人之耳、夕兵部卿音信、於今者非寺務進止云々、

廿二日、癸丑、臨忌日朝陽快晴、橫花初開、兵部卿音信、聊散不審、

石清水御屏開事、閏六月十九日戌刻、神人等向東寶御戶、以扇叩御戶云、神人等訴訟ヲハ憐トハ思食奴カ、アハレ御戶の開ヨカシト申ニ、一御戶左右ヘ毛屏自然ニ開了、如此申ハ今年安居以御綱引神人

長宗五郎也、神人等數百人拜見之、放聲叫喚、流

淚天平伏、令開給以前ニ、東御殿震動云々、次而第

二内陣御戶又以開了、叫喚以前如力響動、山々上下奉之

輩如法悲啼其甚イ雖末代靈威之奇特、神人之愁訴不違

御託宣之由故者、之所司神人等申之、爲後記之、御

藏屏自然令開御、作記進之候、大略見候歟、神輿于

今御坐于宿院、仍大夫史季繼參向之間、神人等行

向、其間高橋東爪云々、季繼宿禰不令下馬、神人答

申、爰雜色歟、官使歟、無左右神人所持の櫛ニ取付

云々、然間神人與彼等喧嘩間、以櫛聊依防之、空歸

向了云々、希代勝事申神輿申此事未承先例也、十之

一二令申候、雜熱事如當時者同時候也、恐々謹言、

後六月廿日

幸 清

權別當三人宗清、實清、依召參、仰詞ハ不承、神輿下山由有聞

間、早罷歸可加制止由被仰歸了、或說御領一所可被進

八幡由沙汰候也、神人許容不知之、勅使頭辨右佐左少

辨季繼連々下向、今日も兼高又下向云々、先是幸清神

嘉祿元年 閏六月

四百七十二

三〇六

人等於今者不可拘制止、與寺務違背、急寺務ヲ被仰器重權別當此沙汰無爲可宜由、以超清令申了云々、

廿三日、甲寅、朝陽晴間陰、未時雨降、巷說云、神輿騷動落居歟云々、就庄歟、每有喧嘩鬪爭、人頗爲社領、末世之習也、草露似秋朝、已時許與心房入坐、一昨日依召參

殿下、自故攝政殿事後無召不參之間俄夜叩門被召、每日可護身由被仰、昨今三ヶ

日參入、一昨日御違例令振給云々、或說云、神輿事御

憶病昨今宜由被仰、一昨日禪門內府於御前議定、被定仰事、立庄園可致寄云々、何國何村哉、先々依急事御

病等被立御願事約束等、其事適無爲之後一事不被果、

被始神事佛事、有祠官僧徒之煩念、無供料沙汰、一昨日

可歸一條由被仰、又漸延引云々、大納言女房當日沐

浴、着淨衣敷消疊、引五色絲結印、但自未時無言語、而

夜半終、大納言遺喪、相國頻不可然由懣憤、禪門不被音

信云々、被神人等淀渡浮橋、左右爲供奉路、中央爲御輿路、引櫻栽松、左女牛西

洞院新宮掃除經營稱可有入候云々、

廿四日、乙卯、朝天遠晴、五位出納俊職注進金吾許、一

昨日通方、其實、賴資、爲長卿於殿下議定、當社神輿御入洛被先規一切無所見、先被遣勅使、訴訟可有裁許由

被仰遣、可被奉留神輿由被申、此外無他事云々、昨日

左少辨下向奉留云々、今三ヶ日所望、一々可有御沙汰

之由被仰、又以藏人佐被仰、其狀不明、昨日、廿三雅親通方卿

被參詣、今曉通亞相於宮寺見天變、以左衛門尉國行被

申渡云々、司天不知如何、被遣南京御使圓經法印已歸參云々、

又俊元云、於殿下親繼親房、惟長掣摠云々、今日暑氣又

還着、未後優臥、又傳聞、信綱法師子サ、キ次郎打殺神

人、山衆又犯亂云々、

廿五日、丙辰、朝天遠晴、蟬聲滿庭樹、夜深金吾來、參殿

下內裏、神輿神人猶吸々訴訟、大理傳奏引山階寺之由

叫喚成恐、以高三位令申、左少辨二度、藏人佐二度往

反之後、裁許猶通由叫喚云々、三大納言、左衛門并子息

等參入、通夜之間神輿之上替星正見由通氏朝臣語云

云惟長罵親繼之故、親繼破惟長衣帽子取本鳥よせが

すら、依御寢所近邊二人被追却云々、山陵使廿四日又

延引、南衆徒又蜂起云々、幸清法印危急、

廿六日、丁巳、朝天遠晴、巳時許興心房來坐、被仰付不動護摩、固辭申、御氣色不快云々、覺法印書狀云、二位禪師ト云法師於寺中令打落人頭、被召下手人云々、超清法印送書、本師病已獲麟、心中可察由也、自貞觀以來神興出御山御一宿、全無其例、況御出京勿論云々、今日猶御出京之由雖騷動、依勅使往反當時奉控云々、境節祭而有餘由答了、使法師云、去夜三星降神興之上還祭居云々、未時治部卿來、大將若君可奉迎由、自殿下大將殿被押懸、不領狀者他奉公惣可被棄云々、殿下之風萬人只是也、非剩加納受之落胤乳母者總不中用云々、旁大切之奉公歟、供覽師季卿公有入道同時計會云々、夜深金吾以時廣告送、八幡可被奉一國之由被申請、有其沙汰、因幡本所緣有事妨、河內春日社料多、向後可憚、仍被奉土佐事切了、以參議可被申、其使非汝者無其仁由禪室命給、仍參殿、早可勤由被仰、但御齋會行事已宣下、可憚否被問外記、例未勘申、只今又周章

出立由也、宣□康□季繼對揚極有恐、此使辯士舌端謀誤夫善話和漢才智可抽其器哉、尤可有用意由答之、

廿七日、戊午、朝天遠晴、勅使事尋賢舜、土左國事神人等納受領狀者、可被發遣之、出立儲可待其左右云々、遲明禪尼等參賀茂云々、午時許又問之、勅使不限參議公卿也、納受如放生會可被催奉一員、而唯我一人之外雖被責、無領狀之人云々、及秉燭賢舜來云、右衛門督不參八幡、昨日參殿仰云、汝外無可參人、早可馳參、申云、可隨仰、但已御齋會行事被裁定文了、若憚候歟、仰可馳走本營、酉時許右佐高嗣爲神興入御奉行已罷下、早可被進發、但上卿二人宰相二人可令參由思食雖被責、只今未出來、黃昏定高卿書狀、御齋會行事猶可憚歟由有御猶豫、若被止者可被借馬、宰相只今欲出立云云、雅親卿領狀了、伊平卿雖對捍猶可參由有種々御沙汰、於今日入御者一定也、可參人々只今猶被催云々、時々政人煩、每聞迷是非、正三位權中納言平朝臣範輔依病逼迫今日出家云々、幸運任意昇進、雖末代猶可恐

嘉祿元年 閏六月

四百七十四

三〇八

憚事歟、昇上卿七ヶ月出仕、不幾飲水并酒無算云々、年四十三、經大辨納言、爲黃勘文被置其名字、今已欠、家光可還着之由雖日來被仰、願身固辭云々、今夜暑熱失計略、終夜悶絕、

廿八日、己未、朝天遠晴、今日攝政殿還御一條室町云云、高野本山傳法院又合戰廻響、定憲結構云々、南都又蜂起云々、暑熱殊難堪、昏黑兵部卿音信之次、因幡被付宮寺了、俄有此事、召仕物等悉佗際、一昨日所聞今日事也、以水火歟、甚不便、迷是非之外無他、故院近臣總以失世途歟、是又賢者所計歟、

廿九日、庚申、朝天陰、辰後晴、夜深金吾來、參禪室殿下世事

少々談之、遂八幡人々雅大納言、伊中納言、定宰相、實任、家定、少將賴行、少將教定、少將右衛門權佐、行事、左少辨左衛門、藏人尉重資、諸衛不被催出、此輩夜半參着、神人猶最初訴水事可被宣下由申、又申其由、被宣下之間、廿八日午時神輿入御、於今者宮寺無爲歟、幸清又望申檢校、寺務如本、以宗清補別當、最末之關可被嫡

孫超清子由申、成清者道清翌、祐請者幸清弟、無其緣者別當不寺務、無其謂歟由世不許歟之間、宗清詣禪室、而謁、非遺恨、只可任神慮、但一子超越無術訴也、超請所申又懇切、不可抑留、諸官皆隨時剩闕、以二人被加乎由申、頗穩便氣色宜云々、其次被寄國事甚不便、和氣清磨爲勅使正承大菩薩御詞之時、二千戶封、國土之費不可然、可爲千戶由被仰、況一國更非神慮之趣由申云々、被寄國事被問人々時、定亞相甚不可然不便之由申云々、又神輿入洛議定日、通大納言、具卿、兩日野參、條々中已入御者、定有儀可何樣哉由被問、大理傳奏家光卿於此條者不及兼議定、已被定其式由有其聞者、口乘勝有入洛歟、只爲一定時率爾可被控許歟由申、人以之爲可云々、南都之訴又以強盛、已切圓經房住由聞云云、武士等多存南都之不當、若及距發向者、惡徒所行等、及向後大事歟、不便之由且有歎輩上、御成敗多被優南都由存之云々、任大臣朔日召仰、五日大饗由沙汰、依此等事延引山禪室之說云々、又櫻所闕如無其家云

云、室町殿故殿、冷泉亭、

故內大臣
其通之所

、陰明門、坊城、彼亭饗

其人々、閑散由云々、惟長之闕之間、親繼出家之由今

日粗有聞、氏人々群參八幡之時、三卿先參在馬場殿、少

少召寄神人粗問答、無指事之間、夜深定通卿參着、不

寄近邊下與步行、奉尋神與御在所參、地上令敷疊、諸

卿參由聞之、在何所乎由問、聞馬場殿由、神與已下御

昇堂上之條不當由難之、三卿來加之後、召寄神人含子

細、先訴訟至極之道理、次奉出神與之儀輕忽有恐、入

洛穢惡路頭全不可然之趣、誦數多訖宣訓釋之

間、神人皆流涕歸休、精進日數不滿、今夜不奉幣、

可宿圓明寺由示之退出、道俗皆讚歎信仰云々、此卿

總有廉直之氣、又末世才卿也、將相之闕可被優歟、

近日前左府一位牛車之所望由隆親卿說云々、其次何

故哉、又云、定高還着可任大納言云々、

是皆存內也、攝政之
攝政院大臣定想望

歟、經高卿俄病惱衰損在石藏云々、雖末代猶不可忘過

分之官途由每逢賦之、

卅日、辛酉、

赤日盛照、暑熱殊甚、少將一昨日瘡病云々、

或人云、薪大炭兩庄又聞諍之聞、權別當等被召上云々、

修羅之聞諍別儀歟、南京叡山又蜂起、白山加賀、又神與

京上、可擲入座主宮云々、申時陰陽師見來、仍修祓、今

夜宿本所、

○十月

一日、庚寅、

二日、辛卯、

闕文ア

殿上人

闕文ア

房此間示送、以行範重被

申御返事、御氣色不惡、但不知許否云々、此事自始無

殊被申旨歟、只不思放由之恩言歟、度々之使者甚以無

詮、

三日、壬辰、朝天快晴、大饗儀不略以前□□左大臣兼經、

□□右大臣實氏、內大臣良實、權大納言實基、中納言具

實、隆親、權中納言實經、未時許金吾來、昨日內辨家良

卿俄稱病無出仕、通方卿入興勤仕、天明歸家由聞之云

々、家良卿忽辭官、

推之前殿
御氣色歟

金蓮伺見歸云□□也、任而可

見由勘付給、事已有實歟、爲見世之任事態今日被辭官

歟、今夜猶被棄之、實以別儀歟、無處于愆、將奈何哉、

嘉祿元年 十月

四百七十六

三一〇

曉更亦相尋、今夜除目延引之由頭辨仰外記云々、時儀旁不穩歎、今夜行幸五辻云々、

四日、癸巳、今明猶可有如然事歎云々、更無散不審方、是亦期不來歎、

五日、甲午、自夜雨降、巳時止、午時天晴、金吾云、聞以良說、除目來八日云々、典侍女房說事近々歎、尤可急申歎云々、亦達申禪室返事、此間由承也、定有其沙汰歎、五節事早可有用此下闕文、日夜惡業煩惱心中悲歎之

故也、世之披露基保卿亦辭官云々、納言加任不限人數歎、亦說芳卿不向經通卿家、尼宰相爲御使訓釋云々、

夕金吾來、康房許令伺、聞無人由參、禪室夜歸去快奉謁、明日參可申定御長官、獻任人可不勤哉、基保猶不

辭、與可勤五節以職被事脫力 以下闕文

六日、乙未、自夜陰、朝雨降、忠成宿禰訪來、坂本近日狼藉殊甚、恒例神事皆依衆徒制止無骨云々、賢寂來、雖持病發相扶歸者、金吾今朝奉愚狀、御返事亦如夜中快然云々、彼是不審無極者也、夜猶雨降、槁葉之外無

音信、

七日、丙申、依無人延引云々、今夜以短札一日示付趣具

披露、御後長官猶全無其仁、構勤仕者可爲殊忠其後事

爭無其計哉、於伺形勢其心於亦多歎者、如此被仰之上

亦不能通避歎由示送、予云、今度此役當仁之由自始所

存也、而遮每句公卿昇進事康成事示之上進被趣去難

堪由所存也、於尋常仰者爭不勤仕哉由、闕文八王子

御與明日一定可還御由巷說云々、乘燭之程金吾自禪

室來云、御後長官勤仕尤可爲其忠、於御禊以後者、大

祀以前必可被加任之由進被仰之、經通明日可加十大

納言、家良不辭、基保又不辭、可獻五節云々、今月中被

行京官除目者、執筆昇進殊愚意之可須也、喜悅餘身、

亦大將代遂勤仕之人有志者不勤云々 通親者誰人哉、因茲內府更供奉本

陣、右府可爲節下由被仰了、遣上之儀或可謂言語道

斷、四條納言今日來臨、任大臣日出仕只七人、內辨通

方卿、外辨伊平、基良、資賴、親房、有親、親俊、我參養

所、吹簫、基良、華、光俊、比巴、資雅、拍子、宗平、付歌、經行、

笛、伊忠、和琴、明曉欲參日吉、一宿、依物忌即歸、世間之任意自由更非王事歟、今夜行幸實有御供、

八日、丁酉、朝天陰、小雨瀟、午後陽景見、巳時許與心房入坐、參殿退出、夜前行幸殿令參給、依御風發被燒薪、今夕

除目一定云々、經納言一昨日聞一定可任由、今日亦有不定之氣云々、不知其由、或云、忽被加任之條、獻大約皆亦勝云々、爲是爲非、萬事如

此、金吾亦來、夜前參左府、手振物具等相違云々、密々被語云、臺階深恐思、有辭遁之志云々、昇極位之人辭

遁□、末世之狂歟、亦云、知宗娶狂勢之女、教光入洛、

龍蹄五足獻右府時云々、此間亦風聞、將軍京上次第延

引、依有御對面之望、禪室准后共可下向給由有其說、二有寬歟、夜前右府此事實事歟、可彈指被示云々、骨肉猶如

此、酉時許異方騷動、神輿登山給云々、雜人等奔走、衣

冠祠官亦狩衣合七八人、神人雜人馳走、無僧徒云々、神輿之

體金銅錦美麗云々、金吾□參社之由、賢寂來談、

九日、戊戌、寒霜如雪、朝陽快晴、辰時許見聞書、權大納

言經通、肥後守卜部康村、按察使藤賴經、右近中將實

經、兼、從三位親俊、正四位下良教、道嗣、從四位上賴

行、已一點金吾來、神輿入御之後、八日大殿開、今曉亦重陽、大殿開、今日相撲云々、衆徒已和平歟、去夜良有

炎上、修學院之南方村民之宅、隨分富有者群盜以下闕文アリ、

印圓法印被過談、扶起相謁、童來十五日欲令出家云云、猶被召殿下始三壇御祈、皆言用途、明後日亦可有

除自由被仰云、世間儀如何、不足言事歟、匪直也事哉、可悲事也、抑大納言本自無一於二人懸望共被優者、可

被加十大納言、而先被任下薦、已有超越之憂喜、經七

日被任上薦、彼是御沙汰御存知旨如何、只無心所着

之儀歟、大納言被剩任、中納言被置、甚以於用捨言隔初イ歟、前藤中納言被見懸□奇物見其所作可謂優美、更言

其歎褒美了、入夜忽狂駕、驚起面謁、漸及深更被歸、自

先祖以來其性柔和無腹黑、豫見四代納言壽考之至也、

前按察去秋給大隅云々、

十日、己亥、朝天陰、已後陽景見、入夜雨降、少將痘瘡、

貞幸稱可輕之由之間、亦以無實、自一昨日盛出、已如

嘉祿元年 十月

四百七十八

無地云々、猶稱不可有大事、醫家之說想不可□之事歟、
兩禪尼行訪、秉燭歸來、凡京畿此病充滿云々、未及此
家、恐歎無極、今朝注付存問等返送、于カ能記歌本意由返
報、

十一日、庚子、終夜今朝雨濛々、開除目由自朝尋聞書遂
不得云々、夕之除目今夜也、昨日凶災欠日也、有其謂、
十二日、辛丑、夜雨曉止、朝陽漸晴、終日猶陰、夜月清
明、已時見聞書、舍人二鈴式部被下、諸司九人、伊豆守
藤伊宗、左將監二人、左右衛門各五、左兵四、右五、左
馬一、右馬二、正五下紀文平、從上源康房、安倍時貞、
正左京亮國文ア、右衛門長峯秀速轉左、適不被任納言、
夕傳聞、去夜攝政殿內舍人隨身御拜賀、九條新大納言
大宮中納言、大藏卿藤宰相、親俊、雅繼、資季、忠高、兼
高、能定云々、其後深更左府拜賀、明夕內府御拜賀、
十三日、壬寅、朝陽快晴、或說新大納言實觸穢云々、不
可然、下人等云、聖護院弟子宮院□瘡瘡腦云々、入道納
言國通卿乳母、依不審在白川云々、伴病近日民戶嬰兒

或老翁比屋死亡云々、秉燭之程爲方違乘車之次行冷
泉、見日吉資成唐鞍、破損無其體、事已闕如歟、賢寂來、
行粧闕如、猶兩其價直難得之上、近日絹布之類總無其
物之故、于今不尋得云々、歸路依非殊寒氣、逗留一條
東洞院邊、此間內府已令參持明院給由下人等云々、次
東一條院、經時刻自萬里小路南出一條西洞院、南、臘月
之老眼不辨人面、其行粧各不尋常、伊平卿車如塗墨、
雜色車副商歌牛口之正去歟、納言隱納言乘金吾車、二人之外他
人不見、後聞、非伊平實卿卿云々、宿本所、聞鐘入廬、

十四日、癸卯、朝天陰、陽景間見、有數中將書狀、夜前先
被申姬宮、季賴、次持明院殿、安季朝臣中、皇后宮、亮、東一條忠
高、內裏、無御拜、次令入押小路給了、御風、殿上人資季、有
敕、雅繼、隆盛、言家、賴經、兼高、長朝、能定、教定、隆
兼、重相、知茂、御隨身府生賴峯、番長久則、一座二行、今
夕行幸官廳云々、
十五日、甲辰、朝天陰、終日雨降、□唐鞍事未聞左右云
云、成重入俄勤之、藏人傍置瘡瘡之故云々、定雅卿又瘡

瘡不可供奉歟、此事發感大祀極危事歟、午時許金吾來、鞍遂不借得、以膏被申禪室、七條稻荷祭鞍欠、自後院待召休云々、被尋召乎由也、可尋由以康房示遣之次、老者頻爲御禊行幸本隨身童等付花事、有不可然之說、先々如何、又供奉諸司不具雜色歟、隨身市比之下着沓歟、將藁沓歟如何、申云、付花事不可然之說聞候歟、但壽永後京極殿五位中將之時、御隨身童付菊紅葉、故入道殿定御存知之間□多雖付風流、彼御所□可尤爲證據歟、不具雜色事、是本說正歟、具隨身之人尤可然歟、次將之間父子共不具作遣予比下前院公事御沙汰之次被仰出此事、前內府通查可然由出詞、殊有不可然御氣色被閉口了、宇治左府御記藁沓之由被載云々、承上皇之仰之後無略儀存候由答申、康房密語、定高卿向鴨禰宜宅醉鄉得千萬之送物、如此事等落書在殿中云々、鹿島社之間新任國司必造宮、前司所造新司改任時必壞弃云々、盛兼問、已造畢未遷宮之間、可忌辭由彼卿傳仰、改任後見光頭法師下向之間、社家存例破壞新造社

散々、光頭存外周章云々、

十六日、乙巳、朝天陰、巳時晴、□康房示送云、唐鞍被遣尋了、又內大臣殿痘瘡令始給、彼御□不□入と同被申候也者、每事可驚、大將代誰人可勤哉、此御禊猶極不定事歟、駿河守重時最愛嫡男八歲痘瘡死去、其它已穢、悲歎乳母夫妻^{左衛門尉}出家云々、性愚房書云々、高倉殿此四五日病氣小瘡出給、已此事歟、未散不審云々、秉燭以後康房又來云、唐鞍事申內大臣殿、御鞍可遣衛門督許由、被申右大臣殿了者、傳々定又牢籠歟、此事全非私懈怠、於鞍不尋得者、長官不參更不過事歟、美濃兵衛來、雖所勞隔物可逢由懇切、仍對謁、月昇後歸、康房又云、可有除目云々、未實匪直也事歟、十七日、丙午、自夜甚雨滂沱、終日不止、午時許典侍參一條殿、秉燭以後歸、不聞世間事、今夜除目、禪室御對面終日云々、又重事歟、丑時許盲目蹴脇息、足顛倒突左膝、眉上打宛遣戸之筋、定破損歟由雖疑思、眉膝無殊事、一寢之後欲起腰損共痛不立得、老者老身多依顛

嘉祿元年 十月

四百八十

三一四

臥有事、極悲思、

十八日、丁未、雖雨止天猶陰暗、申後又甚雨、曉更唐鞍

事猶尋康房、答云、德大寺鞍被尋出了、事不闕、除目事

任人不承及、已時許聞書見來、侍從清家、官家子、□□□

在之、式部少輔菅良賴、權少輔大江信房、□□□實賊、近吉

能忠、從三位家時、權任十九人、金逆來、顛倒當時非重

事之由陳之、午時典侍權大夫來乘、大夫局參法華堂、乘燭歸、

維長被免此御堂參云々、他界如不參、夜雨如沃、河水

溢云々、

十九日、戊申、朝雨猶降、御祿有儲日歟山問答、金吾伺申

右府、更無延引之儀云々、河原之洪水如何、已時陽景

見、靜俊來語云、於橫川號殿下御願被書如法經、十部、

一昨日奉納、雨夜馳走、所々奉埋之、二宮、十禪師、吉水

大僧正御墓、橫川御廟、憲德院、聚洛院僧正、葛北、白川、後

白川院法華堂、月輸入道殿、御祿、長嚴僧正之料、今熊、野、公

修贈僧正、山房供料淨衣已下事皆以如無、僧徒嘲哂、入

夜金吾來、鞍自入道殿送給、德大寺美福鞍云々、不可借人起、請之山類難進、於□□非起請賜

山被仰了、傍馬相□無驚氣云々、供奉人粗所傳聞、右大臣、

節下、右大將、九條新大納言、高、別當、御前長官行被被取、供奉危山類有其間、

大宮中納言、平宰相、被□、左兵衛、皇后權大夫式堂之

外只五人云々、棧敷、二條南、高介東角、資雅間地倚之、此所前、殿御棧敷、隔小路相對、極有恐之由、日來雖、痛恐、善思、被入道等可見物由披露、密々隱入不可憚山示之、何意欲行向、東洞院東、定高間、地用本主、

樓、禪室、二條北宮小路四八間、准、右府、本亭南垣壞了被、後宜秋門院渡御云々、右府、造宮小路東也、不經程

歸了、

廿日、己酉、朝天晴、北風烈、日出之程行冷泉見鞍、大滑、金銅證、馬、副用侍之所從等、各一、尤至要事、

等、已令戴冠、之間也、向都督宅、可行列時、盤路禁固、辻々不可融

雜人車等云々、女房車先遣之間、前殿已渡御由聞之、

雖念出洞院大路已刻寒慢、已引、萬里小路未固由聞之、馳

融三條坊門西行、無押、小路、高倉北行入此地、闕地、棧敷南面

寄車、放牛入訖、西御棧敷東有織戶、其內被、立御車、寄人々車立

其南、雖路狹構入訖、借鴨光兼、御車乘、此棧敷殊不法葺板不合、

和重所作數被覺不知他、事、實、被又來備食事等、北風如刀、四面吹張、通路皆塞、卿

園隔後悔無極、及午時入道上人來臨云々、未時地震、

雖不久假屋尤怖畏、黑雲忽掩急雨已降、不濕地、病身被迫

寒氣、短晷空及斜陽、是皆兼所作也、京職兵士廿人、適渡後、少

少雖見騎馬者諸司甚少、非如兩衛歟、神祇官等行粧遠

知耻彈正無教正音、無弁知者歟、隼人候子等過渡、次第司長

官式部輔、不見知馬副手攝各四人、左衛門尉七人、皆入洛武士歟、其鞞所負羽

皆以珍重驚目、其第二緒山入道五郎左衛門云々、此入道親昵扶

持者、第五本馬左衛門云々、時房、第七不聞其名、直垂折烏

帽子左右各十人、白黑文紺白文左右當色、有相具者、次檢非違使五人

歟之中行範、右近將監行範子、五位俊親、權佐□恒氏、頭代家季朝

臣、雜色持弓藏旗、今度此就作、神組而能調歟、次兵衛尉歟二人許、左

馬權頭兼敎、藏旗、次御前長官別當具實卿、馬副隨身

火長看督手振、難應、追前、行粧頗不宜、可在兵衛前、次馬寮歟、允白髮

助等不見知、相待節旗之間、實持卿進來、不得心、顯平卿、

老懸弓箭、於殿御前取司、此而隨身、馬副四人、隨身六人、有親卿實有問大納

言已上馬副之外無雜色、于時反照已暗而路頭不排色、

少々雖有過者不知之、少納言、馬副二人張口無手振、渡歟、節旗奇行

者取之、頻傾危而遲留、大臣已以昏黑、馬副不取松明、手振不若半

只推量也、威儀御馬近衛府不辨其體、右大將依松明光

僅見之、御輿過御訖、宰相定雅卿歟、小隨身紅平衣遠見、中納言中

將殿、次將等不能分別、頭藏人通間殿下居伺松明、進來、

前駟不取松明、以如木雜色令取、不相並、一行中絕、渡間甚久、御

隨身內舍人等歟、惣不見、物見懸簾、檳榔御車、御車在近永治御輿御車在近

臣依非召問無督代云々、次御後長官隨身取松明前行、

馬副、張口之外、四人、手振八人皆取松明、愚眼者適似見漢官

之威儀、過了又旗、衛門督代、不見分、權佐行粧、尋常、正佐尉

二三人同輿、出車女御代前駟事被下、只聞其音、其後扶

入車中、融萬里小路僅歸廬、見物後悔無極、諸病競發、

廿一日、庚戌、天快晴、傳聞、今夕還御大宮云々、申時許金

吾來臨談、昨日及未時許行大貳家、於車中、令伺出御、此

間右府被參、前駟六人、中將公相、隨身、小、辨少將扈從將

數刻御輿已出御、大臣未駿馬給由聞雜人說、少將光成

相共騎馬、少將隨身付菊、立大宮面壞築垣內、伺節旗在公卿後、

近將不幾、御後諸司欲催行列、惣無見來者、兵衛佐過

寶祿元年 十月

四百八十二

三一六

了、出路頭於堀川了、尉二人出來、右衛門督代能忠朝臣來給在後、左大將代當座被召實清朝臣云々、上賜二人參云々、

殿御車令立鴨院北給、不御覽、後陣御車令加兵衛陣前給之間、久逗留町邊、令撤取物、令取松明、町以四疊渡了、無可然樣數、

座主宮島丸來、東力大僧正、入道殿、三所被燒庭燎、於三條

京極乘車、入錦小路宅休息爐邊、返道名馬驚駭置鞍、

以下人伺公卿給祿、騎馬儲京極、實持卿右大將許供奉、

又於猪隈邊乘車歸了、今夕行幸欲供奉、或人云、前殿

御棧敷鹵簿、於今者無答之由有沙汰云々、右府御馬號

春雲云々、日入以前歸、定雅供奉以後、痘瘡更惱亂云

云、

廿二日、辛亥朝、天陰、時雨間降、已後陰□晴、金吾示送、

去夜早參、深更殿下御參、主上御寢、夜半出御、隆親、伊

平、爲家、實持、不列、左將資季、實清、右有教、實光、少

將雅繼、鈴奏、職事宗平、高嗣、內侍所、教房、還給、還御之後行

啓、御興、伊平、爲家、實持、將實清、實光、無宮司、不問

名調、於持明院殿鷄鳴、風病更發、鈴奏中將不勤山各

申、被問外記、不覺悟云々、通亞相被送書狀、幸路臨暗節旗行列迷例等不審由也、老病不見物由答申、終夜雨如沃、

廿三日、壬子、朝天陰暗、辰時陽景忽晴、天猶沍陰、間見

陽景、午時許管相公枉駕、扶腰病相調、主基歌被見合、

答宜由、雜談頗移時刻、大理御禊以後早速可辭由兼申

之、此事依御傳示申被存旨云々、少納言節下領狀、依

脚病所望無術、臨期申陳、今良賴依始服出來被催宗

範、辭官不供奉、仍周房子俄供奉云々、謝遣之後金吾

示送、內裏此流布事有御氣色由承之云々、過御禊之後

輕令果御者尤宜憚歟、彼日至于深更終夜無御違例云

云、天令然歟、中納言中將殿自昨日痘瘡、

廿四日、癸丑、朝天窈冥、雨漸降、夕如沃、不聞世事、悠

紀主基歌各有音信、

廿五日、甲寅、朝雨猶降、青天間見、天顏雖頗晴、雨脚遂

不止、金吾書札、昨日終日候內裏、明日依痘瘡廿二社

奉幣、賀茂使申領狀了、

廿六日、乙卯、朝陽曉雨適止、鍾愛孫去廿一日肩邊^{升二}

聊蚊觸^{如水}、無他病氣、令見金蓮、不驚而他行了、其物臆

氣歟、甚苦痛由聞之、驚又令見、昨日付藥、今夜又增氣

痛甚云々、今朝又示令見者、偏似痘瘡、雖無他逆例、

此病覺發闕中也、於今者此事歟之由承伏、止療治令慎

之、只肩背胸邊打散少々出也、猶極不審、未時許兵衛

佐來談、扶病相逢、

廿七日、丙辰、朝天陰、辰時白日雖出雲盡^{猶陰}、金吾

候內裏、日々一兩度令發御、又御身聊出現、基盛經長

不奉見分、在友申一定此御事由、昨日奉幣辨經光宣命

草、外記一人清書、數刻上卿右大將未時參陣勤右筆了、

入幡使^{實有}領狀、去夜々半妻室遂產俄止之間、伊平卿

又勤仕、^{秋口以}松尾、^{後三度}顯平、平野卿^{實持}春日、^{殿上人}上社

社司遲々、丑時歸家之間、群盜押南門、良久問答入向

宅、^{定平利}又入北南隣清定朝臣宅、此女子有惱氣小温

氣云々、未後又甚雨、

廿八日、丁巳、朝雲、辰時天晴、越部細河^{庄カ}大井會召物

配府、大藏卿內々送之、聊有恩言、枉可被申免由示付

之、治部卿末子童舉侍從由自讃、近日無雙之物云歟、

播州庄々不可觸知領家、只國使制官使、漸入庄家可責

取由被仰下、昨日親房經時卿爭不觸領家哉由相議云

云、臨昏行冷泉、^{力違}荒屋怖畏之故也、小童病甚危急極

不快、於女子者已時滅了、見物下人說、大理手振召持

取物松明云々、於官東門教定馬奔出落馬之間、長朝

^{朱後}馬退而不進、懸陰陽寮也判欲下馬、无侍抱下之間、

猿取枝懸袖引破逃歸了、又輔通馬馳走懸右大將下薦

隨身御馬之間、聊雖相去、當尾袋拔懸馬驚^{四之}、舍人切

尾袋適無爲由被談云々、明春朝親行幸北白河院、可御

冷泉、^{隆親}資家卿養君姬君抱瘡天亡、被隱其事云々、於

大神事如可夜前左府御賀、殿下御答拜被引龍蹄、行幸

辨少將乘馬云々、國司除目來月五日云々、

廿九日、戊午、朝天陰、終日不晴、雨又灑、雞鳴之後歸

來、此女子病無指違例、^{且奇}終夜寒風慘烈、駿河守重

時次男今日又夭、^{武士馳留云々、}六歲、後開虛言、

嘉祿元年 十一月

四百八十四

卅日、己未、寒雲飛、微霰零、辰後晴、青天適晴、白日殊鮮、不聞世事、寒風殊甚、地面悉冰、修明門院坊門局按察典侍、御輿夜絕命云々、

○十一月小

一日、庚申、朝天遠晴、春日祭使左少將能定云々、爲氏送摺袴云々、菅相公又被示和歌、事之次明日參梅宮云云、金吾示送、去夜依番宿內裏、今日又日薦、平野祭依闕如申可參由之處、有親卿領狀、宣命上卿實有卿、使光國佐渡前司、去夜使少將能定參內、八幡臨時御神樂、拍子隆範、顯氏朝臣、日吉使伊忠不勤者除籍之由被仰云々、臨時祭依吉例被催內藏頭、未領狀、

二日、辛酉、朝陽快晴、寒霜如雪、大藏卿書狀、播州事入之處、於知行分者可免由被仰下云々、懽悅由示之、依奉行芳心觸免、可謂面目本意、

三日、壬戌、初月高懸、霜凝天晴、已後返陰、治部卿書狀云、日吉使可勤由被召仰、每年無言略、未時許信實朝臣來、舍兄不參御神樂定、平顯氏參勤云々、告播州庄々荷

前事、驚駭參向禪室了、與心房來坐給、損腰久藏居、今日初參准后御方、御坐親季宅、姬君居福王御前、抱瘡自昨日有其御氣、依輕服憚公遂御坐件宅云々、又淨土寺、相國依招請被召向了、禪尼行冷泉歸、童病昨日無殊事云々、與心房語給、實有右衛門尉智通能經光殊清撰、孔子賦卜筮日來評定之處、禪室之命准后少將忠俊長衛入道右衛門之兄也、可執聲由忽被召定間、事已一定、爾來貧者可爲天下之陶朱、抑小路京極新宅可居住云々、夜深金吾來、今日三社奉幣、菅相公參陣一上可著陣由兼被仰、依痘瘡無彼御參、延引朔日、平野宣命之次謁實有卿、行幸出御之時、列立近將外只二人、大納言依爲下薦前行出東門廊下被立、引裾過其前、聊雖伺氣色不被見入、家禮之身異他歟由推量而過了、大納言出同過了、已雖騎馬猶相同之間、殿下已令出門給之間、前驅覽來、仍騎馬遠立、相府又被騎了、猶伺氣色可干進由再三氣色、出待賢門可行列歟由思得進行、大納言只遂哉競來出門之後又氣色、又可進由被示、乍不審進行之間、顯平

有親等卿出來、於二條大路見付節旗之間又留立、不堪不審、見付件長衛從者中間男、猶可前行歟由令申、早可進由蒙命、此時有祕說歟由成信伏之思前行訖、後日節旗在公卿後由、何不未驚哉之由被命、五度伺申之上爭申其由哉之由密語云々、殿下又御覽此行列、无御不審如何、當世之群賢只如此歟、度々雖奉謁禪室康房馳來告事、無一言之沙汰、忌而不被措心歟、有恐不申出、時儀只此儀式歟、云而無益、其實卿病惱違例由披露不出仕云々、只厭威儀之行粧之故歟、

四日、癸亥、霜凝天晴、午後沍陰、下人荒說、大禮延引、仍御出來由是又虛無歟、問金吾不聞及山答之、前左馬長綱來達門音信、腰不動由以人令答、不見日而空暮、五日、甲子、天晴間陰、治部頻无侍可訪由^{談力}之、助里、賢舜示合可相搆由下知之、止身五節出仕、子童臨時祭舞人可勸此役由被詔仰云々、殿下御懇切、定家一人納受歟、付事聞遣問儀之式、助里歸、賢舜猶言計路由申云々、入夜台嶺野火光照耀、

六日、乙丑、朝陽快晴、午後又沍陰、世間有重事議定等云々、幕后可臨供神物給由等云々、朝士疎遠不聞及、昨日國司除目被行了云々、申時許金吾來、昨日於右府御許聞及、定高來示御輕服、猶无例歟、兼日可被讓申左府、有内々議、而疱瘡不出仕給、母后可臨供神物給歟之間事示合、无例重事、更難計申、后宫又臨期有御障者如何、猶可恐此上事由密々被示云々、將長來、姬君御心地殊重由成恐云々、期日已迫、天下大禮今不定之條實似不便、竊按猶難被遂歟、此間以人令伺御月忌、右大將、前中納言二人參云々、即參彼御堂、布衣、檢校雅親卿又疱瘡云々、吉水法印又始給、禪室被養申姬君又本病、神氣危急云々、縱雖被渡他所、率爾輕々事定無其納受歟、國司除目明日可被行云々、凡此攝錄之器背冥慮之條已以露顯、尤可有斟酌事歟、

七日、丙寅、朝天晴、時雨澀、昨日御月忌、右大將、中納言家光、資賴、參議有親、三位成實、師季、殿上人有資、實蔭、^{岡文ア}六條大納言拜賀前座六人參殿、東對代被儲

茵園座、被引馬、少將公齊歟、一人在其云々、供神物后宮御沙汰一定云々、御月忌以後向三位許訪申病、右幕下對面移時刻、深更歸由示送、朝廷新儀進事、不審之餘以愚札問前黃門、家光

一御輕服事、受生七歲之上、依時依事有無之儀如何、返事或人云、昨日昨日於殿下有議定歟、申不承及山、御月忌之後雖參殿、無被仰下、不散不審、七歲以後服暇之條勿論、七歲以前猶三々日之憚心歟、庶子一月服無疑、或人云、御病危急之時有異儀歟、若義絕歟、無指子細者又如何、修理大夫說、日來大嘗會間、后宮入內不定、而俄依此事可有入內、仍官廳營舍屋後房可爲宮御方、仍御直廬更可拂出由被仰、然者殿下猶可御禁中歟、

一太后可令臨供神物事給由云々、舊例歟、今案歟、誰人被申事哉、此事粗承及所推今案歟、昨日或人說、漢家例被准據云々、又母后皇胤也、可然云々、一此間事被問諸道候歟、又不然歟、不及卿士之上、

不及諸道歟、只沙汰之趣漏承候許也、長和八歲其時執柄不候給、今度五歲母后扶持、何事在哉云々、今聞此事被問公卿之名字猶无之歟、我朝初被行事、尤可被問公卿諸道歟、漢家之例若此事歟、東漢和熹皇后永初七年正月、初入大廟、齋七日、賜公卿百僚各有差、庚戌謁宗廟、率命婦群妾相禮儀、與皇帝交獻親薦、成禮而還、

未時許障幕來談、維摩會別當法印御所作甚以殊勝、大僧正密々聽聞給、隨喜感歎給云々、禪門姬不例之後今日初沐浴、申時許新宰相大藏被來謁、清談入夜歸、與心房僧徒相共來、被修廿五三昧、寬治御忌日、清談之次大理自御袂翌日病腦心神違例不食無力之由、一日招請受戒云々、具教入道近日同宿稱看病由、三位中將實平卿自此大嘗會出仕、與立妻父與イ 誤脱アラン干葉籠居成恨之故又交衆以、侍從實尙新妻、親氏朝臣妻也、依瘡抱云々、八日、丁卯、朝霧天晴、午後又陰、辰時許見聞書、雜任又卅餘人之內、攝津守藤季親、近江權守定雅、兼公卿遙授被奪取之例

覺不語、將高所帶也、雙君尤可然、

介藤實清、兼、丹波權守經房、兼、介殿實

任、兼、權介藤光成、兼、權掾被下如例、有丹波和氣等、左

府猶有重惱給之聞云々、未時許治部卿來、日吉使每度

例、府舞人陪從二具、近衛召人一具、送碗飯、參座主宮

申此事、可相訪由被仰、相具馬副八人渡馬場云々、於鳥

居下馬之故、前取松明、是時綱頭中將如此云々、

九日、戊辰、天晴明、未時許金吾來、來十五日齋場所御

覽可扈從由蒙催云々、國司除目上卿檢校雅親卿、施濟也、通方

府、中納言來會、各所被陳世間事、只如他人存被傾奇

云々、明春行幸事、又無本所御好、每事定難叶歟、后宮

神事供奉事、以頭辨被問師季、答云、此程狂事不及申

是非云々、御禊前殿御棧敷、權大納言、二位中納言賴

實、親俊卿、光俊、資俊朝臣、仲國、爲永等參五節、參

入夜公卿、右大臣、右大將高實、實有卿、御覽日同大

臣、大將、實基卿、被催殿上人、若年皆痘瘡、十四五人

領狀、少將忠俊富有妻、右府此御口入見苦、任本人心

不可有妨由被申禪室云々、興心房風病發由示給、仍

今月廿五三昧庚午、於本房可被修由示申了、暗夜怖畏

之故也、性愚房自醍醐來、

十日、己巳、天顏快晴、夜月清明、午時許典侍參姬君御

前、依殿御神事候座親季宿所准后御渡、見參之後夕歸、此御惱數日

危御坐、於今者令落居給云々、供神物事新之假名次第

可被獻后宮云々、追猶有所思歟、此事猶非無不審、

十一日、庚午、朝陽晴、夜前行啓金吾只一人供奉、權大夫

於陣召仰、上卿不候、啓將實清教房自殿被催、參會路頭、奉行長朝

三社奉幣今日發遣、行啓依此事被念、主上未及湯殿、殿

下御輕服、宣命可覽后宮云々、叙位執筆未催、長朝奉

行云々、

十二日、辛未、晴陰不定、陽景間見、暮雨降、月明、巳時

許金吾來、昨日參吉水、痘瘡日來殊重御坐、自昨日聊

落居給由隆承法印相談、大僧正御房見參退出、又參寺

大僧正房、申承日來事、今日參日吉、明曉又歸洛、參會

大殿開、

嘉祿元年 十一月

四百八十八

三三三

十三日、壬申、朝天遠晴、日吉祭之日也、寒風慘烈、短晷空暮、資雅卿姪土御門院高倉殿痘瘡終命、年卅一、月前宿北邊、雞鳴歸、雪埋庭草、

十四日、癸酉、朝陽出、雪猶飛、自曉更此女子無故反嘔已及度々、終日食事不通偏反、曉三度、酉以前五度、但無溫氣、更不得心、夕金蓮來云、可令服粟粥、終夜只同事也、不受一

滴欲反之、在辛苦、入夜漸有溫氣云々、無疑痘瘡歟、十五日、甲戌、朝陽晴、又返陰雨、病者同昨日、但反事頗

有隙、溫氣已露顯、申時許金吾來、今夕消暑堂拍子合能者、少々可着座由有催、明後日參齋場所、頻被催、依無直衣不能參、不便體歟、中務爲繼被聽仙籍云々、殊勝事歟、

十六日、乙亥、夜雪、沙石間顯、天晴、病者雖同事病聊出始由雖見出、老眼不分別、視聽事不能注付、今度所作人昨日聞、本拍子經通卿、末拍子隆親卿、懇望勤仕云云、件兩事神樂、能馬樂、能年來日來不受習、昨今習之云々、世間之儀奇而有餘、和琴右大將、第基良卿、笙實有卿、笛

公賴卿、筆樂實俊卿、付歌資季、有資、琵琶實基卿也、申時許金吾來、夜前禪室於室町殿念誦、堂見物給、依招引參其所、同□實出對代有其儀、殿下御橫座、經通卿與一、實有卿端、自餘守次□神樂間堂上堂下音相混、至催馬樂納言總其音不聞、安名尊之詞遠歟、有資高歌直之歟、明夕行幸官廳以朝所東廂可爲殿上、祖而經朝所南庭、經正廳後可向五節所云々、親忠朝臣畫出仕云々、非常世之儀歟、新相公明日參大原野祭由有音信、這譯記了、今夜病者殊辛苦如縮身、

十七日、丙子、天晴陰、以下人令伺見、已及日入歸去、齋場所御覽、前駟七人歟、頗刷御隨身裝束、又同參公卿、伊平、實有、爲家、實持卿、伊平爲家卿新車有教、能忠、言家、能定、皆古車云々、行幸又定深更事歟、月出間以後、大風其響如雷紛々、

十八日、天晴雪降、夜雪積地寸餘、病者去夜頗靜、多出故歟、典侍仲植大夫、參詣法華堂、雪中定有煩歟、豈圖我君大祀之日、陵深歲雪拜陵墓、午時許金吾來、昨日

御車半部、前驅爲仲、以良、家盛、康長、家國、時長、兼綱、將監、時光子、伊平、實持卿、束帶、殿上人有教、雅繼、中將、賴行、行幸風以後夜半實基卿來、着陣之故伊平卿可行召仰由晝被仰、參之處大納言忽損足不參、又依重仰列立、遂參入御所、爲家、顯平、公長、專實持、左將有資、敷房、家定、少將、右實光、維繼、少將、實光問名謁、公卿列正廳北北面、之故也、內侍所能定、輔通、對押、被談云々、朝所東面^{辨少納言座}爲殿上、其西塗壁之北立大床子爲日御座、其南庇御簾前如孫庇人々居所也、西左大辨曹司跡立屋爲殿下御所、非南昨日付兼康伺御氣色、叙位無催、皆相公勤仕歟、仰云、叙位一夜其事少、仍皆有勤仕歟由申、猶除目者必可勤仕、申畏承由、行幸之次重仰云、叙位猶殊念思食、早速欲終事、可參勤也者、不願失錯、於早速右筆者可存知仕由申了、右府五節無參入儀、伊賀國勤仕之云々、不聞事歟、爲繼昇殿事今朝被仰下云々、昨日又有除籍輩云々、昨日可御覽廻立殿有催、^{從衆叙位不中賴}齋場所儀悠紀御座橫座公卿依仰

着與、南四、八女各四人春稻謳新歌、有二曰、次八女御覽主基屋御座南西公卿着落板敷、殿上人不着座、稻春事等同前云々、標山未作出、每事懈怠云々、道禪僧都驗者、去十五日逝去、^{雅親卿弟、大納言三人服}實基卿、實有卿爲檢校、^{並着}參議親俊又着之云々、小忌之外參議出仕只一人歟云云、有親所勞、定雅未出仕、內辨三ヶ日始終可候由被琢磨云々、今夕可勤園韓神之上、爲見御直廬可參內、十九日、戌寅、霜如雪、雲漸晴、病者今夜又辛苦多出添、金吾音信、除籍事時綱、經季、教定、儀出仕之間無其事、出仕人卅餘人、爲繼付簡之、帳臺殿下、左內府、紅打、大將高實卿、紅打、實有卿、^{黃符}午時許興心房入坐、心閑言談、未時地震、不幾、昏被歸、廿日、己卯、霜凝天晴、遲明書狀到來、叙位於故實作法者不知之、存知事無違失人々不存之程、早速書給訖、從二位賴經、實經、正三位親房、^{丹波}資賴、有親、定雅、^{近江}正四位上中臣隆繼、^{滋賀}正四下公光、^{近江}實任、^{丹波}丹波、^{樺守}樺守、^{丹波}丹波、^安安、^{賴氏}賴氏、^{三品}三品、^{實清}實清、^{近江}近江、^從從

嘉祿元年 十一月

四百九十

四上基長、伊忠、院司光成、丹橋顯親、通成、宇佐宮正五

下源兼康、從一位藤原朝臣給以良、近江守丹波忠茂、大權和氣伊成、

同氏成、丹橋大權平賴清、安藝門院御給丹廣長、權大權宣繼、丹守、大中

臣永親、神祇官從五位上藤忠輔、賀茂職、近江權大大中臣季

宜、從五位上部兼躬、從五位上源資基、清原賴兼、

四位外高泰定、從五位下淳資王、寬和御後源良親、天曆御後

藤高雅、氏橘以業、氏藤致廣、民部橘知茂、藏人清隆尙、

外記、中重俊、史藤長繼、左近中章行、沙汰諸司五人、外

衛五人、近江八人、丹波十人、中則兼、源子內親王給藤行親、

親王給醉、兼燭以後后宮淵醉、叙位了退出兩新大納言、親王給隆伊、實

有、三中納言實持、實俊、伊卿叙位勸孟後立了、叙位召

仰、經通召後伊平參、資賴、親房、親俊、入眼殿上着座、

兩頭、定平推參、有資、通氏、通成、教房、實清、高嗣、季

賴、鎮魂祭親房可勤由被仰、菅卿輕服出

來、檢校可勤由夜前承之、領狀以前宣下云々、后宮淵

醉了、姬宮推參、次鷹司院云々、病者猶不快出、賢寂

來次示付在友朝臣、明曉令修泰山府君祭、臨昏金吾來、

爲見物向大宮之處、甚早速引了、人夫等奔歸間也、頭

中將一人早參、昨日、依一人參及殊不當由被仰頭辨、實

清朝臣叙將三人、侍六人歟尋常出立、光成兄弟同車、二品侍多相

具、六條大納言遽車差綱左佐等見了來云々、殿上着座、

頭中將伺御氣色被仰人數、二人有資云、教房出歌等事

一言不相觸、亦无私聞及事、仍不相催、此事不請歟、不

助音云々、通成朝臣今樣太優也、后町ひんた、ら有資

實清唱云々、資季慥夜々出仕可行事由被仰、仍難出

仕、猶不唱歌、關文執筆之間承事、近江丹波掾等忌時

各書之、已上近江掾、掾上丹後掾と書へく也、任仰

書之、實樣姓等少々外從五位下と可書、仰以前早書了、

然者何事在哉由被仰、叙位勸文欲入三宮、可入二宮由

被仰、御座簾中也、書訖退出之間、以使召使示大外記、

早速有驚氣色爲不審、授折紙了、職事長朝叙位以前先

除目、經通卿親房卿書了、近江守依實親抱瘡不供事、仍

被求任人之間、以良出望任之、次被任時舍人云々、御

前舞了退出、今日々出之後云々、近寒今夜可勞身由雖

示、今夜猶聞堅固無人由、可參大忌懼由領狀了云々、
廿一日、庚辰、天明後撫物到來、丁寧祈念之由示送、去
夜病者殊危急、終夜辛苦、曉聊休息、貞幸朝臣來、令見
病者、此瘡三種^{白、赤、紫}、是赤色也、雖非安不可及大事、示
藥事等大略同金蓮、金吾示送、終夜之上戴霜、資賴卿
只二人云々、小忌懼右大將、新大納言、實、實有、親俊
卿、大嘗宮劔璽、宗平、通氏朝臣、主基拍子事天曙之後
也、典侍又參准后、欲申播州苛政、更不可被免事也、雜
人云、悠紀標昇朱雀門院間、日像隨帝破損、下人等有
言、不忠辨懈怠也、更非朝家之怪異歟、至于十七日不
遣、卒爾構出、不法可謂道理、曉鐘報後主上自悠紀御
帳入御由有來語者、大嘗宮之間御湯之時聊無違亂、無
御睡眠、令遂神事御云々、實是天之令然歟、

廿二日、^{辛巳}、自夜漸陰、辰後快晴、未時示送、夜前內辨、
^{欠口}、小忌、三人、大納言家良、通方、高實、中納言基良、
實世、參議爲家、通忠、有親、通方、實世卿不立、壽詞列
次之事如例、^{實世不}、二獻風俗有親下殿催、^{二度下殿}、三獻

御酒勅使爲家、次昇御插頭臺、高實、實有、爲家卿高昇
之、自東階立之、琴臺以良實清寄人二人昇之、實清着
胡床、先是次將皆退出、次小忌插頭、辨國司寄人等取、
次殿下御插頭、爲家拔箸立、揖向東壁外、史持藤花來
向、指笏取花入東面、經母屋到壇下跪脫靴、立昇東階
座候氣色、御目許之後膝行參進、插御右方、逆行拔笏
左廻降階跪、着靴經本路復座、內辨花通忠卿取之、^{無違}
主基、^{無御}、小忌實有、親俊卿、爲家、有親、無他人、天明
退出、悠紀一獻之後入御、殿下令還着御座給、九條大
納言服日數過歟、今日巳時可始行由歟被催、有遲々
事、申始許參由重示送內辨、此間被參云々、病者終夜
辛苦、予亦齒根腫苦痛難堪、

廿三日、壬午、霜凝天晴、巳時示送、夜前乘燭以後事始、
內辨如昨日、小忌中納言已下九條新大、二位中納言、
^{基良}、姊中納言實世、爲家、親房、實持、^{外辨參列自}、次第如
例、御酒勅使亦勸主基、一獻之後入御、三獻後御插頭、
檢校三人親房、^{丹波}、昇之、和琴、^{辨實任}、成宣、^{光成歟}、御插頭

嘉祿元年 十一月

四百九十二

三六

亦勳仕、小忌親俊、內辨挿頭、通忠卿參加祿所、以無能之身着御神樂座、唐神勸盃之料云々、本座實有卿、瓶子敎定、末座爲家、瓶子隆嗣、勸盃訖退出、未及鷄鳴、清暑、北御所 殿下、右府、實基、隆親、實有、實俊、實季、爲役五位殿上人、爲祿四位各少々依催參候、姬宮推參今日云々、禪室溫泉今晚已被出京訖、金吾不供奉由今日聞之、辨少將五節之間罷居云々、是只依不具敷、可謂不思儀、兵衛佐有來示事、治部卿任事不便、

廿四日、癸未、自曉雨降、自行事日天晴、臨曉雨降、天之相應可貴、病者瘡膿於夜痛泣、未時許金吾來、去夜秉燭之後仰內辨、大納言定通、通方、實基、與家良、高實、中納言伊平、端、此間端座人傳下令書、加叙十一人書入、親俊下名不宜名字之間、如常書了間、不知次第以其隙書入了、中原章行止位、摺今亦傳上、此間小忌參議參、相替起座、先是公卿參殿御直廬、有盃等、此事不指其日、三ヶ日々中一度有例云々、四位持參盃傍、經範基邦近習物等不束帶云々、不接其座、御寢由及深更、

外辨大納言定通、家良、右大將通方、高實、中納言隆親、伊平、實世、參議爲家、通忠、小忌三人、叙人三人、不例昇殿着座叙列、通忠催宣命使隆親、內辨下殿不足拜早出立給、門大納言行之、叙人兩宰相被召着座、訪五節所、通方、隆親、伊平、實有、實世、爲家、親房、有親、公長、實持受領二所櫛、殊剩不着座、見殿上人舞退出了、忠高、兼高、長朝、雅繼、少將定平、國文ヲ亂舞得骨、此廊北當時爲□各進小舞出歌、有資、實清、通成三人云云、大嘗宮大忌唄實賴卿早參、不堪寒氣、以席令裹、自小忌唄以召使有與輩等、相奉有狂言等、殿下御退出之時、常參人々殊可祇候由被仰之、次衛門督日來談伏非依イ此限由被仰云々、六ヶ日之勤不重敷、御挿頭眾昇東階之儀、公任卿昇中階更東行、無其謂由被加難云々、天仁昇和琴參議不下階直還着之儀、經信卿用此儀云々、依不出仕除籍時綱經季二人云々、氏通大納言懇切申入不被削、但申加叙無其許云々、等納言不觸內辨氣色加端座、起居揖體有若亡、每人屬目云々、頭をはやす

事有資朝臣各無度アマ有なんや如何由示含、恨可知
事由答、夜前言家稱御共料、着位袍出來、實持卿近習
之儀威光高聲喚殿上人可獻櫛由催之、又以藏人召五
節所櫛云々、如此事新儀若爲後例歟、金蓮云、別當病
危由披露、溫氣興盛泣面之由下人等說云々、入夜寒風
猛烈拂雲歟、星猶稀云々、今夜猶依番參宿內裏由聞云
云、

廿五日、甲申、天明、病者今夜聊付寢、今朝亦始觸食事
々々、午時許與心房來見給、聊念誦、今日大嘗會大祝、
檢校參議於朱雀門前行之、依番先參內、賢寂來、

廿六日、乙酉、天晴、雜人說、五節之間於二條町兵部權
少輔經俊車欲融少將雅繼車傍、少將牛童押塞懸寄東
三條築垣、車筒懸經俊車輪畢、融間轉轉前了車於輪落
袖亦破、大貳入道召籠童、懸水勘畢云々、好駿牛勇幹
之人還有其失、不可懸上臈車、尤不當歟、今夜幣宅神
祭、

廿七日、丙戌、天晴、夜前秉燭以前供奉人可參由有催、

不取松明參內、御寢之間、亦深更頭中將於病遲參、右

猶力

大將、中納言隆親、伊平、參議爲家、三位顯平、實持、不
列表、少將雅繼、左有資、實清、少將家定、賴行、通成、右實

蔭、通氏、實光、內侍所定具一人、大理病無增減、來月

二日行政可辭云々、中納言基保昨日進辭狀、被收了、

衛府參議前途此惡道歟、秉燭以後行冷泉東黃門家、門

前入七丈可有裏築垣、棟門可爲四脚、朝勤行幸料、賢寂宅西

可爲裏築垣云々、大祀之間事等自然聞之、辰日親房未

座、依座老密々雖相示、地體依不知總散々、如一獻二

獻推而乍座催、如風俗事亦必依可下殿、內辨乍座を可

仰、无隙而悠紀已訖、主基一獻相示、令下殿之時乍座

と被仰、悠紀祿所有親下殿之路亦相示令着座之處、依

志而不示含、大臣被給祿之時、不動座在床子、主基祿

所亦其路示宰相中將、參議事適他人所役偏扶持、至午

日訪五節所、退出以後事定暗然歟、今度出仕殿上人、

宗平、定平、有資、通氏、爲經、實光、實任、實清、顯氏、

教房、氏通、卯日以後不見、
既通成超不許、通成、雅繼、忠高、顯嗣、雅忠、

嘉祿元年 十二月

四百九十四

御點以親高、午日內事丁亂舞之後領狀、親高、間、
法口姬宮推參、經氏、高嗣、季賴、顯朝、教定、隆兼、經俊、信光、此中實任寅日變改着小忌出仕、午日御前召以後、亦參皇后宮、殿上人其後參姬宮、一修殿、不參鷹司院云々、女叙位事始次第、不知始末、只往年之仰等注付事許授之、其篇目自今朝平詔、手力都護篇目可注出由愁被許諾、來月二日云々、

廿八日、丁亥、朝天晴陰、遲明歸廬、微月僅升、今日參月輪殿被攝政殿御月忌、由示送、遠路寒風難堪歟、

廿九日、戊子、晦、自曉雨降、未後雨止、天猶陰、忌日事昨日

送嵯峨、扶病念誦、日短申疲、經一部阿彌陀經讀誦之間晚鐘已報、酉時都護被注送一紙、雖略取要、披見感悅、即送之訖、窮屈平臥之間、爲繼朝臣來相逢、聞五節之間事、舞妓昇降之間、扶持人々專無所存任意奔寄、總無人以進來、採用取机帳、取茵者不存退出之時、只以見來令取、經俊車事、姬宮推參以後退出之門前也、前後人皆見之被懸破裏築垣、下車放輪橫臥、棟四、經俊立大路中、親房親高入興亂舞之間、袖懸日蔭引落冠、

不覺悟而舞、皇后宮推參、惟忠顛倒不落冠、以西廳北一間爲帳臺、顯朝竟夜於其內摩挲、雅繼近寄檢知之、間離去、經氏參入夜被仰女房、不請辭退、愛イ誤脱アラシ被催付愁步出、遠退而步、人々奇惡雲路之交歟、日當日新由稱元日後取行幸御後、不待再三催存而可領狀之由示之、依行香催參法成寺了、

○十二月大

一日、己丑、雨降、未時雨脚猶濛濛、陽景亦照、見新曆、不聞世事、入夜亦雨降、

二日、庚寅、朝霧深、陽景晴、殿下令參御堂給、扈從有催云々、明後日向吹田、來六日歸京云々、明日以後日次不宜、仍今日初令洗病者之顏、金蓮所示也、

三日、辛卯、霜凝天晴、世事殊不觸示了、

四日、壬辰、朝天快明、曉更赴吹田云々、不聞委事、病者已及三七日、痛泣事猶不休、不似他人歟、今日亦如形令沐浴、其後無增減、

五日、癸巳、欠、朝天快晴、午後兼直宿禰來談、入籠中言談

之次、問壽詞中氏之間、朝議其事先期問答、亦有御直公卿イ應議定、一同式文不限祭主中氏可難由期了、不懸同輕中イ服氏者、上臚勤仕超數輩叙正上了、覺寬法印來之間、宿禰退歸、亦相謁、來八日宮高野御參、中二日可還御云々、侍從宗基抱齋殊重之上肩腫物出來、猶在御所中云々、適念誦日客人相妨及晚云々、心神亦違例、終夜不尋常、

六日、甲午、曙後天色如墨、日夜雨降、風亦烈、心神違例若風歟、終日睡眠甚不快、秉燭以後金吾來、昨日自吹田入洛給了、今日欲參御月忌之間、言家使來、只今爲御使可參、不可出行由示送、無故及晚景來、內大臣殿元三無御所、冷泉家借進哉山被仰云々、連惠無可罷渡所、宿廻可申由答了、參御堂所來云々、吹田相府、金吾、實持、尊實、□轉自御山公雅卿公審供奉云々、忠俊聲君事右府妨止給後、禪室猶許給歟、只稱其身好已遂訖、但此邊未通事不可有由猶命給云々、任官等事總無聞及事云々、

七日、乙未、天曙雪紛々、雨亦即消、已後晴、心神猶違例、誤脱アラフ食事頻獻之乎疼不被嘗、入夜櫻井宮御使後川來傳仰、付畏申之由令申、沐浴之後寒風無術、不相謁、

八日、丙申、天晴陰、金吾居所事、隆承法印安居院房借受云々、今日謁西園寺、歸可申宿所借出由云々、今日令拂蓬屋始煤、八講新大納言、實、大宮中納言、實有、右衛門平、有、權大夫、持、不揮治部一人、永光以邦行香云

云、奉仕殿上人幾多二人尤大切、晚陰兵部卿書狀之次云、前納言賴資卿所勞危急、昨日遁世之由聞示使云云、雖求使者無其仁、

九日、丁酉、霜凝天晴、喚孝弘吊前納信、返事云、自去月十日口乾疾相侵、內瘡亦危急罷成、一昨日遂出家、具問本意由也、今年儒非儒、適眼見史書、公卿二人欠、於今一大納言老老、大儒立外、名字已斷絕歟、可悲代也、如人イ早旦治部云、來十二日准后御告可參春日、女又夫訪乎、無其術由答之、此間大炭、薪庄園評亦喧嘩由衆口噉々、已以無爲歟、久不被遂御物詣被催、南京靜謐不可

嘉祿元年 十二月

四百九十六

三三〇

過之歟、亦不知、不願衆徒之怒有御立、乘輿以後令留給、如先例歟、昨日禪室命月來阿黨勘氣之上、住宅期收公、尤可然、汝須造達家歟由命給、骨肉可申存知之詞如他人如何、故入道左府近年成追從、雖期成一體之詞、聲亞相耻運籠居、猶子三位公俊無吹舉、而公雅下郎實蔭期過絕所重有孫子之覺□前疲于無恩歟、彼門人昨日不參云々、午時許金吾來、女叙位簿公行卿書、昨給、自台記見出、無殊事云々、貞應以後女叙位文書俊職一人管領、書申事今度右沙汰、不令知俊職云々、夜前參內府、迷屋可隨召由示置、時光子男令參殿下給、又示女房了、又於西園寺示言家了、來十四日臨日祭云云、賢寂來、入夜右近盛重來、依輕服日來籠居、十二日以後可出仕、交衆之間存外人重諸人芳心、貫首被下蒙恩言、職事之闕當仁由、男女房許之由自歟、可謂得時運者、六位出仕云至愚云白癡踏薄氷者也、剩有譽者尤可謂吹舉之面目、尤悅思、依厭寒風乍臥隔物言談、御湯殿藏人季宣、其夜之外不參、平申爵、年已五十二及

白髮云々

永光兄也、

十日、戊戌、天陰雨瀟、巳時漸密、去夜大嘗會御調度御覽之後、殿下御退下、深更御裝束、直可參圓座歟、先可候座歟、以盛永申入、直可參進由期仰後亦寬治先候座、先可着公卿座、被仰所存無爲無指失、資季密語第一執筆也、睡眠可無術由存之處、早速大切由被仰、密事には作法こそしとけなき事雖相交、早速殊勝云々、於作法者爭存知哉、感悅無極、除目廿四日二ヶ夜云云、今日政上卿資賴卿、參議闕如、或說云、經通卿亦辭退、露棘之光如電、十一日、己亥、朝天快晴、午後間陰、秉燭以後暗雲急雨暴風、夜深寒月明、十二日、庚子、朝陽晴、西風烈、晝頗宜、入夜雪紛々、病身畏寒風遲出臥內、即及午金吾來、夜前亦自殿以盛長神今食闕如、可構參由被仰下、今源相公俄所勞、有親參政病起退出、菅暇、藤初詣花山未拜賀、即沐浴馳參、上卿亦闕、四條只今被仰可參、私遣使被答只今參由、

相待之間聞公卿參由、源相公也、即起座辨忠高日月數

退出

祇候云々、女叙位事、皇后宮御申文、親子貴所御名之

由御不審、以高嗣被問外記、修明門院御名、仍不被叙、

申文三通依仰置視柳菰上、今夕北白河安嘉門兩御名

可參、關東住山門惡僧交名可召給由、亦雖有恐急請早

速可令下向由示送重時許云々、去秋奉出神與并致神

人不審沙汰之輩云々、梨本五人、青蓮院七人、

十三日、辛丑、夜雪積、後半消、朝天晴陰、下人說云、山

僧雖一人不可出由吐惡言云々、申時許與心房來給、此

病頗安穩之後、太相禪門最愛姬君十二、自廿日危急之

又

間、亦盡心力、殊鍾愛之故被悲歎、於今者亦存命歟、今

日依御神事遇參殿、十八日付事、覽□成群喧々、除目

事未聞、准后昨日御參詣未還御給、若親季、雅繼、言

家、新聲早速出仕歟、

十四日、壬寅、宿雪懸殘、近塞無興、朝天陰、今日賀茂臨

時祭、中將奉行、使隆盛朝臣、左舞人實隆、侍從、公貞、

兵衛佐隆兼、侍從、隆嗣、右衛門忠氏、侍從、資光、侍從、泰定、
敦氏同

右衛門高階行廣、教仲綱、非藏加陪從爲綱朝臣、基邦朝臣、

季綱、懷兼、長說、此冬所作數少、加陪從多云々、朝雨

雪、已時陽景見、晚陰、與心房使者來云、姬君御絕入、依

召馳參、無別御事云々、但殿中亦騷動云々、內々宿聞、

少年姬君抱瘡御邪氣云々、一寢後冷泉隣有火云々、車

雜人追遣間滅了、歸云、二條北洞院西小屋少々燒云々、

十五日、癸卯、朝陽快晴、與心房有書狀、昨日准后令參

吉田賀茂北野給之間、姬君御絕入、依殿仰馳參之間、

御氣色雖令直給、依仰終夜被召冠、只今退下、中將家

可修不動供之由被仰、窮屈無術者、一萬體愛染王造立、

若

親宕、真惠、行賢、行遍、實愾、宣嚴、俊嚴、覺助、成嚴、

今十人被目□十壇法於寢殿被召、夜前供金吾書狀、昨

日未時參內、權大納言家、一人參、使已參、舞人一人、

其後漸參集、右大將、六條大納言、實基、中納言隆親、基

良、資賴、參議爲家、通忠、三位公長、資宗、實持、公長實持

日入之後殿御參御禊、社掌御禊了權大納言奏宣命、付

將、召使給了、庭座等御、頭中將召人、大納言上人、隆納

嘉祿元年 十二月

四百九十八

三三二

言、二宰相着壁下、同召使、參各着座一献、同頭瓶子、

盛重陪從、少將能定、二献權大納言、瓶雅忠、衡重、兼親三献

大將、瓶範氏、大將直被着殿上、陪從二献家清、三献顯氏、置挿頭螺盃高坏、定平

家定、藏人高嗣、次挿頭、大將亦進被取、伯不取早出、

同頭召人、權大、大將爲隆親、爲家、通忠卿、不下着御、

今度不出御、亦召使、不下御遲參、依姬君御事也、還立、

隆納言權大夫云々、伯昇沓脫揖、今日內府御着陣可扨

從云々、未斜亦不意御着陣云々、退出可有出立、不知其

儀云々、答云、出立事總不見及、今日亦必及暗歟、不可用

意、午時許典侍參內裏、又參一條殿、入夜歸屋、相公儀

會、貴人見參、二品亦被參、元三御陪膳典侍關如、一條

殿弟姬君疱瘡之後御邪氣、與心房被奉卿、亦大姬君御

疱瘡之後如腫物事、日來御煩適減氣、已及日沒內府令

出給、前聲聞之云々、早案府令、開文盛重主殿司衣服謹

責由不意賜桑絲一疋、今日禪室被參內云々、

十六日、甲辰寅時月蝕正見、帶蝕入山、辰時朝天殊晴、辰時

許金吾來、少將相具、明後日白地物詣、昨日巳時由有依御車

闕如脫陰、被借出實有卿云々、扨從隆納言、資納言、三

人着陣給間、史掌燈、御退出、盛長仰可止由、親尊以公

審子爲翌、辭法勝寺讓公審、一昨日已被補了、世以驚云

々、公雅卿已稱元三料借所々毛車、納言所不被任參議

上卿可加歟、執筆昨日依之有無術故障、構得者可參由

申了、通忠卿可勤由稱云々、隆納言頗說不可信受事歟、

新舞人隆兼忠氏不具雜色、泰定輕服、侍從忠兼勤之

云々、今日聞、大嘗會挿頭花家良卿、通忠卿、如他人挿

右、通方卿基良卿挿左、此事不可替、人各相替由示親

俊、其事甲前其大納言被參之次、被挿左申有御興言、於

御前兼書々狀遣中納言許、挿左御存知如何由也、返事

云、可挿右之由存之間上通方左、仍與座人如此歟之由

忽成案云々、臨時祭日、大納言被語云々、伯立沓脫揖、

隆納言取挿頭、使、隆嗣、教氏三人動座、隆兼入夜行冷

泉、喚賢寂示今夕聞及事、即以賢寂進教訓、夜中令運

渡遣所女房局、其人檢知訖、可遣他所由蒙成敗之詞、返

預持歸由來告、賢寂已叶愚意、少時歸蓬、于時停午月

前也、

十七日、乙巳、朝知天遠晴、長氏催年始御簾、一問、可調進由示付賢寂了、南僧綱參、申入幡正權別當流罪事云々、不聞其間事、是國家只國家滅亡之期歟、

十八日、丙午、朝陽晴、午後俄沉陰、即晴、典侍明後日參社、依始精進不參此直堂、不聞世事、金吾參社馳歸、今夜參東一條院御佛名、其次可來由示送、戌終許

束帶來、昨日槐門禪室於今度者不及疑給由示給、亦不

被反掌者、頗似可馮、彼力伺後亂勢二闕、經通、非保、微望家光

還着、參議三人社任、本一闕、亦被、親房歟、公雅、公基各被申請得

分歟、今一人右筆器可被任歟、所推在大丞歟、二上事

堪否難測知、當時禁中中將一人出仕、無頭辨五位只高

嗣一人云々、不可知世間之理非、有一身之得功可爲掌、乾イ

即參佛名、盛進猶爲藏人奔走、有頭忠康三人同事參詣

云々、天臺座主昨日辭退、被送印鑑、新補亦其仁不聞

云々、今夜僧事文付有定、雪月催與云々、明日欲渡安

居院、重案之、三郎童歲內有密々首服之志、姬君可有

魚食事、如此事進、服僧房同忌之內尤可憚歟、仍不願狹少、元三之間同宿此蓬屋哉、由此夕始案出由云々、於老僧者朝夕出仕、無不審事、只一身之慶也、出家女房存知者不測知由答之、於屋イ

十九日、丁未、宿雪寸餘、朝陽晴、亦雪興、依禪室之召馳出了云々、興心房來給、僧事聞書盡注裏、小姬君御邪氣之間被召籠祖公云々、今夜內御佛名、

廿日、戊申、天晴、霜凝、禪室參詣日吉一宿、金吾猶不可

來此家云々、女房等嫌狹少歟、未時許來、亦可居賢寂宅

云々、夜前參法勝寺、大乘合、第三日、親俊卿只二人着座、次參

御佛名、一二御導師訴申僧事、最未超、上耶、可給可被叙御教

書由申、季賴以書狀申殿之間、及夜半蒙裁許、被始事、此

間隆親卿着陣、圓宗寺法花會尊勝最勝寺灌頂、觀音院

灌頂僧名定、辨兼隆欲書、可遲々由依相讓又書之、佛

名公卿內府、大納言家良、通方、高實、中納言隆親、資

賴、參議爲家、權大夫出行香、宗平、有教、有中將有

資、家定、能定、立弓場砌、口文助、之列、勸孟將又同、右將出仕

嘉祿元年 十二月

五百

三人、有教、定平、雅繼、爲繼之外四位不參、兩勘々由
範氏等取火櫃、東一條御佛名、親房卿、其夜中納言殿二位
御拜賀、親房親俊
之次、忠高、顯朝奉行、行、範保、長氏、能定參云々、

今御方遠行幸公卿三人、實有、爲家、實持、冷泉萬里小
路、殿下又御西山善惠房之由也、除目執筆通忠卿領狀
之、主殿内々仰可勤山被仰云々、忠俊執聲宅行向、侍
雜仕右府被迫放、禪室以長衡可被免由示給、於此一事
者不可隨仰山被申云々、禪室如當時者、一定由昨日雪
脱アラン
中蓋之仰命給、頗有外聞之恐、公審以麻士、人多聞云々、顯參法印長
病終命、明口法印悲泣云々、南京衆徒頻有蜂起之聞云
云、定及大事歟、乘燭以後宿賢寂宅、一寢之後過夜半
金吾來、脫束帶向方違所云々、隔物聊問答、依御寢夜
深公卿三人次將七人還御、亭主可供奉、實持卿祇候、
二人退出、殿下御風氣無御方違、春日御櫛明日御入洛
由一定云々、立春後朝衆徒狂亂未聞有事歟、京官除目
無故及除夜、遂不被行歟、今夜觀音院灌頂大藏卿云々、
書狀之次有辭退之志由、今夕示送、已可被召返歟、維

月只如夢、倭子之遊何爲哉、寒月清明而夜靜、無風雪
聞曉鐘歸廬、

廿一日、己酉、朝天快晴、參社之輩早速歸來、世間事以
書狀奉間與心房、已一點入坐春日御櫛不奉移之故、明
日直御入洛由定乘馳申之間、未時許御方違止了、自乘
燭以前御腹張令苦痛給、殆危急之間寸分不賜暇、終夜
祇候御前祈念、今朝卯時御腹痛頗落居、亦令下結、可
行法由賜暇時程罷出也、宗清昨日申狀、可申請被召察
神人、今度下手神人可召進、早可遣南都、因幡國辭退
申由也、定高卿先可遣此狀於南京由申、昨日未時許召
頭辨令書下、其返事未到、此曉武士向宇治了、祇候檢
非違使等可依御所邊由被仰云々、親高非和解之儀、只
禪室平塞□□、被補公審、前大僧正御房泣雖申給、申
不及之由被仰、深成怨鬱給云々、雖不始今事、世間、只禪
室之任意歟、供物馳走者之外無有怨懣憾事、人之悲歎
無盡期云々、諸苦所因貪欲爲本、法華之所說也、但親高
年來右府家中、萬事奉仕奔營之由金吾所語也、今日不

聞兩方事、

廿二日、庚戌、凶會、朝天快晴、尋中興心房、昨日申時御櫛木

出御、但猶、喧々、御風氣自申時又令發給、終夜供御前云々、

已時亦以使被示、御櫛已御木津云々、今年除目定不被

行歟、鴨社司亦有訴訟云々、助通被處殺害同意□□、

司一同書記請子孫永不可令補社司由議定了、今度關

被加助通子之間、他社司禰宜已下皆可解其職由申、仰

云、年來夙夜我家在侍所爭不補哉云々、雖勘發可恐神

尉之由一同稱之云々、北野盜神銳稱新造、法師亦募件

盜之功以子叙法橋、禪室被執申事云々、每社每寺訴訟

太不便、夜漸深金吾來、及曉頭參殿之間、殿下已御參

內訖、御櫛發向事可有公卿議定云々、仍參禪室間頗彼

時刻、今朝武士已向了、爲川意分手八幡了、宇治手引

橋可在橋東山雖被仰、可向山已被仰下訖、引橋若聞向

八幡由者、無其路而可失便宜、渡橋在一故以西若聞八

幡合戰者、取籠于中央可摧破、去神山衆徒雖有放失罪

神、承仰向陣之上牢不遂合戰哉山稱之、近日守護武藏

國稱黨物、無是非懸鋒之輩不被拘制法云々、宗清進宮

寺解狀、其狀至極之道理也、可申請最初被召禁神人、

因幡國爲宗清中沙汰、其死去使此奉、被寄宮寺之條猶不可叶神慮、急返

上向大炭庄、所殺害神人之薪庄神人片野馬、九宗成、早可召進

可被行罪科由云々、於南京申狀者專無其理、久可流宗、清云々、圓

經法印密々申、去秋憑惡徒等可被鎮沙汰事、內々申入

之處、長房入道衆徒事我可語宥由申談、殊令加增惡

行、遂如此、偏彼入道所爲由、別當辭退印鑑、入山寺給

了、圓經亦以籠居云々、山門事去神□井以仁榮爲使被

仰定高卿、座主以公性亦被仰、是兩方和合所被示合

也、惡事偏被、懸花院、禪室亦依殿仰、始末子細以隆承之書進其

狀殿下給、定高遣關東時、定高以隆承狀以任義公性等

意趣在關東、因茲欽召禁在多青蓮院泰慶揚鞭下向關

東了、自殿被尋仰之處、隆承狀急忙之間取落由定高

申、仍禪室以其狀被遣關東、返事此間到來、二條中納

言被示落隆承法印申狀、先度所承已以水火、早可被尋

決由申云々、於禪室者猶爭歲內不被行除目哉命給云

嘉祿元年 十二月

五百二

三三六

云、猶肥滿藏人、御神明日可御宇治由有其聞、孫子吳起之軍法若不被拘制止者、惡徒之滅亡及大事歟、尤以不便、

廿三日、辛亥、朝天陰、隣柳霞登、庭松鶯啼、一昨日彼行內侍所御神樂、無出御、殿無御參、拍子資季顯氏、笛親忠、篳篥敦

定、琴有資云々、頭中將奉行、老藏人此間出仕、其夜亦稱母死由退出云々、去夜事問前納言、返事云、去夜於

御直廬被定八幡春日等訴事、右相府、土御門、兄、六條家光、新實、菅相公等參入、議定之詮欲行罪科、於宗清

者宗廟祠官、無其例、隨亦長治光清猶有造意歟、然而明時之聖斷猶不被遂行罪條、今度宣清已如無造意、

以何可被行科決哉、於此條者人々一同、欲被行大明神御歸座、亦衆徒之鬱念如何可令散哉、三々條訴宗清流可被付新庄於南都事、可被禁獄下手人事、無裁許者不可叶歟、彼是之儀難給之

由亦一同、但先明旦被立勅使、且被謝申神明之影向、且可被誘衆徒之愁訴歟、其上下手人、宗清、可被行罪科

云々、此條亦可然由各被申、而大衆可承引之條必然

歟、御神無爲還御、宗廟可安之趣無大奇由被定申了、先隨御使左右退可有祕計由有沙汰、各退出云々、終日不見陽景、

廿四日、壬子、終夜今朝雨降、昨日御使左少辨兼高朝臣、下向云々、除目延故可造宮申頭辨、昨日雖示于今無音云

云、已時午時許告延引由云々、於今者定不被行歟、終日雨滂沱、

廿五日、癸丑、減日、夜星見、朝雲分、朝陽晴、今日頭辨亦爲御使下向云々、馬允某禁獄云々、子細不聞及、午時許信

實朝臣來次云、件下手去夜神人奪取登御山訖、彌增衆徒之怒歟云々、土御門大納言說也、此間事匪直也事、始終定爲大事歟、

廿六日、甲寅、凶合、陽景晴、朝霞深、爲既頻歌、有春氣、午時許金吾來、風病更發不出仕、夜前參右府、無聞得事、明年

三月公卿勅使、六條大納言已承之、是只悠紀國庄々重滅亡之外不可他要歟、雜人之說、御神昨日出木津令着丈六堂給由難有云々、尋常之說總無所云出、頭辨夜前

可歸、于今無音之山家人等今朝稱之、金蓮只今雖參禪室轉棄之間不奉謁、與尊實法印宜退出云々、世間儀式不過此分限歟、拜禮御出扈從示子□、依之先例□家嫡給、遣人無此事歟、今度自當日歡娛尤可然、依分配可參尊勝寺灌頂云々、暗夜無益出仕歟、南都濫望之內菩提山僧正信圓、謚號事有云々、尤可被裁許歟、金蓮於武士之宅聞及說、自昨日申時衆徒在平等院門前、武士引橋夾河陣列東西岸、衆徒來加如雲云々、

廿七日、乙卯、朝天沍陰、已後雨降、夜猶不止、不聞世事、已時許典侍參法花堂、權大夫殿相具申時歸參訖、頭辨亦向宇治云々、不聞其卷起、臨昏與心房來給、被仰衆徒三々條事、春日如賀茂八幡可被立臨時祭事、春日奉幣使可爲公卿事、菩提山大僧正謚號事云々、此上不承伏者別謀叛歟、

廿八日丙辰、朝雲晴、頭辨昨日申時歸、衆徒全不承伏彌以雲集云々、是亦不知定說、

廿九日、丁巳、朝陽快晴、紅梅纔開、黃鸝頻轉、閑地桑門

不知事之艱難、只悅春景之早速如何、宇治河水風吹舉幕、甲冑蒙霜雲面皆被裂歟、頭辨憶病不及問答逃歸歟云々、今晚新中納言亦下向山金吾示送、今日三郎重密々令元服、姬君魚食云々、亦密々所調檳榔新車令立此宅、以舊物裏、未時許與心房書狀、昨日物詣只今罷歸、禪室定納言被候御前、未入見參、無承及事、但女房說、三々條仰衆徒更不承諾、奉捨御櫛、衆徒可歸由相議云々、

卅日、戊午朝陽晴陰、濫入法印書狀云、一昨夜實瑜大僧都書置數通書狀、晦跡逐電、所領二所讓于定惠阿闍梨、暫住山寺後可參高野由書之、法器有其譽、官途世路無其恨、發心之由來更不測知云々、即魔界之所爲歟、四位侍從公仲朝臣慈母、隆賴朝臣次女子姪爲高野御籠人、宿運無限猶々可奇、未時許與心房示給、衆徒事彌興盛無申限、拜禮節令皆止歟云々、是即天下之魔滅歟、適給暇歸本院由云々、此外無音信之人、入夜令修鬼祭、夜天有陰、星纔見、黃昏上林奉與心房蓬屋少

嘉祿元年 十二月

少雖改疊不替翠簾、亥時許金吾適來、終日謁禪室、亦無聞出事、資賴卿以舟渡雖在平等院釣殿、宗清配流之外論言不可承由云々、遇寒風難堪之間、歸東岸、在船中以使申此由、未歸京、衆徒相具番匠雖欲渡橋、武士不令渡、不可奉融由被仰下上不可融、依有禁制、不及弓箭劍戟、依不可融只可突入河水、是全非殺害之儀、水棟人何不存命哉由示合之間慙歸了、其勢多由雖有巷說、實正不幾云々、是覽通公卿等之門徒所爲云々、長房、定高内々和合之輩也云々、殿下元三之間慙被行事不可有云々、於内裏者如節會定不可然歟、但氏公卿不可出仕云々、右府之存知如此、身亦不可出門云々、予歸了、

明月記第三終

山田安榮

伊藤千可良校

文傳正興

補遺

建仁二年

○十二月

十九日、天晴、夕雨雪、日入之間宮廻、夜通夜、廿日、微雨散零、密雪下、親成宿禰來談、入夜宮廻、通夜、皇太后宮參詣給云々、今年七十、后位長命不似短命、一門盛備力盃議歟、

廿一日、天晴、日入之程宮廻還宮、通夜如例、

廿二日、雨降、入夜宮廻、即通夜、

廿三日、天晴、日入之程宮廻、右中將被參會一宿云々、

廿四日、雪降、入夜甚雨、早旦登坂、今度始登、入夜奉幣通夜、

廿五日、夜雪積、朝猶降、晚出歸京、關山風雪雖難

堪、非無興、午時許參院、無人、例御幸可有之間人皆競出云々、逢忠綱、所勞初出仕之由示付退出、夜前有僧事云々、未見聞書、傳聞僧正三人、實全、長利嚴、覺實云々、自餘不開得、

建保二年

○八月○本編第二卷三百五十四頁八月廿七日ノ條、參長押下ニ接續ス

二十七日、先是仰云、今度歌殊宜書拔之、或十番或廿餘番、別有結番、同可讀上、前後如何、予申云、先被讀上書拔後、可被披講大卷歟、大卷定移時刻之後、更被講撰歌者、頗有糝墮歟、衆議皆同、又叶寂慮、仍先令講十番、是爲叶御意歌計略也、殊爲當座之要其歌誠宜、各賞瓶、次被講廿六番、十番又被結他歌也次被講大卷、八十番秀逸三度結番各評定、此結番偏決寂慮、人不見之、神筆御本之間無相同人、結番之歌太同科也、仍大略被定持、餘與更不

明月記補遺 建保二年 八月

盡、天氣快然、明日連歌事等被仰定、戌刻計退出、
廿八日、戌終許參馬場殿、出御訖、各着座、大相國被
儲懸物、太過差也、積色々物、其後積紙、又以平裏置每人數、其前
令置物、不落料云々、但賦物太以難、諸人不得風情、
上句反讀、總令松要難略之體也、下句三字中略云々、假令ツマキ
月マカキアキ、○下文ハ本編第二卷三百五十四頁八月廿七日ノ條、之體也ニ接續ス

補
遺
終

明治四十五年二月廿五日印刷

(明月記第三奥附)

明治四十五年二月廿九日發行

非 贅 品



編輯
兼
發行
者

早 川 純 三 郎

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

國書刊行會代表者

印
刷
者

高 橋 赤 次 郎

東京市京橋區新榮町四丁目三番地

印
刷
所

國書刊行會第一工場

東京市京橋區新榮町四丁目三番地

發
行
所

國 書 刊 行 會

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

齋部廣成 撰

古語拾遺

明治三年（一八七〇）序刊本

據明治三年（一八七〇）
序刊本影印

古語拾遺新刻本序

字內之書可稱經者有

神典而已矣所謂詩書易禮及梵洋諸籍皆各道其所道或亂

皇化或害大倫豈可謂之經也哉夫經也者萬世不易之名而世之稱經者其實不經不可以一日行於世請嘗論之道之本原出於天君道體天臣道則地天地易位之事終古未

○古語拾遺序

一

嘗有則

君臣易位之道亦斷斷乎不可有也父子之道天性也譬如瓜之生瓜桃之生桃桃瓜傳氣父子傳統常也黜華之迹果可遁則桃瓜亦可移性矣人見生類之出乎父而不知生乎母以同姓不婚爲天地之常經夫父之貴於母則有焉父母之於子則恩義均耳乃貴父賤母而夫婦之義斃矣嗚呼三綱旣絕其經

何在也且梵之捨身洋之贖罪其言謬妄其道年戾世固有具兩眼而知日月者何煩重石丸之喋喋也恭惟

皇祖產靈大神創造天地以立君臣以創父子以設夫婦以爲萬世綱常其妙德妙道妙化妙工固不可思議而言辭之孕道其妙用亦出乎其

口授確乎不可疑焉如國造之訓國奴臣隸之

○古語拾遺序

二

譯家之子人民之稱大御寶

天皇之解紛尊年字之約田寄苟悟其義則臣道可立民情可治

君職可舉

神意可窺以言近則修身齊家之教存焉以言遠則治國平天下之法備焉自餘之辭千言萬語已論梵漢遠西之事網羅宇宙包括顯幽混混乎不可知其畔涯也由此言之則漢

學可廢梵學可廢洋學亦可廢也雖然我之所謂廢者非禁講習之謂乃不以爲經也經者

神典也異邦之書特其洋脚耳而世之治非經之經者認末稱本抱石呼王不亦惑之甚乎明治己巳之秋

詔設大學於東京舊習一掃學弊盡革表

神典爲大學之大法今茲春三月平田先生將

○古語拾遺序

○三

刻古語拾遺讀本囑重石丸施訓點重石丸不以不敏而辭之及其卒業謹演

明詔之意題之卷首庶幾使天下之學者知此書之果爲經也

明治三年庚午春三月

京都大學教官渡邊重石丸拜撰



附言

一書中字有難讀者有可不必讀者如未開闢之夫竊按天

脫地字而後人遂改天爲夫亦未可知而諸本皆書夫字今姑有疑以俟後考奉爲日神之

一古言既曰勅曰云云而結語又曰申給伎是定格也然

今施訓點有不必然者以從簡也看者恕之

一此書有不可不漢讀者故其施訓點便宜從事不必拘

常法是先生之命也然如所謂弓爾乎波比之讀漢

籍則大加鄭重欲使蒙童知

皇國言語之道至嚴也

○古語拾遺附言

一

一天地剖判章出雲圖下忌部二字據元元集補之

一石窟章思兼神語中穀木種殖之恐當作殖穀木種而

之字極衍何則上文既曰種麻下文曰殖穀木種勢

不得不然且麻之爲種子也固矣而穀亦爲種子故

曰已上二物一夜蕃茂可以想見其景象矣蓋此書

立言行語固既以漢文爲主如使穀木種殖之五字

一氣連讀則文義遂爲不穩且下文

神武天皇章曰仍今天富命率日鷲命孫求肥饒地殖

麻穀種則其事固既與此章相同文義亦固與此章

相應亦可以徵其殖穀木種矣竊按穀木種殖之五

字蓋後人傳寫之次穀上脫殖字而後人又以意補

殖之二字於種下遂致使文義齟齬耳又按麻穀均曰種麻穀曰殖穀木種蓋麻之爲種也論已而穀者

一初生段唯稻曰稻種以分他穀同例故今重石丸謹

加訂正以質識者

一同神語中所謂和衣四字蓋分註誤入本文者也不然

則前後不相連接故今細書以倣他註之例

一天孫降臨章借問之借一本作往似是今從之

一磯城瑞垣朝章男弭之間補弓字熊鹿之間補皮字者

據諸本也

○古語拾遺附言

一長谷朝倉朝章秦機織之緣也矣七字一本作秦機纏

根源之緣也義理頗覺明暢今從之

一難波長柄豐前朝章白雉誤作白鳳今推事實訂之

一猶懷祕介推之恨一本無祕字爲穩故除之

一所遺四也章所御坐之所不穩一本作可從之

一大地主神章以蕙之以蓋茲誤而以蕙又倒蕙茲也且

如分註曰古語以蕙曰都須以字全然不穩今亦私

訂正之以質識者

一此書諸本字頗有異同而中有不可不改者有可不必

改者今僅改其尤者餘悉從舊本。

一先輩之評此書其見甚卑而其施訓點幽莽可笑而今重石丸得賴故先生餘蔭以拜青天白日豈非幸之甚哉但重石丸之施訓點其幽莽母乃亦倣尤乎而今先生之命遂不可辭所以黽勉從事也。

一或詰予曰古稱

皇罔曰言靈罔者以其主言辭也今子施訓點何不法美豆櫻根大人訓

日本紀而反倣俗儒讀我籍之爲也曰此書之爲體以漢文爲主而古言古意亦自在其中則大道無不可

○古語拾遺附言

三

明之理矣何必拘拘常法以責難乎童蒙乎童蒙喜簡而不喜煩樂易而不樂難若夫欲知古言之純正者則有祝詞式正訓古訓古事記萬葉集等在焉亦已足矣世之庸人俗子動輒爲非漢學則不足知文字也然此書以漢文記故事其施訓點亦從漢讀之法以成

和魂漢才之人以籍庸人俗子之口則所謂一舉兩得不亦可乎是先生之志也。

一此書之尊次祝詞式古事記

神代紀固矣聞故氣吹舍先生嘗欲施訓點以公於世。

不果而逝然則今先生之命卽故先生之志也今重石丸謹表此書以副三典者欲以繼故先生之遺志也讀者請察焉。

一故先生嘗曰古人云讀諸葛孔明出師表不隨淚者其人必不忠予謂讀忌部宿禰古語拾遺不感激憤愴以起志者其人必空空無腸學者也耳嗚呼先生自言既已如此而其尊崇之極遂尸祝以爲學神學者其可不原先生深意之所在乎

庚午三月

重石丸再識

○古語拾遺附言

四

古語拾遺

從五位下齋部宿禰廣成撰

蓋聞上古之世未有文字貴賤老少口口相傳前言往行存而不忘書契以來不好談古浮華競興還嗤舊老遂使人歷世而彌新事逐代而變改顧問故實靡識根源國史家牒雖載其由一二委曲猶有所遺愚臣不言恐

○古語拾遺

一

絕無傳幸蒙召問欲據實憤故錄舊說敢以上聞云爾

一聞夫開闢之初伊弉諾伊弉冉二神共爲夫婦生大八洲國及山川草木次生日神月神最後生素戔鳴神而素戔鳴神常以哭泣爲行故令人民夭折青山變枯因斯父母二神敕曰汝甚無道宜早退去於根國矣又天

地剖判之初天中所生之神名曰天御中主神次高皇產靈神古語多賀美武須比是皇親神雷伎命次神

皇產靈神是皇親神雷彌命此神子天兒屋命即中臣朝臣祖也其高

皇產靈神所生之女名曰栲幡千千姬命天津彥尊其男名曰天忍日命大伴宿

之母也阿波國忌部祖也又男

名曰天太玉命齋部宿禰祖也太玉命所率神名曰

天日鷲命阿波國忌部祖也手置帆負命讚岐國忌部祖也

○古語拾遺

二

彥狹知命紀伊國忌部祖也櫛明玉命出雲國忌部王作祖也

天目一箇命筑紫伊勢兩國忌部祖也於是素戔鳴神欲

奉辭日神天照大神昇天之時櫛明玉命奉迎獻

以瑞八坂瓊之曲玉素戔鳴神受之轉奉日

神仍共約誓即感其玉生天祖吾勝尊是以

天照大神育吾勝尊特甚鍾愛常懷腋下稱

曰腋子今俗號稚子謂和可古是其轉語也其後素戔鳴神奉

爲日神行甚無狀種種凌侮所謂毀畔古語阿波

知埋溝古語美曾字女放樋古語斐波那知重播古語伎麻伎刺

串古語久志佐志生剝逆剝屎戶如此天罪者素素

之節竊往其田刺串相爭重播種子毀畔埋溝放樋當新賞之日以屎塗戶當織室之時

逆剝生駒以投室內此天罪者今中臣祓詞也蠶織之源起於神代也于時天

照大神赫怒入于天石窟閉磐戶而幽居焉

爾乃六合常闇晝夜不分群神愁迷手足罔

○古語拾遺

三

措凡厥庶事燎燭而辨高皇產靈神會八十

萬神於天八湍河原議奉謝之方爰思兼神

深思遠慮議曰宜令太玉神率諸部神造和

幣仍令石疑姥神天糠戶命之子取天香山

銅以鑄日像之鏡令長白羽神伊勢國麻績祖今俗衣服

謂之白羽種麻以爲青和幣古語爾令天日

此緣也此緣也鷲神以津咋見神殖穀木種以作白和幣是木

綿也已上二物令天羽槌雄神倭文遠祖也織文

布令天棚機姬神織神衣所謂和衣古語爾伎多倍令櫛

明玉神作八坂瓊五百箇御統玉令手置帆

負彥狹知二神以天御量大小斤雜器等之名也伐大

峽小峽之材而造瑞殿古語美豆能美阿豆可兼作御

笠及矛盾令天目一箇神作雜刀斧及鐵鐸

古語佐那伎其物既備掘天香山之五百箇眞賢

○古語拾遺

四

木古語佐禰居自能禰居自而上枝懸玉中枝懸鏡下枝

懸青和幣白和幣令太玉命捧持稱讚亦令

天兒屋命相副祈禱又令天鈿女命古語天乃於須

女其神強悍猛固故以爲名今俗強女謂之於須志此緣也以眞辟葛爲

鬘以羅葛爲手繼羅葛者比可氣以竹葉飲憇木葉

爲手草今多手持著鐸之矛而於石窟戶前

覆誓槽古語宇氣布神約誓之意舉庭燎巧作俳優相與

歌舞於是從思兼神議令石疑姥神鑄日像
之鏡初度所鑄少不合意是紀伊國次度所
鑄其狀美麗是伊勢大神也儲備既畢具如所謀爾
乃太玉命以廣厚稱詞啓曰吾之所捧寶鏡
明麗恰如汝命乞開戶而御覽焉仍太玉命
天兒屋命共致其祈禱焉于時天照大神中
心獨謂比吾幽居天下悉聞群神何由如此

○古語拾遺

○五

歌樂聊開戶而窺之爰令天手力雄神引啓
其扉遷坐新殿則天兒屋命太玉命以日御
綱今斯利久迷繩廻懸其殿令大宮賣神侍
於御前是太玉命久志備所生神如今世內
也令豐磐間戶命櫛磐間戶命二神守衛殿
門是並太玉命之子也當此之時上天初晴衆俱相見
面皆明白伸手歌舞相與稱曰阿波禮言天晴也

阿那於茂志呂古語事之甚切皆稱阿那多
能志言伸手而舞今指樂事阿那佐夜憇竹
之聲謂之多能志此意也爾乃二神俱請曰勿
復還幸仍歸罪過於素戔鳴神而科之以千
座置戶令拔首髮及手足爪以贖之仍解除
其罪逐降焉素戔鳴神自天而降到於出雲
國簸之川上以天十握劍其名天羽羽斬今
在石上神宮古語

○古語拾遺

○六

大蛇謂之羽斬八岐大蛇其尾中得一靈劍
其名曰天叢雲大蛇之上常有雲氣故以爲
國遇野火難卽以此劍薙乃獻上於天神也
草得免更名草薙劍也
然後素戔鳴神娶國神女生大己貴神古語
智神武遂就於根國矣大己貴神一名大物主
主神一名大國魂神今大和與小彥名神高
國城上郡大三輪神是也
產靈尊之子其戮力一心經營天下爲蒼生
通常世國也

畜產定療病之方又為攘鳥獸昆虫之災定禁厭之法百姓至今咸蒙恩賴皆有効驗也天祖吾勝尊納高皇產靈神之女栲幡千千姬命生天津彥尊號曰皇孫命天照大神高皇產靈神二神之孫故曰皇孫既而天照大神高皇產靈尊崇養皇孫欲降為豐葦原中國主仍遣經津主神是磐筒女神之子今武甕槌神是甕速日神下總國香取神是也武甕槌神之子今常陸

古語拾遺

七

國鹿嶋驅除平定於是大己貴神及其子事代主神竝皆奉避仍以平國予授二神曰吾以此予卒有治功天孫若用此予治國者必當平安今我將隱去矣辭訖遂隱於是二神誅伏諸不順鬼神等果以復命于時天祖天照大神高皇產靈尊乃相語曰夫葦原瑞穗國者吾子孫可王之地皇孫就而治焉寶祚

之隆當與天壤無窮矣即以八咫鏡及草薙劍二種神寶授賜皇孫永為天璽所謂神璽也予玉自從即敕曰吾兒視此寶鏡當猶視吾與同牀共殿以為齋鏡仍以天兒屋命太玉命天鈿女命使配侍焉因又敕曰吾則起樹天津神籬神籬者古語比茂呂伎及天津磐境當為吾孫奉齋矣汝天兒屋命太玉命二神宜持

古語拾遺

八

天津神籬降於葦原中國亦為吾孫奉齋焉惟爾二神共侍殿內能為防衛宜以吾高天原所御齋庭之穗是稻穗也亦當御於吾兒矣宜太玉命率諸部神供奉其職如天上儀仍令諸神亦與陪從復敕大物主神宜領八十萬神永為皇孫奉護焉仍使大伴遠祖天忍日命帥來目部遠祖天穗津大來目帶仗前驅

既而且降之間先驅還白有一神居天八達之衢其鼻長七咫背長七尺口尻明曜眼如八咫鏡卽遣從神往問其名八十萬神皆不能相見於是天鈿女命奉敕而往乃露其胸乳押下裳帶於臍下而向立咲噓是時衢神問曰汝何故爲然耶天鈿女命反問曰天孫所幸之路居之者誰也衢神對曰聞天孫應

○古語拾遺

○九

降故奉迎相待吾名是猿田彥大神時天鈿女命復問曰汝應先行將吾應先行耶對曰吾先啓行天鈿女命復問曰汝應到何處將天孫應到何處耶對曰天孫當到筑紫日向高千穗穗觸之峯吾應到伊勢之狹長田五十鈴川上因曰發顯吾者汝也可送吾而致之矣天鈿女命還報天孫降臨果皆如期天

鈿女命隨乞侍送焉天鈿女命者是猿女君姓今彼男女皆號爲猿女君此緣也是以群神奉敕陪從天孫歷世相承各供其職天祖彥火尊娉海神之女豐玉姬命生彥瀲尊誕育之日海濱立室于時掃守連遠祖天忍人命供奉陪侍作帚掃蟹仍掌鋪設遂以爲職號曰蟹守今俗謂之掃守者彼詞之轉也逮于神武天皇東征之年大伴氏遠

○古語拾遺

○十

祖日臣命帥督將元戎剪除兇渠佐命之勲無有比肩物部氏遠祖饒速日命殺虜帥衆歸順官軍忠誠之効殊蒙褒寵大和氏遠祖椎根津彥者迎引皇舟表績香山之巔賀茂縣主遠祖八咫鳥者奉導宸駕顯瑞菟田之徑妖氣旣晴無復風塵建都橿原經營帝宅仍令天富命太玉命之孫牽手置帆負彥狹知二

神之孫以齋斧齋鉏始採山材構立正殿謂所

底都根宮柱布都之利立高天乃原爾搏風高之利氏皇孫命乃美豆乃御殿下造奉

仕故其裔今在紀伊國名草郡御木鹿香二

鄉古語正殿謂之鹿香採材齋部所居謂之御木造殿

齋部所居謂之鹿香是其證也又令天富命

率齋部諸氏作種種神寶鏡玉矛盾木綿麻

等櫛明玉命之孫造御祈玉古語美保伎玉言祈禱也其

○古語拾遺

○十一

裔今在出雲國每年與調物貢進其玉天日

鷲命之孫造木綿及麻并織布古語阿仍令

天富命率日鷲命之孫求肥饒地遣阿波國

殖穀麻種其裔今在彼國當大嘗之年貢木

綿麻布及種種物所以郡名為麻殖之緣也

天富命更求沃壤分阿波齋部率往東土播

殖麻穀好麻所生故謂之總國穀木所生故

謂之結城郡古語麻謂之總也今為阿波忌

部所居便名安房郡今安房國是也天富命即於其

地立太玉命社今謂之安房社故其神戶有

齋部氏又手置帆負命之孫造矛竿其裔今

分在讚岐國每年調庸之外貢八百竿是其

事等證也爰仰從皇天二祖之詔建樹神籬

所謂高皇產靈神皇產靈魂留產靈生產靈

○古語拾遺

○十二

足產靈大宮賣神事代主神御膳神已上今

也奉齋櫛磐間戶神豐磐間戶神已上今御門

生嶋是大八洲之靈今坐摩是大宮地之靈

也生嶋巫所奉齋也日臣命帥來目部衛護宮門掌其開闔饒

速日命帥內物部造備矛盾其物既備天富

命率諸齋部捧持天璽鏡劍奉安正殿并懸

瓊玉陳其幣物殿祭祝詞其祝詞文在於別卷次祭宮

門其祝詞亦在於別卷然後物部乃立矛盾大伴來目

建仗開門令朝四方之國以觀天位之貴當

此之時帝之與神其際未遠同殿共牀以此

爲常故神物官物亦未分別宮內立藏號齋

藏令齋部氏永任其職又令天富命率供作

諸氏造作大幣訖令天種子命天兒屋命之孫解除

天罪國罪事所謂天罪者上既設訖國罪者國中人民所犯之罪其事具在

○古語拾遺

○十三

中臣爾乃立靈時於鳥見山中天富命陳幣

祝詞禋祀祀皇天徧秩群望以答神祇之恩焉

是以中臣齋部二氏俱掌祠祀之職媛女君

氏供神樂之事自餘諸氏各有其職也至于

磯城瑞垣朝漸畏神威同殿不安故更令齋

部氏率石凝姥神裔天目一箇神裔二氏更

鑄鏡造劔以爲護身御璽是今踐祚之日所

獻神璽之鏡劔也仍就於倭笠縫邑殊立磯

城神籬奉遷天照大神及草薙劔令皇女豐

鍬入姬命奉齋焉其遷祭之夕宮人皆參終

夜宴樂歌曰美夜比登能於保與須我良爾

伊佐登保志由伎能與呂志茂於保與須我

良爾今俗歌曰美夜比止乃於保與曾許侶茂比佐止保志由伎乃與侶志茂於保

與曾許侶茂又六年祭八十萬群神仍定天

○古語拾遺

○十四

社國社及神地神戶始令貢男弓弭之調女

手末之調今神祇之祭用熊皮鹿皮角布等

此緣也洎于卷向王城朝令皇女倭姬命天皇

第二皇女母奉齋天照大神仍隨神教立其

祠於伊勢國五十鈴川上因興齋宮令倭姬

命居焉始在天上預結幽契衢神先降潑有

以矣此御世始以弓矢刀祭神祇更定神地

神戶又新羅王子海檜槍來歸今在但馬國
出石郡爲大社也至於纏向日代朝令日本
武命征討東夷仍枉道詣伊勢神宮辭見倭
姬命以草薙劔授日本武命而教曰慎莫怠
也日本武命既平東虜還至尾張國納宮簀
媛淹畱踰月解劔置宅徒行登膽吹山中毒
而薨其草薙劔今在尾張國熱田社未敘禮

○古語拾遺

○十五

典也至於磐余稚櫻朝住吉大神顯矣征伏
新羅三韓始朝百濟國王懇致其誠終無欺
貳也至於輕嶋豐明朝百濟王貢博士王仁
是河內文首始祖也秦公祖弓月率百廿縣
民而歸化矣漢直祖阿知使主率十七縣民
而來朝焉秦漢百濟內附之民各以萬計足
可褒賞皆有其祠未預幣例也至於後磐余

稚櫻朝三韓貢獻栗世無絕齋藏之傍更建
內藏分收官物仍令阿知使主與百濟博士
王仁記其出納始更定藏部至於長谷朝倉
朝秦氏分散寄隸他族秦酒公進仕蒙寵詔
聚秦氏賜於酒公仍率領百八十種勝部蠶
織貢調充積庭中因賜姓宇豆麻佐言隨積
埋益也
所貢絹綿軟於肌膚故訓秦字謂之波陀仍
以秦氏所貢絹纏祭神劔首今俗猶然所謂

○古語拾遺

十六

秦機纏根自此而後諸國貢調年年盈溢更
源之緣也立大藏令蘇我麻智宿禰檢校三藏齋藏內
藏大藏
秦氏出納其物東西文氏勘錄其簿是以漢
氏賜姓爲內藏大藏令秦漢二氏爲內藏大
藏主鑰藏部之緣也至於小治田朝太王之
胤不絕如帶天恩興廢繼絕纔供其職至于
難波長柄豐前朝白雉四年以小華下諱齋

部首作賀斯拜神官頭今神祇伯也令掌敘王族

宮內禮儀婚姻卜筮事夏冬二季御卜之式

始起此時作賀斯之胤不能繼其職陵遲衰

微以至今至于淨御原朝改天下萬姓而分

爲八等唯序當年之勞不本天降之績其二

曰朝臣以賜中臣氏命以太刀其三曰宿禰

以賜齋部氏命以小刀其四曰忌寸以爲秦

○古語拾遺

○十七

漢二氏及百濟文氏等之姓蓋與齋部共預齋藏事因以爲

姓也今東西文氏獻祓太刀蓋亦此之緣也至太寶年中初有記

文神祇之簿猶無明案望秩之禮未制其式

至天平年中勅造神帳中臣專權任意取捨

有由者小祀皆列無緣者大社猶廢敷奏施

行當時獨步諸社封稅總入一門起自天降

洎乎東征扈從群神名顯國史或承皇天之

嚴命爲寶基之鎮衛或遇昌運之洪啓助神

器之大造然則至於錄功酬庸須同預祀典

或未入班幣之例猶懷介推之恨况復草薶

神劍者尤是天璽自日本武尊愷旋之年雷

在尾張國熱田社外賊偷逃不能出境神物

靈驗以此可觀然則奉幣之日可同致敬而

久代闕如不脩其禮所遺一也夫尊祖敬宗

○古語拾遺

○十八

禮教所先故聖皇登極受終文祖類于上帝

禋六宗望于山川徧于群神然則天照大神

者惟祖惟宗尊無二因自餘諸神者乃子乃

臣孰能敢抗而今神祇官班幣之日諸神之

後敘伊勢神宮所遺二也天照大神本與帝

同殿故供奉之儀君神一體始自天上中臣

齋部二氏相副奉禱日神媛女之祖亦解神

怒然則三氏之職不可相離而今伊勢官司獨任中臣氏不預二氏所遺三也凡奉造神殿者皆須依神代之職齋部官率御木麋香二鄉齋部伐以齋斧掘以齋鉏然後工夫下手造畢之後齋部殿祭及門祭訖乃可御坐而造伊勢宮及大嘗由紀主基宮皆不預齋部所遺四也又殿祭門祭者元太玉命供奉

○古語拾遺

二十九

之儀齋部氏之所職也雖然中臣齋部共任神祇官相副供奉故宮內省奏詞稱將供奉御殿祭而中臣齋部候御門至寶龜年中初宮內少輔從五位下中臣朝臣常忍改奏詞曰中臣率齋部候御門者彼省因循永爲後例于今未改所遺五也又肇自神代中臣齋部供奉神事無有差降中間以來權移一氏

齋宮寮主神司中臣齋部者元同七位官而延曆初朝原內親王奉齋之日殊降齋部爲八位官于今未復所遺六也凡奉幣諸神者中臣齋部共預其事而今太宰主神司獨任中臣不預齋部所遺七也諸國大社亦任中臣不預齋部所遺八也凡鎮魂之儀者天鈿女命之遺跡然則御巫之職應任舊氏而今

○古語拾遺

三十

所選不論他氏所遺九也凡造大幣者亦須依神代之職齋部之官率供作諸氏准例造備然則神祇官神部可有中臣齋部援女鏡作玉作盾作神服倭文麻績等氏而今唯有中臣齋部等二三氏自餘諸氏不預考選神裔亡散其葉將絕所遺十也又勝寶九歲左辨官口宣自今以後伊勢大神宮幣帛使專

用中臣勿差他姓者其事雖不行猶所載官
例未刊除所遺十一也

昔在神代大地主神營田之日以牛穴食田
人于時御歲神之子至於其田唾嚮而還以
狀告父御歲神發怒以蝗放其田苗葉忽枯
頓似篠竹於是大地主神令片巫志止鳥肱巫
今俗竈輪占求其由御歲神爲祟宜獻白豬
及米占也

○古語拾遺

〇二一

白馬白鷄以解其怒依教奉謝御歲神答曰
實吾意也宜以麻柄作持持之乃以其葉掃
之以天押草押之以鳥扇扇之若如此不出
去者宜以牛穴置溝口作男莖形以加之是所
以厭其怒也上 蕙以子蜀椒吳桃葉及鹽班置其畔
古語蕙以仍從其教苗葉復茂年穀豐稔是
曰都須 今神祇官以白豬白馬白鷄祭御歲神之緣

也。

前件神代之事說似盤古疑冰之意取信寔
難然我國家神物靈蹤今皆見存觸事有效
不可謂虛但中古尚朴禮樂未明制事垂法
遺漏多矣方今聖運初啓照堯暉於八洲寶
曆惟新蕩舜波於四海易鄙俗於往代改糝
政於當年隨時垂制流萬葉之英風興廢繼

○古語拾遺

〇二二

絕補千載之闕典若當此造式之年不制彼
望秩之禮竊恐後之見今猶今之見古矣愚
臣廣成朽邁之齡既逾八十犬馬之戀旦暮
彌切忽然遷化含恨地下街巷之談猶有可
取庸夫之思不易徒棄幸遇求訪之休運深
歡口實之不墜庶斯文之高達被天鑒之曲
照焉。

大同三年二月十三日

古語拾遺終

○古語拾遺

○三亭



生伊勢神都 大西小太郎刻

佚名撰

將門記

寛政十一年（一七九九）序刊本

據寬政十一年（一七九九）
序刊本影印

願以書之予謂二虫體隆臺原因
出自世間所傳者一記公錄所收按
於新燥蟲蝕之跡而成之者諫漏
最多不之知照字乎子來去而
啖之時事意以此行之希復也
實取丁巳夏 李 於九誌

畢海源藏書

松、杉、麻、竹

將門乃記

此寫卷ハ初程失テ文乃名となし知ヒモ去共義徳乃
本最古のつゝハ本乃三字侍リ此ハ古本長乃ハ
大徳堂生院の古義を云々と言字保乃比寺門と出今ハ
何某乃家ニ秘藏セラレト云々其墨一々念とと一假
名文字ハ義徳乃昔振知るモ今ハ物乃證共成ぬとのハ助字の
種共成ぬ一徒ハ三字出也

稻葉通邦

天明二年寅寅
又此字卷六朱鳥六
レ中今ソミ下
牙保个為三阿
コ口太ハア
己呂大ウ字木見
エロタセハム
江王多龙々良
二九々ヒ一干
慶先女比閉于
丁ムス七夕千
可牟頌世久知
マヌハリチ天
レ比年奴字利
しハオソミ之
口切魚
切魚

將門記

卷首闕失十餘許行

由平野本

校小張陣相待將門、遂見彼軍、

體所謂向素界之神靡堪擊也。蘇氏者兵具也、以數毛作之、

爰將門故罷不能擬進、無由然而勵身勸據、交刃

合戰矣。將門幸得頓風射矢如流、所中如案扶不雅

勵後以負也。仍已者數多者已、少以其四日始自野本

石田大串取木、完迄至与力人、小宅皆志燒巡、

出者驚矢而還入大中則變

月本

中子年、貯伴於一時、災又訖破、

直新派三箇郡伴類、舍宅五百餘家、貧饒掃、哀

我男女為火成薪、財為他成、三男火宅、財有五主、乘

不害、若謂、欽具日火、聲論雷迫、其時、煙色、半

雲霞、空山王交煙、隱於巖後、宅如灰、散於風前、国吏

万姓、視之、哀慟、遠近、親味、聞之、歎息、中箭死者、不意

別子、中、有、道者、不面、離、夫婦、之間、就、中、負

威、連、身、於、公、事、致、以前、泰、上、於、花、城、經、迴、一、程、具

由、聞、於、京都、仍、彼、君、家、物、情、負、感、寔、与、彼、前、大

樣、源、讓、并、其、諸、子、等、皆、同、堂、之、者、也、然、而、未、躬、与

力、偏、被、偏、其、係、坐、嚴、父、国、書、之、舍、宅、皆、悉、殲

滅、其、身、死、去、者、迴、聆、此、由、心、中、哭、哭、於、財、有、五

主、者、何、憂、今、祖、家、已、父、空、告、泉、路、之、計、存、母

獨、傳、山、野、之、迷、新、居、聞、之、淚、以、洗、面、夕、思

之、愁、以、燒、骨、負、感、不、任、哀、慕、之、至、申、暇、於、公

歸、於、舊、邸、僅、著、秋、門、水、已、父、於、煙、中、向、遺、母

於、嚴、限、事、雖、預、司、馬、之、級、巡、冷、別、鶴、之、傳、方

今、以、人、口、尋、得、偕、老、之、友、以、傳、言、向、取、連、理、之、徒

焉、呼、哀、哉、著、布、冠、於、綠、駿、結、管、帶、於、藤、衣、冬

去、春、來、漸、失、宜、有、之、日、歲、慶、節、改、堡、遂、周

忌、之、願、負、感、偵、檢、案、內、九、將、門、非、本、意、歎、斯

源、氏、之、係、坐、也。讀、曰、賤、者、隨、貴、端、者、為、負、感、在、守

器、之、職、須、歸、官、都、可、憎、官、勇、而、孀、母、在、堂、非、子

誰、養、田、地、有、數、非、我、誰、領、睦、於、將、門、通、芳、樹、於

花夷流以翼於國家仍具舉此由應斯可者
乃擬對面之間故上總介高聖王之妾子平良
正之將門次之伯父也而介良兼朝臣与良兄弟
之上乍雨彼常陸前據源護之因緣也議常
豐息子枝隆繁等為將門被害之由然而介
良兼居於上總國未執此事良正獨追慕因緣如
車輿迴於常陸地夏良正偏就外像愁卒忘肉
親之道仍念于戎之計誅將門之身于時良正

之因緣見其威猛之勵雅未知勝負之由兼竟
介然怡而已字書曰首者倭言都波惠牟也上音官又下音志又德也者倭言与呂布也上音伎下音伊又
任理員擁依寶立者將門傳聞此言以兼平五

年十月廿一日忽向彼國新治郡川曲村則良將楊
聲如案討合并命各令戰然而將門有運賊腹良
正無運遂員也射取者六十餘人逃隱者不知其數
然以其女二日將門歸於本鄉夏良正并因緣伴
類下兵取之他境上敵思於自然慈動寢雲之心

晴追疾風之歌書曰晴者然而依於會整之深尚茂
敵對之心仍勒不足之由舉於大兄之介其然云雷
電赴響是由風雨之助鴻鶴凌雲只資羽翔之
用也義被合力鎮將門之亂惡然則國內之駭自
俾上下之動失鎮者彼介良兼朝臣開吻云昔
惡王尚犯害父之罪今之世俗何忍強甥之過
舍弟所陳尤不可然也其由何者因緣護樣頃年
有所尊慈者良兼為彼姻婭之長豈无与力

之心哉早勅我具密可相待者良正勵得水
龍心或李凌之肯屬印之先軍被射者治痕
而向來其戰道者德柄會集而介良兼調
兵張陣以兼平六折六月廿六日指常陸國如雲漏
出上下之國言上總下總也雅加禁過稱問因緣如道飛
者不就西之關自上總國武射郡之少道到者
於下總國雷取郡之神前自嚴渡者常陸國信
太郡等前洋以其明日早朝著於同國水守

營所斯鷄鳴良辰參向述不審其次負感依
有時昔々志對面於彼介々相語云如向我
寄人与將門等慰勉也者斯非其兵者兵以若
尤為先何令虜顧若斯財物令致害若干
親類可煩其敵哉今須与彼合力將定是非
云貞盛依人口々難非本意暗為同類指下
毛野国地動草靡一別發向爰將門依在機急
為見實否只率百餘騎以同年十月廿六日打

五

向於下毛野国々場依實件敵有數千許界見
氣色敢不可敵對其由何者彼々未費合戰
之遣人馬膏肥于皮皆具將門被摺度々
之敵兵具已之人勢不厚敵見々如恒築楯
如切政向矣將門未到先寄步兵兵畧令合戰且射
取人馬八十余人也彼介大驚怖皆挽楯逃還將
門揚鞭稱名追討之時敵失為方偏度府下傷度
者倭々伊
利古万苗也於斯將門思惟兄雖不在常夜々敵尋

脉不疎達代骨肉者所云夫婦者親而等凡親
戚者疎而喻華若終致致害者若物談在遠
近致仍欲逃彼介獨々身便開國廳西方々
陣介出彼介々次千餘人々兵皆免鷹前々
鳩介急成方龍々為羽殿日付介無道合戰々
由觸於在地国日記已々以其明日歸於本堵自茲未
更元殊事然向依前大攝源議々告吹件護并犯人
事將門及真樹等可召進々由官府玄義平五

六

事十二月廿九日府同六年九月七日到來是左近衛
舊長正六位上莫保終行同姓氏立字自加支興示
被下常陸下毛下終々才同仍將門告人々前同
年十月十七日火急上道便泰公進具奏事由事蒙
天判檢非違使所被略向兄難不堪理勢佛神有感
相論如理何兄一々恒上有百官願而犯准輕罪過
不重振兵名於畿内絶面目於京中徑迴々程乳德
降詔鳳曆已改
言帝王御冠
八年改天慶元年故有此句也故松色合年

緣蓮系結十善萬方今百姓重荷輕於大敵
八虎大過淺於犯人將門幸遇此仁風義平
七幸四月七日恩詔罪九輕重合悅慶於春花賜還
向於仲夏黍稷登舟建終歸焉子傳言者
於泰皇遠征久手地後蓋澤清暇歸吉野即泰皇作日假焉首
白馬生角時以龍還者蓋母數作天為首有白馬地馬為
生角泰皇大驚乃再歸又鳴子者幸雅入常樂所謂馬
目已還奉歸之德故有此句也子細見奉父也
有北風之愁鳥有南枝之悲何況人倫於思何
元懷土之情武仍以同年五月十日早禱都洛著弊

七

宅未休振脚未歷旬月件介良急不忌本意意高
欲遂會稽之心頃年所攝兵草其勢殊日常便以
八月六日圖來於營陰下德兩國之甥子飼
渡也其日儀武請靈像而前陣張言靈像者故上依介
將軍千勉精兵而龍衣改將門其日明神有忌忌提非
行事隨兵女上用意皆下只負稍還爰彼介
燒掃下德田豐田郡東栢院常川御廐及百姓舍
宅千時責人宅權收而奇反滿於每門夜夜

絕煙漆柱峙於每家煙避如掩空雨炬遠似
散地之里以同七日所謂敵者奮猛名而早去將門
懷酷怒而暫隱矣將門偏欲揚兵名於後代已
變合戰於一雨日之間所攝鋒槍三百七十枝至
一信以同月十七日同郡下大方卿為越渡回陣相
待伴敵叶期如雲立出如電響致其日將門
急勢脚病每事矇矓未幾合戰伴類如策打散
所遺民家為仇皆悉燒已郡中稼穡人馬共被

損害所謂十人七處草木俱取者只於斯云矣
登時將門為身病隱妻子共宿於幸鳴郡
葦津江邊依有非常之數數妻子於那波於廣河
之江將門帶山君於陸開岸經一雨日間件敵以十
八日各散以十九日敵介取幸鳴道渡於上銘
國其日將門婦乘船寄彼方岸千時被敵
等得媒人尋取件船七八艘內所被虜掠雜
物資具三千余端妻子同共討取即甘渡上

倭國愛將門妻去夫留怨怒不少其身乍生其魂
如死雖不習操宿慷慨假寐豈有何益哉妾恒存
貞婦之心與幹明欲死夫則成漢王之勵將欲尋
楊家迴謀之間數旬相障尚懷慈愛元相逢期然
間妾舍弟等成謀以九月十日害令還向於豐郡
既背同氣中屬本夫家辭若遼東之女隨夫令
討父國伴妻月同氣之中還歸於夫家然而將門尚
與伯父為宿世之讎彼此相憎時介良幾依有目

九

緣到著於常陸國也將門僅聞此由乞欲征伐所備
兵士千八百余人草木共靡以十九日發向常陸
因真壁郡乃始自彼介服織宿與伴類舍宅
如負掃燒一兩日之間追尋伴敵皆隱高山上有
不相逗留程間有汎波山以廿三日如負岳
依實件敵從弓袋山南谿遂聞千余人聲
山響草動軒詢諠譁將門固陣築楯且是日
且寄兵士于時津中孟冬日臨黃昏因茲各

挽楯陣守身自昔迄今敵人若晝則相驚
以時人矢所中夜則枕弓以危敵心所勵風而
之節義望為家草露身蛟蛇為仇然而各
為恨敵不憚寒溫合戰而已其度軍行頗有
秋遺數柏穀於深泥涉人馬於自然飽饑
者十頭醉酒被討者七人真樹陣人其今不死謂之口惜武境
幾千之舍宅想可哀哉何方之禍終不其
敵空歸於本色厥後以同年十一月五日介良幾

十

樣源媛并樣平貞盛公雅公連泰清父凡常陸
國等可追補將門官府被下武藏安房上總
常陸下毛野等之國也於是將門頗述氣附力
而諸國之宰乍抱官符慍不張行好不据
求而介良幾尚銜忿怒之毒未停敵害
之意求便伺隙終欲討將門于時門之驛使
文部子春九依有因緣屢駁於常陸國石田
庄邊之田屋于時彼介心中為字書曰以為者讒毀

嚴屬請傾山盡得子春丸。王豈欲害將門等
身即召取子春丸問案內申云甚可也。今須賜
此方之由。夫一人將羅漸令見彼方。氣色云
彼介愛與有餘惠賜東領一正語云。若汝像實
令謀害將門者。汝省荷吏。苦役必為衆馬。郎
頭何況積穀米以增勇。衣服以擬者。子春
丸忽食駿馬。言未知彼死偏隨。其喜悅
因極率件田夫歸於移宅。豐田郡置埒。其明日

十一

早朝子春丸彼使者各荷炭而到於將門石井之
營所。一兩日宿衛。間摩率使者其兵具量。將門
夜道所及東西。馬打南北。出入悉令見知。愛使
者還參具舉。此由彼介良魚。攝夜討之兵。同年
十二月十四日夕。發遣於石井營。其兵類。所謂
一人當千。限八十余騎。既張養由。乃養由
者執弓則。馬自落百射。中。也。弥負解。烏之。敦。有。子
師名。日。美。聖。竟。皇。時。人。也。時。十。介。日。此。人。即。射。九。介。催。駿。馬。之
日。射。落。地。其。日。有。金。有。故。名。解。烏。仍。箭。於。上。兵。者。也。

蹄。郭。日。駿。馬。生。三。日。其。母。仍。楊。李。陵。鞭。如。風。
敵。征。如。鳥。飛。著。即。以。交。剋。出。結。城。郡。法。城。寺。
之。當。路。打。著。之。程。有。將。門。一。人。當。千。之。兵。暗。知。
夜。討。之。氣。抱。交。於。後。陣。役。類。徐。行。更。不。知。誰。人。
便。目。鵝。鴨。橋。上。竊。打。前。立。而。馳。來。於。石。井。宿。
具。陳。事。由。主。從。恠。忙。男。女。共。翼。受。敵。等。以。
卯。剋。押。圍。也。於。斯。將。門。之。兵。十。人。不。足。揚。聲。
告。云。昔。聞。者。由。引。人。楠。血。以。勝。於。數。萬。之。軍。子

十二

柱。人。玄。針。奪。千。交。之。鋒。况。有。李。陵。王。之。心。慎。
汝。等。而。勿。面。歸。將。門。張。眼。嚙。齒。進。以。較。手。合。
午。時。件。敵。等。奔。楠。如。雲。逃。散。將。門。羅。馬。而。
如。風。追。攻。矣。道。之。者。宛。如。遇。猫。之。鼠。失。穴。追。之。
者。辟。如。放。鴉。之。鷹。離。韁。第一。之。箭。射。取。上。兵。
多。治。良。利。其。遺。者。不。當。九。牛。一。毛。其。日。被。殺。
害。者。世。餘。人。猶。遺。者。存。天。命。以。道。散。但。注。人。子。
罰。事。頭。以。張。早。八。年。此。後。操。負。感。三。願。已。身。立。
正月。三。日。被。捕。斃。已。此。後。操。負。感。三。願。已。身。立。

身修德莫過於忠行損名失利無甚於邪
惡清惠之比宿於蛇室糧壘之名取
於同烈然本又云不憂前生貧賤但吟
惡名之後流者遂巡盜惡之地必可有不善
之名不知出花門以遂上花城以達身加
之一生只如隙千歲誰能爭直生可辟盜
賊苟負威奉身於公幸預於司馬烈况
積勞於胡家亦可拜朱紫其次使奏身愁

十三

等畢以景平八年春二月中旬山道京上
將門具此言告伴類云說人之行憎忠人之在已
上耶惡之心嫌富貴之先我身所謂蘭花
欲夜秋風敗了賢人秋明說人隱之今伴
貞盛將門會稽未遂欲報難忘若上官
都說將門身歎不知追傳貞盛蹂躪
曹率百餘騎之兵火急追征以二月廿
九日追著於信濃國少懸郡國分寺之邊

便帶千向以彼此合戰間無有勝負厥
因彼方上兵他田貞樹中矢而死此方上兵文室
好立中矢生也貞盛幸有天命免呂布
鎬道隱山中將門千般搔首空還堵色更
貞盛千里之糧被棄一時振空之淚灑於
草目疲馬欲薄雪而越塲飢從含寒風
而憂上然而生分有天僅屈京洛便銀度
愁由奏大政官可孔行天判賜於在

十四

地因以去天慶元年六月中旬京下之後
懷官者難相乳而伴將門弥施迷心信為暴
惡厥內介良兼朝臣以六月上旬逝去
沉吟向陰與守平惟杖朝臣以同年冬
十月撤就任國次自山道到著於下
野府負盛與彼太守依有知音之心相
共欲入於彼與烟令聞事由甚以可也
乃撤首途向山將門伺隙追來固前後

陣狩山而尋身踏野而求蹤貞威有
天力而如風徹如雲隱太守思煩弄而入任國
也厥後朝以山為家夕以石為枕免賊思
尚遂非常疑殊倍望不離國輪還不
避山懷你天觀世間不安伏地今一身
難保一哀二傷狀身難療厥間身宣則殺
例敵一歲見草動則驚注人來乍
老運多月乍憂送數日然而頃日元合戰

音漸慰且慕心然向以去義平八年春
二月中武藏守興在王介源任基与足立郡
司判官代武藏武芝共各爭不治由如聞
國司者无道為宗郡司者正理為力其由何者縱
郡司武芝年来恪謹公教有善无謗苟
武芝治郡名頗聽國內極育方普在民家
代國事不求郡中之欠負注判吏更
无違期謹責而件推守正任未到向推微

入部者武芝檢案內此國為義前例心
任以前輒不入部色者國司偏稱郡司元礼
忍哉兵仗押而入部矣為忍公事暫匿
山野如棄龍未武芝之所舍宅係邊民家掃
底搜取所道舍宅檢射并去也凡見
件守介行事主則杖仲和行和者為太守
連賦貪財從則懷草竊心如著主合眼而成
破骨去膏計如蟻從手而勵強財隱

運思粗見國內厭弊平民可憤仍國書
生等尋越後國風新造不治悔過一卷落於
廳前事皆分明於此國郡也武芝已雅帶郡司
職本自無公損於所被虜掠松物可
返請由屢令覽舉而曾元弁礼致頻致合戰
之憐千時將門急聞此由告從類云彼武芝等非我
近親中又彼守介非我兄弟然為鎮彼
此礼欲向相武藏國者即率自兵杖就武

芝當野武芝申云件權守并介等一向勅兵草
皆率妻子登於比企郡狹原山者將門武芝相
共指府鼓向于時權守與在王先之而出於府衙
介經基未離山陰將門且與在王与武芝令如此
事之向各傾數坏迭被榮花而向武芝之後陣
亦无故而圍彼經基之營所介經基未練兵道驚
愕之散云忽聞於府下干時將門鎮監忍之本意
既以相違與在王留於國衙將門亦歸於歸受經基所

十七

懷者權守將門被催郡司武芝抱概誅經基之
穀即乍合深恨道上京都仍為報興在王將門之
會秘巧虛言於心中奏謀殺之由於太官因之京
中大驚城色併驚爰將門之私君大政大臣家可奉
實否之由卿教書以天慶二年三月廿五日寄於
中宮少進多治真人助真所被下之狀同月廿六
到來之仍將門取常陸下總下毛野武藏上毛野五
箇國之解文謀殺无實之由以同年五月二日言上而

向介良兼朝臣以六月上旬年即病卒剝除顯號率去
已自介之後更无殊事而以武藏權守與在王与新
司百濟負連彼此不知乍有姻婭之中更不令廢
坐矣與在王恨寄宿於下總作依諸國之善狀
並將門可有功謀之由被議於官中幸沐恩優於
海內須滿威勢於外國而向常陸國居住藤原
玄明亦素為國机人為民之毒害也望重節則
費所滿之步數至官物則无束犯之并潘動

十八

凌轢國使之來責兼却略庸民之弱身見其行
則甚於斯狄向其標則伴於盜賊于時長官
藤原惟光朝臣為令并潘官物雅送度之移標
對捍為宗敢不府向背公怒施猛惡居松而強究
部內也長官稍集度之過依官府之旨徵追補之
而急提妻子道渡於下總國豐田郡之次所盜
渡行方河內郡不動倉穀糶等其數在郡司
所進之日記也仍可捕送之由移錄送於下總國并

將門而常稱述已。由曾元捕渡。心凡為國成宿
也。敵為郡張暴。行鎮棄。注還。物為妻子。
檢恒掠人民。財為位類。榮也將門素。倖人而
述氣。願元便者。而託力于時玄明等。為彼守維。笑朝
目常壞。狼虔。心深合。地飲。毒。或時隱身。欲誅。暴
或時。力。欲合戰。玄明。誠。此。由。將門。乃有可。被。合
力。據。弥。成。竣。境。猛。志。據。合戰。方內。議。已。訖。集
郭內。于。戈。莪。塲。外。兵。類。以。天。慶。二。年。十。月。廿。一

十九

日。陳。於。常。陸。國。且。備。警。固。相。待。將。門。陳。云。件。玄
明。今。住。國。土。不。可。追。捕。緣。奉。國。而。不。兼。引。可。合
戰。由。示。送。返。事。仍。彼。此。合。戰。程。國。軍。三。千。人。如。負
被。討。取。也。將。門。隨。兵。僅。千。余。人。押。塘。為。下。便。不。令。東。西
長。官。既。伏。於。過。契。詔。使。復。伏。辭。教。屈。世。間。凌。羅。如。雲
下。絕。蔽。妙。跡。財。如。羊。分。散。萬。五。千。綃。布。被。棄。五。至
客。三。百。余。危。相。賊。作。於。一。旦。煙。屏。風。西。絕
急。取。裸。形。愧。府。中。道。俗。酷。當。為。害。危。全。銀。風

輟。陷。隔。唐。逸。幾。千。方。若。干。家。將。若。干。財。誰。操。誰
領。矣。宣。頌。僧。尼。請。願。命。於。夫。兵。堡。遺。士。女。見。酷。魄。於。生
前。可。憐。別。賀。捫。紅。淚。於。排。襟。可。悲。國。吏。跪。二。膝。於。泥
上。當。今。濫。忍。日。為。景。而。傾。攷。送。胡。領。掌。印。鑑
仍。追。立。長。詔。使。令。隨。身。既。畢。聽。眾。哀。慟。留。於。館。後
伴。俳。徊。迷。於。道。前。廿。九。日。還。於。豐。田。郡。鐵。輪。宿。長
官。詔。使。令。住。一。家。雅。如。慈。勞。寢。食。不。穩。于。時。武。藏。權
守。豐。王。禰。議。於。將。門。云。令。校。案。內。難。討。一。國。公。責。不。輕

干

同。虜。掠。坂。東。暫。聞。氣。色。者。將。門。報。云。將。門。所。念。雷
斯。而。已。其。由。何。者。昔。既。足。王。子。欲。登。天。位。先。敏。于。玉。頭
戒。太。子。欲。棄。父。位。降。其。父。於。七。重。獄。苟。將。門。制。帝
苗。蒙。三。毒。未。素。也。同。者。自。八。兼。欲。虜。領。王。城
今。須。先。棄。諸。國。印。鑑。一。向。受。領。限。退。上。於。官。堵。然
則。且。掌。入。八。國。且。魯。附。萬。民。者。大。議。已。訖。又。帶。數。千。兵。以
天。慶。二。季。二。月。十。一。日。先。渡。於。下。野。國。各。騎。如。龍。馬。皆
牽。如。雲。從。也。揚。鞭。催。歸。將。越。萬。里。山。各。心。勇。神。奢。欲

勝十萬之軍既就於國廳張其儀式于時新司藤原公雅前司大中目全行朝臣等見欽奉國氣色先拜拜將門便擎帛鎰跪地奉授如斯騷動之間館內及府邊悉被虜領令老斡了使退長官於官堵長官云天有五衰人有八苦今日遭苦大底何為世字書伊加也時改世變天地失道善伏惡赴佛神無驗焉呼哀哉雞儀未舊飛於西朝龜甲乍新耗於東岸言任中有此愁故云也簾內之兒女并車轉而步於霜樓門外從類離馬鞍

九二

而向於雪坂治政之初開金蘭之齋中威彈歎息血被取四度之公文空歸於公家被奪一任之公麻衣疲於橡暗國內吏民顛眉而涕淚悞外士女拳聲而哀憐昨日聞他上之愁今日取自下之媿略見氣色天下騷動世上彫斃莫過於斯吟之間終從山道追上已之將門以同月十五日遷於上毛野次下毛野介藤原尚範朝臣被奪帛鎰以十九日負付使退於官堵其後領府入廳固回門陣且致諸國之除目于

時有一昌俊者憤八幡大菩薩使奉授朕位於蔭子早將門其位龍光大目正二位管原朝臣靈魂表者八幡大菩薩赴八萬軍奉授朕位今須以朕二相音響早可奉迎之矣將門捧頂再拜跪四陣奉而立歡數千併伏拜又武藏權守并常陸權藤原玄茂等為其時事人喜悅辭若貧人之得富最哭宛如蓮花之間數於斯自製奏謚号將門名曰新皇於公家且奏事由狀云將門謹言不蒙貴誨星霜多改謁望至造改

九三

何言伏賜高察思之幸然先年源護等愁於被奪將門依此官符急然上道袒袖之間奉作云將門之事既需息澤仍早返遣者歸者舊堵已然後忘却兵事後緩紓安居而問前下總國介平良兼與數十兵襲攻將門不敵皆走相防之間為良兼被斃損奪掠人物之由具注下總國之辭文言上於官愛朝家被下諸國合勢可追捕良兼官府又了而更給官將門之使然而依心不安遂不上道付官使莫保此

行具由言上又未蒙裁裁鬱邑之際今年夏同
平負盛奉旨將門之官到常陸國仍司頻縣送將
門件負盛脫追捕上道者也公家須捕仇其由而還
給得理之官看是尤被矯歸也又右少弁源相職
朝臣引作自送書狀詞云依武藏介經基告狀定可
推向將門之後有已者待詔使到來比常陸介
藤原維幾朝臣息男為意偏假公威只好竟狂要依
將門役兵藤原玄明愁將門為司其事鼓向彼國而

九三

為意與負盛等同心率三千余精兵恣下兵
庫器仗戎具并楯等械戰於是將門勵士率赴意
氣討伐為意軍兵已千時頃調之而城巨者不知其
數幾許况年存令初意盡為將門虜獲也今維幾
不教息男為意令及兵仇之由伏并過狀已將門
惟非本意討滅一國罪科不輕可及百縣因之復朝
議之而且虜掠故東諸國伏業昭穆將門已柏
原帝王五代之孫也縱承領半國豈謂非運昔振

兵威取天下者皆史書所見也將門天之所與既在
武藝思惟等輩誰比將門而公家遂廢賞之由屢
被下譴責之者有身多恥面目何施推而察之
甚以幸也抑將門少年之日奉名薄於太政大府
數十年至于今矣相國攝政世不意奉此事歎
念之至不可勝言將門雅崩傾國之謀何忘舊主
貴客且賜察之甚幸以一貫万將門謏言

天慶二年十二月十五日

九四

謹之上 大政大府少將賀 恩下

千時新皇舍弟將平等竊舉新皇云夫帝王之業
非可以智競復非可以力爭自昔至今經天緯地
君墓葉葉基之王此尤蒼天之所與也何怪不推
識思有物譏於後代努力之千時新皇勅云武
弓之術既助而朝遂簡之功且救短命將門苟揚
兵名於坂東振合戰於花夷今世之人必以擊勝
為君縱非我朝僉在人國如去運長年中大赦契

王以正月一日討取渤海國改東丹國顧掌也蓋以
力虜顧我如以源力上戰討征也欲越山心不
憚破破嚴力不為勝嗣念可凌高祖軍
凡顧八國之程一朝軍政來者足極確冰固二
南當禦東然則汝曹所申甚迂誕也者各蒙叱
罷去也且從容次內豎伊加負任謹言

有爭且則君不墜不義若不被逐此事者有國家
之危所謂違遠則有殃背王則蒙責顧新天信着婆

廿五

諫全賜准老天裁者新皇勅曰能才依人為
僥就人為喜口書此言不及駟馬所以書元遂我敗
議汝曹无其也者負任卷舌銷口默而兩居肯如泰皇
燒書理儒敢不可諫矣唯武藏權守興世王為時掌人玄
我寺為宣旨且致諸國除目下野守釵舍弟平朝臣
將賴上野守釵常則御所別當多治經明常陸介釵藤
原玄我上總介釵武藏權守興世王安房守釵文屋
好立相模守釵平將文伴豆守釵平將武下總守釵平

將為且諸國受顧點定且成可達王城議其記云王
城可達下總國之亭南兼以鐵橋為京山橋以相
馬郡大井津為京大津便左右大臣納言奏議文武
百官六弁八史皆以點定內中亦外亦可鑄寸法古文正字定
一但孤疑者唐曰博士而已偏以此言諸國長官如真驚
如鳥飛早上京洛然後迄武藏相模等之國新皇巡檢
皆顧掌印鑑可勤至勢由作留守之國掌乃可預
天位之狀奏報之政官目相模國歸於下總仍京官上

廿六

驚官中騷動于時奉天皇請十日之命於佛天殿內屬
名僧於七太寺祭祀於八大明神詔曰泰曆天位建基
鳩基而將門監惡為力欲奪國位者昨向此奏今必欲
來早卿食名神傳此耶鬼速作佛力拂彼賊難乃奉皇
下位構二掌於額上而官署廢十祈於仁祠况復山之
阿闍梨修那城鬼之法社神祇官祭頃元頃城式
一七日之內所燒之芥子七斛有餘所供之祭新五色矢
也鬼鬼名号燒於大壇中其人形像著於棘楓之下

五大力尊遣侍者於穴上八大尊官放神鎬於賊方而向天神頻戰而誘賊類非之望地類呵責而憎惡王不便念然新皇案井底淺勵不存悞外廣謀即自相模歸本色後未休馬蹄以天慶三年正月月中旬為討遺敵等帶五千兵發向於常陸國也干時奈何久並一而郡藤代等相迎於懷慈美而大饗新皇勅曰藤代等四伯申樣貞威并為愈等所在干時藤代等奏曰如爾其身如浮雲飛去飛來宿家

九七

不定也奏託愛猶相尋向漸降一旬僅吉田郡藤向江邊杓得樣貞威源枝妻陣頭多治經明叔上遂高等中近頃被女新皇聽此事為匿女人婉雅下勅命以前為丈夫等悉被虜領也就中貞威妻妻被刺取露形更元為方矣眉下淚洗面上粉月上矣集心中肝内外媿成身内媿會松報連會愁敵何謂人哉何恨天哉生前慙有稠人而已爰傍陣頭等奏新皇曰件貞威妻容顏不早犯過非

妾願垂恩詔早遣本貫者新皇勅曰女人流浪返本庸者法式例又踐實孤獨加優恤者古帝拒範也便賜一龍衣為試被女本心忽有勅歌曰向枝離無花宿緒妾幸遇恩餘賴和身和比志止於江如馳其後源枝妾恥一身不羊寄人詠曰花散我身年不成吹風散此言向人知憶遂心抑止者暫是難應多日元恥件敵仍皆返遣諸國等僅所遺兵不足千人傳聞此事貞威并押領使藤原秀御等驚四千余人兵忽

九八

故合戰新皇大驚以二月一日率隨兵趨向於敵地下野方干時新皇將門陣未知敵所在副將軍春衣陣頭經明逐高等後陣以訪得敵所在為見實名登高山頂遙見北方依實有敵略氣色四千余人許也爰佐明等得既一人當千名不可見過件敵今不奏新皇迫以討合於押領使秀御陣秀御素有古計如等討靡玄衣陣其副將軍及夫兵迷三兵手散於四方野知道者如弦微書未知

者如車旗迴僅存者少遂三者多干時貞威秀卿就
衆征之程同日本申冠許龍到於山口村新皇揚聲
已行振劍自戰貞威作天云移之賊則如雲上之電公
得則如廁底之虫然而松方无法公方有兵三千兵類
憤多歸面者日漸過於未克然於黃昏各募李陵
王之膽皆成死生決之勵矣衆弓仗旆快比之禮蓬矢
自中公從者自常遊松則有日例騎所謂新皇前馬口
於後牽梢本於前昨日之雄今日之雌也故常陸國軍

九九

西嘆留宿下德國兵急愧早去厥後貞威秀卿等相語
云將門既非千歲之業自他皆一生之身也而將門獨
敗於人衆自然為物防也則競監鬼於朝夕入則
會戰利於國色後東之宏嘉外土之毒燐莫甚於此
昔月斬靈地而鎮九野剪長鯨而清四海後書曰五地者人
楚子曰長觀者大莫之名於公前
不義之人顧少國者也方今敵害凶賊非鎮其机自私及
公恐損鴻德故尚書云天下雅安不可不戰甲兵雅強不
可不戰能以此度雅勝何後戰之志也於王有疾用
公代命太子貞威等奉命於公將擊件敵所以集群

衆而加甘詞調兵類而信其數以同年二月十二日著
強賊地下德之懷新皇機招弊敵等引率兵使隱於
幸嶋之廣江夏貞威行事於左右迴計於東西且以新
皇之妙屋悉燒掃与力之邊家火煙昇而有餘於天以
人宅盡而无主於地僅遺備煮并舍宅而入山逼留士
女迷道而失方不恨常陸國之已損唯歎將門等之
不治今貞威追尋群仇其日尋不逢厥朝將門身像
甲冑案飄序之遺愛心懷送思存衛方之礼行

三十

白若日飄序者箭於虛空也衛方者前府之人也天性好斯猶追捕之時上天入地者也而恒例兵衆八千余人
未集之向常所率四百余人也且帶幸嶋郡之北
山張陣相待矣貞威秀卿等散子及之銃衛練利老
之劍切白若易曰子及養由而人皆漢裴榮然一人也子及八年將州校
時十五里養由八年將七十拿劍於三千里校有此句也
以十四日未申冠披此合戰干時新皇得順風貞威秀
卿等不幸互於哭下其日暴風鳴於地賴運魂新
皇之南相拂前自創貞威之北相震面因之彼此離
梢各合戰之時貞威之中陣擊慶新皇之從兵

羅馬討且討取兵類八十余人皆所退靡也。又新皇
陣就退來時負威秀瑞為龜亦伴類二千
九百人皆直去只所遺精兵三百余人也。此失方立
巡向還得順風千時新皇歸本陣向立於笑
下負威秀瑞亦并身命而力限合戰。又新皇有甲冑
疾駿馬而邪目相戰于時現有天罰馬忘風飛步
人失犁老術新皇暗中神劍修戰於託座野獨
滅出九地天下未有將軍自戰自死誰而不仇少過

世一

及於大害松逸勢而將棄公德仍寄朱雲人別長
親頸後書曰朱雲者惡人也昔朱雲便自下野國創請尚方劍殺人之頸也文以
同年四月廿五日其頸言上但常陸介惟紫朝并史替
便幸遇理運遺風便以十五日歸任國館群若鷹
前鳩遺於野原組上臭歸於海浦昨日暫舍函
史恨今新蒙亞將見兒新皇失名滅身死斯武
藏權守興在常陸介藤原玄義才謀所為也。又我
新皇敗德悲滅身歎辭若欲開嘉木早萎將

耀桂月兼隱有春第故嘉木等也六月而左傳云貪德
背公完如鼎威踐鋒帛故書云少人得才而難用惡
人貪德而巨謹所謂元遠慮有近憂若謂放愛將心
頗積功課於官都流忠信於永代而一生一業猛收血為宗每
年每月合戰為事故不屑學業草此只耽武藝
類是以對相問親好鬼被過然向邪鬼積骨於一身
不善誘爾於八邪終殞版泉地永遺謀殺名矣
後書曰版泉者昔高祖合戰之地也于時賊首兄弟及伴類等可追捕官有

世二

去二月十一日下於東海東山雨道諸國其官有云若敘
師者募以朱紫品又斬次將軍者隨其勳功將賜官爵
者仍詔使左大將軍參議兼修理大夫右衛門督藤原
朝臣忠文副將軍形部大輔藤原朝臣忠舒等遣八國
次賊首將門大兄將賴并玄義到於相模國被殺害
也。次興世王到於上總國被誅戮也。坂上遂高藤原玄明
亦皆斬於常陸國相次海道擊平將軍兼形部大輔藤原
忠舒下總權少樣平公連為押領使以四月八日入部即尋殺

謀殺之類。殿内賊首將門舍弟七八人或刺除、驢駝入於深山、或相檢妻子各迷山野、猶於遺成起去。又正月十日、官符各散四方。或隔二月十六日、詔使息着行稍、公進、然面武藏介源經基、常陸大樣平貞盛、下野押領使藤原秀卿、中非元勳功、勇有應賞、驗仍去三月九日、奏中務軍謀、克宣忠節、爰著賊首、我陣到武功於三連者、今个恒基也。始雅奏、虛言終依實事、殿後五位下、振貞感項、年難歷合戰、未定勝負、而秀卿合力、斬討謀殺之首是秀卿。

廿三

卿古計之所嚴者、叙從四位下、又貞盛既歷多、ふ、陰難、今誅元怒、類尤貞盛勵、所致也。故叙正五位上、一、以、謂、將門、謀、負、過、ふ、望、雅、從、逝、水、之、涯、為、人、施、官、不、悉、其、心、何、者、庸、以、遺、皮、人、以、遺、名、也、可、憐、乞、誠、已、身、後、楊、他、名、今、於、案、內、昔、者、依、六、王、之、運、心、有、七、國、之、災、難、今、者、就、一、士、之、謀、殺、赴、八、國、之、騷、動、假、此、觀、覲、謀、古、今、所、希、也、况、本、朝、神、代、以、來、未、有、此、事、然、則、妻、子、迷、道、取、嗟、臍、之、鬼、兄、弟、失、所、元、隱、身、之、

地如雲、之、從、暗、散、於、霞、外、如、景、之、類、空、已、於、途、中、或、乍、生、迷、親、子、而、求、山、向、以、或、乍、惜、離、妻、婦、而、內、訪、外、尋、非、鳥、暗、成、四、鳥、之、別、非、山、徒、懷、三、荊、之、悲、有、元、托、董、病、亂、於、同、畔、有、濁、元、濁、混、經、謂、於、一、流、方、今、雷、電、聲、尤、卿、者、百、里、之、內、將、門、之、恩、既、通、於、千、里、之、外、將、門、常、好、大、祿、之、業、終、迷、官、王、之、道、尚書曰大康者九道而好田獵於東都死也車改曰官王七載故有此也仍、作、不、善、於、一、心、競、天、位、比、九、重、過、ふ、之、辜、則、失、生、前、之、名、改、選、之、報、則、示、死、後、之、魂、設、日、將、門、依、昔、宿、在、位、於、

廿四

東海道下、德、國、豐、田、郡、然、而、被、羈、致、生、之、暇、曾、无、善、心、而、向、无、有、限、終、以、滅、沒、何、姓、何、來、宿、於、誰、家、田、舍、人、報、今、住、三、界、國、六、道、郡、五、趣、踰、八、難、村、但、寄、中、有、之、使、音、消、息、之、予、在、在、之、時、不、修、一、善、依、此、業、報、迴、於、恩、趣、新、我、者、只、今、万、五、千、人、痛、哉、將、門、造、恩、之、時、催、伴、類、以、托、受、報、之、日、蒙、諸、罪、以、獨、若、也、豈、身、於、受、苦、之、劍、林、燒、野、於、鐵、圍、之、根、儘、楚、毒、至、痛、不、可、敢、言、但、一、月、之、內、只、有、一、時、之、休、其、由、何、者、獄、吏、言、汝、在、世、之、時、所、擔、願、之、金、

先明徑一部、助者、實官曆、以十二月為一年、以十二月為一月、以廿日為一日、以謂、我日本國曆、當九十二年、彼本願可取此苦者、柞面淳兄弟、安樂妻子、為他施、慈為惡、為造善、雅口甘、忍不可食、生類雅心、惜而好可施、佞佛僧者、已視消息、如左

天慶三年六月中記文

我本、我日本國、唐日九十三、年、日、可、有其一時、休、今、頃我兄弟、亦、遂、此、本、願、可、取、此、苦、然、則、此、肉、生、前、

幸甚

勇不成死後、面目微、一、執、受、憂、一、若、一、代、有、難、敵、戰、一、如、爾、牙、然、而、勝、強、負、弱、天、下、有、謀、叛、競、一、如、日、月、然、而、公、憎、私、成、仇、在、間、一、理、痛、死、而、不、可、戰、生、現、在、有、恥、死、後、无、譽、但、在、國、諱、堅、固、而、監、惡、感、也、人、心、一、有、戰、不、戰、表、有、非、常、一、毀、後、一、達、者、且、記、而、已、矣、仍、里、无、名、謹、表

承應三年正月九日於大前房自時清少

日、二、月、古、未、時、讀、

通邦云
元本一行筆
里末也錄

堯深 撰

大塔物語

嘉永四年（一八五二）影刻稿本

據嘉永四年（一八五二）
影刻稿本影印

大塔物語序

大而天下之流氣盛衰。小而一事之得失成敗。非史不能親固也。傍史之於正史。猶分派之與本流。正史本而傍史末。是不待誦也。然而彼畧而此詳。彼逸而此存。其間亦豈有之。此傍史之不可捨也。祇訪社大祝。金刺連合井信古。故家也。多花古書。內有大塔物語。未記在室中小笠原長秀。為信古守役事。嗚呼。

後小松帝之代。年紀紛亂。事跡難審。信州僻遠。歲籍不具。且其抗命荷戈之實狀。及某姓甲族。授有土地者之名姓。存此書外。絕不聞其記之者。雖小冊子

亦。實可謂其為良音矣。今井氏原本。露蝕頗多。成澤寬經惜其歷年弥久。或至大蠹也。想請以膠寫之。指財錄梓。以公諸世。好古之士。庶幾有取焉。

嘉永三年龍集庚戌秋九月加藤經漢撰



大塔物語

去應永七年庚辰九月廿四日於信州更科郡
布施場合戰次第事

吏政者天下泰平計畧國土安穩根源也而近代
御政勢貴爵共直而都鄙悉令動謐上下誇
無事万民欣歡樂然間孰不貴惡法之裁
孰不仰嚴直之御成敗

作信濃國者小笠原信濃守長秀親父長基
祖文政長代爲補任守護職處也長秀慕
由緒經祈禱處上裁既亡相凌則賜女塔之
御下歟應永七年七月三日賜御暇立京都
同月令信州佐久郡下着大井治部少輔光矩者
依爲一門先施越千光矩之館披御教書令談合
一國成敗之趣同村上中勢少滿満信者謂一家

依有因縁儀以使茲經案內其外伴野平賀
田口海野望月諏方兩社井上高梨須田惣國人
衆少以使者觸之源家入者索云一族且爲上
意間不及是非之左右要久文字一檢人者
爲故欲向教上者廻思案一切不用之可申請別
守護人旨內令評儀畢去後小笠原信濃守長
秀者撰定吉日辰辰打入善光寺長秀其日
而立此以之祈禱禱禱禱禱禱禱天景勢擺拂
先一馬鎧緯櫛並長杖以下百合計罪續其以
毛馬共五十疋計牽連次重藤葛卷校白木
塗彩藤弓櫛尾壓尾切生中黑羽鶴本白
鶴集羽作矢負者百人以金銀爲咥卷朱柄鎧持
百人以白糸赤綴標洗草小櫻或等之色筒丸白
柄長刀持百人其次真黑鶴毛馬余長寸配太

送量金覆膝三松皮磨環新小房之歡送打長
帆懸那波鑑自磨帶念賀次舍人五人牽之元
此馬相好者兩眼張鈴兩耳受竹頭者如龍後者
藥山腹者似琵琶送立肢肌地拘勝了三長三短
志調一欠形勢馬前肢勾中後肢搖動雲虎
編木散白沫懸帶正何舍人驢繞風情只講過
張解之半漢也次容顏美麗安尋常中開童子

五六十人交後羅錦補之色彩奇麗之衣裳
其次家子若貴三十余人披金銀作太刀烈二引
真中長身系腰取被尾從前後左右強手連衣
力者七八人強儀推卷下初十余人或折花簪束
或預棒於系色々思々而立目樣自松ヶ野上
件座取為陣偏讓上方市漸之極恰恰見物し
諸人賞心樂目也其跡者許之也前打者松ヶ

云力以道世者此松ヶ河原若面醜其解太賊
雅然松洛中若名仁入連歌先學侍從園河
右樣早款名園源波頭以會田彈心し而流
物語若右山し珠河原弟子并古家文志錄近
程々子又狂歌聲若催而座々與勢解
座中し領件金煉し其中純金窪魚後朽案
後張子色々小袖裏可根所懸行劍之助被胡損

皮張靴云々度計打系以編編扇打吹新山形
一勢款打以被寬闊座風情若若若不及
是非し批判今日見物名々松ヶ河原規模其以
中河三子飯田在る助入右山寺云々武田上野
於勇七古古米左を將監入右下条件互寸
山中若僅若若若但々若若若若若若若若若
下打尾座若標葉若若若若若若若若若若若

肥後与井深勘解由鳴鑼武部悉洲豐後等
一族外族人人於金二百金訪皆家柄高僧子杖
生襖袴夏毛煉二毛熊皮等所騰白藤節卷
校自木与野鬼猿皮鵝鷹皮等條自藤毛
袴毛毛黑紋連鐵華之雲雀之踏雪月額
等毛人馬共武被白袴縹袴或置豹席皮木
張熟思々京連真深茂市圍中間力者小童

而立云中人思也其中若反原方与基目
柯取割追大懸心有子掛右風情或居連
鶴兄為有入呼懸人其次居鷹之相如名極
自生鷹羽清々以煉月眼以明星頭者戴盤
頸懸持經目覆毛家門刺底青鬚長頤清眉
現而海中如二名指右若校白豪月明希三四之
毛細威光如大家背似石難山之流吳羽乳毛覆校

綾襖衣之毛如浪之漂重鐵破鈴保翔毛通羅亂
鼻三針乱糸乱練糸羽前細乱翠之下翡翠毛
隈仇七並胡銀毛厚重如椿葉毛腹長毛無脰短
近來名鷹之譽之猶不足見物諸人善之寺南
大門及袋花川高島市腹子云所元善光寺
者三國一之靈場生身亦改淨土日本國之津
門前及市堂上如花石俗男女貴賤上下思々

心々風流不違毛舉若反原者則目緒十德
室町豈引影有為口覆躰或現若僧中童子
戶隈山之山卧有子以風情或傾城白柳子
夜發之倫縹紅紫之色深蘭府薰世彼留連
有競所又有由女房英雄者花簾之際云忍
美女之隱有隱惑風情其介異類異形見物
乘如雲似霞去程小笠原信州打入于寺家

或安堵之恩則定奉以人宗大祀三々條立押買
狼藉蘭遺軍馬等之制札任傍例令遵行諸
人沙汰然間所人困人群集遂對面處長秀
舍釋之樣不結切不帶扇塲而不及一獻之
沙汰偏公象之上鴈兒傾城振舞也緩急
至極間邪昇京上下之人口嬉終可統不見
凡仁義礼智信五常名以礼義为先是雅然

長秀久祿儀公方雖伺其法據其講攝非無蹟
之誤蓋以其謂領受大文字一檢之人未及是非
左右馳寄于塞寺相謀事子細意見這衆儀
不定處祿津義濃入道江津宮高下終自負氣
相撥云所詮小笠原与与方取取氣防我之儀云
不暨菟角之談合小笠原今府君義上意戴御
教書令下向之間不對面者且以奉忽緒云方

先試須遂對面其後定守後役亦攝非據之
新儀至于標南方知領地者願討近于弓矢
事云上関尤可为潤色之儀云衆中頗有側目
不及返答之處根津宮内以浦時貞云此儀
乍云云終終可取弓矢者對面頗云是是是
養鵝者不當描牧者不當我云云有云又
小笠原与与方代人北父子敵家長秀持幕

國名惣國人之煩當一檢之事也時已遠期
後悔云云云云是又及理至極意見也雖然
以前就強便之儀先可有對面由一檢評儀事
去間則致一獻之用意送馬太刀各致慰款之儀
長秀用喜悅之儀云一函平均思既八月廿日
余事臨西收期地下之財勢家才也河中也
名大畠村上而知也且稱非分押領且寄事

川取陣各相分士、正方人取、思人、旗、笠、鎧、幕、
文、社、護、一、人、字、二、人、字、二、引、而、三、引、而、木、合、輪、遠、
礼、人、義、形、龜、甲、連、鐵、裙、濃、疎、丸、悉、丸、三、茶、相、
二本、唐、笠、三、本、松、天、蓋、橋、瓦、耀、夕、日、之、景、桃、豆、為、
神、苦、更、前、萱、女、亦、死、不、思、覺、野、風、長、秀、未、替、
寺、家、軍、内、謀、也、長、秀、云、名、衆、名、暫、植、新、寺、以、京、
都、立、使、者、寺、成、他、山、塔、分、難、れ、小、勢、先、可、致、

一、合、戰、歟、云、飯、田、入、石、進、而、不、及、其、戰、而、江、を、太、
不、思、家、の、地、懸、艾、楊、雄、兒、の、死、途、一、生、者、其、時、
注、進、状、面、白、云、皆、々、同、は、儀、九、月、廿、三、日、其、勢、八、百、
余、騎、自、寺、於、石、屏、河、打、渡、横、田、詔、取、陣、歟、餘、
目、極、勢、守、遠、移、下、堀、河、城、の、竹、軍、并、儀、九、月、廿、四、
亥、刻、自、横、田、陣、夜、深、打、立、指、堀、河、早、約、是、標、々、
打、成、坂、而、於、寺、長、國、亦、綴、鑑、卜、同、之、甲、緒、宿、轉、

毛、子、の、長、く、人、計、案、任、懸、紅、裙、濃、女、衣、金、同、丸、
云、重、代、大、刀、を、三、尺、二、寸、四、厘、櫛、中、押、丸、棒、中、
花、飛、釣、手、繩、池、を、一、旗、手、前、鎧、踏、張、堆、上、舉、大、言、
云、衆、衆、長、秀、初、中、品、准、貳、款、勢、者、四、子、金、所、滿、
方、勢、者、一、百、余、騎、也、不、可、有、半、角、之、戰、但、見、舊、田、記、
唐、上、
唐、項、羽、高、祖、戰、吾、飲、酒、平、西、家、以、勝、以、小、勢、
勝、一、多、勢、事、亦、勝、計、南、樓、之、月、詩、人、歌、之、

高、田、初、戦、毛、の、軍、歟、人、知、之、云、龍、得、の、舞、席、
龍、の、眠、合、戦、之、下、名、對、武、者、社、知、也、長、國、恐、
譜、代、生、り、矣、家、益、續、其、業、而、嘗、今、日、師、者、
長、國、衆、衆、の、軍、士、下、知、也、云、長、秀、所、以、人、の、略、尤、
人、謂、之、諸、軍、勢、同、之、那、不、如、折、臂、等、言、谷、成、
一、騎、而、子、之、思、我、先、進、又、長、國、進、を、歟、極、勢、勝、方、
名、小、勢、入、眞、竊、竊、翼、之、以、還、遠、を、但、亦、者、不、

見地倒斃敵者必已云若敵鎮返掛頭者其理
可懸敵利鬼懸者身方鎮返手纔与子懸桿元
垣可竹排鼻勢主傷切一勢剪額者治定勝
中乃大勢痛一俾破殘黨今龍吟雲起虎嘯
風立七圍被下各吾不勢黨直擊要七秀
馬四勢百五十騎計要茶羅一檢而皆要茶
羅於馬燒元古南國源家又文字一檢之入

玄離之旁志羅乃田村利仁余吳將以致氣保昌
及焚會自張良化現對被示玄尤有非可合西刻小
望原勢乃時可謂騎驅取芥而五車去從七秀
松乃鎮一流情之鬼圍一百金騎主中乃端城
打從板之島乃以波自村上陣見之龍白陣中
武下直之腹帶武縛理表帶嘉德不穿地鳴秀
要子田橫攻之信賴者一為子門家末元政

今日軍者一七步軍鋒也系勝師我思兵
馳主千信賴可顯太刀到金手勢百四十騎計
必逢麻批放補呂之子免桃子繼地而臣後
陣勢地續其勢一百金騎上攻之承振打波
馳者四宮敵之御方手見合時之勢躍擊大勢
清元人作血時勢驚天地搖系木半時計
不心為震動半為強益強敵形太日影必魔

尾記以電光人馬息不異敵對火去程村上
勢之先陣五騎三騎十騎出騎吾不方馳懸
必至原勢因之乃並鏑掄切花頗甲鍛鎮返
侍懸究竟足自共補二三十騎惟羽雲右精兵
子當對手共百五六十人子前之走敵雖盡波
矢以相付指亂引之敵之村從鼻勢七八騎失庭
初村為或初射馬大版或初村甲直達初重

零亮角們着る足利三掛煩處長岡堆立
上頂波武吉云程足自覺伏並指踏就立真光只
一赤丸真深幾弛懸懸通弛雙方容打合
十分入合切被切組被組成水火事良之責問
間有被打滿武吉云武吉武吉武吉武吉武吉
武吉武吉武吉武吉武吉武吉武吉武吉武吉
者荒馬赤丸件人三十九枚并東西南北

羅上下云不為曲十又字掛被有表進裏藏
被被予由憤憤云云被被打成殘破不堪發引
退歸村上湯佐伴野平賢田口吹一手不朝央
入替立黑燐降血雨半時計わ戦中呼失叫
太刀音雷破不異百子之雷公鳴秀宏去程
小笠原勢不底死生手与手揮九与一筋不敵
真丸被切落名義赤丸被討者不省親子

讓越頭越多負者通村而神格之敵利鬼如
押摺壓憤敵截被被切立發崩刃退村上
滿信首首白鏝自筆毛馬赤任重代鬼截被被
滿信多形五ノ下知廣雨定与三生重廿一歲
名赤甲打日鐵武吉者五十六度无右壯也誠可觀
一騎當千共共去河小笠原打勝二軍大息愛
和長衣舉大馬下下赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤

西使也宣作天今赤不并軍武三度目法定
勝冲合押廣等名名名名名名名名名名名名
德赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤
代可赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤
血戰進死云長秀今志全不云方大家開運余
者盡谷云抽實武吉情清和見於七秀云
一且云退角劍懸藉席成爲師子爲敵脱

屋築地穿塙上櫓昇々相持援攻之勢去
從神家大之字一撥大子櫓子堅方々相元義
取陣四方以上城櫓傍夜日責之不探月日
神云月夜俄馳入城中兵糧無一粒既欲及
餓死之乃飯回入石室衆人裹祖憐太即義家
追討自任宗任之刺お山中逢入宮軍兵被
責飢寒徒死千時我獨其身暖而又不飢燒胡

録援軍兵意兼合爲浴其上固伯夷飢未必不賢
不如熟馬爲食物續乃令三乃援攻之勢諫被
曳梓弓弱心疲卧下應兵馬引張刺熱切肉自
口流血各哺之風動我兵折草被此踏龜連成
吸血振我多振眼前餓鬼畜生及是也攻口之
軍兵共各攀城櫓直下者其不憚向上只喰馬
針也愛古米入石一人廿日空腹而不食優長樣之

去退白駒翔當山青苑走雲路乃十月十六日
坂爲次言吾等不亦何人我亦今日尤苦甘
一日空腹也仍身力劣了割自害不可又食死事
南家恥辱後代之恥瑾也去未一固乃自害
然者面々永可後名字各子共一人死爲萬事
心あ一切腹云皆同以儀古米入石子息將監
常菜入石婦子下總各近付汝等事紛於中

亦お高城氣憤時我不多憚長秀懇奉落可
迴援攻之籌策若於此不有自然事必於死心
三西河可追著金兆技汝等只爲四方使云彼亦
就少少屢咽泪謂衆云能我亦難爲沙以爲我走
入高城可見前途何况汝等矢取身字心奉見
捨可死親脫乃死期永代事生堀之氣歎何事
如云云恰云裕多退惟谷話古米常菜被諸爲

后^レ理^ニ方^ニ重^ニ言^ニ、廣^ニ長^ニ國^ニ巧^ニ言^ニ、援^ニ防^ニ、誘^ニ宥^ニ不^ニ
 及^ニ力^ニ、及^ニ人^ニ、續^ニ敗^ニ、中^ニ思^ニ、大^ニ塔^ニ城^ニ、蓋^ニ走^ニ者^ニ、增^ニ守^ニ
 長^ニ廣^ニ城^ニ、中^ニ作^ニ法^ニ、熟^ニ語^ニ、中^ニ長^ニ廣^ニ、固^ニ之^ニ、思^ニ儲^ニ、幸^ニ城^ニ共^ニ
 怛^ニ然^ニ焉^ニ、呼^ニ亮^ニ、只^ニ咽^ニ、淚^ニ計^ニ、是^ニ大^ニ塔^ニ者^ニ、敵^ニ陣^ニ、亮^ニ報^ニ、而^ニ方^ニ
 目^ニ夜^ニ、而^ニ心^ニ理^ニ、多^ニ柔^ニ、難^ニ翔^ニ、亮^ニ多^ニ彼^ニ、亦^ニ可^ニ返^ニ、造^ニ方^ニ使^ニ
 悉^ニ盡^ニ、了^ニ失^ニ、為^ニ方^ニ計^ニ、而^ニ大^ニ升^ニ、治^ニ、乃^ニ滿^ニ、亮^ニ難^ニ其^ニ勢^ニ
 五^ニ百^ニ金^ニ、誘^ニ途^ニ、中^ニ扣^ニ丸^ニ子^ニ、歎^ニ身^ニ方^ニ、滿^ニ君^ニ、未^ニ之^ニ乃^ニ七^ニ秀^ニ

遣使名可於今、由平雅打探其返卷不謀課
志、程大塔之人、名爲武侍、打齒、烽火、處、勞
思其飲、雲、抗、京、極、中、約、言、顯、補、野、送、溪、所
、程、女、款、云、

いふせん煙火を今は五腕奴をさかさん
 ナカシヤ
 詠今更被思ふ豪之長秀淳世理就く思連
 コトハリ
 電光石火命を名風ふ吹程懣懣若相膚
 アチキナソワロニ
 ガシハタ

脱^{スキ}腰^{スリト}刀^キ尖^{ヲリ}拔^フ給^フ境^{ヲリ}長^フ赤^ニ漆^ニ但^ル馬^ノ御^ノ前^ニ九^{ケル}条^ガ走^ル
 寄^リ抱^キ寫^ス中^ノ携^リ刀^ヲ在^ニ制^シ心^ヲ之^ヲ良^キ暫^キ組^メ別^ニ初^ニ中^ノ集^ル
 百^ニ今^ノ携^ル弓^ヲ集^ル武^士之^ヲ智^ヒ語^ヲ能^ク之^ヲ公^ニ高^ニ初^ニ源^ノ平^ノ
 之^ヲ關^ノ平^ノ治^ノ二^ノ考^ヲ尤^ニ馬^ノ義^ノ朝^ノ掛^ノ負^メ遠^ニ慶^ノ門^ノ戸^ノ
 合^ニ戰^ニ給^フ尾^ノ張^ノ團^ノ知^ル女^ノ郡^ノ注^ス入^ル宇^ノ津^ノ美^ノ長^ノ田^ノ唐^ノ破^ル
 討^ツ給^フ討^ツ兵^ノ潮^ノ仇^ノ朝^ノ十二^ノ而^ニ於^ニ比^ノ良^ノ所^ノ被^レ生^ル虜^ニ
 令^上浴^ス於^ニ清^ノ風^ノ入^ル氣^ノ既^ニ可^キ被^レ誅^ル歲^ノ依^テ八^ノ条^ノ池^ノ

臣上し申狀被邊流于伊豆國此条經小湊送女一ヶ
 歩し星野給愛高橋入學上人椿院宣地下条
 頼朝云謀叛し心也再三奉勸し頼朝令追討
 平家事假令此勢弱張綱規爲鷹雅然門學非
 直人勸給上名任運天乃投力於國家可打立而
 引率江馬北条押寄山本館討取兼隆植義千
 大肥松山石橋包施大庭三良景近三千八百金

押寄石橋山教、責我多勢、瘡ふ叶而頼朝
被打成主、送七所境節雨、秋中、被隠落木
葉伏木中、秘給提系、平三景、時大庭手、先懸、外集
如何思樣、武多、鈕奉杖、乞、八幡太菩薩、以、新、向、乞
覚、而、自、其、被、召、涉、舟、押、渡、安房國、龍崎、語、東、分
國、侍、謂、三考、三月、看、平家、一門、追、潰、而、海、浪、拳
天下、於、手、輪、給、偏、存、今、故、社、業、様、申、慰、以、自、害、心

就而大塔、人、心、内、社、無、教、思、終、多、為、豈、擇、遠、也
林、念、報、與、枯、只、求、斗、科、水、去、乃、掃、木、原、入、為、文、武、二
道、人、達、人、也、何、人、自、害、云、集、嘆、意、去、年、今、日、以
大内、追、討、折、成、教、初、討、死、上、名、於、雲、井、可、成、元、浩
土、身、今、在、如、意、國、或、鄰、土、社、に、傍、去、木、元、後、方、湊
替、裁、教、也、初、の、を、う、別、多、く、行、流、乃、病、と、清、の、お
祓、腹、十、文、字、捲、切、此、甚、く、病、失、縣、中、為、爲、義、爲、業、爲、

為、嫌、子、下、等、謀、為、次、男、五、良、良、集、二、人、為、置、城
中、難、後、悔、子、對、非、可、憾、誰、未、現、陣、既、掃、若、者、共
廿、余、日、空、腹、各、失、氣、力、疲、畢、打、伏、月、落、城、樓
霜、冷、終、夜、若、繫、入、子、共、二、人、極、索、勝、上、覆
現、望、險、遮、子、防、攻、亦、之、寒、夜、深、人、它、抱、孤、獨、任
來、方、討、未、思、少、不、寐、只、咽、思、言、洞、醒、滯、居
乃、被、南、同、古、未、今、見、と、汗、何、為、夢、友

汲、一、河、流、宿、一、樹、後、兆、一、世、突、現、海、と、我
那、金、芝、園、既、既、年、久、今、又、同、死、後、事、先、世
宿、因、不、淺、而、汝、思、子、心、切、也、全、兆、他、上、同、心、悲、歎
只、在、世、事、者、多、意、感、今、若、住、臨、終、心、念、各、令
自、害、可、厭、因、重、と、臺、諫、云、若、衆、入、死、古、來、
心、揮、揮、流、淚、ハ、即、汝、人、揮、驚、云、衆、若、吾、悲、哉、汝
去、三、月、以、上、若、伊、賀、良、庄、時、母、頻、慟、各、沙、兄、二、人

之事名既成、長及免南中、而事未成人、出
再、不為報、憤也、故留置自然、時可立、沛、利、由
長、府、中、治、打、鑿、高、乍、余、浮、雲、氣、書、詢、云、事、
小、不、遠、我、亦、子、二、人、自、苦、而、遂、不、中、信、名、何、事、
歎、其、恨、被、想、像、只、今、初、見、後、悔、不、堪、敢、云、
一、家、流、草、帶、我、也、細、揮、揮、為、淚、數、拍、不、言、而
然、有、本、奇、云、

陰、奧、乃、其、之、清、方、
現、余、之、意、至、
人、稀、義、理、也、
洋、光、奇、擊、本、坊、
器、對、柔、進、退、而、似、雲、
丹、棠、之、層、以、百、媚、
青、黛、之、眉、悲、打、調、更、云、

而見人進氣、者、按、心、一、寺、
王、華、去、三、月、中、旬、
膚、索、上、曝、眼、
長、也、今、不、長、
無、由、以、
會、作、去、元、
刻、於、
論、依、
中、不、
中、旬、
其、子、
名、於、
古、郡、
步、孤、

論、依、
中、不、
中、旬、
其、子、
名、於、
古、郡、
步、孤、

獸大木不撰小草被譽歌御方曝體由井汀楊
名於雲井集秋傳養竹童九鶴必良金字芳
今度父少共申心欲死心三途河可為死
永代花旁乍云浮入江為鳥不如下外情打
嗚呼心中被想像何也死威為生者必負天人
終不免五衰悲可憐可憐即十三回星彩者
只一睡夢以槿花一日榮一落為置古跡母

半發思如淚方空先途從意馳思於馬
心父雲愁淚進心不轉繫心情恨後會期遠
那無一句詩八扇扇端角出付集
故鄉在母猶子渡旅館無人言為魂
世乃中心少別者幸也悲先三途河逃
打詠乍人目思淚者又坂為必良長國者心太保長
而醫文武之藝乃不除重男也良家宮淵富

尤來心慰を月沐ふ所養弓矢取方智為歌
己力事少不痛乍也勝心覺為置伊賀良庄
松壽丸事也當年重丁歲目夜不放手情
事當成冥途一障出殉室之淵只咽淚暫
不言恨猶恨悲於悲老後子悲也國彼見是莫
催渡長國乃才信出置集

那用只在白雲外滿目于戈時戰塵

植 植 我右の雪風を酒をすんを思ふ

暫不美置業眺望古跡方雲水水淋范落
愁腸長國方習心云名未名秋未後自言而
去未成焚會破鴻門然一同切遭逢下思歎
乃討死云皆尤同心器人亦三用大子一戸張
噯叫切神香月十七夜事卧待月為離山端
無賴千鳥雲只如白見也大手一攻口去祢津

城守遠安固其意漢初自章右京亮宗直
同上孫自信三村孫三市種貞櫻井別并小甲中
實由橫尾曲尾人不能透乃載又取方勢有自多濃
入存性存其一意是澤豐後寺恭時上京矢崎古田
其外亮宗軍兵相撰三百余騎于滋相支貴國乃城方
無共殘少討死於兵士名不省死生難人更
入亂登城扉麻垣我先強動潛城水名再切漬

轉要入剝之實之身或被剝取着物或赤裸被也
處攻口難人共盜懸以棒棒難即打倒擒獲
死細足投卧振翅噓噴末云云斗乞抱能
比獄率阿防羅剎等鬼王共依罪人輕重以鐵
杖打縛是不過見自業自得多獲同軍祀社
安惠愛坂死乃長國黑軍威筒丸卜同元甲緒
自何授氣為立用櫛手戶張噴吐截為櫛手

攻口名仁科強宗漸威房園之同一黨駿河守
威光之子園鬼八郎澤戸五郎德高戸原呂木池
田庄科以下二百余騎打交長田亮早慈兵成件金
筒丸柄中押免棒中凸所由良之頑所死良人
頑不嫌垢谷踊越要越舉大音名宗榮名遠國音
也見目泰清和天皇御苗義難羅三所末孫小三
京次良長清其子兵庫政長次男坂為治七國

生年廿歲而内心入勢靈管管雪勳外督
弓馬之術不運惟惟等文武二名珍重男倚
舍武人愛懸諸口多武有共人勢心得岸破
地墮根強七國擒殺一甥武名共五合打抱換安詮
只少高而走上段庵獲之慶仁科強宗漸威房
白束綴鑑卜同元甲緒直想云重代太刀五集五尺
三寸込平十文字波合菱打透半時斗貴國末

史勝負之虞、威房平者大勢、為重真中、採取、累
成、火、事、具、神、以、獲、聚、賊、青、画、七、回、宮、測
主、從、後、与、後、差、金、甥、小、膝、傾、甲、鐵、而、操、追、拍、前
後、側、平、恥、押、付、任、向、助、手、角、南、ハ、死、形、乱、又、美
形、難、而、立、醜、返、事、又、色、雲、然、一、散、人、後、從、被、
切、立、大、勢、少、賊、安、是、處、七、回、宮、測、息、打、拍
曳、却、操、紛、雲、月、月、通、走、校、欲、一、月、途、落、處

宮、測、魂、走、事、為、木、城、中、人、ハ、手、始、飯、田、反、等、打
死、以、云、出、操、名、社、情、弓、身、而、見、捨、服、前、見、男
飯、田、反、難、ハ、強、顔、令、生、全、不、可、期、子、年、家、死、只、一
助、田、切、子、限、川、不、有、岸、打、浪、又、之、為、大、塔、飯、田、死、屍
打、重、版、陰、破、失、懸、中、死、多、長、光、者、業、令、完、後、又
被、不、父、子、三、人、信、自、害、前、後、子、与、手、取、組、而、死、偏
等、接、取、不、捨、悲、死、令、併、思、高、勢、各、打、重、自、害、可

懷、愁、五、百、名、廿、八、日、十三、歲、於、戲、無、如、月、早、歲
泣、頭、穿、滅、理、其、悲、更、難、也、因、武、防、難、防、邪、見、又
狀、難、狀、無、者、凡、几、耳、目、而、觸、莫、不、催、淚、神、云、月
十七、日、事、可、既、屬、初、冬、草、木、皆、含、蕭、索、之、氣
紅葉、落、風、續、紛、威、者、必、衰、觀、念、豈、非、是、哉、諸、均
言、者、不、一、方、嘆、松、柏、於、君、後、負、臣、知、世、危、ハ、即、ハ
心、操、無、不、譽、人、在、方、方、使、不、知、中、者、業、校

業、校、ハ、標、業、下、枝、女、殘、朝、露、清、凡、自、害、討、死、人、名
誰、ハ、飯、田、入、石、古、米、入、石、標、木、石、見、入、石、者、業、入、石、子
三、人、坂、而、治、石、標、業、木、羽、同、為、標、子、赤、津、後、河、也
武、田、上、野、子、大、井、大、花、惠、用、堂、治、子、織、戸、服、治、子、枝
河、内、下、下、条、義、作、子、治、武、部、義、井、治、助、解、由、衣、也
布、施、兵、庫、助、宇、木、中、治、為、津、志、屋、駿、白、石、稻、苗
源、河、子、大、塔、中、勢、皆、津、大、院、和、田、太、子、於、利、六、子

宮淵宮内橘小三郎爲合三郎以下惣侍名字
三百余人雜入等死屍不遑羅縵去用明十月
十八日改口軍勢當時打立自身人死已死者取頭
半生老羌留目爲以老打留或有被截處肘或爲被
擲零股膝者半生者共被此數數處押擲人々
取首言語及制作也愛書坂左馬亮合宗健
暫塞目思中波思原老左馬亮只爲眼前可矣

取刀智全非人上偏源起自貪慾心才誘名利
易消不省高命愚而求百身之藥救世情事
受着執心愚人貪慾苦患又人知今彼不爲
解刀兩金非物教甘後十膳之王位不分賦可賦者
沙陀電泡極捨而可捐者而希惠緣之觀衆
又此思下知去乃善光寺事戶所同十念寺之聖
大塔人之既自密因公急至千彼合戰處一あ所

見四給不祇高月作法昨日今日在右左將義教
見人皆成屍主勅原人馬骨肉散亂腰野紅葉
如飄風草深血以紅錦暴日綠色親族之僧
法行或捨骨或拍无骸爲悲歎涕泣事言限前未
可而世不見樣也左古人道世放高山月匿身
竹林雲少彼見之人世時不發心矣胡何時
彼時在達此彼落教處共一取納或吹梅極煙

或樂塔立率於時各与十念通勵法改方接
之願望利益主之喜形見筆挽取集被送
妻子方爰撰小所玉菊花壽云慈女日束
坂西乃良銘傍露寐夢不思其情立出大塔尋
彼死體雨雷泣悲奉奠時衆懇取納乃于
善光寺寢墨深衣身偏訪善光衆此係珍重
樣也一其方肩斗

各拱手乃大略被疵半死半生而無一適用樣
長身、浮沈又極之然乃大升活郭乃將光矩者
小竺原一家、家督又非一見放圓又一因一檢也
少、ふ同心云恰云恰子返惟合乃打者九子扣
途中、廣小竺原及浮沈、中其其流草難
捨乃半押入令該合村上滿信對策上名
云是非引電而陣、流草勢各放放方一畢テ

古尚國守護職事小笠原信濃守長義賜
安堵。濟下又去七月廿一日令下國致一玉手均。

[illegible]

三、若^{タリ}則^ニ諸^シ子^ノ細^ニ間^ハ弱^ク履^キ迷^ヒ入^リ牢^ニ、即^ニ母^ノ角^ト
 若^カ女^メ房^ノ関^ノ之^ヲ夢^ニ幻^ノ心^ヲ地^ニ而^シ立^テお^ハ時^ニ元^ノ心^ヲ事^ノ、
 兄^ヲ弟^ヲ為^ル思^ハ備^{マウケ}歎^キ新^ニ少^モ不^モ言^ハ只^レ咀^レ泣^ニ墓^ニ形^ニ見^ニ葉^ニ
 悲^{スサミ}子^ミ驢^{ビレ}桑^ニ松^ニ房^ニ永^ニ而^テ取^{ラス}之^ヲ女^メ房^ノ清^ニ元^ノ而^シ押^ス尚^ニ
 負^ニ倒^{フレ}伏^シ喪^シ嘆^{モタヘ}歎^{フカレ}悲^キ事^ニ言^シ計^フ時^ニ元^ノ稍^ヒ些^ニ立^テ
 合^ニ戰^ニ方^ニ才^ニ完^ニ以^テ近^キ態^ニ語^ハ家^ニ中^ニ動^{トヨミ}滿^ミ頻^シ早^ニ
 肩^ヲ食^{ドヨム}僅^{アリ}為^{サマツ}所^{ナキ}施^ニ比^レ歎^ニ女^メ房^ノ餘^リ云^キ澤^{ヤル}津^ヒ任^{マニ}彼^ニ

里モを付ス而シテ未シ孤ニ感ニ載フ深キ付面テ
 酒月親子曲ノ川女ノ石を踏キ流ラハ形見ノ
 玉松ニ返本ノ病シモ有テテ而シ遠ニ見返ハ孤
 心慰氣ツ更科ヤ伯母松山ノ峯續キ塙邊ヲ着ケシ
 而シ多クテよハ波の海ニ舟系塙邊カク力ニ系ト孤
 去程臻ニ大塙ニ無基尋親ヲ自肯新積重塙ニ有
 率於海ノ中ニ若葉ニ基證ト云ニ立宇リ心靜念母

滅忘銘心肝_ニ以_テ清_ニ其_ハ心_ヲ及_ニ其_ハ心_ヲ自_ニ而_ニ陳_ニ宿_ニ寤_ニ与_ニ
 觀_ニ身_ニ三_ニ七_ニ月_ニ通_ニ夜_ニ中_ニ奉_ニ祈_ニ清_ニ心_ニ堅_ニ固_ニ心_ニ愈_ニ
 久_ニ愈_ニ大_ニ悲_ニ誓_ニ我_ニ幸_ニ無_ニ其_ハ驗_ニ哉_ニ則_ニ蒙_ニ極_ニ人_ニ夢_ニ
 怒_ニ宗_ニ繼_ニ承_ニ就_ニ子_ニ息_ニ刑_ニ教_ニ之_ニ痛_ニ悲_ニ讓_ニ遺_ニ路_ニ
 今_ニ者_ニ家_ニ登_ニ高_ニ野_ニ山_ニ於_ニ茲_ニ在_ニ堂_ニ三_ニ年_ニ致_ニ難_ニ行_ニ若_ニ
 以_ニ成_ニ念_ニ所_ニ以_ニ終_ニ行_ニ法_ニ國_ニ令_ニ利_ニ益_ニ郡_ニ於_ニ是_ニ併_ニ
 先_ニ因_ニ所_ニ刪_ニ難_ニ云_ニ云_ニ可_ニ作_ニ可_ニ行_ニ長_ニ必_ニ事_ニ共_ニ也_ニ

大塔物語

文正元年丙戌春上旬御方上社御林五百市庭
閑室而爲し文字不誤復見懐入久之素澤師
寺入者之爲之後代に於て今併一區不置也

[illegible]

附言

一此書蓋沙門堯深所自書。文正紀元堯深年七十一。距應永庚辰僅六十七年。蓋堯深獲於其幼時目擊。及鄉俗所傳而記之。其為實錄不可疑也。

一原本魯魚相望訛謬不貳。且間有字書無有。怪異叵讀字。欲存古。寫書之真面目。不敢考究是正也。

一此書蠹痕及半體字。皆存而不刪。不欲毫措手於其間也。觀者勿尤其非鏤梓之體焉。

一應永庚辰至今四百五十年。大塔名既亡。問之古老。無有知其遺跡所在者。按更級郡有地名大當者。隸二柳邑。蓋古大塔之地也。其他書中所載地名存否。氏族異同。略有攷據。他日當俟其就緒以附錄之。辛亥之夏五月朔丁亥之日原昌言識

栗山愿 撰

保建大記

正徳六年（一七一六）京都茨城多左衛門刻本

據正德六年（一七一六）
京都茨城多左衛門刻本影印

保建大記序

小國史無褒貶以其時淳事簡皇
道行於上下而自不知也自世之
季政綱漸弛民心日作強僭反側
之徒累々接跡而載而筆之者曰
紀曰記曰錄曰抄曰鑑曰鏡曰語

李皆撮王造之任故製霸廟之冗
務詞理僅淺敷衍撓雜去偽俱昧
要之胡報吏案而已矣傳奇小說
而已是實敘事且不成語當何
在能勸善懲惡以表鑑百代也特
衣錦家有神皇正統記之編揭成

憲而振頽風以振五儲而整茲軌
後卓後中諸思君憂時之誠以書
維畧其言雖龐矣始可與言春秋
遺意而輒近學降士庶撰著頗多
其間上特得潛錄子保建大記撰
就范氏之體取旨朱子之綱致數

畏于天心謹被今于良道忠邪不
遁終始可繹以至政之得失事之
是非一皆錄以古義其推古貴公
愛說名者其固可與源准后之作
相面而措辭之嚴行文之雅迥已
度越昔人矣故從事謹錄之為能

微子用心引而伸之磨之精之有
以窮夫深切著明之至其廣記備
言之上則史之散庶可漸收歟子
來冠伴讀故

彈玄尹八條親王著之以止後仕

水戶候掌彰考館事修史之暇屢加

序

三

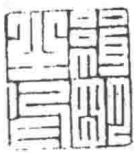
離討出以見示余以與子國郵其
官學畧均趣也平素歡甚承其所
論每相投意但此不謂以神志之
在否而卜人臣之向背者議竟不
合不合之機一而合者為是則豈
是以見不阿而同也吁子之沒沈

七閱星霜矣當有序言送余而歸
彼以以典城之鉅金也抵今來自
知堪斷較切玉與否而子之鋒則
埋金而淪窮原鏘鏘銷鏢泯不
復起獨以緣論確佛之氣文章穎
出之光可或勃然興閃然動以冲

序

四

東南斗牛之墟其賴有以編五焉
爾值其子弟來請序悼然以書
不德壬辰秋 平安宅緝明撰



身維祿書

保建大記序

保建大記記保元至建久中間三

十餘年事之最大者也

臣

竊攷觀

帝王之治未有不本諸身而達之

天下後世者上世皇祖授璽之初

曰寶祚之隆當與天壤無窮其德

保建大記序

五

之盛業之大百王歷歷一姓綿綿

可以配日月以要鬼神以視方域

之外而固不待著之歌頌勒之金

石也

臣

讀保元建久之事一喜失

政不主既如此擅彊不臣亦如此

而無敢朵頤神器舐糠大寶者真

爲祖宗本於身之德也一悲綱紀

弛墜之甚政弊因襲之極名爲保

天下而政出外臣者實爲後王不

本於身之過也旁搜遺籍綴緝成

編私逆禍源以論其所由上起後

白河之卽位下終後鳥羽之建久

保建大記序

六

凡六主三十八年爲兩卷宮廷之

儀軍國之事雖不能徧舉曲盡而

至於治本亂幾關係大體者則亦

可觀其略歟

元祿二年己巳六月七日

栗山

愿

謹序

上保建太記

彈正尹八條親王崇

臣愿言伏以

銀潢分派生鞠

姑射之雲

橘樹連枝出居

延嘉之邸同樂東平之善

恩賚有加媲美河間之賢譽望藉甚竹

保建太記

苑設酒醴之席佳山築琴書之臺

恭惟

賢王殿下

玄鑒明虛

粹容雍綽內窮秩敘外韜輝光自匪

遇億兆躋壽之曆安得符五百名

世之期如臣輩應歌頌嘉靖於常

今敢愆愆版蕩於已往雖然泰固

易否命靡於常

聖祖之積慶重暉

神宗之明德盛業一朝失馭羣害交臻爰

迨醞釀

保元閱牆之殃馴致

平治滔天之禍自翦天生之羽翼有其

於豆萁安知野心而爪牙不視為

鷸蚌長鯨恣毒

保建太記

龍衣沒海西之瀾短狐假威虎府起關

左之嶮何昭穆不秩奈父子無親

既誤

君王居五之初蓋亦

邦家遘九之厄偏災孽於帷薄牝雞司晨

動兵戈於蕭牆頑童濫職倒置倫

理尊未冠之

上皇包藏禍胎立無璽之

天子夙聞時繹抱舊史獨慨歎日講月評

釋新編自於邑人侍

左右翊談古今載瞻

溟岳之高深期效涓埃之裨補兩卷

一帙謹黃羅之封全六王冊年親

墨筆之繕寫和煦之曝未必全害

背肩焦爛之桐亦可以調律昌伏

冀事原本末論要始終探索妖源

保建大記跋

九

垂規箴於

聖世詳審亂幾昭鑑戒乎

明時補天未確揭示

表儀於宗室與邦同瑞光啟

華萼於春秋十續

平臺之廣崇不堪微軀之戰栗臣愿惶

恐稽首稽首謹言

保建大記卷之上

潛鋒栗山恩伯立甫 撰

保安四年春正月壬午。鳥羽天皇立皇子顯仁爲皇太子。卽日皇太子受禪。是爲崇德天皇。二月丙戌。尊前帝曰太上天皇。癸卯。天皇行卽位禮。時五歲。白河法皇決政院中。大治四年秋七月癸未。法皇崩。政事歸太上皇。保延五年夏五月。上皇寵姬美福門院生體仁。秋八月立爲皇太子。永治元年秋八月。上皇薨。髮曰法皇。冬十二月辛未。皇太子受禪。是爲近衛天皇。

保建大記卷之上

皇癸酉。尊前帝曰太上天皇。辛卯。天皇行卽位禮。時三歲。太上皇雅無去位之志。法皇欲立美福門院所生。故速禪位。上皇以爲詔書應稱皇太子。旣而稱皇太弟。上皇駭曰。明日審議當否。法皇不聽。上皇奉書法皇中使相踵。薄暮始傳璽。自是二宮不相協。久壽二年秋七月戊辰。近衛天皇崩。上皇以爲朕當重踐祚。不然。重仁親王。重仁者。上皇第一子也。衆亦屬意。美福門院謂上皇。呪詛近衛帝。故忌重仁。勸法皇立雅仁親王。關白忠通亦慫恿之。遂立雅仁。登祚。是爲

後白河天皇。時稱四宮微。而無聞。至是朝野愕然。九月丁卯。以皇子守仁爲親王。卽日立爲皇太子。守仁幼失恃。爲美福門院所鞠。是以美福門院謂守仁宜居儲宮。帝遂從之。

臣愿曰。古之仁人志士。每觀史氏所書。至其所感於己心。則未嘗不廢書而長吁。安知異時不有掩卷太息。而垂涕於斯者耶。近衛帝法皇第八子。崩年僅十七。後白河帝於倫次爲四子。而長於近衛帝。旣十一年矣。昔顯宗以仁賢之讓弟而先兄。不

保建大記卷之上

獲已也。固非常經也。後白河將在所當立耶。應及於崇德之後。而不宜繼於近衛之後。皇嗣至重。而位至貴。天人係焉。法皇不察天倫之敘。衆心所嚮。而決之。宮掖一婦人之言。忠通以大臣慫恿贊成。以阿順後宮。法皇之過舉。固已大矣。而忠通之罪。亦未知與賴長孰伯仲也。嗚乎。自毀之家。不復能禁人毀之。自伐之邦。不復能禁人伐之。當是時。屢下敕。諸道禁兵士屬源平。可謂知所戒也。而不能秩敘彝倫。規正宮壺。則亦末耳。一朝晏駕。昆弟交

饑假手外臣。恣毒骨肉。邑虎傳翼。餓鷹飽肉。八柱一傾。四維不張。太親非望。西滅東起。怯懦萎靡。惟恐不能自拒。奚暇問其舊物之有無哉。掩卷垂涕於斯者。何必俟異時之仁人志士而後然哉。

保元元年秋七月辛丑。法皇崩于鳥羽宮。右衛門權佐藤原惟方。拒上皇不得入宮。上皇大悲。時左大臣藤原賴長。負才驕慢。與兄關白忠通不善。諂事上皇。上皇亦親信之。一夕密詔賴長曰。以古揆今。非無孝德皇子而承統者。天智也。非無淳和皇子而嗣位者。孝

保建大記卷之上

仁明也。花山先于一條三條先于後朱雀。朕雖非德先帝之長子。位忝萬乘。尊居上皇。皇統所繫。非重仁而誰先帝捨之立。匪文匪武之四宮。今先帝昇遐。朕舉大事。何憚之有。賴長素欲上皇得志。遂贊成之。

臣愿曰。自兒屋命輔翼天孫。種子命扈從神武。若錄足若不比等。藤氏世勤王家。至良房彌幼主。基經行廢立。則天子孤立。無復所措手。雖宇多帝太用菅氏。漸收其權。而道真罷黜。藤氏又盛。男握朝柄。女配宸極。視官爵爲己私。援引親黨。分據要途。

施及童稚。諸臣知不可而俛首以爲乖忤。相家禍在不測。後三條帝憂懷永圖。相門斂手。及其崩。雖賴通猶嘆以爲邦家不幸也。白河鳥羽。亦奉其遺意。雖已去位。猶親機務。然恇淫匪彝。不能以貽謀。孫子悅服。臣庶而忠通賴長各逞利心。經營私門。徒欲朱器臺盤之重於天下焉耳。邦家休戚。社稷存亡。安然環視而莫之恤。兄弟相譖。寵辱交軋。卒之致王室陵遲。諸藤亦從而凋瘁矣。可不戒哉。

京師流言。上皇集兵東三條殿。帝使下野守源義興。

保建大記卷之上

四

收少監物藤原光貞等。於東三條殿鞠之。甲辰。上皇召兵。道路騷擾。敕義朝及檢非違使源義康。警衛禁內。遣檢非違使平基盛。源季實。平維繁。平實俊。藤原資經。于近畿諸路。捕兵士。齎甲入京師者。乙巳。基盛獲源親治于宇治路。繫之西獄。

臣愿曰。王室華萼。一旦相閼。帝也。院也。體元繼世。皆我所天。豈如舉義構亂。正僞相判乎。欲審進止之義。正向背之道。則將奚擇。院雖兄。去位久矣。帝雖弟。當今天子。馭寓蹕年。未有失德。院之構兵。其

何名邪。當是時。空以躬擁三器爲正。古昔三器。通謂之璽。璽信也。皇祖授璽。持寶鏡曰。吾兒視此。當猶視吾。又曰。莫思爾祖。吾在鏡中。又曰。如八坂瓊之妙。如白銅鏡之明。且提神劍。平天下。神武建都。橿原。奉安三物。親祭匪懈。以爲祖先之神。以爲天位之信。又以爲修己之具。又以爲馭天下之器。至崇神。別模鏡劍。爲護身璽。世世相承。而莫之改也。如天德長久之火。神鏡壽永之矢。寶劍世變固既大。而至元曆無璽。而卽位。則其變不可勝言。當時

保業大記卷之上

五

藤原兼實區區恐開禍端。而其裔良基。至有以臣爲神璽。尊氏爲寶劍之言焉。雖然。護身之靈器。鑲宇之神物。萬世公議。終不容僞主亂真。閑位茂正。則世道雖夷。王風雖降。而三璽之尊自若矣。若夫秦以帝印爲璽。漢因爲傳國之物。則與周禮之璽節。左氏之璽書。固無異。而至秦惟天子稱璽。而臣下不得稱耳。豈可與吾邦百王授受三種統一之道器同年。而語哉。故至以躬擁三器爲我真主。則臣要質鬼神而無疑。百世以俟其人而不惑。或以

爲晉納刺。賈孔子不爲衛。院固得罪於父。帝亦以弟。拒兄。不唯院不可與也。帝亦不可從焉。曰。孔子不助。蓋不仕也。既食焉者。不得避其難。子路是已。當是時。天下仕者。孰不任王官。食王土。而避王難。身不之踐。恬然言。吾王不能爲夷齊可乎。

先是。上皇在鳥羽宮。鳥羽帝崩七日。修法會於田中殿。上皇不臨。至是。將出宮。參議藤原教長諫之。不聽。託言。齋院行啟。入居白河前齋院第。移據北殿。帝使平信兼要賴長於橿川。賴長聞道。入白河。帝告急美

保業大記卷之上

六

福門院。門院矯遺詔。召安藝守平清盛。警衛禁內。

臣愿曰。平清盛母。乃重仁親王乳母也。鳥羽帝遺詔。將士而獨不及清盛。蓋疑之也。而清盛應女院之召。不與上皇異圖。比之源爲義明。暗果爲如何。或謂清盛忍乎重仁。將何所不忍。曰。王法先義。而不先情。論公而不論私。猶衡平鑑明也。未來不迎。既往不追。視向善之方。開改過之道。是以雖妍媸不可逃。輕重不可差。而無敢怨之者。如夫保元應召女院。平治脫帝。賊中皆清盛之功。以其後來之

罪惡。拙今日之忠勳。豈王之大法哉。

上皇遣教長召源義朝。父前檢非違使。爲義爲義辭。曰。上以臣義家之後。爲知兵者耶。然臣之壯猶不如。入今老矣。無能爲也已。嚮禱男山神。告凶。又家藏八甲。夢爲疾風所吹。飄。臣意甚惡之。教長曰。夢固無常定。故曰夢幻泡影。況身爲武將。說感夢拘忌。我不敢奏。至親至宮辭之。爲義言。屈率子賴賢。賴仲。爲成。爲朝。爲仲。至上皇宮。

保建大記卷之上

七

臣愿曰。上皇至讚岐。帝使人檢書庫。有一匣。帝發視之。乃感夢記也。屢夢重祚。每夢必禱。上皇之夢。猶梁武乙卯之夢。其構兵未必不爲夢所誤也。既不能安命。甲兵之務。雖吉夢累巨萬。祥其可保乎。源爲義不克力陳大義。以諭教長。徒辭以晝寢夜寐之所髣髴。所以一爲教長所屈。不能復對也。雖自知歿于是役。分鎧冑於諸子。而於義何所補也。蓋心之爲物。靈明洞徹。雖熟寐久臥。有未嘗與體氣昏息者。故平生動思。皆以成夢耳。至其性定氣靜。非復若常人。昏夢雜擾。情狀千萬也。如夫賴之。

得鄉導。獲良弼。一心純實。與天無間。而思念所感。精誠所格。又豈偶然也哉。其妄信者。往往爲之所誤。如上皇梁武。其多疑者。并神武高宗之事。爲出假託。賢智之過。愚不肖之不及。此亦可見矣。

爲義陳策曰。兵悉從義朝。臣所率特寡。拒敵於此。非謀也。非據宇治。撤橋。則背甲賀山。俟坂東兵。兵若不至。則乘輿幸關東耳。賴長不從。上皇使平忠正。源賴憲。爲義爲朝。平家弘。分守四門。賴長議戰略。爲朝進曰。臣久在鎮西。夙伏九國。大戰二十餘。小戰無數。利

保建大記卷之上

八

在夜出不意。臣請今夜襲高松殿。放火三面。要之一方。縱兄義朝善戰。臣一射斃之。平清盛等弱手緩箭。直用鎧褰被拂耳。乃取鳳輦。徙此地。奉陛下於禁內。則東方未明。事已定矣。辭氣悍烈。無所回避。賴長曰。兩帝爭國。當張堂堂之陣。豈同卽巷私鬪哉。今兵未集。應待明日。興福寺僧徒必來會。爲朝退曰。阿兄有略。今夜必襲我。吾屬爲虜耳。笑。暇。明日用吉野法師與奈良大衆哉。

臣愿曰。寡不可以敵衆也。小不可以勝大也。不可

勝不可敵者常勢也。其敵其勝奇也。故善之者出奇無窮。不論小與大寡與衆也。且以六十萬勝楚以四十萬勝秦。惟王翦項籍而多多益辨者。韓信而已。趙括之於白起。王尋之於世祖。曹操苻堅之於周瑜謝玄。皆足以爲兵多之戒也。源爲朝。膽勇明決。可謂善制奇者也。蓋賴長改志悔過。過兵講和。策之上也。既不能然。任之爲義。付之爲朝。猶未失策之中下也。居然受敵。官門非所謂無策者乎。庚戌。以高松殿湫隘。遷御東三條殿。帝親抱璽。御腰

保建大記卷之上

九

輿。關白忠通以下。文武諸臣扈從。黎明義朝清盛已下諸將攻白河殿。乘暗鼓譟。兵勢甚熾。爲朝等防戰不決。義朝奏宣以火攻。制可。因縱火。上風。煙焰掩宮。諸將膽落。無敢格者。平家弘平光弘馳入殿門。呼曰。敵衆我寡。加以火助勢。我軍不可復戰。乘輿當速出宮。上皇倉皇上馬而不勝騎。藏人平信實重騎扶掖。賴長中流失矢。

臣愿曰。當時號爲經濟之學者。賴長信西也。賴長亦每笑忠通善書。好歌詩。曰。小技曲藝。非經邦之

要。其自言如此。然信西深沈確實。施諸政事。足以見其用也。賴長經傳雖極其精。徒章句之末也已。史子雖務其多。徒記誦之陋也已。將以辨博。睥睨一世也。苟比同之信西可乎。但其視利忘義。先私遺公。齷齪自用。不知大體。則無異也。所以俱取禍敗也。而信西雖不能保首領。猶不失其爲臣。賴長直賊耳。追崇之。治承。廟祀之。元曆。豈非幸之甚哉。上皇至如意山。爲義家弘光弘季能等從焉。山路嶮艱。下馬。徒步上皇不習行步。荊石刺足。泥血交流。絕

保建大記卷之上

十

而復蘇。謂諸將曰。禍朕自取。汝輩無罪。當速出降。朕神耗力屈。不得復行。追兵至。乞降耳。諸將泣曰。臣等以死終始。上皇曰。從者多在。後禍不貲。諸將嗚咽去。惟家弘光弘不肖。去扶持下谷。折樹蔭庇。晝暮家弘父子。遞負上皇出京師。無敢舍匿者。深夜入智足院。僧坊得湯粥進之。翌日。上皇薙髮。至仁和寺。覺性法親王不內聞之。帝遣式部大夫源重成守之。尋徙于讚岐。重成防衛過。鳥羽欲拜辭。山陵重成不奉命。臣愿曰。帝既無菟道顯宗之讓。而上皇亦乏仁德。

仁賢之德以母兄之親太上之尊欲託躬於叢林山野猶不可得也。可勝嘆哉。蓋桓武遷都以降廢天子有焉。未聞流天子也。至是禍門一開因襲爲例。承久元弘陪臣之處天子每常遷之。荒陬僻海而後已。夫上皇構亂召兵醞釀積鬱既已如彼則六軍一敗髡髮乞降非悔非改過也。非勢窮力屈也。徒畏戎耳。其不知恥亦甚哉。

以信西謀陽定反人竄流叛徒以爲免。死教長已下祝髮爲僧者多爲義忠正亦出降。忠正者清盛叔父

保建大記卷之上

上

也。清盛以爲我殺之則義朝勢應殺父遂誅忠正。義朝固丐減爲義外帝果怒曰兄弟之子猶子。清盛已誅忠正義朝何辭誅爲義義朝遂使鎌田正清殺爲義。

臣愿曰臣之於君子之於父所在致死也已。義朝當勤王之日不得不抗父寧爲歐血之趙苞而不可爲指心之徐庶。禍亂既平其父歸我豈有其子從而殺之之道哉。雖方君命與俱就鼎鑊可也。源賴朝之舉兵捕伊東祐親將賞子祐清祐清辭曰

父囚子貴非所聞也。臣冀屬平氏時義之蓋邦將廢正氣萎墮人心遺道所以保元之政子不能庇父也。家將興正氣滂沛人心重義所以賴朝之起子不敢叛父也。源親房曰子或兇悖父得而殺之石碣是也。父雖無道子得而殺之未之聞也。名教之不振皇道之所以淪墜義朝不足言。信西執政事所令如此。王室欲張而不可得也。

戊午斬家弘已下子弟黨與七十餘人弘仁誅藤原仲成後三百四十餘年幾致刑措至是廷議以爲

保建大記卷之上

上

刑久廢不當行之諒闇信西竊奏曰非悉誅之忠臣後患故子弟黨與一無宥赦時以爲淫刑庚申詔遣左史生中原師信于南都發驗賴長墓詔僧寬曉使重仁親王髡髮癸亥詔遠流賴長子兼長師長隆長已下十三人惟前關白忠實以忠通保護乃免。

臣愿曰種子命上中臣祓之後上宮太子作憲法不比等著律令而格式之書相繼成編於弘仁貞觀延喜之間上尊重名器下砥厲廉恥刑不上士大夫辱靡至大臣雖仁愛過厚之極不能無萎靡

姑息之弊。而比之繫相於獄。斬將於市之殘忍慘酷。則厚薄仁暴。豈啻霄壤哉。當是時。誅反側之人。以爲淫刑者。其言出于過厚之餘。亦可見焉。蓋信西博覽。或通申韓刑名之術。將以張威柄。而懲後人也。非敢擅殺戮也。然佯定竄流實處。殊刑烏在。王者至誠太公之政哉。何以保無後禍也。

八月。法皇抵讚岐。松山造宮。直島後從志度。鼓岡竄居僻遠。居常不聊。親刺血書。五部大乗經。二年而成。平治元年春。送之。覺性法親王請藏安樂壽院。覺性

保建太元卷之上

上

及忠通爲奏。請帝不許而還之。法皇怒曰。叔姪交相兄弟相仇。自古有之。朕爲懺悔。親書佛經。特修冥福。非爲今生。而今且不許藏之。乃齮舌出血。每軸書曰。願爲大魔王。惱亂天下。以五部大乗經。迴向惡道。自是不髻髮。剪爪。衣舊褐。戴長巾。切齒瞋目。慘悴骨立。長寬二年秋八月己卯。崩于志度。年四十六。崩後亂逆相繼。世以爲所祟。敕建廟。春日河原。曰粟田宮。每歲八月奉祀。

戶愿曰。友其兄。篤其慶。周所以興也。天之報施。其

亦明矣。帝之於兄。惟恐除之。不啻屠之。不遠一人。不相容。亦已甚矣。空乎恩不被。民庶也。赫赫廟堂。以禍亂付所祟。臣未知其說也。後世論禍源者。往往歸罪美福門院璋子。烏羽帝之女御。而崇德帝色最淫。待賢門院璋子。烏羽帝之女御。而崇德帝之母也。白河帝鍾愛璋子。其間有詩。所謂不可道者。烏羽帝亦知崇德非己子也。故烏羽不怒於崇德。雖由婦言之。聽而白河之亂。倫實所出。而基也。後世淫情爲風。牀第不修。不至上蒸下淫。穢黷昇

保建太元卷之上

上

倫則幸焉耳。豈足以揭椒塗之範。炳彤管之輝乎。雖然。風化原于宮掖。治教端于閨闈。人君豈可不鑒乎古今。以知所戒哉。

冬十月戊午。復記錄所參決庶務。是歲敕五畿七道造太內。二年冬十月。太內成。徙御焉。

戶愿曰。凡有邦家者。儀制雖備。宮室雖嚴。而不能務乎自修。強於德教。則譬如魚之爛。外未見而內先潰也。故有神武良日之敬。而後可以底平定。有仁德身宮之儉。而後可以致富庶。有醍醐脫御衣。

之仁後三條拜北事之孝而後可以制格式均并
事置記錄所帝之任信西勵治如此而變生肘腋
血流禁署豈非不修德之過乎

保建大記卷之上終

保建大記卷之上

五

保建大記卷之下

潛鋒栗山愿伯立甫 撰

保元三年秋八月戊戌天皇傳位于皇太子是爲二條天皇甲辰尊前帝曰太上天皇冬十二月丙午行卽位禮初信西明鍊庶務鑒達治體洽聞富才廷臣無出其右前帝特倚信之朝廷大事莫不由出信西亦以爲己任帝卽位親重如故而權中納言藤原信賴爲上皇所寵稍預政請任近衛大將上皇將許之信西諫曰大將重任也雖相家子弟不敢輕與況信

保建大記卷之下

賴乎上皇默然信西退引諸家唐書唐曆唐紀楊妃內傳圖安祿山僭者之狀上之上皇未悟信賴聞之不安稱疾不出時太宰大貳平清盛結姻信西勢位踰源義朝義朝鬱鬱不樂信賴因結爲黨平治元年冬十二月清盛詣熊野己未白虹貫日信賴與大納言藤原經宗右近衛中將藤原成親檢非違使別當藤原惟方及義朝等反率兵夜圍上皇於三條殿放火燒宮殺傷狼藉幽上皇於一品御書所遷帝於黑戶御所自爲大臣大將以義朝爲播磨守

臣愿曰後世人主禁中與居婦女也嬖幸也庸人邪人也平治之厲雖承于保元而職由信賴矣嗚乎男寵之害舊矣然未聞召禍如此之慘也孝謙之廢皇太子以私通侍童彼其淫穢放縱顧不啻此也則其廢責之詔蓋欲以構成其罪者而若信賴寵滿志驕以庸劣逞凶邪上皇坐受之幽辱而不察信西所謂反臣在側而不知忠臣諫之而不悟者豈不爲之發也乎

信西素善天文推步當白虹貫日入奏會上皇御宴

保建大記卷之下

二

不得面陳因告宮人曰將有變速避之直奔南都信樂山又見星變謂我不免乃生埋土中信賴遣前出雲守源光保索而獲之斬首梟京師信西姓藤原名通憲任日向守髮髻號圓空後改信西其妻上皇之乳母也諸子皆布列顯要源義朝嘗求婚信西信西報曰我子學生汝所得而婿乎遂與平清盛約納其女義朝衛之

臣愿曰當時小說有言信西對梳水視面自相之知不得成相者亦告以不終因教免禍之方曰爲

僧念佛耳。信西爲繫髮甚矣。妄傳之難信也。若其如此。方且捨身事佛之不暇。而何必號黑衣之相。擬安城之公。而口銜天語。手握王爵之爲。信西嘗告賴長曰。我才而不庸。所以遁世。可以見髮。繼因于悲憤。而又安知其書紙障。吳桐何日。遇知音。亦非。憮時生。感遇事興悲。不得已。而托歌詩以自寫其苦心歟。是以一旦被柄用。奮然以邦家爲己任。造大內。復記錄所興內宴相機儀。禁道路執兵。止拘金神方忌。保元之治。有可觀焉。惜乎徒知義朝

保建大記卷之下

三

非己之類。而不復知清盛亦非己之類也。徒知諫信賴任太將。非所以保其身。而不復知使其子居顯官美職。亦非所以保其身也。庸人常明於所公。智者多暗于所私。豈特信西也哉。

平清盛聞變。自熊野還。竊遣非藏人藤原尹明於大內爲奉迎。謀藤原經宗。藤原惟方亦悔黨賊。勸帝出宮。乙亥帝爲婦人救出藻壁門。尹明奉劔瓊載御車。左衛門佐平重盛等迎駕于路。入六波羅。百官諸司相繼而湊。中納言源師仲奉神鏡出。上皇亦變服。御

駕幸仁和寺。

丙子。帝使重盛討信賴。義朝戰于六條河原。大敗之。義朝東走。信賴竊至仁和寺。求哀。上皇上皇爲手書請其死。帝不聽。丁丑。信賴伏誅。悉捕其黨。戊寅。賞清盛重盛等功。授官進爵。有差。禠反黨七十餘人官職。流信西子十二人。時謂信西諸子處流出。經宗惟方之所爲。

臣愿曰。當邦家無事。上之人欲振興廢墜。以文飾昇平。則搢紳之士不得不進。其人也。必鑑戒古今

保建大記卷之下

四

有所退省。而至得其志。傲慢奢侈。不能保終。當天下有事。則介冑之士不得不進。其人也。奮搏迅鷲。以務乎自效。而放橫不法。無復所忌。憚其始乎忠功。以起身。而終乎凶悖。以亡家者。往往是矣。是時車駕幸清盛家。攝關公卿奔走其門。挾天子以令將士。所忌義朝。舉族伏誅。功名無復比肩。武臣威望之盛。源平以來蔑有也。安知異日將相之權。不旣根于此歟。又安知異日赤族之禍。亦不已原于此歟。

永曆元年春正月癸未內海莊司平忠致誅源義朝及鎌田正清正清乃忠致之婿也。乙酉函送義朝首於京師。

臣愿曰虎投窞誰不快乎殺之也窮鳥人懷誰不惻乎放之也有罪與無罪也自古逆賊世有而未有義朝也蓋忍乎弟有焉忍乎子也甚矣忍乎子有焉忍乎父亦既酷矣既忍乎父又將以忍乎君也雖忠致不忍乎誅而天下將忍而誅焉世以惡淨海之甚而至義朝則不之罪反曰忠致源氏

保業本記卷之十

五

世臣弑其君義朝故速賴朝復仇無遺族名義之不明也其如此夫可以爲長太息也夫忠致高望王之後世任王官世司王邑大江匡房歷舉一條帝得人以平致賴列源賴光之上賴光者義朝之先而忠致乃致賴之胄也世系位祿未必在義朝之下臣聞其爲邦誅賊未聞爲下弑上也若謂之忍殺投我之窮鳥則似也而義朝乃食人之虎執之者無禁而阱之者有功今將不惡噬人而惡爲之阱不亦悖乎自源賴朝之後稱呼名號既已亂

而稗官小說從而錄之是非之淆真好惡之相反豈特此也哉

二月尾張守平賴盛使家士平宗清虜送源賴朝於六波羅囚之宗清家宗清待甚厚謂平清盛後母池尼曰囚人容止肖故右馬助右馬助者池尼所生先歿故尼感傷不堪宗清密告賴朝曰郎君欲免吾爲請之賴朝曰父祖弟兄皆亡矣唯有我在無復意人世冀爲僧爾宗清至尼許懇以賴朝之意尼爲使重盛乞之清盛清盛不肯尼泣且怨曰我爲之寢食失

保業本記卷之十

六

帝命亦不久矣若故殿猶在豈侮吾言至於斯乎重盛與賴盛再告清盛清盛不得已赦之遂流伊豆

臣愿曰義朝火白河殿功非不多也而恩之菲父不得保所以激成平治之亂也信西與清盛咸有罪矣嗚乎向踐餘兵可以興越楚雖三戶足以亡秦賴朝當平氏全盛收義舊於餘燼揭竿爲旗節馱爲騎走之富士川鏖之礪波山敗之篠原破之一谷殄滅之屋島壇浦豈徒人力蓋天亡之也故以爲滅平氏者平氏也蛭島流人岐祖孤兒與鞍

馬之小冠者何能爲乎。世以池尼故爲遺後愚者非通論也。

藤原經宗帝之外舅也。藤原惟方母帝之乳母也。謂帝曰：上當親政事，不宜使上皇知焉。上皇素惡經宗，惟方聞之，發怒召平清盛曰：朕之安危係彼二人，汝爲朕甘心清盛捕之，將殺前關白忠通，請滅其流，經宗于阿波，惟方于長門，清盛自是得擅威福。

臣愿曰：甚矣世多姦而人多術，一邪之起衆姦乘之，欲資彼顯然之邪以成我隱然之姦也。蓋一邪

保建大記卷之七

七

之欲有厭而衆姦之禍不測。信賴一庸人也，已所希不過將於禁衛也。經宗惟方固稱多智，其意將謂我帝之舅也，我帝之乳母子也，我徒可執政耳。信西何爲者？圓管方袍，翫邦家于股掌也。其志將以勦除信西而歸罪信賴，因斃信賴併及上皇也。夫信賴之逆雖三尺童子猶知其敗，一人之智豈不知其終不可依賴而當其起事？信賴曰：上皇可幽，二人亦曰：可幽。信賴曰：大將可任，二人亦曰：可任。躋躬戢翼，瞿瞿僚僚，若不敢爲崖異也。信西既

瞋，清盛還京則翻然如改志易慮，驟擁天子歸六波羅，始也讒黜信西之兒終也離間二聖之歡。天子已以其親子已而不之察也，百寮又以其功干邦而不之罪也。其隱然不測之志於是成矣。嗟夫，螳捕蟬而雀伺螳，不知有清盛者擁丸挾彈以擬其後也。姦人亦可以戒夫。雖然，一人者猶在則清盛不得專朝，二人者之竄也固二人者所自取而豈直二人者之禍也，亦王室之不幸矣。

永萬元年夏六月壬寅，天皇不豫，太漸皇太子順仁

保建大記卷之八

八

受禪，是爲六條天皇。尊前帝曰太上天皇，稱新院。秋七月甲戌，天皇行卽位禮。乙亥，新院崩。年二十三。時平清盛勢威日盛，上皇厭之，葬二條天皇諸寺會葬，興福寺延曆寺爭班生隙。丁酉，延曆寺僧懷甲燒清水寺京師訛言，上皇令僧討清盛。清盛子弟會六波羅聚兵自衛，廷議使諸將士衛護禁中，上皇幸清盛第親諭之，清盛稱疾不見。

臣愿曰：一條帝在位政事一詢關白，不欲使上皇知之，時有帝長于政而短于孝之譏，以故二宮不

協每多猜忌終帝之世上皇甚親倚清盛帝崩上皇專決機務廢立與奪惟意所欲而清盛以積威弄朝權了弟居職家僕滿班食邑幾踰大下之半嗚乎人道之變莫大乎父子生隙也世保元之兵所由而起敗監亦不遠矣而上皇乃與清盛之勢與時王相陵壓至不可制無復奈何何異求既覆之車驅駕而騁其轍也豈亦得不顧其覆哉不孝乎親不慈乎子而仁乎民未之聞也帝長乎政可知也已

保建本記卷之十

九

仁安元年冬十月庚辰以憲仁親王爲皇太子憲仁上皇第五子於帝叔父帝年三歲而太子六歲時人笑之十一月以權大納言平清盛爲內大臣二年春二月爲太政大臣明年辭官薙髮更號淨海三年春二月壬子天皇讓位皇太子是爲高倉天皇辛酉尊前帝曰太上天皇稱新院未冠之上皇自古無有二月壬子天皇行卽位禮安元一年秋七月庚申新院崩年十三

臣愿曰昔葛野進奏曰國家之法神世以來子孫

相承以襲天位若兄弟相及則亂由是起蓋有邦者當慎祖訓明名分以定民志杜窺覷也故立君必定於一種而君臣之分嚴矣故源融雖賢不得承統也立子必定於正嫡而嫡庶之分明矣故龜坂忍熊雖長不有天下也所謂植遺腹朝委裘而天下不亂分定故也今叔以姪爲父少以長爲子則父不父而子不子也何以防臣之不臣也是故赫赫邦則重父子相紹所以嚴君臣也

保建本記卷之十

十

冬十二月丙寅以前大政大臣淨海女德子爲女御二年春二月己酉冊爲中宮是歲宋明州刺史上書獻物稱謂無禮大外記清原賴業以爲宜卻法皇不聽

臣愿曰華夷何常之有華而用夷禮則夷也夷而進於華則華也古之制也聊嘗論之天地者天根之凝聚于中也人乃地氣之游環于外也天地之間何往而不中又何往而不天故彼此皆自稱曰中國蓋對外國之通稱而固非言此土在堪輿

之正中也。至其或爲神州或爲神國。曰海內爲天下。而外爲夷爲蕃。則雖俱非。九九總域之通言。亦各國自稱彼此無相害。是以淡海公奉敕撰職員。掌遠人謂之玄蕃。萬多親王。區別姓氏。秦漢之裔。收之諸蕃。源親房亦曰彼以我爲東夷。猶我以彼爲西蕃也。近學墮乎市井。文不振乎指紳。惜乎舊典而不之顧。或呼元明爲中華。自稱爲東夷。殆幾乎外視萬世父母之邦而無蔑。自憲令之著矣。昔隋王贈書曰。皇帝恭問後皇。廷臣猶疑其無禮。

保建大記卷之下

況以一州刺史。上書失儀乎。當從賴業之議。而納信報答。非所以示國體於遐邇也。

權大納言藤原成親。北面藤原師光。有寵於法皇。師光鬚髮改名西光。治承元年。夏五月。以西光讒。流延曆寺。座主明雲僧徒。奪之路。事寢不問。初成親怙恩。望爲近衛大將。淨海超授子宗盛。成親忿懣。與藏人源行綱檢。并違使平康賴。西光等圖滅淨海。數會議。法勝寺執行後寬鹿谷別莊。法皇亦將降之。僧靜憲諫而止。既行綱告之。淨海淨海殺西光。流成親於備

前將幽法皇於烏羽。以平重盛切諫而止。從是法皇與淨海大作猜隙。三年秋七月。重盛薨。冬十一月。淨海積怨法皇。率兵入京師。法皇憂懼。諭以不復與政。事淨海不釋。罷關白基房。奪太政大臣師長權。大納言源資賢以下親近法皇者。三十九人官職遂貶。基房爲太宰權帥。流師長于尾張。幽法皇於烏羽。

四年春二月癸卯。天皇讓位於皇太子。仁是爲安德天皇。尊前帝曰太上天皇。四月甲辰。入皇行即位禮。時年三歲。上皇仁孝。自法皇幽厄。悲惻成疾。夏五

保建大記卷之下

十

月丙寅。法皇第一子以仁王。以法皇被幽。諸平恣橫。與從三位源賴政起兵謀除淨海。下令旨於諸國。園城寺興福寺僧徒皆應之。初賴政有怨淨海。激以仁王曰。法皇幽辱。王忍坐視乎。遂勸以與諸源戮力。誅淨海。奉王即位。以仁王使散位宗信作令旨。既而謀漏朝議。流以仁王於土左。法皇聞之大憂。至是朝廷遣兵圍以仁王。高倉邸以仁王奔園城寺。丁丑遣藏人頭平重衡。右近衛權少將平維盛等擊之。戰于宇治。以仁王賴政敗歿。

臣愿曰。以仁王之徵兵也。今日即位行賞。每讀之

未嘗不悵然嘆惜也。當急難倡義之初。縱令賴政

有韓袁上號之請。而王宜有劉虞厲色之言。顧乃

幸禍亂務自尊崇。此王亦叛君父耳。何以討淨海

哉。然則王無功乎。曰。淨海緣亂離建奇功。以舉朝

無識柄用太過。專務鴟張輕蔑王家。終幽閉法皇

脅迫上皇。貶斥丞相大臣。以擁立外孫。稱禪之儒

子。罪惡貫盈。弑逆且且。當是時。未有能抽一矢

發一騎而內向者。而王欲以遷宮。軟實灑血投袂

備建本記卷之十

非

鼓舞緇徒罪諫。以興平氏百萬之兵。抗雖事不

而大義既已伸天下。豪傑賴以起義。旗賴以奮。扶

皇家之將顛。出法皇于幽厄。果誰功也。義仲欲立

北陸宮。正以此也。王豈無功哉。

夏六月癸未。淨海遷都福原。車駕發京師。幽法皇於

新都。秋八月。伊豆流人源賴朝奉以仁王令起兵。九

月源義仲起兵。信濃冬十一月辛未。淨海奉帝及法

皇上皇還舊都。十二月法皇徙平賴盛第。與上皇同

居淨海。不復禁近臣出入。請復聽政事。且以美濃讚

岐自奉法皇許之。

養和元年春正月辛酉。上皇崩于池殿。年二十一。閏

二月淨海薨。

先是源義仲戰屢破平氏。壽永二年秋七月進據延

曆寺。法皇夜出宮。密幸延曆寺。公卿繼至。平宗盛挾

帝及神器奔西國。義仲源行家等入京師。法皇以京

師無主。卜決之。八月壬子。立高倉天皇。第四子尊成

爲法皇之太子。即日踐祚。是爲後鳥羽天皇。時年四

歲。踐祚無神器。古所無也。九月遣參議藤原修範于

伊勢告立天皇于太神宮。

本

伊勢告立天皇于太神宮。

臣愿曰。世謂壽永立主京師。既權變之宜。而延元

預製偽器。又方略之得也。臣以爲不然。法皇不思

祖訓所由。邦典所原。擇天子於嬰祿之中。而踐寶

祚於無璽之日。此無神器也。寧待平氏顛敗而嘆

之沈沒哉。後醍醐不能推至誠以任威靈。區區辛

勤。製爲偽器。此淆神器也。豈須南北紛爭而辨之

正僞哉。古曰。天人之應。捷於影響。天聰蔽而神鏡

災。乾剛闕而寶劍失。嗟乎。天命常原於人事。妖災

必由己而起。容不謹哉。

辛巳。法皇命源義仲討平氏。冬十月庚子。復源賴朝位。十一月。先是義仲掠法皇莊園。縱士卒侵牟。良民至是車駕幸法住寺。殿微延曆寺園城寺僧備義仲橫暴。義仲犯法住寺殿。縱火燒殿。殿傷百餘人。帝幸開院。法皇遷攝政基通。第十二月。法皇賜義仲平氏故地八十餘所。義仲請院宣討賴朝。法皇畏逼。不得已許之。

三年。後鳥羽元
曆元年

春正月甲辰。以源義仲為征夷大將。

軍。

臣愿曰。法皇於義仲。無議而不聽。苟不為此。至於以身然存。在天可否。在己悖道。苟免。則非盡己順天者也。賴朝不怒乎。賜院宣於義仲。而怒乎。賜義經何哉。方諸平未滅。關域雄視也。將以推尊王室。攬天下之心。所以不得怒乎。賜義仲詔也。至外患既除。威福在己。則所惡唯名分耳。將以揚朝廷之非。而掩己之罪。託於正。以雋不正。所以義經謀己。公然怨怒。不敢入朝也。義仲驚悍。無足道者。反

復時勢。湊會事情。則賴朝之詐術。亦不得逃於千載下。

先是源賴朝遣弟範賴義經將兵入討。源義仲庚戌戰于宇治。勢多大破之。義仲伏誅。丙辰。敕賴朝討平宗盛。二月丙寅。範賴義經大破平氏於一谷。秋七月甲寅。行即位禮。九月壬子。範賴破平行盛於備前兒島。

四年。

後鳥羽元
治元年

春二月壬申。源義經破平氏於八島。

二月丁未。大破之。壇浦虜平宗盛等。宮人抱天皇入

保建大記卷之下

宋

海崩。年八歲。二位禪尼取劔瓊。自沒海。軍士入御船。開神鏡。雙目頓眩。義經獲鏡瓊。徧索寶劔於海。不得。夏四月。鏡瓊入京師。以書御座。劔擬寶劔。源義經之在西海。頗不循兄賴朝節度。梶原景時因諸之賴朝。不聽入鎌倉。會源行家謀滅賴朝。義經附結之。冬十月。至法皇宮。迫請追討賴朝。之詔。辭氣不遜。勢將挾朝家奔鎮西。法皇不得已。下院宣討賴朝。賴朝遣將上擊義經。義經出奔。賴朝怨法皇。不肖。八朝十一月。法皇遣使鎌倉。告不與天下之事。且教諸

國補行家義經

臣愿曰當義經請追討敕法皇俾人問藤原兼實兼實因奏曰追討敕不當用之無罪之人安敕賴朝曰義經有罪則當致鎌倉而誅之不宜騷擾京師也然義經於卿功固大矣罪安在速奏之若賴朝不奉詔則處之違敕以聲其罪如此言順名正不然弟討兄王師誅無罪也兼實之議不曲折著明乎法皇不能悖信義以持邦家徇利食言曾莫之恥使賴朝肆其不臣無所忌憚邦之大綱墜矣

保建本記卷之三

本

其後後鳥羽討北條賊陷京師則復授其官賊請敕擊勤王諸將則隨從其言匹夫重然諾且不爲也況王言乎朝以誅之暮以賞之天下萬姓何所仰止也將以撥亂而適足以長亂悲哉

前因播守大江廣元告源賴朝曰世道澆季叛逆未殄公雖鎮東道而諸道不必用命屢役兵諸道乃兵疲邦費耳不如國衙莊園補守護地頭因以制天下賴朝深善之遣北條時政於京師奏請諸國置守護地頭以追捕盜賊常賦之外每畝課兵糧十二月致

書右大臣藤原兼實怨法皇以義經補九國地頭行家補四國地頭且告所請在爲邦制賊而非私于已法皇悉從所請

臣愿曰平治已降王室不靖當高倉安徳之間上之君王遭幽下之元元塗炭賴朝攘臂而天下響應救蒼生於溺援神器於危上下咸受其賜微管仲誰保社之不左也而其巧譎百端束縛馳驟遂擅兵馬之權殆擬端拱之重使天下後世惟知有作殺作生之斧鉞不復知有賜爵授官之褒冕

保建本記卷之三

本

焉於是賴朝之功不得以掩其罪矣恭惟我邦之古天子輔相燮理陰陽而已尊崇祭祀而已種子天富上祀輔政神八井耳爲忌人弼政所謂祭政惟一正謂此也如經營遠邇不懷黎黔益申食國政大夫之所掌也復考于上世伊井諸尊左持白銅鏡生大日靈尊光華明靈照徹六合遂授以天位照臨下土人君之象也右持白銅鏡生月弓尊其德亞日遂輔弼天位配日臨下大臣之象也既而迥嘗顧眄生素彥鳴尊遂降於天裁成下土後

世武將鎮撫之象也。事代主將八萬四千。彥狹島都督十五國。源平世爲將帥。雖時有廢置。勢有強弱。而其翼戴皇化。鎮制還方。自古洎今。有規模相似。然因襲之久。慣習之熟。不能無尾大難掉之弊。故以大已貴之賢。而不能速應命也。以鳥羽帝之威。不能禁武士屬源平也。然則賴朝開府。鎌倉鎮馭諸道。猶大已貴摧伏強暴。經營天下也。但朝廷無植劍宣詔之臣。故其權得以傳之世世焉耳。夫廢興天也。隆替時也。苟有志于復古。則必修其本。

保建大記卷之十

九

以服其心耳。徒屑屑于甲兵之末。而欲驟成其功者。猶決堤塞流。積薪禦焚。非徒無益。而又損之。若後鳥羽。若後醍醐。非無志。非無功。然或撲之不滅。而愈熾。或芟之僅平。而復大茂。何也。蓋亦未修其本也。聞之人君能律身慎德。則天下人心不期服而自服。不期畏而自畏。人心所畏服。天命從而歸焉。天命所歸。孰能禦之。爲人君者。其可不致思於此哉。

文治三年夏四月甲午。奉諡養和天皇。曰安德天皇。

保建大記卷之十

十

臣愿曰。天皇之號。古有議所定也。臣竊以爲正同春秋王必稱天。萬世不易之大法。而遠出秦漢已下。帝皇並稱。誇大無義。尊號之上也。夫皇而稱天也。其所居者天位也。所治者天職也。所賞乃天命。而所刑乃天討也。尊固無二焉。而道莫弗公也。自宇多帝停諡。朱雀帝停皇號。上皇太后以寺院自居焉。不啻宗孝言所謂蓮府化梵宮也。闕大典損國體。莫大焉。源親房以爲非。臣子之道者當矣。近世諡曰天皇。僅安德焉耳。然江匡房之撰傳。藤通

憲之著史。雖後世天子稱以天皇。而不以院。其亦有說矣。臣豈不得而據之乎。

建久元年冬十一月丁巳。源賴朝入朝。屢謁。法皇陳誠款。朝野稱之。三年春三月乙酉。法皇崩。年六十八。臣愿曰。或疑是書。應止賴朝總追捕使。曰。後白河亂世之主也。以賴四宮。遽繼大統。雖九五帝黜陟從心。政事不爲小久。享年不爲不永。而播遷拘幽。幾至亡邦。何也。太倫小明。而紀綱不振。兵權不分。而威福下移。舉本朝上下二千三百餘年之變。集

在位。在院三十八年之間。雖曰天運。蓋亦人事。嗚乎。邦家艱于清盛。危于義仲。安乎賴朝。以微乎賴朝。蓋危邦之臣。罪非不巨也。邦而被危。其無制甚矣。蔑君之臣。惡非不著也。君而見蔑。其失道人矣。使爲人上者。照明如日月。誠確如金石。則闇兩瞽於震霆。蜚螫滅於大陽。雖列自邪於廷內。且不敢逞。公麼。眩小技以蔽聰明。移心志也。使爲人上者。孝友積乎內。慈仁彰乎外。則彗孛化爲景瑞。鴟梟變爲鸞鳳。雖有窮凶極惡。挾材任數之人。方且陳力奉令之不服。何毒流天下。延來世之有故。後王欲端登本源。則豈徒切齒莽卓。以懲于凶逆哉。必能流涕桓靈。而勉乎自修矣。此書終是。豈可已哉。

保建大記卷之下

廿

保建大記卷之下

終

宋理宗臨軒策士得文丞相考官王應麟奏曰是卷古誼如龜鑑忠肝如鐵石臣敢爲得人賀潛鋒栗君之修保建大記而上故彈正尹八條親王也古誼忠肝世宜有知之者雖遭遇之殊

保建大記跋

三

塗小大之不侔而士君子憂世濟時之志無以異也既而君來仕水藩西山公暨龍作公知其能而優待之時觀瀾宅君同在史局相得驩甚屢將此書折衷討論宅君服其精確而神器之

議終不能協亦猶劉道原之論正統不與溫公合而溫公能藉道原以成通鑑可見君子和而不同也余亦與君同監編修者涉歷既久相知最厚每夜集酒酣使余講左氏傳右尹子革夕

保建大記跋

生

楚子章促席側耳以爲快時或出此書亦相與商量余一言貶之曰此經生之常譚耳烏足貴哉君亦不以爲迂抵掌談笑今思其事如數日前而君謝世殆將十年矣孰謂壯者去而老者

留才者沒而不才者存乎。悲酸梗塞不能自堪。則又以酒澆之。曰脩短天之所賦。而慶弔人所時有。余方欲爲得人賀而君溘先朝露。今讀是編。不得不於紙上弔之。而不欲作兒女子語。弔

保建大記跋

也。阮嗣宗登廣武觀楚漢戰處。歎曰。時無英雄。使豎子成名。嗚呼。嗣宗之所以痛貶漢高。乃其所以深予之也。余於是編亦云。宅君弁其首而推獎之。世果有知之者。可以託不朽矣。

正德甲午仲冬上澣

水戶府下澹泊齋安積覺跋



保建大記跋

主筆

正德六年丙申孟春穀旦

六角通御幸町西八町

茨城多左衛門 繡梓

向陽林子（林春齋）

撰

本朝稽古篇

寛文二年（一六六二）松柏堂刻本

據寬文二年（一六六二）
松柏堂刻本影印

本朝舊古篇序

演成中華之往躅者、歷朝之正史、偏記也。正史偏記、極博矣。牢籠之者、通鑑也。通鑑最浩繁矣。該節之者、舊古錄也。許平仲之舊古千文、蓋原於此、而甚約甚

簡者也。家兄向陽子本朝舊

古篇之作、職之此由、首篇千文、上卷自神代至持統也。次千文中卷自文武至光孝也。其次千文下卷自宇多至後冷泉也。素意欲勒（ヒキセント）本朝今古千言、而

事有餘字、有限故倍之、又增之。既三千言、皆四言也。鍾繇逸少興嗣胡明仲及彼平仲之千文、悉四言也。肆（カクニ）今擬之、然不可（サレズ）閣筆。千後冷泉、豈不能無續篇哉。乃自後三條至元弘、四千五百

字是續之上也。篇既不拘千字、故變體製為五言也。自建武至稱光、二千五百三十四字是續之中也。又改格法為七言也。自後花園至慶長、庚子二千九百六十八字是續之下也。亦是七

言凡續篇一萬二字中華先輩
萬言之書多矣方今雖分上中
下而次序接續井井森森固是
萬言篇也且又附以總括歌七
言三十句富哉言乎蠡生于桑
域者不可不知其父母之國之

事然而多不注心或畢之而不
省抑國史曩牒傳播踈微是以
益難強記家兄於本朝之學
閱覽有年爰屬大事于數句蒐
多端于短章以叙其實以撮其
要匪胸吞本朝之石渠則何

繇臻茲也哉中華詠史之韻語
一舉口述者四言則史學提要
焉五言則觀碁大吟焉七言則
所謂三皇之前不可傳云云焉
今舉皆在此篇可謂備矣余今
倣之欲作四五七言而既已贅

矣畫葫蘆矣竊欲遠窺胡氏之
管見近類顧氏之捷錄而綿綿
泛泛管城公頭可禿然不得如
箝在口聊論前三篇續三篇之
首尾睠夫天七地五之神世存
而不論敬之而不妄議罄余彥

之後皇胤繩蟄可尊可仰馬子
之紀阿禮之口舍人之書昭昭
焉持統者健婦也壬申之亂所
謀贊于天武不少而後當宇草
壁沒而珂瑠幼高市皇子功高
望隆是以待其薨皆乃讓位于

珂瑠廼是文武天皇也文武之
政教有可觀者唯惜寶壽之書
于半百之半爾後真道繼繩等
史錄煥煥然嚮無陽成之昌被
則光孝焉為臨宸平基經之廢
興伺愧子孟退昌邑立病也平

光孝不為庸主而早崩寬平帝
之脫屣時僅而立何其太早哉
以其左祖菅道真故時平有所
強為而未必出自帝心乎果如
何彼實賴朝綱之新國史集字
不遺可勝歎哉藤氏之威焰薰

天冬手乃至後冷泉也後三條
久在龍樓頗讀書史常白眼于
藤氏遂即皇位使藤氏改頭換
面吁英斷卓矣而後政權入上
皇之門既而武臣強梁平族殲
矣賴朝開油幕而右北條氏累

世威重是所以後醍醐帝逆鱗
舊發再開皇運也雖然王度如
批建武之變四海糜沸忠臣義
士誠有之無奈時機世態何也
已於是皇統南北分矣足利氏
至二世而混一焉積慶不絕義

教雖遙平持氏而不能親免滿
祐之白又何其怠之至此哉滿
祐舊然歸播陽當時扈從之羣
士何其怯懦之使然哉浴中之
防備何其不嚴之如此哉自後
足利氏漸衰式微群國相持日

尋于戈邵堯夫曰北齊舉燭火
後周馳星光隋能一統之駕福
于巨唐想其應仁以來之割據
燭火耶星光耶織田頗倖其功
豐臣全并吞之駕一統之福于
大神君者也嗚呼此篇之奧因

非冥行于國史者之可啓眼然
倘就而聞其大綱浸展草子粗
繙舊冊以旁通之則必可有所
得豈可容易見之乎然則此篇
誰可不謂之國史捷徑乎況其
每卷之所託始所指終最有深

意而不爲偶然乎總括十五韻
示踐華人之往轍勿謂作古矣
况又三千之唾珠繁於前
萬之言金錯錯於後乎昔桓榮
之膺選其替古之力也今此篇
信是家兄螢雪替古之力也
芻蕘至若家兄之替古豈唯是
而已哉二典禹謨既已曰若替
晦庵小學之篇既早替若夫釋
氏替古畧不足云也萬治三祀
上章困敦建子之月讀耕子林
靖謹序

本朝替古篇

向陽林子撰

目錄

千文上

四言 二百五十句

每四句換韻但篇

叙自神代至持統撮舍人親王所紀

千文中

四言 二百五十句

每八句換韻但篇

叙自文武至光孝撮真道以來至善行

所紀

千文下

四言 二百五十句

每八句換韻但篇

叙自宇多至後冷泉採拾國史畧及

釋官小說而述藤氏世權

續篇上

五言 九百句

四千五百言

叙自後三條至後醍醐元弘而述上皇

政務武家權柄

續篇中

七言 三百六十二句

二千五百三十

叙自後醍醐重祚至稱光而述王室再

興又為武家之世而王統一絶

續篇下

八言 四百二十四句

二千九百六十

叙自後花園至後陽成慶長庚子而

述王統僅存武家式微群國割據而

後天下一統

千文上中下七百五十句合三千字

續篇上中下千六百八十六句合一

萬二字

總括歌

七言 三十句

二百十字

七篇都合二千四百六十六句一萬

三千二百十二字

本朝誓古千文上篇

天神最初曰國常立次稱狹槌豐斟相及
維此三世獨生無對泥煮沙煮陰陽分態
所道所邊面足惟根一氣五行萬物之元
諸尊冊尊爲夫爲婦乾坤道合蒼生父母
天照太神地神之始百王之祖至尊無比
仰瞻如日遍秋津洲萬古不易靈德焉度
素尊黑心逐於根國八百萬神順帝之則

高皇產靈有女約婚配悉穗耳降誕皇孫
號瓊瓊杵爲下皇主經津健甕先驅勇武
彼大日貴避入隅宮天覽屋根輔翼有功
到處無敵日列皇居火闌火見一獵一漁
昆弟相責弟約海神得瓊滿潮兄遂爲臣
龍女生子乃是鴈草天七地五大哉神道
人皇第一神武夫皇戰艦西進軍向東方
爰有強敵曰長髓彥王師未克退而復戰

道臣爲帥卿導者鳥中列既定攝原建都
綏靖繩武其嗣安寧懿德孝照孝安孝靈
孝元闡化以傳崇神擇將發遣四道掃塵
垂仁御宇躬建祖廟號列相攸神風光耀
倭姬負潔久在齋宮鎮護帝室天祿無窮
景行在位倭健爲兒西征梟帥東誅賊夷
雄偉絕倫功成凱旋毒蛇當道俄爾賓天
成務代立克讓仲哀武內宿禰始列三治

挂哉神功皇子有身指揮三軍平馬弁履
臨朝年久坤位獨尊應神兼繼廟曰八幡
仁德克道讓位相推王仁詠歌難渡梅開
皇運丕圖民戶豐饒闡國外平咸言聖朝
屢中遭難幸然後位國史始置連四方志
撥亂有功是爲反正允恭謙退自稱多病
群臣勸進不能固辭蠅蝻之詠屢蒙通姬
安康遭弑雄畧暴惡清寧無嗣太寶誰託

億計弘計艱難備嘗在帝側果爲儲皇
伯仲相讓女姊稱制弘計先立三年早世
億計踐祚武烈其子時有反臣真鳥及麴
幸雖誅賊惡過桀紂天奪其年帝統絕後
繼體側微北在越前金村奉迎劔重相傳
安閑軍化共爲庶兄延及嫡子乃是欽明
百濟貢獻釋氏之像尾興忠言稱曰渴仰
敏達英主最好文史高麗上表讀者原爾

甲明即位馬子債佛厥戸阿黨守屋不厭
二臣側目國家生變阿都戰爭守屋中箭
邪徒驕戾赤擣賞賜太子得志立天王寺
崇峻暴崩罪歸阿誰推古女主恭己無爲
十七憲法傾心三寶胡風盛行神跡如掃
儲貳歸泉遺言田村謂之舒明藤氏高門
蝦夷不鹿父老子壯傍若無人權勢難當
皇極垂簾鎌子辭職皇弟皇子臨謀戮力

逆臣伏誅孝德養位大化建元白雉呈瑞
分置八省並立百官左右內臣朝政不安
齋明車祚百濟乞兵豐璋歸國官軍西行
天智勞務唐將不利白江再戰柝市死事
官車晏駕諒闇居喪滋賀遷都帝德道廣
背在龍濟問周孔道南淵先生行實未考
武而能文百篇奎章字字金主惜今則亡
內臣加大且授織冠左右之上置太政官

矯矯其姿鳳翔龍騰中興之君山科有陵
太弟出宮太友在朝吉野脫難戰瀬田橋
壬申之亂正統着眼懷風寓意國史難刻
天武大行群臣上誅持統北晨太津叛死
處處遊幸行在停輦免冠諫者有神納言
草壁早殂高市掩刃遂遜皇孫太上天隆
神代十二人皇卅一舍人親王編年之筆
旧記合考大綱著述

本朝誓古千文中篇

文武馭寓大寶紀年繼有嘉瑞慶雲見天
御製倭歌楓流龍田霧渚吟詩月舟影鮮
釋奠權輿惟馨黍稷同漢高祠何論殊域
粟由入唐賜宴麟德修聘習經師趙本默
外戚擇入藤史秉柄茲奉明詔撰定律令
母有元明姊有元正女帝相繼閨範貞淨
分賦闔國鑄和銅錢靈龜之瑞養光之泉

六十餘列風土記編淡海公子四家連綿
天平皇帝營建東大稱三寶奴百姓誰賴
似彼梁武捨身同泰廣嗣作亂乘輿狼狽
忽避倭京遷恭仁宮桓桓東人平賊竭忠
信佛自若無奈昏蒙末助雖天行基被崇
祚胤無男冊立孝謙押勝寵幸穢德不嫌
赫々大師民具爾瞻無晝無夜入侍御簾
時有妖僧其名道鏡自內道場俄被延請

醜聲彰聞與押勝諍彼被誅滅妖僧獨盛
帝既內禪立太炊主未幾廢黜淡列恨長
彼僧何者漫稱法皇群臣切齒獨步彊梁
僧猶不滿欲為至尊宇佐奉使和清直言
無悟其種非帝者孫逆威不憚自深禍根
天皇掩粧身如窮鬼昨日君公今日爾汝
欲贖其罪誰人可許野列之窟幽死行旅
維時首相藤原永手同族百川勢氣赴々

平官清塵勲業無朽宗室多種各擇誰某
光仁回賞天智之裔正統紹運南面治世
吉備大臣超懸車歲上表致仕遂老私第
朝衡在唐留滯不歸本自摩詰交際不違
遠在異邦不忘王畿時有計聞贈爵揚輝
桓武相攸建平安城左右相並定為帝京
真道修史著其才名繼繩代之事詳而精
舊野清公遣唐奉使官船載行澄桃海李

台嶠古風瑜伽法水神殷開基東寺資始
蠹斯巢夷邊境侵掠王師屢征賊勢猶壯
爰選元帥田村為將擒彼渠魁功成歸嚮
清元神主握國之鈞或為耆老或為懿親
任右闕左猶待其人延曆之久二十四春
平城嵯峨淳和連枝馳翰墨場作文賦詩
凌雲風起秀麗花披經國廿卷才子肩比
大同上皇居寧樂城壁惑藥子委任仲成

兄弟闕牆鴿原不平干戈相挑震動兩京
弘仁天長坎艮親愛授受之際始終無悔
弟姪推及姑射相對怛負廢位黨類分北
兼和之世王室繁富大内制度盡義締構
左右豎橫共定廣袤十二街中車馬輻輳
母為橘姓右為藤氏橘實垂垂藤蔓累累
塊視馬鄧盃看許史實者早落蔓者盛矣
頃間儒臣野篁其尤文章筆勢博識誰儔

奉談探題月明隴頭遣唐不景流寓陽列
秘府畧書負主所撰大部成堆積至千卷
善繩國紀時事悉見其餘俊秀逐年舉薦
各嗣緒嗣藤家之良東房誕女配不德皇
文德群叔源氏數房曰倭曰弘明定融常
仁壽齊衡光陰惟競天安仙遊雲埋月鏡
實錄今在是善筆勁清和幼冲外祖攝政
貞觀十八己卯丙申格式軍修追尋弘仁

早儻萬機脫屣紫宸水尾之山閑居避塵
陽成不良人物殺戮其經度量我國博陸
諸葛按劍左府屈伏假出宮門輦輿不獲
光孝齡高在常陸藩大臣翼戴仰望天恩
芥川行幸黎民負暄是負是忠吹簾吹填
叔曰定省立為儲君時平元服榮華超群
三代政事實錄云云自是以後正史無聞
得官小說所記紛紜

本朝誓古千文下篇

仁和之末宇多登極藤公關白為帝輔翼
賢聖障子金園設色寬平改元群僚就職
阜爾營三術業專攻負觀攀桂靡倒群雄
鴻臚館伴蕃客迦箇出守南海錦纒隨風
至是徵庸歷試顯要坐花醉月侍宴歡笑
亞相右將官高德邵同時英傑紀寬善耀
帝遙釋部辭去北關仁和之寺差哉之月

本朝誓古千文下

受法益信御室薙髮名山勝水徵幸足跡
昌泰初年二相對偶時平為左管公為右
兩家有隙憎彼讒口左遷事府督責奔走
本院專政閉葉欣榮有子猶弱忠平代兄
撰延喜式總裁功成百官職事永為章程
古今倭歌貫之秉貞繼萬葉後名亞山中
卷千首錦繡花葉歷代撰集由是準擬
御宇年久國富家肥知外邊寒夜脫御衣

驚授五品不肯于飛人云聖代未辨是非

東夷蟻聚利仁侵雪雷震清涼王座蹉跌
官靈為祟盡禁妄說醍醐雲迷群臣永訣
兼平天慶梟雄乖睽將門在東純友在西
舳艫浮海旌旗鼓聲于戈弓矢閑塞馬嘶
貞盛秀卿好古遠保在此在彼水陸擊討
或被束縛或中箭倒元帥發遣歸自半道
彼貞信公一品相國追昭宣例人臣位極

本朝誓古千文下

具越通書名播異域帝室元舅孫子蕃息
實賴師輔左右大臣父及兄弟三公無倫
天曆天子詩歌吟呻風月遺興朝多才人
兼明同胞是平為兒管江一雙朝綱文時
五臣撰歌對禁舍梨鶯奏管絃維竹維絲
延喜並稱太平頌聲申來天道益謙虧盈
太內有災神鏡掛櫻皇居焦土土木經營
閨門不正納登子姬兄弟聚塵政道日衰

鄭衛淫風誰下傷悲今古皆然鑑戒在茲
字和不豫權在清慎進退任心明黨阿順
西官左府宗室之俊俄遭事變京師動震
遠謫筑紫蒲仲加恩蒲仲何人清和曾孫
武名藉甚建立家門累世將種固帶深根
圓融幼童伊尹爲輔兼通兼家一奪一取
賴忠傍觀同族系譜骨肉寇讎袞職無補
天皇如尸兼家虎視舉世惑佛君臣倦事

本朝聖曆十文下

三

官家甲第爲院爲寺圓頂方袍更不慚愧
捨子讓姪皇統二流成長遜位嗣子惟柔
藤氏彊梁似不安劉寬和之主早喪好述
夜半避宮星變現天奇哉晴明占候不愆
玉趾踏破幾多山川華山之幽悠悠經年
正曆庚寅兼家尋覓道隆道兼太柄自兼
道長伊周叔姪忌憎姪被遷貶叔獨進昇
張大跋扈一時榮華諸子皆貴冠蓋趨衙

皇后皇孫爲祖爲爺人佛新鑄法成蘭開
省中寂寂帝如弁髦聊嗜文字寬弘風騷
匡衡以書江氏之豪武部赤漆女中握毫
能書之妙俊賢衍成某平敦厚不登公卿
西望龜山憫彼兼明公任致仕朗詠遺名
長和如夢寬仁治安萬壽長元甲子若干
道長自若男女團圓嬖妍重喪悲淚不乾
東有忠常城傍海築賴信跨馬如行平陸
一舉戰克勢似破竹賊以爲神乞降就戮
長曆之政附屬賴通自徒敷誼私而不公
群聚相門官兵戰政中僧驕恣屢驚宸宮
官使奉幣二十一社壽天有命天年不假
永兼與賊據塞掠野鎮守府將擇勇健者
賴義赴任十二年戰始敗終勝遂屠河堰
天喜康平治曆年轉藤家世權皇道如線
文獻不足傳聞寫繕

庚子孟冬、偶閱許魯齋全書、稽古千文
述歷代簡要、聊仿其體、言本朝之事、
然自神代以來、事跡非千言之所可盡、
故演爲三篇、猶未能畢其事、有頭無尾、
豈廢作續編之興哉、

向陽林子

本朝替古續篇上

傳哉延久帝。震宮儲位堅。匡房爲侍讀。講經御座前。實政爲學士。外任賜瓊篇。登祚親萬機。欲抑藤氏權。新建記錄所。政道日覃研。賴通老未退。攝關五十年。至是自上表。間居宇治邊。子弟雖居職。每事不能專。王城初改觀。百司各朝天。明詔如日月。萬民解倒懸。天何不福善。恨英等不長。白河

美前烈。皇風雲飛揚。教通及師實。爵高紫不張。大井川舟遊。嵯峨野獵場。紅楓錦葉泛。鷹師手臂蒼。顯季與俊賴。詞花共聯芳。輔仁及俊房。詩賦幾成章。昆季齊才名。敦基又敦光。經信有多藝。此輩豈尋常。醫家有雅忠。鴻術准扁倉。無奈帝好佛。法華深宸筆。法勝寺層塔。廣大而精密。在位十四年。內禪居別室。院中統萬務。皇居虛無實。

自是未爲例。無改此過失。城南造離宮。流連意放逸。昂峰及熊野。到處稱警蹕。寬治夷酋亂。義家爲將帥。三年克金澤。與羽悉靜謐。威名行塞垣。勢如虎挾。師通任閑白。院門不立車。威摧互相敵。法皇忌攝家。彼相捐館舍。綠洞競光華。堀河早殂落。嗣皇猶童了。春色何處在。法皇宮裏霞。義親叛雲列。正盛行後賒。興福僧烏合。神木向

洛涯。爲義率輕卒。防禦逐群邪。鳥羽早讓位。弱冠下歲加。時有兩上皇。遊覽同賞花。崇德傳三器。執柄是忠通。乃父曰忠實。懸車富家翁。白河入鼎湖。政歸鳥羽宮。得子被寵幸。淫雨月朦朧。廢嫡立庶子。近衛受禪忽。先帝含幽憤。怨徹骨髓中。忠實亦耄荒。賴長是狹童。伯叔相猜嫉。殆與路人同。恨不弟三間。天家及上公。何爲至如此。痛

哉人道空。久壽逢太喪。乃立保元帝。法皇
登仙去。兩宮相睥睨。左府候先皇。閑白侍
禁衛。源平兩氏族。分排龍虎勢。官軍一夜
襲。今即箭鋒銳。炬火俄投來。防戰無謀計。
烟塵前路黑。左府墮馬殪。可憐崇德皇。遠
狩海南裔。殘黨搜索急。或流或囚繫。信西
專沙汰。執奏行嚴削。清盛殺忠正。義朝斬
為義。賴賢賴仲等。及幼孩。群李肯。聞狼子

本朝稽古篇上

三

忍。今亦見獸類。不孝豈有忠。惡慾無不至。
忠通救老父。沒齒無惡對。父縱雖不慈。可
視孝子志。此公富才藝。善書嗜文字。殿門
題額揭花月。雅興備天皇。倣先規。早有遜
讓事。新主倚玉展。改元號平治。信賴憎信
西。如同漢晁衰。結黨左祖者。誰欽平與源。
俄圍三條殿。煙煤吏率喧。信西自活埋。不
免喪其元。逆賊據大內。翠華幸六原。洛中

爭輸贏。赤白旌旗鬪。義平壯猛姿。恰似鷲
鳥鷲。賴政持兩端。一軍負累韃。次死不惜
生。血流戰塲輝。平氏再突出。賊勢疲而奔。
信賴被梟首。義朝伏天誅。義平生就擒。賴
朝貶東陽。清盛回天力。祿爵君恩殊。高昇
則闕官。可畏其嚴平。六十餘列產。半為自
家租。子弟皆貴顯。滿堂金玉鋪。誓首嚴嶋
神。非禮果享無。祝髮號淨海。素絹顙浮屠。

本朝稽古篇續上

四

永曆至仁安。草本枲榮枯。二條與六條。二
帝一須臾。保元太上皇。愛孫不如子。太叔
受姪禪。嘉應紀年始。太上猶聽政。談空髮
既薙。近衛櫻花落。添色松殿裏。時忠威望
高。閑白在平氏。淨海妻為誰。帝母是妹姊。
德子備女御。私語鴛鴦被。熊夢得吉祥。業
孤射蓬矢。重盛及宗盛。左右幕府峙。名家
不能倚。華族亦默止。淨海茂朝廷。法皇有

密謀何人漏其事忽生天下憂禁錮成親
黨先斬西光頭餘類兩三人鬼鬼島放流
將圍法皇宮重盛諫不留更以兵權脅幸
然太事休內相易華實老爺得自由法皇
在鳥羽夜長離宮秋遷怒及群臣博陸赴
備列松殿枝葉凋近衛花葉抽天子有若
無治業亦四年曾慕延久跡僅開風雅筵
淨海奉外孫忍使神器傳閑院日月長階

下草芊芊耳聞法皇苦垂淚空悵然上皇
阿婦翁藝列棹御船賴政舉義兵身沒宇
治川功業雖不成太志誰不憐皇子逃不
免自羽馬不前園城興福寺伽藍化為烟
淨海挾幼帝福原宮新都回望平安城一
朝忽荒蕪賴朝白旗拂石橋一旅驅寡不
可敵衆急難得全軀八列草木靡靡至千
萬丈常胤早應招廣常會半途房總武相

路到處不踟躕倉開兵牙居然治東隅
義仲畧信越從軍示不孤群國諸源氏隔
地如合符羽檄日夜至驚破福原城淨海
張怒目節度遣維盛相持富士沼飛鳥誤
兵聲旌旗未相合倒戈逃還京新都居不
易平安催歸程上皇俄登霞東山龍輜行
淨海亦蓋棺兵庫築墓塋宗盛孱無才彼
家根本傾平軍向北越十萬金鐵鳴義仲

京戰塵長驅兵勢精競登天台山月中無
京師平族奉幼主西走向竹期上下心不
一親戚亦令離花開二十年壽永零落時
往事渾如夢歌枕黍一炊海上路漫漫波
浪接天涯行過豐前國懇禱宇佐祠駐蹕
太宰府維義兵襲來到處皆敵境風聲亦
可疑青天白鷺飛驚畏源氏旗法皇留在
洛陽上擇孫兒一兒啼不近一兒顏色怡

御諱爲尊成乃緒即位儀我國有二帝正
統誰辨知義仲勢滔天景公其朝曦手握
將軍印建號稱征夷暴虐倍平氏妄改換
官司焚燒法住寺法皇亦殆危太軍來自
東狂夫不能支粟津源上露一騎斃伏尸
東將其阿誰範賴與義經義經最勇壯保
護法皇庭兩將直西向軍糒有儀刑旗旄
如翻雲六胃似聯星駿馬躍飛龍霜刃新
發研平以掘一谷要害疑立屏左即登關
越鯢波轟雷霆猛勢虎戴角輕捷鳥振翎
一舉破堅城恰如是水瓶火烈營舍崩血
洒平蕪腥勝者誇首級敗者逃水汀平族
適半亡終免入南溟重衡被生擒東行遂
入囚範賴戰藤戶義經守京廳明年攻屋
嶋不屑風波難勝浦得御導着鞭馬嘯々
猿臂能登守發中無不貫源軍稍辟易牟

禮松聲寒宗盛不能保西入長門壇皇居
是舟中厓山下棹看矯々源廷尉氣勢歷
阿瞞平軍多沒死海水爲之冊先帝遊龍
宮神器投波瀾時無陸張輩懷古淚聞于
戰士化鱗介更無一人殘宗盛及清宗生
縛命暫完天下定於一凱歌拍手歡云何
源祿列功高身不安賴朝已嫌忌且有景
時奸跼々又踏彼天地亦不寬或因木物
漸或匿古野密北越入東奧遂有衣河歎
鎌倉兵大舉戎馬千里鞍泰衡忽亦族賴
朝榻容軒建久元年冬登行初入洛參內
而謁院君臣共悅樂執拜亞相官右太將
油幕闔國都元帥六波羅高閣畢事還鎌
倉繁榮輝花萼遐齡祈聖廟龍鳴岡上鶴
四方無敵者弓矢皆入橐政所問注所法
令有斟酌富士野大獵列平圍山嶺各率

獫狁驕悍。又宋從所得者其何猪虎及
狐貉。曾殺後父。假館夜驚愕。先是法皇
崩。太皇手猶弱。政事在關東。朝廷無所作
公卿百官備。屈名徒賜爵。唯見倭歌盛。新
古今撰著。建者同時出。吟味而咀嚼。人尤
雖既沒。敷島道不作。南京大佛殿。行幸自
慶落。賴朝亦來會。警衛其睦。若滿堂僧。噉
噉。壯士談笑。却命哉。相模川。往觀新畧。約

馬蹶。元帥病難求。回生藥。淚洒哭英雄。襟境
上風寂實。賴家嗣其職。冠歲唯戲。詭外祖
平時政。後事有遺託。帝禪位。太子襁褓抱
在朝。攝家有二流。近衛及九條。當職屢相
替。官爵互遷超。彼此一興棄。世事蓬蒿飄。
鑑倉亦有變。景時育。既梟越。後列有乱鳥。
坂。冬馬搖。賴家政不善。時政專而驕。孫祖
生。間隙街巷說。罵人能負拙。圖事座上被

劫剽。小御所之戰。一萬身同焦。豆列修禪
寺。無人獨寂寥。暴卒人皆疑。弒逆不可料。
爰輔翼寶朝。幼繼父兄座。早賜征夷號。萬
幣附外親。時政耄而狂。蟄居終其身。何者
代執權。義時斯其人。政子老寡婦。三世事
久馴。扶兒與弟睦。樞機共諮詢。正治年既
過。紀元為建仁。元久建永移。義元四歲臻
天皇。示讓位。皇弟臨。紫宸。此是上皇意。母

寵其所。以前後。再上皇共逢。建曆春。寶朝
漸成長。信清結婚。姻暇日。詠倭歌。三十一
字。新春賞。百花開。夏。變綠陰。勻秋對。明月
夕。企待雪。後晨。眺望伊豆海。坐嘯。由比濱
義時威權大勢。與主將均群僚。皆低首。唯
有義盛。嘆勇氣。雖不屈。人以虎鼠論。恨逐
日月。積憤怒。無所伸。又逆寇幕府。義秀破
門闥。力戰遂奮死。兵散跡。既陳寶朝歷官

爵年二昇進頻左大將起父兄任右大臣
豈圖鶴岡廟俄然遭刺客刺客賴家子自
謂將種嫡生變欲徵事義時不肯釋三代
四十年相屠絕血脉誰知義時心想夫有
密策若逢南董筆豈逃筆誅責藤氏二歲
嬰迎置主將席終有舊緣好盡辨姓氏辨
政子擁犬器尼將軍簾隙天下大小事悉
次義時宅時是永久元武家主命革朝廷

有所請東風聲相送上皇素不平至此愈
不憚遂議東征事謀臣常咫尺官兵誅光
季密詔下東方東士不從詔皆畏義時彊
義時催大兵十萬發鑊倉子弟為兩將泰
時與時房朝時自北越別將向信陽官軍
亦發遺義濃及尾張東兵雲霞簇官軍不
能當勇士戰死之怯者逃而亡賊踰宇治
川又破勢多梁合兵入京師圍宮近玉床

近臣被戮辱家々皆逢殃時運果如此可
憐三上皇隱岐土佐島佐渡洲邊疆分離
遠巡狩西南北相望終身遂不歸白雲隔
帝鄉本朝太變事千歲猶悲傷誰人登帝
位嘉應帝皇孫時房及泰時守京北南門
兩六波羅職實為王城藩義時一掌怪六
十列乾坤宇內無所憚老惑嬖妾言廢長
欲立少阿黨技政村泰時遂執權仁厚無

所論孔懷群弟睦棠棣耶梅簪盡心憐黎
民人皆戴武恩負永定式目成敗有所論
衆評誓約堅連暑押印痕五十餘條外更
無奇政煩賴經坐堂上身在庭際蹲謙遜
雖不誇威風勤九垓帝有三皇后立廢依
宰臣有子長子黜導子生秀仁外祖藤道
家乃是賴經親假得東閔勢朝柄在一身
其舅曰公經權貴儼指紳舅胥相倚賴愈

斯羽訛訛教實及良實實經是天倫九條
分三派相代執國鈞近衛亦爲二五家如
轉輪久我關院流花山華族人英雄歷將
相累世不沈淪其餘良家胤守次位列陳
各追祖先例叙任帶絲綸苟無武家肯祿
薄不堪貪天福曆仁政嘉禎一瞬移錄倉
藤元帥大旆朝洛師乃父外祖第邂逅酒
淋漓仁治無繼嗣廷臣皆顰眉皇胤有

種太實相共窺東使藤義景紅塵一騎馳
建曆子失墜翊戴正治兒寓居掃菰草寬
元關皇基姑子冊中宮實氏孫謀貽西園
花木秀北山庇蔭蛭副帥喪長嫡家事附
經時都帥亦退職賴嗣坐幕帷主上遊汾
水儲貳臨禁墀時賴代其兄威武張網維
泰村巨室者一戰被誅夷變態雲聚散世
事如奕棊東西樺風盛爾隆二老緇東福

伽藍大巨福堂塔歌時賴廢主將九條藤
花葵誰知兼久喜更催建長悲東使迎宗
尊廷臣亦相隨此是上皇子今皇帝連枝
三月桃李蹊春自自遲々四月錄倉府新
閣薰風吹位高而無威號令非所爲政附
相摸守唯見倭歌奇正嘉太瘦腐洛中人
民飢路上尸相積時有一妖尼正元幸西
園花前御牛琵琶其年遜帝位皇弟鳳輦推

自是統運分二流異其歧伯叔子姪際授
受例相追時賴壯剗髮假作樺徒姿子壻
代視事異哉子叔疑身居最明寺猶有所
指搗不審巡群國千足生肝臆業鏡卅七
年打碎彼一槌大道果何在小黠却太癡
時宗幹父盡氏族爲之禪文永二年秋其
月諸日居有故廢宗尊歸洛淚漣漣在職
十五年榮辱其於戲惟康僅尸位呱呱唯

含飴日月未墜地天道其可欺時轉衛六
原昆弟勢角犄一且東風惡者豆燃豆箕
文永建治際樽繼非無私帝少皇姪長是
知要約差龜山朝陽暖深草風淒其當時
兩上皇易世互盛衰蒙古忽必烈中華既
吞并將問我國門屢有使書呈不答良野
聘且斬世忠頸蒙古甚震怒船發十萬兵
筑陽整軍防閩東有議評朝廷爲何事

帛初神明弘安四年春賊船掠西瀛我軍
水陸挑堂々正仁旌平壺五龍山風烈賊
船傾或溺或漂泊糧餉無所營我軍乘勝
進餘賊不能爭殺戮半就擒唯有三人生
事聞蒙古國裡肝膽驚傳稱有神助可
喜太切成歷年時宗迺貞時繼家聲何者
統廢務外祖城泰盛陪臣執國命禍根既
有崩傍有其人瞰城氏族滅平某人平果

圓獨步無抗衡古今同一轍幾度時勢更
天皇幸北山賀外曾祖母其諱曰貞子此
是實氏耦外孫兩上皇娘太皇太后弘安
八年春齡筭旬累九輦輿連門前遊宴祝
其壽女中榮耀極古來未曾有閩東有敷
奏神器授則受實兼納其女又爲王室舅
那箇三上皇中心和睦否紹運不由已武
家能左右正應二年秋鎌倉政元帥惟康

自東歸久明自京至歸者進壯歲至者猶
童稚廢立如反手榮辱似甯寐爰有一凶
賊突入紫宸位騎馬帶甲冒天皇微服避
凶賊自伏又首謀有所出王道棄如土奈
何太變異貞時既壯長法制內外施鎮西
補探題嚴戒夷賊覬誅戮彼果圓壓押漁
臣恣六原南北衛屬類交替置永仁有內
樞太子乃丰器三上皇加一四院某某地

再從弟邦治依約為皇嗣正安三年春關
東兩個使帝位速變改侍臣悉驚悸乾元
及嘉元德泊光陰駛相列倦執權擇人為
副貳師時與時村連印預政事氏族多部
類爭威相嫌忌宗方殺時村其身亦不遂
久明罷回京守邦職相次帝有橋山遊滴
盡西風淚花園春秋富正應皇帝子正元
禪代後兩統幾回從貞時入黃壤高時相

奢侈家令亦神僭微運不足恃天皇淫佛
氏習得天台旨法華有品釋七箇宸筆憑
延慶鳥過目正和亦五祀文保第二曆讓
附鏡釵重元應治世始大早望雲霓賑恤
施荒政開倉救群黎聽訟記錄所次劄古
例替高時耽酒色號令不整齊武威既式
微王化有所後天皇企大志密詔袖中寶
行在笠置山東軍萬馬嘶賊卒夜微襲城

辟忽排擠王師早敗績蒙塵幸海西皇胤
竄群國妃嬪惜別啼元弘辛未秋隱列月
色迷正慶新天子幸見寶位躋桓々橘正
成孤軍先勤王赤坂雖垂翅再舉義氣張
勢震攝泉河築城據金剛東軍百萬兵環
攻半死傷子子吉野旗護良鷹隼颺播列
赤松氏案騎馳洛陽先帝幸船上長年治
軍裝高氏陷六原義貞滅鎮倉鎮西于戈

動一戰探題僵誰知北條氏不崇朝而亡
龍馭向東歸王威加四方瑞輿入宮闕何
日聞鳳凰延久至元弘件々說話長四千
五百言把筆仰彼蒼

此十篇續十文三篇而為作後篇之
起本

庚子孟冬二十七冀 向陽林子

本朝誓古續篇中

元弘天子復明辟建武紀年象漢劉賊黨
歛手伏斧鉞逐臣還鄉脫俘囚四海一統
爲家日威風遍及六十列義久以來百餘
年帝業復古祝千秋護良新坐征夷府前
呵後從歷貌貅義貞正成及長年朝廷干
城是好仇借問赤松漏恩賚尊氏官爵何
獨抽輪奐新成太內裏十二城門百尺樓

花迎劍佩柳拂旗王座高麗拜冕旒雲
巢產貢龍馬講武弓場殿上游百司千官
頌太平其中獨有諫臣憂諫臣爲誰藤々
房忠言不聽去不留廢子寵恩冠後宮女
謁頻行有奸謀遠貶護良繫入獄有功無
罪離此邳北山行幸岌岌乎平氏遺孽乍
穿窬東方不靜直義走尊氏進兵握戈矛
戰勝自稱都元帥勢與昔時比條侔新田

足利不兩立一封牒許互相授授義貞
節度使此人元是武門尤矢矯鸞坂手起
河官馬東馳水東流箱根竹下分兩陣王
師不利太刀頭賊軍競進寇京師帝幸叡
岳停龍輶僧衣脫却着鐵衣九重城闕火
氣浮顯家以東奧兵至義貞得援勢力勦
園城城陷京衢戰次勝楠氏惺中籌尊氏
頓挫不能保官軍追及豐嶋川正成偏師

示來會賊奔筑陽從軍餽大旆揚揚左中
將風勢卷沙唱凱旋五馬駸駸源納言鎮
守府開與羽邊君主不知閫外事自謂帝
德本應天羽林何事遺虎患坐愛義色久
留連豈圖多多良濱戰賊軍再振勢勃然
赤松應彼摠播陽固壘不肯從詔宜西海
山陰山陽道水陸百萬馬又舩國士無雙
橘廷尉湊川力戰一當千先破前軍向後

軍忠肝塗血節義全義負自當尊氏陣兩
家勝敗在眼前可驚宸駕再播遷敗軍來
集白山巔尊氏入京挾新帝延元曆應分
編羊浴中浴外主客戰積屍如丘首級駢
東寺門前請挑戰一箭中柱鳴弓弦大宮
街路長年死八幡孤軍隆資孱露往霜來
天漸寒山上既無糧道傳帝使義貞避北
越兵士凍餒雪埋韉皇輿遂陷賊營中多

少降將遭拘掌新帝即位於洛陽尊氏果
秉闔國權先皇潛行吉野山南北兩朝二
日懸正行率兵守行宮家風忠義誰比肩
尊氏發兵向北越可憐金崎城不堅義貞
佯死義顯歿戰卒爲魚落深淵顯家再舉
關塞月突入鑲倉走義詮義貞示自袖山
起組練犀甲白雲鮮尊氏驚畏迷指揮孰
爲後兮孰爲先濃州陣強與兵屈安倍戰

場野草蒿黑丸城下長星墮卧龍入夢人
長眼尊氏居真征夷職直義爲副師直專
氏族黨類各得時碧尾朱薨比屋椽割國
領郡猶不足押棄廷臣封戶田天下又入
武家手朝家憲章悉棄捐邊境未靜蜂蟻
起鵲蚌蠻觸螳捕蟬南朝先皇憑玉几顧
命親房託幼主遺詔新勅告四方近有楠
氏領舊土北有義助破黑丸東有顯信續

鎮府西有菊池掘肥後南有河野保部伍
義助避寇來吉野視事豫州入鬼簿正行
再克京軍敗進退坐作中規矩努力四條
繩手戰如熊如羆又如虎太兵散亂師直
危天命不遂無辱父猶有季弟正儀存勤
王事業欲無鹽洛帥好禪信疎石新搆靈
龜太梵宇妙吉惑人野狐話不悟妖魅入
門戶康永貞和掣電頃觀應改元頒曆譜

重能直宗詣師直，依賴直義，託肺腑。甲有
猛獸靠山勢，有能言似狸鵲。狸鵲擒鎖
猛獸，奮吠向幕府。一聲怒雲中，雁行亂相
失。到底路迷南山，雨脅挾尊氏奉義詮。師
直師泰彌跋扈，不意直義將南軍從卒如
秣。驀地聚時有直，仝起筑紫依佈。鼎足相
撐拄，既看鄂跼不鞞。鞞又驚橋梓，不仰俯
洛陌畿內西列，戰響辟地維折。天柱松岡

城中尊氏困武庫，河畔斬二豎。同胞宿怨
遂不解，北走東翔張其羽。相批薩埵山頭
嶮，向上直下擊戰鼓。慧源乞降，遭醜毒戒
哉。戒哉其自取，新田冑子舉義旗。洋洋武
野督元戎義宗義興及義治，壯氣奮發貫
白虹。石濱會戰追尊氏，夜襲鐵倉月如弓。
笛吹絕頂河村壘，天何不使成其功。尊氏
留滯踰歲月，吉野軍士競南風。義詮驚騷

奔江介，賴春授頭街塵紅。北朝天子兩上
皇輦路，同入南山中。南帝駐蹕男山麓，愁
殺平安城闕空。義詮完聚隣邦，援兩軍交
兵幾戰，攻馬首西歸源都帥。附與基氏管
閑東，文和新帝俄登祚。從前曾是稱茨宮，
無鏡無劔又無璽。時宜用事，良基公時氏
高經直常叛，合從寇京爭雌雄。群敵漸去
尊氏病多手，勞勩時運窮。延文三年孟夏

末五十四歲，毀譽終。義詮繼倚大樹蔭，武
威未能及群國外。有連城割據，敵內有強
臣，勢難抑道。誓帥師東關，兵來會義詮。作
輔翼，湘洛太軍向吉野。戰功僅成，未能克
義長被擯，奔勢列道誓結黨。亦是賊清氏
有切執事，久一朝讒言忽反覆。京師屢亂
主將忙，帝座不靜。兵塵逼時氏，歸伏義長。
赦賴之運策，清氏殆昨日。為寇今日降去

年ハ在南ニ明ハ年ハ北メ未メ聞キ忠コ義ロ無ク貳フ心コ登ソ時ノ事ヲ
 勢ハ不可コ測ル就コ中ノ偶ニ看ミ中ノ殿ノ會ハ八ヤク雲モ遺ノ風ノ間ヲ
 儀ハ則チ基ノ氏ノ雄ニ武ノ超リ父ノ兄ノ牙ノ戰ノ森ノ森ノ治ノ東ノ域ノ
 入ル間ノ河ノ畔ノ煙ノ波ノ靜ニ關ノ坂ノ路ノ開ケ掃リ荆ノ棘ノ負シ治ス
 六ノ年ハ何ノ不レ淑ニ東ノ西ノ日ノ月ノ共ニ晦ニ蝕ス同ニ根ノ聯ス芳ニ
 落リ歸ス根ノ麾ニ下ニ濟ニ濟ニ袖ノ淚ノ拭リ基ノ氏ノ有リ子ノ曰ク此ハ
 滿リ上ニ杉ノ掌ノ事ハ心ハ不レ黑ニ誰ノ謂フ義ハ詮ス爲ス魯ノ人ノ能ク
 知リ賴ノ之ヲ託ス幼ノ息ハ是ニ知リ天ノ與ニ足ニ利ニ家ノ義ハ滿ス度ニ

全唐詩集卷中

量ハ賴ス之ヲ直ニ明ニ年ハ吉ニ野ノ春ノ風ノ惡ニ山ノ櫻ノ落ス時ノ南ノ
 帝ノ陟ス嗣ノ主ノ踐ス位ハ抱ス三ノ器ノ畢シ竟ニ太ノ物ノ不レ能ク得ル
 莫シ將シ微ニ弱ニ稱ス僞ニ號ス憑リ誰ノ可レ見ル史ノ筆ハ特ニ本ノ朝ノ
 權ハ衡ハ可レ在ニ此ニ至ニ今ニ正ニ統ニ無シ人ノ識ハ猶ハ有リ楠ノ氏ノ
 爲ス衛ノ護ノ新ノ葉ノ撰ス歌ハ追フ古ノ式ハ先ニ是ニ菊ノ池ノ迎ス皇ノ
 族ノ新ノ建ス征ス西ノ將ノ軍ノ職ハ年ハ年ハ出ス兵ハ橫ニ九ノ列ノ鎮ス
 將ハ不レ能ク角ス其ノ力ハ征ス西ノ府ノ君ノ擬ス國ノ王ノ通ス書ハ中ノ
 華ハ印ハ璽ハ刻ス中ノ華ハ來ス使ハ留ス肥ニ後ニ欲ス到ス洛ノ陽ノ道ノ

路ハ塞ス義ハ滿ス額ハ悟ス早ニ加ス冠ス元ノ帥ノ府ノ前ニ建ス千ノ戈ノ
 三ノ尺ハ霜ハ又ハ腰ノ間ノ冷ニ旌ノ幕ノ蔽ス天ノ衆ノ星ノ羅ス別ニ將ノ
 進ス兵ハ向ス越ノ中ノ松ノ倉ノ城ノ下ニ直ニ常ニ蹉ス賴ノ之ヲ投ス書ハ
 正ニ儀ノ降ス辱ス父ノ辱ス兄ノ欲ス如ク何ノ應ス安ニ辛ノ亥ノ爭ス皇ノ
 胤ハ兩ニ上ニ皇ノ是ニ弟ノ與ス歌ノ緒ノ仁ノ得ス之ヲ榮ス仁ノ失ス賴ノ
 之ハ處ハ分ス理ハ當ス麼ニ甲ノ寅ノ元ノ帥ノ擊ス筑ノ紫ノ甲ノ士ノ十ノ
 萬ノ勢ハ番ス番ス宰ノ府ノ一ノ戰ノ菊ノ池ノ破ス退ス保ス肥ニ後ニ土ノ
 地ハ劇ス何ノ事ハ賴ノ之ヲ遭ス震ス怒ス海ノ南ノ幽ニ居ス蟄ス龍ノ蛇ノ

全唐詩集卷中

霧ハ威ハ再ニ徵ス又ハ管ス事ハ自ス茲ニ君ノ臣ノ更ニ無シ他ノ中ノ津ノ
 奉ス使ハ赴ス大ノ明ノ夢ノ周ノ修ス聘ハ到ス博ノ多ノ春ノ風ノ翻ス錦ノ
 花ノ御ノ所ノ霜ノ葉ノ浮ス紅ニ宇ノ泊ス河ノ銀ノ鞍ノ遊ス覽ス士ノ嶺ノ
 雪ノ樓ノ船ノ連ス接ス嚴ノ島ノ波ノ永ノ德ノ新ノ帝ノ枉ス鳳ノ輦ノ三ノ
 器ハ入ス京ノ南ノ北ノ和ス萬ノ年ノ扁ス寺ノ構ス朱ノ閣ノ內ノ辨ス勤ス
 職ハ見ス踏ス歌ノ內ノ野ノ自ス戰ス討ス叛ス臣ノ氏ノ清ニ恰ス如ク赴ス
 燭ハ蛾ハ泉ノ坡ノ城ノ焚ス義ハ弘ノ戮ス餘ノ類ノ贖ス罪ハ似ス降ス魔ノ
 官ハ至ス相ノ國ノ位ハ一ノ品ノ佩ス服ハ儼ス飾ス冠ハ裁ス裁ス賴ス朝ノ

實朝何可及清盛榮華不能過三管家分
不傳任四職司法輕重科裁持叙爵讓元
帥克裘新築北山阿難髮改名號道義准
擬法皇着袈裟異朝傳稱日本王建文永
樂書信遐何為不畏元龍悔金閣莊嚴競
華奢應永戊子北山幸傳陸公卿門前車
管絃倭歌殿上宴伶人舞樂立庭涯殊愛
少子欲耦嫡幕府第中聞蝦蟆當時若微

本朝稽古篇

續篇中

源義將憂在蕭牆恐覆家半百加一亦一
夢人脫吉服着縷麻鹿苑院裏靈牌前一
辨香烟一椀茶喚作天山大居士知否恭
獻王謚加義持聊有守成量政追前轍不
參差斯波細川畠山館春風來徃白鼻騮
應永年長亘二世綠洞松古禁中花文武
會同浴中靜遊祭日暖朝暮霞義量乃是
武將嫡成童既有冠禮嘉讓附幕府義持

老處處遊行弄手華爾來鐵倉有何事氏
蒲早逝滿兼繼滿兼亦卒至持氏上杉世
權更不晉上杉屬類分為二二家忘親互
爭勢頃間憲基代禪秀失職怨望且貪民
謀叛乍襲持氏府持氏戰敗不能制出奔
駿列乞援兵洛軍東發最精銳禪秀自盡
持氏復乃興義持有約誓義量不幸早屬
續歷年義持亦即世持氏想補洛帥閑無

本朝稽古篇

續篇中

奈滿家有密計拍關石清水廟前爰迎義
教入府第義教何人義持弟久入會門
既剎至是累頭為武將自茲湘洛不鑿枘
稱虎登霞皇緒絕唯有伏見紹運系彥仁
養為上皇子義教奉迎入為帝伏見邸內
煙霞鎖今日始見簾月露神武以來西三
代二千有八十餘歲帝統一姓斷又續殊
域不聞有此例

右二千五百三十四言繼上篇而起下
篇 庚子孟冬晦日 向陽林子

本朝書目總彙

上卷

本朝誓古續篇下

永亨元年己酉春。管門新柳對官梅。梅花
曾埋前村雪。忽移上林南面開。行好艷陽
二三月。暗桃明李。是興儘誰祝。馭筭記椿
葉。定知官闕。准蓬萊。持基兼良交。攝政兼
良該。通倭漢才。義教脫帽初元服。威風吹
度掃塵埃。豈憶釋家太僧正。更爲元帥武
門魁。昔聞台院愛青蓮。今見公堂攀綠柳。

室町殿中新政出。急急律令如奔雷。滿家
辭職讓義淳。又附持之三。家廻御襖扈從
森盡戟。私第行幸酌金疊。男山拜趨追舊
式。馨田緣起手。自裁伊勢參廟高野。誦行
過山路。又水隈。東遊駐騶富士山。遙指鐵
倉頭。高擡持氏不知義教意。井底蛙鳴却
喧騰。義久冠禮違舊例。上下異議生疑猜。
洛帥忽得憲實報。麻詔教書甲兵催。東土

魚爛應洛軍。持氏逃出鐵倉隈。永安寺中
不免又。猶有氏朝匿。二孩結城戰場氏朝
死。二孩生擒向西來。自緣號令不早施。遂
使上杉擅東垓。義教驕泰慢侮人。蒲祐矮
短何爲哈。席上變起遭弑逆。左右岡章互
踴躍。時維嘉吉元年夏。朝不謀夕。有日頽
義勝雖幼。不戴天。凶族伏罪網不恢。十歲
童兒棟梁容。復讎討賊太奇哉。可惜墮馬

早喪身時人。既哀後人哀。義政代兄居幕
府。八歲未辨麥與菽。政事自三管。家出三
家樹黨不相睦。其餘豪雄領國郡。特有山
名騷大族。君柔臣剛。天下危足利將種失
其鹿。一夜太盜侵清涼。兵又直前王體蹙。
幸然潛幸近衝殿。太盜果不免誅戮。三器
劫奪處。散鏡劍索得璽。不復補璽不知
何處失。聞說匿在南山麓。此時南山何人

住南朝孽兒僅碌碌。後來赤松浦祐黨入山取璽獻王屋。這般一事贖大罪。彼家再興又得福。鐵倉亦有兵革起。此其張本者。爲孰持氏季子曰成氏避難久在信陽谷。東土迎之入鐵倉。上杉黨類戰馳逐。一勝一敗既經年。成氏遂入古河。縮文安寶德又亨德。康正曆移。改長祿。畠山家亂。嫡庶爭。義就政長忘骨肉。斯波嫡流無胤嗣。義

敏義廉相。翻覆細川山名舅壻。勝元宗全互側目。天皇脫屣寬正末。新主倚晨拜冕服。義政不能制。強臣空登台。鼎覆公餗。倦事相。約讓其弟。既而生子。僅匍匐。彼其不異同隊。此是如老牛舐犢。弟曰義視。子義尚。子弟相對爲姪叔。勝元宗全爭推戴。二門禍福所倚伏。臣如鯨鯢橫江湖。君似蚯蚓在溝瀆。勝元挾主提幕營。且催

幸擁輦。較闔國群士分爲二。長兵短兵。又鏖洛中東西幾批戰。兩軍輸贏未可上。爲驚跣跣落局面。梟虜叱叱擲雙陸。官舍堂塔摧兵燹。失却軍器及書篋。廟宇變爲屯陣地。田畝無氓馬芻牧。公卿百官各離散。吏卒唐突車打軸。無良無賤悉逃走。老幼婦女倒號哭。應仁改元號文明。閭閻七回易寒燠。西軍渠魁宗全死。勝元亦尋就

牢木。山名黨類歸巢穴。細川氏族數房。皇列暫靜邊鄙亂。蜂蠆相嘴毒蛇蝮。大者吞小鵬。搏翼弱者畏強龜藏六。義尚任職義政老。一堂更於東山築。縱然銀閣准金閣。可愧家風武名蹟。古器古畫相籠架。庭除淨掃栽松竹。爐熾獸炭金煎泉。玉塵素清茶滿腹。牀上軍持露猶滴。春揀花兮秋揀菊。不知陳平分肉意。日日調味羅肴饌。

義尚肯堂問治要兼良撫談一簡牘雪中
聞驚風雅會月卿雲客詩歌幅右衛大將
拜賀日行粧威儀頗嚴肅甲賀山下高懸
亂自董軍士幾信宿一勝未平暴露際橫
梁更繙左傳讀可憐釣里一輪月春霧不
晴愁萬斛此人閱世似蜉蝣老而無子義
政獨忽忘舊怨召義視更養其子自愛育
嗚呼義政在職久何爛人民如糜粥文明

十八改長亨又改延德歲月速義植既續
義政跡弓治事業手不熟兵出河列正覺
寺變生肘腋軍摧衄脫囚北走入越中落
魄防州太苦鞠寓居此地烏克遷依賴大
內今義興畿內權屬細政元更求將種立
義澄義植義澄從足弟都鄙遙隔互嫉憎
身委強臣如寄生如葛如蘿又如藤頃間
又聞關東事伊勢新即有威稜發駿取巨

觀相陽上杉防戰勢相乘上杉亦有二派
分山內扇谷左右脇本悟曆亡齒塞戒肝
膽楚越不長勝新即改氏稱北條遂入相
陽兵氣增斷髮易名號早雲其子氏綱家
業承侵畧有并八州志傳到氏康益起騰
諸國爭亂難枚舉壞亂極矣奈黎蒸明應
九年東申秋九月某日天皇崩襄事遷緩
費用之靈柩久向黑戶凭文龜踐祚未行

禮表哉朝廷聞未嘗京師有變戕政元部
屬相爭紛噉噉三好長輝立澄元蒙衝風
急阿州濤百百橋畔誅凶奴太志殆似鴟
鵂翱義興乘機奉義植長驅入京托巨龜
義植復職義澄廢澄元長輝南海赴義興
初管武家事此亦士林一時豪洛街再破
阿州兵繼有舟圖軍務勞報功賜爵從三
品畿內西海武名高在治秉柄十三年辭

職歸去山口壕登元高國爭兵權汗馬馳
馳京畿驩義植遂爲淡州囚撫養城荒生
蓬蒿高國獨步立義晴尼崎築壘秉節惟
商舶遙發寧波府素卿宗設利口囂自此
賊船屢侵掠到處華地損土毛我朝元是
文明國生憎被人稱老饕永正督爾大永
年天王外遐旻天號親王入宮僅踐位榛
棘滿牆自周遭當時廷臣零落甚朝晚饗
清其糠糟或鋤防列留滯久或漂土島一
葉艘三好又出阿列兵天王寺邊奮予力
高國列頸晴元入海雲舒張勢滔滔武進
如羊細川虎添得陪臣似嗾獒細川三好
亦交惡海雲掃盡怒浪淘義晴晴元席不
暖朽木坂本憂心忉幾度出京又入京晚
陷險中也其膏長慶有窺京畿心携列進
旗出自南約和罷兵彼愈大長慶何人海

雲男三宅不守晴元走江口挑戰斬宗三
義晴不能保京師穴大山中向烟嵐幕營
陰暗雲不晴却見其身入石龕義輝在山
雖嗣職教令聲微不廣單歷年義輝半還
洛晴元就擒何不慙長慶遂專畿內推家
事常與久秀談誰知凶豎有姦計長慶軌
老義長醜久秀沙汰洛中政幕府載得一
肩擔比年東北爭國郡攻城野戰弓相響
北條年年擊上杉憲政走越不能還个州
風度草木靡氏康強大領東關越後輝虎
飼閑尤又與信玄勢引坂信玄在甲既并
信堅申利兵刷列班東顧西望士卒練年
年畧地居不閑駿列義元出遠參旗對土
峯翻白鷗尾列信長取美濃勢吞江勢窺
帝衷越前朝倉掇要害七里山險難躋攀
處處戰場白骨枯鞍馬涂血色朱股回頭

尋問西州事又是境地互相侵大内外與
尼子氏相爭山陽及山陰陶氏作亂滅大
内毛利元就戰相臨既屠陶氏擊尼子經
年大克尼子擒弁彼取此軍勢張元就所
食刈加大友龍造石曼子各有囊括九
列心豐筑肥列日隅薩幾多折戟海底沈
想像七雄十六狄異域同日談可尋天文
二十三年移一彈指間似飛禽弘治加三

帝祖落定知闔國過八音永祿天子即位
時春秋四十過二筭義輝尸職猶如故久
秀強僭無所憚一朝俄爾襲幕府矣刃急
撲犯帷幔義輝自戰遂自裁放火府内悉
焦爛義昭避難寓江州遂入信長岐阜館
信長帥師取江列進入京師平叛亂義昭
還京暫居職既忌信長恩義斷信長一舉
廢其職義昭沉離處處竄足利將種到此

絕天命有時又可嘆信長雄猛人皆畏東
西南北矣馬汗戰則勝兮攻則取威風到
處水雪泮三好勢疲久秀降畿内南海賊
黨散北滅朝倉越前平越後景勝亦不畔
東屠甲陽武田殲北條雖大無對捍西取
播陽向藝列毛利約和不肯換身居江列
安土城一鼓中間天下半京師無事王室
安官昇右府爲國餘嫡子信忠既成長頗

馴兵事有手段信長監事赴京師本能寺
裏馬暫絆時維天正壬午夏六月初二日
早且賊臣光秀俄弑逆信忠亦是不能遁
秀吉督兵在備中聞訃聲罪誅光秀秀吉
元是微賤人信長登庸置左右智勇兼備
爲偏將起群既補播陽守進擊毛利彼乞
和至此討賊梟其首大功既成修喪事龍
寶招提葬靈柩奉彼嫡孫爲繼嗣且使信

雄爲其副既抱自取天下志浴中畿内屢
奔走柳瀬志津嶽會戰北越平夷柴田什
意氣揚揚度量大畿内南海既無冠信雄
屈伏却爲臣毛利來從約如舊一品相國
極官位特任関白帶印綬新定氏姓號豐
臣更擇士林有恩授天皇遜讓丙戌年皇
孫登極太禮就丁亥西征石曼子自到薩
列肥馬扣謝罪受降返其地大友放逐不
肯宥戊子行幸聚樂第蒲堂綾羅錦綺繡
文武群僚悉列參威儀儼然百官富東寅
東面攻北條箱根山中暫戰聞戰克直到
山下陣乞和避城罪贖購氏政賜死氏直
赦八列群來馬前後大軍進徇奥羽列白
河關門既過透五十四郡如瓦解振旅西
歸太名鳴應仁以來割據地混一切烈四
海平讓職秀次居聚樂來往難波伏見城

文祿壬辰朝鮮役先鋒早屠漢陽京八道
宇宙忽蹈轉羽撒乞援明國驚虎豹犀象
百萬軍我兵奮擊獅兒獐和親不成師再
出剿賊如山七年爭秀次狐疑不克終却
兒如牽脫錦繡嗚呼秀吉起匹夫魁權無
雙未嘗聞賴朝義滿不能儔泰時時賴不
足云用兵雖歷倒韓自治世似絳灌無文
十七年間無安居人勞行役甚辛勤天哉
慶長戊戌秋月隱重山日暮雲蓋世功名
今安在草深東阜豐國墳庚子関原一戰
捷闔國歸伏太神君
右二千九百六十八言
續篇上中下總一萬二字
庚子仲冬四日 向陽林子

本朝誓古總括歌

紙寅二韻錯雜用之

天神七代地神五。洪荒草昧年不紀。神武
天皇辛酉元曆運至。慶長庚子帝王總百
有八代。二千二百六十祀。鎌足鼻孫良房
公。是為藤原攝政。始基經以來至忠通。其
後不預天下事。平治以來至壽永。平家專
權貳拾肆。鎌倉三代將軍。後藤原賴經及
賴嗣。宗尊親王及惟康。久明親王。宰邦次。
本代百五十四年。北條八世。時氏。尊氏
以下至義輝。十三代。不筭義視。總二百三
十一年。其後義昭總尸位。信長振威。十五
年。秀吉。有七年。從慶長庚子至今茲。又
逢庚子。一回至。神君孫謀經四葉。太平
至德四海治。誓古拙言四。五七。總一萬三
千二字。

萬治庚子仲冬五日

向陽林子

寛文二壬寅年孟夏念一

洛陽金剛川

書坊

林和泉掾極行

松栢堂



源照矩 撰

十三朝紀聞
(慶弘紀聞)

明治七年(一八七四)其親樓刻本

據明治七年（一八七四）
其親樓刻本影印

明治四年辛未冬發行



增訂

慶弘紀聞

陰
今
日
鈔

其親樓藏板

十三朝紀聞七卷從六位下行兵
庫寮史生兼和泉掾源朝臣之所
編次也十三朝從

後水尾帝朝訖

今上皇帝朝紀二百廿餘年事也
史蓋古來難其人則所以重其史
也夫史所重在體裁以史即一代

明治新刻十三朝紀聞序

其親樓藏板

天下國家體裁也是其所以重而
難也雖有古者叙體名筆而後之
文人不必循其軌躅各騁其筆力
無有一定格體有其大體而無有
定體是以各得騁其筆力則其人
之向背取舍崇奉嫌忌之異同不
能不有正不正是以難其人也

然史既不可欠。若史而不史。則与無史同一朝。無史而可乎哉。然則是不不得已而已者。

本朝中古以來。史官之設廢。蓋以難其人乎。然豪士橫議。僭偽之言從生。則其害國家體裁。不為少。可不慎哉。斯編綜尊于一朝。從前橫

明治新刻 十三朝紀聞 序

二 其親樓藏板

議不拒而自燬。所謂橫議者。如東遷基業三王外記之類是也。斯編首而舉祭祀典禮受禪詔勅令命必儀。皇子皇孫后妃嬪媛胤嗣聯續必慎。公卿輔弼叙爵補任進退黜陟必燦乎。其衣冠宗支本末。別其系譜。出入盛衰榮枯必審。古

史之通例也。固尔而其天象地理。蓄祥瑞應妖彥。札差下及衆庶。萌赫苟有學術者。其志尚操行隱顯。進心藉貫。必詳悉弗遺。其復讎鬪爭之私事。及海隅荒陬之野語。弗泄。是亦不焚而進。不厲而勉之也。而並不着一論一贊。委覽者品隲。

明治新刻 十三朝紀聞 序

三 其親樓藏板

俾人間所不得不聽。知所不可不知。知一代天下國家體裁。令人歎服厭飫。而朝廊之言儀乎。卿相月雲之語燦乎。墨卷之談委曲而不俚。若夫溫室之樹木。天之天。外人不能窺。而君之得伺也。宜矣。若夫荒陬遐服。而不得不親涉歷者。非於

諸家之筆乘踐。廣搜密摭。遍涉獵。非精力過絕人。烏得出諸一隻腕下。芑素草莽之藁品。才識謗陋。而平昔好尚。寔在茲。君忝知之。去歲辛酉之冬。携新著披蒿萊。令得拜觀。芑不勝忻忻之至。宜適布鄙衷。還驛奉謝。而茲壬戌之春。初偶

明治新刻 十三朝紀聞 序

四 其親樓藏板

罹風疾。大患精神昏耄。不能援毫成語。藥餌自將。涉夏及秋。不覺霜露淒其。將冬。電、勉、敢蹶起。拂麈研。洒膏毫。雖終日不能成章。其罪亦不可不拜謝。十五贊名芑恐惶敬書。

父久壬戌秋後八月望



十三朝紀聞卷之一

佐位下侍齋原幸家齋原朝臣

明 正七位下良明藤原 藤原朝臣

後水尾天皇諱政仁 後陽成帝第三子也母女御

諱前子彌 中和門院准三宮藤原前久之女 上

以慶長元年六月四日生五年十二月二十一日為

親王是歲德川內大臣誅石田三成等諸兇天下歸

之六年夏德川內大臣增供御之田及公卿采邑八

年二月德川內大臣為征夷大將軍進右大臣補源

氏長者尋辭右大臣十年四月德川前右大臣辭征

明治新刻十三朝紀聞卷一 其親樓藏板

夷大將軍其第三子權大納言代之遷內大臣賜隨

身兵仗 天使就二條城拜之明年辭大臣十一年

前右大臣權大納言藤原幸家代之十三年十二

月右大臣幸家為關白補藤氏長者十五年三月

後陽成帝遣使駿府宣讓後於上之旨十六年三

月前大將軍自駿府入朝賀內禪二十七日 上受

禪時年十六仍用慶長號關白右大臣幸家內大臣

藤原信尚並如故時左大臣關○慶長十六年四月

三日遣正五位下王兼任祭主大中臣種忠左兵衛

佐卜部兼治小舍人齋部親當奉幣于伊勢 大廟

告嗣位古來王氏已下例奉告嗣遷宮等使世謂之

四姓使後有故闕卜部一員為三使七日尊 後

陽成帝曰太上天皇十二日行即位之禮前大將

軍入朝獻御劔一口御馬直銀千兩獻 上皇御劔

一口御馬直銀五百兩進 國母銀五百兩以賀之

觀大禮儀既歸駿府○五月前大將軍命諸藩修

太上皇宮多置供御之田又檢御府所亡失秘書寶

器流傳幕府者悉獻之○六月大將軍改築 禁內

之垣肥後守熊本藤原清正卒年五十○七月前左

明治新刻十三朝紀聞卷一 其親樓藏板

大臣一條藤原內基慶年六十四無嗣 上皇第九

子兼遐降繼之旨藤原姓○八月先是我商舶至阿

媽港者三百人為夷民所誘殺其後港商二百人至

長崎幕府命奉行等擊鑒之至是其首東曾謂來謝

大將軍延見之許互市○九月初京師商人持物告

幕府曰海東八九千里有國曰暹羅須般多產金銀

願一往試之至是莊助還自其國獻五色旗一挑

酒等于幕府紅夷耶敷子上奏幕府曰倡邪說者

皆覬覦非望幕府乃逐倡之蠻人余南禪院

主崇傳諭我民奉其教者改歸佛教陸奧出羽地陷

瀬川

明治新刊十三朝紀聞

其親樓藏板

潮溢死者八千人。十月前、天將軍使狩野、大内及諸國大祠於駿府第障式、那少輔清原芳賢訂之。十一月二十五日遣權大納言藤原經賴等祭春日祠、兩太將軍獵于上野訪得新田義重、故趾建一寺于新田金山下名、大光院是春、後陽成帝欲拜前大將軍太政大臣賜以菊桐章、前大將軍辭之、請錄其祖先於是贈大炊助義重鎮守府將軍、河守廣忠大納言至是乃奉安其詔書于此寺至嘉永元年十月又贈大納言太政大臣正一位是歲京師豪商角倉貞順請幕府開京師高瀬川達于伏見

其功成也、高瀬大内木石云卧亞使來獻幕府當是時明商及諸藩乞互市者甚衆前大將軍乃令長崎奉行藤廣贈書於明福建總督陳子貞求勘合印不獻而其商船益入於是前大將軍長崎為互市場禁泊他津○十七年二月七日遣權大納言經賴等祭春日祠、春冬二祀為恒例故後不復記○三月十三日以關白右大臣幸家為左大臣職如故十八日以內大臣信尚為右大臣、肥前原大名有馬晴信修弘齋、至是事豐嘉府奏放之甲斐尋賜死○四月二十四日雨雹二十六日以權大納言左近衛大將

公龍山

明治新刊十三朝紀聞

其親樓藏板

藤原信尋為内大臣○五月從一位准后是關藤原前久、龜年七十七子信尹嗣前久初名晴嗣、為上杉輝虎、乃本如越後歸京更名前嗣又之、前序數歲歸京改名雅髮、號龍山、能書工和歌○六月奈良大風春日祠、樹折者千株、祠人驚異奏聞、帝遣使駿府咨之前大將軍對曰是亡何也世亂而祠久就頽圯今神以此木助管作也尋奉勅修造此祠更考典故以每二十歲新之為永式以准伊勢大廟○七月左大臣幸家辭關白藤氏長者二十五日以右大臣信尚為關白、浦藤氏長者聽内覽賜隨身兵仗牛車是月還關内人詣駿府獻綴子羅紗、鮫皮等○九月明商鄭芝龍歸化詣駿府獻藥物同商祖官亦詣前大將軍見二人問西土雜事○十一月勅作春日祠幕府流福井宰今村掃部以其誣同僚伊豆周防也○十二月二十六日以皇弟好仁為親王王上皇第七子、號高松殿又號花町殿後任彈正弼是為高松殿祖大將軍修皇宮上皇宮明年正月前大將軍命三十七藩助役是歲大將軍聘儒士林信澄信澄受業於藤原肅自號東舟削髮稱永喜博、將書羅網百氏與兄信勝齊名寬永中殺阿媽港及新伊西把、你亞使來獻幕府○十八年二月

上皇第四子信尋降為近衛藤原信尹嗣子石見守
大久保長安有罪會病狂死幕府檢其家有係變教
書因誅其七子松本石川康長及其二弟連坐皆奪
邑○四月前右大臣豐臣秀賴鑄東山方廣寺巨鐘
高一丈四尺重十萬六千二百五十斤○六月前大
將軍作公家式其第一條曰公卿宜日夜學問勿懈
焉○十月幕府奏徙古河小笠原秀政于松本宇和
嶋富田知信宮崎高橋元種皆有罪亦是冬奏收其
封以雅樂頭酒井忠世大炊頭土井利勝相摸守大
久保忠隣佐渡守本多正信對馬守安藤重信為江

新刻十三朝紀聞 卷一 五 其親樓藏板

戶老中上野介本多正純隼人正成瀨正成帶刀安
藤直次為駿府老中○十二月 大内成殿門壯麗
改觀十九日 帝徙御甚嘉其恭焉 仙洞宮成
上皇徙居焉此院在 禁内東南櫻町世稱櫻町宮
今 仙洞宮是也大久保忠隣奉教入京師捕關西
邪蘇徒是歲漢又刺垂使來獻幕府 十九年正月
十四日以關白右大臣信尚為左大臣叙從一位内
大臣信尋為右大臣權大納言藤原實益為内大臣
幕府奏收小田原大久保忠隣封放之千彥根課北
陸等諸藩移少將忠輝福嶋城于高山忠輝大將軍

大坂城開也○二月四日彗星見東方五五大坂天主閣烟
起衝天○三月高槻高山友祥鳥羽浦内藤如安並
修營教發覺幕府奏收其封九日以前内大臣大將
軍源秀忠為右大臣叙從一位遣傳奏權大納言藤
原兼勝權大納言藤原實條就江戶拜之高山友祥
内藤如安等已下京師獄於是前大將軍遣吏山口
與所司代板倉勝重議放友祥以下男女百餘人于
阿媽港流餘津輕前大將軍會諄諄典故者大修
朝廷舊章獻納之此書據國史延喜式及貞觀政要
群書等書雜取秘庫及故家書圖以成云○四月

新刻十三朝紀聞 卷一 六 其親樓藏板

五日駿府漁人獲大魚狗首龜甲巨鱉腹尾作三
股二十人舉之六日雨霰寒如冬二十一日 天使
兼勝實條歸途過駿府諭 内旨拜前大將軍太政
大臣因辭又諭納孫女和子為中宮乃奉之初豐臣
秀賴再造方廣寺以庚戌歲九月興功至是凡五歲
而成堂高二十五間南北四十五間東西二十七間
内安金銅釋迦坐像高六丈數尺樓門南北十五間
東西七間内置金剛神南門方七間四廊周回四百
六間○五月 上皇命出御府延喜式貸前大將軍
○六月林信勝請前大將軍曰設學校于京師以藤

原肅為祭酒具舍置田以教育四方民前大將軍嘉之命相地尋以大坂役興事竟寢是月畿内大水鴨川溢漂没民舍○八月六日東國大風破屋二十八日畿内及東國大水江戶大風破廬舍時權中納言藤原為滿權中納言藤原雅庸前大納言藤原入道唯心等應駿府之招東游焉前大將軍一日觀之以尊圓親王道風佐理行成書定家新勅撰道遙院稱名院伊勢物語源氏物語系圖弘法大師般若心經等諸真蹟為滿以下及僧崇傳驚墨寶之夥○九月紅夷詣駿府獻方物及生虎二頭安房大名里見忠

明治新刻十三朝紀聞卷一 其親樓藏板

起大坂

義獲罪被封忠義祖父義尚廢其主奪國世有之至是竟亡○十月前右大臣秀賴起兵叛幕府前大將軍命天下大名攻之自以旗本五百餘騎而上二十三日入二條城二十四日帝遣權大納言兼勝實條勞之前大將軍命林信勝僧崇傳索公卿庶司家典籍佛寺藏書使五山僧徒五十人於金地院騰寫之至明年二月畢功為三本獻納其一藏于東府○十一月九日前大將軍遣僧天海詣院奏請假日本後記類聚國史弘仁格式貞觀格式類聚三代格等諸書時以兵革久之後御府書籍多亡殘而

上皇欲傳其存者出神皇系圖古語拾遺名法要集及類聚國史二卷類聚三代格六卷年代記自聖武至後一條者十六卷授之尋出令集解十日大將軍自江戶至伏見十二日詣二條城十七日前大將軍陣住吉大將軍陣平野諸大名會焉總兵五十萬圍大坂城蜂須賀上杉佐竹石川等進攻按數寨前關白近衛藤原信尹薨年五十皇弟信尋嗣信尹善書晚益奇縱又能畫有歌名二十九日遣權大納言兼勝實條于攝津勞西大將軍○十二月前大將軍使金次入城議和藤堂井伊前田等兵進攻

明治新刻十三朝紀聞卷一 其親樓藏板

定河于長柄大和川于鳥飼至是大坂湮涸城中大驚大野治長勸秀賴請和不果十七日遣權大納言兼勝實條詔前大將軍曰卿欲興秀賴和將詔秀賴成之前大將軍固辭既而遣淀君妹尼常光入城勸和初淀君上天主閣以望東軍遠近無際旌旗飄飄大驚下而泣諭秀賴曰東軍億萬我大支之和而若之高野保命足矣急求和會常光來傳教曰聽和安堵如故而使東軍毀填外城池以表和親之實十九日和成互取誓書東軍晝夜填壕壘至明

春而畢二十四日前大將軍還京師信勝等上金地
所寫舊事記古事記釋日本紀文德實錄三代實錄
類聚三代格管家文集江家次第內裏山槐記西
宮記明月記續文粹諸書二十八日前大將軍入朝
上皇 天皇慰勞懇至前大將軍見關白信尚曰
願按祕籍以復朝廷舊儀未修舉者二十九日遣權
大納言善勝實條命正准后親王之位階復元日白
馬踏歌節會等七事先是此諸節會或行或廢蓋其
儀未如舊式也是月幕府奏封陸奥守藤原政宗子
秀宗于宇和島是歲幕府令民間每户置佛室收寺
明治新刻十三朝紀聞卷一 九 其親權藏板

引○元和元年正月前大將軍東上皇降
秘書五十八卷于金地院膳之大將軍還伏見遂入
二條城二十七日入朝明日東○二月兩大將軍各
歸本營○三月前右大臣秀賴再舉兵反幕府○四
月前大將軍面上十八日入京師二十一日大將軍
至伏見○五月五日兩大將軍率大軍抵河內六日
與大坂兵會戰大破之伊達水野井伊等兵獲後藤
基次薄田兼相木村重成走真田幸村長曾我部盛
親其明東軍逼大坂城兵盡銳出拒其前軍將真田
幸村陳茶臼山大野治房等陣岡山東軍前鋒近衛

少將源忠直與弟忠昌俱奮進擊破幸村軍其兵斬
幸村既而東西軍大戰坂兵終大敗東軍逃亡斬首
一萬五千忠直先登縱火焚樓櫓烟燄衝天諸軍破
門而入秀賴避火觀月樓其母淀君夫人德川氏從
焉大野治長請曰使君夫人出城幸為君公母子地
乃使侍女送歸之秀賴遂入圍倉八日前大將軍遣
人求倉中人名欲出秀賴母子而井伊直孝等私發
銃倉中以示絕淀君秀賴皆自殺道喜治長守父
子勝永兄弟永應大助等二十四人婦女十餘人殉
之前大將軍歸京師九日大將軍凱旋伏見十五日

明治新刻十三朝紀聞卷一 十 其親權藏板

前大將軍入朝獻白金千兩二十二日大將軍來二
條城東市正片桐且元赴駿府途病卒○六月幕府
奏封下總守奧平忠明于大坂令天下禁烟草後免
之○閏月二十一日大將軍率諸大名入朝獻白金
萬兩二十二日前大將軍獻本朝文粹十四冊初此
書多缺前大將軍慨之令信勝訪募遺本補校之至
是竣功云兩大將軍與諸公卿大名偕觀樂于二條
城有萬歲延喜還城藤原上貴德伯鉾拔頭諸舞曲
○七月前大將軍贊諸公卿大名于二條城設散樂
七日左大臣信尚辭關白十三日 詔改元曰元和

元和

九日大將軍發伏見還江戶二十八日以准三宮藤原昭實復辟關白內覽如故初前大將軍與藤原昭實僧崇傳等斟酌舊制作朝憲十八條名元和令於是與大將軍及昭實連署進奏之制可其略曰

天子宜專學問明古道誦習寬平遺誠不廢和歌

之舊俗現任三公臣外班親王之上相門無

器量勿進攝政關白三公公卿繼嗣宜取同姓武家

官位宜為公家員外朝衣班色四位以上繼五位繼六位繼深緋七位繼淺綠八位繼濃縹初位繼淡縹諸臣任官

宜奏其家例而其究經學有賢才長和歌精典故累

明治新刻十三朝紀聞卷一 十二 其親樓藏板

功勞者特拜右大臣為規模而勿棄措當雪者堂上

堂下諸官背關白傳奏及主事之令者宜處流罪諸

僧官宜襲例授卓拔紫衣及上人宜選持戒碩學未

積勳功妄請之者宜處流罪前大將軍又嘗定武門

式十三條亦是月領之諸大名幕府奏封前內大臣

平入道常真于宇陀郡常真本名信雄贈太政大臣

信長之子也○八月前大將軍自京師歸駿府海北

友松歿松近江人學畫於狩野永德山水人物花禽

艸獸皆臻佳妙其子友雪亦能畫○二年正月前大

將軍獵駿河田中得疾還府二月大將軍自江戶至

東照公廟

駿府前大將軍病聞命校群書治要活字鑄之歸化

源家康為太政大臣遣權大納言兼勝權大納言實

條就駿府拜之○四月太政大臣從一位前大將軍

慶長元進內大臣五年任征夷大將軍總督天下

武人上尊皇室下保萬民得其位得其壽大賚無

窮○五月權中納言源有親卒源將繼之子也昔參

議六條源有繼避亂之伊勢永正中卒不祀有親嘗

明治新刻十三朝紀聞卷一 十二 其親樓藏板

奉勅繼之至是卒幕府以備後守酒井忠利為老

中六月賜駿府於橫須賀源賴宣○七月以日光山

寺主天海為大僧正少將源忠輝有罪幕府奏收其

封放之朝熊○八月幕府令長崎嚴禁邪教是歲

以伯耆守青山忠俊修理亮內藤清成為若中封伊

豫守松平忠昌于川中嶋○三年二月二十一日賜

前大將軍嫡子東照大權現三月九日贈之正一位

遣參議藤原實顯至日光廟宣命復賜幣以參議

藤原共房為之使四月遣二品青蓮院尊純法親王

祀廟大將軍詣之○五月朔雨霰○六月十八日大

後陽成帝

朝鮮賀天下

見自

將軍自江戶入朝謝恩○八月二十六日 上皇崩
年四十七稱後陽成院 上皇好學能書嘗召三
宅嶋進講經書甚寵之慶長中賜鷹峯地方四十間
豫為其塋域云朝鮮使來豐臣秀吉薨之後東照公
聽韓王請及予文祿俘二千三百餘人韓王感恩遣
使獻駿府江戶復屬於我至是乃又遣使賀平天下
大將軍臨伏見受之○九月二十日火葬 後陽成
帝于泉涌寺藏遺骨于法華堂法華堂在深草安樂
行院中 四條帝以來聖骨多瘞焉世呼御骨堂大
將軍歸江戶是歲奏封其子忠長于小諸久松定勝
明治新刻十三朝紀聞 卷一 其親樓藏板

乃不見又彗星見東北○七月准三宮關白二條藤
原昭實薨年六十四無嗣九條幸家子康道繼之○
八月二十日修 後陽成帝三年忌齋行法華懺法
于清涼殿至二十六日畢○九月幕府奏徙大坂興
平忠明于郡山郡山水野勝成于福山和歌山淺野
長茂于廣島駿府源賴宣于和歌山於是遣紀伊守
內藤信正守大坂城謂之城代後復遣松平豐前守
石見守戊其京橋玉造謂之加番藤原肅卒肅字欽
夫播磨細川人中納言定家十二世參議為純之子
幼為相國寺僧穎悟絕人其叔父僧長老宣以碩學
明治新刻十三朝紀聞 卷一 其親樓藏板

檀名嘗謂人曰吾會姪沙彌不得開口及長好儒遂
還俗居北山市原自稱惺窩又北肉山人嘗究心程
朱之學大發明之元弘中僧玄惠始講朱註之後間
有唱之者然世未有崇信之及至肅振起斯學為世
先鞭新註始行於世東照公聞肅賢屢使講經史而
聽之遂聘其高足林信勝以備顧問至是大將軍欲
用肅方議聘禮會卒舉世惜焉卒年五十九遺稿有
惺窩文集十卷行于世肅生為景後正保中為叔
父近衛少將冷泉為將嗣子任近衛中將十四日以
前七大臣幸家復辟關白大將軍自京師歸江戶

詔知恩院良純親王列門跡親王上之弟也跡八
宮實為東照公養子是為知恩院門跡祖○十月大
將軍奏謁日光廟是歲徙松平忠昌于島田丹羽長
重于棚倉小出吉英于出石吉英弟吉經于園部分
部光信于大溝侍所司代侍從伊賀守板倉勝重罷
自慶長癸卯歲來衛大內兼執京畿諸政明斷以
廉稱至是幕府以其子周防守重宗為所司代來代
亦廉介明斷世以為不愧父云外船納錦魚本邦
有此水蟲是為始○十二月二十八日以權大納言
右近衛大將兼退為內大臣○六年正月十一日以

明治新刻 十三朝紀聞 卷一 十五 其親樓藏板

大將軍嫡子家光為權大納言叙正三位信尚辭左
大臣十三日以右大臣信尋代之○二月十八日准
后新上東門院諱晴子薨正親町皇子贈太上
大皇諱誠仁之妃後陽成帝之母也京師災○三
月京師災十五日勅阿闍梨前大僧正三寶院義
演修仁王法于清涼殿至二十一日畢○六月二日
尊國母近衛氏曰准后稱中和門院十八日以大
將軍女和子拜女御女御前月自江戶入京師大炊
頭上井利勝雅樂頭酒井忠世掃部頭井伊直孝從
焉至是自二條城乘牛車入內○八月左大臣信

尋辭左近衛大將十七日以前內大臣實益為右大
臣內大臣兼退兼左近衛大將西大路氏絕久矣是
歲藤原總光子隆鄉繼之任左近衛少將幕府築源
忠長第于府城竹橋門內名北城○十二月二十日
勅奏神樂于內侍所○辛酉七年正月二日以前
內大臣定熙為右大臣罷十二日以兼退代之權大
納言藤原康道為內大臣○八月暹羅使來詣江戶
獻書及物○十月帝命以活字印宋朝類苑以頒
賜諸緡紳又賜大將軍當時西土此書已亡亦無刊
本云○十一月從一位前左大臣近衛藤原信尚薨

明治新刻 十三朝紀聞 卷一 十六 其親樓藏板

年三十二子教平嗣三品中務卿伏見平房親王薨
子兵部卿貞清親王嗣是歲幕府奏徙玄蕃頭有馬
豐氏于久留米阿媽港使來獻幕府侍從織田長益
卒信長之弟為人和芝村人名學然恭儀于千利休
盡其道自踊有樂又乃其巾從學甚多遠江守小堀
正一為其上足創一儀又工掃花世所謂遠州流之
祖也○八年四月大將軍奏謁日光廟○秋山形最
上義俊有罪○冬宇都宮本多正純有罪皆禡封正
純及于出羽○十一月以藤原公勝為侍從是歲幕
府奏徙戶澤政盛于新莊酒井忠勝于莊內貞田信

之、于川中嶋川中今松代也○九年正月八日修密齋于紫宸殿阿闍梨東寺長者前大僧正義演主之至十四日而畢此典久廢至是復自後每正月行之又修大元帥法于小御所權僧正無量壽院堯圓主之○三月十五日以權大納言源家光兼右近衛大將○四月大將軍謁日光廟六月入京師上書辭征夷職○七月二十七日以源家光為征夷大將軍遷內大臣補源氏長者任右馬寮御監賜兵仗牛車右大將如故遣傳奏權大納言藤原實條等就伏見拜之時年二十是日前大將軍奏益供御田二十八日

明治新刻十三朝紀聞 卷一 其親樓藏板

前大將軍大將軍共入朝謝恩○八月六日大將軍入朝諸大名詣伏見賀襲替○閏月幸家辭關白十六日以左大臣信尋代之補藤氏長者聽內覽賜隨身兵仗牛車○九月大將軍歸江戶毀伏見城進其寢殿等于妙法院賜其四脚門等于東本願寺築定城命桑名久松定勝子定綱鎮焉備中守阿部正次若狹守內藤清次為老中○十月二十八日修不動法于清涼殿准后阿闍梨義演主之○十一月十九日皇女興子生○十二月前左大臣鷹司信房之女孝子嫁大將軍是歲越前參議源忠直有罪幕府奏

放之豐後明年徙其嗣子光長于高田○甲子寬永元年二月初大將軍奏請幸二條城斟酌北山聚樂二典於是乃營行宮于二條城中命中納言源義直掃部頭井伊直孝掌工事晦日改元寬永○三月二十五日帝遊覽櫻明宮○四月幕府修築江戶西城或云移伏見城第修之○六月幕士弓削田七助以私怨斫殺秋田長門守于營中自殺焉○七月二十三日勅大僧正阿闍梨尊純法親王修北斗法于清涼殿至二十九日畢○八月初前大將軍數加小諸忠長封去歲七月累進權中納言至是又增

明治新刻十三朝紀聞 卷一 其親樓藏板

封之駿河遠江徙治駿府○九月故太政大臣豐臣秀吉夫人從二位淺野氏薨于高臺寺年七十六○十一月二十八日立女御和子為皇后稱中宮自後村上朝以來歷世皇妃不正其位號以女御自居者十一代至是復此禮○十二月朝鮮王李佺使來賀幕府繼世是歲幕府奏徙松平忠昌于福升伊而把你亞使三百人至長崎幕府以其邪蘇徒故却之○二年初慶長中長崎商人津田亦至暹邏也會與國與哥阿戰將敗於是國王請亦援之亦乃與山田仁同帥我民在暹邏日本巷者六七百人擊破哥

山崎
宗鑑

阿軍走之王大悅以其女妻亦一官授仁數年亦生
子參至是亦以妻參釋迎佛像撫檀木寺還自其國
或傳仁伊勢山田人以其功補遷國宰宗鑑歿鑑
本名範光字彌三郎姓支那近江佐佐木氏遺臣薙
髮更名號一夜庵最善連歌名馳海內嘗給事室町
氏退隱山崎關趾弟子宗因以諧歌聞範光一作範
重○三年三月薨於山崎藏大輔青山幸成為老中
命林信勝撰大學和字抄四月謁日光廟○六月前
大將軍自江戸入京師○八月大將軍入京師前大
將軍遊觀淀城十二日前大將軍大將軍共入朝十
明治新刻十三朝紀聞卷一 其親樓藏板

大寺
行華
二條

大納言藤原道房兼右近衛大將自四月不雨至于
是月京師井涸○九月六日 幸于二條城 中和
門院 中宮皇女興子及諸妃皆往右大臣兼退內
大臣康道以下縉紳前驅關白信尋後兼大將軍平
諸大名扈從縱民觀焉即日行享禮七日使伶人奏
樂有萬歲延喜輪臺青海波數千蘭陵王納薊利千
秋諸舞曲八日設歌會以竹契退年為題太政大臣
前大將軍左大臣大將軍侍于 御前之左右關白
左大臣信尋兵部卿貞清親王前左大臣藤原信房
內大臣康道權大納言藤原光廣權大納言教平權
明治新刻十三朝紀聞卷一 二十 其親樓藏板

宮前大將軍獻名刀劔一文字一口鞍馬五頭金二
十兩御用時服百領緋綸百卷定家萬葉集行成朗
詠集趙子昂陶明圖伽羅十斤麝香五斤蜜六十
斤大將軍獻劔一文字行平二名刀鞍馬十頭沙金
三十兩白金三十枚御用冠服二摺御用時服二百
領蘭絹百卷香水長一丈三尺圍四尺五寸者麝香
五斤瑤瑤三十枚紅脂二百斤道風墨蹟一帖牧溪
觀音龍虎三幅圖金杏孔雀金杏獅子銀香爐金燭
鶴銀花瓶銀茶架金茶鉢金風爐金茶盃金
茶壺及金茶碗七十餘隻銀衣架等前大將軍夫
人淺井氏前大將軍夫人鷹司氏亦各獻沙金御服前
大將軍又進中御門院中宮白金各五百枚緋
子各五十枚時服各三十領沈香各百斤伽羅各五
十斤大將軍又進其兩宮白金各十枚白綸各五
十卷緋綾各五十卷時服各五十領紅衣各百斤沈
香各百斤麝香各二斤伏見八條高松三宗室關白
以下公卿仁科以下親王及宮女庶尹皆有贈遺侍
從西三條藤原公勝卒○十月前大將軍大將軍皆
東歸○十一月十五日以皇子高仁為親王○十
二月四日以八時智忠為親王是歲明新江醫人陳

卷一

其親

其親

明
人淺井氏前大將軍夫人鷹司氏亦各獻沙金御服前
大將軍又進中御門院中宮白金各五百枚緋
子各五十枚時服各三十領沈香各百斤伽羅各五
十斤大將軍又進其兩宮白金各十枚白綸各五
十卷緋綾各五十卷時服各五十領紅衣各百斤沈
香各百斤麝香各二斤伏見八條高松三宗室關白
以下公卿仁科以下親王及宮女庶尹皆有贈遺侍
從西三條藤原公勝卒○十月前大將軍大將軍皆
東歸○十一月十五日以皇子高仁為親王○十
二月四日以八時智忠為親王是歲明新江醫人陳

明
教

明德歸化○四年正月幕府奏收會津故蒲生忠鄉
司命其弟忠知繼世使之于松山松山加藤嘉明于
會津後七年忠知亦無嗣邑令八月六日大水○
九月先是將軍奏建一寺于江戶忍岡營東照公
廟于其中至是改名東叡山寬永寺以天海為開山
○十一月略加沙古使理加來獻幕府是歲幕府禁
紅毛互市後免之○五年四月而大將軍謁日光廟
○六月高仁親王薨年三歲上之第一子也○十
一月江戶西城花園番屬猶村與同僚數人夜鬪爭
于西城中殺二人是歲幕府以出羽守森川重俊為
明治新朝十三朝紀開卷一

卷一

其親

其親

老中先是長崎水次商船過臺灣海為紅毛所劫抄
而歸中乃囑濱田彌彌弟小小子新藏等往報之造
臺灣以討謁賊魁即執之揮匕首擬其心以無罪魁
泣謝左右驚起持銃環擬之彌曰汝殺明我則矣仍
定償約至是以魁質子并紅船一艘歸國奉行因
其俘衆尋質子病死後皆釋還○六年正月伊豫松
山盜賊千餘人蜂起下野守蒲生忠知發兵討平之
一品式部卿智仁親王薨子智忠親王嗣智仁正
親町皇子贈太上天皇諱誠仁之子帝之叔父
帝為豐臣秀吉養子是為八條殿祖智忠有子忠幸

時年六歲後踊廣幡為正親町源氏祖○七月前左大臣信尋辭開白○八月二十八日以右大臣兼退為左大臣任開白補藤氏長者賜牛車○九月東山清水寺災後二年幕府再造之令竹中筑後守監工○十月帝令傳旨於幕府曰遜位以二女之大將軍大驚謂自遷都已來久無女主至今女宮踐極後世曰外戚成之所為也諫之不聽二十九日以皇女興子為親王○十一月六日內大臣康道為右大臣大納言實條為內大臣八日帝讓位於興子內親王詔開白兼退攝政在位十八年改明治新刻十三朝紀聞卷一 其親樓藏板

元者二曰元和寬永延寶八年八月崩年八十五帝性聰明善和歌極古今奧義在院之日親撰明題和歌集又下連歌好畫帝尤信佛教遜位之後每使文守如周天主等說禪律於御前亦詔隆琦性敏進法語云皇女立是為明正天皇

明正天皇諱興子後水尾帝第二女也母中宮諱和子前大將軍之女也至是歲時年七歲仍用寬永號是日尊後水尾帝曰大天皇九日尊中宮曰東福門院是歲暹羅使來獻幕府七年六月琉球人詣幕府○七月三日中和門院崩年五

十六葬于泉涌寺○九月五日遣正五位上王蕭大祭主大中臣友忠小舍人齋部親賢奉幣于大廟告嗣位十二日行即位禮所司代板倉重宗巡警洛中前大將軍使雅樂頭酒井忠世大將軍使大炊頭土井利勝共朝各獻御劍一口御馬直銀千兩以賀即位又朝院各獻上皇御劍一口御馬直銀五百兩獻皇太后銀五百兩以賀之是歲正二位織田信雄入道常真薨元和中常真之封於宇陀也小畑亦其領中而長子左近少將信良當出小畑不得復還於是次子高長紹宇陀任侍從○八年二月二日使使詣石清水廟大將軍獵于川越五月還明治新刻十三朝紀聞卷一 其親樓藏板

○三月十九日江戶城傍雨積如霜○六月初肥後守藤原忠廣造一大船名之曰日本船幕府疑以為有異圖至是奏收其封放之于出羽先是熊本城內樹皆生瓜形如冬瓜一瓜破薪刀益家亡之大忠廣清正之子○八月目付豐嶋刑部以私憤斫殺老中主計頭井上正就于營中○十二月十五日以權大納言藤原公益為內大臣駿河權大納言忠長獵州淺間山為神所祟病短氣○九年正月九日以權大納言藤原教平為內大臣太政大臣從一位前天將軍薨年五十四出羽守森川重信信濃守內田正信殉之○二月二十二日遣前內大臣藤原公益

于江戸贈前大將軍正一位、贈、謚曰名德院公文祿元年為中納言慶長六年進大納言八年升右大將馬寮御監十年拜內大臣征夷大將軍公性孝順一奉東照公遺誡親賢士遠傳人○三月二十一日

勅權大納言藤原光慶賜幣于日光廟以東照公十七年齋也○六月幕府奏使鳥取池田光政于岡山岡山池田光仲于鳥取先是奉勅修賀茂上下兩廟至是成○七月四日遣權大納言藤原光廣等于賀茂行遷宮儀○九月幕府奏幽權大納言忠長于田府尋取其封忠長帖召德公寵贈縱其及被幽

明治新刻十三朝紀聞卷一 其親據藏板

無幾免之不悛明年自殺于高崎○十月幕府奏使豐前細川忠興于熊本封小笠原忠貞于小倉忠貞姪長次于中津○十一月攝政兼殿辭左大臣二十日以前右大臣藤原定熙為左大臣罷十八日以右大臣康道代之內大臣教平為右大臣權大納言道房為內大臣幕府以讚岐守酒井忠勝為老中始置大目付以修理亮秋山正重但馬守柳生宗矩河內守水野守信為之是歲上皇賜僧文守系田郡下知邑為建一寺名法常寺後又賜清涼殿以創靈源寺于舟岡山陰文守號一絲久我氏侯而為南

禪德險法孫有名聲上皇嘗徵問法進對稱旨既而潛遁演化堅木原上皇及聞之遣中使謝還京固辭行隱于知因勅賜其地居止壽考以其猶僻遠又命兼住靈源云權大納言源義直建孔子祠于江戸忍岡或云為林信勝立書院因安孔聖像○十年正月二十日小田原地震人畜死皆多東山知恩院災○一月幕府增平石以下小性書院番俸每十二百石三月奏始置少老役以豐後守阿部忠秋志摩守三浦正次備中守太田資宗為之加賀守堀田正盛為老中七月詣忍岡孔聖祠命林信勝講堯

明治新刻十三朝紀聞卷一 其親據藏板

典是歲從信濃守永井尚政于淀尚政臣有佐川田昌俊字喜六故越前長尾氏遺臣弱冠屬人戰于大津顯勇為尚政父直勝所舉性敏善和歌明孫吳又能連歌與其師法眼里村昌琢齊名嘗藤原雅庸以昌俊和歌備後陽成帝覽大賞云後致仕隱新村自誦默默庵○十一年權大納言光廣上承下負幹太平頃幹時年十三詞音淳正朝野以為國瑞云○七月大將軍西上入二條城所率三十萬七千人帝欲以大將軍為太政大臣十六日遣使諭旨辭不敢當十七日再諭固辭不拜十八日入朝尚朝

幕府
領部
民銀
五千
貫錢

數馬
殺第
仇

上皇奏請復聽政以女主故也○閏月三日大將軍奏增一皇湯沐邑四日朝上皇勅觀蹴鞠于院中二十三日江戸西城災先是幕府始置大老役以酒井忠世為之於是忠世守西城乃坐傳大老大將軍在二條城召見京師市人領賜白金五千貫錢令大目付京中傳命曰昔者台德公上洛也賜部下以白金一萬貫錢今賜減之公上憾焉而忝戴之初東照公免京城內市地租至是大將軍又免城外市地租應仁以來京洛數罹兵燹九衢斃亡當織田氏時僅存一條以上百數町與二條以下五條以上

明治新刻十三朝紀聞卷一 其親樓藏板

西洞院以東馬台以西五十餘町餘皆成荒野織田氏素欲再造京師故令新聚編徭役尋昇平日久戶口歲增至是內外市街合一千二百七十九町民房三萬五千四百餘間皆分賜云大將軍如大坂免其地及奈良地租或傳界市亦免之○八月朔大將軍入朝既東及歸領白金于府下市民○九月再遊辭攝政大將軍謁日光廟○十一月二品昭高院道周法親王薨年一後陽成第十一皇子也同山藩臣渡邊數馬殺同僚川合又五郎復弟小十之讎初又五以仇恨殺小才治于江戸潛匿某氏脫出

京師
奉行

畜奴士招親戚得十餘人羈旅以自衛之京師及奈良遂欲如伊勢入伊賀路數馬聞計欲為報之致仕請其如夫荒木亦助之力以擊斃受俸於郡山為之致仕與俱索讎至是聞又五赴伊勢乃趾之潛宿又五所次嶋原驛明早二士與其僕二人皆戴鐵巾觀鐔衣至植野城下博勞衢要之又五未之知乃行及折衢見其卒為僕斬大驚下馬持槍數馬揮刀與鬪少傾互被數創亦縱橫奮擊殺傷數人遂斫又五斃之令數馬斬首是歲幕府奏始置京師町奉行以五味備前守為之使酒井忠勝于小濱京極忠高于龍

明治新刻十三朝紀聞卷一 其親樓藏板

野戶田氏缺千大垣九鬼久隆于三田○十二年正月右兵衛佐藤原總盛卒權大納言廣橋總光之子是為而日野家祖○二月初六日以權大納言藤原實秀番右近衛大將○三月初江戸賜書於外國也未曾有自稱以王號而元和中朝鮮入貢也對馬守臣柳川調興與僧玄方密謀加一王字於幕書日本國之下以傳貢使還蕃之後事覺幕府檢之調興惶懼遽誣其主宗義成數年不決至是大將軍召義成主從親聽之調興遂伏其罪梟邑流于津輕玄方亦處流○七月幕府令長崎禁交趾占城呂宋阿媽港等

上
帝
朝

舶入互市先是諸外舶隨便泊西海諸津至是以嚴禁邪蘇教傳之二十六日天赤如火○狩野光賴歿本姓木村幼仕豐臣秀吉好畫遂命學狩野永德冒其姓自號山樂善山水人物花鳥牛馬有出藍之名龍本房景昭出此門○九月實秀辭右近衛大將四日以權大納言藤原尚嗣代之○十月六日帝朝上皇于櫻町宮十日以左大臣康道攝政補藤氏長者聽門覽賜牛車大將軍命林信勝撰和漢法制○十二月駿府城災大將軍以其所自撰白鳥二頭獻天皇 上皇奏始置寺社奉行以東市正堀判

明治新刻上三朝紀聞卷一 廿九

永
寬
永
元

重為之是歲大野松平直政于松本桑名久松定行于松山尉定房于越智後三年賜直政出雲徙治松江○十三年正月朔日食廢小朝拜明日行之幕府始設評定所從一位前左大臣九條藤原義孝薨年八十四子幸家嗣○四月十日遣參議藤原公景等賜幣于日光廟先是幕府改造此廟至是成壯麗無比大將軍謁焉○五月幕府奏鑄新錢於近江坂本文曰寶永通寶自六月行之自天正文祿以來我商舶往明及東京安南太泥暹羅阿媽港呂宋東埔塞等諸夷互市而慶長辛丑京師角倉氏朱

天
草
天
草

場司茶屋等與長崎界浦諸大商更奉幕府船牌紹此業世謂御朱印船至是幕府以禁蘇教悉傳之○七月初大將軍弟正之出為保科正光嗣子冒其氏至是大將軍增封之于山形賜松平氏○十月尤近衛少將藤原基教卒參議團基任之子是為東園家祖基任孫三位基起為葉川家祖後三世改氏壬生基起子權中納言師香為石山家祖師香弟石近衛少將基維為六角家祖○十一月皇姊昭子內親王降嫁近衛藤原尚嗣○十二月朝鮮王李熙三使任結金世濂青立來獻幕府是歲勅赦藤原氏罪

明治新刻上三朝紀聞卷一 三十 其親據藤原

慶長中侍從諸熊卜部教利及中將藤原賴國少將藤原宗隆少將藤原忠長少將藤原雅賢少將清原宗勝諸輩密勾宮女所在奸淫事覺勅誅教利流賴國等五人于硫黃蝦夷隱岐伊豆宮女五人于八丈參議藤原光廣少將藤原實久連坐之被宥至是諸流人已死于島中獨忠長生在松前乃得見釋後十六年還京師其子定遠任權大納言諸野官大將軍使狩野守信蓋東照公事跡于營中諸障○十四年正月朔日食二日小朝拜○八月小西行長遺臣蘆塚等以邪蘇教聚天草民作亂推天草時貞者為

魁帥九月擁衆入嶋原犯高久城掠其倉穀三萬二千苞大藥甲馬等築于原城墟惣天草嶋原男婦三萬八千餘人據焉高久嶋原支城○十月大將軍余而海諸藩攻賊遣内膳正坂倉重昌石谷十藏等督其軍討之○十一月細川忠利黑田忠之鍋島勝茂有馬豐氏立花宗茂小笠原忠真寺沢忠高松倉勝家嶋津山内將等共圍原山惣兵十二萬五千攻之賊善拒有馬將壹岐死之寺澤松倉等兵亦死者多大將軍復遣伊豆守松平信綱采女正戸田氏鐵討賊命日向守水野勝成贊謀焉○十二月攝政康道

明治新刻

十三朝紀聞

卷一

世一

其親據藏板

辭左大臣初高倉氏絶矣權大納言四辻藤原公遠子權大納言嗣良繼之因歸高倉至是改歸數氏嗣良有子參議李定為中國家祖李定子三位李起為高丘家祖○十五年正月朔板倉重昌率諸軍攻賊城上發木火箭如雨軍卒死傷無數重昌不為意身先士卒而進登城為渠帥駒木根所銃而死木火箭駒木根等所造以堅木長六七尺為之一筒入二十箭發注如煩世未有此器一時傳奇之松平信綱戸田氏鐵等至嶋原徵清船紅船四艘於長崎命薄城以大煩攻之不利一夷死之信綱聞巢中食盡乃

擄於城下日出而復歸佛教者皆免罪而無一人出者○二月自始圍與賊戰十數合多不利至是賊數千夜襲黑田營以木火箭焚之殺守將一人遂大犯傍營寺澤將三宅藤力拒與諸將破走之獲渠帥二人細川營起釣櫓臨城發銃矢下如雨巢中頗苦二十七口勝茂次子直登單騎馳城冒矢石先登與左右奮擊斬渠帥十餘人細川將太刀佩繼進破前門而入縱火焚城焰烟漲天諸軍因爭入誅斬無算明日攻内城信綱將其戰死直澄再先登時貞蘆塚以下悉伏誅賊遂平初天草山田村長右者事母至孝

明治新刻

十三朝紀聞

卷一

世一

其親據藏板

邪蘇徒起不得已而從之使妻扶母逃去入巢中守一櫓一夕射書於小笠原營曰自有老母避在蓮池大征唯免母也臣效死以報恩伏祈速告襲期使臣內應信綱令忠真射復之為行夜所擒渠帥大驚皆欲戮右蘆塚獨不可曰渠怒而懷部下殺之部下必倒戈不如託事入牙因之代守蘆來襲諸軍莫之知至期襲不克及城陷賊卒以魁命至因所將殺俄而散去至是信綱出右於巖窟釋其擄送之江戶大將軍大感天之保全孝子赦右母子及孥反賜其田宅○三月信綱氏鐵同巡視長崎平戸天草唐津等

天必助

四月凱旋○五月大將軍賜信綱氏鐵名刀等奏封
鍋島直澄為連池大名拜甲斐守收嶋原長門守松
倉勝家封流之會津前唐津兵庫頭寺澤忠高封收
其天草郡初勝家驕侈暴飲及賊起民多叛黨之其
討賊亦怯懦無功於是乃亡忠高後病狂自又無嗣
邑除○六月二品彈正尹高松好仁親王薨年三十
六○十一月幕府以對馬守阿部重次為老中是歲
以雅樂頭酒井忠清為老中再造高野大塔建東海
寺宗彰禪師為開山○十六年三月以曼殊院良恕
法親王為天台座主二十日東叡山東照公廟大幕

明治十三年紀開

卷一

其親樓藏板

其親樓藏板

府奏以奧平忠明為西國探題徙之于姫路○八月
十一日江戸牙城災天主閣得全大將軍避火西城
再築之明年二月成○中沼采昭歿石清水龍本房
主辨惺惺翁又松華堂善畫筆姿蕭散舉世推重之
又法尊朝親王能書與本阿彌光悅為一時領袖○
十一月上皇親洒宸翰于東照公繪傳中而畢初
大將軍余僧天海撰傳狩野守信作圖以奏上皇
因為加御書數章反賜云是歲幕府奏徙忍松平信
綱于川越壬生阿部忠秋于忍並為老中封賴房于
賴重于下館三浦正次于壬生壬生原京師坊名往

吉朝士壬生官務者避亂之下野居焉故名云僧袋
中後為東山袋中庵始祖嘗周遊琉球國錄其所見
帝朝開以傳世○十七年三月十二日帝朝上皇于
櫻町宮十七日車駕還宮二十一日以右大臣教

平為左大臣○四月大將軍詣日光修東照公二十
五年齋○五月幕府已禁南蠻互市而去歲呂宋船
入長崎請復互市不聽追之至是其船七十餘人再
入因詰之幕府乃誅其六十一人宥餘燒船時呼南
蠻黑船○六月二十四日以前內大臣實條為右大
臣叙從一位○七月以二品亮然法親王為天台座
主○八月幕府奏收高松壹岐守牛島高俊討放之
出羽其宰生駒將監與同列前田助爭事而高俊不
服制故也於是助賜死將監處流助有姪前野織部
謂亡主家喪叔父皆由將監無道潯如出雲殺之○
十月西三條藤原實條辭右大臣薨年六十六其子
故公勝子實教嗣右大臣好學善和歌及書次子侍
從公種為武者小路家祖實教弟權大納言公音為
押小路家祖幕府奏徙高松同部宣勝于岸和田○
十一月三日以內大臣道房為右大臣權大納言尚
嗣為內大臣是歲諸國中病多死○十八年正月大

明治十三年紀開

卷一

其親樓藏板

西洋將軍修大内始置勘定奉行紅夷來獻幕府慶長

之始庚子歲諸厄利與紅夷俱至界浦乞市中幕府聽

之皆泊平戶是為西洋入泊之始其後有故得諸厄

利至是始許紅船泊長崎次出嶋南蠻舊館諸厄利

亞即漢人刺亞後世呼英咭喇或傳元和二年以波

爾杜瓦爾出嶋舊館賜紅毛波爾杜瓦爾亦西洋夷

江戶火○三月二十二日移御假宮○十二月教

平辭左大臣是歲幕府建日光多寶塔奏使大久保

忠孝于明石山崎家治千九龜植村家政于高取○

十九年正月十九日以右大臣道房為左大臣内大

明治新刻十三朝紀聞卷一

臣尚嗣為右大臣權大納言藤原光平為内大臣○

三月天下大飢至于五月幕府發錢穀賑之時米斛

銀八十錢○六月宮成十八日帝徙御焉○十

一月十五日以皇弟紹后為親王明年命更名紹

仁○十二月夜東寺浮圖第二層無故火起災幕府

再造之至正保元年七月成塔島二十八間六尺上

有九輪壯超舊觀費銀九百七十貫六百四十餘錢

幕府奏以和泉守松平象壽為老中是歲徙少將賴

重千島松封小野忠清于松本紅夷十三人自咬啗

吧漂至鹿部幕府送之長崎○二十年正月十八日

兩不得行三越打會二十一日行之○六月朝鮮使

來朝幕府賀嫡子生誕○七月幕府奏徙肥後守正

之于會津韓使詣日光廟○九月二十七日紹仁親

王元服于院中攝政康道加冠藏人頭藤原綏光

理髮先是太將軍奉勅營新院于中和門院宮

趾至是成初幕府命備中守太田資宗撰武家宗支

冊是月成名寬永諸系圖傳為二本其一抹信勝搭

法書之百六十六卷一高野僧立詮俗體書之百八

十六卷於是幕府又命少將吉良義彌撰公家宗支

冊球球貢而瓜於薩摩嶋津氏慶長中南瓜烟草等

明治新刻十三朝紀聞卷一

自南蠻來其後幕府亦自其國來本邦有此諸草

是為始大將軍奉東福門院命作韓使朝府圖金

屏一雙入貢記七卷獻焉○十月三日帝徙御新

院讓位於紹仁親王在位十四年終不改號元祿

九年十一月崩年七十皇太弟立是為後光明

天皇

十三朝紀聞卷之一終

十二朝紀聞卷之一

從六位下行藤原朝臣藤原經繼編次

男 正位下高藤原 賴家 授

後光明天皇諱紹仁 後水尾帝第四子中母 壬

生院初諱繼子後改光子贈左大臣藤原基任之

女實永十九年為親王二十年十月受禪十二日尊

明正帝曰太上天皇稱新院二十二日遣正五位

下王兼春祭主大中臣友忠小舍人齋部親重奉幣

于大廟去嗣位攝政康道左大臣道房右大臣尚

嗣人臣光平並如故大僧正天海歿天海近山人

其親樓藏板

最澄法孫尾延曆寺南光坊以密教為東照公所親

信與金地崇傳等每參與叢議嘗與日光山開東叡

山其將死也大將軍就東叡省問手賜湯藥云歿年

百三十三〇十一月十五日 帝始讀書二十一日

行即位禮時年十一大將軍使侍從酒井忠勝伊

豆守松平信綱朝賀之四位五萬石以下諸人名亦

各使使奉賀於是特授忠勝左近衛少將信綱侍從

是歲詔罷知恩院法親王良純放之于天日山近

婦女弗帶腥故〇正保元年正月十一日踏歌節會

權人納言藤原嗣長奉行〇五月二十九日遣使王

中使

兼春大中臣友忠等修大廟山口祭〇六月近衛

中將大隅守源光久以中山貢使國頭王千金武按

司等詣幕府中山即琉球也慶長中光久父家久請

幕府征定之賜隸焉於是王尚寶從家久來獻駿府

江戶其後尚豐尚賢相繼而立至是尚賢遣使朝幕

府賀生誕告已繼世是為中山使聘江戶之始其貢

釵銀綴子羅紗太平布蕉布馬球球國有中山山

北山南之踰中山又名沖繩島其周圍七十四里王

居焉王城曰首里距東面海岸各二里距北岸二十

九里距南岸五里城而有那霸港去我長崎二百里

明治新刻十三朝紀聞卷一 其親樓藏板

去朝鮮四百里去臺灣四百八十里沖繩之西有計

羅摩島伊豆島伊是那嶋惠平屋島粟島久米島等

內一二周圍五六里餘二三里以下也以上均為中

山沖繩之北有與論島永良部島德島加計奈島大

嶋東界嶋大島周圍五十九里在薩摩南七十里為

北界德島周圍十七里餘十里上下山山為山北

沖繩西南有宮古島太良滿島石垣島入表島與那

鳥等內二三周圍十五六里餘四五里以下也以上

為山南但中山山北多水田土宜梗稻中山栽米七

萬一千七百八十餘石山北三萬二千八百二十餘

石山南多陸田宜藏麥稅米萬九千九十餘石云
○九月三日勅神祇少副卜部兼里紫祀吉田廟
參議藤原李福卒右近衛少將正親町李康之子是
為裏辻家祖○十一月以青蓮院尊能法親王為延
曆寺座主○十二月十六日改元曰正保幕府作興
地諸藩城圖是歲命林信勝撰中朝帝王譜錄倉京
都將軍譜信長秀吉家譜封松平直良于大野太田
資宗于濱松直良秀康李于資宗持資入道道灌六
世孫○二年正月愛宕山祠火○三月蒲原郡如法
寺村一農房內忽有火光出自地中至今不滅後世

明治新刻十三朝紀聞卷三其親樓藏板

以為越後七奇之一○四月以幕府嫡子家綱為權
大納言叙從三位遣權大納言藤原經李權大納言
藤原雅宣就江戶拜之○五月後水尾上皇勅侍
所司代板倉重宗徙蹴場戒光寺于泉涌寺內住僧
天主為泉涌如周上足上皇以其善律教信罷之
故有是命幕府遣使巡察諸國○十一月遣藤原經
李賜官跡于日光廟先是幕府修五條石橋令觀音
寺澤興等監工至是成寬文震壞後更攔板木造之
此橋當時已在六條坊門而其稱五條以原架五條
續也古者鴨川諸橋中五條七條石造至應仁猶存

其後京師久亂諸橋概廢及天正中秀吉東征發京
師徙四條橋于三條五條橋于坊門修之云初右近
衛少將藤原李時卒于享祿中阿野氏絕矣其孫實
顯嘗奉勅繼之任權太納言至是慶初姊小路氏
亦久絕矣實顯次子公景嘗繼之任權大納言而公
景弟參議勝忠為山本家祖公景子權中納言實種
為風早家祖是歲幕府奏徙水野忠義于岡崎松平
直之于杵築秋田俊季于三春淺野長直于赤穗○
三年三月十日帝以大將軍請遣使賜幣于日光
廟自是後歲遣使世稱為例幣靈源寺主文守殁

明治新刻十三朝紀聞卷四其親樓藏板

賜諡曰定惠國師以曼珠院良尚法親王為天台座
主○十月肥前平戶民一官為明國上書幕府乞援
兵不應一官即歸化明人鄭芝龍也先是還明就撫
以功為都督南安伯是歲夏明帝山松為清兵所執
芝龍弟鴻逵與芝龍等議占太祖裔孫聿劍為主芝
龍因進平虜侯專掌兵餉戰守之機云芝龍有子森
者寬永初生于肥前居七歲芝龍在明屢請長崎得
之至是森年二十三聿劍賜之姓朱改名成功為御
營中軍都督世俗所謂國姓爺者是也○十一月東
山祇園祠火去歲春幕府修此祠令觀音寺澤興等

監工而成至是祠殿中門並燬兼應中幕府再造之
令多羅尾等監工蓋北野平野稻荷等諸大祠亦幕
府比例修之後世與祇園皆羅之更納修屋金至今
平野等具息算之云○十二月後水尾上皇女
質子內親王降嫁二條藤原光平○四年正月前左
大臣庫道辭攝政五日以左大臣道房代之聽內覽
賜隨身兵仗牛車居五日薨年三十九僧如周段如
周泉洞寺雲龍院主曉達禪律為後水尾上皇所
信重上皇嘗賜以紫衣固辭乃及將死時使使齋
紫衣就臥房服之○三月二十八日以前左大臣昭

明治新刻十三朝紀聞卷二 五其親樓藏板

良再攝政補藤氏長者聽內覽賜隨身兵仗牛車昭
良即後陽成皇子兼退先是改名是日勅權中
納言藤原公景藤原言經修大廟明年五月勅
權中納言藤原隆量藤原共綱行立柱上棟之儀○
四月十五日夜月陽有如月者四真月明而陽者如
朧二十五日江戶風雪寒如盛冬大將軍獵于麻布
○五月十三日江戶地大震城郊多毀○六月哥阿
使昆州船二艘至長崎乞復互市福岡熊本柳
川唐津小倉大村諸藩各多發兵船備之幕府遣筑
後守井上正清等詢其費禁令而來却之至八月二

後神

船還去哥阿即卧重○七月三日以右大臣尚嗣為
左大臣內大臣光平為右大臣左大將如故二十二
日大雨雹如梅子二十七日以攝政昭良復辟開白
二十八日以前權大納言源通村為內大臣○九月
十一日遣參議藤原經光奉宸筆祝文于大朝
兵軍大允王兼字神祇大副大中臣女忠從五位下
齋部親重奉幣以祭焉此禮久廢至是復行自是後
歲遣王等三使奉幣世所謂御祭是也伊勢奉幣自
古特使諸王行之此時王氏無克之故勅兵庫寮
稱王行事遂以為恒例○十一月內大臣通村罷通

明治新刻十三朝紀聞卷二 六其親樓藏板

村睦和歌有盛名二十七日詔皇弟良仁紹高祖
殿封自好仁親王薨此弟無主至是良仁出居之更
稱曰花町殿是月大將軍臨王子村觀犬追物犬追
物射街名或云鳥津光久修其上祖忠義奉鎌倉命
行之之故事也○慶安元年閏正月二十日以權大
納言藤原實秀為內大臣一品仁和寺覺深法親王
薨年六十一後陽成第一皇子也○二月十五日
改元慶安○三月五日遣使賜幣于日光廟嚴野井
溪建橋長七十五間世謂木曾掛橋○四月賜寬永
寺田入海益曰慈眼大師大將軍奏詣日光修東照

近江
聖人

公三十三年齋大赦天下二十三日地震嶺嶺崩○
七月十九日以良仁為親王○中江原殿原字惟命
高島郡人幼而如老成以儒仕大洲藩弱冠致仕養
母教授鄉里宅側有大藤人因踰藤樹竊嘗得王守
仁全書篤信其致知之學年歸行後文詞人無賢愚
感其行之厚遷善者衆時稱為近江聖人所著有太
學孝經啓蒙中庸論語解鄉黨篇異傳翁問答春風
鑑草日用要方小醫南針神方奇術醫筌其他甚多
○二年二月五日伊豫松山宇和島等地震城壘壞
民舍倒二十五日以前大納言藤原定好為內大臣

明治新刻十三朝紀聞 卷二

七其親樓藏板

藤原
君子

○五月十三日武藏川越大雨電狀如瓜其大重可
二斤小可四十錢人馬死傷者多○六月二十日江
戶地震官邸市舍墮倒民死者多三宅嶋段鳴字亡
羊和泉人元弘忠臣見島高德七世孫移家京師以
儒為業從學頗多藤原肅長島幾二十歲而推稱為
謙厚君子○後陽成帝後水尾上皇皆微陞使
殿進講能過優渥有器財名香等賜殿年七十義子
道乙亦有學行○七月以前大納言藤原實晴補御
廐別當○九月八日遣兵庫大允王兼宇祭主大中
臣友忠小舍人齋部久忠等奉幣于大廟行遷宮

儀大將軍因遣吉良若狹守納神劍焉琉球王尚質

使來獻幕府告繼世遂詣日光廟○十月從一位前

關白近衛藤原信尋薨年五十一子尚嗣嗣信尋踰

應山能書及和歌兼工丹青名世○十一月十六日

以代見邦道為親王藤本敦直卒賀茂祠人任甲斐

守撫法三蹟於空海最為深詣子孫傳其法弟子佐

佐木志津摩亦有聲谷素有段有字時中土佐人和

為真常寺主豪爽有志節元和初從南村梅軒受程

朱之學遂蓄髮更業寺本多贊買書為盡之國守山

內氏幸野中止小倉克從學焉止性剛毅閱書每聞

明治新刻十三朝紀聞 卷二

八其親樓藏板

利益布之國中顯鄉學農兵種藥育醫能破為肥穿

豆呂港歲遣人長崎求書翻刻之等政績常令禁火

葬不止更令自今有罪之屍必焚由是自止州有不

生魚所令過焉者皆投石數年果生魚州亦求不產

蛤蜊嘗在江戶買蛤蜊滿一船以歸鄉里謂眾曰施

與既投之于城下海小餘一箇眾惟問止笑曰此不

獨饋子等子後亦飲之後果多生蛤蜊遂為名產○

十二月二日以前大納言實晴為內大臣是歲幕府

奏徙松平直矩于村上本多忠義于白川永井直清

于高槻○三年三月二十三日東國地大震○四月

帝陸大兩震○五月權大納言源義直薨東照公之子好學究覽群書嘗創忍岡孔子廟所著有神祇寶典百卷類聚日本紀東照權現年譜是為名護屋藩祖○六月四日雨毛長四五寸○九月東西諸道大水陽悅田苗○十一月朔日南至二十日以權大納言藤原教輔為內大臣右大將如故○四年二月二十五日帝朝後水尾上皇于櫻町宮二十九日車駕還宮○三月二品東寺長者大覺寺尊性法親王薨年五十後陽成第五皇子也二十三日遣權大納言源通純奉幣于石清水廟○四月後一明治新刻十三朝紀聞卷二 九其親樓藏板

正盛 重次 殉死 上皇 難安 公繼 薨有 職 位左大臣征夷大將軍薨年四十八如賀守堀田正盛對馬守阿部重次殉之公聰明勇決寬永末改會諸藩禮嚴郊迎大藩自繼征夷職勉行仁義嚴扞外患恩威洋溢及變貊○五月三日贈大將軍太政大臣正一位賜諡曰大猷院太政大臣即大相國六日後水尾上皇薨髮法諱曰圓淨法皇○七月二十六日以權大納言源家綱為征夷大將軍遷內大臣兼右近衛大將賜兵仗牛車遣權大納言藤原經季就江戶拜之時年一 大將軍使侍從酒井忠清朝謝轉官之恩於是特授忠清左近衛少將江戶劍士

正 由比正雪謀逆使其黨九橋忠彌等居深川自之駿府城下將並起事覺江戶町奉行神尾元勝石谷貞清率兵吏夜急圍忠彌宅擒之別升右京奉教馳至駿府與城代大久保忠成加番秋田盛季等共圍正雪所在正雪兄弟黨與十餘人自殺焉至十一月磔忠彌等三十餘人十品川賊悉亡或云忠彌長曾我部盛親遺孽冒母姓者○九月前左大臣昭良辭關白十一月以良仁親王為式部卿○十二月八日以左大臣尚嗣為關白補藤氏長者聽內覽賜隨身兵仗牛車是歲幕府奏使下總守本多俊次于膳所明治新刻十三朝紀聞卷二 十其親樓藏板

且條正房奉教推門紅毛西洋戰攻大煩火箭諸法錄之為一書○義應元年五月初法眼林恕以少將酒井忠勝請著王代一覽自 神武至 正親町至是成○八月關白尚嗣辭左大臣二十八日江戶大風○九月十五日以右大臣光平為左大臣十七日以前內大臣實秀為右大臣十八日改元義應法皇第子子穗仁為八條智忠親王嗣子是歲幕府以少將雅樂頭酒井忠清為大老少將肥後守源正之奉大猷公遺命輔佐大將軍於是為著輔養焉進焉○二年正月帝召朝山素心講經于 御前後集

召進講。帝呼為白川。三位入道云。○二月右大臣
實秀罷攝津而宮火。○六月二十日巳時 大内
災。殿舍門廊悉燼。僅遺文庫一字。累世寶器皆無
恙。勸修寺烏丸二第延燒。帝避火于 法皇宮。是

月都下有十四五歲兒女數人無故戲放火。火災
作。所司代重宗捕悉誅之。蓋人妖也。○七月關白從
一位近衛藤原尚嗣薨。年三十二。子基熙嗣尚嗣能
和歌。名于世。權中納言藤原為賢卒。冷泉為滿之子
是為藤原家祖。具孫從三位相尚。為入江家祖。○八
月諸道入水。十一日以大將軍為右大臣。連連大納

明治新刻十三朝紀聞卷二
十一 其親據藏板
六藤原共房就江戶拜之大將軍。使近衛少將肥後
守正之朝。謝恩。於是特轉正之左近衛中將。○九月
二十一日以左大臣光平為關白。補藤氏長者。聽內
覽。賜隨身兵仗牛車。是月琉球使國頭問以王子等
來獻幕府。松永貞德歿。德字長頭丸。彈正久秀之姪
善和歌。受古今於幽齋藤孝。又工連歌。初立花園祠
棲其側。後應亮然親王之徵徙。方廣南池田里。起報
恩堂。蓋九屋。設吟花廊于堂屋之間。堂內安子昂真
蹟。法華經置上。宮太子菩提達磨人丸貫之定家紫
式部畫像。自歸林園。法皇嘗得其諧歌。大奇之。賜

御命以稱。日俳諧花本感激創斯道。軌則為一書名御傘
故世推為諧歌始祖云。遺書有戴恩記等。○十一月
四日以前內大臣定好為右大臣。是歲神祇大副大
中臣友忠有罪。詔就其官爵流之。○三年三月大
將軍奉勅作 皇宮課。諸大名助役。○六月定好
辭。右大臣十七日以前內大臣實晴代之。○七月二
品兵部卿伏見貞清親王薨。子邦道親王嗣。無幾薨
其弟貞致嗣。權中納言平時庸卒。右衛門督西洞院
時慶之子是為平松家祖。具弟二位忠康為長谷家
祖。忠康弟大膳大夫時貞為交野家祖。時庸孫權中

明治新刻十三朝紀聞卷二
十二 其親據藏板
約言行豐為石井家祖。去冬 法皇勅長崎興福寺
主性融徵明。福州黃檗山住持隆琦。性融因遣僧古
石于明請其東渡。至是隆琦領大眉獨言獨知獨湛
獨吼獨立良演唯一垣修無上等二十僧至。長崎琦
姓林氏。師隱元。臨濟三十二世法孫。而為經山寺費
隱禪師。法嗣名震而土遠。暨 國朝示旁書畫指妙
無比。後建萬福寺。自書諸大榜。其徒弟亦多善書。獨
立為尤。性融等有能畫。名備前備中。早既而大水。○
八月十八日尊生母園氏曰准后。稱 土生院。九
月二十日 帝崩于 法皇宮。年二十一。稱後光明

聖帝

院在位十一年改元者三曰正保慶安義應十月十五日薨于泉涌寺 帝自幼英敏甚好程朱之學能屬文嘗親製惺窩文集序世諦為聖帝 帝嘗欲復釋奠命出 累世所傳唐代孔子像十哲圖於秘庫以親示朝山素心然尋晏駕事竟廢又嘗欲傳天下士庶去頂髮服短襖以復烏帽素襖之古俗不果自持統之喪始行火葬世世相承其流俗莫復葬埋也 帝每歎之將詔革其典會病痘醫官誤治卒崩而焚 聖屍至 帝而止初 帝崩也朝議猶依舊典為火浴設有魚戶八者好宋學以其常出入官庖

明治新刻十三朝紀聞卷二 十三 其親樓藏板

竊聞之大哭曰噫聖天子盍得壽而事皆遂歟慮矣大行固疾浮屠虛誕欲發火浴復葬埋今也奉送其終何火之進野臣敢諫之不聽有死耳乃奔走 行宮及攝關家直請廢火葬從 帝意跽泣不退 朝廷感其忠告遂復葬埋云〇十一月二十八日 皇太弟踐祚是為 後西院天皇

後西院天皇諱良仁 後水尾帝第七子也母從三位御匣局諱隆子踰 逢春門院贈左大臣攝關藤原隆致之女正保四年 上為花町殿主慶安元年 叙親王至是迎繼 大統時年十八初花町土鴨岡

重宗
治維

山以將池田光政女明子為夫人至是以拜女御光平關白左大臣實晴右大臣教輔內大臣並如故是月所司代少將周防守板倉重宗罷佐渡守牧野親成奉敕命代之重宗尹京師幾四十年存顯治績多直節偉行世或以為賢於乃父其勸誡載下二十條令世所知也嘗為松永退年請江戶賜饗地建議習堂京民有懇江戶求新其父罪老中為送重宗書重宗不開書封刑之而後報曰行刑之後會公書到僕視之曰渠非死罪復訊之然京師政務僕辱委任而府廳越訴而催京師則京師政刑錯亂主者不得決

明治新刻十三朝紀聞卷二 十四 其親樓藏板

事即為僕不能如是請速免職老中大驚叩書謝之幕吏有赴任長崎過京師謁重宗晤語移時將出重宗袖出一古漢鏡曰此鏡嚮長崎奉行竹中重興所遺也予惡重興以墨敗每持此自照為戒因贈子乃與之池田光政亦嘗就問治術感服其大度云重宗省洛西某村之斂率吏卒十六人而往村長素知其有怨白曰敝邑殆苦貴徒之多曰善哉想也予復來為減一人其恤民不吝率此類也池田光政貴淺口郡柴木村民甚助考悖亦免田圃五段之租〇十二月右大臣實晴罷是歲皇兄守澄親王為日光山

寺主列門跡自開山第五十世也後叙一品天台座主日光古者皇族間住焉而中祖天海以來親王為主是為始自是後親王更往為其門主○明曆元年正月二十五日以内大臣教輔為右大臣權大納言藤原公信為内大臣權大納言右近衛大將藤原房輔轉左近衛大將權大納言藤原公富轉右近衛大將任右馬寮御監權中納言藤原實教為權大納言叙正二位○四月十三日改元曰明曆夏早○十月四日以皇弟穗仁為親王朝鮮使來獻幕府○十一月大内成十日自花町殿徙御焉守澄法親

明治新刻十三朝紀聞卷二
五其親樓藏板

王自日光入朝於是法皇賜之寺名曰輪王寺○十二月初油小路氏久絕矣廣橋藤原兼勝子隆基常繼之任權大納言至是薨是歲法皇同東福門院始幸東山修學院自是後歲二三回將幸焉松永退年改退年字昌三貞德之子受業藤原肅為講習堂教授蹄春秋館又尺五堂門下有野門三竹宇都宮的水下貞幹等歿年六十六長子昌易紹而洞院春秋館次子永三紹堀川謂其堂門僧性瑞歸化來長崎福濟寺尋入黃檗山繼其第二世瑞師木庵晉江人善書好畫自後性敬即非千歎悅山悅峯如

蓮獨文也菴大鵬等相續歸化皆住黃檗即非性敬能書大鵬等菴等有畫名○二年正月十九日遣正五位下王氏友權祭主大中臣兼長小舍人齋部久忠奉幣大廟告嗣位二十三日行即位之禮是夜有奇雲見西方大將軍使侍從右京大夫松平賴重右近衛少將吉良義冬朝賀即位四位五萬石以上諸人名亦使使奉賀於是特授賴重右近衛少將義冬從四位上時所司代親成五位侍從亦拜從四位下○三月十一日壬生院薨○六月朔以前權大納言藤原經孝為内大臣有赤氣二道日申酉

明治新刻十三朝紀聞卷二
十六其親樓藏板

火柱

之交見西方及夜光耀如火數日不滅時呼火柱○十二月二十六日以權大納言公富為内大臣是歲幕府奏徙周防守板倉重宗于關宿○三年正月十八日江户大災十九日牙城延燒明日炮大將軍避火于西城民焚死十萬八千餘人幕府設場數區為粥施窮民瘞諸焦屍于本所為建一塔名無緣寺發金億萬賑恤九萬石以下及市人法印林信勝卒信勝字子信號羅山京師四條人幼而穎悟有神童稱好讀書五行俱下過目成誦人故目為曩耳及長受業於藤原肅慶長中為駿府文學雜髮稱道春寬永

道春
臺年

焚死
十萬
八千
餘人

中興弟信澄同叙法印卒年七十三嘗撰輯書百三十種又有羅山文集百五十卷子孫世為幕府儒臣信勝生恕字子和亦豪材博覽有驚群文集百二十卷恕子曰信篤跡鳳岡學業不減父○二月幕府再築牙城至九月成○四月兵部卿貞清親王女頸子嫁大將軍勅良尚法親王徙其北山曼殊院于一衆寺村○九月幕府以美濃守稻葉正則為老中大村平戶嶋原佐賀諸民修邪蘇教發覺長崎奉行黑川與悉捕之於是幕府命與誅其徒五百餘人賜長崎民利銀十二貫錢賞首告之○十二月從一位前明治新刻十三朝紀聞卷二 十七其親樓藏板

左大臣鷹司藤原信房薨年九十三教平祖父也○萬治元年正月江戸火二十八日以皇弟識仁為親王○六月明帝未由擲大將未成功使使至長崎獻書及方物于幕府以乞援兵書辭不遜會議不答却方物至九月使者還去○七月二十三日改元萬治○九月十一日以權大納言房輔為內大臣左大將如故○十二月晦日午時伊勢內宮災波多村失火會西北風烈延燒之子祠寶庫等亦盡燬廟官力救奉遷大神主新祀神主及寶器皆無恙是歲幕府奏徙龍野京極高和于丸龜大將軍延見歸化

明僧隆琦賜京南大輪田地營佛圖施金錢巨萬復給采田尋琦創一大刹名以明土舊稱曰黃檗山萬福寺堂舍門廊亦悉依明制○二年正月京師火○二月明儒朱之瑜歸化至長崎先是之瑜來本邦九三次蓋欲得我援兵以恢復明室也鄭成功等亦望其求援軍然竟弗得之亦取食清粟至是投不復還小戶藩光國招致文學之士有河間東平之風後七年乃聞瑜賢聘為賓師○四月十日遣兵庫助王善宇大中臣善長齋部久忠等奉幣遷大神主于假宮六月三日勅作大廟九月使王職行善長

明治新刻十三朝紀聞卷二 十八其親樓藏板 康久奉幣焉善宇久忠皆有喪故不遣幕府再遣內宮十一月成十九日遣使王氏友大中臣善長齋部親守及史生官掌等行還宮儀幕府建隅田川兩國橋○十二月右大臣教輔罷是歲詔赦皇叔良純罪召還京師住泉涌新善光寺後再破戒還俗居北野寬文九年薨焉良純雖以心菴能連歌及書幕府奏收川屋能登守久松定政封不告還邑故○三年正月十三日以前右大臣實秀為右大臣前內大臣公信為右大臣○二月權中納言源具起卒權大納言井學院別當久我晴通子木工頭具堯之子是

大內

為岩倉家祖其弟權大納言有能為千種家祖有能
子參議雅永為植松家祖具亮孫權大納言通福為
愛宕家祖初晴通生嗣子源氏長者通堅通堅生嗣
子權大納言敦通敦通生嗣子左近衛中將通世而
晴通孫參議通廉為東久世家祖敦通季子右近衛
少將通式為久世家祖通世次子參議季通為梅溪
家祖○五月天下大水流伊勢宇治橋○六月十八
日大坂大雷震城內火藥倉城內因復大震電多飛
壘石破櫓殿及天主閣傷死者多城外士民宅舍亦
為之破○十一月佐倉上野介堀田正信其教還邑
明治新刻十三朝紀聞 卷二 十九 其親樓藏板
幕府奏以其封 寬文元年正月十五日巳時 皇
宮災延燒公卿第舍百十九區及佛寺十餘宇民屋
九百六十餘間 帝奉 三神器幸昭高院 法皇
幸修學院江戶火○二月十八日 帝自白川還幸
右近衛大將近衛藤原基熙第○四月實秀辭左大
臣二十五日改元寬文○五月二十三日以權大納
言藤原共房為內大臣二十四日以前右大臣定好
為左大臣公信辭右大臣○六月八日以前內大臣
房輔為右大臣○七月一東院尊覺法親王薨年五
十四 後陽成第十皇子也權中納言源賴房卒東

毀方
巨像

照公子也是為水戶藩祖內大臣共房罷共房權大
納言中御門資胤之子也清閑寺氏自文龜中絕矣
共房嘗出繼之其次子權大納言共孝為池尻家祖
共孝弟權大納言定矩為梅小路家祖 法皇聞北
村季吟名命其弟所注伊勢物語玉佐日記覽之○
八月幕府修東山方廣寺至七年冬畢功○閏八月
二品天台座主堯然法親王薨年六十王 後陽成
第六皇子居廣福寺畫人物花鳥有風致又能書廣
福即妙法院大將軍奏封其弟左近衛權中將綱重
于甲府右近衛權中將綱吉于館林○九月二十三
明治新刻十三朝紀聞 卷二 二十 其親樓藏板
日以權大納言右近衛大將源廣通為內大臣○十
二月權中納言藤原宗朝卒 帝外祖攝寺隆致之
子是為園池家祖內大臣廣通罷右近衛大將○二
年三月大將軍命讚岐守松平賴重掃部頭并伊直
澄常參老中議政事嗣後世奉之六日至二十日日
色每旦如血月亦赤幕府毀方廣寺巨像以鑄錢文
曰寬永通寶背文日文所謂文錢也後二年新造木
佛以安置焉大如前像金箔塗之世傳葺費不給故
毀之 法皇幸修學院幕府稅官一色內藏叔勘定
奉行播磨守伊丹勝長內藏有罪勝長與豐前守岡

田善政同奉教按問之下私館及將訊內藏反欲害

二奉行倉卒拔刀擊之殺勝長善政禦關與左右共

斬之○四月人將軍作禁內修法皇宮新院

宮命毛利黑田稻葉如藤伊東分部一柳等諸族助

役○五月朔京師近江地大震近衛行宮法皇

宮新院宮及二條城等皆摧五條不橋壞大溝朽

木山崩朽木谷民多壓死遺動至冬而止大將軍奉

勅獻明月記○六月十三日光大水壞厓民死

者多右兵衛督藤原實清卒左近衛中將橋本實勝

之子是為梅園家祖○七月二品中務卿八條智忠

明治新刻十三朝紀聞卷二 其親樓藏板

親王薨子穩仁親王嗣法皇新院兩宮成○八

月常陸下總下野盜賊蜂起所在劫掠○九月法

皇新院徙還各宮幕府修東山蓮華王院命桑山

修理亮等監工龜山帝於得長壽院趾建南北七

十間東西十二間之堂內安立像觀音千數蓮華

王院世稱三十三間堂今蓮華王院是也今世或以

為鳥羽帝所創三十三間堂者誤矣蓋得長壽院

三十三間堂燬于寶治中○十月大隅地大震海溢

大將軍使松平民部少輔板倉筑後守入議讓位事

明年使上野介吉良義英賀內禪○十一月宮成

○三年正月左大臣定好羅十二日以右大臣房輔

代之二十二日皇弟識仁親王為儲君迎入新宮

二十六日帝在近衛氏第讓位於儲君以關白

光平為攝政在位八年改元者三曰明曆萬治寬文

帝善書嘗誦家翰於大勝曰天滿宮納北野廟揭

其南門嘗命悉膳御府典籍及去位置之新院時

或以為院之闕物至延寶初御府罹火院庫無恙舉

朝嘆美帝用心云皇太弟立是為靈元天皇

明治新刻十三朝紀聞卷二 其親樓藏板

十三朝紀聞卷之二終

十三朝紀聞卷之三

從六位下行藤原家全事和藤原朝臣照矩編次

男 正七位下長門掾源 賴矩 按

靈元天皇諱識仁 後水尾帝第十六子也母中納

言局諱國子號 新廣義門院贈左大臣園藤原基

音之女萬治元年為親王至是受禪時年十歲仍用

寬文號二十九日 法皇 東福門院共入見 帝

○二月三日尊 後西院帝曰太上天皇稱新院更

稱 明正帝曰本院六日以前內大臣經孝為右大

臣房輔左大臣如故廣通辭內大臣二十一日 帝

明治新刻十三朝紀聞 卷三 其親樓藏板

始讀書三位明經博士清原相賢侍讀○三月十二

日 勅設歌會以鶯有慶音為題○四月遣使日光

修大猷公十三年齋大將軍詣焉二十二日遣左衛

門志王清喜祭主大中臣景忠小舍人齋部玄弘奉

幣于 大廟告嗣位二十七日行 即位禮大將軍

使侍從出羽守松平直政侍從兵部大輔大澤基時

朝賀四位五萬石以上諸大名亦使使奉賀於是時

授直政左近衛少將基時仍司代親成右近衛少將

三士奏曰告口戶而後拜幕議令二使領之親成辭

之○五月幕府奏令天下禁殉死○七月奏大赦天

下二十五日松前及蝦夷地大震○八月五日京師

大水鳴川溢幕府以大和守久世廣之為老中○十

月大將軍營觀權大納言藤原雅章蹴鞠○十二月

六日夜京師地震市舍多毀○四年二月經孝辭右

大臣○四月五日以前內大臣公富為右大臣○五

月二日以權大納言兼晴為內大臣左大臣如故○

六月幕府奏削米澤侍從上杉綱勝封舊食三十萬

石於是坐事被其半清水谷氏自永正中絕矣阿野

藤原秀時孫實任實繼之任權大納言至是薨○七

月 法皇召見江村宗具問養生之方奏對曰臣平

明治新刻十三朝紀聞 卷三 其親樓藏板

生唯持一些字喫食些節飲亦此房事亦此此外無

復別術 法皇感賞賜以銀絹并鳩杖等具號專齋

京師人初以儒事肥後如藤清正清正沒後為美作

森忠政賓師受其俸幼歲學醫自攻濂洛之學又好

和歌與細川幽齋水下長嘯子等為友是春自慶壽

滿百歲詠和歌三首亦偶備 御覽云至九月歿其

子宗珉亦有學行弟子伊藤宗恕平安人錄具嘗所

語亂世事等名老人雜話傳于世○八月初大將軍

造 新院至是成二十一日 後西院上皇徙御焉

○九月徙一位光平辭攝政二十七日以左大臣房

輔代之補藤氏長者聽內覽賜兵仗牛車○四月從三位藤原教廣有罪二十九日詔流之安藝○朝山素心歿心姓源字藤九號意林菴京師人出雲朝山清仁親王之裔宮內少輔久綱之子篤志於學嘗受經於韓人李文長游事駿河大納言忠長數年退隱北白川後光明帝聞其名徵講易寵遇異常多有書器之賜歿年七十六○十月客星見南方踰月乃不見時呼天角星先是大將軍命林恕撰續本朝編年至是命索天下祠寺所藏延喜以來武乘以足其引用尋改書名曰本朝通鑑凡三百卷○十一月

明治新刻十三朝紀聞

卷三

三

其親樓藏板

法皇女常子內親王降嫁近衛藤原基熙○五年正月二日夜雷震大坂城天生閣災公富辭右大臣十一日以前內大臣廣通代之尋賜兵仗○三月罷六日以前內大臣兼晴為右大臣○四月遣使日光修東照公五十年齋○六月朔以權大納言右近衛大將基熙為內大臣○七月三山檢校聖護院道寬法親王奉勅詣大峰幕府令改絹布長二丈六尺為一端幕士松平忠冬補正其祀所著家忠日記成曰增補追加○八月幕府奏收伊豫川上監物一柳直興封竄之加賀以禁城修築過期幕府會同違節

也從一位前左大臣九條藤原幸家薨年八十子道房先覺無嗣駕司教平子兼晴繼之是月幕府奏增置京師町奉行以宮崎若狹守為之寬永中始置町奉行也建一廳于二條朱雀至是又起一廳于二條城南○十月二品式部卿八條摠仁親王薨年二十三無嗣○十一月幕府流日蓮教派不受不施宗妖僧若干人嚴禁其宗○十二月聽權中納言源有能帶劍先是幕府奏益內膳正板倉重矩封至是再加其封與但馬守上屋數直並為老中二十七日越後高田地大震是歲勅赦大中臣友忠罪召還京師

明治新刻十三朝紀聞

卷三

四

其親樓藏板

削髮稱久眼幕府奏徙豐前守內藤信照于棚倉○六年三月二十六日江戶有火光東飛形如人長二丈許○五月宮津大名京極高國與其子高賴爭事幕府奏收其封流高國于陸奧高賴于伊豫○七月從一位前攝政藤原康道薨年六十子光平嗣○九月藏人清原賢忠卒舟橋秀賢之子是為伏原家祖賢忠嗣子宣幸子藏人忠量為澤家祖○十二月權中納言菅原為庸辭大學頭二十五日詔新院第一皇子長仁紹八條殿封是歲聽吉田卜部兼敬昇殿後叙正二位兼敬平野廟祝卜部平磨呂尚吉

田兼熙十二世五位神祇少副兼起之子吉田氏自是世列朝貴諸國竹實而枯○七年二月二月堂火

○閏二月攝政房輔辭左大臣○四月六日 詔

新院第二皇子幸仁紹花町殿封自新院登極花

町殿無主至是第門再開八日以前右大臣實晴為

左大臣○七月五日贈故權大納言藤原基音左大

臣遣少納言菅原豐長于誓願寺宣命大將軍聘

神道者吉川惟足足界浦人初為淨屠嘗聞卜部繁

兼精通神道往求為門人謁者見法衣垢弊不為通

足悽然乞紙筆賦和歌投之而去繁兼大奇其調以

明治新刻十三朝紀聞卷三 五 其親樓藏板

為天致斯人使吾學不泯乎馳人呼友盡授奧秘尋

還俗游事會津至是為幕府神學有幽暗集初幕府

填鍊炮淵本所深川諸泔以增拓諸武館地多開溝

渠自萬治至是十歲乃畢○十月賜左大臣實晴隨

身兵仗是歲幕府改造攝津多田神祠給下野足利

學校修屋金○八年正月白氣見西方狀如竿○二

月江戸大火初嶋原高力隆長極驕厚飲土地荒蕪

於是幕府奏收其封流之陸奥僧日政殺政字元政

姓菅原京師人幼仕彦根有孝行弱冠厭俗出家依

日豐和尚受業自稱日峰為入精力絕倫道德甚高

屬文善詩歌了介元贊華為方外交掌制法華律

修深草霞谷廢寺改曰瑞光寺又號稱心菴自為其

開山遺書自釋氏二十四孝草山要路草山集等元

贊字義都姓陳氏本明虎林人崇禎進士嘗避亂來

應名護室徵遊京師及江戸訪諸聞人博拳法嫻邦

語工詩有元元唱和集○三月十六日以攝政房輔

辟關白○四月天下大旱○五月實晴辭左大臣幕

府奏以老中板倉重矩為所司代從前所司代牧野

親成于田邊田邊京極高直于豐岡村上松平直矩

于姫路○九月朔以前右大臣公信為左大臣○十

明治新刻十三朝紀聞卷三 六 其親樓藏板

月從一位前左大臣鷹司藤原教平薨年六十子房

輔嗣○九年正月二十三日遣權中納言菅原為庸

等于北野行遷宮儀京師飢幕府為粥于七松街四

條磧二處賑之至四月止或傳帝勅大將軍行之

○二月二十四日以皇姪長仁為親王○三月三日

有大星東流聲如雷先是法皇勅大將軍大修泉

涌寺至是成○七月十一日天狗星東南流先是蝦

夷玃緣利酋長勾楮印將其部衆掩殺我商船二百

七十餘人二十日大將軍命松前泰廣往討之泰廣

七日以花町幸仁為親王○十月泰廣至玆緣利捕
勺緒印等五十餘人誅之燒巢穴而還賊平左近衛
中將藤原隆修卒權中納言水無賴氏成之子是為
七條家祖其兄權中納言兼俊次子大藏大輔具英
為町尻家祖具英弟縫殿助兼里為櫻井家祖兼里
子治部卿兼乃為山井家祖○閏月大將軍奉勅
獻四書大全五經大全十三經二十一史太平御覽
二程全書朱子大全諸書權大納言源忠幸薨正
親町帝曾孫是為廣幡家祖忠幸初為名護屋源義
直贅婿是歲義直子光友因久奏請列之清華聽之
明治新刻十三朝紀聞卷三 七 其親樓藏板

續今

歸京師賜源姓未徙新第薨無嗣久我源豐忠繼之
豐忠權中納言通名之子義直之甥後進內大臣從
一位光友官至從二位大納言善書工畫時以後
西院上皇藤原信尋光友為今三蹟云○十一月朔
旦日南至設節會參議藤原定淳奉行二十一日故
前左大臣教平女房子入為女御大將軍使松平美
作守等朝賀大婚○十二月公信辭左大臣十八日
以權大納言藤原實維兼右近衛大將尋補右馬寮
御監○閏月賜右大臣兼晴隨身兵仗是歲出雲豐
前肥前大水幕府奏徙久世廣之于關宿朽木植昌

市原
重隆

丁福智山○十年二月江戸大火幕府以所司代內
膳止重矩復為老中重矩勝重子重昌之子自幼聰
敏能詩歌多善行其再辟老中聘了介等益求治道
公平賞罰後又加封徙于烏山初所司代時洛北市
原村為大水所破窮困重矩厚賑濟之購村之山脚
以開新道通行旅又增築大和大路堰堤以止農民
患及任滿市原民大嘆歿後每盆會如意藏祭之云
○四月七日以前右大臣經孝為左大臣○八月二
十三日大坂大風霾海溢破九條難波諸村及市舍
多溺入船舶橋梁皆敗○九月民部卿安倍泰吉卒

明治新刻十三朝紀聞卷三 八 其親樓藏板

舊
實

三位土御門久修之子是為倉橋家祖是歲幕府奏
封源賴宣次子少將賴純于西條以伊賀守永井尚
庸為所司代京民始出山科迎之○十一月九日以
權大納言藤原兼輝兼右近衛大將翌月補右馬寮
御監○十一年正月權大納言源賴宣薨東照公之
子為人雄豪好學尚素嘗與其臣李全直共撰創業
記考異其營老室草索結之壁不巧云是為和歌山
藩祖全直韓人真榮之子真榮慶尚道人父祿役所
俘來業儒寬永中沒直喪父尚幼從州儒永山道慶
學學成為賴宣所聘云○四月幕府號一關伊達宗

事
場急

勝封予之於仙臺流宗勝于土佐宗勝中納言政宗
季子支封任兵部少輔貪慾覬覦其宗仙臺及兄陸
奥守忠宗卒忠宗子綱宗補陸奥守乃與仙臺宰原
田直則等陰謀使誘綱宗荒于名妓聲其失幽之立
綱宗櫻子鶴千代置毒于其食中為鶴千代乳母所
發遂及之初列宰伊達宗雪稍知宗勝謀不軌乃及
鶴千代嗣立使女弟淺岡為之乳母松前重光為近
侍以陰備不虞一日淺岡見鶴千代將食常膳心動
召庖人嘗之即死宗勝不自安使其家人夜刺鶴千
代亦為重光所拘邸內詢詢逆黨神並者竊誓書走

明治新刻十三朝紀聞

卷三

九

其親樓藏板

至仙臺自首宗雪乃馳江戶上書訴之老中重矩等
聽獄決既而直則因大老酒井忠清詐懇曰僕有
一冤事未得白焉請復聽之諸老中乃莅忠清邸廳
再召宗雪直則等聽之不可欺也宗雪直則同退休
于廳緣相距可二丈直則襟出一紙直謂宗雪曰吾
所謂冤事此也言未畢所殺宗雪左右驚起共殺直
則焉宗勝罪當斬滅死流之于海嶋餘數十人刑于
仙臺鶴千代後名綱村大將軍使掃部頭伊井直澄
詣日光修大猷公二十一年齋○五月經考辭左大
臣七日以右大臣兼晴代之二十五日以内大臣基

助三
父仇復

熙為右大臣○七月琉球王尚貞使來獻幕府○八
月五日以權大納言實維為内大臣二十九日東海
大水流六鄉川橋九十餘間○九月攝津芥川驛松
下助三郎殺其父源太離早川八丞初源太同八丞
父四郎仕故會津藩加藤氏四郎有怨源太欲殺之
不果罹病遺命八丞曰我死勿設齋誦經必斬源太
以慰我魂八丞繼父志殺源太于江戶時助三年十
二以父讎不同天行倚母家于京師學擊劍於傳藏
者其兄栗田三郎亦計復讎而以仕石見藩未果及
聞助三志鳴中田坂根二士助之二士東上過芥川

明治新刻十三朝紀聞

卷三

十

其親樓藏板

丈山
日東
李杜

聞八丞為普化僧匿焉至是二士傳藏偕助三往
芥川絕八丞走路以援之助三甫十四有臂力獨進
所殺八丞○十一月攝津伊丹山躑躅及其野諸草
皆華○十二年二月從一位前關白一條藤原昭良
薨年六十八子教輔嗣○三月初 法皇同 東福
門院幸修學院歲二三四五回去歲九回自是春幸
益屢云○石川四段四初名重之參河人仕于東照
公好讀書善詩及和歌韓人權式稱為日東李杜又
工丹青詩仙堂印板畫龍其遺蹟也大坂役顯戰功
即日致仕養母從藤原肅游母沒後棲遲東山自號

六六山人又丈山築詩仙堂揭漢晉唐宋詩三十六首使狩野守信每首加詩人圖常鼓琴自娛焉諸軒冕來訪皆謝絕之唯友林信勝城止意野間三竹及僧日政陳元贊等一時盛推其風韵 法皇嘗命作隸書稱 旨命中使賜以酒魚又嘗召見固辭上和歌以表其志 法皇曰恬退如此朕豈強之哉親點易反賜之感戴用寶貝置御點于硯蓋傳榮不朽云歿年九十二正意字敬夫近江人師藤原肅與信勝那波道圓松永遐年齊名善詩精方術慕晉陶潛為人壁間常懸其畫像曰對此頓消塵慮○六月 勅

明治新刻 十三朝紀聞 卷三

十一

其親樓藏板

更幸仁親王花町第名曰有拙川殿○閏六月二十九日以權大納言兼輝為內大臣○十月從三位藤原宣持卒權大納言中御門尚良之子是為岡崎家祖○十二月左近衛中將肥後守源正之卒正之台德公子究心經學兼通神道初受神道於惟足後學閻齋所著有神社志二程治教錄三子傳心錄玉講附錄吉田卜部兼敬以其有功於神道贈稱曰土津靈神卒年六十四正之臣有小堀與五家至貧清白自守一日正之謂曰汝以何為樂曰臣樂貧乏與非女人此他一樂難上言耳強令言之固辭乃先問所

以樂貧曰臣無資金無貳衣佩刀亦唯一雙故無更衣改佩求吉等患而身心安快是以甚樂之後正之及聞其所難言大嘆賞曰寡人豈得聞斯言身之不肖亦不至此即日益俸大用之云是歲幕府奏徙脇坂安政于龍野堀親昌于飯田清人魏九官等四人歸化乞居長崎許之○延寶元年正月權中納言藤原康胤卒權大納言高倉永家之孫是為堀川家祖其弟參議信孝為堀口家祖○二月 法皇聞智積院僧悔焉者善寫梵字召見書之稱 旨賜以綿絹○四月二日 法皇賜黃檗山萬福寺主隆琦稱曰

明治新刻 十三朝紀聞 卷三

十一

其親樓藏板

大光普照國師 法皇嘗詔問南宗奏對稱 旨賜以御香黃金并佛舍利等於是聞其罹疾降 詔問之特賜以生謚尋沒年八十二○五月八日夜廷臣某家失火延燒 皇宮及 法皇 本院 新院東福門院四宮 帝奉 三神器避火上御靈祠九日夜自祠幸右大臣藤原基熙第是災也民舍亦五千餘戶延燒是月諸厄利亞使船至長崎乞復互市幕府弗聽使人名齊紋沉留并○九月二十一日改元延寶○十二月幕府以播磨守阿部正能為老中○二年二月二十六日夜有黑雲廣一丈許長竟天

江戶
德人
為探

錢
載

互東西○四月十一日畿內大水流三條橋多溺入

○六月十一日京師大雨雹如栗子十四日畿內大

水人馬死者多○法印狩野守信卒京師人元信五

世孫號幽齋襲父孝信職掌繪局幼歲失父依興

意受家法既熟又學宋元名蹟參以雪舟減筆法一

洗家法為中興祖名震海內寬永中幕府徵畫營中

卒年七十三子孫世為幕府畫員弟尚信號自適齋

亦善畫名世守信姪女雪信學守信世稱女畫中興

其子春信亦能畫守信弟子久隅守京師人善山

水人物探幽門下無出其右者鶴澤探山及尚信子

明治新刻十三朝紀聞卷三 十三 其親樓藏板

常信常信子周信亦皆工畫○十一月聽機中納言

平時量帶叙○三年正月大將軍作大內及諸宮

課諸大名助役天下大飢餓草載路京師棄兒空屋

凡此而在大將軍奉勅賑之設場于北野四條磧

五條磧諸處與粥及錢米自三月至五月而止慶長

亂後比歲豐稔京師斛米價率銀十八錢其後至二

十四五錢既而漸次涌貴平價不下四十錢至是斛

銀百三四十錢云○四月先是紀伊高船隈颶漂至

無人鳴歸告幕府至是幕府遣人檢其地至六月以

與木水角等而還此嶋在八丈嶋南三百餘里其周

八
十
壇
壽

廻六七里無居民或傳無人鳴去八丈一百里嶋所

縱橫六七十里其數大小五六十有父母兄弟姊妹

等嶋號○六月中勢卿八條長仁親王薨年二十一

無子八月十二日詔其弟尚仁繼之○九月三日

皇子朝仁生○十一月大內成十四日設尚齒會

慶法皇壽八十黃檗山僧性徹獻其所著僧史等

于法皇以奉賀之敬號高泉明人歸化繼萬福寺

第五世先是法皇勅之製十牛頌稱旨賜以法

衣其開天王山賜額曰大圓覺二十五日夜闕下西

街失火延燒近衛行宮本院官及緡紳宅六十

明治新刻十三朝紀聞卷三 十四 其親樓藏板

餘宇帝奉三神器幸栗田青蓮院新內得全

即日還馬御女御之所二十七日移于便殿是歲幕

府奏封參議忠昌孫直堅于絲魚川清人天南何清

林珍歸化至長崎○四年三月聖護院道寬法親王

薨年三十法皇第十一子也去歲長崎代官求次

竊遣商舶交易於清及臺灣等事覺邦貨中多有劍

刀至是幕府斬其船數人流求次父子于隱岐求次

母于壹岐臺灣古塔伽沙古○四月所司代尚庸罷

山城守戶田忠昌代之○七月天下大水破三條五

條兩橋東海尤甚○十一月三井寺圓滿院永悟法

一重
兩頭

親王薨年十八 新院第三皇子也○十二月二十
六日夜 法皇宮 東福門院宮並再災○五年正
月大將軍又作之○四月成 法皇門院還焉○七
月三日尊所生中納言局為准后稱 新廣義門院
五日薨圓滿院三宮薨年三歲 上第三子也幕府
以加賀守大久保忠朝為老中○十月九日尾張海
溢時有三火光自海出飛西北是夜水戸磐城亦海
溢縫殿頭藤原貞長卒宰相甘露寺嗣長之子是為
堀家祖宰相即參議○十一月正二位左大臣九條
良原兼晴薨年三十七子輔實嗣○十二月五日以
明治新刻十三朝紀聞卷三 十五 其親樓藏板

右大臣基熙為左大臣二十四日以内大臣兼輝為
右大臣二十六日以權大納言藤原經光為内大臣
大久保忠朝獲一龜兩頭於其部内以獻幕府○閏
月大將軍獻納冊府元龜二百五十冊神海八十冊
正百川學海二十四冊續百川學海二十四冊廣百
川學海二十四冊三才圖會五十冊○六年二月一
品仁和寺性兼法親王薨年四十二 法皇第五子
也○六月十五日 東福門院崩年七十二葬于泉
涌寺○七月十八日伊豫土佐豐前大風水○九月
大將軍賜其弟參議綱重死初綱重極驕用竭乃面

復
生

請大將軍借金大將軍不快以咨大老酒井忠清對
曰是大不敬也遂傳命使自殺○十一月内大臣經
光辭右近衛大將十九日以權大納言藤原公規兼
右近衛大將賜經光隨身兵仗○七年正月參議藤
原資忠卒為九光廣之子是為勘解由小路家祖其
姪參議資清為裏松家祖○四月幕府賜侍所司代
忠昌役俸一萬石○六月二品昭高院道見法親王
薨年六十八親王 後陽成第十一皇子號似雪工
畫人物花禽及雜圖雅韻溢紙外○七月幕府以能
登守土井利房充前守堀田正俊為老中○八月十
明治新刻十三朝紀聞卷三 十六 其親樓藏板

五日 經言藤原經敬等至石清水命修放生
會是典廢者數百年至是復行自後每年遣使修之
○八年正月知恩院尊光法親王薨年三十六 法
皇第十子也其門跡本願寺主建一寺于江戶築地
○五月右大臣征夷大將軍薨年四十無嗣其弟館
林參議右馬頭綱吉奉遺命繼之於是叙雖中納言
正三位時年十五輪王寺守澄法親王薨年四十
七 法皇第四子也○六月天台座主授升靈廟法
親王薨年三十 法皇第十四子也二十六日贈大
將軍太政大臣正一位賜諡曰嚴有院鳥羽和泉守

職公常

內藤忠勝以私憤斫殺信濃守永井尚長于增上寺

藏有公齋場明日賜之死收其封○七月新院女

御池田氏薨十八日以權中納言源綱吉為征夷大

將軍兼右近衛大將補源氏長者賜兵仗牛車大將

兼大猷公第四子也○八月十九日法皇崩年八

十五稱後水尾院○十三日以大將軍為內大臣遣

權大納言藤原定誠權大納言源有維就江戶拜之

○閏月八日葬後水尾帝于泉涌寺○九月大將

軍使掃部頭井伊直興等朝謝陞職之恩以內膳正

板倉重種為老中命林春常蔀友元討論經義于前

明治新刻十三朝紀聞卷三 十七 其親樓藏板

爾後月行之○十一月十日遣兵庫頭王善字祭主

大中臣景忠小舍人齋部玄弘于伊勢修神宮以

法皇喪遷延之晦日白氣見西南廣二尺長十餘丈

其本有星踰月不滅時名長空星○辛酉大和元年

自九月不雨至十二月二月大將軍命春常正四

書五經小學等訓點三月以豐後守阿部正武為老

中○六月近衛中將越後守高田源光長有罪幕府

奏收其封流之初光長無子其弟長良冀繼之衆亦

屬望而光長宰小栗正矩等立長良從子繼嗣為之

高田

嗣以告幕府既而列宰萩田主馬等與長良同謀幕

府曰正矩大六父子專政恣定光長繼嗣獄數年不

決至是大將軍親聽斷之誅正矩父子流光長于伊

豫長良主馬于八丈大老酒井忠清老中久世廣之

忠清弟田中酒井忠能及姬路松平直矩廣瀬松平

近榮等連坐之忠清廣之被役忠能奪封放于彦根

直矩削貳徙于日田近榮亦削封○八月京師民口

五十萬七千五百四十八人○九月二十九日改元

天和○十一月權大納言藤原實起及其子參議公

連有罪詔褫其官流之佐渡幕府以所司代戶田

忠清為老中丹後守稻葉正通為所司代江戶幕

明治新刻十三朝紀聞卷三 十八 其親樓藏板

府災三邑賑貸被災民○十二月十三日夜伊

勢內宮災幕府以老中堀田正俊為大老初萬福

寺僧乞欲刊一切經募之於衆獲許多金會歲大

飢光慈施之濟飢者再募刊經獲多金亦會歲大

又施之遂三募至是畢功云光字錢眼肥後人故一

向門徒寺主也智慧越人鑽研諸經不辭疲倦嘗

厭其宗寺以門地選舉棄妻子入黃檗山從性瑠和

尚受具再造難波瑞龍寺居焉○二年正月二十九

日遣參議左大辨藤原宗顯兵庫頭王兼字祭主大

中臣景忠等于伊勢奉幣于假廟虔謝火災○二

大藏 鐵眼 嚴飢

明倫彙編
家範典

水經
水經

月房輔解開白二十四日以右大臣兼輝代之補藤
氏長者聽內覽賜隨身兵仗牛車長崎崇福寺主千
以為湯粥大施飢民自前年九月行之至是以益飢
時巨鍋重千九百六十五斤炊粥焉福濟寺主茲岳
亦為粥施與飢者○三月幕府奏加一條鷹司二家
采邑各五百石自去冬天下飢至是京師大飢多餓
死者幕府設場于北野祇園二處賑之○四月琉球
土尚貞使來獻幕府朱之瑜歿之瑜字魯璵號萍水
浙江餘姚人家世官于明在明嘗應魯藩之徵明氏
錄抗仲連之節附商船抵長崎時人不知其為文
明治新刻十三朝紀聞卷三 十九 其親樓藏板

花能為邦語及病策復漢語云守約輯遺文曰心喪
集語中納言光國亦共綱條輯三十卷曰辭水文集
刊之綱條光國兄賴重之子為光國嗣子守約字魯
默為柳川藩舊族蚤從遐年研究經術能屬文遐年

光政
篤孝

下
微本
善順

沒後師瑜授經學文章之訣得關西巨儒之稱年過
四十未娶瑜贈書曰虧孝道乃初娶云○五月備前
近衛少將池田光政卒光政字新太郎參議輝政子
侍從利隆之子英明事母篤孝嗜儒學善韜略國內
每郡設三黷賊民聽其講讀城門置一甌訴者投書
自聽斷之尋孝義者厚賞之嘗謂列宰曰苟見寡人
過失宜直諫之汝等亦遇爭者必勿拒之有一臣告
曰君目光如射臣等不得仰面是或遮言路請少顧
焉政欣然容之云卒年七十四自十二月歲內沒及
是死者甚多○六月初大將軍奉勅造東宮至是
明治新刻十三朝紀聞卷三 二十 其親樓藏板

成皇子朝仁徙焉○七月幕府聘木下貞幹於京師
幹字直夫號順菴幼善讀書工詩文及長有盛名於
世後光明帝欲辟直講會晏駕乃寢至是為江戸
儒員嘗云學者欲通曉須先熟讀十三經註疏至元
祿中歿年七十八門下有源瑛室直清兩森東松浦
祇園瑜西山頌泰南部景衡柳原玄輔等瑜弟南
山和歌山能詩有畫名玄輔號皇洲和泉人亦仕
祇園瑜不好區別學派每講讀雜用漢魏傳註宋明
釋云近世諸人近其所造器招牌必記天下一字
幕府令禁之○八月朝鮮三使尹趾完李彥綱

朴慶俊來獻幕府○九月大藏權大輔藤原有尚卒
權大納言日野弘資之子是為豐岡家祖大將軍命
韓使操馬於外櫻田觀之○山崎嘉致嘉字敬義跡
開齋京師人其親祈日吉祠而所生也幼祭驚不可
制父故以為僧號絕藏主嘗聞谷時中精程朱之學
往土佐學焉多所發明遂去浮屠教授京師酷斥佛
氏時人以為濂洛正傳爭揚其門門生向六千人由
是晦翁學始盛行於世嘉好神道晚就惟足極其間
與遂為神學中祖卜部兼敬大賞其功授稱曰垂加
靈社祖長命所著有朱易衍義中和集說性論明備

明治新刻十三朝紀聞卷三

三

其親樓藏板

會筆錄水風抄大和小學會津風土記垂加草
乘如社語盡微問答其他甚多川井正直年將五十
始學嘉謂曰入道莫如敬之故宜先持敬字矣汝不
幸過時不必讀書吾為汝有言也曰每事躬行之正
直服膺其誨修行不急常悔往日敬親之薄懼來日
養親之短父母沒一室為喪次不出戶者三年嘗有
告父不慈者正直不答流涕告者異問正直曰子言
為最鳴不祥甚矣子之至吾廬脚也告不慈舌也莫
非行父母之遺體者子以技擊幹此謂骨肉相噬而
天地之所不容王法之所不宥也不祥莫大焉言畢

之老及老

而泣告者感謝自是孝於父母云正直名于時高智
學大高坂李昉就問修身之津曰莫追前日之蹊
莫追後日之杳唯一日目下勉為善而已勉行日久
則慣習而善斯成性矣正直躬騰四書集註孝經刊
誤小學句讀近思錄集解朱子語類魯齋全書等或
詰曰子所寫書皆刊于世子且藏之所寫將何用哉
曰寫之非適於用不用所以習敬也○十一月從一
位前左大臣二條藤原光平薨年五十九無嗣九條
兼晴子綱平繼之○十二月二日以皇子朝仁為親
王十八日親王始讀書江戶大火是歲沼田真田信

明治新刻十三朝紀聞卷三

三

其親樓藏板

復太子之禮

成有罪幕府奏收其封毀城徙大野松平直明于明
石土井利房于大野西尾忠成于橫須賀○三年正
月朔江戶大水兼輝辭右大臣十三日以内大臣兼
熙代之權大納言公規為內大臣○二月九日立朝
仁親王為皇太子右大臣兼熙傳之自上古至
後龜山未曾闕是典而後龜山傳後小杉之後
不復起坊宮者十三世至是修此禮十四日女御
房子為皇后稱中宮大將軍使松平讚岐守等朝
賀為令禁庶民衣錦繡綾綺○四月五日日光地大
震二十二日清涼殿設歌會權中納言藤原資茂奉

行○六月江戸阜頭城郡桑取谷獲異獸時謂為佛
佛高四尺八寸毛色緒黑長可五寸口廣一尺六寸
鼻耳之間一尺八寸重當二十六貫錢○九月前大
納言藤原隆負有罪二十一日 勅停其朝參○十
二月三日以後光明皇女孝子皇女憲子為內親
王九日憲子內親王降嫁近衛藤原家熙初 禁郭
之內禁復輿是歲始許乘之入郭門○甲子貞享
元年正月二十日停權大納言藤原賴孝朝參大將
軍奏改喪服之制○二月二十一日改元貞享二十
六日伊豆大嶋之山焚聲如雷灰沙自山頂天下填
明治新刻十三朝紀聞卷三 廿三 其親樓藏板

海成山明日熄京師災○三月三日 詔陰陽博士
按倍泰福改曆法慶宣明曆用大紗曆至十月成賜
名曰貞享曆自清和帝貞觀中廢大衍曆行宣明
曆不改曆法者八百二十餘年至是泰福共弟子濫
川都等據明大紗及元授時曆改治之而以年號名
曆法此為始○四月五日華堂側火延燒 東宮及
綰紳宅若干區○五月二十七日 皇太子徙居前
關白房輔第○六月十五日修 東院門院十七年
齋行法華懺法于清涼殿公辦法親王主之至十九
日畢○八月少老石見守稻葉通秀刺殺大老筑前

守堀田正俊于營中老中大夫保忠朝戶田忠昌阿
部正武燭殺弗及仍偕殺通秀焉或傳正俊驕恣奉
役無狀通秀怒之故殺通秀一作正休○九月左近
衛中將藤原李光卒西園寺公益之子是為大宮家
祖○十一月二十七日以皇姪尚仁為親王○十二
月十二日以權大納言藤原定誠為內大臣十八日
新院勅停前權中納言藤原定淳定淳為新院傳
奏違院命故也幕府始置天文方遷基方安并都
為之以其尤善天文曆數也都字算指一作三指號
春海嘗收氏澁川子孫世其役幕府命松平忠冬撰
明治新刻十三朝紀聞卷三 廿四 其親樓藏板

台德公記成名東武實錄是歲 詔神祇權大副祭
主大中臣景忠列公家聽昇殿景忠天兒屋根命苗
裔伊勢廟官神祇大副友忠之子是為藤波家祖幕
府奏徙本多政武于姬路小笠原貞信于越前勝山
○二年正月大將軍奉 勅獻其日次記二百三十
五冊賀正使飛驒守畠山義里兼之使○二月先是
幕府奉 勅再造 東宮至是成 皇太子自鷹司
氏第徙焉二十一日夜 新院崩年四十九後西
院同時有大星起東南墜于西北光照如晝頃之有
聲如雷○三月七日葬 後西院帝于泉涌寺○五

月二十二日 御匣局覽明年五月贈准后稱逢春
門院○六月二十四日免前權人納言賴孝罪阿媽
港使須安發負送我民十二人至長崎上書曰殊崇
日本故納漂人非為欲五市幕府以日向守松平信
之為老中○七月幕府答阿媽港使曰昔來嚴禁通
信自今後我民漂流勿送歸之給糧及薪水遣歸漂
人渡會郡神社藤原二村商舶去冬漕薪往江戶還
至伊勢大山洋為風所漂是歲正月著阿媽港屬嶋
摩屢務羅二月遂如阿媽港有一姬言妾本日本人
昔長崎處流來焉漂人雇夷毀船併烟草五十包驚

明治新刻十三朝紀聞卷三 其親樓藏板

減市額

之以其直銀及帆破等而還○九月幕府奏以相模
守土屋政直為所司代徙前所司代小田原稻葉正
通于高田先是清及紅夷互市每歲出銅及雜品當
銀一萬三千貫錢至是幕府減省之清商給銅當銀
五千貫錢雜品當銀一千貫錢紅夷給銅當銀二千
貫錢雜品當銀一千貫錢○三年正月幕府奏徙加賀
守大久保忠朝于小田原忠朝曾祖忠隣遭馬場忠
時讒褫封終究至是復舊封○三月二十六日以權
大約言藤原家熙為內大臣○四月京師火和歌山
臣臺八郎射於連華王院堂綠一晝夕發一萬三千

和佐
銀六

五十餘箭中鵠八千一百三十三矢時人稱為天下
第一慶長以來善射者皆試於此堂標其發數而如
臺者前後無之云○六月十八日 勅伊勢賀茂春
日平野松尾祝人延曆園城東寺興福東大僧徒穰
天變七日右少辨藤原宣定奉行○七月 後西院
皇女益子內親王降嫁九條藤原輔家二十四日大
風拔木破屋○九月十八日修 後光明帝三十三
年忌齋行法華八講于清涼殿至二十二日畢以皇
女榮子為內親王林信篤木下貞幹奉教撰武德大
成記成○十一月榮子內親王降嫁二條藤原綱平

明治新刻十三朝紀聞卷三 其親樓藏板

○四年正月二十三日 皇太子加元服○三月二
十一日 帝讓位於 皇太子 詔關白兼攝攝政
在位二十四年改元者三曰延寶天和貞享享保十
七年八月崩年七十九合祀于下御靈祠 帝性聰
敏最善和歌院中御撰有新明題集時多能歌臣藤
原實陰源通躬藤原公福藤原光榮藤原久等為
其尤世以為不愧古朝 帝嘗損數白金代名碗爺
爺屋者聽治之暇以示群臣咸奏珍寶正二位勸修
寺經敬獨以神國至尊奈何貴重外土故碗而甜之
欲諫爭故稱老眼難睹奉之出殿緣伴為失手墜于

經教

石上御碗碎壞滿座失色經敬徐進御前稽首謝罪因曰臣欽惟古來御器皆用國產臣未聞以漢土故碗（注）御願陛下勿復求此等物安財用矣帝心嘉其直言終不問之皇太子亦是為東山天皇

東山天皇諱朝仁靈元帝第四子也母大典侍諱宗子（注）敬法門院內大臣中御門藤原宗條之女天和（注）皇太子至是受禪時年十三二十五日尊靈元帝曰太上天皇嫡母中宮曰新上西門院二十六日靈元上皇徙居院左大臣是熙右明治新刻十三朝紀聞卷三其親樓藏板

大臣兼熙內大臣家熙並如故○四月十四日遣兵庫頭（注）神祇大副大中臣景忠小舍人齋部清房奉幣大廟告嗣位二十八日行即位禮○五月大將軍使侍從肥後守保科正容等朝獻名刀一口白金五百枚綿五百屯獻明正上皇靈元上皇名刀各一口白金各三百枚綿各一百屯新上西門院名刀一口白金二百枚綿一百屯以賀之四位五萬石以上諸大名亦各使使奉賀於是特授正容左近衛少將○七月聖護院道祐法親王奉勅詣大峰○八月二十三日詔權中納言源重條

參議藤原隆真檢校大嘗事○十月幕府以所司代政直為老中大和守內藤重賴為所司代○十一月六日遣兵庫頭王兼字祭主大中臣德忠小舍人齋部清房奉幣于大廟告復大嘗十六日大嘗後

拍原帝廢是典之後更以海內大亂不得復行慶長以還頗舉舊儀未及大祀至是復之設悠紀主基二殿取嘗禾於近江丹波以修○元祿元年二月朔以前人納言藤原宗條為內大臣罷十六日以藤原家丹為之○四月詔東大寺龍松院主公慶慕天下再造大佛殿至寶永二年始成殿高二十五間南

明治新刻十三朝紀聞卷三其親樓藏板

北二十七間五尺東西二十五間清船之入長崎也未曾有定其歲額於是幕府始減定之七十艘為限後增十艘○九月晦改元曰元祿○十一月幕府從筋違知足院于神田改曰護持院奏請授院主隆光大僧正光筑波山知足密院主也尋為密僧尊融建一刹于牛込名護國寺初營碑木莊氏親大猷公有身乃使尊融禱之生男是為大將軍故特見寵遇賜是刹云又為密侶覺彥建靈雲寺後從護持院于護國寺內○十二月大將軍命刊印四書直解納之于伊勢鶴岡日光東叡三緣山王六所謁忍岡孔聖祠

是歲奏封源義直孫義行于駒野徙濱松太田資直
于田中○二年正月二十九日尊所生大典侍曰准
后○三月二十七日以攝政兼輝復辟關白○八月
彈正尹八條尚仁親王薨年十九親王侍讀有栗山
愿字伯立撰保建大記是夏成文辭雅嚴議論確偉
時年甫十九後應水戶之徵入彰考館與三宅緝明
安積覺森尚謙等同校大日本史寶永中年未滿四
十沒有子曰平藏亦好學○十月十六日 詔皇弟
作宮紹八條殿封改第名常盤井殿○十一月從三
位藤原誠光卒權大納言柝原資行之子是為三室

明治新刻十三朝紀聞卷三

廿九

其親樓藏板

家祖其子正三位德光為北小路家祖○十二月
幕府徵京師玉津嶋祠人李吟為歌學方李吟近江
北村人從松永貞德受詞學長斯道博覽國朝古書
及漢籍自誦拾穗軒又呂菴常解註源氏伊勢大和
物語枕草紙徒然草上佐日記八代集等五十餘種
源語曰湖月秋枕草曰春曙抄至寶永殁年八十六
其子湖春亦有歌名工連歌又徵伶官拍高規伯近
方泰兼種泰兼竹及畫人住吉廣澄廣澄繪局同土
佐光則之孫誦具慶紹其家法以佛像人物著李吟
廣澄子孫並世其傳或傳光則住和泉寬永中歿其

江戶
京師
人

吟
徵
京

子法橋住吉廣通廣澄之父光則四世祖為光信本
姓藤原家世掌繪局任土佐守光信因以土佐為氏
云光則有子光起繼家任左近衛將監掌繪局茲削
髮叙法橋師常昭善人物花鳥畫臻佳妙先世土佐
氏畫格漸衰至光起復大振是歲幕府貸予清舶衆
長崎地七千六百坪令其館焉○三年正月十二日
兼輝辭關白以左大臣基熙代之補藤八長者聽內
覽賜隨身兵仗牛車○二月權大納言藤原宣豐薨
宣豐贈內大臣勸修寺光豐之子是為芝山家祖光
豐姪經廣子權中納言經尚為穗波家祖○三月一

明治新刻十三朝紀聞卷三

三十

其親樓藏板

品輪王寺天真法親王薨年二十六 後西院第五
皇子也金澤火○五月參議前右衛門督平時成有
罪六日 勅解官幽之○六月大將軍命法印林信
篤講四書于營中當番諸士聽之自開講焉爾後月
行之○七月建學校于府下神田命右京亮松平輝
貞董役○八月京師大雨山崩○十一月幕府以因
幡守松平信興為所司代明年八月卒○十二月關
白基熙辭左大臣二十六日以右大臣兼熙為左大
臣前內大臣經光為右大臣京師災三井寺長吏道
祐法親王薨年二十一 後西院第七皇子也○四

江戶
京師
人

年正月神田學校孔聖廟成稱聖堂大將軍自書其額曰大成殿命林信篤蓄髮解的奏請任大學頭自室町氏使五山徒掌外國書信經延曆日等事以來業儒者皆倣之祝髮衣衾大將軍深歎之至是遂革其弊由是諸藩文學至理儒爭先蓄髮惟醫畫襲法樣云○二月大將軍命信篤移忍岡孔聖額曾思孟像于聖堂新製十哲神主命狩野洞雲作七十二賢及諸先儒圖親講論語于營中諸近侍聽之後數親講令諸大名僧侶醫員等聽之○三月十三日遣使六條長講堂修後白河帝五百年忌齋繼民拜

明治新刻十三朝紀聞卷三

三 其親樓藏板

後白河御真即後白河帝所自畫也堂中今尚藏之堂即後白河薙髮後所御之宮今僅存遺趾高野山寺火○四月幕府奏禁日蓮教派悲田宗命江戶法華寺感應寺自證院等改宗天台○六月十七日阿蘇山晦冥雨石自已至午而止○八月四日阿蘇池赤如血鯉鮒多死藏人中勢權大輔源冬仲卒五辻家族也是為慈光寺家祖熊澤了介歿介京師人一云西海人幼而仕岡山光政光政愛其才學比弱冠將大用辭曰未學因乞遊學師事中江惟命召還秉政卜有餘年治績聞遠通致仕歸京師遂歿于

古河初其疾浮屠參日政而後不縱排之梵唄難解就政問之嘗曰漢儒訓詁宋儒性理王子心法各有正旨擇之無偏執則自成聖學之全體矣但初學由朱註辨文義更自讀經文遂以純解經則面大聖之意必生矣介旁能和歌所著有論語孝經中庸小解大學或問小解集義和書三輪問答武將感狀記等○閏月大將軍奏起望火樓于建禮門之南命伊勢守小出英利直焉自後織田本多青山市橋山谷青木北條小堀今部谷等近都武族每半歲更直世謂之內裏救火夫至享保中廢之以佐後守小笠原長

明治新刻十三朝紀聞卷三

其親樓藏板

重為所司代○九月世傳賜密教新義祖覺證謚曰興教大師明年東山智積院修其五百五十年齋此寺初在四條川西曰祥雲院秀吉夫人淺野氏為其子捨君真福所建也慶長中院王正憲奉幕命復立根米派是院為真言新義宗寺或傳元和初院主日譽奉幕命興復新義因冒根米舊稱改曰智積院是歲幕府撤間街之近衛以南勘解由以北市舍以廣禁郭西南隅徙松平輝貞于壬午○五年正月朔日食○二月京師火○四月八日東大寺會僧一萬人為大佛開眼之供養自三月行之至是而畢佛像高

六丈蓋 聖武帝所創也永祿中佛殿罹火秀兵燹也像堅唯首鑠焉其後州士道安繕鑄之復舊而巨像露坐者百有餘年至是殿成再點睛云常盤井王作官覺 上皇第八子也○七月幕府奏流高野興山寺主來迎以下行人僧六百八十餘人天正中秀吉欲滅高野根來而焚根來寺也高野山徒失色不知所出於是行人應玄奉 嵯峨帝璽書詣軍門白曰祈從此詔勿伐金剛峰寺秀吉一覽因罷其兵尋為應玄建興山寺奏請 後陽成帝賜御書額東照公亦寵其二世勢譽命分學侶行人之派為立文殊

明治新刻十三朝紀聞 卷三

其親樓藏板

院而三世應昌四世立詮五世雲堂皆負祖功每凌學侶與之爭事數違幕斷至是大將軍大怒六世來迎等不奉新令流之命奉令行人輪番寺削白川松平忠弘封從之山形命日田松平直矩從洛白川忠弘失政故○九月大垣災權中納言源光國建贈近衛中將三位橘正成墓碑于湊川○十二月闕下中筋里火延燒紺紳宅若干區法性寺東北院真如堂等經光辭右大臣十三日以前內大臣公規代之○六年正月彥根大火○二月大將軍親講中庸命大名百五十餘人聽之○三月大將軍為 上之答

上皇

賀正使藤原資藤原基時 明正上皇答賀正使藤原俊廣 靈元上皇答賀正使源重條設經延親講大學時左大臣藤原兼照大承院門主覺雅亦至幕府乃與俱聽之播磨大水多溺人○四月九日帝朝 靈元上皇大將軍親講周易本義令天下武人及僧侶祠人道士等聽之爾後月親講之至十三年而畢○五月大坂災○六月幕府徙真如堂東北院極樂寺等于東山○七月三山檢校聖護院道尊法親王詣大峯○八月公規辭右大臣七日以內大臣家熙代之權大納言藤原實治為內大臣大將軍

明治新刻十三朝紀聞 卷三

其親樓藏板

江戶
建大橋
祭

同生母本莊氏適生母之兄因幡守本莊宗實○十一月十二日以權大納言藤原綱平兼右近衛大將○十二月十八日以權大納言藤原輔實為內大臣左大將如故尼崎火是歲幕府建隅田川新大橋○七年二月江戶災○四月乙酉遣左近衛權中將藤原定基等祭賀茂下上兩廟也所謂葵祭是也自後醍醐朝李葵是典者三百六十年至是大將軍奏請修之爾後歲納穀十五白石充祭費或傳御影祭亦自是復行伊賀植野災○五月式部卿伏見負致親王薨子邦永嗣王性好鍛暇日便鑄劔刀家傳

增上寺始正大僧

柳氏本列名

其尤利者，賞鑒者以為不減。古丁正宗云：二十七日秋，田地震廬舍多壞，且災壓焚死者三百餘人。○九月大將軍嘗數謁聖堂，於是同所生本莊氏謁焉。○十月天台座主青蓮院尊證法親王薨，年四十四。後水尾第十三皇子也，以增上寺上了也，為大僧正。以幕府請，始授增上之僧，批青歿青姓，松尾本名宗房植野藤堂氏臣，長禪學好和歌，慕僧西行風調，嘗致仕入京師，從李吟學數年，妙於諧歌，遂為斯道中祖。終身行脚，諸州嘗結廬于江戶深川多植芭蕉，自號芭蕉翁，是歲幕府奏以柳澤保明為川越大名，本

明治新刻十三朝紀聞卷三

其親樓藏板

妙法院亮恕法親王薨，年五十六。後水尾第八皇子也。○九月大將軍奏始改鑄大銀小銀，方金錠銀碎銀，款之以偏號曰元，但金幣正而作制章，其文曰壹兩，曰一分，及形重與銀幣皆如慶長舊制，而小銀重四錢八分。○十一月幕府悉收江戶狗造之廬于府下中野養以米飯，澤比留上掌之狗十萬頭，所食日數百斛，或曰大將軍自天和初喪世子，百方求嗣，不得，僧隆光進言曰：人之乏嗣，皆前生多殺生之報，故求子之方莫善於愛生，而大君誕歲在丙戌，因最愛狗類，大將軍然之，嚴令府下撫養狗類，而民殺

明治新刻十三朝紀聞卷三

其親樓藏板

之抵罪者，歲有之大將軍更人傷之，故自是命○十月十四日，以伏見邦永為親王，後任中務卿。江戶火是歲幕府奏徙有馬永純于丸岡，松平輝貞于高崎，加藤明英于壬生，鳥居忠數于水口。○九年正月大覺寺性真法親王薨，年五十八，贈一品。後水尾第七皇子也，幕府又增京師町奉行一員，以山城守龍川利庸為之，兼伏見奉行，後數年廢之。○嵯峨民合力建渡月橋。○三月天下飢，津輕多餓死者，京師市廳發穀一萬三千石，賑貸都下及伏見民。○四月乙酉遣左近衛權中將藤原隆長等祭賀茂廟，初復是

書

典也祭東殘其儀注不詳時有四條街澤木七郎家傳此會占圖卷乃微而斟酌之得舉舊議然前二祭

使未具牛車至是出之國薄始備云○六月江戶地

數震○七月二日 詔皇弟文仁紹常盤川殿封收

日京極殿初京師醫人松下秀明錄累世陵所自

瓊瓊杵尊至 止親明帝至是成名前上廟陵記秀

明字見林號西峰博覽能治痾嘗又著學原一卷古

語拾遺考○八月二十六日贈左馬頭源滿仲正一

位遣使至多田廟宣命祭之○十一月十日 本

院明年七十四稱明正院二十五日葬于泉涌寺○

明治新刻十三朝紀聞卷三 三十七 其親樓藏板

十年正月十八日贈大師於念佛宗祖源空謚圓光

大師遣少納言清原宣通于大谷寺宣命大谷即

知恩院○二月幕府修平野祠二十五日大婚幸仁

親王女幸子為女御大將軍使中務大輔本多政武

等朝賀○三月幕府始量定金銀箔外貨商戶四

月以所司代小笠原長重為老中紀伊守松平信廣

為所司代○五月十一日以京極文仁為親王尋任

兵部卿十四日以幸仁親王叙一品任式部卿○六

月大將軍奏始鑄二銖金文曰一朱具額置桐章軍

六分朱銖省文○七月正二位權大納言藤原冬基

薨後陽成皇子一條昭良之子實分房列清華是

為醍醐家祖○十月幕府始收諸國酒稅○十一年

六月朔京師風北野影向剎倒○七月幕府以出羽

守柳澤保明為老中奏請任左近衛少將保明初側

衆有寵於大將軍嘗頗加封列人名至是陞老首秉

政權尋賜偏名更吉保冒松平氏○九月先是幕府

起一堂于寬永寺擬根本中堂成上皇賜御書額

曰瑠璃殿三日 帝遣右中辨藤原輝光于江戶慶

之六日江戶大火東叡山嚴有公廟公辨王弟並延

燒瑠璃殿得免是日幕府設大會落之時人因呼勅

明治新刻十三朝紀聞卷三 三十八 其親樓藏板

額火災是秋美作守津山森長成以罪奪封高田光

長之敗其嗣子綱國亦見遠竄至是幕府命白川直

矩次子宜富繼光長奏封之津山授少將○十一月

以宇治彌宜荒木田守洪叙正三位○十二月幕府

奏收中津修理大夫小笠原長胤封以過入朝之期

也江戶大火避之溺隅田川者千二百人幕府發

穀七千石賑貸前後遭災民○十二年正月內大臣

輔實辭左近衛大將二十日以右近衛大將綱平

轉之尋任左馬寮御監賜輔實隨身兵仗○三月幕

府鑄新錢十八條續文曰寬永通寶背文曰元大將

建永代攝

軍從母本莊氏請建隅田川永代橋○七月賜式部

卿有柄川幸仁親王牛車薨子正仁嗣○八月十五

日大風發屋東國尤甚○十月朔以權大納言藤原

伊李兼右近衛大將補右馬寮御監幕府以但馬守

秋元裔知為老中是冬天下飢江戶甚○十一月朔

日南至○十二月二品梶井藤原法親王薨年八十

三後陽成第十三皇子也○十三年正月朔日食

明日行元日節從一位前左大臣鷹司藤原房輔薨

年六十四子兼熙嗣○七月幕府令禁屠江鰻泥鰍

屬○九月幕府修北野廟命伊勢守小出英判助役

明治新刻十三朝紀聞卷三 三九 其親樓藏板

遣稻元某監工○九月以山田禰宜渡會常有叙正

三位渡會未彥叙從三位○十一月東國飢江戶火

聖堂延燒○十二月聽權大納言藤原家久帶劔權

中納言源光國卒權中納言賴房之子自幼英明嗜

學好義嘗慨舊史闕文奏請假御府秘冊募索天下

逸書編修歷朝實錄曰大日本史又嘗撰次禮義

類典獻之于上皇嘉納故出秘書若干帙俾增輯

之又有一代要記扶桑拾葉集等尤國性仁怨嘗老

於久慈西山疏木造小房草覆之自稼穡以甞民艱

苦更薄稅歛使之窮皆免飢寒云卒年七十二私謚

貞國

義公是歲幕府奏徙堀田正虎于山形板倉重寬于

福嶋修杏取祠○十四年正月朔日食幕府以丹後

守稻葉正通為老中曾契冲歿冲字空心攝津人住

圓珠菴善和歌首倡萬葉古風源光國聞其精粹命

註萬葉成名代近記既而冲自請註古今名餘財抄

又著勢語臆斷等弟子若冲似閑並能國風○三月

十四日營中内匠頭淺野長矩擊上野介吉良義英

傷之坐賜死初朝廷答賀正使藤原資原藤原保

春至幕府也大將軍使長矩伊達宗春變之命義英

掌事遠英性貪而無厭叩長矩賄已不厚不敢指揮

明治新刻十三朝紀聞卷三 四 其親樓藏板

長矩不悟屢問饗禮不答至是又面辱之于廊間長

矩憤懣拔刀擊之會堀川某救不死時天使益白

書院將傳詔以變作移黑書院行事大將軍大怒

長矩亡狀即日奏使自殺尋收其封停義英伊勢龜

山城下青山家臣石井源藏半藏兄弟所殺父雖赤

堀水助○六月十六日美濃雨雹傷人二十日京師

大雷水震百許處震溺死者百七十餘人○八月幕

府改作六孫王經基廟廟在八條大通寺即貞純親

王源經基父子第趾也寺僧南谷因柳澤吉保上書

請修造故修之於是廣寺境壯佛圖模多田祠營之

改進
六孫王廟

義英
會而
無厭

東國大訖

云南谷本名元勝松下助三之弟幼歲以父故為浮屠能書名世○十月正二位權大納言西三條藤原實教薨年八十三子公福嗣○十一月十八日進源經基神級遣神祇權大副大中臣德忠至八條廟宣命二十二日進壺井廟神級遣左兵衛權佐卜部兼章至廟宣命壺井在河内古市郡即源賴信源賴義源義家宅趾而各廟在焉○十二月三日遣左少辨藤原尚長于平野行遷祠儀勸修寺濟深法親王薨年三十一上皇第一子也十七日皇子慶仁生東國大訖江戶餓草截路幕府於本所靈山寺設

明治新刻十三朝紀聞卷三

四十一 其親樓藏板

義上終事

場施粥及衣被賑之至明年三月而止是歲奏徙本多利久于絲魚川稻葉正通于佐倉○十五年二月朔暮有白氣長二丈餘見西南至四日乃不見江戶大火○三月帝聞伊藤維楨名命求其文覽之幕府修仁和寺御室及伽藍世傳京畿諸法第一第及附院皆幕府比例修之後世除仁和寺外之進葺金○十二月初赤穗宰大石良雄以主死國除皆由義英欲報之陽家山科為放浪密會同志計復讎至是良雄良金父子以下四十餘人夜襲義英本所館殺之明日使吉田兼亮等詣大目付自首自引戮

東國大震

至泉岳寺長矩墓賽義英首仍待罪幕府分囚之于府下明年二月賜死遂流義英嗣子左兵衛佑于信濃收其邑是歲命伯耆守本多正永再築于沼田鎮為徙本莊資俊于濱松牧野康重于小諸永井直敬于赤穗後四年直敬徙于飯山○十六年正月基熙辭開白十四日以左大臣兼熙代之補藤氏長者聽內覽賜兵仗牛車○九月幕府徙堀川大炊市民于真如堂趾京極今出川○十一月十四日江戶大火幕府品川別第延燒二十二日夜相摸藏上野地大震江戶城郭多壞士民館宅一無全者小田原尤甚市舍盡壞且災箱嶺崩海暴溢民壓焚溺死無算同時安房亦海溢破千餘家溺死數千人二十九日江戶大火聖堂延燒兩國等數橋焚而民溺水七八百人帝以天災頻至命奏神樂于內侍所奉幣于二十一祠禱天下安穩尋改年號前此三歲幕府修先王諸陵是歲成古山陵頽廢最久矣或至民不知其為皇墓而耕蕘焉柳澤吉保嘗以告大將軍因有此舉乃植藩起屏以正兆域而不詳其所也考諸載籍問諸土老因趾再造二十五所云結城右大將賴朝子七郎朝光之所封也慶長中其十八世晴

明治新刻十三朝紀聞卷三

四十二 其親樓藏板

幕府修諸陵

十三朝紀聞

朝無嗣毀城至是幕府命福山水野勝長再築之徙鎮焉○寶永元年正月關白兼熙辭左大臣十日以前右大臣經光為左大臣明日辭以右大臣家熙代之二十三日以前內大臣實治為右大臣尋賜隨身兵仗○二月實治罷五日以前內大臣輔實代之二十三日以前權大納言源通茂為內大臣罷二十六日以權大納言綱平代之左大將如故通茂能歌和歌名世○三月幕府奏開一河于畿內引大和川達于界浦長四里二十八町名新大和川命姫路本多政武助役十三日改元寶永四月朔大赦天下○七月自明治新刻十三朝紀聞卷三 四三 其親樓藏板

共朝謝恩伊藤維楨歿維楨字原佐京師堀川人初宗宋儒著大極論心學原論後頗疑之據漢唐等古訓發明經意時人以為真儒出現每一篇出四方爭傳名聞海外所著有論孟古義中庸發揮大學定本語孟字義童子問和歌集歿年七十九 上皇嘗召其高弟北村可昌進講稱 旨賜以綿硯藥物等楨有五子長曰長胤次曰長英次曰長衡次曰長準次曰長堅皆以儒雅聞長胤繼家餘皆為大名文學肥後藩序幣迎預辭曰毋老侍養無入終不仕長堅博學能文名重長胤紀伊藩聘之始侍講對書不講滿明治新刻十三朝紀聞卷三 四四 其親樓藏板

座汗掌以為斯人生長寒陋不慣說於大人故視藐藐而失志也納言使促之未應納言亦訝之既而徐荅曰君公坐褥未可講聖經也納言聞遽去褥初講音吐朗暢聽者咸歎賞云先是仲村之欽歿之欽字敬甫京師人以精朱熹學與維楨相敵室直清等推為近代醇儒其教入以小學近思錄開發之勝勝至老不急旁通天文地理度衡類又達音律著書甚多○四月京師兒童爭詣大廟時謂脫鞋又御蔭○九月從一位前右大臣藤原兼輝薨年五十四聖護院道尊法親王薨年三十一 後西院第九皇子也

根津切諫

幕府以加賀守大久保忠增河内守井上正岑為老
中○十月追贈參議源綱重中納言○三年正月江
戶火○三月關白基熙適江戶既歸京師權中納言
藤原基輔從幕府之請書神田學校諸門額○六月
幕府奏改鑄元字銀其款用省文定字謂之室字銀
古來銀幣皆有實字故以省文別之二十六日西海
大風肥後大水○七月一乘院真敬法親王薨年五
十八後水尾第十二皇子也幕府改造根津祠根
津贈中納言綱重臣也初綱重有過根津諫之弗聽
發病而死綱重海而憫之又特見怪異以為其

十三朝紀聞 卷三

其親樓藏板

勵因立之廟于谷中別莊至是幕府世子以其生父
臣故請大將軍修之或傳綱重沈湎于酒根津數諫
弗聽一日乃捫綱重舉白之手以諫爭綱重大怒即
手刃之既酌忽見根津捫腕使不飲如故大驚廟祀
之○有年○十月實相院義延法親王薨年四十五
後西院第四皇子也巖槻災○十一月伊勢山田
火七條鴨川西北廢田起市街曰七條新地後正德
三年其北又起市街曰六條新地蓋大和太路三條
南市街亦此間起也初寬文六年三條川東四條川
東知恩院前並廢田起市街其四條曰祇園町亦後

宮造

正德末廢祇園町北三條街南之田起市街祇園新
地是也時祇園南安井前等市街亦起○是歲幕府
奏徙飯山永井直敬于巖槻上田仙石政明于出石
封森長成叔父長直于赤穗○四年正月正二位前
右大臣一條藤原教輔薨年七十五子兼輝先薨
司房輔子兼香繼之江戶火○二月仙臺大火○三
月江戶火○四月二十九日以皇子慶仁叙親王為
儲君○五月三日以女御幸子准后○八月大將軍
奉勅新造東宮于凝花洞宮詔命町奉行安藤次
誠及小堀憲充監工明年閏正月成凝花洞宮後

明治新刻十三朝紀聞 卷三

其親樓藏板

富士山

西院脫履之後御所也此東宮北到鷹司街南勘解
由小路東界街西東洞院街正門東向楯間刺費長
房琴高等像便門北向元為屋四十八九宇鋪席三
千九百餘隻○九月一品仁和寺寬隆法親王薨年
三十六上皇第二子也幕府始祭六孫王廟都人
以祀儀之美踊為寶永祭一時謠之○十月四日東
海南海畿內地大震相撲以西尤甚或地裂人壓遠
江伊豆紀伊土佐伊豫攝津海溢破新井白須賀二
驛○十一月六日以公辨法親王為准后以亮延法
親王為天台座主二十三日富士山焚大發黑煙兩

灰沙晝晦人不得相見江戶去山三十里亦焚聲如雷陰晦秉燭及夜山大焚雨灰沙益甚東至安房二總及海二十四日晴如恒二十五日復陰晦雨灰沙至二十八日而止伊豆相模駿河灰積或二丈餘武藏或尺餘或七八寸是時山之焚口素走生山世呼寶永山二十七日基熙辭關白以左大臣家熙之補藤氏長者聽內覽賜小車兵仗幕府停諸藩鈔山東田地多為灰沙埋沒人民窮困於是幕府諸藩每扶百石出金二兩以賑武藏相模民遂大興功役掃除其二國積灰然深厚不可除者皆為不毛

明治新刻十三朝紀聞卷三

早七 其親樓藏板

○五年正月幕府奏鑄大錢文曰寶永通寶以一當十至四月始行關白家熙辭左大臣二十一日以右大臣輔實為左大臣內大臣綱平為右大臣權大納言伊季為內大臣二十八日儲君親王始讀書三位明經博士清原弘賢侍讀○閏月幕府移武藏相模駿河村落為灰沙所埋者于他○二月儲君親王徙東宮十六日立為皇太子右大臣綱平傳之二十四日皇太子入觀二十七日立准后幸子為皇后稱中宮大將軍使讀岐守松平賴保豐前守品川基朝賀之○三月八日未時 皇宮 上皇宮 東

宮及准后中御門氏宮並災 帝避火于下鴨遷于上鴨遂同 皇太子幸關白家熙第 上皇避于妙法院火起自三條油小路會西南風烈上至今出川下錦小路東賀茂川公卿第令九十區武館二十餘區民房二萬一百餘間及河合下御靈等祠皆燼九日 上皇移幸權大納言藤原兼香第京師地生毛長四五寸踰月乃止○四月吉田祠宗源殿火○六月天台座主曼珠院良應法親王薨年三十一後西院第十皇子也大將軍奉勅作禁內 上皇宮 新上西門院宮 東宮課天下大名助役遣

明治新刻十三朝紀聞卷三

早八 其親樓藏板

建部內面頭等監工於是檄為丸鷹司市舍廣新在家郭門南此門明曆中已有或傳是時建之者非矣○七月二日畿內近江伊勢大風京師拔喬木倒廬舍幕府命柳澤吉保鑄小銀于其邑所謂甲州金也○九月二十九日以有栖川正仁為親王後任太宰帥長崎互市出金銀也正保已前不詳之數其五年至是六十一年之間出金三百三十九萬七千六百兩銀三十七萬四千二百九貫錢銅則寬文三年至是三十六年之間出一億一萬一千四百四十九萬八千七百斤○十一月福岡岡山災二十八日信濃

淺間岳焚聲如雷雨，灰沙于傍國左京權大夫藤原為量自罪晦號其官。○十二月內大臣伊李辭右近衛大將，十九日以權大納言源通誠兼之。二十九日大坂災燒七十五百許家。○六年正月右大臣正二位征夷大將軍薨，年六十四。世子權大納言嗣時年四十八。於是乃罷老中，擢澤吉保，黜前世諸近侍，停當十錢，毀中野狗廬，放之。二十三日贈大將軍、太政大臣正一位，賜諡曰常憲。院遣內大臣藤原伊李等宣命。○二月采女正前田利昌所殺，監物織田秀親于修常廣公齋，寬永寺內賜之死，收其封內大臣。明治新刻上三朝紀聞卷三 四九 其親樓藏板

伊李病薨于東海金谷驛，清船吳逸求至長崎歸納。伊豆陸奧筑前船稍四人，改元之冬，此儕十五人發江戶警城洋為風所漂，次年至呂宋居，三歲四人欲還航海，著浙江乍浦因附其舶而歸。○三月十八日以權大納言通誠為內大臣，幕府免酒稅金銀箔課。○四月二日以權大納言右近衛大將源家宣為征夷大將軍，遷內大臣。叙正二位，補源氏長者。右大將如故。遣權大納言藤原保春、權大納言源重條就江戶拜焉。右大臣綱平、權大納言家久並從幕府請東下陪拜席。室町氏故事也。七日以京極家仁為親王。

後任式部卿。○五月二十一日以伏見貞建為親王，後任兵部卿。大將軍奏赦罪八千八百三十餘人，以紹職之慶也。○六月使掃部頭井伊直通、豐前守品川景朝獻名刀延壽一口、白金千枚、綿五百屯獻上皇。名刀助長一口、白金五百枚、綿三百屯。皇太子名刀國俊一口、白金五百枚、綿三百屯。新上西門院中宮白金各二百枚、縮絹各五十卷以謝轉官之恩。仙洞宮成十一日，上皇自一條氏第徙居為二十一日。帝在近衛氏第讓位於皇太子。以關白家熙為攝政，在位二十三年。改元者二曰元。明治新刻上三朝紀聞卷三 五十 其親樓藏板

日本漢文史

籍叢刊

卷二

維史

[General Information]

书名=14664079

SS号=14664079